小説中巻



近世文藝叢書第四



近世文藝叢書第四　小說二

緒言

一、本編收むる所は、浮世草子中の名作にして、なるべく好色物を除き、武士道、教訓、實錄體の趣味穩健なるもの〻中より選びたり。

一、傾城武道櫻五卷　寶永二年の板行にして、作者の名を逸したれども、種々の事實より西澤與四の作なることを知る。與四は通稱正本屋九左衞門といひ、草紙淨瑠璃本の板元を家業とし、傍ら豐竹座に關係して淨瑠璃を作し、西澤一風と號す。浮世草子の作多く、『武道櫻』は、赤穗義士の復讐を、傾城事に仕組みたる妙案にして、事件のありし元祿十五年十二月を去る僅に一年の後の作なり。當時あからさまに義士の名を出すを憚り、遊女數人連盟して客の仇を討つ事に改作したる者にて、義士小說の魁と云ふべし。

一、武道張合大鑑五卷　作者及び板行の年月詳ならざれど、序文に團粹然とあれば、北條團水の作なるべし。江戸をはじめ京阪においても、當時男伊達と稱する無頼漢、市中を横行して良民を惱まし、弊害いふべからず。是等の話を採りて材としたる戲作なり。

一、當世乙女織七卷　寶永二年板。錦文流の作なり。文流は浪花の俳人にして、傍ら竹本座の淨瑠璃を作る、浮世草子にも佳作多し。『乙女織』は其のすぐれたるもの也。

一、心中大鑑五卷　寶永元年板。作者書方軒は何人なるかを詳にせず。元祿の末、京阪において、男女の相對死いたく流行したるを、一一其の事實を書留めたるものにして、今の新聞雜報の類なり。小說とはいふべからず。

一、風流日本莊子五卷　作者都の錦は、宍戸鐵舟といひ、もとは大阪の人なり。播州佐用郡佐用姫神社の神主となり、八田上宮内少輔

光風と稱す。元祿十六年罪を得て遠島に處せられ、薩州山ヶ野金山に徙る。時に二十九歲なり。後金山を脫出せんとして捕へられ、獄中に悲慘の生涯を終りたりといふ。著作には、『日本莊子』をはじめ、『諸藝太平記』、『元祿曾我物語』、『風流源氏』等六七種あり。『日本莊子』は、莊子に擬して、自家の鬱懷を洩らしたる寓意の作也。

一、今樣二十四孝六卷　寶永六年板。作者月尋堂の傳詳ならず。二十四孝に擬したる戲作なり。

一、風流今平家六卷　元祿十六年の板行にして、西澤與四作。或町人か其の頃奢侈に耽り、家斷絕したる事實を、淸盛入道が昔の驕奢になぞらへ、平家物語の體にならひたるもの、即ち實錄體の戲作なり。

一、亂脛三本鑓六卷　享保三年板。西澤一風の作なり。享保二年大阪高麗橋にて、雲州松江の藩士松井宗義が、其の妻及び密夫池田軍

次郎を討果したる事實を、直ちに淨瑠璃歌舞伎に仕組みて好評を博したりしかば、其の話と同じ女敵討の巷談二條を合はせて、『亂脛三本鑓』とは號けしなり。

一、傾城風流杉盃三卷　八文字屋風の戲作。作者、板行年月、ともに知れず。

明治四十三年十月上旬

水谷不倒識

近世文藝叢書第四　小説二

目次

目次終

近世文藝叢書第四

小說　二

傾城武道櫻目錄

四之卷

五之卷

目錄終

傾城武道櫻初卷

一、二見淺間之介歡樂の夢

次第「よしや人の身を、仇なる花にたとへしも、げにこさはりと白浪の、よるべ定めぬ旅枕、夜毎にかはる里人の、夕べは草をしとねとし、けふは山路のうきふしに、夢驚かし行き迷ふ、旅こそものうかりけり〳〵、詞「か樣に候ものは、九重の花所紫野の片庵に、世をのがれたる樂人あり、よつの角藏よつの門、寶藏は北の屋かげ、金銀眞砂の如くにて、つかへど盡きぬ小泉、二見淺間之介氏春が御内に、石川牡丹之介と申す者にて候、されば主君氏春は、町人なれど武藝をのぞみ呉子孫子がつたへをきく、武備漢書に眼をさらし、仁の道勇の道其徳兼ねさせ玉ふにより、かしづく奴にいたる迄君臣水魚の思ひをなし、日々夜々の繁榮中々申もおろか成りき、さればいかなる御心にや、御年二十八才迄めなし草、つまなし千鳥、よぶこ鳥のさたなくして明け暮れ傾國の道を踏み分け、十八才の頃より武藏野のゆかりに殘す紅葉、高尾の君のそひぶしも二とせ計りの假の夢、枕にのこす淚川わたりくらべて今ぞしる、朱雀の野邊の露しぐれ、夕べに別れ明方にさらばとのこす一言も、かぎりと成りて行水の難波の岸の色里、井筒がもとのかりねには、茨木屋のくらはしといへるに契ふかく、夜每々々の御通路にも誰せきとむるものなく、亂れ心の亂れ髮、とくにとかれぬ妹背の中、古鄕の花もよそにのみ、大川邊に屋敷をうたせ、浮世せうじの早籠はのりの駒とや申さん、およそ難波の遊里にかた越す者なく、戀のやま情の海、つはものゝまじはり賴有る主人なりしが、ふとした御あやまり故其身をうしなひ、さしも目出度かりし二見の家さしくる鹽にひかれ、跡かたもなく成行く末の悲しさの餘り、せめて御菩提をとひ奉らん爲め、只今四國邊路とこゝろざす折から、土佐國五臺山の文珠生玉にて開帳有よし承り、只今參詣仕り候、何と仰候、七つの鐘ともろとも御閉帳とはあら御名殘おしや、しからば明日參らんか思へば念なし、せめてこよひ通夜せんことを願ふにかひもあらねば、此門前にふし明がたの御尊顏を拜せんと、ひぢを枕に假寢にも、ごくじゆのこゑをわすれず、ふしぎ

や夢ともなく現心に、牡丹之介が魂れい〳〵とぬけ出て、色里九軒の邊におつると見へしが、井筒がもとの亂れ酒、てうし〳〵の聲かしましく、こいよとの玉ふはまさしく主君、氏春の聲して、ヲヽおもしろの春の氣色、人一さかり花一時、煩惱即菩提と聞く時は、萬々劫をふることなし、人間命にかぎり有り、長者かならず二代なし、德をとらんより名こそせんなり、最後の一念に六字を忘るゝのみ、なんぞ六道せんの外白紙一枚でも死出のみやげはならず、爰をさとれば無常の世界、はかなきは誰身の上命は水の泡の如し、一時の歡樂に千歲をのぶる、ゐように餅のかは、むくつけ男は玉の盃そこなき心地、世間見ぬはいさうざうしく、又色にふけすぐるも身を失ふもとひ、アヽまゝよ毎日松を買ひつゞけ、一年に三十六貫目がたかじやと、我とわが胸算用の棚おろし、行きくる年ごこがたらぬとおもはぬは、楠分限にて萬軍法のよきからなり、遂に手代が子細らしゐ顏見ず、今月今日迄色里に徘徊し、傾城買の元祖大臣の祖師とよばれ、しよわけ一通りうとからず、江戸京にてあらゆる色ぐるひに三月となじみをかさねず、一邊上八女郎しゆぎやうの男、姿を見くらべ心ばせを聞てまはるゆへ、これはといふ金を使はず、しかるにくらはしとは如何なる宿因にや、あいそめし新床より三とせの春をかさね、髮は三ごきらし、入ぼくろはくせつ每に仕かへ、きしやう數を知らず、日につきは一年二年めの正月より日文といふを取りかはし、あらゆる客の棚おろしを居ながらしるは心中のかうじたのか、是れから何をさせんといきぢに屈托するは尤、末の松山登りつめたるしるしぞかし、女郎も是れ程の心ばせを運べは、淺間之介も心に餘る心中、互にみがきあふたる中とは成りぬ、其思ひいやまし近日身請し、北の方にそなえんとの相談成りしが、わが花として是れ程のたのしみ有るまじ、廓におけばとて年中あげつめなれば、誰ゆびさすことも無くいづくがもとに假寢をさせ、けふやまつ今や見へぬかと、禿の袖野があしのかいだるい程東口につゐてゐる樂しみ、我物にして物ずきのくるわ通ひ、此の上の慰何かあらん、女郎の身にしては籠の鳥のくげんを逃れ、御奥樣御家樣といはれ、蝶足の膳でおめしがまいりたかろふが、大臣の心とは各別のちがい、心次第につゐてまはる

が動のならはせなり、其のころは卯月八日の物日、芝居色里の見物おびたゞしくして、あげやの庭につみあまる長持、門々に二十三十山をなし、見物に立寄人足のとめどなく、にかいざしきのかりましやふ、太鼓がさはいもちゐ程にきつてまはる、三味線もよしあし有り、さはぎに何をいふぞと思へば、九軒町なる非筒のぞひてうたへば、ぞめき衆の耳にあたるかして、獨りのき二人ゐんでも知らぬが佛様といふは、前から鼻毛をぬくもしらず、一寸さきはやみのうつゝの腰をよぢらすあげや人の道中、そりやそこへといふ聲の下より、太鼓女郎の蟻貝申けるは、今日の大寄せことならず、しばしの御慰に女郎方の名寄、あらまし御物語り申さん御覽もやとうかゞひしかば、淺間之介興悦有り迚ものことに帳にしるし、よしあしのさたして見ん、とく／＼と仰ける、太鼓の茂齋罷出、尤是はよき慰、爰にくきやうの事こそ候、幸ひ勝手に竹本氏豐竹御見舞の爲めすひさんす、此兩太夫を召寄せられ、名寄にふしを付さし音曲にてうけ玉はらばいかばかりの御遊興、いかゞ仕られと申けるにぞ、是れくつきやふの思ひ付き、しかし文句を綴らんものいづれかあらん、其段も拙者が知惠袋に有り、折よくばお近付にと、ない／＼申だんじたる生惡軒の何がし、自分のうさをしのがんと、朝込より二階の一間にかまどを立て、他人まぜずに女郎と鼻つきあはして罷有り、此の仁に筆とらせ、よしあしかまはずやりばなし、首尾やうまいらば御慰私次第と驅け廻り、太夫にたのめば頭をふる、ぶんをのぞめば是れも又及ばぬことゝ行きなやむ、此の事首尾せぬものならば、賴みきつたる大臣に扶持をはなされ、何くふまひとまゝになる、所詮かつへて死なんより只今はらを仕ると、もろはだ脱ぐを押し止め、然ばのぞみにまかせん、御出の若立誰々ぞと、茂齋にかたらせ筆とれば、太夫はふしの思はくを屈托なしにさらりと付、是れでよいかと見せければ、入道三度おしいたゞき、何れも樣のお影にていたいはらを切らぬのみ、傾國はじまつてない趣向、是れがあたらずば替りのない鼻をそがれませう、サア御酒一つも一つせいと、手拍子打て悅ぶ所へ、はや女郎の揚屋入り、こりやたまらぬと打つれおもてのかうしに出たりぬ、くれなゐの幕五色のもうせんひきならべ、二見座上になをり玉へば、ゆん

ではくらはし其次は、大坂女郎磯貝磯野、めては茂斎彦八郎前後をしめて畳る。あいを隔てゝ竹本氏。西のかたに居なをれば東の方には豊竹氏。其の眞中に三味線引き、左右の調子をうかがう所に、早川といふ梅の位金の器をひらめかし、先にすゝみし女郎より、其の品々を仕形舞、誠に興有る詠なりき、

二、傾城早川頼知の仕方舞

○此の段はおなぐさみの爲淨瑠璃の文句に仕候間御勝手のふしにて御かたりあるべし、

先づ一ばんにひぢりめん、ぬめのしろからおもてぶき、松かはびしのかさねもん、すそに片田の浦の波よする舟子のたぐり綱、引手にあまる御よそほひ、御名はいかにと問ひければ、さればイナ、わしことはまだ此の里の ▲初音草、何と夕部の空言を、姉女郎にならひえて、今日の物日も中宿に見さんすごとくといひけして、すがたかくるゝやさしさよ、次は誰ぞと見よし野の、山を墨繪にうすさびしき、白じゆすにくまどらせ、もみふきかへす亂れあし、てと八文字にゆりかけさも大やうに見へ玉ふは、誰人なるぞ誰じやゐの、とわれていやと夕間暮、▲雲井といふもはづかしや、年の明き前うか〳〵と、客の詞にほだされて、まだ定まらぬ京のゑん、兎角出雲の神かけて、意地氣をとをすやさし男に、つかまれたいとほゝゑみて、つゞゐて宿に入そむる、三ばんにはさすがに又松にも花をかすがなる、▲三笠と申す太夫職一きはすぐれ、ゆうゆうと、あつ板のしめに色ごりて、女三の宮の立姿繪にもおよばぬ色くらべ、アノ女郎をしこなすゐ、殿子の顔が見まほしや、きかまほしやとほのめけば、エすいらしゐとひやうかな、いかに御尋ねなればとて客の御名をば申さんや、いふ迄もなし、暮がたに一寸ござんせ見せましよと、もつてひらゐた返答に、重ねて云ふべき事もなく、さうじやと云ふて通しける。四ばんはいかにいかなれば、後家にまがゑる二つわげ、髪のざんぎりすげなくて、小袖の摸様黄八丈、肩から裙のけまはしに、いばらきごうじがかたかいな、裙にかぶとの星月夜、鳥なくなる縫ひ糸は、思ひきつたり髪迄も、切りしは何と何こそぞ、さればいな此の髪は、わがねみだれに物思ふ、殿子にいかれかなしさの、忘るゝひまもあらばこそ、共に死なんと嘆きしも、月日の立がくすりにて、又情有る客さんに、つゐ慣れ染めてわ

すれ草、いとゞながれはいつはりの、空定めなきもの成りと、思ひつめたる殿立に、かくすは愚智と打あけて、かたるもさすが恥かしと、おもはゞいかで此の姿、いやなはこちもいやにして、さとりきつたる客計りしてくらするも二三年、まゝじやといふておめぬ顔、詞かざらぬしやれ女、勤は誰もあやかり物、アゝきさんじとほめとうす、五ばんに見へし三つ柏ひじゆすに小櫻ぬいちらし、ぬきかけの下着には過しはいかなる御ひぞり、どうで逢はねばすまの浦、ちかきに御げんかならずと、かき散らしたるほうご染、ありや誰樣じやあら玉の、年の初めの△初島とて、はづかしながら松の葉の、下葉をくゞる計りにて、さのみほまれはなけれども、客にあふての一もつは、くせつの時に泣せたり、わびごとせずの中なをり、若い事とは知りながら、生れつゐたる癖なれば、是非に及ばず今日迄は、勤の帳もそこ／＼に、付てもろふてうれしやと、是れも包まず明しがた、浪間をわけて隠れゐる、扨其外の梅の名は、△高尾のもみぢ△うす雲に、こき△くれなゐをふみ分けて、△夕ぎりこめて△あふさかの、せきの東の△三河なる、△八はし渡る△こまの戀、いく夜へぬらん△むさし野の、ゆかりにのこす△玉かづら、△玉の井ふかき情しり、何△淺づまとちぎるなら△八千世をこめてかはらじと、明暮かよふ△通ひ路に今はくせつの△最中とや、お中なをしに又△あふ夜、△大きし△大はし△大よどや、君が△うてなにいたらんと、おもふおもひをおもひつめ、思はぬ人におもひ寄る、思ひの外な勤ぞと、おもはくかたりとをる君、松梅合て廿六人、花ともみぢと月雪と、柳櫻をこきまぜて、いづれ思ひの花ぞろへ、

三、頭振吉高色里通

難波の遊里西南北を分て、或は南島の茶國はいくわいし、其の流を風呂に打こむ夕煙り、情は未だ人ずれぬやうに見せたるを白人といはせ、野州は釜が根だし里、北方には蜆川、にかい座敷より向ふを見はらす曾根崎の森、野田濱寺も居ながら詠めやる一景、中町といふにも色をつかね美景の山をうごかし、西方には御池筋とうとい佛のときをして、格子の内をさしのぞけば、ようらんせといふをねずみ鳴きに知らせ、高木や橋を渡りて南堀江のきしにさしよす遊山舟、軒をならべ色の千草をうへそめたり、すべて此の里繁

昌することあたへ輕きがゆへなり、一きりを鹽影といふはくらといへり、つかみ肴一盃機嫌のやりばなし、こじりとがめもなんのその、二度は死なぬと二人の譏りをふり見ぬは、いたらぬ酒をのまぬが故なり、此の流れ足傾國に入りそむるは、色里の勝手違にておかしからぬもの、傾國より茶國に入りそむる客、山衆にもたんのふさせ、其の身もおかしうしとやかに、別れを慕ひ慕はるゝは、よひ衆のおちぶれたるごとく、どこやらいやしからぬゆゑ也、其頃難波の町人何がしといへるは俄分限者、親は古文にして新町といふは對馬やら、茶やと云ふは阿蘭、風呂やは据風呂の事か、白人と云ふは巫女神主と心得、一厘ン二厘ンよりせゝりあがり、今よほどの手前者、一子は當年廿五才にして未だ嫁とらず、かはりなき子ゆへの暗に迷ふて、身ぶんより儘に暮さすれば、よい事にして夜を晝に飛びあるき、茶國に亂れ入り、三夕よりうへの銀をつかはず、一夜に五軒七軒夢のうき酒、出るまゝのわかじやれ男なればとて、其名を頭振吉高と云へり、かねて人の憎む風俗心なりしが、五せつくの拂ひ見事成る殿、いやながらも上々客といふを聞て、いよいよあぶらをのするもおかし、常に太皷につれし佐助と云ふを近づけ、我近年西南北の茶國にはびこり遊色の道くらからず、あの里にておそらく肩を並ぶるものなし、なれ共板がへしの如く替りたる意氣地なく、何時も同じ事にて、かいもくむまみといふをしらず、さつする所あたへ心やすきがゆゑなり、今日より氣をかへ傾國に知るべを求め、好色一代の打おさめ、松といふにあふて見ん、若其の方が思ひ付もあらば、心底殘さず語るべき旨、佐助頭を疊にすかせ、あつぱれ見事なる御詞、人間若木に二度歸らず、何分ふか入りは御無用、一わたりづゝはくるしかるまじ、君思召たゝるゝうへ、拙者も旦那の威光をかり、鹿戀に成りと逢ふて見たし、およそ傾國にてほまれあまた有る中にも、いばらきやのくらはしとやらんは情知りの戀知りで、女郎一通りの役目うとからず、大臣みち〱たる中に都よりゑせものくだり、年中買ひほし外の客に逢はせぬよし、迚も色道くるひじにとおぼしめさば、此のくらはしを御手に入れられ、京のたはけに鼻あかせたし、いかゞ思召さるゝと一杯機嫌にすゝめられ、思慮なき吉高飛あがり、佐助とよばれ

身につゐてまほる程にもなきそろい事をいふたり、たとへば都より少納言中納言にもせよ、勤にあはれぬと云ふことなし、くらはしにもせよあか橋にもせよ、銀といふやつが引てまはるに、いやといふよねがあろふか、旣に南島にて人のむつかしがる山衆、いづれか此鼻が手に入れざるはひとりもなし、そうした強い相手に出合ひ、はりやいたいとはかねての願い、がくやで聲からすはぶすいのわざ、是より直におせおせと中宿に出ばり、かゐいしやうのゐもんづくろい四枚がたにめしがゐ羽織、東口よりのあゆみ振り板天神は物かは、すみよしやに知る邊をもとめ、わざと大びら成るざしき入り、亭主末座に畏、何と思召かゐられ此の里ゐのしゆほう、但しぞめきと申すにあらずやと申ければ、ていしゆそれは聞えぬ、いかにさをくに身をひたせばとて、此の里知らゐで世にすめる甲斐ありや、色ぐるひも小口からせめねば傾國のつとりがたし、茶國呂州白八根城をふみやぶり、此の里のぞみたるゆへ、今日を最上吉日と定め、隨分口開くはりの強いよねをつかまん、町にてもてはやす松の內にくらはしとやらんはこと知りのよし、定めしいとまは有まい所をもろふて逢ひたい、わ殿がはたらき此の時なりと、手づから一步の花を散らせば、亭主心魂をとられ、此の君の御事、京より見ごと成る大臣くらはしの流をくみほし、御當地の客いづれか本意を遂げられず、しかし女郎をもろふは常のこと、定めしいなとは申されまじ、拙者次第と立けるが、暫く有て立歸へり、にが〳〵敷顏にもみ手をし、もはやいしやぼんかなはぬうき世、近日身請をなさるれば、かしかりとてもならぬよし、手を放したる一言に是非なく歸り候、はし樣でなければ女郎はないかなんぞのやうに初心な御こと、外のよねをと指圖をすれば、吉高すこしむつとし、こりや〳〵亭主、此の里に住みながら前後そろはぬ云ひかた、身請にもせよ何にもせよ、一日にてもくるわに足を留るからは勤ざるはひがこと、請出したるを買はんといふにこそゐると詞に角ひしあれば、それもそふじやと又立出、引かへし申樣、先づ以て戀したわるゝの段、くらはし身に取ての嬉しさ、迚も戀のおもにぞならば、根引にして心まかせに逢ひ候へと、もつてひらゐた返答、爰に

は分別こそあらめ、なんと身請の御望みもあらばはかりごとをめぐらさん、いかゞ思召さるゝと、座敷をきつと見まはすれば、吉高腹にすへかね、そも其客めは何奴ぞ、請出しあはゞおのれらが指圖をうけんや、只し請出すまじきを察しあなどると見へたり、尤はり合身請せんは安けれど、未だ其太夫がこつがらも知らねば心ざしはなをなり、見ぬ商内は誰身に取ても成まいこと、無念さ限りなけれど、存念は重てとぐべし、こよひの此の座切色なしに歸り、明日參會仕らんとそこ〳〵にいとま迄、四筋の町をぞめき廻るはおかし、茶國に入り込み其品をもつて、あたまから松の枝をたをらんことゑんけふが月におなじ、もちろん里通はゐんづのわざながら又さにもあらず、銀なくて松梅にたはむれ、思ひをのこすも此里のならひ、既に遠からぬ戀のたとへを此の次に記し、わけうとき人の手本にもなれよかしと、噺の有りたけ眞直に筆を力にかくもなん、

四、傾城小太夫情の釘屋

▲此段は戀の引草

其の頃上久寶寺町といへるに、釘かぢの九助といふ男、生れ付りちぎにしておのれが職を大事にかけ、物日やすみ頃には色里にかよひ、吉原の浪風といふ分の女郎に思ひを殘し、夕部のさゞめごとにははかり炭の一升も買ひやり、折にふれてはちり紙の五狀も懷につくね、かよひぢのみやげとなす、是なん志は木の葉といふか、頃は六月二十五日の物日、嵐が芝居よりすぐに傾國にそれ、浪風がもとへと志す所に、やり手のとらがいつないことにて、けふはうらんして東の木やにといふ、寶とはなんの事ぞ、拙者も買にきたと云ふおかしさ、ことはりを聞てすこしはづる體にて其處を立のき、越後町二丁目の角ひぢまがる時、ふぢやの小太夫が揚屋入の道中振かけめ八ぶんに行く姿、九助つら〳〵うち詠め、人間に高下有り、細工に上手下手有るはことはり、何人か此の女郎をまゝにしてよい夢を結ばん、人として一生の樂しみ此の上何か有らん、我いやしくも淺ましゐしよさを手なれ、浪風より外に女郎はないと思ひつめたるは、井の内のかはづならん、せめて此の君如きと○して○ば死出の土產ともならん、アヽ及ばぬこいよりしにせた浪がましと、我と得心して步みしが、こゝろがみにひ

かされ太夫が面影中々わすれず、近所の局に立寄り、申そつじながら只今爰を通らせ玉ふ女郎は何と申すにて、あげせんは何程で逢れますと尋ねしかば、女郎笑ひながら、アノかたは藤屋の小太夫と申して松の位、逢ふ夜のむつごとが六拾匁にて、此の西の揚屋と申所で逢ひますと念頃におしへしかば、かたじけなふござりますとすご〳〵立出、道すがら思ひけるは、我年季つとむる内、六十匁といふかねを出しあの女郎に逢はんことかたし、角思ひ詰めては命の程もあやうし、どをぞしあんも有べき事と、何となく宿に歸へる、惣じて此の職のならひ、親方より請取前の細工しまい、其の後は何時にかぎらず、自分のもふけ成りし定を幸ひに、問屋より地がねを買取り、旦那の細工みつかより八つ七つをかぎりに隨分精出し、凡そ百日餘り屈托し、手間代六拾匁と成頃は錢の相場十二匁にて、問屋より此の代五貫文請取る時のうれしさ、是れよりすぐにあの里にこへ、半年餘りの思ひの戀、けふ晴れ渡る空の氣色さへ、にこ〳〵ゑめるが如く、飛び立つ計りに思へど、戀のおもには此錢ぞかし、捨てゝも置かれずもつや田子の浦、あづまからげもしをらしからぬ風俗、新町橋の詰にて髮ゆふてさかやきなどすれば、少しは男も見よげになれど、よしみの濃風方へは顔も見やらず、越後町扇子やの格子につゝくりと立て居れば、内から下女が聲して、そこでやすまずと脇へ居てやすましやれと、かど〳〵しとがめられ、立も立れず、哀情け有る人の來らば樣子を語り賴まんと思ふ所へ、あるじ表に出で、なんぞ御用ばしやと尋ねしかば、さん候、私は身に取てせつない戀をもとめしかど、此の里のならはかせを知らねば、此の邊をさまよひ、心有る人に樣子を尋ね、心ざしをはらさん迄に、最前より是におりますと、目に淚を浮べかたりければ、亭主あはれに思ひ、して其の戀人はどなたと云ふ、されば藤屋の小太夫樣とやらんよし、夫は松の位にて一日一夜のあげ代が六十匁入りますぞや、成程其の段も先達て承り、これ〳〵ごろうせ、六拾目をしかも錢にて、思ひと戀の堺筋よりかたげてまいるも、君が情に逢いたさの儘、尤賤しき身なれば、此かねぬすんでも來たりなど、御うたがひも恥かしければ、所存一通りを語り申さんと、身の上をあかしければ、亭主よこてを打ち、其の御心底あだに

はなさじ、太夫樣の御心は存ぜねど、拙者一命かけて此戀取り持ち逢はせません、先々座敷へさもなへば、いや只御家の片角にて君が逢ふ瀨を松ら舟、ゆられゆらるゝ胸の內、かゝる花麗なるおざしきは今が始めの揚屋入り、太夫樣がお出ならどう云ふてよかろうぞかう云ふてよかろうぞと、心一つに物思ひ、錢袋を枕とし、しばしは夢を結ぶ頃、太夫樣と云ふに飛上り、わりひざに兩手をつき顏を疊にすらせ、爰を大事と身づくろふ、程なく亭主太夫をぐし九助が側によりそひ、日頃戀しゆかしと思召太夫樣ゑ御噂をかたり、御供申して參りぬ、先御引合せの盃取上げ太夫にさせば、小太夫請て九助にさす、男顏かくしながら三度いたゞきもどしければ、ていしゆは勝手に氣をとをす、太夫九助が手を取り、御心ざしきゝまし、あまり嬉しさのまゝ、けふの約束をへんがへし、かた樣に逢ひに來た、是れなぜものいわんせぬ、さうしてはすむまいがな、マア顏あげさんせといはれて、九助やうやう居なをり、いや何事も只恥かしゐ、魂の緖の露と答へてきえたひのみ也、今日只今が逢ふ始めの逢ふおさめとぞんじますれば、胸せかれ心ぐるしいのみなり、御情あればこそ我ていに只今の御詞、生前の御恩とは是れおや申さん、御盃をまつごの水共死出の土產共、浮世に思ひのこすことなく、只今といふ今さつぱりと胸の曇り晴れたり、いつ迄も御そばにはあくるめもなき御すがた、もはやおいとま申すと、すげなく立けるを引とめ、今日を限りとは怨めしき御詞、あはれぬ里にしてまた逢ふ事安し、それは互の心に有る情ぞかし、尤かうした身なれば、逢ひます程の客いづれかおろか成はなかりき、たとへ有德にもせよ美男にもせよ、心さもしきには思ひつかず、かた樣のは誠の心にして誠のおもひ、わしゆへいかい御苦勞、其の御心をよそにしては勤たる身の本望にもあらず、人はともあれわしはいかううれしうて、今日の勤を勤とも思はず、今より御こし有て身のうへ御問はせもあらば、外のやうには思はずと、世にかたじけないあいさつ、ぞつこんに浸み渡り、返す詞もなくて男なきのないじやくり、暫らく御やすみといふを幸ひ、やう〳〵○に誘ひ、まづ○○てろくにと云ふにも、がた〳〵わち〳〵ふるふて計り有は、いやにして思ふはならず、是れ酒一つとむりにのませければ、九助胸

のおごり身ぶるひ止み、御心ざしの下ひもをとかば、御情あだと成るのみ、萬のうきこと此の身一つに止め思ひわづらひ、さいごをまつよりほかなし、只何となくわかるゝこそ誠成りと、○のむすびをとらゐ居るをひたすらに○○せ、夫はもつては同じ事、逢はねばわしも思ひ止みなんも知らず、人間一度は死ぬるならひ、外に又命のやりたひ戀が有かと云へば、九助ぶきやう顔、かく迄思ひつめたる男に戀有るかとは、在所にのばし置く母一人をせいもんに立て、左様のふらち覺なし、左もなくばわしと死んでくだんすまいかといふに返答なく、此のおごしより○をとかれ、どうやらこうやらまつりをわたし、名殘りの盃、また御ゐんあらばと別れを慕ひ、禿の小ばやし東口迄おくり、太夫様のおみやげとて九助が懷にいれ、かんまへておとさんすなといふて歸りぬ、男不審はれずも屋形に歸り、開き見れば金子壹兩、是れを此のまゝ留めなば、今までつくしたる志の仇なるを思ひ、毎日かの邊りにさまよひもごさんことをねがひしが、程なく此の太夫阿波の大臣に請出され、よい身と成し事を聞き、せんなくも又思ひわずらふのみ、此の跡を知らず、

▲惣じて傾國は其の意氣かたのみなり、人ごとにいやしきは職人の弟子といへ共、心ばせのやさしきには歸られじ、かねなくして松に逢ふ夜のさゞめ事、世にある大臣衆のおよぶことか、かね有りて情を知らば鬼に金さい棒とは云ひながら、二つそろふてよいは稀なり、多く山吹色にまよたと心ゐ、あたまがちの色里がよひは必ず笑草と成なり、其ごとく吉高、心いたらずして茶國のわけを手本とし、殊にぬし有るくらはしを、せひもろふてあはんとは田夫とや云はん野人のことわざ、未だ色道の修業いたらざるゆへなり、銀を車に積むとも、意氣地あしきは茶國呂州白人などさへ疎むはつねなるに、まして傾國などいかで言の葉草にのせんや、

傾城武道櫻初卷終

傾城武道櫻二之卷

一、頭振吉高女郎の買論

井筒がもとの大寄せ、歌淨瑠璃おどり物さへね取々成りける所に、頭振吉高倉橋をもらいかけしを、茂齋が謀にてそれなりけりの座敷も、上下ひつそりと成りぬ、淺間之介つく〴〵思ふは、尤倉橋を此の里に置き日毎夜毎に通ひ、禿にしやくとらせ、ことなきくぜつなどし、道中のけあげを見るなど、有まじき遊興ながら、又もや野人にもらいかけられ、いぢにより互の口論と成るまじき物にあらず、功成り名遂げて身退くは天の道、自分の慰をちゞめて見る迄の事、近かく請出すべき旨きはまりし上は、皆々よろしく計ふべし、付てはけふの慰ことならず、隨分馳走致すべし、扨御出の女郎衆何れも倉橋が朋輩、今迄も中よくむつまじく語りしと聞はんべりぬ、身請の頃ほひ御目にかかるも不淨なれば、名殘の盃某取あげ順にまはさん、いつはならずと、一つふたつは苦しかるまじ、何もさかなはなけれど、此の座有あふ女郎立る金二十兩づつの置土産、ねんのあく頃迄つかはず、此の里御出の節、一方の借錢拂いにもし玉へ、尤きぬ小袖など心ざせしが、勤にかね程よきはなしとしらぬ京物がたり、全くおの〳〵輕しめるにあらず、私の志迄と、小判の山をそろへ、三百二十兩太皷の茂齋へぎにすへ、女郎十六人の前に置きけるは近年の大臣、女郎はこがねを山に積んでもかたじけないと云はず、まして手に取りいたゞきなどせぬならひ成るに、皆はらあはせし如くおし頂き、御心入の嬉し涙をもよふし、かくまでやさしき心のつく殿子もたんす倉橋樣こそ、勤する身のあやかり物と、是れを肴に酒わかやぐ門、かぎりの三ばん太皷、うつゝなき里の別れ路、名殘りの袂ふり切り、もはや歸らんさらばといふに、倉橋御袖の内に手をさし入れ、いつもながら今宵の御別れほど名殘りおしきはなし、今暫しは苦しかるまじ、殊に語りのこせし言の葉も、あるといふてとめますは、かぎりのやうにていなものなれど、是非御とまり有つて、朝込の御歸るさはいかゞと云ふに、我とても同じ別れ路、此二三月屋形に足をとめねば、したゝ〳〵の思はん所も恥かし、追付き身請をすれば、しよじ手代共に

も此むね申開かし善を急がん、何思ひ出してまた止むるぞ、かたりたい事あらば一寸開かふと下になをれば、はてあけくれの御げんに萬を語り、あらため云ふにはあらねど、今宵の別れは何とやらん胸ぐるしく心もだく〳〵と云へば、はてわけもなひ、勤する身がもだづゐてたまる物かと、笑ひながらの返答、それは心にあはぬ御言葉、かた樣にあはぬさきこそうきふしさもいへ、新枕より外の床をしらず、まして身請の身なれば勤と云ふ字をきくもうらめし、只しつとめ心で逢ふてくだんすか、わしの心とは思ひちがい、もだもだと申しけるが御心にさわらば、御歸りなされませといはれ、げに是れはあやまりぬ、然は其のもだづきいかゞしてやめん、とゞまるも氣の毒、歸るもこころうし、そちがおもはく聞て後、笑ひ顏見て歸らんと、の玉ふ時の嬉しさ。かうしてと耳にさゝやき、○○引よせ、又の逢ふせのさゞめ言、これでこそ胸の苦しさも止みぬ、また明ると云ひのこし、髪のそゝげにきやらくゆらせ、御歸るさ籠の内の友にと、富士といふ袖かうろをまいらせければ、淺間之介悦び、思ひのけぶり消えやらぬを知れかしと、太夫が肩に手を打かけ、禿の袖のに手をひかれ、傳助くるかと尋ね玉へば、あいと云ふ返事は誰やらが云ふを聞き捨てに、籠のもの前後をしゆごし東口まで送りまいらせ、太夫かぶろ遣りて、あげや一つ家是れよりおいとま申しますと、姿の有ほどながめすてに歸りぬ、傳助はよし田と思ひばらしのうき事にひま取り、暫く跡より急ぎぬ、心いたらずして身より出せる惡心を、己が惡と思はざるは、己が身の暗きがゆへなり、されば吉高むたいに倉橋をもらひかけ、くれざる上剰さへ身請の恥辱、骨髓にのこつてやむことなく、所詮きやつが歸るさをまち請け、せめての腹ゐせ、西横堀の川にふみながし、此の無念をはらさん事をたくみ、太皷の左介に語りければ、類をもつて集るならひ、佐助始終をうけ玉はり、せめて左樣にあそばして成りと、此の意趣はらさでは、外のことは手がまはらず、今日迄ひけのひの字もとらざりしに、頭から打込まれし事、茶國にきこへ分たゝず、しかしきやつは聞ゆる大臣、定めしつき〴〵多からん、はやまつてしそんずまじきものならず、爰にもゐんつの氣はりと、向いかごの男に二角の露をわたし、右の樣子をかたりければ、折ふしさ

かんの男共、二角の露に眼くらみ、御こゝろ安すかれといふを鐵の楯とし、一重頭巾を目までかくし、東口の橋詰小間物棚の見世さきにうつくまい、淺間之介が歸るを待つもさけしなかりき、角とは露しらざりし氏春の籠、東口を左へ廻つて北をさして急ぐ、供には草履取の傳助、自分の戀にひまどり、其の夜にかぎり遲ればせにぞ成りぬ、敵は三人こなたは四人成りしが、臆病風に誘はれゐたるを、佐助いらつて、只今存分遂げずしては、重ねて參會覺束なし、いざ身につゐてきたれと身づくろひ、旣に立賣堀にさしかゝる頃、道連らしく見せかけ、籠の脇をすりちがふていにもてなし、淺間之介が胸づくしを取、引き出さんとせしを、こは狼藉ものといふより、さしぞへ拔いて突きければ、手ごたへして佐助が聲にてうんと云ふに、四人の籠の者心魂をとばし、跡をも見ずして逃げ歸りぬ、吉高つゞゐて打太刀、淺間之介右の肩さきにあたるを受け流し、吉高がみけんを切り付けゝれば、かなはじとや思ひけん、額をかゝへ逃げたりぬ、いづく迄か逃がさんと、跡をしとふて追つかくる所へ、傳助おくればせに來り、此の體を見るより、はつとおどろきうしろよりいだき止め、是は御大事こそ出來たれ、何ものゝ仕業にてか樣に御手は負はせけるぞ、殊に近所に人ぎれなし、狼藉者の生づら御みしり候や、さぞ口惜しく思召さん、相手は何者にて候ぞと尋ければ、淺間之介目を開らき、己れは傳助めか、何の用有て跡にさがり、只今に至り左樣の一言を申す、日頃のしんていにかはり、まさか何の忠節なきは、例の持病が起りしか、相手は兩人にして初手にかゝりしはつきとめ、後の一人は右のほさきへ切り付けしに、切られながら逃げたり、追かけ討とらん所を汝にさゝゑられ、本望遂げざる念なさ、爰をはなせ、程は行くまじと驅け出しゝが、餘程のいた手に心みだれ、かつぱとふし玉ふを、傳助かい〴〵しくいたはり、御心安かれ、某わかげにて御用にたゝざる口惜しさ、たとへ地をくぐり空をかくるゝ共、尋ね出し御本意達し申さん、御瘡も少々なれば心やすし、拙者かたに御すがりましませと、かい〴〵しくいたはり、前後に眼をくばり、はう〳〵屋かたに歸りしとかや、

二、石川牡丹之介色町石車

色におぼるゝ者一つたん身の厄をしる事、古人の敎

に從ひ其程を知るべし、扨も淺間之介、傳助がかいほうに依つてやう〳〵屋形に歸へり、其身を一間に隱し養生のこるかたなし、一家難義の色をうしない、爰かしこより名有る醫師外科、くしのはを引くごとく、門前に乘物山をなせり、きず次第に快氣するといへども元氣段々おとろへ、かつて食事すゝまざるに、皆々十方を失ひ、評定まち〳〵なり、倉橋かたより晝夜人ばしをかけ、御機嫌の容態うかゞひけるに、しかじかのたよりなきに思ひわずらひ、井筒やのあるじを賴み、ひそかに廓を忍び出て、淺間之介方に尋ね寄り取次をもつて申しければ、牡丹之介にうかゞひ、苦しかるまじきの指圖にまかせ、病家に通り、御心はと計り、兎角のこともいはで目に淚を含ませ、しほ〳〵と尋ねしかば、淺間之介重かりし枕をかる〴〵と擧げ、日頃かはせし詞を違へず、出がたき廓を出て、かかる折の見舞近頃嬉しゝ、尤も不慮に手負ひしかど、僅の疵にしてしかも所よく、是程まで本復せしが、精氣おとり食進まねば、心地次第におとれり、命に障り有まじきとは知りながら、老生不生定めがたき人界のならひ、まつたく死せんことをくやむにあらねど、そちを此の家に迎ひ、千世もと思ふにかひなきのみなり、たとへ黃泉の旅に行く共一言は違へじ、隨分ぶじにして、しぜんのこともあらば、なき跡を葬いゑさせよ、他の者千部萬部よりそちが一邊の追善如何ばかり嬉しからん、かくいへばとてきはめて死するにあらず、命は水の泡の如し、たゑて世の中あぢきなふ思ふべからず、それ〳〵盃と仰せければ、畏つて傳助てうしを御前にさし置きぬ、淺間之介取あげ倉橋にさし玉へば、淚ながらにいたゞき、何とやらん心細き御仰に胸せきあげ心亂れぬ、誠に其夜の別れおしき、今思へばかゝるうき事の有るべき知らせを、神ならぬ身とてすげなくもござせし口惜しさ、とめなば斯る事をみもきかずと、歸らぬことをくり歸へして、嘆くは女のならひぞかし、手より盃の落ちたるをも知らずなげきしは哀れ成りき、御本復迄付そひ、せめて御藥成り共あげまいらせ度きねがひ度々なれども、出入ものゝ手前、殊に此の度のさうどう色里より起りし事なれば、下々の思はん所も恥かし、其の上親方手前井筒がもとの難義、かれ是れつかへ有る身なれば先々歸へり候へ、樣子は日々に知らせん、扨て此の意

趣の相手をつくぐ思ふに、何時ぞや住吉屋かたよりもらいかけし男より覺なし、せめてきやつを討ち、某ら共に討死せば、角迄思ひは有るまじきを、生ながらへ自心のくるしめ、よしなき憂き事のみ聞くも恨らめし、もし相果たり共こんぱく此の世にとゞまり、無念のはらさで置くべきかと、いかれる恨に涙をぞ流しける、倉橋も共に涙の雨やさめ仰せ迄に及ばん、もし御命露ともならせ玉はゞ、御心やすかれ敵を討て御恨をはらさせ申さん、歸らぬ御くやみ御心地のさはりともならん、先御やすみましませとひたいをかゝゑ、ひざを枕にしかせまいらすれば、少しはよろこばしき顏色あらはれ、牡丹之介を召され、是れは内内そち立にかたりしくらはしと云ふ女、通ひ路の情をうらなく明しをる身請のけいやく、末々見捨てまじき一言のかはし、身の代千兩にして、證文取やりの節、手付金三百兩渡し置きぬ、今七百兩をもつて廓を出し、下女二三人つかはし、ひそかに下屋敷に置くべし、某死後迄も見捨てず、いづ方へも緣付させて、くれぐれ賴は是れのみなり、迚も請出す身なれば只今共思ひながら、斯る體になりしも是れよりおこりし事なれば、世間のおもはく遠慮有るべきことなり、其外の義かねていゝ置く通りにかはることなし、また倉橋も首尾よくくるわを出でなば、心まかせにかいほうにあづからん、それ迄の心づかい必ず無用といふ所へ、井筒屋の亭主籠をつらせ、御見舞と又太夫樣の御迎いやら何やらかやら、先御顏色の美はしきを拜し悅の色をましぬ、扨倉橋樣御事あまり心元なふ思召、拙者とうなづきあふて是れまでの御出なれども、女郎方のくるわを御出被成るゝは、虎の尾をふむ心地、人しらぬ内と存御むかいに推參と、いふ迄もなし早速つれ歸れ、しからば歸ります、さらばゑといふ聲もすがたの入物にかくし、流の里に歸りぬ、其後牡丹之介吉日をあらため倉橋身請の迎ひ籠、上下美をつくし井筒がもとにつどい、ていしゆに七百兩を渡し、親方への祝儀揚屋一家の付けとゞけ、禿やり手にいたる迄人笑はぬ程の花麗、近年の身請倉橋樣にとゞめたりと、此の里のにぎはひ中々筆にもかゝれず、里のがれ今日をかぎりに姿の見おさめ、揚屋中ゑのいとま乞ひ、はうばい前後をしゆごし、さらばぐの名殘りの盃、今より御氣を替られ、御夫婦つれにておな

ぐさみの御出を待ちますと云へば、それをこそ願へ、なれ共悪性は成ませぬと、山も見へざることをかり初にも、妬むは女のならひにて夫を思ふが故なり、いかに御神木となればとて、色にさはりては不粋とや申さん、かた様にまけぬ心中又有まじき物にもあらねば、こちとらがしかけをもつてね取ります間、介様の御用心と、いそがしい中に悪口の有りだけ、せかして見るは地女のこと、なんのいな、どうして成りとぬしの此の里ゑござんすやうに、御氣しよくすぐれさせましたい計りの世話、先々さらばの門送り、從みやげと花むけにてあげやの門市をなせり、牡丹之介は里なれぬ幸左衛門が武道がゝり、井筒屋が座敷のまん中に、畏りたるひざ直しもやらず、まつにきをつかし、あたひの五七百もした上にて手をならし、ていしゆに近付、先程金子を渡し、旦那の證文取りました上、もはや出入なき所に、未だ御女郎の見へさせられぬは御志案にても變りたるにや、只し思召入も有てか様に御延引か、なんともえとく仕らぬなされかた、今朝急に申し付けました故すふくでお迎に參り、先程より段々御馳走に預りしかど、はしも取りあげず御茶より外たべませぬ、子細はかまへて御腹立あらぬことは、御膳むき殊の外けつかうなれば、料理代よのつねにては御得心も被成まい、さわらぬ神にたゝりなし、所詮手かけぬがましと目の正月計り致して、胸の苦しさ申さぬとても御推量あれかし、いかにおの〳〵腹よければとて此の如く待たせ、拙者は何になれと思召さるゝ、此の長い日にさりとはどうよくなしかた、あんまり人がほめますまい、倉橋様も大方にして御歸へり被成たがよい、身請をして御出被成るゝからは、尻くらいくわんをんとやら云ふたとへがよし、旦那も待ち久しからん、とく御しまい成さるる様にと、こつてりとしたせりふに亭主驚き、是れはきやうがる御挨拶、此の里左様の所にあらず、常ていの御客にさへ御酒御食あげまし、其の價取る取らぬなど云ふ事なし、殊に淺間之介様の御名代とし、倉橋様身請の御迎、拙者の外聞せめて御門出にと心送の御馳走、價ひ所ではござりませぬを、あんまりかたい御口上と云へば、何おふるまいとや、しからばたべましやうものを、はれやれ殘心の至り是れに過ぎず、かねて此所は一寸飲む酒もたゞは通さぬなど、若衆の

物語をうけ玉はり、飲み食いすれば取らるゝ事と、思ひの外な不仕合、近頃恥かしながら御勝手澤山ならば、夕食仰かけられまいかと、否ひき入れぬ内二をすへての膳、牡丹之介が色なをし是れ御亭主、あまり結構なる御馳走おふるまいと有り、嬉しさのまゝ御時宜なしにくださるゝと、詞をつめるもおかし、膳の向ふには中居禿、下男畏り、何かへませ何あげませと、かはり〴〵のきうじにん、イヤモウおかまいあられな、さつまの守なればとて時宜もいたさぬ、扨召つれし者共支度を仕ましたかと尋ければ、御家來衆はのこらずあがりましたと答へけるに、八まん某より先のこしたり、これらも御同前の御振舞かと、尋ぬるも二度の恥辱か、男たるもの此の里みぬも知恵ほどけずして付あひすげなく、情は元より物の哀を知らず、又しりすぎたるもいやなり、所へ太夫樣の御歸へり、おめでたの酒爰かしこにて數かさなり、御機嫌と打見へ、牡丹樣さぞ御待ち久しからん、朝樣の情で此の里をのがれ嬉しさの儘、よしみ有る方へ暇乞ひに參り、さゝをいかいこをたべまし、何を云ふやら恥かしの身、なぜ今御めしをあげますぞ、さらばわし御給仕致しませんと、膳の向ふにべつたりとなをれば、牡丹あはて飛しさり、こはみやうがなや、今日よりして私の御主人、先々上座に御なをりと御手をとれば、あらようがましや、さあらばお盃をまいらせん、こなたこそとおしいたゞく、時に太夫てうしたづさへ、千早振る神の御ことの昔より此所ひさしかれとぞまひおさめ、ながゐはおそれあり明の、只此のまゝに御暇と夕ぐれないの顔ふところにかくし、お籠にめせばつきつき前後を守護す、其義式身請、めでたや松の葉の散り失せずして、まさき木のかづら長い咄の種とは成りぬ、

三、世に有る姿の見おさめ

人界の生死は時を待ず、たとへば九泉にかくるも過去の約束、有が中にも淺間之介、何くらからず今年廿八才迄、無妻にして傾國に身をひたし、遊樂其の身一つをきはめ、朝暮酒宴におぼれ、色より身のあやまりに基き、不慮の口論にて其身を苦しめ、終に元氣なくして七月二十日を浮世の見おさめとし、無情の嵐に誘はれ黄泉の旅に急ぎぬ、一家悲しみの涙はてしなく〳〵野邊のいとなみ、梅田の墓に立のぼる、身のは

てこそ哀れなりき、其中にわきて哀の涙川倉橋ひとりにてとゞめたり、なま中になれてくやしきむつごとの、十九の春の頃よりわりなき妹背のかたらい、三とせの秋を井筒がもとのさゞめごと、誠を明かすも只偽りとうたがはれ、有るとあらゆる心いき、髪は幾度の數を知らず、起請も仰を背かず、凡そ廿枚も書きやり、心に入らぬ客は一言を請て二度逢はず、かね手形ぬすみ手形の外、つめをはなし入ぼくろなど明所なく、何いやと云ふことのなかりしは、如何なるゑにしか、只にくからぬ故なり、末はね引の松かはらぬ中を神に祈り佛にもふして、ぬしの御壽命をいのるに其の甲斐もなく、あだし野の露と消へさせ玉ひぬ、先立ち玉ふは一筋にして思ひもいみも有まじ、跡にのこる身のつらさ、いつまでも添ひはつべき志にて、ままならぬ身を儘になし玉ひしかど、未だ妻定めなければ近所のおもはくにめんじ、御かいほうもそこそこにかいやりしが、せめて末期の水を手よりまいらせしことの嬉しさ、共にゆかん命誰に惜しむべきにあらねど、つまの敵有る身となれば、何とぞ尋ね出し本望をたつし、首取て御墓に手向け御無念はらし申さん間、未來は成佛なし玉へ、南無ゆうれいとんせう菩提、うかみ玉へ見林居士と世に哀れなるゑかう、御供の傳助同御墓にひざまづき、時節とは申ながら此の度の御最後、前非をくゆるにかひなし、追腹仕り死出の御供申さん志成りしが、敵をうたでは申譯もたたず、私の身を暫く私に御預けくださるべし、倉橋樣と心を合せ追付け本望達する迄御墓へ二度參詣申すまじ、いつ迄も御名殘はつきぬと、思ひ切りたる傳助が志こそ頼もしき、月も雲に隱れさせ給ひぬ、まづ御歸へり有るべしと、涙を袖につゝみなく〳〵したくに歸りぬ、倉橋おくの一間へ傳助を招き、はや七七日の追善殘るかたなき上は、みづからが兼ねての望をかたらん、かく云へば何とやらそちの心に二心も有りと思はんが、全くそうしたことにあらず、互に心底をさぐりあへば、思ひ詰めたる事のゑきなし、志をかなへ玉はる所存ならば、せいごんの上にて明さんと有りしに、傳助涙をながしあつぱれけなげ成る御心、私竹馬より、淺間之介樣の御手まはりに召つかはれ、今傳助と申して東西を知ること、旦那の御影あつき故なり、此の度不慮の御最後皆私の爲す所、何とて相

手を摸し出し、存分さげ腹切る迄と思ひつめたる心底、氏の神の御ばつと立所にてけころされ、先立ち玉ふ親立永くしゆら道に落ち、浮む世さらに有るまじ、御遠慮なく御語り有るべしと、身の毛よだつ計りの誓言、倉橋二度はいし、其の心とは露しらずよしなき疑ひゆるさせ玉へ、扨て思ひ立つ事餘の儀にあらず、つく〴〵事を案ずるに我二度くるわに勤め、行きくる客にあたつて見ば、敵の樣子知れぬと云ふことなし、一たん身請せられし身なれば、牡丹之介殿承引有るまじ、そこはよしなにいふて玉はれ、扨て御身の事は西南北の茶國に知る邊をもとめ、小間物うりに樣を替へ、勤に近より客のさわぎに心をくばり、付き出し玉ふとまゝ必ず一人として本意を遂げず、ひそかにわし方へ知らせ、せめて初太刀を打たせて玉はれ、かゝる大望なればかねて書通取かはすまじ、文は後日の證據いかゞ思召さるゝと、女ながらもさかしく、誠にかんしんがはかりごとも斯くや、傳助彌々涙を流し、かゝる才知の御方を殘し、さき立玉ふ御心ねこそいとほしけれ、いかに敵の樣子を知らんとて、大切なる御身を又色里に沈め、再び勤め玉はんこと草の

影なる見林居士の御手前もあれかし、さなく共敵を知るべき手立て有まじき物ならずと、屈托するはことはり成りき、いやとよ二度の勤に、其あたへを取らばいやは成るまじ、なれ共身の代を取らず井筒屋にかくれ、我をのぞむ客有るとも酒の相手になる迄、萬きまゝに暫くの月日を暮す內、大かた敵の樣子も知れん、なき人の爲めに又立歸へる廓のすまい、かりにも下紐を解かば其座をたらず、白らいこくらいの病をうけ、永く此の世にて因果の業をさらさん、此の度は是非我次第にさせ玉はれと、かきくどきけるにぞ、傳助もせん方なく、然ば御心まかせと、わざと其の日を暮し、すがたの入れ物にかくして元の古巣に急ぎぬ、ひそかに井筒がもとに忍び入り、二階の座敷にかくれ、あるじと見つ〴〵しめし合せば、ていしゆ始終をのみこんで、御心安すかれ、此の度の御用に立たでは又いつをかごさん、しよじ勤方もよろしく計らひ申さん、いよ〱傳介殿には南島の見聞、よるひる心をくばり御ゆだん有るまじ、此の方の義すこしもきづかいあられな、互の樣子は日々に知らさん、先づそれ迄はさらば〱と云ふ所へ、傳介があいかた女郎

よし田來り、とかくの事もなく傳介がむなづくしに手をかけ、目に涙を含くませ、恨はつきぬ男の心、道を忘れずして此の里への御出で、其のきぬ〴〵の別れより、文の數にてとはせぬれど、遂にかゑしもなきうらめしさ、いかに勤なればとて、其ごとくつろふはせぬもの、互にかはせし一言、かた樣には御忘れかも知らねど、わしはしばしも忘れず、まゝならぬ籠の鳥飛ぶ事を知りながら、逢はれぬといふは此の里のならひ、何の見おとし有て今迄御とはせはなかりしぞ、定めし樣子こそあらめと、强く押へたる手をもぎ放し、めづらしからぬくぜつ、其如く成る機嫌は旦那存命なる頃なり、今此の身の大切なること、人こそ知らねかはくまもなき思ひ有り、まつたくむかしの傳介にあらず、今は扶持をも放されければ、骨折らるゝだけの損なり、世に有る時ならばのくのかぬといふ品も有るべけれど、只今其の事を知らめるは、冥加知らずにて天命怖ろし、そちに對し恨がましこと是れほどもなし、哀れ此の身のつらさを知らせたし、それにてゆる〳〵遊ばれよと、立んとする袖小づまに取り付き、うらむは愚智なり御歸りを是非止むるにはあらねど、又の逢ふ瀨も其の御心にては心もとなし、せめて今しばしが內、かたり度き品を聞て玉はれかしと、身をせめ涙を流し止めけるに、亭主中に入り尤ながら今少しの內足を止められ、お二人の思召入をあかして御別れと云ふにゐぎなく、然ば兎も角も先づ倉橋樣に伺ひ其後おくに通れば、よし田は世に哀れなる姿、傳介がそばにおづ〳〵立ちより、がねてわしが心を知り玉ひ、今に成りていなそぶり如何にしてものみ込まず、なじみのしるし心に有る事を打ち明け、おもはく一通りを聞かして下さんせと、涙ながら問ひければ、左程に思ひつめなば有のまゝ語らん、人に語るまいと云ふ誓言を望まれ、たゝんとするを傳介おしとめ、いづくへ行くと止めければ、かみそり取りにと答ふ、傳介聞き、我深いのぞみ有りて肌をはなさぬよろいどをし、もち合せたりと懷より取出せば、アゝ嬉しやと云ふより小指を切て落し、其血を酒にかきまぜずつとほし、此の上にもうたがはしきやと又涙を流しければ、其の心底嬉しゝ、しからば樣子を話さん、我旦那の目をかすめ日々に此の里へ御供し、いつとなくそちに思ひより、互に心ざしをはこび愉

からぬ餘り、いつぞや客のうはさに付き、ふとくせつをし暫く隙取りし内、定めし聞も及ばん、何もの共知れずあまた御手をおほせ行衛なく成りぬ、某おくればせに追ひ付き御かいほうせしかど、御立腹强く暫の內おめどをりをつとめず、其きづより事起り終にこときれ玉ひぬ、もと是れそちにほだされし故、旦那のせんごを見とゞけず、御最後の悲しさ、皆是れ身より出せる不忠、こゝを思へば二度そちに逢はず、何とぞ此の存念のはらし、主君の遺恨のだんせんため今日より思ひ立ち、たとへ本望達したり共、人を討つて逃るゝ所存なければ其の場にて腹切る迄、然れば二度逢ふは不淨なりき、そちにかはせし一言反古にせまじと思へば、主君に對し恩の忘るゝ、恩を知らぬは木石におなじ、必ず恨み玉ふな、此の世はしばしにて來世長し、もし討死と聞れなば、よしみを忘れず一遍の念佛を賴む、世に哀れなる物がたりに、よし田胸をひやし暫し返答もなかりしが、何とか思ひけん旣に自害と見へしを傳介押し止め、己を誠有るやつと思ひの外、めがねのはづれし犬傾城、何をめあてに死ぬるは誰への心中、身にあまる恨み有つて死する事か、

只し某に恥をあたへ、大事の命を己れがかはりにくつわにとられ、せんなき死をさせんとかねてたくみし事か、まつすぐに白狀せよと、さん〳〵に打擲せられ、息も立てず手を合し、皆私のあやまり、女の思慮なく此の世の別れと有かなしさ、かた樣より前に死なではいひかはせしことの、僞成りけるを一筋に思ひ、ふとしたあやまり、樣子を聞きますればせつなき御事、只御ゆるし玉はれとさま〳〵詫びけるにぞ、傳介心を沈め、然ばゆるすに早や歸れと突き出せば、迚も御ゆるしの上は望有り、もし敵の有家顏など御見知り有るか、家を知りつらを見知らば今迄手のびにせんや、然は思案のめぐらし敵知るべき事あらん、先づ思召はと尋ねしかば、か樣〳〵の次第と云ふ、さもあらば手立をめぐらし、心中の念力通るか通らぬか先づそれ迄は他人むき、もし敵知れなば首取つて御目にかくる迄、仰にまかせ退きますと、淚ながらに座敷を立てば、傳介押止め、心底うれしゝ、なれ共大事の敵、そちなどに討たせては我々が一分立ず、樣子知れなば所實名きゝとゞけ、さつそく知らせてくれぐれ賴むと云ふ、如何に勤なればとて、敵を見付け手の

びに待んは臆病神、のかねば男のけば他人、高名は仕
勝首は取德、かたさまも心をつくし、本望を遂げ玉は
ば、よしみと思ゐ吉相を待ちますと、振り切る所を引
とめ、そちが心にはぬけがけし敵を討ち、某に鼻あか
せんそぶり、是れ計りは賴むと手を合せけるにぞ、然
ば今迄の如く念頭してくだんすか、はてどう成りと
心まかせといふ嬉しさ、そんなら○て談合をしめま
せん、サアござんせと○○すがた、

傾城武道櫻二之卷終

傾城武道櫻三之卷

一、身の上知らぬ茶國の辻占

ひとゝせの過くるは夢にして元祿の秋の末、木の葉の時雨降る雨の、夕部のあらし今朝の霜、鳴音さびしき虫の聲、なが〳〵しくもふす軒の玉水、しと〳〵とつま戸にあたる音さへ、己れ〳〵が身におぼへあれば、胸にこたへきもをひやす事度々なりき、されば吉高過つるどら討に、其の身も左の目の上に疵をうけ暫らく影をかくし、ひそかに京都にのぼり、智恩院新門前のほとりに知る邊をもとめ、名有る醫師にかゝり養生し、又立歸る色あそび、南島三筋の町に入るより、はや珍らしの吉高樣、マアあがらんせと本座になをし、なんとして見へなんだ、但し外に美しい花有つてこゝらを捨てゝ下だんすか、そうした浮氣はやめさんせ、そして此のおもて疵はおとろしや、なんとしてと口々に問ふつらさ、されば京に用事しげく、とうりうの內不案內にてやみの夜あるき、ふや町通四條とやらのくゞりの門にて討みしやぎ、其の疵かうじ

て氣分を傾らひ、御天窓にかゝり快氣して下りぬ、既にそち立にも二度逢ふまじきを、無事にて對面すること此の身の満足、みなも喜んでくれたがよい、祝ひごとに今宵はあげにしてゆる〳〵語らん、何にても料理を申し付けよといかめかしき仰に、何時もかはらぬ太鼓の左助畏り、勝手ばやに入ると見へしが、たちまち本膳に姿をかゑ御前にすへけるにぞ、大臣くわん〳〵と食する内、持ちたる箸一ぜん共に中ばおれたり、くさりばしすへけるかと、少しは不興顔に見へけるに驚き、よきにかへてあげんとて、左介疊のへりにつまづき鼻ばしらを打てば、血の流るゝ事瀧のごとし、やれ首筋の毛をぬけ、やくわんをねぶらせといふは門違へ、暫らくして血とまりければ山衆口を揃へ、こよひは怪我の有る夜かして、一度ならず二度のあやまち、こちとらも用心したがよい、三度めが大事じや、左介樣そんな時は酒飲まぬ物じや、しばし氣をやすめさんせと、あいかた女郎のつなと云ふが心を付るもおかし、鼻血に恐れ酒飲まぬは死ぬる迄のそん、最前から氣が入つて座敷も殊の外めいりぬ、いざ旦那に御酒一つあげまし、屈托をさらりと流し、夜明け迄飲みぬけと、無分別の上々吉をもつてまいれば、無類の吉高圖にのり、かみはるやうな盃見苦しい、此の水飲茶椀ではじめと、一つのんで山衆にさせば、こわや恐ろしわしに死ねとの事か、ハテ死なば一ッ所と云ふてこそ嬉しからめ、但し命が惜しいかと云へば、かた樣こそ澤山な命で酒をのみじにと出さんすれ、こちとらは酒に遣る命は持ちませぬ、こりやゆるさんせと云ふに、吉高餘程げきりんばり、こよひはかねと云ふやつがさはいして、夜明る迄はこちのもの、こゝとを云はずと飲んでふせれ、とはそりや誰に云はしやる詞、一夜かふたをからにもないように、あたまからのしこなしおゐてもらをふ、もはやこなたにはうりとむない、二人ながらそこで鼻付きあはして、日待をしていにくされと、座を立ち下へおりける所を、吉高つゞいて後よりとむる、なんにもやうはないはづ、おいて下されと振り切り、はしごを下りるを吉高いかり、無禮にとむるとて取りはづしまつさかさまに落たり、やれ水よ薬よとひしめく、左介ゐはて飛おり、印籠より氣付を出し口に入るれば、吉高やう〳〵心付き、ていしゆくわしや喜び、皆々立より

かいほうし、下座敷のおくにかき入れ、暫らく御休みさよるの物など着せ、枕もさには佐助さるづくまいしていたみをさするは、心からなせるあやまちぞかし、勤はおどろかぬならはかせにや、ふり付たる女郎臺所へ出、二階から落ちたる吉高方を見むきもせず、こよひは迚も身あがりの夜なれば、アノ如くなうつじんには逢ひませぬ、世話やかんすなさは、扨もきようがる女ぞかし、なれ共其の如く云ひつのれば客の一分たゝず、そちいきさむなくばかはりをやれやさいへ共、誰有つていかうさ云ふ者ひさりもなし、然ば二瀬の松にさ大ぜいの指圖、是非なく身拵へして出ければ、吉高ねながら、そちは正がかはりに出たかも知らねど、今宵はいな參會なれば、女ぎれをやめにして、爰も是れぎりに立ち、落は傾國に出なをし又明日まいらんさ云へば、松はむつさしたそぶり、くわしやの有ることじや、わしも此のさし迄つさめ、客にあふて振つた事は由成りしが、きらはれたは今が初め、なんさ云ふて御氣にいろふやら、人の心は知らぬ内がたのしみ、ふらばふるさしらで云はんせ、今時詞を飾るはまだなことじやさ、おかしゐせりふにおさされ、吉高しばし返答なかりしが、全くきろふさ云ふにはあらねど、まさが手前の鐸明けてからさは扨もいかいのぼり大臣、今宵程大きなめに逢てもまだあいたいはあはびの貝の片思ひ、まさ様には二度逢はれますまいが、それでもかさ云ふに心付、げに云はるれば尤じや、然は今日よりそちに逢ふてやろふさはまだへらず口の憎くさ、其の詞を忘れさんすな、ねても氣しよくにかまいはなんのあらうぞ、サア○さひて爰へはいらんせさいふに、吉高につこりさ打突ひ、○をさひて松がしさねに入りければ、ア、せはしないお人かな、○に入てかみずりなは知惠の程が知れておかしうないもの、こよひ逢ふたらよかろふけれど、おもへばまさ様の手前どうもたゝぬ、外の茶屋でゆりさあそんでいなんせさ、扨もむがふ振り付け、勝手に飛び出て、かまの下たびて煙草のむもおかし、吉高佐介二度の恥辱いかゞして腹ゐんさ、二人枕をくだき談合すれど酒肴より外なし、所詮かね拂はぬを勝にして歸れさ、くわしやを呼び、つゐに茶屋ぐるひして、お山づれに振られたことのなかりしを、今宵まさ

と松に振られ無念ながら、先は歸るじやまでなれ共、いわぬ事は聞へぬ、今宵の茶代は拂はぬと云ふ、くわしや承り、御尤に存じます、およそ茶園におゐて飛ぶ鳥も落ちる程の吉高樣、いつとてもお心に入らざる時は御心まかせ、一度や二度の拂を取らねばとて是れに限ることか、又まさ松が振られぬ方樣なればこそ振つても見たれ、是れはぶ馳走ながら出かしたと存じますと、思ひの外なる返答に、吉高云ふべき言葉なく、左介見ておけ、某が威勢又有る物か、振られてけくは外聞、云ひ方おもしろければ金を拂い、花も是れと一角の露をふらすは物しのより合、新町へ御越しと有る門出に、も一つ御酒あがりませいとざつとした吸物、是を肴にも一つしよばせい〳〵と手拍子付て、籠の者何時じや、朝込じぶんうつ大臣とんてき大臣のあげや入り、

二、恥をかく揚屋の笠附

氏つたなくして世渡り大ていなれば、一生分限なりと心得、俄に能はやし茶湯連俳に身をゆだね、色三味線も少し引より遊里に通ひ座をしめて、かね使ふを知らず、あそこ爰に飛びあるけば、蓮の實大臣とから名を付けられ、善惡共に御尤づくめにもてはやすればいかい御機嫌にて、思はざる所にて露をまき、酒がすぎると我を忘れ、かみずりな調子に大へいをさばき、女郎も頭からこなしてしまいをつけず、恥のかきあきして笑はるゝもをかし、發明な目から見てはあつたらかねを使はす事かな、こちとらにつかはせたら物の見事な事をと、譏る人からまへめな時は是におなじ、色ずれして取りまはりよくなればこそよしあしをも云へ、ひつきやう是れも猿のしり笑とや云はん、人は只下びずいたらず、其中川を渡るこそよけれ、其のごとく吉高ちと手前よきを鼻にかけ、寄るもの觸るものをこなせば、錢遣ながらうしろ指をさゝれ、女郎にうとまれ禿に笑はれ、宿もいやきながらさもならずして、其の日暮の客と定め、やりばなし顏をさらさず、折にふれての通ひ路も、過つる口論より臆病神にひかされ、一とせ餘り引籠なりしが、世の沙汰しづかなるに付き、茶園より廓へさしくる鹽に引れ、夜あけがらすの鳴く頃、東口に籠を立て、門をしきりにたゝけば、夜番の又助が聲して誰じやとあくびまじりの返答、折やにての朝込と佐介が一盃機嫌にて

名乘りしかば、あらこと〴〵しの客立と、ぐぢりをそつと開けば、大義共云はず、まだ宵じやにはやう寢たのと、爰にてもひらとふいひずてに越後町の折やにつどひ、座敷にのしあがると其の儘、梅の位にてよきをとこのむ、左介には鹿戀をあてがへと指圖にまかせくつわへ人をつかへば、寢顏つくろはず髮もついはらげ、やゞや入り道中も晝とはかはる飛鳥川、流れの身ほどいつ何時を知らず、其身にそまればこそ、よい男やら惡い客やら瀨をこすまではつらい身、かんまへてかわゆがつて下んせと盃はじまりければ、吉高ゑつぼに入けるにや、しんぞ朝込みと云ふは何ものがはじめけん樂の一つなり、世間夢見る最中にて虫の聲さへせざりき、何をきかるといふ手もなく、是れはまたあんまりきづまりなこと、三味線とつてこいと云ふは不粹、しからば笠附して遊ばん、サアといふより左助が執筆にて、

△よいものは△きのどくな△うるさやの
△ふみにかく△はてしなき△おもひます
△ほつとする△さりとては△りんきする

佐助ねむたい目を、隨分こらへて見れどはてしなく、我を忘れ、おふせがきも何をするやらわけもないこと書いて、あつたら紙を費すは此の里の習ひ、そりや眠るはと云へばハツト驚きねむがると書く、色里で目を塞ぐはきづよい事たしなめといはれ、たしなめと書くおかしさ、どうもたまらぬよい慰み、サア淸書を讀んで見よ畏り、口からつら〳〵讀む中ばより、與にねむがるとたしなめとは誰が付けた句じや何を盡すと云ふ、佐助まだへらず口、此の二句は私が笠で私が付けました、こりや聞き事じや其付はいかに、

笠ニねむるはといへどいどかぬ石車
笠ニたしなめと云ふ程かへてくふなます

なんと面白句が、かみから下迄此の如くすなをにはつゞくりにくい物じやと、太皷して食ふ程有て聞を合はすこと、さりとは口がしこい男と、座中笑に成りて是れを肴にのめ〳〵と云ふ內、夜明け烏、くだかけの鳥ないて別るゝを開けば、少しはねてよい夢見るがたかじやと云ふをあいづに床のかね言、ふすま一重をこ立に取り、寢物語を開けば、頭からしつぽりぶんのすいごかし、吉高此の里にかよひ是れ程嬉しい目に逢ふた事なく、したいこともふて寢さして下

んせと云ふに、め樣共心まかせ、拙者も殊の外ねむたいと云ふ下より、かいみのゝやうないびきに目のあはぬは佐助が辭して、それはふると云ふことか、尤此の里では月をふらず、水をふるとはかねての物語り、ふらるゝは腹たゝねどゆふべから、よ程水ごけにあふてそんめの見ゆるがつらし、いつも振るなら振るとしらでいや、そんなら首尾をせまいとはかたじけない、如何にもかた樣は粹じやと聞いたゆへ振ます、はて粹をふる里のならひなれば、恨みも戀もござらぬ、腹のゐる程ふつてくだされとはどうした挨拶かもしらず、そんならひとり寢さんせと〇を出れば、佐助丸はだかにて飛んで出で、あんまり振りすぎてわるい、重ねてぐわちでござるふらずと堪忍してと、涙を流してわびるもおかし、然ば重ての折月に成つてござんせ、左もあらばお心まかせいか樣共成りましやう、その月のいきかたは、されば月といふに二つはない、第一ヲ、おふにして物云ひすごさず、女郎次第につゐて廻るを月と云ひます、それは何より安い事、今日を月の始に先は〇をやめますが、なんと御氣にまいつたかと云へば、それこそ月のおもなり、其の如くはやうげんを見せさんすと、むりにいとしいわのと〇〇付ければ、こりやたまらぬ命取り、いつそ殺しおれとはいかいうつかな、そんなら重て逢ふ契約の酒のまん、てうしてうしと呼ぶ所へ、亭主罷り出て、今日より歸へり新ぞうとて、くわつとした女郎樣が御出被成ます、此の君につゐて段々ながい咄があれど、一日や二日では語られませぬ、ざつと筋計りをはなしまして、吉高樣にも十日餘りかはしませねばならぬとめつたと頭をふり立れば、佐助聞き、してして樣子はと問ふ、さん候去々年去る方の根引草にて此の里逃れ候ひし所に、アゝうき世かな其の大臣程なく身まかり玉ひ、立ちよるかげもなきかなしさ、又此の里へ歸り花、今日よりくがいと申して參りぬ、なんと變りではござりませぬか、それは何と云女郎ぞ、なんとゝは凡そ難波の色里にかくれもない、いばら木屋の倉橋樣とて二人とない松の位、此の度は梅こならせ玉ひぬ、此の女郎さい下り玉へば米の下りも不思議ならず、時せつ到來とは今此の御代のことなれや、いかに〳〵と語りしかば、佐介手を打ち物はながふ見たがよし、待てばかんろの日より、松の頃さへ

あはんと仰せつる吉高樣、なんぞ梅の折枝となれば松一本で二つはらくじや、是れは茶がわいたぞていしゆ手を打てしやん〳〵と、夕ぐれかゝる頃むかひのやりて、たつみあがりなこゑして小りん呼びましや、ヲヽといふ聲の下よりすげなく暇乞ひて歸りぬ、跡に殘りし吉高佐介をひそかに招き、最前ていしゆが物語床にて寢たふりして聞つるに、身請せられし倉橋夫にはなれ又此の里にてつとむるよし、ねざめ心安すし、尤あいたいものなれど、爰は拙者が知惠を出しあたふたと逢ぬが勝なり、いかにと云ふに傾城は意氣地を立るを以て色の一とせり、なまなか我あいかゝりまはらざる時はしゆらのたね、それも傾國圖にのりなば歸り見るにはあらねど、未だしにせなきゆへにや女郎のまはりめなし、所詮此の里へ二度通はぬ志案、兎角南島程のむまみなし、佐介いかゞと語りしかば、佐介頭を振り、二ども三度の御通ひにていかでおぼしめすやうにあらん、まゝならぬこそ浮世なれ、かなはゞなどか恨みざらまし、爰は拙者惡性のこしおしにて是非倉橋樣に逢はし、日頃の思ひをはらさでは男とは申されまじ、それとてもお心まかせとあげつおろしつ語れば、吉高うなづき、然ば近日參會せん、しかし住吉屋にてはいらぬ物、揚屋をかゑて逢もしあんぞかし、サアよいかげんに爰をしまへ、のこるは内での評定さらば〳〵、

三、敵をねろふ勤の作病

行川の流たへず、しかも元の水に歸り、方圓の器にしたがふならひ、惣じて人八苦七難の峠を越へねば、立身又はねがいかなはず、されば倉橋井筒やが情にておもてむきを病氣といつはり、しのび〳〵客にいであひ吉高が有家を尋ぬるに、時來らざるにや誰しるものなくあだに日を暮しぬ、親方是をきゝ尤もよしみ有る倉橋、くがいするをとゞむるにはあらねど、揚屋に身を入れ勤むる事、外の女郎屋の耳に入りては自分の不念、所詮此の方へ歸り、今迄の如く勤をせんやと、度々人をつかふに井筒屋も返答なく、然る上は月切りと定め、又元の住家に歸へり、昔にかはるうきつとめ萬さまゝの約束をしらず、浮れ鳥のうか〳〵買ひ玉ふ客の心こそはかなけれ、然るに吉高倉橋二度の勤ときゝ、以前の無念此の度はらさではと佐介とうなづきあひ、越後町の扇子やに出かけ、倉橋つか

んでこい、くるまおそしと亂れ酒、あなたこなたへさしつゝめ引きつめ、矢をゐる如く飲みける所へ、はし樣御出、しいといふ聲座中ひつそと靜まるところ、いづれ妙有女郎なんめり、佐介座を退き、珍敷の御出先づおとをり被成ませいと云へ共、いらゑなかりしかば、禿の袖野鼻紙取出し何やら書て見すれば、につこりと笑ひ、いや爰におりますが勝手、世話やいてくだんすなと床ばしらにもたれかゝれば、吉高倉橋が顏をつれ〴〵詠め、誠に天性の御きりやう殆んど身にこたへ、御挨拶もうしろ髮にひかされ、何を申すやらわけも定かなるまじ、倉橋のよるの契を結ばん事かづらきの神かけてかたじけないは常なり、たんとかわゆがつてもらはねばなりませぬ、皆の者そうではないかといふ、太夫聞てわしは歸へり新座(しんざう)にて方角をうしない、里の挨拶もうと〳〵敷、さぞおかしうおぼしめさんが、そこの程は了簡してやいのと、盃取あげ佐介にさせば、思ひもよらぬ御盃を下されました、千盃でもたべます、旦那りよぐわいともつてまいれば、そちが盃めづらしからねどいたゞゐてとらせん、も一つのめと云ふを倉橋見て、ヤイ袖野あいをしてあげませ、アイといふより佐介にもどす、爰には云ふべきこともなくずつとほして吉高にさしければ、てうど請て太夫にさすを取あげ、かぶろにやれば、袖野のんで吉高にこそさしたりぬ、なんとやらいきかたあしく太夫殿の盃まはりめなし、但し御心有つてつかはされぬかと云へば、倉橋聞いて、さればいナア、あの松はめ松かして、おのづからとこしなへに契をこむべき風情、草木も戀を知ればこそ時を忘れず、くる春ごとに若葉さかへ契ことみな情ぞかしと、思ひもよらぬ返答、吉高おかしく、酒のまはりを問へば松のことを云はるゝ、何樣我々に手をとらせんたくみと見へたり、なんと思ふぞ佐助、どが〳〵とした座敷ではないかと云ふを太夫きいて、されば此の頃のはやり歌は山づくし笠づくし扨はうたざいもん、ふるきをもつてあたらしきふしを付け、いろ〳〵にうたひます、ヤイ袖野三味線引きうたふてきけませ、あいと云ふを吉高しばしとおしとめ、かたへに禿を招ぎ、はし殿は狂氣などめされぬか、どをやらざしきがそゞろに見ゆると云はれ、袖野がはつめい、そんな事もござんしよ、久々のおわずらいで、今は少しよいながら

時によれば耳がきこゑませぬ、今日もお心が惡いかしてろくにはきかんせぬ、やまいと云ふものはどうよくなものと取つくろふて語れば、それで埒があいた、人は見かけによらぬものじやと、非道の吉高少しはあはれを催し、是れ太夫殿こなたはこゝが聞へぬげな、隨分やうじやうめされと耳をおしゆる、太夫聞き、おもふことの色外と申します、今は何をかつゝみません、此の頃より聞へませぬ故隨分くろめますれど、つゝむにあまらぬことなし、耳きこへぬをいやと思召す客にはしばしもあいませぬ、御心まかせと立けるを、吉高袂にすがり、全くさうした事にあらず、かた樣に思ひよること三年此の方の戀也、たとはゞかたはにもせよ志外にはせまじ、此の心底の下拙なんといやかと寄りそへば、それは仰せ迄もなし、人は形によるべきか、心にこそ思ひをとゞゑ、なれどわしは物好で、氣の強い男が見まほしやといふに、つよいは床のことか、いや〳〵そうした強いにはあらず、誠に男と云ふは萬にかんにんづよく、きかぬ所をきつと見せ、非道をせずして其の利たゞしく一分の立わけよくば、又かんにんといふがせんなり、其の心のつよい男でなければたのもしい所なく、わしがやうな捨小舟は心だよりと思ふ願ひ、去る程に賴有るはまれにて、今は女郎が客にたらさるゝ、世のまはりあはせこそ悲しけれとかたりしかば、吉高まつ毛にしはよせ、そげたる物ずき一もつ有るにきはまりぬ、むさと身の上をかたるまじと、わざとそしらぬ顏、身も男ながら只今迄つよきをしらず、またよはきにも近づかず、慮外ながら情といふは存じたり、兎角末ながくあはねばしれぬ浮世川、先づわたりてごらふぜ、いつはりが誠ともなる、誠がうそとなるは此の里のならひと、吉高一代の返答、それはそうでござんす、よはよはとしたにも、一心に誠あれば、まさかおくれをとらぬよし、爰には心を付て幾久しくかはゆがつて下んせ、扨かたさまのおもて疵なんとしてと尋ければ、されば此の疵は我二才成ける頃、大きなるはすわ出來たるを、なんばん流の外科あく水をさらんとて此のごとく切り明けたる跡、此の疵ゆへ色里でぬれがきかぬと間似合なることたへに、返へして答ふべきことなく、いかにしても此の男いぶかし、すかして樣子を尋ねんと思ひ、かた樣は詞をかざり誠をあかし玉は

ぬゆへ、打とけかはす枕もおかしからず、情といふを知らんした上は、とくと誠を見屆け其のうへにてわしが思はくをも語り、互におなじ心ぞならば、末來をかけてあいましやう、先づそれ迄は實の契をまつて下んせと云ふに、是非床にいろふとは云はれず、いかにも〳〵心知る迄は逢はぬむかしがましじや、然ば思ひを殘し別れましやう、さらば〳〵と立ちければ、倉橋おしとめ、いかに誠の契なればとていとさうざうしき御立、今暫らくかたり度きこと有り、一つには折にふれ、ふみあげましたい時、なんと御名を書きましやうぞ、よしとは替名のことか、誠の御名はと問ひければ、實名は誰にも語らぬといふ程き丶たけれ共、云はぬにせんかたなく、ハテそれ程かくさんす名をきかんと云ふはわしのあやまり、重ては問ひませぬ、歸り度くば御心まかせ、かうしたことでは濟みませぬ、二三日の内くると云ふせいもん〳〵、かんまへてまつぞやさらば、

四、傾城吉田志案の張札

當月二十日の夜はな紙入をひらゐ候所に、少々金銀など有り、此の里の起請守袋にそへ髮一ふさ、其の外いろ〳〵の物御座候、落し主あらば通筋大坂屋内よし田と御尋ねあれかし、勤のひまがあけたいに候以上、

大坂屋内

月　日　　よし田

如此のはり札新町口の門に立ければ、入り込みのもの我も〳〵と立寄り、めん〳〵是をよんで懷さがし恙なしと歸るもの多し。三日目の晝とおぼしき時吉高佐助をともない、色里出かけすがた門の入口にて此の札を讀み、暫らく志案し何となく佐助に云ひふくめ、札をむくらせ懷にねづこみ、住吉やもとに入りつどひ、さあらぬ體にもてなし、けふは子細有つて大坂やのよし田に逢べし、いそいでめしとれといふよりはやつかいの男立歸へり、只今是れへと云ふも久し、半時計りすぐる頃よし田來りざしきに通れば、つゐにおめにかゝらぬ男、身に餘る程のうれしいこと有て只今艶顏のはいす、見て思ひますは戀なり色なり又そもじのは情也、先づ酒ごとをはじめんきはまつたおさへもふるし、頭から〇をさらせ話したいことの山なれば、爰へちよつとゝ云ふに、いかめしや何

の御用ばしと、ねもせでそばにつゝくりと、なんじやゑと尋しかば、吉高申しけるは、まづはそもじに禮申すこと餘の儀にあらず、かくまでかまびすき世の中にも、色里いやしからねばこそ、拾ひしものをくれんとのはり札、まつたく紙入金子のぞみにあらず、御らん付らるゝ如く、我も此里に徘徊し、戀をかせぐと云ふにはあらねど、すこし手がゝりのうす約束もありて、互にかけるせいしの思はく、取おとせしなど聞かば我人共有こと、なんぼう氷くさくやおもはん、隨分人事にかけ暫らくも肌をはなさぬ身成りしが、酒といふ奴に我を妄れ、一生の不念此の時に極まりぬ、御やかたへ推參し、こひうくるも合點なれど、しみゞゝと一禮申さでは分立ず、一つは朋輩衆の御手前も恥かし、兎角人しらぬ内こそ物かはと、思ひの外成る御げん、御志の程死しても忘れじ、かゝる御恩に預る上は、いかでそゑんに存ずべし、以後は兄有りと思召し何事によらず遠慮は御無用、起請守袋さへ玉はらば外の物にのぞみなし、か様に申せばなんとやらあなすりがましけれど、御用もしげゝれば金銀はそもじ方にとめ玉はれかしと涙ごゑもてかたりぬ、よし田はつと思ひ、紙入のぬしはかた様とや、かねて渡しませんと思ひ、心やつうじてさつそく御尋ねに預るうへ、いかにも渡しません、御じんたいの上あらため申すは不調法なれど、ひらゐもの進せますには法とやら有のよし、若し外の者の手に渡らば御手には入るまじ、もと是れをひろゐしは恥かしながらわしの戀男、かねをつかへとてくれました、此の里にあらず町方殊にあやしきことの有りけるにや、落ちたる邊にのりなどあるよし、かた様のひたい疵あればまぎれなし、御覺有るやと尋ねしかば、吉高聞て仰の如く此の疵は某いしゆあるものを付け出し、ごし討にておふたる疵、相手には二かせおゝせ、しかも手ごたへしける程によもぶじには有るまひ、其の節おとせしと打すぎぬる所に、其方樣の手に渡りしは拙者が仕合、かねを申しうくるにこそ、あらためも有るべれ、起請守袋は外の手に入りやくにたゝざるもの、片時もはやう玉はれとせつかれ、御尤なれ共札を立てしんせますに、改めずしてはわしがたゝず、先づ金高はと尋ねられ、さればかくせば罪ふかし、親にかゝりつぶ一もん儀にならねば、戸棚錢箱の相談して、盗み出すを

さいはいとつて置く金、終に其の程を知らず、げに是れはけうにして、マア其の夜のけんくわは如何成意趣で其の如くな疵をうけさんした、されば其の夜此の里へ初めてまかり、さる女郎をもらいかけしにくれざる憎さ、其の意趣ばらしとかたりしかば、吉田爰ぞと圖に乘り、扨もいさぎよい咄、なんと其の敵は卯月の頃にてはなかりしか、いかにもそれよ其夜の手柄、刎太刀が拙者といふ時佐助罷り出で、そりや手がわるい旦那こそは、某はなさいではこらゑられぬ、先陣が此の鼻にて敵を籠より引おろさんとせし所を、きやつもたゞものならず、其まゝ抜いて拙者かふとも丶をつきました、是れ其の時の疵とも丶をまくり見せければ、吉田わら〳〵ふるい、モウ此の話やめにして酒のまんせと、大きなるはちに一つ飲んでさしければ、吉高佐助もひとつゝ飲んで心付、やくたいもない問はず語り、かまゑて人に語るまい、サア起請を下され俄に歸りたいといふを、さま〴〵止むるに聞き入れず、君臣あやうきに近づかず、兎角いんだがよし野山、又々明日まいり其の時請取ませんと立ちけるを引止め、迚も御歸りをとゞむる事さぞいやらしくおぼさん、たとへ逢ひとふ思へばとて、ぬし有る花がおられもせまいし、逢ふても下んすまいし、せつかくの御出にわたさんもいぢ惡るけれど、御有家を見とゞけ申さん、こりやかたじけない、其のねんならばめしつれん、しからばといふより仁王の八平が耳に物云はせ、忘れずと受取とつておじや、皆様さらばゑと云い捨て、吉田は中宿にかゝりね、吉高兩人八平をつれ一つ盃機嫌のもつれあし、南島の茶國爰かしこをのぞけば、申はいらんせんか、其の內といふ返答なら頭から寄らぬがよしと、こゝかしこにてなぶるをしらず、しつた所の有はど戶をあけ、八平に是れ見よがしといはぬ計りのせんしやう、いらぬ事せずとはやく歸りはせで、傾國に住むもの色めづらしからず、八間心々のたのしみ、堀を跡にながめ高津の宮に茂り合ふ、松の木かげもほの暗き頃、海づらを見はらし、神前を南の方へ生玉の坂口に付ば、寺町につく入相の鐘、諸行無常せしやうめつぽうかいにつゐてまはるに、程なく宮の馬場先を東ゑゆけば、こゝなん上鹽町ゑひぢまがるやぶがきのもとにて、俄に八平五躰のうらんし。もんたいもない事口ばしる事たゞなら

ず、吉高佐助心魂をとられ、いかゞはせんとあんずる内にも欲に眼付き、先づ八平が懐に手を入れ、かの紙入をぬすみ、此の者かくてはおかれじ、佐助は大義ながらきやつをつれ、吉田にきつと渡すべしと申ければ、左介かぶりをふり時もはや初夜にちかし、殊に道筋さびしければ、同道せんこといぶかし、迚も旦那の御やつかい、籠にのせて送らんと云ふ、尤もとうなづきサア籠かれと云へども、そこらあたりに籠と云ふ字のなかりし所に、天王寺の方より籠にのり山寺をうとふて來る、左介こゝぞと立より、そつじながら是は拙者が下人、俄に持病さしおこり一足もひかれざるに十方を失ひ、籠からんと存ながらあひてなし、近頃りふじんながら、御自分籠よりおりさせ玉ひ、下寺町口迄この者御乗せ下されなば、それよりは澤山に有かご借り乗せ度き心底、近頃御むしんながら、四五丁の内かちをひろはせ玉はらば、生前の御恩と手をつかね申ければ、籠の男はらを立て、何人かしらねどもしてござるをおろし、病人をのせんこと遂に聞かぬむほうもの、殊に此の籠道頓堀へ行くやら京橋へやるやら先も知らず、ぬしの勝手はかまのまゐでいはれ、思ひもよらぬ事、なりませぬ、はやういけといきづえはなせば、籠の内の男聲をかけ、様子を聞けば御難儀のてい、さぞきのどくにおぼされん、乗りて行く籠おりてくれとの所望は、せつなければこそなれ、物は談合、五七丁にもせよ籠有る所迄、某おりて其の仁を乗せん、籠代拂はるかといふに、吉高聞て、何が扨御了簡の上は御自分の籠代に限らず、籠衆の骨おりしろ相應の心付け是れにてよきやと、四五匁ほど有まめいたを出せば、是はいかいお氣のはりやう、しからばと籠よりおり、三四人して八平をいだきのせ、佐介は吉高にいとまこひ、籠をはやめてゆく足堀詰にさしかかる頃、籠やらんといふを幸ひ新町ゑ貳匁と定め、八平を乗りかへさせ、先の籠主に禮義を述べ、東と西へわかれ、四橋を渡り色里九軒にいそげば、佐介さきへまはり住吉屋門に籠を立れば、折ふしよし田八平が歸りを待ちかね表に有りしが、聞とひとしく飛で出で、うれしや歸られたよと尋ければ、佐介めいわくさうな顔して右の様子をかたり、それ籠の衆頼むと云へば、心得ましたとかきいれ御家のすみにかたづかせ、もはや歸ります其の内と云ふて佐介は歸へりぬ、

吉田はつとむねをつきいかゞはせんとおもふを、下男の六藏、八平がうへにのり、ほそびきにてしかといましめ、中の間の柱にくゝり付け、か樣の狂氣物つき、はなしては後日のさうどう、かうしておけば寢醒心安し、皆々ゆるりとぎよしんなれといふ所へ、倉橋ひそかに來り、よし田に近付き、此の間日每に替る客の數、其の中に不思議と云ふはおとゝひの客、左の目の上に一寸餘りの疵有る男、おもてににくく相あらはれ、身のまわりは女郎もこなしかねぬ風俗にて、挨拶はうつじん、太鼓は左介とやら、此の客のみこまざるゆへあぢまやかにまはりしに、本名をかくし住所をいはず、此の里の御名はと尋ねければよしといふり、服づかいよろしからず、物にゆだんせぬはおのれが心に一物有るゆへなり、何とぞおもて疵の樣子を尋ねんと手をつくすにかいなく、又其の內を殘して歸へりぬ、揚屋も一軒にして拂ひもしてもどれば、主人もしらぬはことはり、なんと此の里に通ひ、所をかくし本名をあらはさぬは、田舍のかはたより外なし、今一度きたれかしと神にいのり佛に誓をたつれど、今迄見へざることの不思議といふに、よし田はつと思ひ倉橋が口に手をあて、おとたかし、其の男今日わしを買ひ、暮れぬ前に歸りぬ、何樣心得ぬ客と存じ、思案をいたしきやつが有家を知らん爲め、人を添へしに其の男道にて狂氣致し只今歸りぬ、かく迄心をつくすにかいなく、八平迄があのていと成りしは、佛神の加護にも見はなされしかと、思へば悲しく、互に顏を見合せ泣くより外はなかりき、爰にても住所をつゝみ本名をかくしぬ、替名はかうといへり、太鼓はひだりと申しましたと云ふに、兩人共に名はかはり萬のいきかた生れ付きは同じこと、心やすかれ、また此の里に入り込むは必定、此の上は淺間之介樣の御おん蒙りし女郎衆十六人有り、是を賴み心ざしを見とゞけなば、一味連判をもつて賴まん、其の內傳助も見へませんといふ內三ばん太鼓、せひもなや又あすのことあすのこと、

傾城武道櫻三之卷終

傾城武道櫻四之卷

一、意氣地を思ふ勤の連判

ひとひ二日あひませぬに候、かはらぬ御勤にやる瀬なく御くらしと察しまいらせ候、こなたもおなじつらさ、只わすれぬはむかしづゝ、慕うは愚痴とは存じながら、思ひきられぬ瀬によどむに候、付まし明日は見林居士の當り月、志の追善を非筒がもとにてなしまいらせ候、よしみを思召、客樣見へませぬうち御越を願ふ計り、くどふはなき人の爲めなり、一つには語りたきことの山、情はあいみたがひ、必ず〳〵御出でまつとのみ、

次第不同

「一、おか山樣　「一、早川樣　「一、磯谷樣
「一、富山樣　「一、菅野樣　「一、岡野樣
「一、大鷹樣　「一、三芳樣　「一、小野川樣
一、藏之介樣　一、神崎樣

此の二人は留守ゆへてんなし、

くわいぶんかたじけなく候、みな〳〵御出に付のこらず點をかけまいらせ候、しよじはあいまして

つもる言の葉をかたらんと思へば嬉しく候、

明を待つ間の樂しみ、いつもの揚屋入りは八つ成りしが、自分のうさをしのがんと、四つより前に身仕舞非筒がもとに入ければ、亭主分の倉橋並によし田、をくの間に招じ、先づ酒ごとはじまり、隨分の馳走いふべき事なく、男なしの中間あそびおもしろいと云ふもあれば、いや男なくしてはすげなきに、一期つれそふ夫に別れし人心、さぞ悲しう、髮切り尼に成るもことはりの世や、ちと心がゝりの客おとづれなきさへいかゞと案ずるつらさ、愛をくらべ見れば、倉橋樣の思ひはどうすましていさんすことやら、こちが指圖にもならず、迚もけふより逢ふからは、倉橋樣此の里へもどり二度勤めさんす心が聞たいと、口を揃へ問ひければ、倉橋聞て、成程わしがおもはくをも語り、其の上にて皆樣の知惠をからでは濟まぬゆへ、今日是れゑ呼びました、それ〳〵と有りければ、吉田心得三寶に剃刀一通をのせ、女郎衆の中にすへ、只今橋樣の云はんす如く、皆樣とは禿の頃よりむつまじく語り、萬つゝまぬ中をたのしみに此の度の思ひ立、何事

によらず御同心におゐては、心ざしを残さず語り申さん、短かふ云ふて見る時は、倉橋様ことならば命なり共と思召さるゝ御方あれば、相談しまるると云ふもの、みな様なんと思召すと座敷をきつと見れば、十人の女郎何れも口を揃ひ、あらたまりぬる御尋ね、尤も御念はことはりながら、互に心を知り合い、橋様身だめよきことに何の命を惜しまん、殊に勤の身は萬さげしまれぬやうにと、江口の君に是れを祈る、あたまから云はぬことは聞へぬ、少しにても心のさもしいことは同心致しません間、後日にうらみてくだんすな、サア思はくをかたらんせと云ふにうれしく、誠によしみのしるし、然らば申ませんと、かの一通をひらゐてよむ、

心中一味連判

一、誠にわしが身の上は皆様御存じの通り、二見淺間之介様の御かうおんに、あづかりし事いくばくぞや、なれ共あへなき人界の死は、高位ものがれ玉はず、愛を恨むは愚痴なれど、淺間之介様の御事はまつたく常勤にあらず、はかなき御最期せんかたなみだながら、身に取つては夢現のごとし、敵の有家面體を見しらねば、あだに月日を暮し、かひなき女の智恵をふるひ、もし此の里に身をしづめなば、敵に近よらんことをさつし、道ならずもふたゝびもとの水に歸り、おもてをさらすもわたくしの心ばせ迄のこと也、しかるに其の敵およそ知れたり、是れ天のなせる所、見付け次第討てとらんと心がけしに、此の頃きけばやうじんするのよし、敵に色をさとられし上は、彼が住所を聞付け討たんとは存じながら、かいなき女の身せんかたなくより外なし、口る心をぞんじたる、おの〱を頼む、何とぞ加勢をねがひぞん念のはらし、なき人の御墓にも手向け少しの憤りもやめたき望、あはれを知る人、せめて力をそへられ同心もあらば、血判を願ふに候、

時に年號月日

右之内、よし田岡野菅谷殿先立て御同心にて血判済み申候まゝ、左に御心得としるせり、

倉橋 判済
よし田 同
岡野 同
菅谷 同

誰々七人

七人の女郎手を打さうした御心とは知らず、橋樣程の女郎、淺間之助樣の御恩を忘れ、世をさり玉へば程なく又、勤の身と成り玉ふこそ淺ましの心と、人にはかたらずしてあざけりをなし、一座もいやらしく思ひの外なる心ざし、我々さのみのことは有まじけれど、淺間之介樣御心のうれしきを思へば、此の度の思ひ立いかでいなと申さん、御心やすかれ、せめての力草と成り、本望とげさせ申さんと、口を揃へ申けるにぞ、くらはし吉田手をあはせ、いづれも其の御心とおもひよればこそ、かゝる大じをもかたれ、此のことうたがひ申すにあらねど、一つは心やすめと判をのぞめば、皆々心得剃刀おつとり、小指を切り血をしぼり、思ひ〳〵に血判をしたりぬ、其の中に大野といふ女郎、はるか末座にいたりしが、すゝみ出て申樣、みな樣の御心かんにたへ、申すべきやうなかりき、ひとり行く死出の道は多けれど、跡にとゞまり貞女を守り、夫の敵を討ち先立ち玉ふ人に手向けんとおぼしめすこそ、勤する身の手本ぞかし、扨いづれも一身連判、尤朋友のしるしかく有るべきことゝ、次にわしこと命をおしみ、又淺間之介樣の御恩しらぬにもあらず、私の心底一通を聞て玉はれ、はづかしながら當年二十三才にして、明ごし壹兩年也、末をやくせし男京兩替やの手代八市といへるに誓紙日文をかき、あだなるたはれごとも包むまじ、もとよりせいしを書き此の身にすこしにても疵を付けたらんには、未來永劫のくるしみをうけ、此の世にて二度父母のすがたを見まじと、わが身ながらおそろしい誓紙の手前もあれかし、其の男の義利をはづし、此の事に與しもしあひはてん時、なにをもつて意氣地をたてん、皆樣爰を聞とゞけ、わし壹人をのけ玉はれと、殊をわけかたりしかば、殘る女郎詞を揃へ、尤一通はきこへたれ共、それはかた樣計りにふかい男有るとの云い分け、此の中に手がゝりのない女郎ひとりもなし、さすがの橋樣、それ程のこと御ぞんじなく我々を御たのみ有べきか、こなた程にこそなけれ、わしもかうしたいゝ名付の男有り、わしは身請がいやにて、曾我殿につり取るやうな男に戀しています、わしが命は二年跡やつておゐた男、あの世此の世をくどふ云いかはした中も、義利といふにはかゑられず、戀はたがいのさゞめ

こと、何を云ひかはしてもかはりやすきは此の里の戀、年を勤め借錢拂ひして末を見とげる男はまれなるもの、ゆび切り髮切り爪をはなし、又は日ぶみ血ぶみ書いた中、必らず避ける物ぞかし、わしらは男の手前より淺間之介樣の義利が大せつなゆへ、命を捨てて一味をいたします、いやとおもはんすかたは、命をまつたう、かはいがらんす男にそひ、高砂の尉と姥のごとく、つむりに雪いたゞかんす迄いきござりて、花もさかぬものなり、はぢをはぢとおもはぬ女郎、はづかしいことをしらず、淺ましいせたいして世をわたらふより、こんなことに命を捨てほまれをとつたかたまし成りと、あて付けて云ひければ、大野さしうつむき涙を流し、いかにも其の如く思はんすは尤、わしも淺間之介樣に大切なかねをもらひしおんの程、しばしも忘れぬながら、戀につながれしうかれ舟、いそへも浪へもつかざるをあはれと思召し、此の返事明日迄まつて下んすまいかと云ふを、よし田きくとひとしく剃刀おつとり、大野を取つて押へ、近頃ひきやうな一言、人に大事を語らせ、明日迄までといへばさて、誰かまたんと云はん、いやといやれば只今刺し殺す、サア返答次第と手づよく押へられ、いかにもあやまりました、ハテいやと云へば殺さるゝ、迚もない命ならば橋樣の心に從ひ、おの〳〵一味し、いさぎやう死なば、人は一代、名成りと末代に止まるまいものでなし、暫らく爰をゆるめ玉へ、いか樣とも心まかせといふに、皆々よろこび、さあ埒があいたと云ふより皆血判をしたりぬ、迚も心を合する上はと、倉橋小ゆびを切り其の血をしぼり、吉田にまはせば、それより順にしぼり、十二人の血を酒にかきまぜ、くらはしより飲んで次第〳〵に廻し、あゝ嬉しや、おの〳〵の心けなげなる故、日頃の思ひ今と云ふ今、晴れわたるわしがむね、本望を達しなば何をもつて此の恩のほうせん、先づ喜びの肴何がなといふにぞ、大だかすがやてうしをはりあげ、つはものゝ交りたのみ有る中の女郎とかなでければ、ていしゆ罷り出で、いさぎよし〳〵、敵の有家知れなば御門出は私方よりと、云ふ口に手をあて、おとたかし〳〵、シツといふは靜まることか、殘るは重ての御げん〳〵、皆樣知らぬていが後日の爲じやといふて歸へりぬ、

二、心底をひゐて見る朋友の情

人は善悪の友による浪枕、夕部にかはりけふはまた、いかなる客に逢ふことの葉のきあつかい、いかに心まかせの勤なればとて、床のさゝめごと計りにて、帶のむすびをとく事なく、あだにかへすはつれなしとは知りながら、見林居士の御情を、思へばしばしもたはむる事もつたいなし、色を外にしてなんのおかしいことのあらん、爰をさとらずしてうか／＼通ふ客、あまたあればこそ勤のたのしみもあれ、わかき時は心強くして客を振ることおもしろがりしが、よるとしの次第によは／＼と我とすげなきは、我ながらつれなし、なれど勤かた一身平等たるが此の里の一なり、されば倉橋尋ぬる敵知れざるのつらさ、傳介方より未だ吉相なきになを思ひを增し、二十三夜の立待天神地祇をおどろかし、ねがひをかくるに其のかひなく、あだに月日を暮しぬ、いかで思ひの空しからんと、毎夜法華經八之卷を讀誦するぞやさしき、其の折りふしくらの介神崎と云ふ天職二人來り、倉橋が一間につゝと通り、法華經を取りて庭前に投げすて、コレこしぬけの御女郎、此の頃我々心をあはし、何とぞ敵をうたせ淺間之介樣の憤りをやめさせん爲め、ひそかに一間に招ぎいろ／＼すゝむるといへども何のいらゐなく、剩へ古主に歸へり二度の勤をめさるゝと聞て、女なれ共もどかしさはら立しさ、誠にわれらさへ大せつな一ごんの聞て忘るゝことなし、末を樂しむ男にはなれたるより悲し、それ故二人云ひあはせ、敵の有家本名だにきかば、そなたの樣な腰拔けに鼻あかしてくれんと、手立をめぐらすにかひなきは此の身ゆへじや、誰やらがやうにきまゝになる身なら今迄手のびにせんや、只今ともに三度まいり、心底のこらずすゝむるに、しやういんなければ今日をかぎり、二度對面いたしませぬ、只し思ひ付きも有るやと詞をそろへ、美くしい顔に怒りを含み泣いたり笑ふたり樣々すかしければ、倉橋とかくの返答なく、御ふたりの御出いかでわるふ聞かん、わしも其の心ざしなきにはあらねど、人の心は定めがたし、不心中ものと云はゞ云へ、誠を立るは一昔、當世其のごとくかとふは云はぬもの、マ酒飲んせとさしければ、神崎鼻で物いはせ、いやじやと云へば、ハテそういはずと、せめて一つはのまんせ、其上で何が出ようも知らず、きうでわるくばあいをしましやうと、又一つうけ

くらの助にさせば、是れも鼻であしらい、こちは酒を飲みにはこぬ、こなた計り飲ましやれど、つきもごされ、扱はおさゑるとちよとうけ、さらばこゝらで話してきかしよ、じたい私は不心中物で、身請しられて殿子にはなれ、後家と樣かへ立ては見れど、どうで男にそひねかしとて、もとのふる巢に立歸へり、勤すがたと成りました、是れをきて見よかしのと、酒に我を忘れ何を云ふやらわけもなく、聲もしどろに舌もつれ、ア、酒に醉ふた、も寢ましやうとひぢ枕して夢姿、かんざきくらの介あきれつゝ、此の女郎がていにて、何んとして夫の敵を討ん、あいそづかしに物いはずと、歸へりみつ／＼相談きはめ、おもひいつたる一念晴らさで置くべきか、憎くさも憎し、惡口云ふて歸らんといへば、いらぬものはぢを恥とおもはざるものはづかしゐすべを知らず、あの如くな不心中物はながいきをさせ、行末見たがよい、サア歸らんと立ちける時、倉橋めさまし、是れ申し御女郎、ちと尋ねたいこと有り、暫らく是れへと呼びける時、エヽ人でなし何の用が有るぞと立ち歸れば、倉橋涙をながし、誠有るおの／＼、此の程御出で敵討つべき御指圖に預り、其の段あしくはうけねど、もし心底をさぐられ心ざしを問ひおとされ、年來の本望遂げざる時は、せんなきことゝ思ひつめ、只今迄誠を語らず、ある時は酒に亂れ、或は耳をつぶし世間の噂を聞きつくろひぬ、御兩人度々の御出、殊にねいりたる影ごとにも、我をさし置き、身にもかゝらぬ敵を討ち、私に鼻あかせんとの詞、そらね入してきゝまし、身に取つて是れ程嬉しいことなし、其の志を聞き何をかつゝまん、我此の里へ二度身賣りせしこと夫の敵しるべき爲也、心ざしの女郎あまた有に付き同心の連判、是れ御覽ぜよと、一通を見せければ、二人の女郎披見し、此の御心とは知らで樣々惡口せし今の口惜しさ、我々が心底おぼつかなく誠をつゝみ玉ふはことはり、いつはらぬ志是れ見給へと、兩人小指をくひ切り、同じく判をしたりぬ、倉橋うれしく三度いたゞき、此の上ながら賴みます、先立て傳介事南島の茶園に入り込み商内をさせ、敵の樣子けんぶんの爲めさし置きぬ、吉相あらんとき早速おしらせ申さん、もし中宿にて左の目の上に疵有る男御覽あらば、ひそかにわし方へ知らせて下んせ、およそ其の男敵にきはまりぬ、先づそれ迄はさ

たなしと云ふ所へ傳介來りぬ、此の程あはぬつらさを語り、敵の樣子未だ知れざりしか、か樣〳〵の容さ我もよし田も逢ふたり、なれ共顔見知らぬつらさ、隨分手立をめぐらし、歸り足をつけさせて見る八平も道より狂氣して、是非なく中の間の柱にくゝり付けて置しこと、いか成る運のつきぞ、サア此の上の志案こそ大事、三人よれば文珠の知惠袋の口をあけ、めんめん思はく云ふて見づくとかたるに、傳助手を打ち、きやつめは敵に極まりしを、知らで歸らせし口惜しさ、左樣の時にいかで御知らせはなかりしぞと、こぶしを握りはがみをなしけるにぞ、よし田聞き、たとへそれにもせよ、此の里にて本望とげなば廓のさうごう、殊にぬけがけせまいと云ひあはせしに先のことば、おの〳〵の恨みいかばかりぞ、少し手のびせしとて此の本望とげぬといふことなし、敵の有家さへ知れなば、一つ所に切り込み討て本ゐをはらさん、かまへて屈託無用と、しづめる心を引きあげ、先づ酒一つのんでまはし、扨八平事いかゞせんと尋ければ、傳助聞て、いづれふびんに思ふ、さいはい某富士ごんげんのしんこうし奉る、只今こり取り、其の後おくの一間につきはなし、光明眞言百遍くるにおいては、いかなるものつきにても、退ぬと云ふことなしと語りしかば、皆尤とうなづき、倉橋をはじめ三人の女郎傳介車座になをり、八平にへいを持たせ、眞言だらにをくりかけ〳〵しかば、ふしぎや八平すつくと立ち、あらうらめしや、さるにても人にはつらくあたるまじ、われこそ二見淺間之介を手にかけたる頭振吉高なり、扨も淺間之介おのれが榮花を鼻にあて、某に恥辱をあたへし遺恨やむことなく、遂に其の意趣をはらせし嬉しさ、一ぞくは何の恨なく、月夜にかゝぬかれた顔してゐる所に、倉橋いかうかたもち立、我をつまの敵と心をつくしねらふといへ共、女のはかなさは思ひはかゆかずして、それなりけりに世間はしまふて心に針有よし、そこらはこちもすいにて、此の頃かざをかぎだし、しきよりそとへ足をも向けず、内で義太夫ぶし歌ざいもんてまり歌のさわぎてくらせば、色里に徘徊するより錢いらずしておもしろの樂しみ、かんまへて世話やくことなかれ、敵討の談合やめて、嫁入の口きいたかたがはるかましならん、アヽわけもなやよしないことを云ふたり、もはや歸へる、さらば

じやぞへと、おしわけ出るを、よし田袖にすがり、お歸へりならばわしおくらんといふにぞ、はなしてくれ、こちが所を見する事はならずのもり、ナアつゐてくるなとふり切り、はていやならばなんのいかふ、いなんす所はいづかたぞ、イヤあんまり程もない、上鹽町の六丁目、ひがしがはのかうじのうち、天王寺參りめされたらよりやれ、いやよつてくれな、吉高つねに賴しは、かんまへて人に所をかたるなといふたをわすれた、必らず我に聞たと云ふてはくれな、夕部の油あげで口がすべつた、さらば〳〵といふ聲かすかによねんなくぞふしたり、皆々よろこび、是れ佛神の御めぐみ、今迄しれざる敵の有家本名たしかにしること、日頃あがめ奉る伊勢石淸水春日三神の御つげなり、サア是よりは心やすし、吉日あらため討て入らん、其の内皆々身じまひよく、死後にも人にわらはれぬやうの覺悟、心しづかにいたさん、志有る女郎よそながら暇乞有るべし、諸事のこんたんねて又ゆるりと云ふ所に、八平本氣に成り、私は鹽町のひぢまがり迄客の供して、それから先はなんにも存じませぬ、紙入も渡さずしてないは落したるにきはまりぬ、いかゞ仕らんと云ふにぞ、皆口を揃へ、右之樣子をかたれば八平おどろき、扨は其の客私狂亂をさいはい紙入をぬすみたるにまがひなし、ふんごみ取り返し、よし田樣に渡さずしては一分がたゝぬとかけ出てしを、人々おさへ、其の客に是れ程も指さすことならず、樣子は追て知れん、よし田さへのみこんでいればよいは扨、といふて仕舞ばくだかけの、鳥鳴く音かしまし、ちつとねさんせ、

三、傾城岡山方便のしなへ討

あくれば十一月中頃、吉高つく〴〵思ひけるは、我れ人をあやめしかど、運つよき故あひ手むなしく成り、世の中心やすしと云へ共、かれもきこゆる何がし、一ぞくあまた有る事、敵と思ひ付けねらはんは必定、しかるを顧りみずうか〳〵色里または南島に身をゆだぬるは、毒の心見あやうきを求むるの道理、今日をかぎり遊里の通ひをやめ、屋かたに於て興を催し樂しみをきはめん、なれ共色と云ふ字のなきには困りぬ、佐介いかゞと有りければ、旦那またかごが取れぬ、色里より外女はないものか、かたじけなくも誠の色と申すは地女ぼうの事、もちろん身持はらもちの世話

よほどかしら草なれど、こみ入てのふうみかく別、はて半季を高にして美なる女をかゝゑられ、晝夜のわかちなくまはりめのよいをとくに、少しは御氣をかゑられたるもおもしろからん、さうしたしゆかうになると拙者は色にかつへ死に、折ふし堀江のくら屋へまいる程、露をふらさせ玉へとにが／＼しゐ顏していふに、吉高よろこび、兎角佐介でなければ埒明かず、しからば急にかゝゑん、隨分うつくしゐを聞き立よ、ねざめさびしきにはこまりぬ、其の外の慰何によらず思ひつけ、されば手前に姿をかゝへらるれば、美食淫酒の三つにて、もし御心地あしくならんもしれず、爰にはなんぞ腹ごなしの遊山有るまじき物ならずと、暫らくまゆをひそめ、なんと思召ます、男たる物しきより外に七人の敵有るよし、然らばめん／＼學ぶべきは武藝の一つ、殊に御前私は身に取ていぶかしきことあればこそ、外の色をやめにして内にて遊興あそばすにあらずや、然らば兵法やはら取てなんどおぼへおかんはひがことにあらず、何人にもせよ此の道功者たるを師と頼み、隨分稽古仕らん、然ば身のやうじやう此の上何かあらんと申しければ、吉高でかした顏、是れも長點にして誰をか師とせん、同じくば手前へ取りよせけいこせば、いよ／＼おもしろからん、尤も藤卷流有りといへども道とをし、此の邊に左樣の所作する人今迄きかず、いかゞせんと案ずる所へ、傳助小間物賣りに樣をかへ、吉高やしきの邊にさまよひ、私は新米の小間物賣、何によらずおまけ申し、此のおやかたへお出入をねがひます、きやらの油くしかうがい、もとゆいたけながたばこ入れ、はながみ袋香包、ふくさ香箱たとう紙、おしろいまゆはき紅やはり、好色本上るり本、御望次第めしませとこゑはりあげうりけるを、佐介よび入れ、こりや小間物や、くるしからぬに是れへまいれ、此のあるじは田舍衆御當地初めて見物におのぼりなされしかた、夫れ故上下共に男ぜたい、久々の御逗留に殘らずの遊興、又近日京へ御のぼりなれ共、色にほだしをうたれ、立もたゝれずゐるもいられず、あかしかねたる夜の長さ、つれ／＼草もふるければ、あたらしい色ぞうしはなきか、傳助承り、されば新板とし／＼板行するといへ共、いづれか思ひ付おなじことにて、皆板がへしの如し、さるほどに作者の知惠もかはらぬもの、中にも

きのかはりたるは茶屋諸分事と申して、茶や一通りの大全、代物は武匁、おかい成されませいと本を出せば、吉高與より其の本もとめよ、畏り佐介サア二匁のあきない旦那、是れから何が賣れやうもしれぬ、扨そちに尋ねたい事有り、もし此のへんに兵法の指南して世渡る物はないか、旦那とうりうの內腹ごなしの稽古、身も望みたるゆへ尋ぬる、ぞんじたるかたあらば引合してくれまいか、傳助承り、拙者も其の道好物にて、若年の頭よりしゆぎやう致すと云へ共、なかなかはかどらずして中ばやめ、其後しなへを手にもとらず、か樣の師をする人、其のごとく心やすうくいがよいに指南致すべきものなし、しかし御かよいなるまじければくつきやうのこと有り、傾國の女郎あふぎやの岡山とて當年十六七、生付きさのみたぎらざるにより、今は南島にて白人と成り玉ふ、生國は播州あこの人にて、親立は五百石もせしめた人の娘成るが、牢々のいとなみにせまり新町に勤玉ふ、出所武士たる故兵法のしごくをたんれんし、しなへ太刀打のうらおもて女中にはめづらし、私ゆかりある身なれば、夜るひる二十一匁のあげ代にて此のおやしきゑ召よせられ、兵法の意氣かたをならひ、其の上にて情のしとねをかされ玉へば、あんまり御そんもまいらぬのみ、おもしろい事の山なり、御のぞみもあらば拙者同道致さんと聞を合せ語りしかば、佐介よろこび、是はめづらしい、今明日の內に召よせん、其時わ殿も來れと申しければ、傳助悅び、然ば明日つれ立ち參らん、おいとま申すと歸りぬ、あくれば吉高佐介を始め下部の男立ちさはぎ、けふの慰みことならず、隨分馳走して、我々も兵法の極意をおぼゑん、相手にはたれたれと、奧座敷の障子けはなし、しなへ拵へ待ちゐたりぬ、所ゑ傳助岡山を供なひ下部をもつてかくとこそふ、それこなたへと奧に通るを見れば、高島田に大振袖、羽織に下ばかまを着し、二尺計りの脇指一腰、さしも世に有、し娘尤らしく座敷のむかふにかしこまれば、佐介も下ばかまの折めたゞしく、今日の御出うどんげと申さふか、只今旦那公用に付き二三丁罷出て、追付け歸へるべきむね、何にても御馳走申すべきのよし、先づはかまをも取りおらくにござりませと申、せば、いやこうしておりますが勝手でござんすとは、姿にかはる物ごし、先づ御酒一つともてなし、先日此

の仁の物語りにて、其方樣の一藝を承り、餘りこのもしさのまゝ、今日の仕合、お相手不足に有べけれど一家のものいづれか今を始めの稽古、以來御指南に預りたいといはれ、はづかしやわしはなんにも存じませねど、小間物屋殿にさそはれ、いやらしいこんな物きて、此の後はどうなることぞ、もはやいなしてくだんせと云ふに、そりやなりませぬ、鼠とる猫爪かくすならひ、先づ暫くと云ふうち下部の男三人、こんのだいなし一やうにすそ小短かく、しなへめん〳〵にかまへ出でたり、如何思ひけん吉高下部にまじり、次の間にいたりぬ、時に佐介ちぶんをうかゞひ、いざ御立とこたへしかば、一角といゐる男しやにかまへてぞ出でたり、岡山もせんかたなく羽織をぬいで腿立ち取り、御しよもうと有るゆへ立合ます、いたまぬやうに打たんせ、サアトいふ聲をあはせ、二付き三付きあはせしが、一角しなへ討おとされほう〳〵逃げて入りける跡より、彌七む二む三に討つくるを、かいくゞりひつぱづしよはごしなぐられにげたりぬ、吉高すきをうかゞひ討かけしを、よこに拂へば、吉高うたれながらうしろ樣に抱き付、女の身としてかくけなげなるはたらき又有るまじきよそほひ、巴山吹はんがく女はさらなり、いよ〳〵御指南とお情に預りたし、尤いやしき下郎なれど、戀路にへだてはなきもの也、旦那のるすを幸ひ、嬉しい御返事今聞たいとしめける所を、ふりはなし床の間に取てなげ、あゝくたびれたと汗のごい、そしらぬ顔して居たりぬ、佐介すこしはせき心、思はずしらずかけ出でしを、傳助岡山をかこひ、此の度は私、どなた成り共御出と、いはれて佐介めつた討、傳助はがうの者、ゑしやくもなく討立てられ、御免といふをあいづに傳助勝手に入りければ、吉高衣裳をあらため、岡山がそばに寄り、只今の働き目を驚し、いよ〳〵戀もつのつてきた、こよひはとめていやゐやはらの取手を取つて、かはゆがつてもらゐたし、是非とまつてやいのと云ふに、御志嬉しけれど夜あかしの勤はなりません、けふは暮をかぎりもどして下んせ、御緣あらばと夕暮、迎ひ籠の來るを幸いさらばやの別れをのこせば、吉高殘りおしげに見送るおもてには傳助、近いうち御供してまからん、先づそれ迄はさらば〳〵、

圖、義利に命をやる女郎の棚落

傳介岡山を供なひ井筒がもとに歸へり、くらはしに對面し今日の首尾を語り、敵の案内見とゞけ歸りぬ、しかし吉高とやらんをしか〳〵見ず、おのれが心におぼへ有る故むさと逢はぬと見へたり、岡樣には始終座敷に有りしが、あるじと覺しきを御覽有りしか、されば しなゑ討の時三人めに出でし男、後に絹小袖を着し、是非今宵むつごとをかたらんのよし、此の男左の目の上に二寸ほどの疵有り、たしか敵にきはまりぬ、家名は吉高屋と申しき、つら〳〵此の吉高屋といふを讀みかへ見れば吉高也、頭振といふは異名ならめ、近日又呼びにこさんと申せしが、それ迄まつは手のびなり、敵の有家知る上轡にてもひまどるはかくれ心、所詮吉日をあらため一味の女郎一所に、本意をとげん、けふやあすやと云ひければ、倉橋聞て、我ゆへ樣々の御苦勞、仰の如く善はいそぐにしくなし、しかし今宵はいらぬもの明日と定め、廓を出る手はづは井筒がもとにて大よせはじまり、おちは御座舟にて出るよしを、めん〳〵親方にうつたへ、心やすく此の里を出ん、舟は新町橋より乘出し、舟頭には井筒屋のあるじ傳助八平をたのまん、用意のもの前よりこしらへ置きぬれば、初夜の頃舟につまん、連中出あいは明日四つより井筒もとへ御出の廻文まはしけるにぞ、明くれば十二月十日、十八の女郎殘らず井筒屋に入りつどふ、大將倉橋上座になをり、いづれも心かはらず御出、身に取つて是れ程うれしきことなし、付てはない〳〵の思ひ立、こよひに定め申すに付き、何れも年季身あがり、借錢の樣子あらまし承り、わたくし志の形見わけ致さん間、又おの〳〵樣にも御親類兄弟衆、よしみ有る客方へ志をのこし玉へ、死後人のあざけりを受けざる樣の志案、それ〳〵よし田殿、女郎方の咄を聞て指圖申さん、よしなに筆取り賴むのよし畏り、先、

一、岡山殿　拾五歳にて末たのもしきをぞんじながら、生國このもしく、殊に武藝一通りうとからず男まさりの心底をかんじ、私の妹女郎と定め、一方を賴み置き候事、年は十年御座候へ共、五年の身の代にて貰ひ申候、月三百にならしにて金三百兩の身請と思召くださるべし、承れば親たちには幼少にて別れ、兄樣一人有るよし、小袖三重殘しまゐらせ〳〵、

一、早川殿　二十三歳、明き年二年なれ共一年半なり、

鹿の部にて是も月三百にならし、金九拾両にてよし、聞きますればゆかりとてもなき身、客の内に定様と云へる男互に志をあかしたる中に候まゝ、金子三両にたがやさんの三味線おくりたりし、

一、富山殿　二十五歳、年明候へ共身あがり六月有る由、二月より七月なり、月三百にならし、身の代金三拾五両と覚申候、此の女郎七歳の頃父上におくれ、お袋一人有のよし、世のさか様とは存じながら義利といふにせまり先立ちたりし、弟與五七かねて孝行のよし、老さき目出度からんと存じながら、只御名残おしく候志に金子拾両のこしたりし、

一、岡野殿　二十二歳、勤三年なれ共、二年二月のよし、梅の位に候まゝ月四百五十匁ならしと仕、拾壹貫七百匁なれ共、家は親方様の了管にあづかり、身の代百五拾両残し候、二親には二歳五歳にて別れ、伯父の手より此の里へ身まかりし故、志のかたなし、かりにも末をと云いかはせし男に、文次郎殿と申す方有り、形見と申すにあらねど、絹ちゞみのかたびらあはせのこしたりし、必ず命日には御廻向頼み入り候、

一、磯谷殿　勤一年にて来る五月に明きかへは六月なり、影の位にて月三百にならし、此の身の代金三十両にてよし、私の生國は丹波の篠山、父親一人有り年六十二歳、弟孫七あんらくに養ひ候へば御不自由成ることなし、それ故定家の小色紙日隆上人の題目守袋共に送りたりし、

一、菅野殿　二十六歳、去年勤は明き候へ共身あがり引日十八月御座候、来る六月が勤のおはりにて、當月より七月、是も月三百にならし三十五両なれ共、金三十両残し申候、身の上二親なく、姉一人あれ共いきあひ兄弟故しんせつなることなし、殊に情を知らぬ人なれば形見を残すに及ばず候、

一、大鷹殿　二十一歳、勤四年、つぼね女郎たる故、見世客ふりてなしに六匁づゝと定め、惣高八貫六百四拾匁也、此の金百四十四両也、月三百匁ならしと存候へ共、其の段は御了管あるべし、此女郎母は本の親にして父は後づれ、つらい心より此の身になり候、母様へ残しおく物は小袖四重金五両、命つゞがなくば又あひませんに候、随分御無事に御座候へ、

一、三芳殿　二十四歳、明ごし一年、月三百匁ならし三貫九百匁、此の金六十五兩にて濟候、此の女郎二親共に御そくさいにまし〳〵、此の里ゑ身まかりし金も養の爲め遣し候、もし最期と御聞あらばさぞ御力も有まじ、せめて老の入まひにと金子五拾兩のこし申候、

一、小野川殿　二十五歳、當春にて年明き候へ共定まりし夫もなければ、にあはしき縁を待つ迄此の里につとめ、親方と二つ折りにて今日迄の指引、十五日のうり日百五十匁、內七十五匁小野川身取りなれ共、死て此の金入ることなければ殘し置けり、ゆかりかゝりのなき身、もし空しく成候はゞ一邊の御回向賴み入り〳〵、私の手道具共かぶろのしげのに御遣しくれ〴〵賴候、

一、藏之助殿　二十四歳、九ヶ年の勤に天神の位、月四百五十匁ならし、十二月代五貫四百匁、此の金九拾兩にて濟み申候、此の外身あがり十日御座候由、右の仕合に候まゝ帳面御けし可レ被レ下候、二親ながら、一年跡より末の約束いたせし山樣といふ客、內方のしゆびあしく一つ所になられぬ身を恨み、此の度の思いれに入り申候、なれども山樣の事忘れがたし、心計りの形見と秘藏の玉琴へぎごきうおくり入り〳〵、あはれと御思はせあれかし、

一、神崎殿　二十五歳、勤三月殘り申候、鹿の部にて月三百匁ならし九百匁、此の金十五兩のこし申候、此の女郎つねに頭痛けにて、勤のひま明き次第出家の志、ながいきしても樂しみなし、人間一度は死するならひ、人の爲めに死なばと思ひつめたる上かく迄に候、宗旨は眞言宗にて大師自筆の光明眞言有り、妹女郎のときはにのこし申候、

一、傳助　三十歳、生國は播州龍野の者、一家皆武士にて歷々多し、竹馬より親の勘當受け、淺間之介樣のかいほうにより年月をおくる、何とぞ御恩の報せん爲め命をかろんじ如レ此に候、

▲身の代合九百五十一兩二歩也、

此の外借金相應に有るべし、いつぞや淺間之介樣身請振舞の置土產に、右之女郎衆へ金二十兩づゝ進せられしをわし預り置きぬ、十一人の女郎借方尤も高下有べし、此の連中へ金子二百二十兩出し置き候まゝ立合ひ當分に仕分け、不足の所は帳面御けし賴み

入り候、

年號月日

いばらきや　くらはし

女郎衆旦那方へ

女郎衆かし方へ

傾城武道櫻四之卷終

傾城武道櫻五之卷

一、念力思ひをつむ遊女の川舟

傾城すべて意氣地と義利を忘れず、中にも倉橋夫のため命をすてゝ二度の勤にかへり花、敵を討んはかりごとに晝夜心をつくし、朋友の志をうけ、十餘人一身同心をかんじ、親方手前の年季、又は身あがりを日割に書き付け、其のあたへを殘し、或は親里ゑの形見わけもそれ〴〵の思はくを聞き、めい〴〵に遣し井筒が許に預け、心にかゝることなきしまいごとしもふて、暮れかゝる頃をあいづに五人六人三手に分つて、東口を出れば、夜番の又吉は役めにて、いかつらしくとがむるにぞ、いや何屋の誰々舟あそびに參ると答へしかば、先立つて親方よりことはり有りける上にも、念を入れ、ひかへの名帳にあはし、以上十六人數をあらため通しければ、毒蛇の口を逃れたる心地、皆々舟に乘りければ、八平舟をこぎ出し、西横堀を南へ道頓堀を西ゑこぎ行く所に、濱に待ちあはせたるもの聲をかけ、其の舟に仁王の八平や有る、茶かすの五郎介

なり、先程より待ちかね手足も凍ゑたと云ふ、さこそさあのせてくれと長持つませ、さらばと云ふて、二人は歸りぬ、段々舟をこぎわたり、川口のこなた人家はなれ舟なき所に從をおろし、倉橋申しけるは、首尾よくこれまで參るの段、今宵本望とぐべき吉相、是れひとへにいづれもの御働き、くどふ申すはおろかなれど、詞につきぬ今宵の空、おぼろ月夜もながめのかぎりとなり、うきふしの身、是れ迄流れよること、夜討の云ひあはせ、先づわしの思ひより申して見ん、敵のやかた、表は町つゞきにして、南は天王寺にのきば多し、東は大和河内國分越の道筋有り、北は野はづれより、東西皆町つゞき、うら道は高津生玉住吉堺ゑのぬけ道多し、是れ程くみあげたることに、若しはしそんじたる時の口惜しさ、所詮手ぐみを定め、うら門は吉田殿を先とし、岡山殿早川殿富山殿岡野殿磯谷殿大野殿おさへに八平以上八人、おもて門はわし菅野殿大たか殿三芳殿小野川殿くら之介殿神崎殿傳助同八人、時は八つ半と定め、先陣後陣いわかちなく思ひ思ひに入り込まん、あいづに拍子木八つ打つべし、やかたにふんごみ敵味方一つ所にならん、其の爲めの合詞味方は情と云ふべし、敵はあたと云はん、やみ討なればたへ松手ん〴〵にひつさげ、隈々に氣をくばり、下部にかまはず無二無三に切て入り、敵のねまに心がけ玉はるが第一也、定めし戶しやうじ立ふさがらんを、けやぶりけはなし入玉はゞ、敵仰天してうろたへん、尤も男計りと云いながら、きやつもきこゆる遊興者、妾風呂白人茶や物野郎影子入り込むまじきものならず、必ず左樣のもの共にはむくこと勿れ、其の爲めのたへ松がんどう提灯、男たるもの遠慮なく切りすてと定めん、神代はじまり傾城の敵討めづらしく、其の上御志のうれしさあまり、殘らず死に裝束をこしらへ置きたり、此の內女郎方脇指の小柄もとり玉はぬはわしも同前、しかしまさかの時は一念の劍、死ぬるを高にするからは、一天世かいにおそろしきものなし、それゆへ刄物は思ひ〳〵に取り玉へ、

一、長太刀　五振　　一、鑓　四本
一、鎌　二丁　　一、半弓　二張　是は傳助八平のぞみたるゆへおくりよし
一、懸や槌　二丁
これは敵のやかたへ入り込みの道具

高塀を乘り越す爲め、掛け繩めい〳〵に持ち玉はるべし、人を討つてながらゐんことふじやうなれば、死に出立みぐるしからぬ樣にと、此度用意を仕、舟あがりの召かへられ、はな〴〵しく本望を遂げ玉はるべし、それ〳〵と有りければ傳助うけ玉はり、風呂敷包をめい〳〵の前に置きたり、皆々ひらき見れば、

一、もみの袷、一やうのひろ襦こし切りに縫はせ、これは下着と札を付けたり、

一、中着はくさりかたびら、

一、上着は黑羽二重、うらは白きぬ腰切りに縫はせ、白ぬめにて二見と云ふ字を切りつけ、紋うらにはめん〳〵が名を書きつけたり、

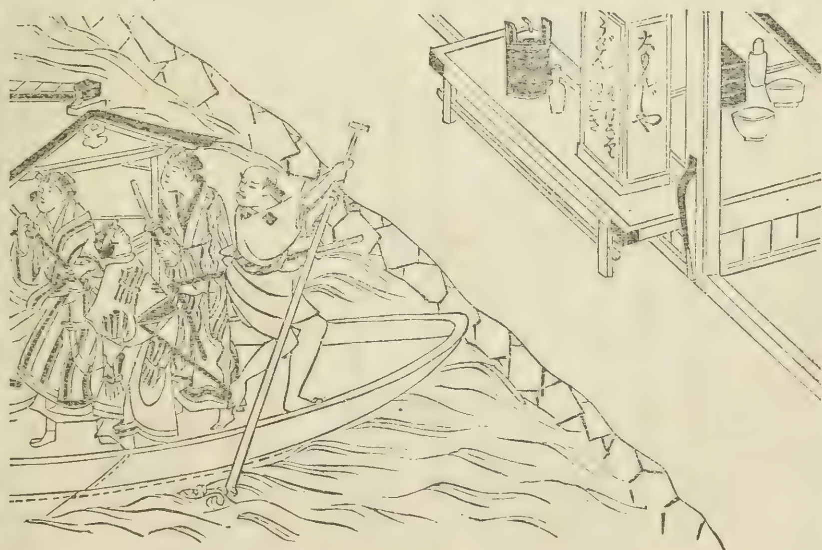
一、もゝひき、一やうにしてねずみぞんす、

一、くさり鉢卷上はもみにてつゝみ、

一、帶は紫ちりめんの丸ぐけ四重廻り、これも中わたのうらに鎖を入れたり、

皆々よろこび、志と云ひ萬のしかたかくまで、御心のはたらく物かと人々淚を流しぬ、重ねて倉橋敵を討ちたらん時のあいづに笛を吹くべし、其の時人數一つ所に集り、立ちのく所は淺間之介樣の御寺ゐのかん、サア此の云ひ合すむからは暫も爰を急ぎ、門出の盃したくもわしが分別有り、人にさとられぬ樣にと、丸提灯四つ五つに火をとぼし、二丁三味線ひきならべ、歌のしやうがも身の上なれや、とかく今宵を限りの命、あすはいかなる野邊の草と、同音にうたかたの哀れ果敢なき身なれ共、陸にては露しらず、やううたい申すとほむる聲しばしはなりも靜まる頃は、四つにすぐるにや、月さへ山にかくれがの、人顏見へざる時、太左衞門橋に舟をつなぎ、大もんじやと云ふそば切りやに立ちより、傳助先に走り打物あつらゐんと尋ねければ、夜もふけ我人ねぶりがち成る頃、一つふたつはならぬよしこたへければ、十五六人のこしらへくるしからずば賴むといふ、ていしゆ寢耳に聞き、先づ御は入りなされませ、たとへ一つにもせよあきないを仕らねば不調法、殊に大勢のよし、先づ奧座敷へ御通りと、よこ槌ではく庭釜の下をたきつけ、先づ御茶一つのけいはく、御舟遊の歸り、ざつと氣をかゐられての討物、いざ御上りと頭をかたむけ提れば、皆女郎にて堀で見なれぬすがた、いづ方よりの流の御身ぞと、ていしゆも少しは合點の參らぬ顏、只し都の

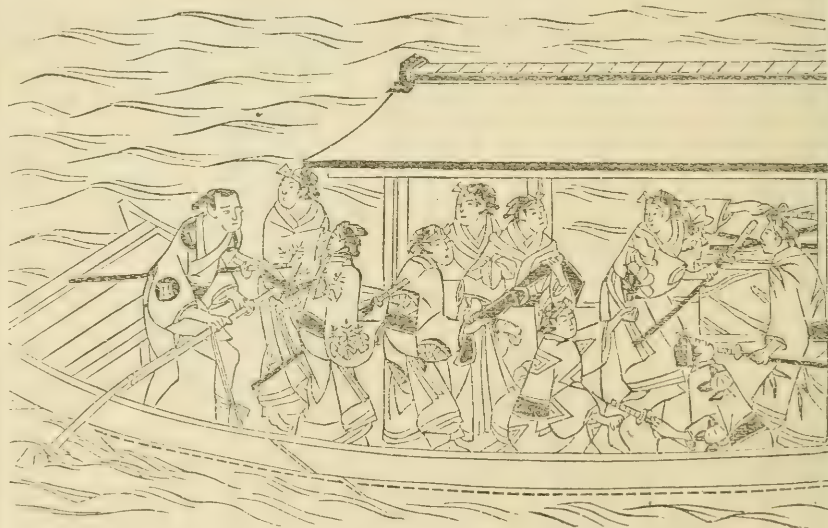
大臣大よせに召くだられしか、それには大臣顔見へず、先づお盃を出せば、傳助主を勝手に招ぎ、打ものは皆そば切り金一步代、酒肴も隨分氣をはられよと、金子を壹兩出せば、ていしゆ夢に小判とは此の事、何が扨ておのぞみ次第心のたけの御馳走申さん、見申す所皆女中にてしかもながれの御身、こゝらめなれぬ風俗、傾國と見ためが違ふたら腹を出します、此の如く手を揃へての御出、いかにしても、のみこまぬは籠の内の里、くるしからぬことやと爲しかば、傳助聞てふゝん尤も皆傾國の御かた、今日御出なされしは、御朋輩の女郎傳法へ身請有るに付き、いづれも身あがりにて親方へことはり、お部屋見舞の歸へり足、堀のそば切めづらしく、又御出のふぜうを思召し、八つ迄の御遊山、隨分御馳走申せ、露は拙者がさばき、見ごとなことして見しやうと、につこらしくかたれば、亭主のみこんで、是れで謎が解けました、そりや肴屋へ人走らせ、御汲物のかげんよくせい〳〵と手拍子打つてかけ廻る、もはや勝手がよいといふより、きうじにん三四人思ひ〳〵に持出たり、倉橋云ふやう、珍らしや、かうした事のあればこそ、里なれぬそば切をたべ



ますれ、今霄かぎりの打物そば切殘るも氣がゝり、心靜にまいりませいと云へば、皆口を揃へ、是れ程たべたことなき身なれど、はてそば切死にと思ひつめたる上身をいとい申す事なし、皆樣そうじやないかと云ふ中に、大野すゝみ出で、わしは討殺されてもくうことならず、いかにしても女の一桶ぐひはひつきやう味方討するにおなじと、扨も不吉な挨拶、皆々大野が顏をながめ、かうした身を知りながら、不出來な挨拶詞をとがむるもよしなし、かまはずと酒始めと、十五盃入のむさし野を取りよせ、是れにて三こんづゝと定めさいつさゝれつ、飮んで仕舞へば八つの鐘、ゆび折りてサア時ぶんよし、歸らんとあるじに暇乞、命もあらば重て御目にかゝるべし、さらば／＼と舟にとり乘り、一丁餘り漕ぐうち、おもひ／＼め立たぬ樣にと裝束着替へ、掘づめに舟をすて、五人三人あとさきに、死にゝ行く身をよろこびぞする、

二、報は針のさき身の上しらぬ色あそび

善をなせば善に歸す、惡をなせば惡の果のがれず、人間たしなむべきは非道なり、其のひを非と悔みてさへ非の罪はのがれず、もとより非を利とおもふやか



ら暫らくはのがるゝとも、其の報い針の先よりはやし、すでに吉高よこしまをもつて、淺間之介を害し、きのふと暮し今日と立、年月の一年餘り歡樂を定め、誰こわいものなしと云へ共、取々の評判に氣味わるく、いつぞの頃よりおのれがやかたより外の慰をやめ、晝夜呂州白人或時は野郎茶國の山桒を買ひ切り取りよせての遊山、さしむかいでは物がなし、たいこの佐介がかる口もいひつくして面白からず、なれ共何が御氣に入つたやらしばしもお側を去らず、されば其の頃は極月十日、世上しづかなるを幸ひ、今宵ははくの小松にせよ、野州も板つきはふてうたかし、影にて見よいは三島佐渡之介と云ふを招ぎ、座頭の雲都がこくうをかける三味線、おごりはうた手ごとの有る程引つくせといふ、暮より酒をはじめ、なんぞかはりを歌へとせつかれ、法師がゐものゝさいもん、顔をしがめ目をむき出し、調子の有程はり上げ、

肴歌かりがね文七うたざいもんしやうがすこし

あやまつておとこ奉るのほゝけんくわ、こんぼんかりがねや、扨はだん七すがたなり、まんづけぬきのはじめより、男といふ字を立てつめて、世よのすへにはくびとさまかへけんくわの大將、くるわ四筋にとりこもり、くらがりのおひなけをなしけるを、やをよろづの一もんしゆ、文七やごにてこれをなげき、おちおやもつけやうくんし、すこし心はなをりしが、またかみなりにさそはれて、やがてはなをらぬやまひといふ、ふしおとしより吉高心にさはりけるにや、此の歌やめをれ、あたいまいましい、ゐんぎなをしに酒飲んでねたかたましと、佐渡之介小松があいとおさへに吉高舌をなやし、こよひはいつもの酒半分のまざるにけしからぬゐひやう、もし肴に怪しきものはなきやと尋ねければ、佐介酒肴の内を見廻はしけれども見ゐず、酒は時により我を忘るゝことあり、暫御やすみと申しければ、吉高なればこそ此の苦みでいきつきもせね、何ぶんくすりもてこひと、我と死するを覺へつるは不思議の辻占、小松さかしい女にて、錦袋子を口にそゝげば、たちまち心地涼しく成りぬ、吉高嬉しく、今宵はすごすまじきをそちがはたらきにて命をひろゐぬ、此の禮には物日〳〵を買い、しつぼりとだいてねて恩のおくらん、こちへよれと手を取るにぞ、わけもない、今死する樣に云ふてちつとよければ、み

れんな、先養生してそしてといふ、それはつれない、志はこの葉といふ、はてそちが情でしんだら、本望いつそころしおれさだきつゝ、マアやすまんせとふりきる、然ば後の事、先づ一寢りと高枕、佐介は旦那のあがり膳、佐渡之介がそばにより、せめて一夜の情をくどけば、佐渡之介立腹し、いかに我ていなればとて一ツたん吉高樣と枕をならべまた方樣にしたがい、わしの一分はどこで立つ物ぞ、座與もことにより、やくたひもないこと云はずと、はやうねさんせとすげなくもこたへしかば、それは尤もまたわしのしんていも聞て玉はれ、此の二三年旦那の太皷を打てまはりしが、ちと樣子有つて內かたでの御遊山、身が喰物をぶんにと云ふもいとしかだかりよなれば、ゐんりよするだけの身ぞん、殊に衆道は不得手なれど意氣地のおもしろいにうちこんだと、かうべくだしのくどきごと、あはれ成りける心なり、佐渡之介もあきれたる顏、御尤にぞんじます、其御心底を外にしては男色のぶんたゝず、成程おもにかゝりましよう、先づ盃してといはれ、是はかたじけない、君の仰ならば千ばいでも、手づから引き請け飮んでさせば、いや私は此ごとくなひなのやうな盃はいや、アノひやし物ばちでのんでくだんせ、はてどうなりと御意次第と、ちやうどうけてずつとほし、サアあげますとさしければ、あんまり見ごとなのみ口、今一つとおさへければ、心得たりとほしけるが、下地つかれたる上の大酒故、しだい〳〵にゑい、佐渡之介はのむやらのまぬやら知らぬが命、もいきつゐた、御酒は御勝手と云ひ捨て前後も知らずふしたりぬ、うれしやまんまともりつぶし、佐介がはなに手をあて、そろりとぬけてつぎの間にひとりゆるりと夢をむすびぬ、

三、傾城夜討のすがた競

つゐに行く道とはかねてきゝしかど、昨日とすぎ今日の今宵をかぎりの命、さだめがたきは人界のならひ、月星の影さへ見へぬくらき道、十六人一やうの死に裝束、かぶと頭巾にて顏かくし、ながゞたなのさしつめ鑓長太刀手ごとに持ち三手にわかつて、物いはず人にあはざるかたをと、高津の宮に詣ふで念願を申しこめ、あはれ神力をもつてこよい本望とげさせ玉へと一心をこらしめ、たか木やにのぼりて民のかまどの見をさめ、時ならねば人家におとないせず、い

ぬさへ夢をむすぶ頃にや、さけぶこへのみきこへず、いざといふあしかろく、宮の内より鳥井の外へ、野はづれより生玉の馬場さきへかゝる頃、野いぬつきまとひてなきさけぶ、傳助思ひけるは、きやつを其のままおきては本意をとぐる妨げ、ふびんなれ共殺さではと、かねてしたゝめ置けるにや、袖より切いひを出しかの犬をまねぎよせ、喰つく所をかけや槌にて鼻ばしらを討ちければ、きう所のがれず、二疋の犬おなじ枕にふしたり、サア心やすしと六丁目のひぢまかりにて二手に分る、いひ合せいよ〳〵心をおちつけ、敵の首さへとらば、跡は野山にならばなりしだい、皆そろふたかと見る所に、吉田方には七人ならではなし、誰か是れかと云ふに、すは大野こそ見へぬと口々にのゝしる、よし田長太刀のさやをはづし、つね〴〵此の女郎の二心有るか、又は身しりぞくとは知りながら、ひとりにても人數をたよりと召しつれしに、死にぎはおそろしく逃げたるにまがひなし、程は行くまじ、跡より追かけ討てすてんとかけ出づる、くらはし押し止め、尤もながら大事の前の小事、此の女にくしとて年來の敵討ち損じては、心をつくせしかひもなし、殊に後日の詮議も六ケし、にげばにがしておけといろ〳〵となだめしかば、吉田を始め殘る女郎尤とうなづき、所詮大野が事云ひ出すも門出の妨、時刻うつらばあしからん、いざといふこゑを揃へ、うら表をぞかためたり、うらの方には二重の竹がき高べいをかけたり、表の方には大門内にばん部屋有り、それより内、中戸にげんくわんをかまへ、次の二間を越へて敵の居間、いづれもぬかり玉ふなと、互にさゝやき身拵する所へ、傳介ははしごをかるぐ〳〵しくもかかげ敵の門に打かけ、いざ是よりと申しければ、倉橋聞き、ここはりをとげず取り來るはぬす人同前、殊に年來のいしゆを遂ぐる我々、はしごをたよりに入込むは本意ならず、只門を打やぶりて入らんといふ、傳介きゝ、いかに女中なればとて手ごをい義利を思召し、全くはしごを力に入りこむしんてい露なけれど、門をやぶらば敵おどろき身づくろふ時は、こなたに三分の弱み、こそなくしのび入り、名乘時は七分の強み、殊に女中の敵討、本望とげて後は善惡しれる物なり、人は何ともいはゞ云へ、勝手よきことに世間をはばかるは血氣のわざ、私次第といふよりはやく、はし

ごをのぼり、門の内に飛びおり、くゞりを捜し見れば折ふしかきがね計りかけたり、是れ天のなせる所と喜び、そろりとはづし、サアこなたへといふ聲につゐて八人ずつとをる、倉橋傳介が耳にさゝやきければ、畏り番部屋の戸こぢはなせば、杢内寢耳にきをとばし、何ものと云ふを取ておさへ、高手小手にいましめ、聲たてなば切りずてと、さるぐつわをはませ片角にくゝりつけ、戸をさし錠をおろし、吉田相圖の拍子をうてば、うらの方にも同拍子を打あはし、高べいにかけ繩打ちかけ、つなをつたひのり越へはね越へ、入よりはやく鑓長太刀のさやをはづし、くま〴〵に心をくばりまちかけたり、おもての方には倉橋下知して、げんくわんめしあはせの戸を蹴破る、一角彌七藤七おどろき、すはぬす人とにげまはる、そいつのがすな心得たりと、岡野吉田神崎つゞとより、三人一つ所によは腰なぐれば、あつと云ふてどうとふす、かなわじとや思ひけん六助おもてゑにげんとす、むかふには岡野にがさじと立ふさがり、左のかいなを討ちおとせば、あへなくもしゝたりぬ、其夜とまりし佐渡之介小松がいしやう打かけ、私は島のもの今晩身賣りに此のやかたに參り、何のわかちもぞんぜぬ間命を助け玉はれと、ふるひ〳〵申しける、倉橋はるかに見付、げに〳〵さもあらん、きやつごときを討つのうたぬのといふこともなし、存分とぐる迄繩をかゝれといはせもはてず、菅野たかて小手にいましめ、かたはらにぞかくしける、吉高かなわじとや思ひけん、白むく一つに寢間を出で、左介もろ共ゑんづたひにゆどのをこへ、風呂の内にぞかくれゐる、小松はさかしくゑんの下にしのび足、息をもたてずゐたりけり、座頭の雲都丸はだか三味線大じとだきかゝゑ、のふおそろしやとにげまはる、三芳のがさじと既に討んとするを、傳助おしとめ、きやつをあいてにいらぬ物、足手まとひとつきのけ〳〵、敵の一間は爰ぞと傳助立より見れば、よぎ計りにて吉高はなかりき、すはにげたりいかゞせんと、皆々顏を見あはせ涙ぐみたる風情、倉橋すこしもさはかず、夜着の內ゑ手をさし込、おのおの心やすかれ、此のやかたより外へはゆかじ、しさいはいまだねぬくもりさめぬといふ、尤と色をなをし、しかし此のねま敵とは定めがたし、外にもかくれゐんと氣をつくれば、尤なれ共きぬのしとねうたがひ

もなき敵、せんなきことに暇ごらんより、先づくまぐまをさがせといふ、折ふし枕もとに袖香爐の有りけるを、倉橋取りあげ、いつぞや淺間之介樣にまいらせしふじと云ふこうろ爰に有る上は、いよ〳〵敵にきはまりぬ、さがし出し本望とげんと云ふより、小野川よし田岡山、いぶかしきはこゝぞとたいまつしめしやり引さげ、ゆどのゝ口をひらき見れば、かなはじとや思ひけんいづく共なく小石を投げかけたり、すは爰ぞと小野川あたるをはづし、風呂ちかくよると見へしが、内より戸をつよくおさへたり、さすが女の悲しさ、いかゞはせんと思ふところへ傳助八平來りぬ、よし田うれしく、先八平殿はふろの屋根に上りつよくおもしと成り玉へ、尤といふよりごつかといなをる、傳助はかけ樋もつてひらゐて戸を打はなせば、小野川よし田めつたづき、手ごたへしたと云ふこへに、倉橋傳助かけ付、それたいまつと呼ばはり、吉高佐介を取ておさへ、過つる彌生立賣堀にて手にかけたる二見淺間之介が思ひ妻、いばらきやの倉橋、夫の敵年頃日頃つけねらい、今月只今本望遂ることと、是れひとへに神力のなす所、傾城知音の敵討思ひしれと名のりしかば、つゞゐて淺間之介が家來、主の敵おぼへたかと、おどり上つて二人が首うちおとし、此の上にも念を入れよと、最前助け置きたる下部の男を引き出し、此の首汝が主人にまぎれなきやと尋ねければ、成程我々が主人吉高にて候、今一人は太鼓の佐介、かやうに白狀仕るの上は命を助け玉へと涙を流し申しければ、尤たすけたき物ながら、敵討は根を掘つて葉を枯らすといへば、ふびんながら討てすてよと、おなじ枕に切り殺し、アヽ嬉しやと年頃ねらいし敵討ちけるもおの〳〵の御影、いざ寺ゑ立ちのきいさぎよくじがいせん、尤といふより相圖の笛を吹きければ、十五人一つ所にあつまる、倉橋傳助に向い、こなたは敵の首をもち、淺間之介樣の御寺ゑいぞき、御はかに手むけ玉へ、我々は跡より參らん、畏り候と上着の小袖に首をつゝみ、しからば參ると云ひすて、うら道より急ぎぬ、倉橋今は心やすしとたいまつ提灯ふみけし、火本迄見廻し、今宵の夜討は二見淺間之介がしのびづま倉橋と云ふ傾城おつとの敵うつて立のく、我と思はん人あらば出て勝負をいたされよと、口々にのゝじれど、たれとがむるものなければ、サア立のけ

と鑓長太刀のぬきみ其のまゝ打ちかたげ、心靜かにあゆみしが、生玉西邊寺のほとりにて息つかれし女郎四五人水のみたいと云ふ、八平心得寺のもんをしきりにたゝき、そつじながら我々は敵討、こよひ本望たつし只今歸り候所に、つかれたるもの少々有り、あはれ水一つとこたへしかば、寺の男きもをけし、わだわだふるいながら、和尙にうつたへ、手桶に水をくみ入れくゞりをそつとひらき、是れまいりませとつき出し、跡をはたと打、すきよりのぞき見れば、しやくよりすぐにのむものあり、手ごとにすくひのんでしもふて、さぞ傳助まちびさしからん、爰迄立のき樣子を見るに、追手かゝらぬはおく病至極の奴ばら、此のうへは寺へ立のき、めん／＼覺悟をきはめん、もつ共と一禮し、見林居士の御寺淨光寺へぞ立のきける、

四、敵の首討おさめ悅の和歌

先立て傳助淨光寺淺間之助樣御はかに參り、吉高首を手向け燒香くゆらせまつ所に、倉橋を始め其の外の女郎心しづかに御寺に來り、のこらず御墓を取まはし車座に居ながれ、中にも倉橋御前に畏り、淚をはら／＼とながし、誠にあいなき御最期せんかたなき世のならはかせとは存じながら、がひなき女のならひ、是非なく今日迄相のび申すこと、さぞふがひなく思召さん、何とぞ敵に近より一太刀うらみ、御いきどをりをもやめませんと、ゆかり有る女郎方を賴み、やう／＼こよひしのび入り、憎らしと思ふ敵の首取つて御はかに手向奉る、朋輩衆の志をもかんじさせ玉ひ、草のかげにて御禮申させ玉へ、右十五人の者共あすをまたぬ命、追付き死出の御供し、手に手を取つて三津の瀨ぶみを安く渡り、佛のきしにいたらんことうたがひなし、此の守刀はいつぞや井筒がもとにて、女たるものたしなむべき者なりと御志にあづかりしも、あだなる御形見にてこそ候へ、せめて是れにて敵のとゞめをさゝれ、日頃の無念をはらし候へと、みづから守刀を出し、敵のくびにつらぬき、我としりぞき手をつかね、あつぱれ御手柄こそあそばしつれ、ふうふは二世の契、二度のとゞめは私に仰せ付けらるべしと、そのまゝ立寄り爰かしこをつらぬき、アヽ嬉しやとうつゝこたへつ我と我が身をくるはし、泣くより外はなかりき、其の次は傳助同御墓に畏り、いく度の申わけも敵をうたでは、御墓にも參詣なりがたく、

月々の御名日さへ宿にて御廻向仕り、やう〳〵今晩存分とげ、是れ迄推參仕りぬ、勿論拙者一人のはたらきにもあらねど、志迄を思召御かんごう御赦免下さるべしと、誠の人に向ふごとく淚をながし、首御じつけんの上は某申しうけんと、さしぞへ拔てみけんに切付、憎しさたなし、おのれゆへいくばくの思をなし、只今迄の苦勞みな汝が心一つよりおこれることなり、人を討ていきのびんと思ふはふかく、善をなせば善の果をうけ、惡をなせば惡の果のがれず、かゝる最期思ひしれ〳〵と、おどりあがり飛びあがり、ないつわろふつ身をかこちけるはことはりなりき、よし田を始め其の外の女郞立かはり入りかはり、思ひ思ひの燒香手向の水のいとまなく〳〵、嬉し淚の和歌を上たり、

傾城倉橋じせいの和歌江戸ぶし

君はいなばの松一木、風にさそはれむづおれの、木の身ばかりをのこされて、あけくれ思ふおもひ川、わたるかいなき身はうき草の、波にうたるゝあはれさよ、はかなやきのふけふ迄の、其のとし月をかぞふれば、はやふたとせの春を越え、つらやにくしと思ひねを、まゝにうつゝの夢かさぞ見る、さめて歸らぬわが思ひづま、せめて心のしたひもといて、しばしかたらんまぼろしの世や、

十二人の女郞最期の和歌江戸半太夫ぶし

われ人の身につまされて、もらひ淚の玉のをに、むすぼれかゝる情の糸、引手をよそに見なしつゝ、君が爲めにと思ひよる、わがつまごとにあらね共、十二の調子うちあはす、むくゐのつるぎうらみのねたば、うつもうたるゝも是れくわこのごう、ひゐつひかるゝぼんなふの、犬とならば犬となり、此の世の恨をすまの浦、あの世の恨みはおしの劒は、くろがねのはをならし、あかゞねのつめをとぎ、たて〳〵おつゝめおつかけ、しゆらの巷にまよはゞまよへ、ほんに命の何をしからん、二見の浦にながれよる、磯の見るめも我々が、心ばかりの後の世の、死出のみやげとおぼしめせ、南無ゆうれい見林居士、一蓮たくしやうとんしやうぼだい、うかみ玉へとみな同音に手をあはせ、時刻うつらば恥辱の死を遂げん、おの〳〵さいごをきはめんと、おもひ〳〵に座をくんだり、倉橋いふやう、ひとり〳〵死なんより二人づゝさしちがへん、十五人

七手にわかればひとり殘るを、わし淺間之介樣の石塔の前にて死なんこそ嬉しき、十四人も私指圖申さん先づ、

傳助殿ト　よし田殿
菅野殿ト　岡野殿
大鷹殿ト　藏之助殿
神崎殿ト　早川殿
野川殿ト　三芳殿
富山殿ト　磯谷殿
岡山殿ト　八平殿

右之通りくみあいいさぎよく死を遂げ玉へ、かねて認め置きたる書置御墓にそなへ、志を人に知らさん、いづれも思ひのこす事なきや、先以て只今迄の御恩詞にもつくされず、未來に於てゆる〳〵御禮申さん、皆々追付き玉へと云ふよりはやく、守刀のきつさきをくはへあつと計りを最期、つゐにむなしくなりぬ、是れを見て殘る十四人、いざ追つかんと云ふより、思ひ〳〵心々の題目念佛となへ、互に心もとをさしつらぬき、うんと云ふ聲をそろへ同じ枕にふしたりぬ、きく人感淚を流し惜しまざるはなかりき、住寺をはじめ寺中のめん〳〵かけ出、此の體を見るよりはつと驚き、大勢の女中何故こゝにてあいはてしぞ、もし書置などなきやと尋ねければ、淺間之介墓の前に一通を殘せり、住寺ひらき讀みたもふ、其の文に、

心底を書置き候趣

一、はづかしながら私は新町の遊女、いばらきや倉橋にて候、かく成りはて候御事、去年卯月八日の物日私二世とかねし客、二見淺間之介樣と申す御かたに、三とせをかさね、旣に身請の約束追付出べき所に、頭振吉高とやらん男、我儘をもつて其夜せひもらいあはんのよし、尤も里のならはせながら、もはやまゝならぬよし申しやりしを遺恨に思ひ、淺間之介樣歸へりを待ちうけ、さん〴〵手を負せ、それより本ぷくなくつゐにこときれ玉ひ、末期の心底さぞとおもはれ、おいとしさの餘り、佛力神力を祈り、何とぞ敵を討ん計りに又ぞや勤の里に歸へり、樣々心をくだき、今宵忍び入り本望を遂げ候、右十五人の內傳助と申すは淺間之介樣の家來、意趣は私同前にて御座候、

一、殘る十三人は、淺間之介樣御恩にあづかりし女郞衆、せめて志を報せん爲め、私と一味なされ、御加勢請

中事誠に嬉しき心底、詞にもあきたらず、傾城の身とし本意をとぐるは、未だ天道の加命つきざるのうれしさ、もし御けんぶんの方あらば、まつたく非道無之段御披露賴上たし〱、

一、八平事大鷹殿と外ならぬあいさつ、其のゆかりとて此の度の同心、かれ是れ嬉しき言の葉、中々筆にもつくしがたく候、心あらん人々あはれと思召し、一邊の御回向賴上たし〱、

十二月十日夜　いばらきや　くらはし

御見聞の衆々樣へ

住寺おどろき、上古末代にもためしなき敵討、急ぎ御代官所へうつたへ、なき跡念頃にとぶらはんと鉦打鳴らし、同音に光明遍照十方世界念佛おこたらず、南無阿彌陀佛〱との玉ふこゑの下より、十五人の死がい露と消へ霜と成り、霧に小がくれ五色の魂、れいれいとあらはれ、風にまぎれ木の葉にかくれ、東西南北にわかつてかきけすやうにうせたり、住寺觀念の眼をひらき、あたりを見れば生玉の門前、我身ながらわれかとうたがはれ、いよ〱信心肝にめいじ、あたりを見れば三十許りの男、ひぢを枕にふしたり、ふしぎに思ひ是れ旅人目もはや山のはに出玉ひぬ、夢おどろかしいそぎ玉へといふ聲に、牡丹之助眼をひらき有しむかしの夢物がたり、うつゝか又はまぼろしか、主從の緣つきず、一生のくわんらくより世をさりたまひし御身の上、まざ〱しく見奉る事、ひとへに五臺山文殊ぼさつの御利益、なを有がたき御法の庭、いよ〱御尊顔を拜し奉りて後、すみ染の身とさまをかへ、主君淺間之介樣の御跡とむらはんと、住寺にむかい互に見へし夢ものがたり夢あはせ、夢か誠かうつゝか又はまぼろしかと、未だ疑の心やまざるも、俗心のはなれざるを悔み、門前のひらくをまちうけ、正身の知惠文殊菩薩を拜し、すぐに四國行脚と心ざす、石川牡丹之介が夢話、うそか誠か誠かうそか、

寶永二年八月吉日
寺町通松原上ル町東側
菊屋七郎兵衛開板

傾城武道櫻五之卷終

張道張合大鑑序

治まれる世に義者張は一哲者といひ、律義なれば阿房といふ、此ふたつの道おこなはれず、只利をもつて義とし、義を以て利とする時は損なし、されはむかし血氣の勇者鞘當詞咎の素刄拔より以下、目玉眼兵衛、蟒金十郎、墓原骨右衛門、夢野市兵衛、狸の十郎、泥の八兵衛、なんど聞ゆる六法八法播磨のはやし、詞の林にかたり傳えし類をあつめ、賞罰をあらはし、勸善懲惡の鏡に、言行の容をたしなむべき便にもやと、編る者の微意なり、

園粋然序

武道張合大鑑目錄

卷之三

卷之四

目錄終

武道張合大鑑卷之一

一、武士の濫觴

それ武は仁義の器にして、神武天皇筑紫をたいらげ、大和の國畝傍山を開きて内裏をつくらせ給ふ、これを橿原の宮と申奉る時、宇摩志摩治の命、軍兵を具して禁門を警固せしむ、これ物の部と呼ぶ始めなり、士は白虎通に男を士といふ、此故に武士といひ武者といふ、虞書には汝士となりて五刑を明すべしとあり、民間を出で公卿の家に侍ひけるとい侍といふ事は、民間を出で公卿の家に侍ひけるといふ義なりとかや、劍を帶し戈を携ゆるといへども、文を左にし、武を右にして直なる道を守り、義をおもくして邪路に遊ばず、あやうきを救ひ、國家を補佐するのこゝろざしあるをよき侍といふべきにや、されば四民の長たるをもつて、尤行跡不嗜なる時は、先祖の佳名を落し、家をうしなふためしすくなからず、およそ源平藤橘の四姓公家民家に分れて八十氏に蔓り、俸祿の多少、官位の高下ありといへども、武威に差別なし、嘘つかず盗まず、後れを取ず、此三耻の外は、貧をも耻ず、五根不具をも耻ず、只忠信のふたつを忘れず、無用の殺生を好まず、自己一朝の怒りには身命を輕くせず、國家治亂に及ぶ時は、智謀計略を專にして、身は塵芥より易く捨て、國人の安堵を思ふ事、武門の龜鑑たるものなり、頃は梅の雨ふりつゞき隣家にも鱗こひしく、遊里通ひ路の川水、白浪たつて板ばし落、晝も雲かさなりて、燭を取て夜遊ふが如く、いつもの浪人中間太刀川十郎助、市谷爲右衛門、清原團助、村澤九八郎、田宮掛八、當流の落し咄し、野良酒もり、白人の品定喜悅丸の取沙汰、とり〴〵に囀り草臥て、何かかはりたる一興もやと、おもひ〳〵の物好、暮がたき夏の日も、入相より初夜に間なく、雲のいづこに月のやどりも闇路おぼつかなく、呼子の森に住といふなる、野衾といふ化物、むかしより沙汰ありて誰見し證據なし、かならず暗き雨夜に出るといへば、今宵こゝろみにかの森に行て、化生を活取にして、小芝居の見世物にせば、遊興の代物たなごゝろにあるべし、傳へ聞に、鼯老て飛行する物なり、常に火烟を喰ふ、肉翼あつて衾のごとくなれば、世俗衾といふと書籍に見えたり、必竟正體わづかなる獸、そつとも氣

遣ひはなき見物なるべし、いざ鬮取にして一人立越からめとりてまいらばやと評定する中に、清水團助が草履取角平、夜食の給仕手傳ひして此間を圍居たりしが、慮外ながら鬮取におよばず、私儀を仰付られ下され候はゞ、からめとりて參るべき願ひのよし、一座これは武邊なる望み、しからばその方一人見てまいれと、おの〳〵興に入て申つけゝるが、太刀川十郎いづれも何とおもはるゝぞ、かならず今宵も野衾出るに極りたるにてもあるまじければ、角平をおびやかして懲んには、此五人紙を縫、衾をかぶり、角平よりさきにまはり、かの森の陰より飛がごとくむらがり出なば、迯まわるべきありさま一興あらんといへば、燒鳥に經緒なり、かれが脇指の身を、竹光に取かへられしかるべしと、幸去年の盆のおどり太刀の鞘に、俄に田樂串のあまりを削りてしこみ、魔王變化のおそるゝ重代の名劍を、こよひの晴にかすぞとて、指かへさせ、角平よりさきに近道を横切にまはり、森の黒みに隠れ居る所へ、角平きたりてこゝかしこの木の下にたゝずむ、時分はよしと五人衾をかぶり呻き出で、追かけしを取てかへし組ふせ、かの竹光を拔て、こゝろもとをさし通しける共しらず、四人ながらつゞけて拋倒してはさし殺しける、主人團介をも取て伏せ、すでに胸をさゝんとするに、おのれ主を殺すかといふ聲に、引おこし、必定化物主人に變じたりとは覺ゆれども、主と名乗る一字に數年恩を荷ひし忠義を存じ、命たすくるぞと退きければ、團助かさねて、化生の物にはあらず、さては四人を皆手にかけし上は、自分一人無事に歸りて一分立がたし、まづもつて汝、それほどの力量武邊ありとはしらず、よしなきたはふれ事にかゝる過をもふけたる、後悔今は詮かたなし、かれら四人一家の者共あれば、化物と存じて殺したるいひわけ立がたかるべく、さしあたつて草履取共こよひのたくみ聞たる事なれば、つゝむにあらはれやすかるべし、此節の思案我にまかせよと、血の付たる衾を二人ながら着、鼻紙たゝんで額につけ、四人の小者共が出向ふ約束の辻堂に行、淺ましや我は清水團介が幽靈、同じく角平が亡魂なり、かの野衾に出あひて、爪も殘らず喰れしその魂、かりに此かたちをあらはしてつげしらしむるもの也、四人の衆は呼子の森に命と血と吸れて骸ばかりは殘れり、急ぎ

死骸をおさめて、葬り給ふやうに申さるべしといふ聲に、四人の僕肝魂も消て絶入しける間に、足ばやに立退けるが、角平竹光にて田宮村澤をさしける時、下より脇ざしを抜合せ、組しかれながら背中を突たる疵七ヶ所、顔がまち耳かけて三ヶ所、臑に二ヶ所淺手ながら十二ヶ所に弱り惱みけるを介抱して、隣國の所縁ある方にしのび、疵養生本腹させて、團平は發心剃髪し、角平はその國の守にかゝえき奉公に出けるが、國守ひそかに此武邊を聞及ばれ、ある時島野越中守といふ人を饗應せられけるが、これも馳走の一つと、家來に武邊仕りたるものこれあり、むかふ疵をはじめ十二ヶ所手を負ながら、竹篦一本にて一度に四人突殺したる疵跡を、御めにかけんと角平を召出され、裸になりて手負たる跡を御見物に入よと申し付られけるに、兎角辭退申ければ、何として帯をば解ざるぞと、急にいひつけられしかば、今日は指合申儀御座候得ば、御免かうむるべきよし、達て申けるに、さては越中殿一家などを討たるかと、内意たづねられしか共、さやうにあらずと申すうへは、是非にと望まれしにより、無理に裸にしたりければ、島の越中ふんどしをかきてぞ居たりける、

二、正眞の石部金吉

よろづむかしにかはる事、めづらしからずといへども、中にも武士の風俗こそ古老の目に黒白のたがひあるなれとなげきぬ、いにしへは百萬石の身上たりといへども、みづから馬の沓作る事を覺へ、月代自髪せずといふ人なし、これ儉約を守るにはあらず、譬ば十萬騎の軍兵を引率すといへども、主從二騎に打なされ、あるひは大將一人穴に隠れ水を潜りて命をながらへて、時を待得て本意遂るもあり、出陣退口にも馬こそ重寳なれ、しかる時みづから沓をつくりて翔引達者にして、往來自由なれば常にみづから沓作りならへり、さかやき自髪は頭實驗の時、第一の嗜みとす、世の末を見るに小知の士まで自分に髪ゆふ事さへ嗜まず、松脂に臘を煉合せて、伽羅の油など名をつけて、家來の鎗取に給銀高く鑓持は顔に鍋炭をぬり、草履取挾箱持まで人形の彩色のごとく、供まわりに腕をふらせ芝居狂言を見るがごとし、さらに武家に召つかはるゝ所存なく、主人危きに望む時は、皆逃隠れつべし、歩行若黨五人三人の身上にてかやうの渡

り者をめしかゝゆる事不覺悟なるべし、これらを手振一遍の者といひて、たとへば俄の客來に給仕つかまつれと申つけぬれば、拙者儀は供まはり一遍とて、さらにうけがはず、挾筥持に手水を汲でまいれといへば、水仕の約束にてはなしといふ、草履取にたばこ盆の掃除いひつくれば、役替いたしたるかと空うそ吹て動かず、小身もの是非なし、追まはしの者といふ僕を召かゝえて、外の儀を申つけゝる、古風なる親仁これを聞て、ある歳かの一遍の者を揃えてかゝへ、屋敷の内を食後養生にあゆむにも馬を引かせ鑓をふらせ、挾箱を行列して經めぐり、同郷の隣家に行にも、馬鑓挾箱を呼らせぬる事は毎日幾たびといふ事なし、一偏の者共理屈に草臥たり、ある時居屋敷の内に隱居所を立て、壁土を粉練させける時、追まはし共數日働きぬ、今日は休足申つけ、みづから馬に乘り口取二人、手振若黨挾筥持、草履取、沓籠持以上十二人かの壁土の中へ乘込、縱横に朝六つより暮まで、輪乘して手を振せければ、一偏の奉公人共草臥て、此後お供に出ざる日は何なり共相應の追まはし、御用うけ給はるべしと侘けるに、一日にて此働きを宥免して申聞せけるは、およそ武家につとむる者、大名は人數おほくして、一役々々を請取、おのれ一分の用をつゝがなく相つとむるはよき奉公人なり、それさへ身不器量にして名をも恥ざるもの、道をまもらざる者、先祖に不孝なる者は、一役おろそかにしてつかさどる要事をしらず、遊藝淫酒に長じて劍戟錆威の糸の損じたるとは、土用ぼしにも眼にかゝらず、されば靜謐の代には、夷川は弓引すべをしらず、町人榮耀にあまりて武士の眞似を好み、家名を捨て假名を名乘り、金銀を敷て武門に緣を結びより、おのが黨にあらざる事をもとむるこそ治りし世の瑕瑾なるべけれ、これ皆おのれ〳〵が身の程をかへりみず、外にむかつて家訓を忘るゝ故なり、今おのれ等此小身者に召つかはるゝ身の程をしらず、輕き用事をさへつとめざる心底ならば、一命を的にかけし武家の奉公おぼつかなし、萬石に命をかけ一石に命をかけるも同前なり、しかれば武門は命を輕んずるの役とて、平生誰か寢てのみ居るものありや、立身する者を見るに、拔群の儀なくして成がたし、忠なくして賞あるは不義の富とて、侍の請ざる所也、小家に勤るは汝等が不運なれど

も、こゝろざしは落すべからずと、白髮をかき撫で制しけるを、若侍共傳へ聞て、時をしらざる老ぼれ、かかる狂歌もおぼえずや、

一てれん二には人がら三つとめ
四にはまいない五ひいきの沙汰

三、京と田舍は各別世界

大守の極りし城下の町人は、大形武家の形儀を見ならひ、袴肩衣のためつけやう、脇ざしのさしぶり、挨拶の進退、さのみ不都合なる事も多からず、上方の商人の武士を評判するを聞に、千石の身上は米一石六十目がへにして六十貫目の身代なり、我は家屋敷賣買の代物、高をつもれば二百貫目の分限なり、位も職もすぐれたりと思ふ躰なり、算用しりてしらざるはからひにや、千石の身上は毎年千石なり、金子つもりにして十年に六百貫ならずや、かの町人二百貫目の身上は、其身一代の物產にかぎらず、五代十代も同前にて、おほくは減少すれども、利徳を得る事まれなりとなげくにあらずや、算用違ひかくのごとし、さればかの百貫目の町人は、わづか一貫目の振まはしする商人をば無下にいやしめあなどりける、こゝをもつて五十石百石の小知の武士をも、金五十兩百兩の身體と、さもしき筋より思ひくだす事あさましき事なり、武家はさやうには覺へず、たとへば百萬石の大名と千石の侍とは身上各別なれども、いかにぞや町人のやうにけじめは見せず、挨拶も賣人の所存とは違ひてかろしむる詞さらになし、大小名、小知扶持方の奉公人も同じ侍なればなり、たゞし陪臣は高知とりても謙退するは、主從の混亂せざる格式をおもふが故なり、殊更商人の女子を育つる體、武士と格別なる事は、京大坂の花見もみぢ見諸寺の參詣にも、十二三よりうへの娘もてるはよそほひつくらせ、源氏あらひ粉、梅花の油、かけ香、さし櫛なんどにも、人の目だつやうに色つくは母親つれだち、さながら萬人に耽らしぬるやうに出たつ、その下心は、我身上よりよき者に見えられ、器量風俗におもひつかせ、望まれんとするなり、しかればその娘の餘勢にて親も世を安樂に暮す事もやと、こゝろがけぬるぞかし、それよりうへの町人は被衣乘物に乘れ共、とかく容儀風流の評判に逢んとたしなみ、行さきの身上をはかりて、敷銀を用意し、器量よきには聟の方よりこしらへ料を請

取思案して妹の美形をみせて、姉の疱瘡を嫁入させし手だて、これ上方の咄になりし事なり、され共退去又呼の物入を算盤にかけて堪忍するは、口おしき次第とはおもひながら、金銀にまなこをかけて、口を閉る事、町人の境界なり、武士は小身たりといへどもさやうの品にはあらず、たとへば生れつきよき娘も、四つ五つまでは乳母門前に懷抱して、月のひかり雁の飛かひに機嫌を補へ共、七つ八つよりは帳內ふかく住て、男子には從弟にざりて對面せず、めしつかひの腰もと、物縫茶の間にも、譜代の女の外には隱れて見ゆる事なし、しかれば何某に女子ありとは聞ゆれ共、器量のよしあししるものなし、緣邊取組の談合にも上方のやうに善惡の評判ありて、見て呼といふ事なし、さればさて見ぐるしき娘を、人の妻にやるべき所存なければ、夫の嫌ひ厭ふべくおもふ程に、親の目にみゆれば、尼にするか、一代隱居婆々の部屋にて養ひ殺しにする事なり、不器量のかはりに、敷銀する躰の儀さらになきならひなり、いかさま一代相見る女なれば、町人のごとくみぬあきなひはおぼつかなき事ながら、器量の穿鑿するは妻者の事なれば、本妻には沙汰なき儀尤ぞかし、武家に不行後家といふものあり、惣じて緣邊內證にて取組、約束さだまりて大守に何某が娘何某が方へつかはす筈に相極候段、申ことはるあり、しかるに娘いまだ幼稚なるか、又は勝手づくにて一兩年の內相待事あり、その間に約束せし聟自然病死などすれば、此娘最早いづかたへも嫁入する事なく、夫に相まみへずして一生後家となる事あり、これを不行後家といふ也、親の側をはなれずして直に後家をたて、頓て尼になりて淸淨不犯の墨染の衣、めづらしからぬ事なり、これ貞女兩夫にまみへざるの格なり、たゞし娘六七歲にて契約して大守の耳にたて置、あるひは十歲十一歲の時、約束の聟不慮に病死すれば、此娘ふたゝび外へ婚禮仕るとて大守へことはりがたき故なり、しかる時は娘幼少にて何こゝろなきを、親緣類不便におもふ時、一家の者のうちに女子なき侍、此娘を養子としては、又外へ嫁せしむるはたまゝゝある事なり、町人を見ればたとへば兄を聟にとる契約して、もし兄死ぬればその家督弟取ゆへに、又弟の妻に取たり遣りたりする也、あるひは兄に妻子共までありて相果れば、頓て兄の妻を直

に弟にあたへて、甥を養子にするもあり、これみな義をおもはずして金銀家督を本とする故なり、武家にしかある例を聞ず、たとへ萬石の家永く潰るゝといへども、義にはかへがたし、これ聖語に國は利をもつて利とせず、義をもつて利とすといふに似たり、しかしながら今は利をもつて利とせずして、義をおもふものをば、無分別者一哲ものとて時にあはず、されば盗跖は一生安樂榮花のさかりに逢て死せり、孔子は飢給ふ事あり、聖人も時をしらざるにや、命なるかな、天我をいかんといへり、ある國の守につかへし武士一人の娘をもてり、さいわいなくして十九まで嫁する約束おそし、深く閨扉にかくれて伊勢物がたり源氏さごろものはし〲、こゝろの動く事すくなからず、上方のごとく花見に出たつ慰なく、歌舞妓狂言見る事なし、旅芝居などたま〱あれども、武士の妻娘の見るは稀なり、人形まはし五人七人づれ、春のころきたる時は屋敷へ呼よせ臺所廣敷、あるひは内庭に幕をはらせ、したしき縁類のみに告しらせて見物する折にも、女は夢想窓より折々さしのぞくまでにて、心のなぐさむ事なかりしが、けしきあしく不食眩暈、これはむづかしき性なるべしとて、醫者をも小歳よりたる痘疤(みっちゃ)づらか、片目か、趁跛(ちんば)か、いづれも不仁物なるを吟味して、療治をさせる事なり、こゝに福良玄二とて老醫のむくつけなるを頼み、煎湯つねのごとし、氣欝發散の劑にて大かた快く、兎角相應の縁邊にかたづくべき噂を、玄二ひそかに聞屆け、元來此醫者京大坂に歳久しく住て、若き時より太鼓半分にて妻妾の取持して、利徳を得たる手くだ忘れざるより、同家中樫原宅平いまだ妻なき事、常に出入して存たれば、かの娘を媒妁すべしと、ある時宅平に美人のやうにかたりつげゝれば、此女の兄勝海斧右衛門同役にはあらざれ共、淵底よく存じたるうへ、筋目かたく聞合するに及ばず、媒をたのまれ、早速婚禮を取持、吉日を撰び、大守にうかゞひ、かれこれ首尾祝言目出度相濟ける、その夜は霜月三日更行く鐘もさへわたり、新枕の閨のさかづき、ともし火のひかりに、玄二がもろこし我が朝の美人盡しをたとへにかたりし容顔をみれば、眇にして色黒く、唇根來椀のごとく反て、唯白粉、榮徳が極彩色のごとし、宅平二目とも見ず、かゝる異形の者、玄二にたばかられたりとその夜

のあけ七つより、持運びし嫁入道具を、勝浦斧右衛門が門に持歸し、小山のごとく積あげ、明六つの頃娘を乘物にて門を叩て舁込せけるに、一家おどろき斧右衛門宅平が家來に逢ば、所存に入ざるによりて返進申よしの口々、斧右衛門聞て、不緣につき歸さば歸しやうこそあるべきに、ことはりなしに諸道具を門前に積せ、早朝あはたゞしき仕形、踏つけたるはたらき堪忍なりがたしと、口取申つけるにおよばず、みづから厩より馬引出し、はだせにうちのりて、宅平が玄關まへまで乘込て敷臺におり、障子をあけて內に入んとする所を、鑓にて左右よりつらぬきけるは、宅平かねてまちもふけたると見へたり、斧右衛門刀はぬきながらついにむなしう倒れぬ、宅平は仕すましたりとて、玄二を急に呼よせ、美人の虛言を吐たる口を引裂んと、若黨に踏つけさせて、刀をくわへさせて耳かけて暫はなしけるが、家久しき召つかひの者に介錯させて、其身も切腹して相果たり、

其頃諸士の評に曰く、玄二あまりに美質のよしかたりしこゝろより見るゆへ、少の不器量も夥敷あしさまに見へたるなるべし、され共宅平が働き温和ならず、血氣の端武者なるべし、忠義の爲ならず自己のいきごほりに、兩人よしなき犬死して、先祖の家苗を絕し眷屬を道路にたゝずませり、かやうの小せつによりてあやまるべき事、思慮なき愚士なりと判斷する者もありける、

四、背中合する出家侍

城下のならはしとて、屋根の葺替塀の覆するにも、高き所より見おろす限りの隣家はいふにおよばず、半町一町の人家までも、使者を以てことはりをいひつかはす事なり、上方に歷々と沙汰する町人も、勝手次第に屋根におり、萬無遠慮なるこそ宮古の重寶なれど、無作法をしたり貌なるは、鄙の住居にははるかに劣りけるにあらずや、過ぬる頃、關西の城下に寺町あり、裏合せに武士の屋形立つゞきたるに、ある時その寺町の墓原とおぼえしあたりに、歲ふりたる松の梢をおろすとて、下男木の末にあがりけるに、此武家の勝手向を直に見おろしぬれ共、夏の頃なれば障子をさしまはすに、暑く目通りへ女共は出もやらざりけるに、寺より木のぼりいたさせることはりの使もなかりしかば、こなたの屋敷よりはるか隔て、枝をお

ろす男を鐵炮にて打落しけるに、おどろきぬれ共、立つゞきたる侍小路、いづれの屋敷よりともしれがたく、さては此方より使をたてざる不念に、始てこゝろづきけれ共、とりかへしのならぬ命、廿七歳のあら男終に相果たり、遠慮なき者はかならず近き憂にあふ事聖人の詞とは、上方のもの共も覺えながら、かり初の挨拶にもおほく無禮するは淺ましき町人の風俗ならずや、されば刀をさせばお侍となへ、馬に乘れば殿樣と覺へける、さあるかとすれば祿を聞て銀目につもり、おもひあなどるありさま、四民のうち商人を最下の業にさだめたる、さもあるべき事なり、古今集の序に、商人のよき衣着たるとは嘲せられし中々に面目なるべきか、

武道張合大鑑巻之一終

武道張合大鑑巻之二

一、藤橋可傳秘密の五ヶ條

某儀は八年以前まで大坂にまかりあり、八百八町に顔をさらし、劔術柔居合取手に妙を得たる、藤橋可傳と申者、京と難波とは十三里隔つれども、たつた一夜のくだりふねあればのぼり舟あつて、隣ありきと同前、定て此しわづらを御らうじつけられた儀も御座らうが、おそらく劔術一通りにおいては柳生、關口、戸田、田宮、丹石、竹内、大圓鏡智、念流、岸柳、武藏神影、神道宅磨等の四十八流を修行仕り、太刀取ては打太刀、請太刀二刀木刀、四劃八劃革撓竹、小太刀大太刀鎧通し陣太刀野太刀芝打刀諸刄片刄枝劔、神劔名劔一振一腰の相傳、さて又稽古の裏表、丸橋かけ橋、獨木橋稻づま晴嵐虎ばしり、遠山雷電瀧をとし、一足一刀印拂車、柳ながし櫻川、虎亂戸入を始として、九十九本のつかひわけ、五尺八寸の大太刀、三方臺のうへにて拔さしを仕る、戸算をあゆみ屛風を傳ひ、柔は八人詰三人ひしぎ、四方がらみ衣がへし、闇の立合、

羽がひじめ、柄留、岩ほぐれ、組合襷棒がらめ、此外三十八手の裏傳授、御執心においては神文をもつて、殘らず相傳仕れば、たとへば異國の樊噲張良、桓雲張飛で御座らうが、韋陀天摩利支尊天でも、ころりとやつて、吽(うん)といはせた男、關東關西にかくれもない可傳で御座れども、歳まかりより、兵法も軍法もかなわぬ貧乏といふ太刀長刀の名人にしつけられ、男風流(をとこだて)のたたぬひたひに浪をぶちよせ、鬢髭に消ぬ霜をふらし、達者業がまかりならぬについて、これ此一卷を封じながら相傳仕るが、中には何を書たる物ぞ、こゝろもとなくおぼしめされう、さるによつて目錄をよみてきかせ申す、別してお侍衆やお若い衆は、おもとめなされて重寶なる物、さあ今そつちからおならひなさるゝと、五十兩や百兩では相傳はならぬ、五ヶ條の秘密の目錄の次第、第一呼出しの大事、たとへば日頃戀しゆかしと存ずる女中方にてもおわかしゆでも、今宵是非あひたくおぼしめす時、わたりに舟のよるべもなく、文をつかはすべきたよりもなきときは、まして物いひかはすことならぬを、これ此卷物のうちに書つけ置たる通りの傳授によりて、かの戀人おのづから人しらず御出あつて、しつぽりと御あひなさるる秘密の大事があり、さて二ヶ條にしなしたは、不案内なる獨旅、五十里百里の夜道山道、松原長繩手を物すごくまかり通るに、たとへば追剝辻切又は狐狸の化物、ちつとも障碍をなす事あたはず、一人が八人づれとみゆる所の秘密の大事をかきしるし、偖第三ヶ條には、長崎薩摩たとへ朝鮮釜山海の沖中の舟のうへ、さては人家はなれたる山の奥、渺々たる野原か、家の内にても時ならず咽かわき、湯を一盃飲たく存ずるに、水もなく鍋もなく釜もなく薪もなき時、火打石さへ一つもてば、一滴もなきを湧出す秘密、さて湯にわかして五はい十ぱいの儀は勿論、洗足でも行水でも居風呂にもする程、たちまち湯をこしらゆる、秘密大事をしるし、偖四番には、夜でも夜中でも俄に目まひ絶入するか、胸が痛か腹をこわるか、人間は四百四病の入物、何時いかやうなる病が急に取つめて、頓死頓病する時、家うちさがして漸梅木和中散用ひてもしるしなく、醫者も遠路か根から此里にはなき所もありて、鍼たても灸もかなわぬ時、いづれの家にても常に人の氣のつかぬ妙藥になる物あり、たとへ定業

にて是非死ぬる病人で御座らうが、一錢もいらずに朝鮮人參よりも即効ありて、三日はかならず生延る藥有、是をしる傳授をしるし、さて五番には、月待日待に若き衆のお慰、松田竹田がからくり、鹽屋が手づまもふるく、睡たざましの淨るりもめづらしからず、博奕業も親仁が嫌ひ、連歌もしめりかへりておかしからず、何ぞかはりたる事にて、お臺所までどつと笑はせ賑やかにするお慰み事といふとき、只一人屏風の影にかくれ居て、京の祇園會の祭禮、笠鉾月鉾長刀鉾舟鉾殘らず、山は翠破山賊木山かまきり山、白樂天蘆刈山を初め、四條河原の涼み床、川の流れ燈の數、茶汲女見物の群集座頭まじり、其外賣物の次第まで壁か障子襖にこと〳〵く影の寫る所、あり〳〵とみゆるからくりのしかけ、其次に江戸よし原京の島原大坂の新町、大夫天神鹿戀端まで道中の踏おしすがた、やりてかぶろまであり〳〵と、影人形に見ゆる手妻、厚紙五枚と油土器に一雫入る、澤山なる物一色の傳授にて、かやうのおびたゞしきおなぐさめの早速なるやうにかきしるして、一卷と仕りたる中には、第一には劔術軍法の秘傳、千人萬人にても勝利を得る大事、第二は戀しき人にあふ奇妙の呼出し、第三は水なき所に道具いらずに据風呂にても沸す事、第四には定業の頓病頓死を三日まで蘇生さする秘密、第五番には祇園祭、よし原島原新町の色女を目前に見ゆる秘傳、金銀を富士山とたけくらべにお積なされても、天竺唐土日本に存じたる者なし、某一人さる子細ありて、筑波山の仙人より相傳の大事、わづか鳥目十八錢、今日ばかり觀音の御緣日だによつて、下直に授け申す、二三日過ると、東寺の弘法大師の御緣日に罷出れば廿一錢、天神參りには廿五錢、大日の御緣日には廿八錢、三ヶ月からは賣にはまかり出ず、男たる者はたしなまいでかなわぬ相傳、さあめして御ざらぬかと、いふ所へ炭毬の江戸奴きたりて、藤橋可傳は某が伯父にて十一年前に相果たり、但名乘る子細あらば劔術にてこゝろ見るべし、さなきに於ては伯父の假名、盜人遁さぬと反をうてば、可傳ちつとも噪がず、同名世にある事めづらしからず、よしそれは兎もあれ、身共を殺しめさるゝと、御自分も命はなき兩成敗の劔術の勝負仕る思案なれば、かやうの根も葉もない噓はつき申さず、同名が氣に入ずば止申べし、伯父

樣のお名ゆへにけふも大分の責錢、肴はなくとも一盃進すべいとすゝむれば、このやうなことならば死んだ伯父がふたゝび來て何をねだるべい、隨分責めされい、近日またまいらふ、おさらば、

二、一心の至極見通しの妖の皮

怖しき物近隣の火事、相傳なき鍼といへども、萬づに師範なくてはおぼつかなき世なり、中頃五條夕貌の沺地近き家に扇屋惟光といふ者あり、唯一人の男子の二十になれるを、愛憐のあまりに拙なき業をいとなませず、優長に撫育、音曲詩連歌に光陰を送りけるに、その器量人に超て發明なれば、若き男の鏡にもうらやまれけり、ある年の秋、北山の茸狩をおもひたちぬるにも、生得閑寂を好みければ、噪がしく友達をも誘引せず、小坊主に燒飯小竹筒を串つけて、空靜なる日がらを見たてゝあゆみ出けるに、日すでにくれて、月東山にかゝれる折まで歸らざれば、父母おぼつかなく相まつ所に、小坊主一人啼々歸り來りて、惣七樣は此松茸を私にもたせ、さきへまいれ、頓て歸るべしとて、道もなき九十折を、猶山ふかくわけ入給ふとみし內に、影も形も入相のかね雲に隔たり、狼の聲しきりなるに、たづねまいるべき方もしらず歸りぬと、さめ〴〵と啼居たるに、手代下男手毎に續松挑灯用意して小坊主を案內にして、北山の邊を夜あけるまで尋ねめぐりけるに、鷹が峯に續たるわしのみねの麓紙屋川の水に腰より下を浸し、死せるやうにて臥たりしを引おこしつるに、いまだ息絶ず、取亂しぬるありさまながらおの〳〵よろこび、辻駕籠にかき乘せて歸るに、父母の悅喜かぎりなかりしかども、聾のごとく啞のごとく二日あまり起もあがらず鼾して、漸夢をさませるごとくにて、袖をふるへば馬糞こぼれ、懷より白髑ころび出たり、さては野狐の誘ひしにたがはずありけんと、つや〳〵貌を打まもり居たるに、やがて口ばしり出し、あらぬたわごとかしがましく、隣家の遠慮他町の外聞はゞかりあれば、祈念神呪を僧山伏にたのみ、札守をいたゞかせ、千卷陀羅尼を轉讀させなどするに、さらに驗なかりけるに、親戚眉を顰め、家內商賣をやめて、あらゆる神佛を祈れども、いやまさりて狂ひ出ぬるにせんかたなく、手をつかねてまどひしに、ある人申すやう、狐には鳴弦こそ退散の法なれといふにまかせ、さて鳴弦の師を尋ぬ

るに、都にも稀なりけるに、六條醒が井の裏店に菅田伴六といふ浪人常々弓法に妙手を得たりとみづから人に聽を耽らかしぬるにおもひつきて、急ぎたづね行て鳴弦をたのみぬ、伴六元來尾張の國はづれの者にて、はか〴〵しき武士にはあらざれども、射藝さかりなる城下に立入、物がたりなど端々聞はつりたる事、おぼつかなくも平生鍛錬せしやうに申し居りたれば、今更知ずといはゞ日頃の雜談何事も虚言に成べしと、いかにも心安く請あい、早速今よび參りて墓目をいたさば、たとへ三十度華居を越る狐なりとも、たち所に退去事なりとて約諾して使を歸し、暮るをまちて弓矢を手挾み、かの扇屋に行て、まづ病人に對し、野狐の魂は皮肉の間を潜りまはるゝと聞て、手を取て捻りかゝれば、病人伴六が左右の腕首をしかととらへ、汝しるを知とせよ、しらざる鳴弦を仕らんとするは、侍にはあらず傷諂ふ佞人なり、およそ鳴弦は出陣歸陣徙移平産惡鬼魔醯の恐るゝ秘密の兵術にして、本覺法身の無生本有を本尊とし、邪正一如を演説したまふ垂迹の傭鎭を讓し給ふ八幡大菩薩を勸請申し、墓目には四天の神咒を書寫し、五體をけつさいしてしやう〴〵に沐浴し、口には眞言を唱、天地の有情非情日月星辰、六欲の魔王凡聖一體の觀念をこらし、鏡智冥合の道理によりて、みちの住在を責る子細あつて、人間の體中を離別する事はあれども、汝汚れたる拳にかたじけなくも三光宿星のやどり給ふ御弓を握り天清淨をあやまれり、抑も弓は黄帝より始り堯舜の御代に盛なり、我朝には神代より傳り、天照太神弓弭を取給ふ事神書に顯然たり、日本武尊東夷征伐に一張弓を取給ふ、されば神代に四弓あり、神功皇后三韓をしづめ給ふも、弓をもつて先とす、所謂曼陀羅弓とは是一心圓相の制器なり、さる程に源三位賴政怪鳥を射る時にあたつて、其聲を聞といへども其形を見ず、こゝにおゐて一心の明眼を開いて夜陰雲中の物を射るに、あたらずといふことなし、本筈末筈は金胎兩部八張弓は八相成道を表す墓目は、十二律にあらざるをもつて名づくるの秘密、かた〴〵その道をしらずして鳴弦仕らんとは、虚妄盜賊のやからなりと、唾を伴六が額に吐かけ、一しめしめたる手、半時ばかり痺て、身體すくみて正氣付ざるを、亭主を始め、あり合せたる一座氣つけなど用ひて、駕籠にのせ

て六條醒が井の宿に逗りけるに、傳聞者舌を卷、誰か加持せんといふ者なく、空海か文覺か横川の聖戀しやなど、噂のみしておそれけるが、伴六は二三日惱みて正氣づき、つく〴〵人口をおもふに、世の中にかゝる耻辱をとりさたせられては、一生不實者と指さゝれんも無念なり、所詮百とせ生延るにもあらず、かの孤つきを切殺し自害すべしとおもひ極め、何ごゝろなき體にて病家に行、扉を明る音に、かの者大きにおどろき、只今殺害に來りし人ありと、泪をながして狂ひ出、築山にはしりあがり、塀をつたふてにぐると見えしが、踏はづせるやうにてどうと落、しばし死入たる氣色にてもとの惣七に正氣づき、野狐は長く退離れけり、これ一心の眞僞をさとりて、鳴弦に及ばず本復したりける、信の通ずる事此のごとく、武士しるて戟槊を取ざれ共、心劒の業ある理をしらずばあるべからず、

三、眼にかゞ闇の夜の蟻

忍びの者といふは、敵の城郭に忍びて隱謀を聞役なり、此術に習ひあることにて、指南する者は甲賀にあり、もろこしにもありと見えて、孫子に五間を出せり、たとへば闇の夜に不圖出るに、物の色合あきらかならずといへども、久しく心をしづめてまなこを開けば、暗がりにても其形さだかにみゆる物なり、古語にいふ闇に白を生ずとあるも此謂なり、かの忍びの者の功者は闇の夜に蟻の行をもみるは平生の稽古による故なり、されども尋常の人は闇き夜は挑灯を用意せずば不覺悟なるべきか、一說に燈も續松も相手にたゝき落されては、俄に明を失ふによりて、利あらずといふ者あれども、端武者一旦の料簡にて理にあたらず、されば夜討は格別の事なり、一切の器に限らず、時により、所により、謀によりて、一偏ならず變に應じて千變萬化の手段ある事、晝夜にかぎるべからざる事なり、中頃ある城下に大牧源藏とて小祿の武士あり、町かたはづれに妾を扶持して、深く本妻につゝみて、夜な〳〵かよひけるが、右は藪垣長く續きて左は石泉寺と、倉坂の何某が屋敷にて、道幅五尺ばかりにて、殊更闇き夜、目ざすもしらず、此小路をひぢまがる時、兩方行あたる者あり、たがひにおもひもかけず、おどろき飛退きて、しばしうかゞひぬれども、皐月の頃といひ、竹原の木の下闇も茂りあひ定かな

らざるにより、源藏身をしづめて雲のたへまの星のひかりにすかして見れば、何か三尺ばかりの物ひらりと振あげる太刀風、音ありければ、源六ぬきうちに切つけゝれば、足音しどろに聞ゆるを、心あてにひた切に切たてぬれば、打倒れたる音に、倉坂が屋敷より挑灯を點しつれ、足輕數十人出あへば、石泉寺の納所坊主竹の子盗人とこゝろ得て、同宿下男火を出して兩方より出あひ、狼藉者と呼はりける時、源藏詞をかけ、胡亂なる者にはあらず、當座喧嘩にて人を討し者なり、切腹するよりほか別儀なく、聊爾いたさるゝなといふに、挑灯をさしよせてみれば、源藏方へも日來出入仕る座頭槙都にてぞありける、最前杖ふりあげたるを刀を振たると思ひ、はやまつて切殺したり、某儀は倉坂殿も御存知の大牧源藏と申者なり、麁相にて盲目をあやまつて討し面目なさ、屋敷門前を汚したる申わけ、直にことわり申入度よしいへば、今宵は黒崎幾之進殿へ夜咄に罷出たると申す、しからば幸黒崎は拙者組頭なれば、是非これをことわる次でに申わけいたし、猶指圖を請申べしとて、幾之進方へ行て麁忽の次第を語りければ、倉坂は御念入られたるとの挨拶にて相濟ける、さて黒崎申けるは、直の奉公人に慮外すれば、又内の者は討捨同前の儀も品によるべき由、先大守の定置給ひし掟なり、しかれ共いまだ座頭目くらを討し例の料簡なければ、一往大守にうかゞひ、御指圖あるまでは遠慮しかるべしとて、源藏は自分の宿所に歸りけるが、十日ばかり過て、組頭より源藏を呼よせ、大守の仰出されし趣を申渡しぬるは、まづもつて小知大知ともに其分限に應じて人馬をかゝゆること全く一分の爲ならず、主よりの祿に應ずるはこれ武役のまさに嗜むべき所也、しかれば軍旅のとき祿の高をつもりて騎馬を配り、升形において人數をはかる儀は、武士たる者の覺悟古今に相違なき事、誰もなしたる所なり、しかるに祿不相應にして殊更夜分に、家來挑灯持の一人も召連ざる事知行盗人なり、その上討果す程の首尾に詞をかけず、眼あきらかなる女におとりたる盲目を麁忽に殺害仕る事、うろたへ者の仕業なり、大事の御用にたつべき武士の所行にあらず、しかるうへは俸祿をめしあげられ、縛首仰付らるべきを所存ありて、大小を請取て阿房拂に仕るべきよし、御尤なる沙汰と申ける

とかや、

四、吟味すべき差料の劔

道成寺といふ謡を聞に、女の蛇になりて山伏を追かけたりとあり、惣じて謡にかぎらず、物語草子の類にはきよせつおほく、時代の違ふ事すくなからず、しかれ共此うたひに聞えたる通はいつわりにはあらず、それがしにはいつの頃か熊野参詣せし次でよく道成寺にもまふで、かの鐘樓の跡なりとて、今はいさゝかなる林となり、其後釣鐘再興の事いくたびかありしか共、成就せざりしよし寺僧のかたりけるが、それ本宮にをもむく數日、かの女の在所の沙汰なかりしかば、里人に尋ね聞にむかしの海道と違ふゆへに、諸人不審ある事なり、後白河の院御幸の頃までは、田邊より岩田川を過て、眞砂の里にかゝる故に、蔵ごもりの山伏此眞砂の庄司がもとに宿りてたはふれしことなり、されぱかの山伏おひかけ行く時、此さとの溝川にて、みづからの髮も今は何にかはせんとてかなぐり捨し所とて、その髮草とへんじ、今に髮草とて年々茂りける、此眞砂の里より道成寺まで十五里あまりの道法なり、惣じて熊野に八庄司とて軍書に出たる者あり、義經の御内の鈴木の庄司亀井の庄司これ等なりといへども、今は龜井は家絶て、鈴木の庄司が子孫は藤代峠若一王寺の宮の側に、むかしの屋敷あらためす、今に血脉相續して在住せり、其外の庄司には、湯淺、玉置、木守、眞砂、田邊の庄司とて、家の絶たるもすくなからず、かの眞砂の庄司が子孫も、眞砂の里に何代か相續き、地侍と呼で、近き世迄眞砂新之丞とて、大守より小扶持給はりて住しが、去る年、此新之丞亂氣したりけん、妻女を始め家内の男女拾餘人、平生さしたる貳尺貳寸餘の脇差にて、一人も殘らず切殺し、其身も自害して相果たり、外にも眞砂氏ありと雖も本家は長く絶たりけり、此時の脇差を始め家財おほく寺に納りぬる所に、ある侍此脇差を望みて、布施物を出し貰ひける時、住持の僧かたり申されしは、此打物は眞砂の家の重代にもあらず、近年求めたるとて新之丞秘藏せしに、かゝるあやまちある事五十年この方に十三度、寺にあがる事六度なりと、淵底よく存じたる者の物がたり、此頃うけ給はりたる儀なれば、不苦の打物を施物にかへて進上申事、仁もなく慈非の佛弟子のいたすべきやうなしとて、そのまゝ寺

の什物となれるを、盆前の棚經に下男にさゝせて供を申つけたりしに、鞘斑々もごきの卵鍔は眞鍮の角、柄は立皺の御物頭、風流の拵なりけるを、此男面白くおもひつき、二三日過れば町の踊にこれをさして、奴出立仕べしとて、養父入申たてにて此一腰をかり、釣髭かけて六法裝束、其夜は七月十八日の夜半過、見物の内より誰をか讃たるを何んとか聞損じけん、寺には住めどもこゝろは武士にまさるべく、堪忍仕らぬと申出すが浮世の暇乞、相手は撰まぬといふより、そりや拔たは切たはと、人崩れ踊崩れて、むかふ者逃る者切まわりける程に、十七人に手負せて終に二人息絶たる上は、籠獄の身となり斬罪にあひけるとかや、評に曰く、村政の太刀を世に嫌ふことも、かゝる不吉のおほかりし故とかたり傳へたり、五性に應じて燒刄の直亂れの相剋もあれば、吟味を遂て□□□□にはすべき□□、

武道張合大鑑卷之二終

武道張合大鑑卷之三

一、因果歷然の物語

きのふけふのむかし西國の城下に、物頭三十人の内弓大將杉倉彌左衞門、五十歲まで男子なく、只一人の娘あるに、同家中玉井定左衞門二男を、養子の願ひ相かなひ、娘と娶せ、杉倉彌平太と改め、代役つとめさせ、一兩年過る所に、彌平太が妻の召つかひの腰もと、蔦と申す女、ことし十七、次第に美形の花香まじりのさかり待がほなるに、彌平太血氣最中のうつり氣、いつとなく手に入本妻の目を忍びけるを、色香あらはれやすく、ある時蔦を引つけ、始より存じたる事なれ共、淺香山のあさきは男ごゝろにて、かりそめのたはふれあり共、その方ふかくうつる道ならねばと、堪忍いたし置しに、此頃は我手前もはゞからざる働き、目にあまりぬれば急度申付るなり、今より後はかやうに情ぶりあり共、彌平太殿の用をうけ給はるにおいては、我手にかけてさし殺すぞと、守り刀をひらめかして折檻に及びける顏色、嫉妬の色内にこもり、

怖しさ骨に染ければ、蔦も忘れがたく、四五日も手まはりへ近づかず、晝夜遠慮を仕りけるに、ある夜更て、表部屋より蔦を召さるゝと臺所より取次ぬるに、かしこまりて參らねば事あらたまり、參ればいかなるうきめにあはんと思案なかばに、頻にお□□なる、よしや一心さへかたう分別きはめたるうへはと、表部屋に行を、彌平太はその沙汰ありとはしらず、いつものたはぶれ心、此頃遠ざかりぬる事よと手を取んとするを、ふりはなし迯んとせしを手ごめにあふ時、今さら申上るも氣の毒ながら、どなたも御主樣、されども私は御新造樣の仰にまかせねばならぬ身、このほどの御妬み胴身にしみわたり御尤と存ずれば、今より御意にまかする事は御免かうぶりたきといふ、いはせぬ仕かた、蔦女こゝろにおもひつめけん、聞わけもなき御心底うらめしやと振はなし、彌平太が大わきざしの鞘をはづし、こゝろもとをつき通しけるに、思ひよらざる油斷口おしやと、つかれながら蔦が髮を手にまとひ、ひざに敷てわき指を奪取らんとせしか共、深手なればうめきながら反かへりける音に、臺所おどろき奥へ申次ぬるに、養父彌左衛門を始め、おの／＼かけつけ、周章さはぐ中に彌平太は痛手なれば、一言もなく息絶たり、蔦を先縛あげて子細を問ば、つゝむに及ばず右のやうすを申す、彌左衛門思案して、實父定右衛門方へ使を立、急を告たる故に早速きたりけるに、小聲になつてかたるを定右衛門、さてさて面目これなきは、たとへ家來、男にても甲斐なきに、しかも女に殺されるほどの不覺悟者、御心底はづかしき儀なり、一たび進上仕りたる者なれば、いか樣とも御こゝろ次第にはからひ給へ、御念入られ迷惑仕るとて、立歸らんとするを彌左衛門今しばしと押とゞめ、其一通りうけ給り届けし上御相談申すは、家來に討れたるからは、最早杉倉の家はたとへ次男ありとても跡目立がたく、長く二字斷絶に及ぶ段、是非なき仕合、先祖に對し本意失ふのみならず、恥辱の名を流す所、餘りに無念に存ずれば、彌平太は頓死の申立にて、公儀を相濟まし申さば、當分の恥なく、事により家も相續申べく存ずるはいかに、と語り出せば、定右衛門同心して、尤一旦僞りを申上るに似たりとはいへども、眞を守るは先祖子孫の惡名を取じとての義を思ふゆへなり、然れば此樣子をあり樣に披

露いたさば、杉倉の家は申に及ばず、實父たる拙者も顔をさし出す所なし、これ僞にはあらず義を重くするの道なり、さて蔦めが儀は家來なれば、百ヶ日も過、いかやうとも申たて、手討に仕るに、何か子細あるべしと、談合一途に極りけるを、彌平太が妻進み出て申すは、第一劒難にかゝりたるを病死と僞る事、第二には尤家來の女何時にてもなるべき手討とて、眼前に夫のかたきを置ながら、片時も生て見る事堪忍いたしがたし、第三にわたくし男に生れなば、彌平太ごの養子に及ばざる所を、口おしくも女には生れたれ共、此杉倉の家相續をいたすか致すまじきは、我等家督を請取からは、分別次第に仕るに、誰か異儀申人あらんや、しかる上は蔦めを一日も生置事なりがたく存すれば、いづれもいかやうの御相談ありとても、わたくし上へ申上る覺悟に極めしうへは、かへつて御爲しかるべからずと詞をはなつて申出すに、両人無興にて、これは義はあれ共法を守らぬ理屈ながら、後に一家縁類の僞りを白状すべき心底、今は力なしとて、早速訴へければ先規の如く家來に討れたるもの、家たちがたく、ながく杉倉の家斷絶し、蔦は主殺しの法にまかせ、國守の御仕置に仰付らるべしとて、召上られ、此女の両親兄弟以上五人籠舎仕りけるが、蔦が母兄弟は愁の色見へつるに、父はさらになげく氣色なく、ある時警固の者に語りけるは、今までは因果を撥無して、神佛を信せず、放逸無慚の罪業を作り、たゞ今おもひしられぬ、最期の後かならずかたり傳へて給はるべし、懺悔の徳によりて、もろ〳〵罪障は露霜のごとく消ゆると説せ給ふ事は、耳の底にとどまりければ、耻しながら語りさふらふなり、我二十年已前までは渡り奉公仕る身なりしが、いつまでか刀も腰におもし鈒の刄を、わたりやすき渡世を心にかけて、當所の町はづれに、小道具見世を出し、二三年暮す月はやくたち、致しつけぬ商ひに勝利を失ひ、子共は出來つ、すこしのもと手はその日〳〵の雑用に消て、妻子かくては飢んと工夫に落がたく、かたぶく月のもとに獨行末の心ぼそきを思ふ折ふし、いづく共しらず、旅の僧一人きたりて、急に京海道におもむく者なれ共、夜中といひ初たびと申し、道の方角不案内なり、何とぞ夜の明がたまで、宮古がたへの道筋まで送り給はらば、我路金百両あまり、五拾両進上す

べしといふ、此節今から夜あけまで一時には過じ、しかるにさのみほねも折ず、三貫目のもふけ、天のあたへと上方海道さがり松といふ所まで貳里あまり送りければ、夜はほの〴〵とあけわたり、これより紛道なく糸を引たるごとくの路筋なりと教ゆるに、約束違はず百兩とり出し半分、押わけて五十兩いたゞき、さらば〳〵とわかれけるが、一二町過て跡をかへりみれば、道行人も途絶て悪心おこり、坊主殺せば、百兩皆手に入ぞと追かけて、いよ〳〵案内を指南する貌にて立より、こゝろもとをさし通し、手ばしこく百兩取て歸りしが、今日まで某が仕業と知人なし、さて元來出家の金なるゆへにや、殺生といひかた〴〵、致す程の事にて損銀して、その金わづか四年のうちに泡の消るが如く、本の木阿彌となりける、その歳此嶋と申す女懐胎出生して當年十七才、ひとへにかの坊主一念やどりて子となり、今かたきを取にてこそさふらへと語りけるが、仕置にあひし月日、かの坊主を殺せし月も日もたがはざるこそ不思議なれ、

二、汐見の松龍燈の光

浮田の濱の汐見の松には、毎年七月十日の夜、龍燈白然とあきらかに、むかしよりかはらず、諸人何となくありがたきためしに拜みける、此所入海ちかく、城下より一里ばかり、河舟にて殘る暑を凌ぐたよりよしとて、貴賤群集して、樓舟に笛皷三味線をしらべ、瞽女座頭まじりに、夜分なれば日の目見ぬ奥樣娘御まで遠慮なくなぐさみの種、浪のうね〳〵も珍らしく、更行月も名殘りおしかりき、かゝる舟多き中に當家中の巻澤九太夫妻の腰もと、三保といふ女辨當をかたづけ、舷にもたれ盃をあらひける手を、水中よりしかととらへて引入んとするに、胸とゞろきしばしはためらいぬれども、終に引落されて颯と水に入さまに、行衛なき坊主が無作法仕るといふ聲も、はや溺れて形は見えず、舟の中これは〳〵と立さわぎけれ共、影も水の月の手にもとられずなりけるに、舟を汀によせ、汐見の里人に尋ねより、舟よりあやまりて落て見へぬ女あり、かづきの海士をいれて捜し求むべき相談するに、濱に年久しく住める者まかり出、たとへ人をいくたり入給ふとも、死骸も御座あるまじ、此前も二三人も見へぬ事あり、大かた同じ生類の業たるべしといふに、扨は子細あるにやと尋ねければ、此

海にむかしより歳久しき鮹の入道ありて、五年三年には必ず人を取るに、いかに水底を穿鑿いたせども、ふたゝび骸出る例を聞ずと申すに、思ひあたりしは此女も行衛なき坊主がと申せしに、いよ〳〵その鮹の業にまがひなしとて、上下餘念なき慰み、泡と消てたちまち哀傷と變じて歸りけること、是非なき世の中の、親の心を闇にはなしけり、しかるに此女のかねて思ひ合ぬる密通せし、岡友八とて同家中に勤めて、行末の長き契りをたのしみに月日を送りけるが、今は誰爲に宮づかへもおかしからず、聞つたへたる女がかたき鮹の入道を何とぞして一太刀怨み、狙板にての料理を位牌に手向ばやと、暇を乞捨にさまよい出、かの汐見の入海に、晝夜徘徊してこゝろがけ、ある時は小船に乘りて、汐にまかせて流れ次第に、舷より態と手を伸て水に浸し、刀脇指のねた刄を合せてねらひ、十日ばかりも過ぬれども、あやしき事もなかりしに、里人の沙汰を聞に、此頃は例の入道、山畑に作りし蕎麥につきて、夜毎に番ををきて守るよし、これ究竟の事なりとて、蕎麥ある畑のあたりによもすがらたゝずみけるに、丑みつの頃、丈八尺ばかり坊主汀の方より人の歩むやうにて來るをみれば、八本の足を並べ黑き眼皿のごとく、今こそ日頃の本望遂べき時こそきたれと、刀をくつろげ、橤菊の陰に隱れて相まつ所に、かゝる敵ありとは何かはおもはん、蕎麥畑に蹲る所を飛かゝりて切つけしが、切れながら迯て海にさつと入、討もらせし事の無念とつゞいて浪にかけ込しが、折しも滿汐の頃、三間あまりの鬼鱶寄居て、友八を只一呑にしたりけるが、夢まぼろしのごとく腥き腹の中、朧月の寢覺に同じく、十方うしなひながら、もとより剛氣の者なりしにより、拔持刀を取直し散々に切穿ければ鱶死狂ひに狂ひはねて、濱庇にのたれあがりしに、切たる穴より空のひかり漏て、すこし月のあかり見へたる所を、切廣げて這出ければ、始の渚と覺しき潟なりけり、鱶はおもひよらずの殺生しつ、鮹の入道を遁せし事よと、海づらをかなたこなたと磯をつたひ岩を越てしたひけるに、こゝより二町あまりの巖に流れかゝりて、九尺あまりの鮹のあたまふたつに切破れて死してぞありける、今は本望遂たりと、里人に此ありさまをつぶさにかたりければ、神佛の變化し給ふ人ならでは、かゝる奇代の

働はあるまじきとて、鱶と鮹の檢印を地頭に乞ければ、見分のうへ友八を褒美ありけれども、女の爲にかかる殺生しつる本懐正しからず、必竟魚類の成長したる物を殺せしとて、武士のいひ立になるべき儀にもあらねば、たゞ珍しき物語とのみ聞傳へて、今に鮹塚鱶塚の二つ、汐見の里の山陰海ちかき世の古跡とは成ぬ、

三、男風流名よせ

治まる世こそ目出たけれ、むかしは五法やぶりの六法とて、隨分やわらかなる都にも、夢の七郎兵衛、蟒金平、熊野權六、平安城右衛門、火神の玉次、三條馬右衛門、堀川の芥郎、地獄の陌の鬼王、祇園の吐鐵坊、本黑寺の提婆、一貫町の永樂、尻無町の横車、六條の鵼右衛門、四十八のいろは組とて、散ぬべき東山の花ざかり、涼の川床にぬめり、水茶屋のうたがた、かへらぬ浮世をかろく、飛助の大將を定め、其後茶筌組とてあはたゞしくかけありきて、白癩白山通に月並の寄合、男伊達の會所をかりの世や、關東に目玉團平、甍原骨右衛門、山の手土堤右衛門、神田森介、南國浪右衛門、安座府土左衛門、鎌倉やつ七、天津乙女之丞、羽衣馴彌、蜘平角平、殺生關内、薬柴煙之助、牛込瀧左衛門、竹熊虎藏これを弓矢八幡組とて、引にひかぬ類的共なり、其頭難波には三浦の荒次郎、荒物や傳六、狸の十郎、泥の入助、喧嘩や棒六、こつぱいの牛三郎、どぶ池の一角、辨慶の卯兵衛、鑓鉋の木工太夫、これらを棟梁として六十三人、かくれもなきあたまづき、蝉おれに鬢切して、左さがりの衣紋つき、筋違になつて往來するに闇の夜もまがひなく、懷中鍬と名づけて尺八をさし込、吹も吹ぬも身をはなさず、すはといはゞ刀脇ざしにてもたゝき落して、踏折て捨る命は、露塵とも思はず、始めは男色を見立て兄分一人關取にさだめ、文をやるの傳をたのむといふ戀路の沙汰におよばず、直に親の許へふみ込て、これの息子を若衆にもらひにまいつた、向後身共がつらをお見しりあられよと、いやといはせぬ仕かけ、それは理不盡なるとて、すこし骨ある返答すれば、我々共申しかゝつてからは、尋常に歪事を仕らねば歸る心底にあらずと、一通りは詞をつくす所に、大勢込入て、なまぬるい穿鑿するまでもなし、その若衆めを引ずり出してつれてかへらんと、聲々に腕まくりして鳴わたりけるに、爰で親も

力身を出さば、莟める花のやうなる愛子を採殺すを見物して後、公儀沙汰にしたればとて、歸るべきにもあらずと、堪忍ならぬ所を一思案して、それほどの御思召、若き時は菓とてもあつて來た身なり、さらりと手を打て盃を出せば、御亭主は分別者なりとて機嫌を直し、肴には酢の物なくてはのめず、酒には唐がらしを振て、夜食は奈良茶に鮓と、こちから献立して、あたまから鉢でひつかけ、男は二念つがぬがよしと、其夜かぎりにふたゝび此若衆を見むきもせず、今宵は氣をかへて新町ぞめき、さすが群集の中もあけて通せども、揚屋に行ほどの器量なければ、局女郎に馴染つるこそ猛き武士、目に見えぬ鬼神をもやはらぐるはたゞ此道なれ、これは東組の張本あら物屋傳六は、越後町よし野屋の端君に逢瀬といふ骨長に睨み、雷雨さへふりて闇き夜の、つれ〴〵なる時かならずかよひぬるを、これは眞實なる諸分しり、逢瀬も待宵の局に傳六腰をかくれば、例の吸つけたばこ飲で居る所へ、西組の御大將三浦の荒次郎これも逢瀬に日頃かよひけるに、兼て預け置たる物好のきせるにて、傳六湯になるほど飲で居たるを、三浦むつと貌にて、何處の牛の骨やら穢多やら、しらざる奴の喰ひ殘しの道具なりとて、逢瀬が手より請取と、踏折て捨けるに、あら物屋もとよりおこの者なれば、東方にかくれなき降三世の傳六を知ぬかといへば、西方に大威德の三浦荒次郎といはせも果ず、あごた骨引さいて捨んと飛かゝるを、逢瀬傳六にしがみつく、遣手のしは荒次郎に取つく、禿のしげの丞かなぎつたる聲にて、あれかなしや人ごろしと呼はるに、忘八揚やの男共棒ついてかけあつまる、やれ切たは喧嘩よと廓中さはぎあはてける內に、三浦組荒物屋組追々にはせあつまり、常々氣にかゝる奴原、たがひに今宵こそ東西の分目の軍と南北に立わかれて、勝負をせよとひしめきけるを、廓の裏にては御法度なりと、新町橋へ送り出し、門をかためてふるひ居る、かくて三浦がたには阿波座の梶平、いたち堀のてんの革、傳法の三八をはじめとして二十三人、例の尺八の寢刄(ねたば)を合せ、我さきにとすゝみける、あら物屋方には泥狸を始めとして、横堀の小天狗玉造の蚰之助廿五人、米さしといふ壹尺八寸の竹のさき鑓のごとく尖らし、常に腰をはなさねば、その〳〵ぬきつれ、橋の東西よりかけ

合せ散々に突てまはりけるに、三浦方には尺八の節の碎くるまでは、たゝたゝき殺せと下知しける程に、あら物屋方はあたまをわられ、腕を打なやされけれ共、絶入するほどの者はなし、三浦方の者共はあるひは眼を突れ、脇腹をつらぬかれ、朱になりて少しひるむ所を、橋のうへより入人までつき落し、痛手のうへに溺れて、貳人は息絶たり、去程に新町橋の往來とどまり南町より門うつて、南北には番舟を浮べて警固させ、早速地頭へうつたへければ、町人法外の騷動なりとて双方めしとられ、禁獄せられけりとかや、

四、所によりて替る物賣

難波にては鯛かう、鱧かうと賣ごゑを引、伊勢にては鯒こん鰈こんとはねる、京はよろづ名聞にふける所にて、鮹壹疋荷ひても、鯛鱧鱚と小みじかく、桶の輪がへを鬘結と呼に、むかしの京にてはおの字を略して毛の輪といふ、何事も宮古にまさる事なしといへども、麥粉の粕を、大坂にて紅葉といふこそやさしけれ、わたらば錦とよみし龍田川の見たてなるべしとて、業平も舌を卷れたり、おそろしき猪の鹿も刈藻かく臥猪の床といへば、やんごとなき人の花鳥につけても、引出されける事になりぬ、こよひは名月の夜とて雲の上人は詩歌管絃にあけぼのを惜み給ひ、百官地下の家々醉賞、三味線長歌の手を盡しぬ、されば平生一寸の光陰のいとおしむ西陣の織物屋、二條通のきせる屋、六角通の小細工人、堀河のさし物屋も、三五夜中の新月の夕は、芋壹升價千金といへども、裏店住の鰥寡まで酒肴をもふけて、今宵一輪二厘の目せゝらず、さすが都人なりける、かゝる所に例の大坂の魚賣をよびいれて、思ひきつて付捨し直段、それほど格別にもあらざりけれ共、けふの尾鰭には羽根がはへて返答もせず、振かたげ、門口を出さまに、おぬしなどの口に入鯛にはあらずと、にくき詞の末、これは堪忍ならずと呼歸し、めつきりと付あげゝれば、思ひの外にてさらりと負る筈、三枚におろさせ、あらをば吸物に仕るべし、先片身はさし身にして喰ふて見すべしとて、一盃引かけ魚屋をとらへ、最前身共が口には入鯛にあらずと雜言申せしが、眼前にて喰てみせたるは、たしかなる儀なり、何とこれでも口に入ぬかと皺面して氣色すれば、錢はそなたの物、魚は此方のあきなひ、何時にても買てさへ喰へば、口には入物な

り、初物に食傷めさるなと惡口こらゑかねて、胸ぐらを取てこゐりとやつてみれ共、いかな事大坂者には骨がありと、亭主を苦もなう打倒せば、妻子やれ爺を殺すはと啼わめくに、近所驚きてかけつけ、六七人して漸魚屋を押返す騒動に、肴籠崩れ落て散亂すれば、町内他町の犬寄たかりて、めづらしき料理を賞翫のあまりを、目ばやき鳶からすに思ひ／＼にひつかけられ、十三里荷ひ來て價とらずに是無念と、宿老につけ屆けすれば、犬に主なし鳶には羽根がはへてあれば、何處へとんだやらしらずといふ、まことに九思一言、商人は口を過す事なかれ、

五、恩を怨で報ずるとは是

生を苦しましめて目を悅ぶ事は、君子のせざる所なりといへども、鹿狩に備を立弓を放つ勢ひ、歩行立の達者試し、靜謐の代にも武を忘れざるの儀則なりとかや、むかしは禁裡より狩の使ありて、鷹狩の逍遥ありしも、巡狩の政にて、民の憂農耕の善惡をこゝろみ給ふ御惠とこそ傳語る人あり、中頃北國の押領使兎狩に出て、領地の停止を住家とせし貉狐の類、逸物の犬を入れて追出させ、箭さきを爭ひ、あるひは番鑓の手づまにかけて、罪もむくひも忘れ果ての慰みなるべし、こゝに山の尾崎一むら茂りたる森影、山の神の影向の所なりとて、常は近き里人さしのぞく事も恐れし楠の白木、自然と空の穴に狐の子を産捨てありしを、けふの押領使の中小姓筧半藏これを見つけて、いまだ翔走もかなはざる程の生類不便に思ひ、犬にみせざる樣に椎柴熊笹など折かけ、形を隱してとらすべしと構ける所へ、下村源八といふ傍輩きたりて、其獸は某最前より見つけ置し物なれば、貴殿の御世話には及ばず、拙者料理いたして藥喰の望と、すこし堰たる物ごしに、半藏もとより慈悲柔和の男ながら氣を持て、御自然の矢さきか鑓疵にても、證據あるか、左もなくては我等が生取し生類なりと答けるに、源八さては某證據なきうへは虛言を申すと思はるゝか、噓と盜は同前の卑怯、近頃舵忍なる一言堪忍致しがたしといふに、半藏も身がまへして、拙者も人の取得し物を、理不盡に奪ひ取といはれしは盜賊の名に同じければ、身共が堪忍仕らぬと、既に刀に反を打てたがひに歩み寄所へ、組頭大科惣左衞門此躰を見て急にかけより、子細を聞屆け、扨々若き迚もあまりな

る詞だゝかひなり、よしなき事にて一命を果すは奉公の根本たる忠義忘れられしに似たり、主人機嫌よき供先といひ、殊に昔より異論なきにはあらぬ猪か狼かをおつかけて、たがひに手とりにして前後をあらそふか、虎大象をしたがへて勇力を自慢する例はあれ共、何ぞやかけはしりもならぬ狐の赤子を我人の論、さりとては若輩に存ずる、此論我等にもらひ申すとて、源八を誘引て双方卑氣つかぬ様に立わかれけるが、半藏猶此狐の子をいたわり、馬屋の我左衞門といふ者をひそかに近づけ、此獸を人しらぬ様に放したすけてくれよと念頃に賴み、押領使の目通へ歸りける、我左衞門こころよく賴まれ、袖に入て屋敷に歸り、傍輩にの毛右衞門挾筋持の極助に、他言無用のかためをなし、まことや狐を喰へば化されぬまじないなり、半藏殿よりたのまれたれ共、ひそかに料理して一盃飮べいといふに、これよき肴とかの子狐を捻殺し、散々に切込で、骨も皮も殘さず喰ひけり、不思議やその夜の曉より半藏大熱反側して譫言正念なくなりける、これ醫療にかなはずとて、山伏驗者を賴んで加持させければ、すこししづかになりて我子歸せとばかり言ぬ、是はいかなる故ぞと評判するに、我左衞門が料理して狐の子を喰ふ事、隱れなき取沙汰あれば、さてはかの親狐、病人にやどりたりと推量して、半藏はまさしう汝が子をたすけたり、殺せし者は外にあるべきに、不便をくはへし半藏に恨みあるは、禪機を悟る獸と聞及びし野狐の器量に似合はずと責ければ、妖氣詞を垂て、されば煮て喰ふ程の剛氣なる者共には、中々取つき難く、やどりやすき躰にやどり、恨みやすき人を恨みてなり共、怨をなすなりと正路に白狀申せし、五十日ばかり惱まして、狐は法力によりて立去りけれ共、半藏血氣おどろへて勞瘵の性となりて、藥力にかなはず、二三ヶ月過て相果たり、まことに畜生は愚痴の依身なるにより正理に暗し、恨むべき者には恐れて、かへつて勞はりし半藏に怨をなせしは、邪知のいたす所なり、これを弱みの靈といひて、畜類はかならず心づよき者には怨をなす事あたはず、男たる者は和する時は和し勇む時は勇むを道とす、されば佛法の慈悲門においても、神靈擁護の憐にも罸をかうむる事あるも、軍書に賞罸たゞしからざれば忠臣倦とあ

るゝ同前也、これ畜類に殺生の氣をゆるめて、弱みを見すかされしによりて正氣を奪はれし故也、男たるべき者は翔引進退の甲乙思慮すべき事なり、

武道張合大鑑卷之三終

武道張合大鑑卷之四

一、信州栢野老死の事

信濃國松倉に栢野伴左衞門といふ侍あり、同國桔梗が原の合戰に、軍功人に超たりといへども、出て官につかえんともせず、先知の祿に足事をしりて、今年九十五才まで煎藥を飮ず灸治をしらず、むかし作りは萬づにかたく、頭巾足袋身につけず、梅干を破り、搔餠を膽く、齒一枚も損ねず、しかれ共波を凌ぐ仙人、雲にかくるゝ術士も、生滅のことはり遁れがたく、散とは見えぬ菊萎みし末の秋、二日三日痰飮の病によつて、臨終正念にして浮世を去、常に參禪の居士にいたる曹洞宗龍領寺に葬り、七七日過つるころ、此伴左衞門家來馬屋の者に、熊藏とて年久しく奉公せしもの、ある時つくづく思ふやう、傳へ聞に旦那死去の時、骸を壺に入、袴肩衣を着せ、重代の國光國次の刀脇指を帶せ、龍領寺の土中に埋れし由、これあたら道具を永代地の底の土にする事、死して何の役にたゝぬ事なり、我不屑なりといへども、武家の食を喰なが

ら、覺ある腰の物をも持ず、自然立身などせまじきにもあらねば、たしかなる兩釼なくては侍の甲斐なし、迚も土に朽腐るべき旦那の大小を、ひそかに堀出しさし料にせばやとおもひつき、ある夜の闇、雨風はげしき時をまちけるに、霜月下旬の時雨しきりに、目ざすもしらぬ夜半の頃、しのびて龍額寺の藪を潜り、鍬かねて用意し、腕に覺へあれば、石塔を取のけ、汗水になつて鑿穿ちけり、墓原といひ夜分といひ、人のかよひ絕て、心しづかにかの壺にほりあたり、搦みたる繩細引うれしく切ほどき、壺の蓋を取て手をさしいれ、こゝろざす刀脇ざしを探りける手を、内よりしかとさらえ、何ものなれば理不盡に墓を穿ちて壺の口をきり、剩手をさしおろして狼藉なるふるまいを仕るはと制り給ふ詞、大旦那の聲にまがふ所なく、熊藏肝魂もうせ果、しばらく正氣もなかりしが、かしこまりて申樣、長々お家に相勤め、御恩あつくかうぶりながら、御病中にも外樣にまかりあり、御樣躰うかゞひ申も恐れあれば、おもふに甲斐なく、御臨終の節御姿を拜み申たきねがひもかなはず、此程中陰の間、いたづらに晝夜落淚にかうべなやましく、責て御死骸

なり共拜み奉らんと、こよひ忍びやかに伺候仕り候處に、早速御詞にかゝり候段珍重恐悅、此世の大望相かなひ冥加至極に存じ奉ると、淚を流してかき詢きければ、壺の中より伴左衛門立あがり、奇特なる所存祝着せしめたり、此頃くらがりに閉こもり殊の外氣欝したれば、幸汝か來るこそうれしけれ、屋敷へ歸りて氣をはらすべし、さりながら久しく物を喰ねば臑たちがたし、おのれ背負て歸れと申されしかば、熊藏ひざまづき、うしろ向ぬるに、かろ〳〵と負て這あがり、側なる石塔におろし置、かやふに鑿穿ちたる躰、寺僧見とがめ候もいかゞと、もとのごとく埋め五輪をも居直し、さて又背負て屋敷に歸り、ひそかに家久しき者に申次て、奥へしのびやかに入れければ、子息後室夢のさめたる樣にて、うれし淚と興さめ貌と、さらにおもひわくかたなかりけるに、伴左衛門上座におしなをり、死したる者二たび來るためし、むかしよりなし、たま〳〵ははかなき夢に見え、あるひはあやしき姿ちらと見えしを、幽靈などゝて、化物のやうに人おそるゝ事也、今我そのたぐひにあらず、まづもつて一生佛道に踈く、善根の種一粒もなかりしかば、惡

趣に墮在すべかりしを、中陰のうち佛を供養し經をよみ、追善莫大の功力によりて、今宵上天の果をうけて、四州四惡趣を厭離する處へ、墓を蹴返して馬屋の熊藏死骸をたづねもとむる躰なり、その子細を推察するに、此刀脇ざしを盜みとらん爲に來るといへども、何者ぞと咎めぬるに少も倒顛せず、久しく御奉公申したるよしみに、死骸を拜みに來りしと、見す見す妄言をつくといへども、元來腰の物にこゝろざしあるは、侍の望み盡ざる故なり、そのうへ土中より咎めたるにちつともさはがず、逃うせもせずして神妙なる口上を演、猶又ほりおこしたる墓の五輪を積て、人の見あやしまざる樣うに、取つくろひし段々の首尾、うろたへたる侍の得致すまじき武士の胴骨ある奴なり、すなはち此大小をかれにとらするなり、先步行の者に引あげ、猶奉公の品によりて、目を掛て取たてめしつかふべし、右の樣子をかたらんと思ひ、暫く汝等に相ま見へたるなり、又たゞ今天上に化生すといへども、三界はいまだ離れざれば、法花經を供養し手向草とせば寂光土に正覺を取べし、といふかとおもへば、姿消てかの土中に埋みし大小ばかり殘りしに、後室子息又なき別れをおしみ、淚千行萬行の物おもひをひるがへし、香花燈明を佛前に備へ、俄に法花經讀誦を寺僧にたのみ、念頃に追福の供養を遂られ、熊藏を步行に引あげ、かの大小を遺言にまかせたり、これ形ありて後に意ある事なし、心あれば形を招くなり、花嚴經に、心は繪師のごとく種々の五陰を作ると說、まことに一念ありてかりに形をあらはし、二たび言語を聞し不思議の物語、慶長年中の事なりとかや、

二、世界は廣しうそつき士

世の諺にうたふ事、大形善惡の前表になる事おほし、その外の根なし言すくなからず、丙午に生るゝ女は夫を殺し、夫は女殺すといふ、たしかなる證文もむかしよりなしといへども、夫婦の契り丙午にかぎらず、後れさきだつ事めづらしからず、弓箭筋といふ物手のうちにあれば、かならず釼難に命を失ふといへども、其筋ありながら一代無事に終りを取もの、世におほきはいかならん、あやしき筋なき男女おほく釼難にかゝり、産前後の血に死するもすくなからず、ぬす人毛といふ物はゆればかならず盜むといへども、毛

なき石川五右衛門は盜賊の大將なり、都て物に極る事なし、易は變なり世は不定のみ、違ふ事なしとは千言獨步の名句なり、筑紫今木の城下に、むかし玉水辰之進といふ若侍あり、器量よく諸藝にくらからずといへども、參會夜咄しの度每に、物を盜む事癖と見えたりとはたがひにしれ共、別して武士は一言を謹む故に、隨分こゝろやすき朋友にも、此取沙汰口外に出る事なく、又俄に辰之進をはねかけ寄合ぬるも不審がましきとて、每度會合の節はかねて心得たる亭主は、小銀にても鳥目にて紙に封じて片陰に置ば、これを懷中して外の物に手をさす事なく、自然取物なければ、傍輩の鼻紙袋を心がけ、脇指刀の下緒を解、あるひは切羽をはずしければ、一座用心して是に及び難き時は、きせるの鴈首か吸ひ口にても引ぬきこし、懷中して歸るに、人々あまりに興さめておのづから交り絕て、自然城內の相番か武藝稽古の折ならではつきあひなかりしが、此里に橋村圓宅とて、他國より近年來りて軍法軍書の指南して渡世する浪人あり、此男もとより一代男の覺悟にて妻子なく、四五年も過なば老足たちがたかるべし、剃髮入道して終らんと兼ておもひつきしかば、金子百兩はかりたくはへ、貳三十兩にて草庵を求め、殘る六七拾兩にては七十古來稀なる命の限り蔬食の料殘し置んと、常に懷中して居たりしが、此城下へ來りし緣は、三四年以前に相果し玉水辰之進が親辰太夫を賴みに引越けるに、辰太夫丁寧なる武士といひ、すこし由緒ある浪人の事なれば、取持て家中一ばいに徘徊し、元來望みなき身なれば、もはや他國にうつる事もやめて、此國の土とならんと覺悟をしめたる折なれば、かの金子百兩を親の所緣あるを以て、不行跡の事は夢にもしらず、辰之進に預けたきよし賴みければ、成程心得たりよき借手もあらば利合をも肝煎べしとて、辰之進うけ取てたのもしく申かはすにより、誠に親太夫たるにより子までも念頃にあづかる事よとよろこび、町人ならば一禮も取かはすべきに、武士なれば左樣の念にも及ばず、四五年の月日たつにしたがひ、圓宅老躰にてあなたこなたかけまはり難く、今こそ兼て望みの通引こもり、餘命なき身の未來の糧に、心靜に念佛三昧して來迎の夕べを待べしと、町はづれに幸賣はらひの草庵あるをもとむべき約束して、さて明日金子

相渡すに極て、辰之進方へたづね、先年預け置ぬる金子返し給はれといへば、辰之進興さめたる貌にて、それは夢にても見られしにや、更にお手前より金子あづかりたる覺なしと答ければ、圓宅あきれて、慥に過つる巳之年七月十二日の暮程、しかも此屋敷にて相渡し、利まいの事迄申されし事也、急度推量申すに、若氣にてつかひ果されし故、此老ぼれにおほせて、跡なき事に仕すまさんとの御たくみと見へたり、然らばさほどのよこしまにおよばず、あり樣に申されたれば、某思案もあり、愈々推量にたがう所なかるべしといへば、辰之進膝たて直し、いかに浪人の貧苦に忍びがたければとて、跡かたもなきいひかけ、左樣の人共存せず、親辰太夫入魂にいたせとの遺言は目がねちがひといふ、圓宅一言をも答へず座を立破り、翌日國の寄合日なれば、評定場へ一通の訴狀を捧けるは、私儀八九年このかた御家中過半出入仕候て、軍法の師範を仕り候身として、僅なる金子を僞り申かけ候由返答仕候、早速討果し申べき所、實否分明ならざる時は、死後の惡名をも傳へ申べきかと用心仕り、此糺明御願ひ申上候、彼者召出されいよ〳〵私儀虛言申かけたる眞僞御穿鑿被下候はゞ忝候、奉行諸役人老中兼て辰之進か不行跡の儀は、大守の耳にも達しぬる事なれ共、此金子においては、その證文もなく、沙汰も聞及ばぬ義なり、しかるうへは重ねて子細を尋ねて呼出すべしとて、圓宅は退出したりけり、役人評義しけるは、先知減少して百五十石の身上なれば、親辰太夫死後の知行米の賣代の金銀と、諸拂雜用の出入を算用申つけ、辰之進方へ賣かけ米買主の證文とりて詮義いたさば、わづかなる身上の內、金子百兩の助力あるかなきか明白なるべしとて、辰之進が身上まかなふ家來を呼つけ、微細に勘定ありしかば、金九拾餘兩の餘慶身代の外に出たるは、不思議なりとて、かさねて辰之進を召出され、此金の出所を詮議あるに胡亂なる返答、問詰められて詞なく、圓宅が金子あづかりたる白狀まぎれなかりしかば、向後武士の見せしめにとて、しばり首に申付られ、弟伴九郞は組頭に預け置れしに、急に切腹のねがひある所に、國の守申つけられしは、兄すでに盜賊の惡名取うへは、其身つらの出し所なき故に、切腹の願尤なりといへども、例せば親辰太夫家久しき奉公人にて、先祖より度々

武邊の覺えある者の世悴なりといへども、盜みをすれば、しゐて筋目にはよらぬと見へたり、兄不行跡たるほどに弟も又不義すべきとゝこれ定め難し、しかれば親兄の名跡は此たび斷絶すといへども、其方一分に小知下さるべしとて、御諫言ありがたく申次て、奉公つゝがなく勤めたりとかや、圓宅には屋敷幷に殘りたる武具馬具を、借金の代に下され、軍の指南怠らず、他國に行事を停止せられてありがたく、さて國中に已後とても、不行義の者あらば申きたるべし、官にゆづりて官を盜み、位にゆづりて位を盜み、職に居て職を盜み、出家は佛を栖にして佛戒を破り、神職は神の正直を形にして邪をふるまふ、これ武士は直なる字義を簡板にして、曲をたくむにより國家の正義を失ふ、糺明せずば國危きに近しと、みづから筆を染て觸知しめられけりとかや、

三、好色地下の中將

隨分賢女といふ者も、その性自然と愚かにして皆僻めりとかや、いづれの書にか述たる樣に、人を謀る事男にまさるかと思へば、頓てその方便のあらはるゝ事をしらず、人我の相あつく貪欲ふかし、しかれ共もろこしの龐居士が娘、我國の巴山吹など男子にまさる器量品はかはれども、よのつねの女に非ず、されば和泉の國岡村といふ在所ながら繁華の地にて、家居みやこを恥ず領守より役人を据置て、山海の津なり、こゝに代々地侍として田畠を宛つくらせ、其身は百姓にも又仕官にもあらぬ大宮左近兵衛と云ものゝ娘、二十にはたらぬ物ごゝろつける女ありける、花のさかりも半過つるまで、かく親のもとに暮行事、たゞ夫を撰みていさめを用ひずと聞えしは、こゝろにくき方にぞ人おもひかけずといふ事なし、此里の役人の子息に、雪島妻右衞門とてうつくしき男ぶりより、みづから容づくりて、色好みをつとめやうに覺へたる折ふし、此女氏宮へまうでけるを見初て、百たびの文をかよはし、漸こよひあふべしと返り事あるに、うれしきたとへにくらぶべき海山もなく、さてつかひの女とあひ見る宿を談合するに、兎角我にまかせ給へ、夜半過るには人しづまりぬべし、それまで此里の河のほとりに、かならず待合せられさふらへとて歸りけるに、妻右衞門暮るゝ間おそしと、香燒しめ、かの媒が教へし河のほとりに、夜半の鐘聞ゆるまで待居

たる所に、俄に村雨しきりにて、篠をたばねて降ほどに、こゝより奥山河の流まさりて、常は二三間の河幅見るうちに、六七間になりければ、妻右衛門が乳のうへに水越て、すでにおし流されんとせしか共、かならず此所に相まてと約束せし一言たがへじと、ちから足をふみてたゝずみたれ共、次第に水かさまさりて浮ぬ沈みぬ流され、こゝより一丁ばかり下の橋杭にかゝりながら、溺れ死たりけり、かくとはしらで女媒をめしつれ、此ほとりにてあひあふ約束と、あなたこなた見わたすに、廿三夜の月すこしさし出るひかりに、橋に人がたちみゆるを近づきてみるに息絶たり、媒涙をはら〳〵と流し、さては所たがへず待つけ給ひて、つゐに水にも退かず、命をうしなひ給へるは、誠にふかき戀路の淵に、沈ませられしとかき訓きければ、此娘ゑせ笑ひて、かゝる水に溺れて死ぬる程のたわけに、はやく契らで仕合なる哉、いざ歸りて宿の首尾こそ大事なれと、媒をさみし諫めていざない歸りぬ、すでに我ゆへに百とせの命をあやまりぬれば、なげかでかなはぬ所を、逢ぬを嬉しといひける女、こころづよしとせんや、情なしとせんや、さればもろこしにもこれに同じき事あり、尾生といふ男ある女を戀て、橋のもとに出あふ約束せしに、此ごとく雨ふり水まさりておぼれて死せり、女おそく來りて此有樣を見て、此男かほどの愚昧としらば約束をばせまじき物をと、あざけりしとかや、およそ儒には兄嫂と席を同じうせざるほど、遠慮すべき道なれ共、もし水におぼるゝ時は、その手を取て引あげ命をすくふなり、たとへ死ぬる共、兄嫁の手を持は不義なりといひて、おぼるゝを餘所に見ば、義もなく仁もなく禮もなく知もなく信もなかるべし、これを儒において權の道といふと、孟子といふ書には見へたり、又佛道にも誠の道に引入ん爲に、無垢淸淨の觀世音女と變じて凡俗と契りをこめ、普賢菩薩は色身三昧を出て、江口の君となりて男を嬉しがらせ給ふ、これ利物の日において機轉才覺のはたらきなり、これを權といふ、儒の權と同字同意にて吳音漢音のちがいのみなり、今の妻右衛門我にあひたしと思はゞ、命をまつたうして行末越方のしな〴〵をも語りなぐさむべきに、非情の水の爲に大切なる命をあやまちて、本望をもとげざる程の不覺悟ものかな、事鼠が死んだとも思はず

とは女の武邊物がたり、

四、替るは世界の物好

屏風の縁を取て木地縁になし、根付の灰吹を、毎日切の青竹にかわり行く物好、中頃きせるの煙管貮尺七寸にして、外へ出る時は吸口火皿を引ぬき、上下に太き筒を入て杖にして行さきにての樂み、いかさま煙管のみじかきは、馬士の鼻端を焼に似たりと、長く物ずきける程に、後には三尺四尺壹間貮間につぎて、次の間の爐火を吸て煙を遠く眺め、仙管と名づけて夏の座にはちかく火入を置ざりけり、こゝに大坂屋芳休とて三十にて舍弟に家督をゆづり、樂隱居酒阿彌とあらため、知恩院門前に下屋敷をかまへ、かまびそしさて、妻子と臺所を別宅に、男世帶のごとく手づから前栽の掃除草花をうゑ、四季に花絶ず不斷釜のたぎりしづかに、內福にして宗旦流を好みしかば、柳に櫻の詠め、春は東山の遊客類人のたづねに、詩歌揚弓あまり遊ぶも草臥るゝものなり、けふの暮方のごやかに、枕引よせひとりうつら〳〵と睡りながら、かの長ぎせるを次の間まで三間半さしのばし、竈の火にて新田の香ほりよく吸つける所へ、お出入をかねて望みし料理人理介といふ男、折ふしまいりかゝりて、此火皿の煙をみて、其身麁相なるより肝をつぶし、あたりほどりに人影もなく、火は芝居にて見たる心中の魂よりちいさけれども、中にてひかり、折々けぶりくらへにもゆる風情、これもすこし下女か中居の胸の火の、我が思ひは日にちたび、あさましやあさ夕にもやす中にもうらみある、男にかよふ玉の火、心よはくしてかなはじと、理介腰をはなさぬ料理庖丁をくつろげ、急にあたまなどに焼つかば、切拂ひて手柄にせんと、ふるひ〳〵柄のくだけるほどまなこをくばつて立たりけり、しかる所へ、廿三夜の洗米持て、福僧院來かゝり、此體を見て驚顚し、理介を押へだて打物わざにてかなふまじと、珠數さら〳〵とおしもんで、東方に御ざんせ明王、南方にくだんせ、北方金銀、西方大利徳明王と自聲に大汗出して祈りければ、此火次第によはり果、長圍爐裏の鐵輪にて、くわん〳〵とうなづき、灰になつて消落ければ、兩人よみがへりたる心ちして、うれし泣にぞわなゝきける、亭主かくともしらで、日暮に釜はらひか祭文とこゝろ得ながら、鐵輪にて火皿をあけたるも、妖物がうなづきたる

と見て貳人が命を拾ふたるとは、おもひもよらず居たる所へ、兩人まかり出て、只今お臺所にてばけ物を祈しづめたりと、段々やうすをかたりければ、理介すこしせきごゝろにて、ひとつには法力二つにはわたくしさし料はかたじけなくも法皇樣の御時、鶴を料理いたしたる庖丁なれば、その威力に恐れてこそ怪我なしと申す、福僧院むつとして、拙僧まいらぬ内はふるふて居られたるは如何にと、人中で耻をかゝせる云ぶん、堪忍ならぬとかの庖丁をひねくりまはせば、主そのあらそひは證據なし、今一度出たる時の勝負と、兩人を臺所へ並べ置、主これは可笑一景なりとて、わざとくらがりにして、此たび火皿の五ふくつぎにてそろりと煙管をのばし吸つけて、こなたの座敷より火皿を動しければ、最前よりはひかり物は大きにこそなれ、これはかなはず、福僧院珠數を首にかけてにくれば、理介もまけはいたさめとて、つゞいてはしり歸りけるとかや、

武道張合大鑑卷之四終

武道張合大鑑卷之五

一、御前俄相撲

むかし伊豆野日向守、隣國の大名に矢橋遠江守正久と申人を招請申されて、種々の馳走のうへたがひに相撲好にてありしかば、雨國の名ある者共を俄に召あつめ、土俵四本柱をしつらひ、催ふすでに始りける、先日向守方の大關には、大澤可右衞門、武藏野龍藏、關脇に竹隈虎右衞門、帆柱嵐之助、雪の島四郎太夫、獅倉團十郎、出雲浪右衞門、篠原重之助をはじめ究竟の相撲三十八人揃えて出しける、遠江守方より出たる大關には大瀧四五右衞門、山吹岸右衞門、關脇に柳川九太夫、鞠山熊平、武庫山十太左衞門、荒浪楫之助、唐橋村右衞門、高繩畔之助をはじめ、三十二人東西に立わかれ、行司芦原半平、團をいれてお相撲はじまり、卅六番の勝負の內客方のまけあまたにて、遠江守せかれけるにや、みづから聲かけて岸右衞門罷出よ、大瀧仕れと申されけるより、大關ゆるぎ出て御亭主方の虎右衞門嵐之助出て、岸右衞門大瀧を二番つ

づけてなげければ、遠江守大きに無興貌に見えしかば、亭主日向守もかへつて無馳走に及ぶと思はれし時に、遠江守近習役をつとめ、小坂齊とて小姓だちにて美男なる小男、けふの供して相撲見物の相伴したりぬるが、袴のもゝだち高くとつて飛出、御亭主方の大關のうちいづれなり共出られよと、聲かけて立たる有樣、冬枯の野に糸薄ちからなく、色かへぬ松を招くに同じ、見る人奇異のおもひをなし、此小男いはれざる事して、手あひの風にも吹たをされ、あたら命を目前にうしなふべしとぞ嘲りける、遠江守も思の外の者が立出たり、終に相撲の沙汰は聞およばさるを不思議に存せられしが、行司立あひお望みに任せ、大關大澤可右衞門ぞ出しけるに、小坂齊ちかく大澤が傍に寄て、ひそかに私語けるは、某は遠江守近習役をつとめて、劒術は一分相應に稽古したれ共、相撲を取事、今日が一生の初事也、もとより手も力もなき身なれば、千にひとつも其方に勝事あるべからず、しかれ共こゝに相談あるは、けふの經營はそれがしが旦那への御馳走たる所に、此方の相撲のこらずまけたれば、殊の外ぶきげんなるにより、御亭主方の御馳走無足になりたり、某分別を以て客人も御亭主もきげんなをしに出したれば、其方態と負られ候はゞ勝たるよりは褒美なくてはかなはず、此一通り聞わけなく、拙者を抛られたらんにおゐては、弓矢八幡力いらずの眞釼にてゑぐり倒して腹切思案に極めたりと、いひたりければ、可右衞門もひとつはお客へ御馳走の爲とあるは尤といひ、又勝たる時はちいさけれ共、侍の一言氣味あしく思ひぬるにや、立あひて取組よと見えしが、齊は可右衞門を苦もなく抛たりければ、內意しらざるものは勿論、一度にどつとほめて兩殿御機嫌にて相撲は終りけり、それより齊は小兵なれ共大力の名を取、首尾能立身の種となり、可右衞門も負ておしからざる相手に負て、客來の機嫌をとりつくろひたるは、利根なる奴なりとて、同じく褒美にあづかりけるとかや、扳ぬ太刀の高名とやいはん、力をいれずして剛力の者をかたの如くはらひけるも、時にとつての武士の計略なりとぞ、

二、無三和尙の談義

今月三日より、阿彌陀院におゐて、四十八夜の別時念佛、幷に無三和尙の談義、しかも因果經の說相あり

がたく、參詣群集すること靈山會上、佛在世の如し、和尚高座に直り給ひ、佛說善惡因果經の題號に、いづれも不審あるべきは、一代五千餘卷の經文みなこれ釋迦如來の說法なれば、佛說といふにおよばざる事を何として念を入過して、此二字は置れたるぞとおぼしめさん、これは疑ひの深き衆生にしめし給ふ詞にて、飜譯なされし菩薩阿羅漢達の、かならずうたがはずして此經を信ずべし、佛かくの如くとき給ふ因果の善惡、三世にあきらかなる道理ぞと、念を入させ給ひて別して佛說とはよに置給ひたる文字なり、經にいづれおろかなる事はなけれ共、此經は近道に敎え給ふ、たとへば此世で貧なる人は前世に慳貪なる中より來り、福德ある人は過去に慈悲をなしたる中より來り、位たかき人は佛を禮拜し、人に慇懃なる故に今又人にうやまはるゝなり、眼目腕膝とてすがめ藪にらみの一切目つきのわるいものは、人の女房を盜みに見たる目なれば、今生にてもおかしき眼つきになるものなり、あるひは酒を好みて醉狂したるものは德利子に生れ出る、これらは過去の業によりて現世のむくひを受るなり、世話に今の因果は針のさきを廻るといふ、誠に盜みをすればそのまゝ公儀の籠にいれられ、火をつくれば火あぶりにあひ、早速むくひを得る事なり、これにつき拙僧儀當年六十七歲にまかりなり、眉に八字の霜を置、腰に弓を張、もはや命を朝夕の草の露と消るを待て、極樂往生を願ふにつき、懺悔すれば諸々の罪消ることあれば、物語いたすべし、某生國は出羽の松代の者なり、廿三歲まで武士を立、放逸にし血氣の勇をはげみ、傍輩末形兵左衛門といふ者と、いさゝかの口論によりて終に末形を討て、夜のうちに國を立退、二三年かなたこなたをかせぐといへども、御代靜謐の折なればなまなかの喧嘩に人を誅するは、無分別者なるべし、そろばんか、山川の利德を見たつる奉公ならでは、身上相濟がたく、さいはい師匠圓何和尚に思はず對面いたしぬれば、發心の身となり、長き未來世を祈り申せのすゝめ有難く、廿五歲より剃髮して、靑道心にて一生過る月日おしき事なれば、聖敎を學べとて關西の談林にとしを經て、後は關東にもくだり惡心をひるがへし、修學功を積で、かゝる經文を說て各々へ西方引接の事をすゝむる程の出世はいたしぬる、これも出家にな

る前世の善因あるゆへにより、現在法衣を着する身とはなりぬると、談義の最中に、聽聞衆の中より、十四五の若僧高座のもとにつゝと出て、末形兵左衛門を討たるとは、さては御坊の俗名は高瀬角平と覺へたり、我生れおくれたれば時代はるかなりといへども、その末形が孫末形半之助といふものなり、祖父の敵のがさぬと、貳尺ばかりの刀を抜て切つけしかば、小腕なりといへども業こそよき打物にや、無三末廣扇をもつて先またれ候へと、さゝゑられし右の手臂より切て落しければ、並居たる佛前の同宿道心者共あはてゝ半之助を押へだて、和尚を介抱して方丈にかき込けれ共、半之助したひ行に騒動して、ふすま戸障子に鎖をおろし、貫の木を入て、しばらく鳴もやまざりける、其時和尙息の下より、我老衰の身なれば、此疵によりて終に往生をとげん事、二日とは過べからず、逆の事に半之助が手にかけられ、片時もはやく穢土を離れたく思ふなり、一たびは此惡業のむくひは遁るべきにあらねば、現世にて舊惡をつくのひ果す事は、身にとつての幸悅あまりありと申されしかども、さすが半之助を呼よせて討せん事はかなふまじと內談極め、たゞ用心して外科にかけ疵に藥をつけ、保養したりけれ共、二三日ありて遷化せられたる因果の道理こそおそろしけれ、さて半之助は不思議に祖父のかたきを討たりといへども、出家を手にかけたるは幼稚といひながら、武の本望にあらざる事なりとて、一生立身の種にもならず、後にはかれも發心して終りを取れりとぞ、

三、寸善尺魔の鼠

何事によらず自慢する事、まことに道の害なり、德山の城下に一家中兵法劍術の指南に名高き、滑川源五左衛門とて隣國にて並ぶ人なかりける、或時門弟を集めて印可の卷の講釋して、利劍すなはち是全躰、全躰すなはち是利劍と、躰劍一致の玄理を談じて、持る扇子にて座を打て、利劍向ふ所にあたらずといふ事なしといひ終らざる所へ、隠れ所もなき天井より大きなる鼠はたと落て舞あるきけるを、源五左衛門頓て扇子にてはたと打ぬれ共あたらず、又打共あたらず、此鼠四五疊のたゝみの上をゆたかにかけ廻りける所を、源五左衛門拾四五度追めぐりてひた打に打ども一度もあたらずして、終に鼠は障子をつたひて

鴨居にのぼり、哄々と笑ふ音してうせにけり、源五左衛門講談を半にて止め、座中に向つて申しけるは、利鈍全躰にして打にあたらずといふ事なき、道理を談じたるに、思もよらぬ鼠落てうろたへしを、幾度か打どもあたらざる事、平生申す眼のみえぬといふ儀なり、打にくき人さへ打損ずまじきを、鼠ごときの物を打そこなふは鈍術莫加に盡はてたり、かやうの急なる所にてあやまちあるは、寸善尺魔の業なりとて、其後指南の事をとゞまりぬ、其頃中國に笠松鬼安とて柔の高名ありて、門弟の中へ招かれ、一日饗應ける次而に、正井權太兵衛といふ浪人、鬼安か弟子に望みありとて引合せ、始て近付になしぬ、權太兵衛元來大力にて尋常の弓六七丁つかんで肩を入れ、角を裂、曲環を延すいきほひ、朝比奈篠塚もかくやと沙汰せしほどなり、鬼安右の手を差出し、某七十歳にまかりなり力は風にちゞめる枯木より脆くはあれ共、物に修錬ありて若き衆五六人よりて、此細腕を捻させぬれども、摘とも動かず、これしかしながら修行の功を積るしるしなり、權太兵衛殿の大力にては存せね共、五人や七人すがりてもねぢれぬ腕なれば、物のためしにねぢられ候へとさし出す、最早今日より師弟の儀なれば少も御遠慮なしといふにまかせ、何の會釋もなうねぢければ、鬼安たまりかね、かいなにつれて五躰水車の樣にまはされ、稽古弓の卷藁臺の下へころびうつてぞ這込ける、座中興さめて鬼安を引出し、怪我はなきかとといぶらひければ、されば力量には柔も出ず、見苦しき躰面目なしといへども、無功なれば片腕折碎けもいたすべきが、これも老功にて少もいたまざる樣に仕りぬといへば、權太兵衛無調法仕りたりと、迷惑なる躰にて世の雜談になり、夜更るまで一座して歸りぬ、そのゝち此取沙汰まち〳〵にして、鬼安日頃の自慢も力には勝手なし、兎角百年の稽古も役にたゝぬ物とて、しばらく鬼安方の弟子も懈怠がちになり行につけて、小家中の一はやり權太兵衛を摩利支天の樣に思ひける、しかれ共歲久しき鬼安方の弟子は、馴染の贔負口毎度出るにつけては、今度のありさま淺ましき躰たらくを評判する者あれば、何となう口論のごとくなる時もあり、それとも品はみえず師弟共にいきほひ失にし程なれば、鬼安も老後の述懷となり、何とぞ權太兵衛を仕つけて耻辱を雪

ぐべしと、晝夜工夫するに、中々手づまのみにては千にひとつも勝利あるべからずと思ひつけて、打果して死後の名を長き世に殘すべく思案一途に極め、ある時權太兵衞方へ尋ね、先日の首尾感じ入たる儀なり、但今一度貴殿の力一盃を身を請て試みたき事あり、互に無刀にて組合の手づめを仕るべしといふに、辭退におよばず聲かけて鬼安を取挫ぎけるを、しばしはためらひけれ共、ついに又片隅に押込、もはや御手は出まじと立退んとせしに、兼てたくみし儀なれば、鬼安懐中劒を抜て權太兵衞か脇腹をさし通しぬ、おもひよらぬ事なれば少は働きぬれ共、二さし三さしについにさし殺して立出んとせし所に、草履取、下女、わたり下部の云甲斐なくみのがしにければ、鬼安直に門弟の親しき久井爲左衞門方に行、稽古と眞劒のこゝろ得あれ共、其差別なく、權太兵衞にしつけられしなど、弟子衆の殘念がり、老ぼれが身にとりて弟子の面よごしとや申さん、何卒その勝利をお目にかけて、いづれも欝胸をもはらし申べしと、只今の首尾をつゝみて噺しけるに、爲左衞門おもひかけず、その段御心底にさしはさまるゝ儀にはあらずと、諫められ、それより我宗門の寺へまいり何となく佛を拜し、先祖の廟前にて自害して果たりけり、これもみづからの藝にほこりて、權太兵衞が力をもしらず、卒爾に腕をさし出せしは、物に謹みなき故也、世上みなおのが得たりと思ふ道よりあやまちはする事なり、聖は愚なるが如く、道に及ばざるが如しとある、まことにありがたき先言ならずや、

四、四國も世わたりの海

人は天地の靈にして、四民一性の明德を請得て生れ出れども、時として人欲の私に覆くらまされて、各別の樣に成行事あり。其中にちかく侍と町人の氣質の異なるを論せば、近年京御幸町のほとりより毎年四國に通ふ小間物商人あり、名は玉屋小市郞とて利發なる若盛り、老さき賴母しかりき、小市郞隣家の借家に四國の城下より學文の爲に登り居たりし、戸川玄峯といふ儒醫の學生に、日頃語りければ、玄峯古郷へ書狀相添て、緣類の屋敷に逗留いたさせ給はるべしと念頃に申遣しければ、山岸勝之進こゝろよくうけ合、玄峯とは違れざる身なれば、心置なく屋敷の長家に起ふしして商いたすべし、傍輩共へも肝煎とらす

べきとて、先仕合の時を得て、家中一盃に小道具賣買の利潤得たる最中に、勝之進も小間物見物すべしとて廣間へ呼よせて、鼻紙入たばこ入香包み小柄目貫下緒の類を買べし、直段付いたすべき由、かしこまりて注文のうち、獅子の目貫は、昨日まさしく楢田米之丞樣に金貳歩にて進上仕りたれ共、おまへの儀は各別の儀なれば壹歩にして差上ると申す、金壹歩にて損金にならぬかと念を入たるに、あの樣は元來銀二兩より三兩までにて、何時も上方に出來仕る物なり、しかれ共旅かけの雜用ある故に、壹歩に賣ても損銀はまいらず、されど共外へは貳歩づゝならでは賣申さずと輕薄なる口上、勝之進大きに立腹して、たとへそれがしには高利取とても、傍輩共へは此方より差圖の上、下直に用を達すべき所を、近頃不屆なる仕り樣なり、かねて貳歩に買たる男に、此方には同じ目貫を壹歩に求めしといひては一分立がたく、今宵の中に小市郎事、屋敷を追出すべし、玄峯方への返事は重てすべしと、俄に屋敷を追立られ、町宿とりて出たりける、町人は兄弟かぎりてかやうのこゝろ行とは各別にして、外へは高直にして、おのれさへ下直にして進上申すといへばよろこびてうなづきあひぬ、これらの相違こそ武士と町人との、天地懸隔なる意氣かたなり、しかしながらそれらの武士形氣はむかしの事なるべし、末の世にはかの道理も義も耻もかへり見ざる町人を、すかし驚かして財をあつめて、祿の外の榮耀を求んとし、たまたま武門の道筋をたて、義を存ずる者あれば、一徹者無分別ものといひくだす、かゝる時節はかの小市郎こそよき商人なるべけれ、

武道張合大鑑卷之五終

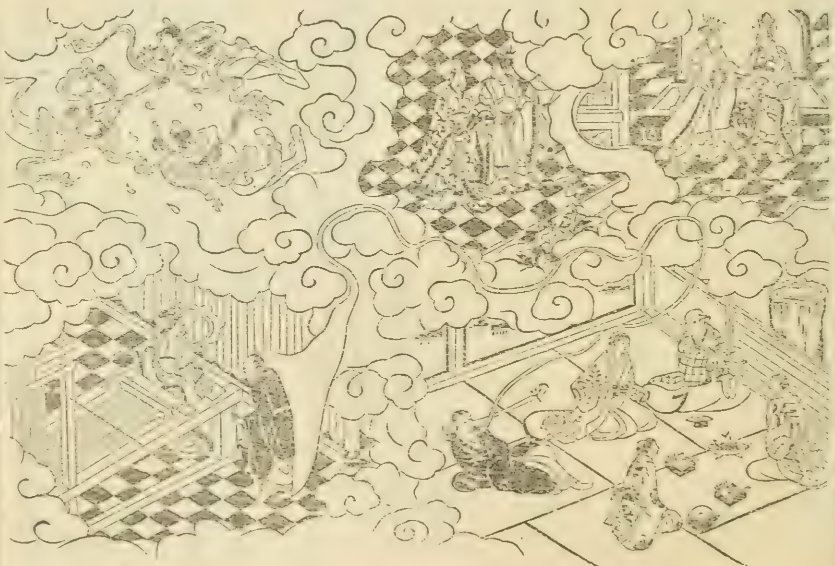
當世乙女織

情の浦
立名の
洲崎

淺さ深さを
くみわけて知る
女波男波の
袖しぐれ

思ひの山
憂名の
坂くち

高さ低さを
ふきわけて知る
女松男松の
ゆふあらし



當世乙女織

序

當世乙女織とは何を以て名とす、近曾我朋に誘はれ、遊里の席に交つて、終日色酒を汲、數杯の醉に三絃を枕とす、夢中に魂の歩行事數千里、雲の八阡を凌ぎ越へて、一つの國有、いかなる所にや其莊觀奇麗と云ふに言たらず、男女遊樂をなす事家毎に艶々たり、爰に一人の乙女機に向つて錦を織る、我立寄りて問ふ、悉く男女愛樂をなす、君何故に、徒然と獨暮し給ふと云へば、彼乙女答へて曰、我は是れ日本の遊女、延寶年中に春の夕と消て行く、雪をまろめし玉の緒の、たへて悲しき夏も過ぎ、秋の筐と名を殘す、夕霧が亡魂なり、藤屋伊左衛門に契ふかく、其心をたがへざるによつて、我爰に生れ想夫が生來を待つ、去によつて人にまみへずと答ふ、程なく限の太鼓鳴つて、魂忽然と又胸中に歸へる、我つく〴〵是を思ふに、傳へ聞く天上界なるべし、霧が心の貞なるゆへ斯る遊國に生れ、二世の契をたがへず、夫の隔生を待つと見へたり、賢なるか實なる哉、こゝを以て思ふに、悲ひ哉歎しい哉、實なき遊君、貞なき地女、現在の道を誤り、未來惡道に墮せん事を歎き、一筋の縁をつたひ戀の言をたぐり集め、硯の海に是をひたせば、無量の色に染りぬ、されば情の言の葉を、糸で結ぎて下心、戀と云字を縦にして、萬の色を緯の糸白紙の梭にかぞへ入れ、管城の管にまき、腕にまかせて織り顯はせば、全七の卷となりぬ、よつて當世乙女織と名付く、

于時寶永第二の秋隱元豆の垣ねに文机をかまへ名無し草の露を滴てゝ筆をすゝぎ侍る、

浪花津誹諧僧

錦　文　流

當世乙女織目録

目次終

當世乙女織卷第一

○傾城鹿島立　色の湊へ乘出した新造出見世丸

樊噲陸賈に問、古より帝王人君世に出れば、必ず奇瑞有りと云ふ、誠に然あらんやと問、陸賈がいはく、誠に然り、人餓に目まじすれば酒食を得る、燈火に花咲けば錢財來る、鷄鳴けば行人至る、蜘蛛あつまれば喜きたる、小事猶此のごとしとかや、爰に攝津國浪花の津の片邊に、富屋の德藏とて、所にも人の沙汰する程の有德人、長門の國下の關といふ所に、店をかまへ、大坂より荷を下し、下の關にて賣拂ひ、下の關のかい積は、難波津にて賣拂ひ、いきも戻りも、たゞは通さぬ商功者、世擧つて是れを能き商の談合ばしら、根の慥なる分限者、殊更一子德次郎、何處におゐても損のゆくことをせぬ律義者、二親の氣助かり、町中の子どもが能手本と、うつさぬ姿もなかりしに、朱にいろへばあかしとかや、千鳥といへる友にさそはれ、町振舞の歸るさを、道頓堀の流水落は西へとそゝのかされて、是非なく扇やわかむらさきと手をうち、色の初里わ

けはしらねど、宿屋あひきやくの吹込にや、萬首尾なる事、其身器量はよし誠に下からゆくいわねの清水、しつぼりとした閨の空焼、しめやかなる私言、わすれがたき仕かけ、肝にこたへて、嬉しく忍び〳〵の通路、終に人目の関もりて、二親きゝつけけしからぬ異見、うわべはひしとかしこまれども、下の心のはこびはたえず、父のとはせはむかしにしげく、猶戀草のねる間計りは、相圖の扉に憂身をひそめ、互に勤は有しにかわらず、二親いよ〳〵安からぬことにおもひ、無分別のこは異見、一言二言云上つて、當分のこらしめ、いとしひ子には旅をさせいじや、下の関へくだしなば、萬の不自由さに心もなをるべきかと、手船の船頭に、しか〴〵の事を云ふくめ、荷物の上乗として、下の関へくだしぬるは、千里が野邊へとらをはなつがごとし、程なく風波のあやうきを凌ぎ越して、海上百四十五里、思へばはる〴〵の所なれど、月も四角にあらず、男女の契も古郷にかわらず、遊里の風俗難波に恥ぢず、とかく何處も鬼はないもの、同じ年ばい成る友の入り來て、上方の艶ばなしに朋友のまじはりしたしく成りて、いつとなく廓通の旗大將と、呼子屋のみさ山に名染み、上方風の粋仕かけ、女郎の嬉しがる事計りなれば、氣に乘つてくる駒、くつわのおしへの外を勤、座敷の座配酒のしこなし、口舌のいひほどき、今の世の見さ山、大坂の粋客が仕込の能きゆへなりと、郭にぱつと沙汰あれば、大坂女郎の下つたごとく、三十日を買づめ、全盛の山高く、よせいの海ふかく、情を慕ふ客おほし、去るによつてくるわ中寄合を付て、呼子やのみさ山は、さして女郎が、すぐるゝでもなけれど、大坂客が粋を仕込、酒あひ、床のしこなしのよきに、めきりと賣出し、外の女郎は月の夜の星のごとし、兎角なにを云ふも商賣、向後女郎の明日は揚錢なしに、宿屋の遣用計りで徳次郎に買つてもらひ、女郎を粋にして貰ひませうと、宿老どもやの勘九郎がおもひつき、皆もつともと是れに同じ、隙日のあき女郎をつき付る事、大本傳四郎が、うゐらうを賣る心見のごとし、徳次が綱、博多屋宗十郎、伊豫屋の杉右衛門、くらしきやの權三郎、小倉屋の與平次、長崎屋の藤七、つしまやの素平、かれ是れ以上七人難波組とて名高く、衣裳つけも、あたまつきも、萬上風に一きわ立つてぬれのつかみどり、同じ世界へ生れ

ても、王城にすむかたじけなさ、此時にこそ思ひしらるれ、もとより徳次郎、下地はすき、づに乗つて來るこぶしの鷹、つかみどりの有様に、夕の星と、一度に出かけ、旦の歸るさも、星とつれだち、歸りての晝は、日終(ひめもす)の酒くたびれ、枕のゆめに家路をわすれ、十露盤うるさく、只やさ里の噂にのみかけ、酒狂散亂萬を高くゝりに、いなかに稀な氣の通つたる家となれば、いつぞの程に手代ども、はじめの異見悔しうなり、わざくれ太鼓の捨ぶち打て、内をうつちやけ、手代ぐるめにやつちやアおせく、御手船のきさんじは運賃なしに、色の湊の帆柱くらべ、いつの程にかやりくりの、楫が廻つて貳百五十貫目仕込たる、新造の出見世丸を、たゞ一いきに乗しづめ、命からがら表を戸ざして、ときならぬ居籠り、氣のつきばらしのいつそ酒、すさんと郎の道絶て、明暮将棊のさし向ひ、兩隣軒續き、おなじ湊の戀風に、難波組の類船殘らず破損に及びぬ、抑此所の風俗、宿屋毎に舞臺をかまへ、大坂九郎右衛門座花崎九郎次郎と云ふ丹前の立役、此津に久敷住居をなして、狂言を作り振を付、はやしかたまで、男と云ふもの一人もつかはず、敵役までを、女にて仕立る事ぞかし、其日の客方云合せての見物、歌舞妓の花代は、揚錢の外、大盡衆わりつけ、歌舞妓の始りは、かぶろが前踊有り、扨てふれが出て狂言の目録、

扨て仕りまする狂言の次第は

當流傾城松川菱二番續

幷に氣のごくのたねまき

いつ出來そめたわがおもひ草

附り熊谷次郎左衛門平山千草之助

武藝先後のあらそひ

切 風流大島崎雁が飛べば石龜もぢだんだ踊と申す

狂言で御座りまする左様

○眼前生死の瀬 左の袂へうけて悦ぶ 下り蜘蛛の身いはゐ

大坂には荷も上らず、かはせの銀のさたもなければ、二人の親の心は、暗に礫を打たるやうなるごとし、積下しぬる荷物の銀は、さいそく日をおつて宥免なく、せんかたなさの當分まかない、是非なく二ヶ所の家を質に入れて、世間のなりはしづめたれども、内證の瀬戸越へがたく、節季の汀瀬ぐるしく、何(いつ)入ふねのあらしもつても、聞かでやみにしふたりの親は、傷寒と

いふおいてが吹て、終に彼岸とやらん云ふ所へ、ぐせいの船出を急がれにけり、無念や徳次郎、おやの死目にもおわねば浮世めせばひ、いなかのうたにうたはれ、もはや所の住居もならねば、すべきかたなく叉大坂へ上りぬ、夜に入りて家路に歸り、母屋の扉に獨りイみ、内の樣子をさしのぞけば、火影かすかに人音もなく、世に有時は二十四五人も住みける内に、漸く殘るは、徳次郎が外母夫婦、あるじなき屋を、守りてくらしぬ、見るにむかしを忍び泪の袂をかざして、中戸をはいれば、外母ははやくもそれなふわこのと、すがりつく手に泪を浮かめ、なき親達の末期のなげき、僅の品々云置かた〲、聞くも悲しゝ、かたるも哀れ、また今更の樣に思はれ、只なき跡の悔しさ計りかぞへ〲てくり捨る、袂の珠數のかず〲、みな御尤御道理と、かたるもつらしきくもうし、憂しや憂かりし月日の立は、夢と明けゆきうつゝに暮れて、半年計りは家をも出ず、現在父母の居ますがごとく、面白からざる戀の店おろし、三五の十八一つも合ず、家質の出雲を導き、借錢の淵は鳴榜もたゝず、ふかう案じて埒のあかぬ事なれど、後悔に心をくるしめ、忙然として暫く氣をやしなふ、座敷は有ながら掃除をさせねば、戸障子のさんほこりにふさく、庭木の梢は葉ざまきたなく、飛石まき石は塵芥にうづもれ、ありしむかしに似もやらぬありさま、見るさへいとゞ心うき折から、糸もて下る蜘といふ虫、憂が上にも目出たきしらせ、時なる哉といはふも幸ひ、左の袂に、うけて嬉しき心のはこび、いさましく思ひとつて、靜に庭へうつし捨れば、此蜘傍なる松によぢのぼつて、糸の根を梢につなぎ、下へおり、大地をつたひ向ふなる、梅の下枝にかけをき、此一筋の糸をつたひて、こなたの松にわたらんとす、折ふし吹すさびたる夕かせに、一筋の糸中よりきれたり、蜘また大地をつたひて、松の梢に上りはじめのごとく、梅の下枝にかけのぼつて、ふたゝびいとをつたひゆくに、叉風つよくて糸切れたり、蜘是にもこりず、叉ぞや松によぢのぼつて、大地をつたひ、件のいとを梅につなぎて、なんなくむかふの松にわたり、おもひのまゝに巣をかけすまし、眞中に座をかまへて、かせぐ事人間に越え、後業を極む、徳次郎此の蜘の振舞をつく〲とうち詠めて、終に世渡の道をうなづき、人一度仕損じて、扨と思はれ

ず、仕負せてまた、斯と思はれじと、家質をかりそへ、諸道具のあらましをうり拂ひ、是をもとでとして纔かなる細物荷をこしらへ、ふたゝび下の關へ下りぬ、みさ山はやくもきゝつけ、戀しさ泪に筆をそゝぎ、神かけて僞らぬ文躰、德次郎かぶりを振つて、いかないかな、いか程おなげき成されても、もはや一錢も罷ならず、今まで捨たる泪の代銀、どうぞ半分直にしてなりとも其代物がほしいばかりに候かしこと、有やうな返事、みさ山おし返して、けいせい買いのいきついてのわるごう、それさまにかぎらず、併ながら傾城は、客のよせひにて立といふ事、いなかにかぎらず都もつねなり、今に成つてのあひそづかし、粹に似合はぬ御ひきやう、一錢の便りにならぬ所を、見すかしてしたふ心、僞の中の誠、高でみぢんもめのつかぬ事、唐へわたりても此樣な、憐な事はなひ、くどくははやうとの返し書迄きめごまかに讀返せど、きづかひげもなき文躰、はまりそふな事は一つもない、併ながらゆだんのならぬは此分里のしかけ、皆實事に見せかけうら壁返してとりたがる所なれば、帶紐とひて行所にあらずと、さし枕の五六十も、うちわつての思案、去ながら世に有し時は、難波組の粹とよばれて、あほうのはた大將も、もつたる身が、今こゝをひけて見せなば、末代傾城買の耻辱とも成りなん、よしよしはまつて高のしれた事、いつそまゝよの分別極めて、暮がたより宿を出かけ、行道すがらもむかしに替り、末社たいこはおもひもよらず、つれ立つものは朝法師、月さへ耻る夜半の編笠、ふかくぞ忍ぶ道の程、もしやこよひの一ッ分も、今かゝる身の浮世川、はまりに成ては、跡へも先へも、いかぬ事じやが、さりとはこはもの、ひつきやう、是れは茶舟で長崎へ行やうな事じやと、獨言して、おづおづ日頃なじみの宿屋、萬がもとへゆきぬ、年頃全盛の德次、今斯る身と捨ぬも分里、めづらしやおいとしほやと、あるじ夫婦が心づかひ、如在なきあひさつ、思ひの外に首尾よく、座敷に通しぬ、みさ山もうつゝのごとく、はや泪ぐむ目づかひ、いつ見てもにくうなひ俤、田舍にはまれなる艶顔、都はづかしき心いき、大分すてたる金銀、今宵一夜にとり返す心地ぞす、みさ山はこぼるゝ泪を袂にゆづりて、さりとは替りし御姿、にくふて女郎は買ぬものなれど、是皆わしが成すわざ、おそろしの憂き

勤めや、さりながらわかれまいらせてより、露わするるいとまもあらず、命の内に今一度、此の男の顔を見せてたべと、神をちかひ佛を祈り、客待つほどのゆめをたのしみ、憂かりし月日を待かいの、ありがたやたうとや、嬉の今宵や、扨わし事も長崎のきやくにて、おもひよらざる俄の身うけ、もはや四五日が此里の名残り、今少のちがひにて、御目にかゝらず、アノ國へ參らば、一生のものおもひと成候はんに、思へばふしぎの御事と、返す〳〵も嬉し、扨わかれまいらせて後、是も上方の堺とかや云所、いわしやのゆめさまとて、色離れたる禪門きやく、茶の湯すきにて出合まし、半年ばかり名染みまいらせ候らひしが、鄙女郎には意氣かためづらしとて、心實の御懇ろ、是れぬしさまにあひますうち、萬すいなる御しこなしに、上方の風をも聽おぼえ、少しはいやらしき事も除たるゆへ、上衆の心にも入候こと、是皆そなたさまの御影と、幾程か悅びまいらせ候也、扨斯ても住果てぬ身とて、ほどなく情のともづなをほどきて、船出する折から、置土產とて金百はい、今すこし斯した物をと思へど、是は幾程有ても身のためにはならず、京でも田舍でも、傾城の手に有銀は、鹽の長次郎が品玉のごとく、いかな事終に手に持すものでなし、年も明なば是を敷銀にして、何方へも緣に付べし、何時賣ても金になるものとて、色紙短册茶の湯道具を下され、只今まで身をもはなさず、よめりする身に爲り候はゞと存候へども、身うけしてつれゆく程の男を持ち候へば、もはや是れにも及ばぬ事、わしがなき身の筐とも御覽くだされ候へと、德次郎に渡し、此事ばかりが申たく、一度の逢よしを願ひまいらせ候に、ふしぎの御くだり去とは嬉しう候と、いかひ事物くれての淚、是ぞ一雫千金上々類なしの御泪、びやくらいかけねなし、此分里には稀有なるかなと、よく〳〵見れば、定家の小倉しきし、爲家のとへかしな、小野の小町の花のいろ、賴政の末までの、兼好法師の四季、彼れ是れ八枚、茶の湯道具は目にも及ばず、何れを見てもおろかなるはなし、古金買に見せても千兩が物、ちか比嬉しき心ざし、殊には目出度き身の行末此上もなき悅び、隨分無事にて、とかく夫の氣に入やうにと、眞顏に成ての實事、どうやら氣が入て惡ひに、いつその事に酒にせまいか、なるほどこよひが逢夜のかぎりと、いつに

すぐれての酒ぶり、御いとま乞は床の内でさ、上づかひの女子どもまで、情の心づかひに寢心のよひ〇〇、〇がはづれて、島田は〇に、さし櫛が〇〇〇やら、簪が〇〇やら、〇〇〇を生で見る〇姿、ほの〴〵明までまんじりともせず、明六つのかねを限りと、もらひ道具を肩にひつかたげてのわかれ地、烏とともになけてもどりぬ、明れば細物の荷物を口錢とりにて、なげに賣拂ひ、しまじゆす一まき、もみ一疋、眞綿二十把、錦織の帶一すじたがいに見知りのある香箱一ツ、宿屋へ樽肴金子一兩、目出たき計りと、おくり捨に、出舟もとめて、大坂へもどりぬ、

〇貧福二つの海ぬれ手で粟をつかむやうなてんほう商

今度徳次郎見事なめにあふてもどりし事、田舍にては夢にも知らず、一駄の細物をなげにうりはらひ、みさ山が身うけをいわひ、宿屋への付屆け、あの身に成りても、上方者のわけよきほまれと成りて、下の關くるわ中でのとり沙汰、銀つかはぬもの丶心がらは、大きなたわけ共いふべけれども、毒喰はゞ皿をねぶれの道理、いつそ色狂ひを仕ぬく氣なればこそ、思ひもよらぬ寶の主とはなつたれ、徳次大坂に着くとひとしく、内緣有る人を賴んで、北國の去る大守様がたへ、歌書どもをさし上れば、年月御望の御重寶、召上げられんとの御事、御取次を以て、直段の儀を御たづねなさるゝ、不粹なる者の仕わざならば、よくには切のない人界、幾いくらならば、さし上申さんなど丶、いふべき所を、さすがは傾城かいのかたじけなさ、天性きれいなる心そなはつて、とりつくらふ返答共見へず、御大名様がたの御道具に、直段を付ると申儀は、有まじき御事、御意に入らせられ候上は、さし上奉るべきとの云かた、御前にはことの外なる御機嫌、町人にはめづらしき心底、さりとては出かしたりとて、御目見へをゆるされ、御拜領として金子千兩、猶御機嫌のあまり、幸の明き所なればとて、御藏本を仰付られ、冥加に叶ひたる仕合、ありがたき次第なりとて、御前を下りぬ、何がさしおゐて、先二ケ所の家質をうけもどし、普請かた〴〵二代長者と、さかゆる春秋、二八月はいつとても日和時分とて、何れの舟問屋も例年荷物もすくなく、渡海もまれ〳〵なるに、近年江府地震大火事に、諸道具紛失ゆへにや、數千の廻船日和にかまはず、浪花の津を乘り出し、先後を諍ふ事新

綿の出船にひとし、案のごとく遠江灘までは、何のつつがも無りし所に、にわかに悪風、浪雲にうづまき、岡は木をを〻り、地は塊を動かす、船長其ふせぐに力なく、命に替て荷をうつ事、たとへば礫を以て海中をうづむがごとく、とかくせし程に風なぎて、漸く命は助りぬ、右の濡荷を賣拂ふ事、めつぽうかいな雲の印に、鳥の飼食をあさるに似たり、とかく運のよき時分は何をしても仕當るならひ、徳次此きほひ口に、ぬれ荷を買ふ事數百駄、ことごとく切ほどきて是を見るに、椀家具、其外萬ぬり物道具、金銀の器、大工の異道具、佛前の三ッ具足、宗味のたゝきがね、立花の道具、綿詰の茶の湯道具、碁盤双六盤、から金道具、火車鉢、椀銅、砂の物ばち印傳唐かわ、しゆろぼうき、燭臺手しよく、つゞみの胴、ひとつとして損じたるはなし、徳次是にて大きなる利を得、米あきなひの拍子能くてまへの身だいに十倍せり、今の世の手柄もの、おのづからなる大孝行、身を立て道をおこなひ、名を後の世に揚げて父母を顯す、是孝の終り、今は斯と思ひてもにくからぬ身躰何に不足なる事はなけれど、生付たる好色、妻室に望ふかく、鰥寡がちのやもめずみ、首尾有、かねあり、色有り、形有り、是ぞ浮世の十分男、おなじ銀つかふて、女郎にかわひがらるゝは仕合せ、其身の徳分そなわつて面白く、また此比は傾國にかよひ茨木屋の松契と出かけ、日毎の通路しげきにしたがひ、名染むにしたがひ、たがひの妹せ事は、を去ての誠、頼ての身請と、互の言約束違ひはなけれど、世間はゞかりての延引、殊には古今の利口もの、ふかぐ〵とも出さず、是れにかこつけ、それに事よせ、日を延ばすうちが分別、惣じて碁をうつに、自碁は見へがたく、助言は云よし、とかく此事人にかたりて、そのいひかたに付べしと、彼れ是れ指折に、醫者の言等はかたひ計りで、此やうな粹事にうとし、一門手代に聞かさるゝ事でなし、友だちの内ごとは金屋の銀七、是はやりばなしの高なし也、其外は皆尤もがたなり、此事に善悪を付て、評をするもの一人もなし、ヲウそれよ、つゞみやで付あふた、くるまやの太介、是がどうやら分知りそうな、きやつにあてゝ評をきかんと、少急に得ゝ御意ー申度事有レ之候、栗徒(ちよつと)御出以上との手紙返事に及ばず、としやおこしと、徳次かたへ來り、御手紙の中心許なし、どうじやゞ〵と拍子

にかゝれば、徳次間を見濟して、身受の談合大きにくいちごふた衆道すき、たばこのむ〳〵かぶりをふつて、ハテわけもない、あつたら金で、女郎を何する、中村千彌を、うけ出す談合ならばと、かけだして歸りぬ、

○新町三輪山もとゆひの三わけ殘りしより杉原大明神のみづかきを見るゆめ

爰に色道迷悟のちまたに、黄金を以て雲をあざむき、松契を直下に見る、富士屋伊左衞門といへるやさし男あり、本は夕霧時代の大盡、凡千貫目程の分限大かたは色里に費やし、すでに屋たいぐるめと見へける折ふし、夕霧火動(くわどう)といへる病におかされ、魂艶里を去つて、秋の夕と立のぼる、空定なき村時雨、袂はぬれてほす日をわかず、戀慕あひしうのために、ほだしをうたれ、遊里の通ひふつとたゆれば、おのづと扉は、冬枯の木の葉ふりつむ、軒端淋しく、思ひぞつもる雪の旦は、ありし昔の朝込をしたひ、雨の夕は酒くみかはす、君が俤を戀ひつゝ、憂かりし年も暮つかた、都の春を見捨て、淀川の水に、借り切りの御座を流して、難波津といふ下り女郎、過にし夕霧に、たちまがふと云風說、ばつと霞の曙より、此よねになじみをかけて、又も之出る春草、やけ野をあさる友雉子、しばしも別るゝいとまなしと、かくもゑぐいに火はつきよし、終には此の思ひやけとまらず、次第に火の降る身躰となつて、すでに軒口を火のねぶる頃ふしぎなるゆめ見けり、其俤あくまで色白く、顏の形は四角にして、目もなく、鼻もなく、口もなく、耳もなし、白き袴に白き水干を着し、烏帽子ため付けたるさま、只祝子(はふりこ)のごとし、まさ〳〵と枕にたゝずみ、そも汝淺ましや、多の金銀を費やし、傾城ぐるひに身をうつ事、去とては不粹な事也、それ傾城は和國のよせひ、男たるものは一旦は買ふて見べきものなり、是れがために身躰をうちやぶり、浪々の身と成は、世に口惜しき次第ならずや、向後此の道の過不及をさとつて長く樂を極むべし、我は是杉原紙の情なり、我もむかしは此色里の虛(うそ)づかひを仕たものなるが、近年むしやうにいたりつよく、御召の奉書に、美濃を封じ紙とする事となり、杉原は古風なりとて、くるわの虛づかひにはつかはず、それゆへ今此は、本結屋の奉公を勤めて、こきづかひに使はるゝ、されども色のゆかりと思ひ、堀江などへは、折々はなしうりに呼出され、くらやの虛使(うそつかひ)となつて、文言なぶんていを聞て、くらす身

となりぬ、今かゝる身になつたればとて、色里のわらをたくにはあらず、一切皆虚なり、此虚をつく事、色里の商賣なれば、女郎に科は少しもなし、うそのつきやうだによければ、高が戀み代物の惜しひ事は、みぢんもない、おしこそふに我こそは粋なれ、てくだも四も五も、くふものでなしと、思ふさまはまつて居ながら、祉人のいなり喰と、にが口のたら〳〵をいひ〳〵見事なめにあふはふびんな事なり、只なぐさみといふ事をわすれ、傾城狂を商賣に、家業の方を戀みとする事、是を名付けてうつ人共、又は月とも申なり、是を傳へん其ために、是まで顯れ來りたり、誠の姿よく見よと、いふかと思へばもとゆひの、玉のありかに飛び去りぬ、伊左衞門ゆめ心に、あらありがたの御告やと、其おだまきの跡をひかへ、行末はるかにしたいゆけば、程なく新町のひがし口、大門を入て南のかたへ半丁たらずゆきて、門を越せば、ツイそこの屋に入けり、よく〳〵見れば高瀬屋の甫が、欲どしい大黒屋と家名を仕替へ、わか尾といへる、あひかたの女郎をうけ出し、二人もろとも前だれにやつし、茶屋を片手に、本結をひねると見へて、おだまきの跡三わげ殘

し、ふたり共、多葉粉にむかしをかたるていなり、たとひ千金のひねり賃にても、斯る事を手にふるゝ物にはあらねど、一旦は色にふけつて、身を憂き噂にかくるといへども、今はみづから粋となつて、ぬけめのなひ世帯の仕様、身をつゞまやかにして、儉約をたがへぬ心、女ながらも古人に越えたり、ふしぎなるかな、其身宿屋の娘と生れ、品も形も人に勝り、しかも發明にして、いきかた男にはぢず、親がゝりの獨寢に、枕半分かりたがる男すら、廓にかぎらず町かたにも多かりき、されども露女のしはざはなくて、わか尾といへる色になづみて、もの日もの際の、くるしみを病ませず、またある時は、みなみの色江に身をはめ、男色の深き思ひ川に、仇名のたつなみをおよぎこし、難なくわか尾を引ぬき、借錢くるめにうけ込み、たがひにひ込むいもせ事、天竺震旦はいざしらず、秋津洲のうちには、神代以來聞もおよばぬ、きたいのくせもの、去りとは○○の姿、どのやうなものであらふぞ、そこらに知た人は、御座りませぬか、

當世乙女織卷第一終

當世乙女織卷第二

○和漢の亂れ酒ケンにも詩にも負けぬは日本

伊左衞門夢さめ、忙然と獨り燈の本に、有りつるつげをつく〴〵思ふに、過ぎにしより昨日今日までの、はたきをかぞふるに、一つとして尤なる事なし、其の上我五十に餘りての廓がよひ、粹とよばれてよねのこしおし、多の客に金銀をつかはす、かたふ人と成る事、いまだ年若なる頃ならば、うはきのさたと人もゆるすべし、商賣とはいひながら、傾城の方にも少し色をふくむ品も有るべきか、今此の年になつてのよね狂ひ、ひつきやう是は札付の、うつ人といふものならん、誠い粹は此の里へ來ぬものなれば、我も知らじとこたふ、野風が名言、尤なる哉〳〵、向後ふつ〳〵此通路をさまつて、誠の粹とならんと、日暮れて道を急ぐ分別、いや〳〵死しなに成りて、色狂ひを止むるといふに、此儘にてはうれしからじ、併ながら當地の色に、心の殘る所もなし、迚も好色の道を立るからは、色道修行、旦死んでものこらぬ心を、餘國の色の一遍上人、六十萬人色道往生。極樂世界、二世安樂とくわんねんし、暫くよね狂ひの門戸をとぢ、廿日あまりの居ごもり、其中難波津をわけよくのき、五ヶ所の家はこと〴〵く、家守を付けて手代まかせに、つかひ殘りし貳千兩を、慥かなるかたに預けて、其外の手形共を守袋にしつかと納め、其身は上下五六人、乘かけ一駄、跡付に金子百兩、傾國修行の旅泊のゆめ、五十年來の算用は相濟み、此の上は利の利なり、然れば何に心を引され、何れにか執を殘さん、路銀もし不足の事あらば、京江戶北國の問屋々々で、かはせしての取つかひ、心にかゝる山の端も、なき身になつては、金銀は塊、行次第のゐやう旅おもひ立日が吉日と、大坂の曙を跡に見なし、日をおつて十二日ぶりに江府の地に着ぬ、先江戶知りの粹をもとめて吉原に案內させて、其名を高尾といへるを、三日のもらひにてのこるかたなき首尾、大坂の粹とよばれ、女郎にもお定りの外をなかせ、其後五日をいとまごひと出かけ、萬分よきさばき、粹仲間のおくり酒むかひに、機嫌よくかしこを立つて、歸さば北國地にかゝり、宮のこし大聖寺、越前に金津今庄敦賀三國の風景、別して三國、

風俗、諸國に替りておかし、分ては雪の比風情更也、さればにやよねの風俗、道中何國の色里にもない圖な事綿帽子の大なるにて、戀と情を二かわに、めのはりばかりを見せかけ、竹の子笠にもみのくけ紐、前かたぶきに着なし、二重袖の木綿合羽に塗緒の高あしだ、ゆき踏わくる道中、外にくらぶべきけしきなくて何となく面白く、五七日の假まくらに丁子の油、女悦秘好散、なりひら袖の下秘すが秘密、色道傳受の床のうみ四海なみ靜ならず、どうもいはれぬ寢姿、しどけ泪の出所はちがへど、さゞめゆかしきやよ時鳥、なくねしきりに今暫しはなちはやらじと、肩に喰つき、勤はじまつて以來の寶床、同じ人間に生れて斯まで都は替るものかは、萬御しこなしの替つた事よと、なまりがちなる夜半のむつごと、愚に歸つて面白し、三味線の相の手、都の端出うたをおしへて思はぬ日數、指折るに心せきて、漸くにいとま乞ひして、心の駒に鞭をうち添、大津に着きぬ、柴や町のおりひの烟は、雲井とかや手のとゞかざるはきゝの女郎、是も旅日記の數に入れよと、二三日の逗留にて程なく都の島原、これはたびく\上京の折ふし、一度もはづさねば、今更さして替りし事もあらじと、思ひなぐつて立よるべき心もなく、直ぐに三條へ出ぬ、折ふし曉雲に出合ひ是はさいひて、しかぐ\の事をかたれば、尤かし京都の事は、數年の御仕こなし、めづらしからずと申ながら、此の度の色修行にこゝを見捨て直く通りとは、近頃のおごうよく、島原は何に成れ、こゝは是非三條小橋と、かわひや口あひのふるうなつたにふびんさ勝り、銀右衞門入道宗德が方にて、亭主まぜくら都酒汲んで、二人の法師錢屋の祭右衞門が見へしを幸ひとよびかけ、彼是四五丁駕籠を飛せこせつなに彼地へ着きぬ、手がゝりの所緣と大坂屋の高橋、わたりくらぶるにさすがは都、栗徒と云ふに五七日、三人もろ共伏見までおくりませうと同道面白くて、こゝも二三日手あひ揃ての亂酒、夢は駕籠にてさらばく\と立わかれつゝ、行末何となら坂や、かへり三笠の山はそなたに、なる川の流は同じ事ながら、少づゝの替りめ、これを浮世の花と詠めて、三日の逗留に、中屋のさごろもを買つめ、それより直に堺へとをり、室津への船出を待間、木屋の紅とかやに色を殘して、切るにきられぬぼんのうの、垢かゆる間を暫しとおしむ

風情、これだけが粹の仕かけ事、わだちなけれど順風心よく、明の日の七ッ時分に彼津に着きぬ、此所の風俗舟へも宿へも女郎のゆきゝ、心のまゝにておかし、されども手毎に引く三味線のかしましさに、此浦より艜をかり切り、備後のともにおしわたり、それより下の關、長崎の丸山、此所は和漢の色あらそひ、唐人口日本口とて、女郎も二品にわかち、氣のくわつなる事江戸に越へたり、毎月の大紋日は十七日十八日女郎殘らず觀音詣で、まいり下向の道中道筋を替て、二筋を替て通る、雨がわは水茶や料理茶屋、大盡此所に姿の關をすへて、女郎をかり宴をなす事、茶屋毎のにぎわひ、花の八重山をこゝにうつすがごとし、もろこし人は逗留中女郎を揚づめ、諸道具の鍮までをわたして、よろづを女郎にまかなはす事、偏に妻室のごとし、伊左衛門も此所にて色をもとめ、氣の替つたる唐人との一座、酒にまけず詩作におとらず、事かりそめの出會といひながら和漢のはれわざ、伊左衛門萬に勝たり、然れども鼻計りは唐人にかなはず、さしもの伊左是はゆるせと、鼻に手をあてゝ、はうはう浪花の津に迯げかへりぬ、

○好色隱逸傳 傾城かた木まくらわつつくごひついふて聞かすをよくたもつ妙の一字

伊左衛門大坂へ歸り、いよ〳〵好色迷門の扉をひらき、下寺町淨國寺におゐて、剃髮禪定の門に入りて長町七丁目東側にて、表十五間うら行三十五間の、家屋鋪を買ひもとめ、表を長屋に、裏三方に堀をほらせ、塀の外面を竅にてかこひ、浮世をすねてしやれ柱に、竹だるきの萬屋立、庭は草花の花、四季にたえず、詠め越す坂松山松ふかふして峯すゞし、間遠なる地念佛の哀れさに、人界の無常を觀じ、心をすゝぐ清水の流に續く安居の水、ふかき願をかけまくも、かたじけなしや天神の、御影を殘らず御所の浦、東はしやうまん家隆の菴地、北に續きてらん〳〵とこころつけ成る螢の數、極の茂深の月もよし、雪の夜雨の日、花の春、詠がちなる風景、母屋の表は紀泉兩國のわうくわん、さかいの畫網夜食こしらへまで事をかゝせず、物見物詣の姿を見盡すくわつけいくわんらく、長生不老のきやうち、此所にしくべからずと、浮世をあちに墨染のもなし衣、角のとれたる玉だすきの、露おもげなき身の納りは、是迄堂艶止、色道大和尚と、ゐんつうに事かゝぬ隱逸、ためしすくなき大樂人、料理人

の嘉介に家をまもらせて丁儀をかまはず、去太夫の年明いて、借錢は濟してもらふたれど、結ぶの神の御失念にや、四海浪をうたふ緣もなく、去る所のよそに居られしを、茲にかゝへて、夜半の寢覺の徒然をなぐさみ、上づかひ下づかひの女四五人、下男一人僕子一人彼是幾八九人、去とはかまはぬ浮世のくらし、誠に極樂眼前なり、是迄堂御宿に御座りまするか、富屋の徳次郎で御座りまする、御見舞申まする、エ是はめづらしや、今の世の大黒樣、何とおぼしての御出ぞ、さればば〳〵少し御めにかゝりまし、お智恵のかりたい事有て、はる〳〵伺公いたしました、お智恵をかる事餘の儀にあらず、御存の通り拙者事、一度親いさめを用いず、身躰をはたき仕舞候命から〴〵の仕合せ、ふしぎにあやうき身の上を取直し、只今親仁世盛りの身躰に、十倍を越へたり、然る所に一門寄り合ひ、假に妻室を入るべき談合、事火急に相見へ候、内々貴樣も御存の通り、物見ものまいりにきやはんする女、紐の付たきやぶした女、かうがいわげに髮ゆふた女、身にこたへてのきらひもの、とかく目くど穴の二ッあいた女でなければ、虫が勘忍仕らず、去るによつて茨木屋の去る太夫をうけ出し、女房に持つ心入、お智恵をかりませうとはこゝの事、御自分の儀は、好色修行の大能化、多くの色に染み渡る、はし〴〵までを御存の事、何と傾城と申すものは、女房に持つてのはだへはどの樣なものにて候ぞ、申ても一生、そひはてねばならぬ夫婦あひ、地女にいたし申べきや、但しは傾城にいたし可申哉、御相談うけ申度候ふと、打まかせての談合、是迄うちうなづき、近頃念の入つたる御思案、大形女郎にのぼつては、親のいさめ世の誹わざくれ後日の事はかまはず、大分の金銀を費やし、先うけ出すものにて候に、驚き入つたる御心底たのもしうこそ候へ、樣御存の通り拙者事、ちか頃たわけた事ながら好色は太夫より、天職鹿戀より端にいたり、町色は申すに及ばず、後家狂ひ尼狂ひ、かこひもの、てかけ者、町奉公の仕着せ色掠もの、茶屋もの、呂州白人うたびくにのおうりやう、諷聞くら者、法會立の辻うち女、其外諸國の傾城狂ひあまねく色を見つくして、今傾城の松君、故有つて手に入れしを妻と定め、女房同前のおきふし、地女に替つてよろづしこなしりんきの仕樣しつこからず、寢ざまいやしからず、いはふ

所のなひもの、しかし寢覺の私言にむかしの事をうちあけてのはなし、そんじやうその客にふかゝつたの、ほれたきやく有つて斯してあふたの、よく勤めてはくれたが、今の所がづはぐれて、是にはなんぎいたしたの、又いやらしい客のくせに、どうした事で有つたやら、あふたびにわけ立させおつての、起請かいての、爪はなしての、指切髮きり、入ほぐろしてのと、あちらの心は何もつゝまず、かたるとの心中ではあらふけれど、去りとてはいやらしい、殆どあひそのつきはてるものなり、斯申すは艶止が粹に似合ぬ、愚智なる事をいふとおぼしめさんか、本是かわひさのあまり、愚智よりおこる妬なり、ひつきやう大分の銀を費やし、あまつさへ身うけまでするは、皆かわひさのあまつての事なり、女郎ぐるひの間は、そうした妬もなく只面白ひばかり、實事に成つてからは、愚智に歸らねばおもしろふないもの、只此愚智なるが、色の根元戀の源といふものなり、惣たい勤めした女の捨て所と、古はぐうのすて所といふて外にないもの、皆相應の緣組をして、身を納めねばならぬもの、念頃な勤めの者には、此の斷りをいひきかせ、夫婦あひの能きやうにして、とらせたいものなり、兎に角つとめの者を女房に持つは、ぬしの知れぬ古手を買ふて着るやうなもの、どうした事にやら、勤め仕た女はすべて短氣で、人づかひの惡ひものなり、つゝしむべし〳〵、つら〳〵浮世を考見るに、勤め女を女房に持は、戀ばかりで持つはまれなり、女房は一期の詠物なれば、きりやうのよひ半分はなぐさみ、樂みにする心高は、せちがしこひからおこる事、いか程あでやかなる女にても、不斷そひ居たらんは、日每にあいそつきて仕舞いのつきにくひもの、此儀はふつと御やめなさるべし、先女房と色とは分なものなり、抑人の妻室と申すは、人情五倫の其一つ、君臣父子夫婦兄弟朋友と申して、女房は色の外にて、夫は外を納め女は內を納むるが役、去るによつて是を內儀と云ふ、御自分方の御身躰では、氏すじやう能き人の娘をめとり內を納めて、色といふものを外に樂を極め玉ふべし、斯く申す拙者儀も、少し此比はもたれ出申候て、よつぽどの思案心、とかく此儀は御無用になされ然るべしと、好色秘密の座敷談儀、尤も成聞事、折ふし錢の廻りすこしおそければ、くるは中の藪をたきありく、聾のあんま

とり、かたそつぺらを開きはつり、是は旦那のおつしやる通り、そうべつ女郎はよからぬものなり、斷りなる哉、かなりがけの貧では賣らぬ娘を、極貧ゆへに賣を買取り、貧賤の垢を玉とみがき、三文づゝのくさ墨に、龍脳をぬるごとく、始終を伽羅でふすべ上、極々のいたりすがたに仕立、人の心をとろかす事而已をおしへ、色よき絹を着せてつき出したる所、いかなる公家殿上人の御息女とも見ゆ、されどもねがつくろひものゝ事なれば、どうぞの狂ひのどこやらでは、きたなひ所が見へすく、はづかしひかな、是錦の袋に不淨をつゝめるがごとし、とり分け今頃のよね達に、身持の直ぐ成るは候らはずと、かたはしから指折をして、有る事ない事揚屋中の、くわしや上女子の事まで嘘八百、一つも徳次聞き入れず、うぬらが愚人の眼から、女郎のよしあしが見ゆるものでなし、もとより耳のしいたる形をして、かたそつぺらを開きはつり、大事の僉議に塲をさまたぐる、急いでうせねと二朱判一つくださるれば、其足にて直にくるわへかけ込み、今の世の大盡樣、どなたがよくつてもまねは成らじ、アノ内かたには小判のなる木が十七本、銀のわく井戸が五つ有りと、跡かたもなき空言、さりとてはけんも見せる其にくさ、年來聞へぬ事どもいひありく、其天罰にや聾といへる病をうけたり、

○浮世正月言葉　姿計りがたきあふためおさ／表計りが喰あふた聟舅

徳次郎、去とは御心實なる御異見、こつずいにてつし有がたし、誠に面友眞友のわかち有りとは、斯る事にてや候らん、しかし町女房には實有り、傾城には實なきとの御事、左樣に一がいにもまた申されず、私近所に、相撲屋津右衛門とて有徳人あり、親子ともにかうとうなる念者、方々吟味の上にて、氏すじやうよきなにがしの娘を嫁にとる、婚姻の夜の衣裳つき、お定まりの通りに死装束、わら火をたいて跡へもどらぬ心ざしを顯す事、八雲たつ出雲八重垣妻ごめに、ゆつの爪ぐしをなぐるのちかひ、夫婦中能て偕老同穴のかたらひ、部屋盃の誠の酒は、末期の水とおもひさだめ、妹脊のふすまは千世を敷寐に、かわるなかはらじと、約束かたき石をうたるゝも、嫁に外心をもつな、身をかたく貞心をまもつて、たがひの心をかたくへんずるなど、外より是をことぶく、水あびせの祝儀は、月毎に有火をはやくとめて、玉の様なるわこをう

めとのいわゐ、内からも外からも、いわふが上のいわゐ、たがいに物入れての妻定め、末の松山浪は越すとも、ふたりが中は替るまいとの、心の有りたけをひな形に切て、男への心中染、夫の紋所を五所に付させ、思ひつきの染小袖、ものゝ入るをかまはぬ男の嬉しさ、つれだちての物見遊山、水入らずの辨當酒、世間の見るめも少しはゞかる程なる中よしめおとゝ、ほむるも有り、そしるも有る浮世のならひ、津右衛門一兩年此かた、つまちづの合ひにくひ左まへなる不勝手、つゝむとすれど女房も知る程の店おろし、氣の毒の山、くだり坂の石車、とめどもなひやうに見ゆる所に、あまつさへ舅かたより、金子百兩の無心、つよゆみ引いて矢だねのつゞかぬ所をかくし、結句舅を大なめにあわせんと、何の氣もない顏つきにて、早々右の金子をおくり、夜振舞出振舞、日待月待稽古ばやし、内にぎわしく見せかけ、萬氣くばりのせつなさ、是商人の軍法、内に女房といふ忍びのものあるを夢にも知らず、たゞやりくりに而已世話をやく、折ふし女ぼう身もちなるよしにて、親里へ歸へり、半年餘りもごらず、剩さへ媒を以て、女房しきりにいとまを乞ふ、津右衛門仰天の餘り中人を呼んでの相談、是も内證は舅かたにて、此方の身にはならず、談合最中に敷銀百枚は、百兩のかり銀にてさし引をして餘り銀をもどし、迚も不縁成る上は、荷物をもどしてたまはれとのいひ分、津右衛門いつかな事聞入れず、一ぱいくふた腹だち、責めては荷物をおさへて當分の腹をいんと、かたつぱしあけて見れば、何の間にか迦しけん、衣類手道具一つもなく、長持たんすは入れ替へて蜘のすみか、責めてはつつてなりとも腹をいんと、こぶしを振つての立腹、おも手代遮つての諫め、いかさま手代が申通り、女日照りは行まいものをと、空に成たる長持簞笥に、いとまの狀を添へてもどしぬ、此手代も主人に不足を云上り、萬算用を仕渡し、中わるくいとまを取りぬ、算用半に主人手代が入し物をさがして、反古どもをとり集め、能く認めて置たり、萬相濟み跡には反古をさらへ見けるに、男に隙くれていんだ女房の付け文、過し夜は危き御げん、うつそりがしらぬ嬉しさの屆け文、京上り鄙くだりの留主の間は、めおと事したこつてり文、見るにほむらのたねと燒捨る、

〇後家仇（草思ひ草かる鎌はあれど　わすれ草かる鎌はないよの）

夫死んで髪切らぬ後家を寡女といふ、おかしてくるしからず、髪を切剃髪したる後家は、やはり夫にそふちかひなれば、おかす事間男同前なり、爰に大坂中戰場に、かくれなき俄分限、鎌田屋の喜三右衛門とて、現銀十百貫目に越へ、大家三ケ所を持つて根づよき身體なれど、成り上りものゝ悲しさは、能い衆つきあひもならず、遊藝にうとく、晝夜銀まふけの工夫に隙なく、始末講と名付てしわんぼう友の參會有り、これもすう〳〵奈良茶に豆腐のこくしやう、雜喉とりがひ貝のみ干鰺の外は生ぐさ物なく、一年に一兩度、講中の大寄合と云ふも、道頓堀の茶屋は、もの事いたり過ぎて、中間の勝手によからずと、是も公事宿へ出かけて、なら屋が仕出し料理、壹匁貳分膳が關の山なり、酒は當屋よりのものと極め、前廉より方々きゝ繕ひて九分五厘より高い酒をつかはず、生蠟燭の火でもの喰ふたるためしなし、きそけと云ては、しかも三ツ物でつむぎのわた入二ツ、日野の袷一ツ、かびたんの袷羽織、古き茶小紋のひとへばをり、さらしの淺黃かたびら、木平の帷子、以上二ツ、年季是にて四季の公儀を濟す、物には類を以て集るならひ、此の講中の肝煎にて、喜三右衛門去方より女房むかへたり、誠に仕合の上の仕合、此の嫁隣丁に稀なる美女、近所のわかき者ども、見るにつけ聞くにつけ、去とては惜しひ事かな、紅梅の盛り成るに鳥をとまらせ、遠乘の馬に櫻が枝を策にうち、千草が野邊に牛をはなつがごとしと、こぶしをにぎつて是をおしめど、穢多ももつたじや、銀の息程きつい物はないぞと、猶おしめどもしたへども、かねなきものゝ揚屋町をば通るがごとし、妬しひかな〳〵、喜三右衛門十七歲の年より、女房心は出來ぬれども、其の頭より生れつきせちかしこく、西横堀の濱遊女は下直なるものなれど、瘡うつるのがおそろし、五分取の女郎も今時はしよ對面から、燒もち代の無心と云げな、一匁どりはいかにとしても大儀なり、器量はわるくて內の女子どもを錢入らずにこまづけて、夜這やせんと思へども、是もわるうすりや外の子をつき付けられ、尻で銀とられては一生の損恥と、せつない所を齒をくいしばつて、勘忍の腕をさすり、心しやきつゝ折々は、じやくはいなる事にて埒明け、年月をおくる所に、おもひの外なる

美女をむかへ、一代に喰はぬ肴にあきみち、晝夜の酒機嫌に腎精甚だもゆるがごとし、○○かたずみのおこりたるやうなる所を、下行く水のわきかへるにいきりをさまし、これより此の道さかんに嬉しく、おもひ川の水あそびに終には腎水干はたと成て、草ばうばうたる村草の、葉末の露と身をなして、行年四十三歳を一生の夢と見なしぬ、九ッをかしらに男女四人のわすれがたみ、見るに心も亂れ髮の、有りてかいなき浮世も是までと、姿盛りをざん切りに、捨てにし俤に猶色殘りて、いとゞ哀れぞ勝りける、七日々々の墓まいり、袂の露をくりすつる、日數も漸く四十九日、中陰みてゝ精進上には、一門振舞の饗應、萬鬧敷さに取紛れての大笑ひ、とにもかくにも跡が大事と、後家も四人の子供に世話をやき、榮行くすへを見たひとの心ざし、哀にも又たのもし、おもひ草かる鎌はあれど、わすれぐさかる鎌はなき世の、むかし戀しく、寢覺がちなる夜半の徒然、伸欠々々と寐ながらに指折れば、はや二とせの冬もくれつゝ、春過ぎ夏たけて、猶寐ぐるしき蚊帳の內は、いつもなふひろい計りで、たれとふよすがもなき人戀しく、ものもゆかしかりけり、時しも夜半過ぎ雞の八聲も程ちかしとおもふ頃、そゞろに腹いたむよし、上づかひの女獨りおきあわせて白湯を調し、まづ新道の和中散、なら西大寺縄簾が順氣丸、いつかな事つんぼう程もきかず、道伯さまの萬金丹、見宜さまの錦袋子よと、禮藥の有りたけをつくせど、みぢんも聞かぬと、猶ぐし〳〵と閨も靜ならず、上づかひの女、ほうとあぐみ、作介おこして、針立の仙庵さまよびませうかといへば、いや〳〵遠い所を夜ふけてからいらぬ事、夜の明くるに間も有るまひ、そなたねむかろ、もういて寐やと、さのみ醫者よぶ程にもなかりき、折ふしおも手代の助六おきあはせて、何と成されましたと、蚊屋越にたづねまいらすれば、上づかひの女、晝上りましたすべりびゆのよごしのわざか、いかふおなかゞ痛みまするといへば、いや〳〵松がかゝがもて來たすもゝを上つたゆへならん、おこさま達はせいとうなされて、おぬしは毒のせいらいを上るによつてじや、そなたがおそばについて居ながら、なせ氣をつけぬと、しかるも御ため、ハテよいわいの、そのしかる手間にこゝへ來て、さすつてたもふとの猫なでこゑに、助六何心なく蚊

帳の内へはいりぬ、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇御指圖、御意はおもし下地はすきなり、〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、上づかいの女はいつの間にやらもろ腕の敷寐、定めて隣りで小判よむやうな夢やみるらんとおかし、それより二人が心は亂れ糸の、わけもなふ成り行するゑもかまはず、世の謗もいとはず、夜となく晝と泪は、亡夫のためにこぼさず、あいた見たさに鳴く郭公、こゝろを相圖のかり枕、數かさなりて立上る、月の影さへさゝず成りゆき、終におなかのものいひとなりぬ、誠に因果のかたまりは打てどもくだけず、情の白玉は鐵ぺきの藥研でおろせどおりず、終に此事後家の親本へかくれなければ、おぢうば共にやすからぬ事と思ひ、一門うち寄りての相談、僉議一づに相極て、先助六を追い出しぬ、もとより助六おも手代といひ、殊に二とせ餘り身躰を請取り、心のまゝにとりさばき、金子貳三百兩しこだめ出るとひとしく、四五丁わきに借宅をかまへ、米を片見せに味噌醤油を作りぬ、後家のかたへは二親入つどひてのせ話やき、是皆孫子のふびんさ故なり、後家には二親のせいどうきびしきつらさ、まゝならぬ浮世を恨み、猶助六が事をわすれず、四人の子供を捨て、二人の親をよそに見なし、夜半にまぎれて助六がかたへ翔け込む、二人の親はかなしさふびんさ、やるかたなみだにかきくれて、人をやれども歸らず、迎ひをつかはせどもどらず、ふたりの親には歎をかけ、四人の子供にはうきめを見せ、不孝といひどうよくといひ、大かたならぬ大惡人、是皆止めがたきまよひの一ッ、よくよくきけば次の手代、其外わろ上りのわかひ者、傒子作介皆とすらせぬはなかりき、きたないかな、さもしひかな、すぎしむかしの鐵屋後家、莚屋後家なども、色を好みて憂き名はたてど、人に知られても恥づかしからぬ男を好めり、今頃の後家は色を好まず男をえらばず、只首尾次第の徒然はらし、それより下ざまはかねな次第、何處を穿鑿しても、なひものはかねと賢女と、

當世乙女織卷第二終

當世乙女織卷第三

○傾城比翼の鳥 流れわたりのもろつばさ うきれの床の涙まくら

世に傾城ほど、意氣かたの能きものはなし、互に斯くとかためてからは、心底の慥かなる事、金鐵よりもかたく、武士の義理におとらず、爰によし河とかや、流のうき浪を凌ぐ中に、かわゆきはくれのかつら男、天にあらば月はひとつ影はふたつ、みつしほの端し勤め、保は松の位を恥ぢず、心はゆらに萬のやさしさは傾城をはなれ、坐敷よふて床ようて、三味線きやうで手を書いて、さり迚は古今の堀出し、端女郎には惜しい事かなと、新町四廓が是を惜しめど、何れの商賈でも貧福は是非なし、親方まづしく、太夫のこしらへ不如意成るゆへ、おのづと端居の住居となりぬ、いかさま世間にもぬけめはなひ、いづれの日にも下直なる者と見ゆるにや、一日も明日なく、もらひの十日もうり、節季〳〵の仕舞銀に事をかゝず、親方夫婦も手に入てもむ玉とかしづく、是皆世話にいふ、みめは果報のもとひぞかし、間夫の男はさらやの小八、是も身上不自由ならず、身受けも仕かぬる者にはあらねど、出入のおやかた并に一家の手前をはばかり、二とせの春秋を、待つ間うるさくとけしなく、思ひの山路越ゆるせつなさ、互に通ふ心づかひは、時づけの届け文、小宿までゆけば、万しれるやうに仕こなし、夜毎のかし朝込には遊女の身ぶりを去つて、まゆなし顔のめおと事、宿屋も小宿もあぢにうなづかせ、年中捨ばい程の物入にて、天上のぬけた間夫狂ひ、ふたりが心おしはかられてゆかし、されば愛染さまの灯燈もともすにかいなし、白髪町の觀音様への、禿が夏參もみつるに甲斐なし、上難波の稲荷さまへ、妹背の縁をしやらほどけのせぬやうにと、千とせの願ひを結びかけしも、縁のきれはは叶はぬ浮世か、小八ふと客をせきかゝつての口舌、よし川は淺からぬ、わが身の淸きをいひつのり、文を返へしつ、起請を戻しつ、終にふたりが中はさけたり、捨つる神あれば、引き上ぐる、神の結びの縁はいなもの、くるわ近き片邊に、紅屋の傳五郎と云ふ、獨り住みのおのこ有り、漸く背負荷の切うり、一日過ぎの商人なれども、心ざまいやしからず、器量もすぐれて、女中相手の商ひ上手、末々

は立身すべきものと、人々の憐愍ふかく、少々なれどもとくゐ商ひ、身過ぎ大事と、隨分そゝらぬわかい者なり、年比よし川に心ふかく、日毎夜毎にあゆみをはこび、三匁りんとかけて、假の契を心がくれど、賣つめるはきゝの女郎、殊に小八がふかまの噂、廓中にかくれなければ、なまなかいらざるもの思ひ、よしなき戀草の種まきそめて、葉ずゑの露ののぼりつめてから、落口の早いぬれをせうより、思ひ切つたこそましならめと、ふつ／＼通路をやめたり、此の頃去るもののはなしに、何なるゆへにや小八をのいたる風聞、根を堀つて是を聞くに、たしかなる事、傳五郎こゝはひとつ清水の舞臺から落ちたと思ひ、一生のおもひ出をしてのけんと、佐ごや町の堺屋より、二日の約束にて朝込みと出かけ、私儀は御覽の通り、女郎ぐるひなんどいたす身體にはあらねど、年來の思ひむねにせまつて病とならんも口惜しく、亭主吉郎兵衛とは日頃に心やすし、殊に此道のわけ知り、萬にたのもしきおのこ、それゆへつゝまず樣子をかたりて此仕合せ、金銀を以て賣買の有る皆さまがたに、たゞあふてくだされませいと申は、私共に裾つきをたゞくれいと

云ふやうなもの、遠からぬ内隨分精を出し、いんつうたる物をこしらへ、またの御げんとかきくどく、言もよしやよし川も、流の心に立る誓文を、僞りのない心に立て、嬉しき人の一言、いかさま此里へかよふ客の、似たか／＼にせい云はぬ人もなきに、上氣を去つて下行水の淺からぬ御言葉、誠の中の實事とは申しながら、勤はつとめ戀はこひ、二品に有る道の者とて、戀しらぬにも侯らはず、銀ずくめにしてもいかぬは傾城、銀つかわいでもあはるゝものじやが、あひとぐる氣にしつかりと錠がおりたか、たが相鑰をしてもあけさせる事はなりませぬが、しつかりとした返事をしてくだんせ、去りとは心といふ物は、わしが物でわしがでに、どう共合點のゆかぬもの、昨日今日が初めての御げん、女郎もいかふ氣のはるもの、とりわきて床入は、萬に付きて氣くばり有り、どうやらつがのないものじやが、ふしぎな事は初たい面から、客のやうにも思はれず、つれそふおつとに逢ごとく、實をもらしてわけもなひ、御心入もはづかしひ、おわらひ草の露程も、誠があらばわしが身は、まかせますするの一言に、すがり付たるちから草、ねがほれている事な

れば、傳五も心のありたけに、實をつくしてかたりあひ、終に妹背のかたらひをなして、とりかはす起請に色をそゝぎ、日本第一大りやうごんげんを證據に立て、たがいにみがく心のたまにも、一錢の費をなさせず、極上無類の間夫といふものになりぬ、小八もやらはら立に、初瀨といへる色をこしらへ、一とせ餘りのなじみをかくれど、殘るが戀よわすれぬが因果、たゞよし川が事をわすれず、うか〳〵思ひにくゆれど、事過ぎ事去り、誰有つて中なをさんと、とむらふ人とてもなければ、是非なく男の辱をすてゝ、よし川にあふ瀨もとめて、過ぎにしあやまりを懺悔し、年のかぎりも程なければ、あはれむかしにかへれかしと、手を合さぬ計りの侘ごと、流石よし川も、見ず知らずの云事でだに、したふはにくからぬもの成に、まして來る世をかけての男、一分を捨てゝの侘言に、ほれぼれと涙をながして、誠に忝一言、はつ瀨どのに御あひなさるる折からは、つら打なゝされやう、すこしは恨みにも存ましたれど、是非なきうき世と身を恨みて、一とせ餘りの憂き日數を、おくりまいらせ候き、色といふ字はふつ〳〵と、やめてのするゐは一筋に、後世の道をと心ざし候に、少しのがれぬ事有りて、又色染むる新衣、かさねて妻といふかため、此身の程も儘ならず、今立ち歸れとの御事は、おなじみと申し、にくうないかたさま事にて候へば、いなにはあらぬいな舟の、乘りかへてもと存ずれど、かたさまは身體よし、今あふ人はまづしき人、いかにとしてもすてがたし、心よはくも立ち歸へる、むかしにうつり候なば、やれよし川こそ身體の、能に目がくれ道をわすれ、今もへ出る色草の、敷寐のまくらよそになし、もとへ戻りしなんどとて、人のうはさにかゝりなば、わたしが身分は是非もなし、わしゆへ多くのよね達に、顏よごさせんも恥かはし、此事とてはふつつりと、おぼしめし切りくださるべし、御心ざしはわすれぬと、又涓ぐむめの內に、戀をふくみてながしめに、思ひこぼれて猶艶し、小八も共に涙にくれ、去りとは女郎と云ふものは、ゐりにつき懷の重ひにかたぶくものなりと、我にかぎらず世の中の、好色ものにも書たれど、今誠有る一言に、さりとは肝をつぶしたり、心はあくまでしたへども、なまなか拙者が身體の、今あふ男に勝りしゆへ、こゝを立てねば傾城の、一分がたゝぬとは、武士にも

まさり頼もしゝ、そふした所をむりやりに、したふも男のみれんなり、よし〳〵けなげな一言で、思ひきつたぞよし川と、女郎が立れば男も立つて、たがひに義理の泪にむせび、さらばと云ふて立歸りぬ、

○傾城たまだすき かけまくもかたじけなひ仁と義と禮と

月日の立つに御關所のないが浮世のならひにて、程なくよし河、かぎりの年季事なく勤めくるわを出て、約束かたき石をもうたず、高砂うたはぬよめいりの、こつそりとしたことぶきは、友たる人々とりもち、およつかゝが萬をさはふて、雜煮の膳に小角もそへず、おきらひな衆は勝手次第と、頭から汁椀に、ひへ食たかく盛りならべ、お汲物も汁がてら、肴はさいにとごつさくさ、ひやし物まで出し仕舞、酒の肴は始末ばなし、能い比にして氣を通し、いんでやらふと口々に、惡口たら〳〵いひ散し、門の口から今夜はの、お影での、醉ふたはの、是れからの堀江をの、ぞめいての、いんで寐たらば寐よかろと、わめきちらして歸りぬる、跡は三人よろづを仕舞、床盃のしつぽりと、水もゝらすなもらさじと、はしりめおとのかけむかひ、さしあひくらぬいもせ事、かはらぬ契を樂しみぬ、げにや歡樂きはまつて哀傷多しとかや、既に其年夏も立ち、秋も半のころしもより、傳五郎わづらひつき、次第に重き枕の夢、見るかいもなく痩せ終へ、たのみすくなきうき日數、つもり〳〵て雪見月、春をむかへて消ゑのこる、命はつれないものぞかし、花ともちらで夏も過ぎ、又秋されてはてしなや、げに病めより見るめとて、悲しさつらさ取まじへ、女もやるせなかりけり、本より纔の身上に、何はてしなき長わづらひ、身躰終にいきつきて、日毎の烟立ちがたし、されども女房かひ〴〵しく、しんぼうの有りたけ盡し、かいほうおろかならざれども、いつ本復をすべきとも、身にもかまはぬかちはだし、前だれたすきにやつれはて、有りし妻のよし川は、名のみ計りに哀れなり、有る夕暮によし川、明日の便の小買もの、さすが人めのつゝましく、風呂敷ひだりにかきいだき、右の手かざす月の隈、思はずしらずむかふさま、むかしのなじみにへたりとあふ、小八も何か實事の、あひさつをして居る内に、風呂敷づゝみほつれとけ、包みし物どもうちあくる、見ればつき米五六合、杷木二把いわう一わ、よし川はつと顔照りて、とりも得上げで涙にくれ、たゞ口

をしと計り、小八も興さめ、とも〴〵ひろひあつめ入れ、きゝしにたがひまづしき仕わざ、氣のどくさ思ひやられ侍るといへば、されば夫傳五郎殿、去年の秋の頃より煩々にわづらはれ、看病かた〴〵心を盡し候へども、有るにかひなき女の仕わざ、萬心にたらぬがち、其上ぬしにもわたしにも、一門とてはござんせず、心一つの憂き難儀、すいりやうをしてくだんせと、かたる内にも袖ぬらす、心のおくのはづかしさ、おもひやられてふびんさに、小八も見かね懐中より、金子一兩のべにつゝみてさし出し、さら世帶といひ病氣といひ、不自由さ無と存ずる、當分を是にてしのぎ、又重ねてはわたうちの、長助かたまで文してと、むかしにかはらぬ心入、よし川嬉しさ、かたじけなき御心ざし、いつの世にかはわすれ申さん、しかしながら、此の金子を持て歸り、ひろひましたと申してから、外より聞へてあとつまらず、又あからさまに申しては、どうやら夫の下心、ふたりが中にもの有りと、疑ひうけてたゝぬ事、所詮金子はもどします、御心ざしはいつまでも、わすれませぬとつき返へす、小八も尤も道理にふくし、いはるれば其の通り、いたまぬはらをさぐられては、こつちも一分立ちがたし、是には何とぞ思案も有るべしと、義理にせめられさりもどし、隨分とも病人を、たいせつにかんびやうし、二度堅固になし給へと、禮をいはれつ、氣をつけられつ、双方へこそわかれけれ、翌日小八金子拾兩懐中し、傳五郎が方へ行き、さゝやの小八と申すもの、傳五郎殿へ直に御目にかゝり申度きよし、傳五郎も聞ふる男、少しもおくするけしきなく、長病ゆへ臥所も見苦敷候へども、せつかくの御出、早々こなたへ通しませいと、双方とも初對面のあいさつ、私儀は笹屋の小八、巳前御内室うきふしの節、折々はなしましたるもの、昨夕途中にて御目にかゝり、一年餘りの御病氣、御難儀のよし御咄し、近頃慮外がましけれど、其節金子一兩御合力申候へども、以前の客方より、合力をうけ候と申しては、私の一分も立ちがたし、夫よもや受け申まじ、よしなき事にうたがひをうけ候事、世間のとなへも氣のどくと御返し候段、ためしすくなき賢女、拙者も感涙をながし立別れ罷歸り候、なれども、段々承ては御笑止千萬、その通りにしてもすておきがたく、推參仕つて候、か樣に申候とて、まつたく御内室に心殘

りての御事に候はず、少しも僞り有るにおいては、両親をならくへ落し、長く商の冥利につきはて、立所に心身とろけ申す法もあり、毛頭執着の心これなく候、御両所ともに御一家も御座なく候よし、御物語にて候ゆへ、御病中を見つがんため、憚ながら罷越し候と、金子十両さし出せば、傳五郎泪を流し、まさかの時の御心ざし、生々世々かたじけなし、御誓言の上うたがひ申し、御斷りを申すにあらず、尤御心底忝存候へども、今此のさがなき世の噂に、傳五郎こそ病中のなんぎを凌がんやうなくて、女房の客かたより、合力をうけ養生し、ふたゝび堅固になつたるが、あした事にて病をなをし、人まじはりをせんよりは、舌喰ひ切つて死ないでと、誹りをうけんも恥かしく、御心ざしは身にあまり忝候へども、右の通りに候へば、金子は返辨仕る、御懇はいつ迄も、たがひに申合さんと、金子もどせばなまなかに、小八も仕舞ひ付がたく、やつつ返しつつめひらきに、たがひに立樣男の意氣地、賢人賢女の心の玉、ひかり照りそふ天帝の、御惠なりけるにや、この家主も柳屋のみどりと云ふて分知り男、宵より二人がつめひらきを、何事やらんと立聞きし、始終をとつくとのみ込み、案内にも及ばず座敷へ出、客へのあいさつ、亭主への見舞、内儀への付屆け、扨先刻より、あれにて樣子承り、御心底驚き入り、それゆへ推參仕り候、御覽の如く傳五郎長々の病氣、内儀も手前不如意なる心づかひ、彼是しんぼう、さりとてはきどく千萬、御自分樣にも以前のおよしみとて、傳五郎への御合力、御誓言かけての御厚情、とかう言語につくされず、又傳五郎毎日のけぶり立かね候へども、男を立てうけぬ所、昨夕内儀途中にて、金子を戻す心入れ、去りとては見事なり、しかしながらおぼしより、せつかく是まで御出の所、無下にいたすも氣のどく、又傳五郎受けましては、是も男の一分たゝず、こゝは私罷り出て承はつたを幸ひに、何とぞ了簡付け申さん、まづ御持參の十両を、拙者が申受けますと、家主みどりが請取、右の金子に手前の金子十両そへて貳十両、家主合力いたす上は、世間のとなへ別儀なし、是にてゆるりと養生あれ、扨小八どの、向後は互に申合すべし、傳五郎へも相替らず御懇意頼み奉る、おそらくは御自分と私心を合せまし、亭主をとり立候はゞ、ものゝ見事な商人に、おつ付け仕立て

見せ申さん、コレ傳五郎心をば、しつかともつて養生し、何とぞ達者にならるべし、此上ながら御内儀も、いよ／＼精を出さるべしと、即座に付る了簡ゆへ、三方四方よし川が、賢なる心大に通じ、貧苦を遁れ繁昌に、柴行末とぞなれりける、女房もさし心得、盃は出したれ共、肴にすべきものもなく、アヽ氣の毒とおもふ所へ、鮎の鮨やイ、

○指櫛名代女（うかみ上つた戍佛の與兵衛かすゝめもたつさし）

生玉の田樂といふ白人が出たが見やつたかといへば、ふたつ櫛の小松が事かと云程、色道にさとい世の中、抑此二つ櫛といへる女は、近き比まで北濱中を流れわたりに、まゝたきを勤めて居たものなり、おし出した器量天職を耻ぢず、物見物出の御乘物につくにも、衣裝は御乘物の内におとらず、先づ湯具はひりんずを下もへに、ほのかなる風の吹き返へしゆかしく、下着は濃き紫の縮緬に、祐善繪の白隈、おもひの有りたけを繪に書かせ、中着は地なしのもみ裏、上はくろちりめんに白紋、裏は茶うらにして、袖べりは白じゆすの揃へ、抱へ帶なしの千鳥からげ、素足に京ざうり、櫛は名代のふたつぐし、べつかうのてりよきに、森正の高まき繪、一枚に付き三兩より下直を指さず、是程器量より身のまはり云ふ所なき奉公人が、半季に廿疋の給銀なり、外の奉公人は木綿衣裝に日野の下着で、半季四拾目より六十五匁まで、今三疋の違にて得濟まず、外の口をかせぐ事なるに、此二つ櫛が濟口は、給分の事みじんもかまはず、濟みしなに、六齋づつ夜るの御隙をもらひませねばなりませぬとの定め、主人も合點にて抱ゆること也、右六齋の隙を、宵より夜半まで一歩、夜半より明るまでを一歩にて、是も前廉よりさし込みなければ、中々つい云てならぬ事ぞかし、然れば極つて月に三兩、年中をつもれば口喰ふて、三十六兩のもらひ、四十目の給分を入れて、年中をつもれば、小判五十八匁にして貳貫百二十八匁の身體、殘らず衣類にうち込めば、見事に見ゆる筈の事なり、ある時小松北濱の客にて、正月の養父（やぶいり）入を出かけ、但馬屋七兵衛が所へ、客よりおくり狀で二日の遊興、その歸るさに戍佛の與兵衛と云ふ駕籠の所へ寄りぬ、夫婦に馳走、おすきのさつま煎といふ豆茶でもてなし、お歸りは爺（とゝ）の駕籠でおくりやります、御客さまは御歸りなり、是からはぢまへの遊びじや、先

暫ともてなす、とゝは日本橋へかけだし、かせ鱶二本提げてもどり、からし酢味噌でのみかけ、いろ〳〵の食だくみ、いか様女子の腹へも、はいればはいるものやと、めおとのものもつれづれ顔を詠るもおかし、成佛も聞ふるくめんもの、かゞあれを見よ、あれ程御酒をまいれども、御肴をようまいるによつて、御酒もあたらず、水だくさんに、お顔のつや〳〵するは、女房一分の德、さりとは果報な御生れ付やと、めおとづれにてそやし立て、何と北でも、よほどのもらひが御手に入事じやか、いつその事此の里へ御出なされ、一はたらき御働きなされましたらば、凡白人中間では、おまへのまねするものも有まい、二三年銀しこだめ、身をくろめて其銀にて、後家茶屋と出かけたらば、親子の御ため、御身のため、面白ひ事のつかみ取り、何と御望みは御座りませぬかといへば、小松も成佛が方便にのせられ、わしらも月中には、銀貳貫目程のとりが御座る、爰らの様子はどのやうな事ぞ、銀つもりを聞て、いつそ天上のぬけた事に談合が仕たいがといへば、おまへは今つき出しましても、衣裳といふものに事がかけぬが、まづはだかな衆が出まするには、談合が極まるやいなや、呉服屋と云ふものがついて、大分の衣裳を切出す事で御座ります、あたまから皆さまのは衣裳にものが入ませぬ、則白人も風呂なみで、上泊りが二拾壹匁、一切と云が七匁、内一匁を宿屋へはねます、六分の駕籠代を引ますれば、正味の手取りが五匁四分、晝夜をならし、五座づゝは御座りませう、然れば一日に正味銀二十七匁づゝ、十日に貳百七十目、一月に八百拾匁、一年に九貫七百貳拾目、きわきわのもらひが五十兩、併是れ年中に十二貫七百貳拾目、そのほか絹布代ものもらひは、何ほどゝいふかぎり知れず、壺入の客は造用として、心付け有る事なれど、是等の事は算用に入れませぬ、年中の世帶が衣裳ぐるめに銀五貫目。引殘つて七貫七百二十目の延銀、三年勤めて仕舞ふた所が、現銀二十三貫百六十匁、衣裳の分は算用の外、然るときんば三年に、銀高都合二十五貫目、嘩十露盤をとつておけど、なめ過ぎたる算用に、二つ揃ふはとのつて、そんなら三月の出替りより、萬事を頼むとの一言、其夜は成佛かたに一宿、明る日の朝飯は、鱈汁に鰤の燒もの、鯛をこくしやうに、ぼらを鱠に、一汁三菜の料理、うるめが好物

この噺、鎗さし心得て隨物店へかゝをはしらせ、精出して上りませひと、嗅火かげんよく焙り出すに、二十五入一俵、かしらも殘らず、程なく三月十三日を此里の初姿と定め、まへかたより客屋毎へさし紙を廻すに、ふたつ揃の小松年二十四五、食なり、酒なり、床よしと云いてまはし、十二日迄に方々の目見へ相すむ、おし立衣裝つきいひ所なし、前かたよりのさし込みにて、水上は大和屋新右衛門、是代屋甫家龜屋、秋田屋わたや、貝塚におしわたつての繁昌、折ふし雛屋藤七かたへ、北の客聞きおよんで、小松を趣向に、芝居すぎより出かけ、先々を仕舞くれにかゝつて、藤七かたへ來りぬ、きやくは人待つ風情にて、火燵にて夢をあぶりぬ、小松つか〳〵とざしきに行きて、立ながらひざがしらにて、是れなあ〳〵、おきさんせなあさゆりおこす、客目をさまし、寐ながら見ければ、先の季までつかひし下女なり、きやく肝をつぶして玉かといへば、はあ旦那さまか、

當世乙女織卷第三終

當世乙女織卷第四

〇男雛形歌書盡し衆道女道の道は二すじ死に行く身はたった一筋

京近き伏見の里は四季に詠有つて、こゝも捨てられぬ遊里、所が替れば氣も易はりておかしさ、近年の繁昌、京駕籠のたゆる時なく、大坂きやくも上り下りに足をさむるになれり、先づ春は城山の桃見、梅におさらず櫻にはぢず、彌生の盛りを見おろせば、烈々たる猛火のごとく、隣國の見物市をなせり、秋は菊見とて、揚屋のうら〳〵の菊畠、咲も殘らで盛が花じやと、よね達のめぐらしぶみに、客催して出かくる事なり、菊の中に多くのしやうぎをかまへ、色の葉がくれを樂しむ、此日提重一組づゝよねかたよりの持參、いろ〳〵の手を盡し、美をかざりぬる大もめ、年中のせほろぼし、前つかたは紋日に事をかきてのおもひつき、いつの程にか大さわぎのもとゝ成りぬ、冬は木幡のあけぼのよしと、玉子酒のかんはつたりと、是をゆきげしと名付て床ばなれの名殘をくみかはし、とかく浮世は色と酒とでのあふ夜を此酒が請合ふ、また

かためた物なり、こゝに京五條通烏丸の邊りに、岩戸といへるもの有り、容柔和にきわめていろ白く、お公家樣に月代させましたやうな風也、誰が見ても女色にかけたらば、たわいのなきそふな男めと、朋友を先として人々の見立男、折々近所のわかきもの共、祇園町石かけ町の暮と出かけ、岩戸をさそへばいやとも云はず、座につらなつての色酒、面白そふな顏つきなく、丁役の樣子座敷つき、心實しわいに極つたと、後にはさそふ人もなかりき、斷りなるかな男色に身をなげうち、子共中間ではよつぽど沙汰の有るわかいもの、殊に晝の勤世間のつきあひとは各別、事に望んでそのつよいといふ事、歷々の男伊達に、度々うしろ疵を付た程のきかぬもの、是程容と心のちがふたるものはなかりき、げんにようなければ世間でさたすべきやうなく、二親もたゞかうたう成ると計り、おもひの外なる事を得しらず、建仁寺町どんぐりのつじとかや云所に、猫の與右衞門と云ふ小宿をこしらへ、身のまはりを預け置、此所より出かゝる事なり、此冬はおもひつきにて、全盛の歌書羽織をこしらへ是を着す、表を紙子に、時代切れをもつてゑり肩つき袖つき、火うち馬乘まで色を違へて、針目たゞしく縫ひ立させ、うらは白繻子にしきし短冊、川原子共の合方共に、自筆を以て發句を書せ、下着は地むらさきに七枚起請、上着は墨ちりめんに、淺黃の鹿子紋、褶にみじかふひつちがへ、件の歌書羽織に、二尺三寸の太刀作り、七所の金拵へ、わらざうりに白羽二重のひねり鼻緒、與右衞門が御供にての出かけ姿、晝夜によつて是程までにもちがふものか、有時與右衞門、今晩の御供は、憚りながら替りを立申すべきの訴訟、私嚊が妹、伏見の墨染にまかり在候、今日産致候よし、明日はかかがまいりますれど、今晩見舞ふてくれよとの無心、井筒本まで御供いたしおきまして、參りませうといへば、いや〳〵其方座敷になふては、手合が違ふて酒にも成るまい、是非に及ばぬ、今宵ばかりは宗旨をかへて、鐘木町にて一夜別時と出かけ直され、駕籠を急げと存よらざる思ひ付に、與右衞門も肝をつぶして、旦は西から日が出さんせうず、月も水から御出なさるゝで御座りませうと、兎角する内に、御駕籠が參りましたと、いふかと思へば三枚肩、飛ぶがごとくに伏見へつく、與右衞門が日比念ごろあひとて、見すや

がもとより立花屋のときわと色つき、思ひもよらぬ伏見のかり枕、打わつての私語、岩戸が器量にときわがうち込み、與右衛門がさしこみに、宿屋の手あひは痒き所へ手の行くやうなり、岩戸ごこともなふありがたふなつて、終には高野大師の掟をそむき、百八煩惱の珠數を切つて、二つ分にて三十六夕の輪珠數をくりかけ二とせ餘りの信心に、多のかねをたゝき上げたる鐘木町の通ひも、願以此功徳が不首尾千萬、與右衛門がかたへも付け屆け有つて、衣類膓指までとり上られ、こらしめのためとて追出さるゝ所、手と身とに成つて、たよらふ島もなき身の果は、死なふより外の思案もなかりき、されども與右衛門夫婦の者ども、日頃の御恩は斯した時とて、暫く此所にかくまはれて、憂日數をぞおくりける、家主此事を聞つけ、最前の付けとゞけに後日を恐れ、與右衛門を呼付け、言語道斷のふとい仕形と、家請けかたへ付け屆け有つて、家を追ひ出すに極りぬ、岩戸つくゞゝおもひけるは、我ゆへ科なき與右衛門夫婦、難ぎにおよぶを眼前見ながら、うかゝゝ爰に居る筈もなし、所詮たゞ此所を立のき、いかなる淵河へもうき身を沈め、いつそ仇名を立つ波に殘し、長く水底の水神となつて、流を立る女の守り共成りなんと思ひ定め、夜半にまぎれてかしこを出、世を宇治川のはやき瀨を、心にかけてぞ急ぎぬる、

○心の經かたびら　戀と情をつなぐ川霧　苦と鹽とをおし分る舟

頃は中秋末の七日、月まだ遲きくらき夜に、誰とはしらずさきだつて、南無阿彌陀佛の女聲、いぶかしとさし覗き、見れば常盤がおもかげ、死裝束にやつれはて、欄干の外面に立つ、岩戸は夢の心地にて、袂にとりつき、ときわかといふこゑ、たぞとふり歸り、見れば戀しき夫のすがた、さりとはゆかしなつかしと、互にひしといだきつき、たゞ涙にぞむせびぬる、おつとは漸なみだをおさへ、いかにとしても誠ならず、なにのため何として、こゝまでは來けるぞ、いぶかしさよとたづぬれば、女も泪に聲しほれ、さればいな御事のみ、絶へてたよりもなかりしゆへ、與右衛門かたまで人を仕立て、樣子をたづねにつかはせど、内は戸ざして人もなく、使は返事もきかで歸る、其折ふし與右衛門殿、おまへをたづねにありくとて、御籠屋かたまで見へましで、くわしく樣子きゝましたが、あひらしい

は與右衛門めおと、たとひ家をば追出され、とも〳〵るらういたせばとて、日頃御恩をうけながら、いかで憂き身を惜しまんと、めおとは二手にわかれつゝ、御行末を尋ぬるよし、扨は日頃の短氣ゆへ、もはやさきだち給ふとおもひ、なまなか女のやいばにふし、死にそこなふては見ぐるしゝ、身をなげ御跡したはんと、是まで漸參りしが、こなたさまには何をして、爰にはおはしける事ぞ、されば拙者も聞かるゝ通り、とかく死ねばつまらねど、一腰までをとられしゆへ、及物なければ是非もなし、身をなげむなしくなるべきと、是までは來りしが、所をもこそ多からんに、此所にてめぐりあひ、最期に顏をみつ瀬川、ふかきゑにしとおぼゆるよと、又さめ〳〵となきければ、ときわも嬉しさ涙ながら、誠にいはんす通りなり、さりし御げんの其儘で、互にわかれ行水の、あはで過ぎにしものならば、未來も心もとなきに、最期を一所にいたす事、歎の中の悅なり、私は書おきしたゝめ、此欄干にこよりして、結び殘して候が、御かき置はとたづぬれば、愚の女の云ふ事や、子をふびんがる親にこそ、名殘もおしみ一禮をも、述べて相果て申さんに、仕すごしした

が科ぞとて、どこの國にかむげつけなひ、帷子一つで追出し、死恥をさらさすが、親たるものゝ仕わざなるか、是程までにどうよくな、親に書置所かと、或はうらみ身をかこち、たゞむせかへる計りなり、女房も御理り、御恨みの段御尤、さりながら只今での、御恨みは愚智のいたり、とにかく最期をいそがんと、二人もろともらんかんの、外面に立ちて西に向ひ、先づ念佛はさしをきて、二人は顏を見合せ、是れが此の世の見果てぞや、一念生を引くといへば、かならずみれんのなきやうに、未來の契をたがへなと、互に帶をしつかとしめ、かゝへ帶にて帶と帶、ほどけぬやうにしつかとしめ、南無阿彌陀佛ともろともに、川へざんぶと入けるは、哀れにも猶ふびん也、おりふし所の百姓ども、苅もてかへる葭蘆の、うき世わたりと漕船に、四五人集つて通りしが、はやわたり來る初雁の、こゑも幽かに立花の、小島が崎の霧の隈、何やらものゝとさしよせて、よく〳〵みれば二十をば、越すやこさずの女房と、廿五六のわか男、帶と帶とをつなぎ合はせ、水にひたつて息もはや、たゆる計りに見へければ、わかき者どもあはてふためき、まづ〳〵舟にとり乘せ

て、水を吐せつくすりを灌ぎ、さま〴〵に看病し、段段子細をたづぬれば、世に幽かなる息を上げ、始終をかたり聞かせ、迚も斯てもながらへぬ、二人が命で候へば、たゞ御慈悲に死なせてたべ、偏に頼み奉ると、泪ながらにかきくどく、所の者ども力を付け、氣遣ひするなわかい者、こちとらがかくまふから、ころしも指もさゝせはせぬ、氣遣ひするなといたはりて、おのが在所へつれ歸り、庵室のあきたるに、二人をふかく忍ばせをき、養生おこたる所なく、むら中よりてかくまへ置く、心底の程こそたのもしけれ、此の事くるわにかくれなく、親方丁中五人組、在所への付け屆け、かゝへの女郎を盜み出し、かけ落をいたすものこれあれば、御代官所へ申上げ、頭を剃て獄門にかけ、廓の口にさらしをき、女郎は年を切りまして、心まかせにつかふが法、急度二人をわたさるべし、もしまた違背めさるゝと、村中の難儀たるべしとのいひ分、地下の者ども少しも驚くけしきなく、其方達が法といふは、抱への女郎を盜み出し、何方でもあれ世帶をし、ぬつくりとして居る時の事、御存ないか此のむかひ島百軒の所、往古より長鳶百挺下しおかれ、何によらず

河流を、拾ひとれとの諚意、去る頃二人のもの、身を投げ流れ來りしゆへ、衣類なりともはぎとらんと、熊手にひつかけひろひしが、いまだじやうごう來らざるにや、少々息の通ひしゆへ、さま〴〵いたはり人となす、今ではひろひし者共が、家子被官にて候ぞ、指でもさして御見やれと、兩方言あらくなり、既に訴におよべども、百姓共が理分となり、女郎屋方は理をうしなひ、はう〳〵御前を下りけり、二人の親は聞付けて、悦びかしこへかけつけ、岩戸をもらひ歸へりたきよりの侘、所の者共聞き屆け、なる程ときわと夫婦にして、家督をゆづり申されなば、早速つかはし申べきが、證文いたし申さるべきやと、念の入たるいひ分、世悴を下され候上、何しに違背候べきとのうけあひ、證文慥成る事ゆへ、吉日をえらび、既に返すべきに定まりぬ、其の日は一門うち寄つての迎ひ、村中への禮物とて、金子百兩樽肴、所の庄屋立合ひ是をうけ取り、くつは立花屋を呼びにつかはし、今日兩人を親里へもどす、御禮銀として金子百兩を得たり、殘らずこの方へとらんに子細なけれど、ときわをはなし其方も損付殘念の至なるべし、去るによつて金五十兩、身

ども心入を以て其方へつかはす、殘る五十兩は、夫婦見立の振舞金、村中いわゐの造用金、親里身躰れきれきなる所へ、傾城を嫁にとらるべき事、世間躰遠慮氣の毒に思はれん、去るによつて常盤事は、拙者が娘にいたし、是れより仕付つかはすべきと、殘るかたなき庄屋のさばき、上上たれば下も下たり、百姓なれども心ざし、武士にも勝りてのたのもしき、とかく浮世は世話にいふ、身を捨てゝこそうかむ瀨もあれじや、まづ以て目出たふ御座る、四海浪靜にて、跡はいづれも同音々々、

○北國金の森京屋式部はふせんりやうな紋所に付て九軒の立すがた

丸に八文字は車屋の大州、思ひ切つたよねめかぬ紋所、意氣かたさぞとおしはかられ、きつかうに藤ごもゑは丸屋の小藤、あの姿に美しひといふ假名付をしたやうな、扨もありていな紋じやといへば、そふいやるな、江戸の三浦四郎右衛門松君に、高尾といへるも紅葉が定紋、きやくがたのかりてみる時、見知りになつてよひといふ、ふせんりやうは京屋の式部、類紋なく、至れるかな上津御かた、さしぬきのくゝりなどに付させらるゝ紋なり、心ざま傾城をはなれ、みぢんも野鄙なることなく、天性生れ付たる式部、さりしむかしの雲のうへ、紫そゝる俤、時なる哉一日もあき日なく、四五日手前よりさし込みなければ、手に入る事叶はず、世界の男の魂、此の色に身を飛ばす事、あだかも蓮の肉の暫しも住せざるがごとし、爰にこんりん奈良九之介と字したる大盡、此色に通ひ初め、多の客にはりあひ、銀に負けず、器量にまけず、酒にもおとらず、遊藝勝りて、愛敬有りて水多く、女郎にはかわひがられ、今の世の十分おとこ、肩を幷べて暫しもこたゆる客はなかりき、折ふし吉田屋喜左衛門きやく、加州金澤にかくれなき森といふ大盡、問屋づきしての色遊び、則問屋が手車に乘りて、今色つかさの紫式部、光る金子六十兩の庭錢、くるわ始まつての見事なさばき、名有る末社數十人、ひざを屈して前後を守護す、他國きやくの事なれば、藝女郎の風流まで、手をつくしての色狂ひ、一日も外の客に合を、金銀石死のごとく、弓手も馬手も銀で切しく色大將、いかなる大盡がよせかけても、東は九軒の門をかぎり、西は佐渡屋町の堀をかぎつて、顏を出させず、多の大盡責めあぐみ、暫らく手をむなしうしてこそくらしけれ、

有時大盡宿屋をめされ、誠に此の頃は萬氣の付たる馳走、數日の亂酒、暫くは酒を休めて、腹中の養生だけ、何とぞしつぽりとした事をおもひつかれよ、藝女郎の風流是も殘らず見つくし、座頭共が三味線にも聞あく、何と此の里にたいこもちとやらん、口がるな噺の相手になるものはない事かとの御尋ね、されば京都には、神樂くわんさい、あふむ一中、其の外わか手のたいこ共數多御座候、中にもかぐらと申すは入道いたし、只今は曉雲と申し、近頃まで愛許に罷在候へども、此のごろは上京、扨當地には江戸又、だまれの茂右衞門、江戸又事はさいつ頃、山崎寶寺開帳の節、女房參詣いたし候迚、三十石の上り船にて入水いたし相果候、江戸また妹脊のわかれをかなしみ、世をあぢきなく思ひとりて、發心行脚の身となつて候、茂右衞門事はいかなる所存候にや廓を見捨て、おきやく方もゆるし給はぬを、むりにだまれと行方なし、其の外一兩人候へども、或は箸でもはさまれぬ程ののふづもの、今一人は古今のなめ助、極々下卑たる者共、結局御座敷の妨げたるべし、こゝに竹本頼母と申す淨瑠璃太夫、則此里に住居いたし候へば、たいこもちと申にはあらねど、あなたこなた御座鋪を相勤め候、淨瑠璃は年來筑後がひざをはなれず、ゆかを勤むる者にて候へば、ふしは先生がくつさめまでをのがさず、聲に愛有つて淨瑠璃うつくしうかたりなし、どこやら筑後よりうまい所有り、うたよく謳ひ、三味線少し仕り、ぞつこん心底奇麗にうまれつき、今の世の座敷持ち、申さう所はなけれども、酒のならぬが殘念、しかしながら是は淨瑠璃と食とでおして參り申すべし、且亦道具屋吉右衞門と申、是も淨瑠璃の名人、老躰たれども音聲の達者、一ふし稀なる太夫にて、是れも廓へ入こみ御座敷を勤め申され候が、此頃有人のはなしに、始の吉右衞門は猫またが喰ふて仕舞い、只今の吉右衞門はねこまたじやと申風聞候て、禿はこわがる、よねにはさしあふ、おのづとくるはへはいらぬよし、客さまがたの風聞、なふ〳〵頼母と、上るり『夕さればなふ旅くたびれをしつほり〳〵とあひ宿なしのかり枕、旦はやや〳〵出小船、乘せてこむふの馬子衆じやないか、笠がよく似た菅笠が、ゑゑいゑゑいゑんのはなにて小手まねき、招く手を取り契約を、ますびこめたるわらんぢの、紐をとく〳〵ぬる

るも有り、駕籠を軒端におろさせて、都のたれといふも有り、わきてにぎわふ氣色なり、奈良九は夜毎に井筒屋へ、ふかきいもせの諸釣瓶、くみかはしぬる水くきの、たゆる間もなき屆けぶみ、見た計りにてあふよしも、奈良九が心ぞあはれなる、漸引ふね大濱がいひ廻はしにて、暫が內のかしすがた、たがひに見しは久しぶり、取りまじへたるものがたり、さりとはうるさの此の頃や、事かりそめに賣かけて、もはや二十日に餘る日を、ちよつと問屋へいにもせず、夜る晝そばに引付けて、身仕舞にだにもごさねば、ちよつとのあふせもまゝならず、初對面から借す事は、ならぬ筈じやと宿屋へも、さし込の有る事なれば、宿屋のまゝにもなりがたく、夫れゆへうち過ぎまいらせたり、あまつさへ昨日より、身うけのことをとやかくと、談合仕かけ候へども、色々いひけし云ひなぐり、少しもとりあへ申さねば、宿屋へ談合仕かけつゝ、急に廓をとり出し、抱ふておかふの國本へ、つれてゆかふのなんどゝて、たゞいやらしい事ばかり、それゆへ昨日書きにくい、文を認めおくりしと、はや涙ぐむ俤に、いとゞかはゆさ彌增さり、さればきのふの文を見て、俄の事にとうわくし、とやかく案ずる計りなり、所詮案じた計りでは、定めて先を越さるべし、其の時何程悔んでも、益ない事と金百兩、手附とおもひ懷中し、出られぬ首尾を出て來たが、いつそ今宵の中にきわめ、何とすつかりさせまいかと、亭主太郎右衞門に談合を仕かけ、何とぞ世話をやかれよといへば、何が扨々、あらひ風をも當てまひよねを、やろか越路の雪國へ、いつかないつかなそこらはさせぬ、氣づかひ成されな此あつつ、智惠の水底かすり出し、今宵の中に埒明けて、敵めにすつかりさせ申さん、暫らくそれにとかけ出し、親かた京屋に云ひきかせ、四年の年季を八百兩、內百兩は手付金、殘るは近々渡さんと、證文極め立歸り、かよう／＼ときをはせて、先悅の御盃、大きもので一杯イ、せい／＼／＼といふしでの、そりや神棚へ三寸を上げ、鈴をならして千早振る、上する女子すゞまでも、あら目出たやと悅の、聲と一度に吉田屋の、上する女子入つごひ、呼ましやゝあとさけぶ聲、さゝやくこゑは旦の曉、さらば／″＼と云ひかはし、式部は宿屋へ、奈良九之助は、駕籠を飛せて歸りけり、森は此の事夢にも知らず、初對面から約束で、女郎の借しかり

いたさぬと、かたふ極めて當たるを、暫しといふて今までは、何を爲されて御座つたぞ、先おくたびれで御座りませう、玉子酒でも進じましし、休ましませひの當言を、ごうやら斯やら云上り、後は大きな口舌となり、式部は今宵をかぎりにて、おもふ男にそふ身受け、流石女の悲しさは、思はず鼻の先へ出、おまへの女房になつたとき、そないにいふていぢらんせ、女郎を勤めて居る內は、かさねはならぬといはせもはてず、合點じや、なる程見事にとめて見せよ、それ〳〵亭主と氣をせいて、今宵の內に身受をする、急で極めて歸られよと、口舌やら身受けやられ目出たいと口々に、いわふやら悦ぶやら、中直しやら祝言やら、わけは京屋の返事をば、待宵時雨兄弟はこ、賴母は淨瑠璃かたり出す、珍米の勝兵衛は、きせるくわへてらうそくの、新清水をきらんとて、口あひいふて立たるに、禿の不知野に行あたり、烟をつくやら血を吐くやら、粹の藤兵衛かちとこざいな、伽羅をきくとて香爐をば、座敷の中へうちあげる、物眞似の喜平次は、あんまり夜食を喰ひ過し、手水鉢の麓成る、おもとが森にこがくれて、さもしひものをはきちらす、一切わけはなかりけり、所へ亭主喜左衛門、なげくびをして立歸る、大盡、樣子はごうじやと有る、無念な事はも一足、おそふて外へしてやられ、跡扁に延ると書いて、ならぬといふ字に讀ますると、めいりたる調子、こちらのかせかけた調子には一つもあはず、大盡の不興さ顏色かわり、去りとは太夫殿きこへませぬ、頃日より拙者身受の事、たび〳〵申出せしに、まだおそからぬ事などゝ、十三月なる返事をなされ、下地をとくとしめしあわせ、近頃辱のかゝせやう、白骨となつてもわすれませぬ、身受の金までうけとり置き、餘所の內儀になつていて、きめごまかに賣てやらしやるは、大きな親方おもひ、わしらが手代どもにも、少しあやからせたい事で御座ると、喰ひつくやうなねすり事、式部わろびれたるけしきなく、さればいな身受けの事、是れとても親かた次第、夕邊にも知れましたら、なか〳〵けふの勤めには、出しもせまいし出もしまひ、しらぬが證據はけふの勤め、受け出して御世話に、なされまするも少はかわひさ、外へ參るも誠有る御心からは少しもにくふないはずよ、そのうへかわいひ男のかたへ、うけ出されて行く嬉しさ、御推量下さるべし

と、あたつてあたらぬ返事、大盡いかな聞入れず、傾城狂ひは是れまで、揚屋のさはいは問屋殿、よろしくおさばきなさるべし、拙者は是れよりすぐに立つ、それ伏見まで御座をかれ、下々共は追々に、大津の宿までまいるべしと、にがり切たる顔つきにて、立賣堀より直ぐ通り、伏見をさして上りぬ、跡に殘るは多の末社、たいこもち、座頭の坊、類火にあふたやうな顔つき、肝腎の物は一錢も得とらず、漸のけた物は夜食、

〇淺草のよね饅頭（あんの外なる大坂もの丶太刀先　あんの外なる比丘尼の行先）奈良九之助宿へ歸へり、殘金七百兩借錢彼れ是れ、千兩と積つてのさいかく、大盡がね死一倍の口入を聞出し、樣々と世話をやけども、いまだ兩親年若なりとて、千兩といふ金調はず、漸親仁酒に醉はれて晝寢の間に、印判を盜み出し、いつもの兩替屋へ云ひ遣し、追付け手形持參いたし金子を受けとり申さんといひつかはしけるを、兩替の手代きゝあやまり、右の金子をもたせ遣しぬれば、折ふし親父めをさまし、表の見世に端居して、たばこに醉ざめの眠さましして居らるゝ所へ、金子千兩持參のよし、親仁こちからいふてはやらぬが、誰がいふて居たとの吟味、若旦那より仰せ下されしとの返答、いや〳〵門違で哉あらふ、其上息子は宿にゐぬさふなと、げんにようもなひ顔つき、兩替の手代、はていな事と持て歸りぬ、もて來る跡へ奈良九之介手形を 持參し金子請取んと云ふ所へ、最前の手代立歸り、親仁樣は御存なき由、御手形參る上、別儀は御座有るまじつれ共、親仁さまへ直にあひわたし申べきよし、彼是どうやらいひかたごつき、親父のなら九之介何とやら首尾いな物になり下る、手形をうたがはれ、物事手まはし延引、重て商もなりがたしと、むつとげになつて立歸へる、兩替の手代めいわくがり、わび事がてら、昨晩百兩の御手形をさいふより、奈良九段々手あい惡敷、親仁も氣づいて、時ならぬ勘定と出かくる、此百兩より事おこり、前々よりの仕過し顯はれ、大もめになるは一定、然れば身受の金所へ行かず、座敷籠といふ樣な事で有るべし、さりとては太夫手前、くつわの手まへ揚屋の手前、そのほか廓中でのさりさたならん、今は生きても死んでもの、分別せいでは叶はぬところ、しかしながら銀事で死んだと云はれてはいよ〳〵たゝず、去ればとて大坂に、まぢ〳〵しても居られぬ所、所詮一まづ江戸

へ立越し、身の落着をも極めんと思ひ、衣類手道具金子二十兩、手代の佐介が情によつて、あぶ付け一駄のかけ落ち男、無念さ哀れさ口惜しさ、思ひやれかしこへかしこ、おもへどつてもなりがたし、この事廓にかくれなく、式部おやかたより井筒屋へ跡金のさいそく、不埒なるよし互に付屆け有つて、手付の百兩は生ながらの損金、式部親かたの徳分なり、とにも斯くにもうらめしきは式部身の上、身に替りかわゆき男にはなれ、憂き涙川うきふしの、歌にうたはれとむらはれ、生きるかひなき身なれども、もしものあふ瀬をたのしみに、又の勤のつらさをも、戀に替たる心いき、情しらぬは是れをさみす、情有は心をさつし、客もすてねばおのづから、むかしの餘情にかわりなし、只易りしは奈良九之助、面白からざる初旅の、ゆめさへもなく明暮と、木賃のまくらかぞへつゝ、行ば程なく武藏野や、ひろき御國に着きにけり、こゝも浮世をわたる海、何にとりつく島もなく、暫し出入衆と、憂日數をぞおくりける、有る日奈良九之介たゞ一人、しゆく願の子細有つて、淺草寺に詣でぬ、げにや美景都にはぢず、參詣の群集、ものゝふは云ふにたらず、丁人までも男は男らしく、女も風俗かい〴〵しく、萬大體なる事、古郷にて聞きしにたがはず、めなれぬ風景の面白さに、爰かしこを詠めやり、芝酒のほろ醉に鼻うたを樂しみ、暫時の鬱氣をやしなふ所へ、屋形ふうなるわかひもの二三人、どれにどれたるさけきげん、なら九の介が腰ざしの小尻をけちらし、あまつさへ惡口たら〳〵、とかくの堪忍なりがたく、呼びもどしてのいひ分、兩方拔き合せて刄をあらそふ、奈良九も大坂では、少したしなみの有る男にや、一人は小げさをかけて打はなし、殘る二人に手を負せ、方々見まはすに、折こそよかめれ、のがるゝだけはと、足をばかりに淺草を出はなれ、辰巳の方に一かまへ有る屋鋪の有りしを、是れ幸ひとかけこみ、鬪諍の意趣を相述べ、偏へに奉レ願のよし御聞屆け、早速御かくまへ、いかなる御屋鋪成らんとよく〳〵きけば、車善七といふ長吏屋敷、いかなること有つても、一度かくまへて出さぬ法、天下にかくれなし、幸ひなる所へかけ込み、からき命を助かり、斯くて此手下に付、三四年の春秋をおくりぬ、大坂の二親、獨子の行衞をかなしみ、江府殘りなくたづねさせけるに、有所さだかに知

れがたし、暫く逗留したる出入衆のより親かたへ、通路有つて大坂への知らせ、伯父從弟二三人づれにて江府に立越し、もらひたき相談、寄親方より內證を云ひ込み、古例有つて伊丹酒二丁、金子壹兩、鳥目貳貫五百文、其外は銘々の器量によつて、色々の持參是れ有、もらひうくるのよし、右先例の外に、加賀絹三十疋、眞綿三十把、蠟燭五百挺、干鯛五箱、鰹節十箱、寄親案內にて何れも同道、玄關にて善七家老出合ひ、諸事つめひらき有つて、いこんがう四足出したり、是れをはきてはるかに奥へ通り、大書院のこなたにて、いこんがうをぬぎ捨て、かしこへ通る、善七出てゝのあひさつ、古例の外色々の御持參、口存の由一禮を相述べ、さて奈良九之介を白砂へよぶ、長屋組の者共とて四五人付て出、かうべを地に付けて謹んで畏こまる、善七奈良九が名をよび、おのれ此の度仰せらるゝによつて、しやばへ返へす、向後はやまつて仕損じこれなく、孝心をはげむべしとの云ひ付け、此所より外へ出るをしやばといひけるは、子細有る事なるべし、奈良九之介畏つてかしこを立つ、それより月代を剃り、沐浴など仕舞いて、持參の小袖に下袴羽織を着し、書院へ通りて、善七對座になをりぬれば、其儘引かへてのあひさつ、不思議に御命助け置き候へば、ふたゝび御歸參これ有事、目出度珍重の至りなりとて、祝言をなして一家にわたし、悅の歸國命はものだね、榮行くすゑの目出たさ、式部は斯る事とは夢にもしらず、前つかた闘諍の節、討ち果しぬると計り、涙にくたすうきふしの袂、十とせの年あくとひとしく、こき墨染の袂にやつれ、攝泉のさかひなる片邊に草庵を結んで、奈良九が菩提をとふてくらしぬ、奈良九歸參の悔しさ、煩惱即菩提とは斯る姿か、替れば易る人界のありさま、知れぬは人の行末の、空さだめなき村時雨、

當世乙女織卷第四終

當世乙女織卷第五

○江戸黒髪の觀音 女しんさく愛身の捨所は淺草になく露の命

京の女郎に、長崎の衣裝を着せて、江戸のはりをもたせ、大坂の九軒で買ふて見たひと、此の道にすける色人の願ひ、尤もなるかな、花は三芳野人は武士、東武は諸國の侍つきあひ、物事利發に氣も活なる所ゆへ、町人百姓に至るまで、男は更也、よねの風俗も上方に替はり、はりつよふして情もふかし、浮世の浪をおよぎ越し、色をうづまくともゐ屋權之助内に、玉川といへるは松のくらい、たぐひなき艶顔、抑日本に六玉川とて、此名所六所あり、いづれも風景美なるゆへにや此の名を呼ぶ、今此の玉川は此の外の名物、立姿居姿寐すがた、いづちに一ついひ所なく、どこから見ても面をむかふに、美女にそむける所なきにや、面向不背の玉川、流れは本玉河の水に氣をしやれ、萬よくしこなしたる俤、すぐれて名高く、吸物椀が二つなると、はや此の君が噂にのみかけ、此のほとぼりのさめぬ内にと、本庄兩國橋の雨むかひより、三丁立のさゝ舟をとばせ、じやりば右衛門坂を瞰うたにて、いつ行くをおぼへず、此の遊門にこけ込む事、智有るも愚なるも、懷のおもひ内は、魂本土に歸る事を知らず、愛に淺草橋の邊りに、並川とかやいふ酒店に、替へ名を浪と云ふ獨息子、此の玉川に通ひ初め、いつの程にか口錢買ひ置きの酒代金、此の玉川へ流れ込む事、偏に石瓦のごとし、親此の事を聞つけ、一旦こらしめのため家を追出し、暫らく浮世わたりの艱難といふ瀨戸にて、鹽をふむ事になりぬ、母親手代どもの情によつて、歸參の日和を見んため、くろふね丁といふ所に錠をおろし、纔の店をしつらひ幽なるくらし、愛が中にもわすれぬは玉川が情け、生れ付たるは美男の德、玉川が方より、折々のあふ瀨を越ゆる船賃をつゞけ、男を買て契をたがへず、或はぞめきのゆきゝに事よせ、小宿のかり枕にいぶせきをいとはず、むかしに易らぬ心ざしをはこぶ事、是れはりのつよひ心に武のいきかたをまなぶがゆへ也、されば人のさがなきは都部にかぎらす、玉川が間夫ぐるひ、くるわにばつとさた有つて、世間にうたへばくつわも知り、勤ひかせてのせつかん、せつなきに付て猶わすれず、いかなる責

に御合せ候ても、此の事におゐては止む事ならず、もつとも傾城は金銀を以てうる事、わしにかぎらず、客も心があればこそ、大分のかねをついやし戀を買ふ、我ゆへ親おやかたの首尾をそこなひ、浪々の憂身となるを、見捨きゝ捨にもなり難く、自然見ゆればあひもしつ、言葉もかけつ文のつて、たとへ心にそまねども、うはべばかりに立るも有り、ましてあの浪殿には、わけ有てあひし事なれば、いか程せつかんなされても、此の色計りはふつつりと、止めます事はなりませぬ、おろしなりともころしなりとも、そこは御勝手次第になされませと、いかな事聞入れず、親かた大きに立腹し、幾萬兩のかねになるとて、其一言では堪忍ならず、するの女郎どもの、大きながいになる事なれば、もはや堪忍なりがたし、數多の女郎の見ごりのためとて、護國寺の門前音羽町、大文字や野平次かたへ、年の間をがらり八百兩、證文添へて茶屋奉公にぞ出しける、玉川嬉しさ、たとへいかなる憂き勤でも、浪殿にだにあふなれば、少しもいとはぬ心なるに、是からさきはいよ〳〵あひよし、嬉しのわが身や、よろこばしの身の果報やと、戀ゆへ却つて今のうき身を悦ぶ、扨聞き傳へし諸客前後を諍ひて、二年が中に貳千兩、大文字屋が内は、ひかりかゞやく玉川の君とてもてはやしぬ、いかなるしゆくじうの因果にや、かりそめの風の心ちといひしが、幾程なくてこしたゝず、いかなる病にやと、醫療は殘るかたもなく、山々嶽々にとの加持祈禱、何に愚はなけれども、少しも快氣の色なし、一年計りは人にもあはず、養生に而巳心をつくす、流石にかゝる身の悲しさは、親かたもあひそをつかし、もとのおやかたともゑや方へもござんと人を遣しぬれば、根出しの親も死にはて、まして一門ゆかりとてもなし、請人きもいりも、大火事の節死にはて、いづくへやるべき所もなし、大分間たる奉公人の事にて候へば、火たきになり共なされ御つかひ下さるべし、萬一本復いたせば御仕合さ、なか〳〵いきた方こかしにうけとらず、それゆへ暫くは風呂の下なごたかせ、餘りものどもをくはせ置たり、されども仕つけぬ憂手わざなれば、無念の泪に火ももへず、おやかたは勿論、傍輩とても事とふよすがなければ、後にはうしろなる木部屋の片角に、薬をつがねてしとねとし、憂かりし月日をないてくらしぬ、元より客屋の

内なれば、母屋も座敷もにぎ〳〵しく、二階座しきは歌に口舌に、閨はくゆりの遠香もたへず、うかりし勤めうるさのざしきや、いつの世にかは此くげんをば、のがるゝ事の有りやせめて、おもひわづらひたりけるも、今斯る身にくらぶれば、有しむかしがましならめ、湯一つ又は水一つ、くれ手なければ咽も渇し、呼ども聲の出ばこそ、なくもなかれず茫然と、泪にくたすわが袂、ほす日をわかぬ天人界、五躰の五つをさらへて、たゞ不淨苦をうくるがごとし、過去生々にていかなりし、科をなしけるむくひなるぞや、淺ましのなれの果て、口惜しの行末やと、こぶしを握り齒ぎりをしつ、ひれふしこみてなき居たれ、折こそよからね間夫の男は、渡世のためにさそらへて、仙臺とかやいふ所に、一生萬死の床にふし、傳もたよりもなかりけり、つらき内にもわすれぬは、たゞ此の人の事をのみ、案じわづらふ計なり、初めの程はほうばいも、情の糧をもくれたりしが、事の多きにとりまぎれ、一日二日もかてたへて、事とひかはす人もなし、おやかたももてあつかひ、番太の乞食をひそかにまねき、酒を飮ませつ一歩をとらせつ、おのれあの女をすかし出し、いづちへなりとも捨てゝ來よ、いつかごほうびをとらせんと、ひたすらに頼みければ、さすが下﨟のかなしさは、物もらひぬる嬉しさに、後日のとがめもうちわすれ、萬事はわたしに御まかせ、よろしくはからひ申さんと、畏つて玉川がふしどへ行く、淺草の觀音に、ふしぎの御僧上がたより登り給ひ、いか樣の病氣にても、けちゑんのため御符にて、忽ちなをし下さるよし、昨日も幾たり、盲は眼をひらき、こしの立たぬは立ち所にあゆみて歸る、亂氣なるは忽ちに正氣を得る、希代の大げんじやにておはするとて、參詣の群集おびたゞし、いざとよ番太が御供申し、御符を受けてまいらせんといへば、今捨るとは夢にも知らず、病苦の助かるといふが嬉しく、たふとき人の言や、然らばぐしてたまはれ、病氣本復いたして後、御恩の御禮申さんといへば、御禮までも候らはゞ、はやとくとくと夕空も、たそがれつぐるころしも、古き乘物に助け乘せられ、漸かしこに至りぬ、と有る所に乘物をおろし置き、御符は明け六つ、朝水の初尾を汲みて下さるよし、こよひは是に御つやましませ、わが身は宿も程近し、ちよつと歸へりて小屋頭に、斷り立てゝ參り

申さんと、云ひ捨てゝ歸りぬ、

○傾城出世の松　雨三絃にこゑぬれてさてもゆかしき音羽まちの茶屋ばなし

無慙なるかな玉河、人音稀なる野の末に、忙然とただ獨り、番太が歸へるをまつがねに、徒然わぶる鐘のこゑ、四つ九つもつくれども、誰とふよすがもなかりき、扨は叶はぬ事有てか、但しは宿も程ちかければ、能き頃來べき心かや、よし〳〵かゝるうき身の末、何におそれて命を惜しまん、たゞ御慈悲に命を召され、未來を助けたまはれと、夜もすがら觀音の、御名を稱へて待ち居たり、程なく夜半の鐘もなり、雞の鳴音も虫の音も、佛の御名もなくころも、ともにつれだつなき寐入り、見はてぬ夢もきへて行く、消殘りしは朝霧と、有てかいなき身の獨り、番太もとはず明にけり、もはや御符もたまはる時節、何としてかは遲かりきと、乘物の戸をきしり明け、漸として這ひ出で、四方をはるかに見渡せば、びやう〳〵としたる野路の末、秋風おこつて松寒く、身にしみ〴〵と哀れをそふ、かしこを見ればこはいかに、松の下枝に三味線をかけ、乘物の上には茶碗壹つ、飯うづだかく盛捨に、さしおろしの菅笠、紫竹の杖を添へたり、玉川はつところゑを上げ、はら立や口をしやうらめしやどうよくや、たふとき御符をいたゞかせ、病苦を助け得させんとは、扨は僞り捨てしよな、此の三味線を添へたるは、袖乞ひせよといふ事か、迚も死すべき命ならば、かやうに辱をさらさせずと、日頃のよしみに食事をとめ、なぜ屋の内ではころさぬぞ、つれなきしかた死したりとも、恨はつきじとひれふして、さめ〴〵とこそなき居たれ、參詣の諸見物、さて〳〵ふびんの事どもやと、手ん手に錢をなぐる事、たゞ降る雨のごとくなり、折ふしいづちのお衆とも見へず、ものゝふ四五人たちかゝり、樣子をとくと御覽ずるに、袖乞ひすべき者とも見へず、其の上古き乘物に乘せ、三味線を添へたるてい、何とも合點のゆかぬもの、いづくいかなるものなるぞと、人をはらひて潛かに御たづねなさる、玉川つゝむにいとまなく、吉原を出しより音羽町の段々、くわしく申上ければ、さりとてはふびんな事、にくさは二人の親方めら、牛馬を捨つる事だにも、御吟味あそばす御慈悲の御世、まして人たるものを、捨つるといふは大惡人、御詮儀とゞけられ下されんと、兩人の親かたをめされ、先づよしはらの親方、六年の內大分

の金銀をもうけ、彼にたゝぬを見すかし八百両にうりし科代、のがるゝ所あらざるとて、八百両の金をはかせ玉川に下され、音羽町のおやかためも、二年の内に大分の金子をもふけ、病中に捨つる科、其罪はなはだ軽からずと、抱への奉公人は殘しおかれ、親かた夫婦そのほか下々、下女僕子にいたるまで、いづれも着のまゝにて追出され、東武を御拂ひ有つて、諸色のこらず玉川に下さるとの御事、有がたし〳〵と、玉川はおとは町に歸へりぬ、晝夜觀音の像を拜して普門品を讀誦す、此の功德にや難病時を得て本復、今に始めぬ大悲のちかひ、たつとびても猶餘有り、されども玉川、浪といふ男にあふまで、異男にはあはぬちかひを、神かけ佛を誓もんに入て、色といふ字をおもひ切たる證據に、黑髮を以て觀音の像を縫にぬはせ、金子百両を添へて淺草に納む、此の事町中にかくれなく、男女の見物此の御堂に詣る事引もちぎらず、町中の色人、玉川が心中をふびんがり、大文字やの後家茶屋と名高く、せつなもざしきのあくまはなかりき、仙臺の浪はかゝる事ともしらず、漸々病氣は本復仕りたれど、段々の不仕合、いのちからがら夜に入つて東武につきぬ、一夜をあかすべきあてもなければ、今宵は是にて一夜をあかし、明けなば思案も有るべき物をと、直に大文字屋の軒端に彳み、案内を乞ひて人をよび出し、此の內に玉川といふお山があらん、浪といふものぢや、ちよつとあひたひと云ひ入るれば、玉川夢ともわきまへがたく、表へかけいでて手をとつて內に入れ、さて〳〵うれしのお歸りや、有がたの御利生やと、觀音樣をおがむやら、泣くやらまたは笑ふやら、偏に狂氣のごとくなり、彼は一つも合點がゆかず、內のてい玉川が姿、つとめする身ぶりにあらず、髮は切れども、そのうつくしさむかしにまさりて、猶彌增思ひ草、根から合點は一つもいかねど、こなたへといふにうちつれて、一間なる所へ入る、つらひ事、情なひ事、どうよくなる事、うらめしひ事、悲しひ事、嬉しひ事はけふの今宵と、とりまじへたる物がたり、浪は仙臺不仕合せの一通り、たがひにかたりなぐさみ、久しぶりでの盞事、もう御氣づかひな事はなひ、諸議有金何かをかけ、三千両の身躰、すこしも殘らずおぬしさまのもの、向後此の屋の旦那さま、すこしも御意をそむくなと、下々どもへもいひわたし、主人の

ごとくもてなしぬ、女ながらも賢なる心、琢くをもつてひかる玉河、うちよする浪の音羽町での、茶屋がしら色がしら、身躰頭の指折、その一つにぞ乗りける、

〇京晙のつれ駕籠うたも三味線もあひかたのよび棒ぐみ女

秋夜の寐ぐるしき、鰥女のうち寄りて、世に男程結構なる物有るなし、極りたる女を持ちながら、若衆妾をあひし、おもひの儘に心をなぐさむ、そのほかやもめずみなる男も、拾文のはま遊女より、六十三匁までの賣色有りて、それ〴〵に樂しむ、こゝにくらべていはんは恐れあれども、天子に十二人、諸侯に九人、太夫に七人、士に二人とやらん、お定りさへいかひ事なり、か樣に極めてあるからは、どのやうな事があればとて、女のかたから嫉妬もならず、女は男を獨り持つてからは、異男に心を通はす事も叶はず、きけば天竺には男の傾城が有げな、それゆへ女子も相應に、けんへいな色狂ひをするげな、日本程ものゝ自由な所はないが、是ればつかりはあんまり片手うちな極めじやないかと、世を恨みたるはなしを仕出せば、傍の女のいひけるは、それはそなたの見やうがせばさに、物事が不自由に見ゆる、此日本ほど萬をすいにこしらへた所があらふか、夫に男の傾城町がないとはごうぞ、芝居といふものはなんじやとおもやる、あれは男の傾城町ではないか、子供でも立役でも、皆女子の買ふてなぐさむものにこしらへたものなり、さて亦芝居のない國々でも、相應の慰みはある事ぞかし、大坂から十五六里南へ行きて、加多の粟島、泉州では佐野がせうじ、此所の男どもは、年中東の方へ綱引きに行き、年の內九の月計りは、夫皆留守なり、その留守の間のつれ〴〵は、旅衆の泊る宿々へ行て、色酒をのみかけ、鼻の高ひ生れつきのたくましひ男どもを、撰取りにして我が物にするげな、江戸には堺町木挽町、京では川原、大坂では道頓堀、國々へは旅芝居、いづ國の浦々津々山里迄、事のかけぬやうにこしらへて有る、男の傾城町がまだ見へませぬか、それを不自由なと見るは、皆こちの氣がせばいからなり、虛なら銀を拵らへて、そろ〳〵と出かけて見さしやれと、世界をたつた一つかみに、さりとは今時の女のさばけやう、なか〳〵男の及ぶものにあらず、こゝに室町の片邊りに、舟津屋のなぎ、梅田屋のはやとて、京中にかくれのない、名取りの牙婆、方々の問屋よりいろい

ろの絹布をうけ込み、それ〴〵に賣拂ふ事、女の所作には大分の事なり、京中に牙婆おほき中に、此の二人つね〴〵中よくて、商も遊も棒ぐみ、荷ふたらば枴の折れる程な好色ものなり、舟津屋のなぎは山本掃部、むめだやのはやは淺尾重次郎、宿屋もわかひものも、祿にはなびく戀風、ぞつとする程なうれしひ君が一言に、身をわすれ家業を忘れ、終日終夜の色あらそひ、二女がつれぶしに、つたやが傳受をうたひ出せば、ふたりの男色は次郎三が秘曲に、いやといはれぬねじめを引出す、うしや憂かりしうきねの床には、はや建仁寺のだらり百八、ぼんのうのきづなを切れとの、無常の使に留守はつかへど、いやといはれぬ枕の伽羅は、すがりがちなる梢は鳥、ないてわかれてまた旦の日も、夜もすがらにあふ事のみに、うつら〳〵と日はくれて、さんとせつきといへる關の戸に着きけり、明けての算用、一節季は云ひもくろめたれど、二人が手前銀高七貫目ほどの不足、何ともさいかく成がたく、二人に此の事に氣をやみけり、是れぞ誠の戀病といふものなるべし、折ふし加賀屋の嘉吉といふもの、此のなぎに心ふかく、わけまよふ初戀山の時鳥、はやを賴みてかきくどく、おもひの尺を筆にいはせ、心でいはせ目でいはせ、終に此の戀首尾はかならず、旦の晩松島屋源六かたにて、くどくは〳〵の返事、嘉吉が嬉しさはやが利口さ、偏に御影と、嘉吉が悦びは魂空に、日の暮夜の明くるを待ちかね、くれにかゝつていかなるさわりか出來なんものをと、朝飯後より内を出かけ、其日は萬太夫替りを見物、芝居果より日の暮るゝまで、千とせをすぐす心のはこびは、かり橋のほとりにたゆたふ折ふし、供なき二丁のつれ駕籠、いかさまたゞの駕籠にはあらじと、めかれせず詠め居るに、ほどなくこゝにかき込み、互にしりあふた中なれど、二人が下心に物あればにや、あらたまりてのあひさつ、座鋪ははやがとりもち、どうやら斯やら四條川原の浪を枕に、千夜一夜のかりぶし、それよりあふ夜の數も重り、妻もち顏のもろつばさ、比翼のかたらひ連理の思ひ葉、人しれぬ中さぞ成れりける、頃は文月六日の夜、銀河の契を四條川原の松島屋にうつし、なを行する忍を二つの星にちかひて、替るなかはりますまひとのふたりが言は、貴妃玄宗に來る世をちぎり、朱をそゝぎて玉の盞をかはすがごと

し、嘉吉旦は圓山の參會、歸るさをこゝに待つ宵すがた、かならずその約束、さりとは氣のどく、かたるもつらしまたかたらぬも、下の心に物有り顏にて、御心もおさまし、旦は五十年の命をせつなにちゃめる御嘉例の算用日、そうめん喰せて酒を飲せて、扨その跡が通ひ算盤、其いやらしさこゝに一つ、かたづかぬ算用あひがござんする、三條の紀伊國屋へ、田舍客の婚姻小袖、注文うけ取り悉く、問屋殿までわたしまし、もはや銀取る計りじやに、おとゝひの朝參宮とて、みなみな伊勢へ立れまし、下向まで代銀を、請とる事がなりませぬ、そふあればとて賣物を、まあこちへとも云ひがたし、是非下向まで此の銀は待ねばならず、其上またあの絹津屋の御隱居が、後共いはする人でなし、定めて算用過ぎたりとも、なか〳〵つゐはもどられまひ、然ればこゝへおそふなる、はて氣の毒とさしうつぶき、思案する手に酒うけて、嘉吉にさいてこれ申、よい事思ひ付きました、客衆がもどる其間、金百兩の預り手形、わしが當名にしてくだんせ、そのふり手がたをちよつと出し、算用さらりと仕舞ませよ、さすればこゝへまいるのが、初夜時分には丁どらく、これ〳〵是が上分別、手形を一枚書んせと、何の氣もなふ云ひまはし、それ〳〵硯、手形紙、はやう〳〵とさし出せば、嘉吉は當分銀の出る事にはあらず、たゞ旦の夜の來る首尾が、能いと計りに心がつき、さりとは智惠かな〳〵と、さら〳〵〳〵と書認め、鼻紙入より判とり出し、墨ぐみにでつかりと、おしてわたせばうけ取つて、のべのあひさへちよつと入れ、そしらぬ顏して酒のみちらし、夜半過からつれ立ちて、旦の晩はかならずと、いふて別れてぐつつりと、扨寢ておきて髮結ふて、有物有銀通をもたせ、手形を持つて旦那へ行き、通を出しおき立て、有銀有もの相渡し、扨預りの手形を出し、是は加賀屋の嘉吉さま、今朝御出成されまし、只今急なる事有りて、少の間小判が入る、ふり手形をしてやる程に、是をわたして算用せよ、手形の金子は嘉吉さま、御算用が御ざんすげな、是にて算用相濟むと、通を卜させ請取ぬ、この算用を合さん計り、あひたふもなひ男にのぼり、我が仕過しをまんまとすまし、そしらぬ顏にて浮世をわたる、女の知惠にはおそろしき、たくみの程、仕かけの程、見る人聞く人舌をふるひぬ、其後ふなづや加賀屋の嘉吉、盃前の

算用あひに、百両のふり手形出ぬ、嘉吉かたには慥なる、手形を仕たればいやといはれず、とやかくいへば、親仁の手前不首尾千萬、是れに恐れて子細も得いはず、無念ながらも金子を調へ、どうやら斯やら內をくろめぬ、なぎがかたへは文をやれども、病氣といふて一度も出合はず、手を入れ問屋の樣子をとへども、參宮をした客もなし、跡かたもなひ大きなうそなり、今は是非なし金百兩の、傾城ぐるひとおもひあきらめ、はやを賴みて金子の事は、みぢんもこなたにとらふと存せぬ、たゞあひたひといへどしたへど、分けが惡ひと其の手もくはず、戀の淵瀨にはまるはひとり、うかみ上がつた女はふたり、よいめにあふて銀をとつたは、ふたりの男色、

當世乙女織巻第五終

當世乙女織巻第六

○現在戀の山登りつめたる煩惱の因果坂乙車にのりの道をわすれてぬぎ捨てた色衣

夫れ出家は官家居兒酒肆淫坊の四家に至らずといへり、爰に奥州二本松紫雲山來迎寺は、知恩院の末寺、本尊は聖德太子の御作、御尺二尺五寸の靈像、諸旦那おほく繁昌の福寺、ことに庭前に美景をうつし、佐藤ざくうといふ名木、宮城野の木萩は所から、數をつくして詠多し、去るによつて諸人、春秋二季宴をもよほし、餘院にまさりてたつとく見ゆ、此寺の同宿に、雪堂と云ふ若僧有り、親は同國田町におゐて、かくれなき分限者、辻の太郎五郎といふものゝ末子、十三の年父此寺へおくり師にあたふ、能書才學の新發意、法燈挑ぐべき器量、師の坊の奔走一門の悅び、一子出家すれば九屬天に生ずるおもひ、兩親は申すにおよばず、一家ともにたのもしく思ひて、をり〳〵の下山にも、一門の饗應なゝめならず、雪堂十七才にして本地へ上り、江戸檀林の學寮につとむ、六年の春秋をおくり、二十四才にて中上り、新談儀の殊勝さ、ふるなの

辯舌をあざむき、たうとき所のかんもん、𦂶ならば首筋の所を說いてきかせければ、一門は申すにおよばず、諸旦那の老若男女、ありがたさ胸にてつし、諸人かつこうの思ひをなせり、それよりまた檀林に付て、淨土一宗の奥儀をきはめ、程なく十二年の學寮を勤め、西堂にて古鄕へかへり、又法談を相宣べ、追付け綸旨頂戴のため、參内をとぐるの由相觸れければ、當寺念佛講中を始めとして、諸旦那親類申すに及ばず、われおとらずと來迎寺に詣で、金銀を積む事山のごとし、五七日の中に金貳百兩、去りとは佛法繁昌の御代なり、雪堂貳百兩の金を跡付に仕込んでのりかけ一駄、久七といへる下部一人傳馬にひつそひ、紫雲山をしのゝめに立て、程なく江戶につきぬ、先づ方丈への御禮を勤め、知恩院への御書かた〴〵ひまどり、五六日の逗留、雪堂つく〴〵思ひけるは、我稚きより師の坊にかしづき、漸々入となつては當地のだんりんを勤め、學文にいとまなく、終に遊里の酒を呑まず、抑此の戒門をたもつといつぱ、其道を知つて其道をたつといふ事、是すなはち戒門、惡なければ善なきの道理、又ぞや寺に立歸へらば、ふたゝび江戶かみがたの地をふむ事あるべからず、われ終に此の年まで男女淫欲の道をしらず、しばしのいとまを幸に、さんやとやらんへ出かけ、色欲の道を知るべし、色欲の道を知つて色欲の道をたつが則是戒門なり、知らずしておのづから立は戒門にあらず、一念發するときんば戒行具足といふべからず、今此斯く思ひ付たるが、則是破戒なり、しやかにやしゆだら有り、御子らごらに妾有り、聖德太子に后あつて御子あまた有り、是等はみな佛の御事、おかして罪になる事ならば、佛なんぞ此道を犯さんや、五戒の中邪淫戒といましめたまふは、邪に婬をおかすと讀む、是碎陽侠の事なり、貴女をおかすに何の罪あらんや、女は五十六十になつても、執念ふかきゆへをもつて、佛もいましめおかれたり、男色はこれ犯すまじき所を犯せば、そのつみ深しといへども、盛のすくなきものなるゆへ、是をゆるしておかれたりと經論を工夫し、始めて戀の山路をふみ分け、ほだしの色門に入つて、するがや菊川といふになれそめ、晝夜五日を揚詰に、おもしろひどうぶくらをおぼへ、とくしらざりし事ぞ悔しきと、過にし質を結句くやみぬ、それより方丈の御書翰を申請けて京都に

上り、首尾よく御綸旨を頂戴し、即座に上人の號をゆるされ、色衣に金銀をちりばめたる袈裟をひつかけ、三尺の高座に上るといふ事、佛法の德なればこそ、凡下の身として斯る御判をたまはる事、有がたしともたつとしとも、くらぶべき方もなき譽なり、誠に寸善尺魔の世のならひ、思ひの外なる邪氣にさそはれ、東武におゐて淫欲をおかし初め、それより內心俗氣にかへつて、殆んど古郷の戻り道を忘れ、勿躰なくも一大事の御綸旨を、鼻紙袋におし込み、色文と相ずまひをさせ、男色女色の中門に入つて、晝夜色酒に身を蕩かし、時花（はやり）歌の有りたけを覺へぬき、經論佛の御事は夢にも思ひ出さず、されども限り有つて止まらんとするに、跡付け輕くなつて、又東武を指て下りぬ、

○現在劒の山（のぼせつめたる虛文の因果經日車に乘りし事なはら立ちて切すてた色衣）

斯くて雪堂旅宿へ着きて、何かさしをき先づ小判の有りたけをかぞへ見るに、路銀ほど殘して二十兩二步、よしや是れだけの色狂ひと、又するがやの菊川と出かけ、內への付け屆けよねへのみやげ、庭錢かたがたに拾兩三步、懷のかるふなるほど心細く、いよ〳〵名殘ぞおしまれける、其の夜は長途のつかれにや、色酒にいき付き、床をいそがせたわひもなく寐入りぬ、一間隔てあひ床は千代崎、侍客にて四つ半にさやくを見おくり、夜半すぎまでは獨寐の夢揃へ、たゞ寐覺にも戀しきは間夫の男、おなじ廓の商人、たばこやの甚七に、二世かけての約束、折々客の隙をうかゞひ、小宿をこしらへて出合ひぬ、其夜さぶらひきやく早歸へりしを、さひわひなる哉折よしと思ひつきて、引込禿の乙女といひしが、折しもわづらひて、宵より部屋にふしたるをまねき、しか〴〵の事をいひふくめ、乙女を寐させておのが寐姿を作り置き、其身は彼の小宿へ行きぬ、菊川が間夫はたいこの喜兵衞、是れもまたなきふかき中なるが、誰か告げん此事おやかたに隱れなく、人もこそ多きに、たいこ持との間夫ぐるひ、大きなる客の妨げ、商賣しらずの身知らずとて、日每のせつかん、憂き目の數をつくしてつらかりき、誰か此事を親かたへ告げて、かゝるうきめに合せけるよと、忍びしのびに此事をきゝ出すに、慥かならねど千代崎がしらせたるとの風說、女心のはかなさは、今一詮議する心もつかず、やらはら立のくど〳〵と千代崎をにくみぬ、菊川客のそひぶしに、ぐう〳〵

と目もあはで、此事のみを思ひあかしぬ、思ひ返せご〳〵、惡しと思ふ一念やまず、今宵のひとりねをさいわひ、何とぞしてさしころし、日比さかしらをなしつる、恨の程をはらさんものをと、雪堂がそばを漸々に身じろき、二階を忍び折をうかゞひ、わが玉くしげのふたをおしのけ、剃刀をさがし出し、包ながら懷へおし入れ、有りし所へ立歸へる、流石女のかなしさは、心ふるひて足たゝず、斯くては何の役には立じと、汲みすてたる銚子を引きよせ、天もくに二杯ひつかけ、寐まき一つの小はぎ小高くつかみ、かゝげを帶にて引きしめ、まくり手のひぢおしはり、足ふみなをして馬乘りに、胸のほとりをしつかとおさへ、たぶさをとつて引きあをのけ、小ぶゑのかゝりを二刀に、うつと計りぞ限りなる、菊川二の息ほつとつき、剃刀をよく拭ひて二階がうしのさまよりすて、心をしづめたばこをのみ、さらぬていにて始めのごとく、添臥をして居たるてい、如何さま女には稀なる仕わざ、表の手代には見せを仕舞て、夜食の最中天井より、血のつたふにて肝をつぶし、かけ上つて是れを見るに、引込禿の乙女が咽ぶゑ、二刀にさし朱にそみたり、やれ人ごろし

よといふ程こそあれ、所の名主は申すにおよばず、丁中殘らず擧り寄つて既に上沙汰になりぬ、先づ千代崎客を仕舞ひ、禿をばおのれが閨にふさせ、いづくへゆきたりとの御とがめ、私客の隙をうかゞひ、內々主人の目をかすめ、たばこや甚七と申す者と間夫ぐるひをいたし、今宵の侍客はやく御かへりなされしを、さいわひの事と存じ、四つ半より內をぬけ出て、小宿茶碗屋傳三郎かたに只今まで居り申し、事さわがしきに立歸へり、樣子を存ぜしとのいひかた、たばこや甚七茶碗屋夫婦をめしよせられ、濃かなる御詮議、申し口雙方同前、まづ一方へかたづきぬ、扨て菊川が客召し出され、いづくのものとの御吟味、出家の事なるゆへ所をかくし、其上醫者ともいひ樂坊主ともいひかたごきつき、そのわけ分明ならざるによつて、殊の外なる御あやしみ、鼻紙袋まで御詮議ありければ、頂戴の綸旨出てたり、それより御吟味段つよく、奧州二本松紫雲山來迎寺弟子雪堂と云ふ事しれたり、外の儀はさし置き、先づ以て上をかろんじ大事の綸旨をそまつにいたし穢し奉る事、罪科かろきにあらずとて、先づかたはらへ引すへ、扨菊川を御詮議、酒に給

べ醉ひ寐入り候ゆへ存ぜぬとのいひわけ、下着の裙に血の付たるを御うたがひ有つて、是れもさま〳〵御詮議、菊川少しも仰天のていなく、されば女は月毎に障りこれあり、隨分そまつになきやうに、身持を大事にいたせども、思はずも影を見せ候事、折にふれては御はづかしひ事がちに候とのいひかた、みぢんも氣のなひかほつき、御詮議に御あぐみ成さるゝ所へ、夜番の左介、先刻表をめぐり候所に、二階より物すて候ゆへ拾ひ上げ見申候へば、剃刀にて候ゆへ、いかさま子細も有るべき事と、用水の桶の下へさし入れ置き候よしにて指し出すを、包紙を取捨て御らん有に、表には丸に一重菊、うらには丸に三つ柏の二つ紋を銘にほらせたり、家内の傾城どもを召され、御詮議をとげらるゝ所に、菊川剃刀に極りぬ、いよ〳〵御疑ひふかしとて御詮議つよし、菊川が申口には、なる程剃刀は私が道具にて御座候へ共、錠をおろさぬ櫛箱の儀、いづれの誰が出し候も存ぜずと、中々けしき是とは見えず、兎角詮議に御あぐみ、かさねて千代さきが床の邊を御らんずるに、女の足形ふたつ三つ殘れり、是を知るべに菊川が足のうらを御覽ずるに、血付たり、是れより御詮議強くなつて、既にとうじやうに御かけなさるべきよし、菊川といじやうに御かけなさるべきにおそれて、段々白狀におよび、其科明白にきはまり、菊川は人ごろし、雪堂は破戒の科、其うへ綸旨を穢し奉つるの科、甚もつて法外の見ごりと、木の空へ上つて六法をふる姿になられた、菊川も同じくさしおとりを踊るやうな手つきになりにき、

〇今様寶永曾我　西横堀工藤くわんさいが事　同あふみの小藤兵衛が事

嬉しさと悲しさは、竹馬に鞭をうつ童もよくおぼゆる物なり、されば貞享の年號元祿に易りて三とせ餘りは、世上の實貫も下直にて、民手足をのばし君が代の千代萬歳を尊み、有がたさ忝なさ、嬉しさ世にあまりて目出たし、元祿四年の初冬、信州善光寺の如來、大坂天王寺の講堂に於て御開帳、諸人たつとみたてまつり、足を空にしての參詣、蟻のむらがるがごとし、鳥目百文づゝにて御印もんをいたゞけば、いかなる惡人も極樂への直ぐ通り、地獄のさたも錢がするといふ事、其時諸人初めてさとりぬ、御佛信州へ御歸座の時は、萬民名殘りを惜み奉つて、感淚たもとをひたしなげきかなしむ事、釋尊入滅の悲みも、かくやと

おぼへてたつとし、其の極月末つかたより、米穀高直になつて、翌年の春夏は、はや八拾五匁といふころに胸をいためぬ、せつなさの秋たけ冬のころは、程なく九十三匁といふものになつて、質藏も節季もつまる師走かな、鷺けや念佛衆生節季候、年末や鰤の片荷に石一つ、鰤つる家は稀に、めぐろさへつらぬ正月、扨もうち揃ふて歳暮のわるさ、是天せいの道理、俵物見ることまれに、たまたま馬に米を負ふせて町を通ればめづらしさけなりさにや、おほくの子どもが馬の後を圍み、米よ米よとはやし事して通しぬれば、いかな氣づよひ馬士も、ほろりと泪をこぼしぬ、それより百目百拾匁、百貳拾匁といふ聲になりぬ、かなしひかななげかしひかな、持佛堂の如來、いつしか香のくゆりをも聞たまはず、花瓶の花はいつのまゝにや、淡路から來る柴船を見るやうになりぬ、おのづから火の用心も惡し、油もなければ、くらきより暗に歸へる衆生の有さま、如來も不便におぼし召て、責ては茶湯佛供のくげけんなりとも、助け得させんとやおぼしけん、世界中の如來中間、御心をひとつにして、繪像木像念佛は申すに及ばず、質屋の藏へとび去りたまふ、御慈悲の程こそ廣大なれ、斯くてもわたられぬ世界、首だけの借錢、およぎ越されぬくるしみの海、濱の眞砂のかずかず、悲しさつらさの餘り、科なき善光寺の如來を恨み、されども東西南北の國々よりのぼる道者は、例年にすぐれて多し、不作なるには似げなしと思ひ、耕作の善惡を詩れば、幾とせもかかもうち續きたる豐年、米薪木、油にこなす種類、雜穀ともぶによらなる事、年々に不足なし、殊に大坂までのほすに及ばず、いづくの商人かはしらず、大分金銀を持ち下り、津々浦々にてかいとれば、下つかたの繁昌今此の時とかたる、然れば是れを買ふたるもの、唐へやわたる、天竺へや行きけん、たくさんに有る物をないやうに見せて、下直なる物を高ふするは、扨々意地の惡い事、かゝる商人どもの惡さ、子孫にむくひすなをにはし、蚤の息天に通ずるならひ、時なるかな節なる哉、果てじと、愚なる者のいのり、きくもなかなかおそろ元祿十七年の年號、卯月初めつかた目出度寶永に易りぬ、有がたや伊勢太神宮託してのたまはく、粟萬石の數ほど、氏子を御覽有るべきとの神勅、家々の軒におはらへの降る事、偏にあめあられのごとし、誰つく

るゝはなけれども、東國の方より參り初て、ほどなく都にうつり來て、大坂へわたり、西國におしひろまり、神風南北に吹きつたへて、老若の貴賤男女、わきて六七歲以上の童ども、路銀ももたず旅の用意もなく、飛び出し〳〵夢にもしらぬ、神路山へと心ざし、其身その儘步行はだしにて參る事、塒を出づるむら雀の、朝日にむかふに似たりけり、去るによつて京大坂のうとく人、道中に出ばりをかまへ、町々の大道はしごを以て半を隔て、半分は往來の見物を通し、又半分は參宮人を通し、所々にて施行す、身體相應の心ざしとて、手拭菅笠きやはんわらんず、財布煎菓子(いりぐわし)、散藥丸藥、八軒屋には三十石の寄進ぶね、伏見までの夜食にせよとて、赤飯白むし餅酒を、小船に積んでくばりありく、岡には夜通しのおくり灯燈、凡後の卯月の末より、皐月の廿日餘りまで、日毎に寄進施行をなす事、言語筆紙につくしがたし、道中の旅籠屋には木賃をとらず、あらけなき馬かた心なき舟長まで、參宮人をふびんがりて、そのいたはる事父母のごとし、國國町々在々所々のばち利生、其數あげてかぞへがたし、かゝる有がたき神道、神代已來いかなる書にも見えず、もとよりかたりつたふるをも聞かず、誠にありがたき御利生、偏に神と君との道直に、納まる御代のしるしなりとて、悅ばざるはなかりき、されば有るが中に悲しきは傾城、禿の內はゆるしにて、物見物詣ですへ〳〵は外づかひにもありき、すこしはうさもはらしけるが、新造の旦(あした)より門出る事叶はず、罪なくて十とせの左遷、見るもうるさし聞くも憂し、こゝに新町通筋繪屋の大磯とかやいへるは、端居勤めの女郎なれども、今頃ときめきて終に局の居姿を見せず、ずいぶんはきゝの女郎なれども賣る顏もせず、宿屋の女子どもまでにかわひがられ、情を知つて戀ふかく、舍我といへる間夫男、大磯にゆかりて斯くは付つらめ、ふたりが中さぞとおしはかられてゆかし、或夜大磯朝込みの私語に、いかなれば此の頃は、しきりに參宮の心ざしふかく、たゞ夢にのみ幾度といふ數を知らず、あまつさへ此の頃は、たが入れしともなく、手箱の內に劔さきのおはらへ串と、少さき杉なへを入れたり、人にもかたらず、隨分尊み奉れば、それよりいよ〳〵おきふしに、たゞ此事のわすれず、勤めもそでに心ならず、とやせん斯くと思ふ心の暇波、よるべ定

めぬうきふしの身なれば、思ひよりにし計りにて、いたづらに日をかさぬるぞ口惜しき、斯て此のまゝに思ひくらさんもやるせなし、何とぞ御はからひにて、つれ玉へかしとかきくどく、男も心ざし、ふびんにも殊勝がりて、いかにもしてともなひ詣づべきが、我つれといはれなば、何とやらん欠け落ち心中にも似ていやなり、参宮のよし書置したゝめて、門だに越なばそれより末は、とも斯くも心やすし、しかしわがそゝのかしつれ出したらんやうならば、もし追手などにあひたらん時、いひわけかたくもつて六かしかるべし、我はすがたをやつし、雇ひ男のていして行くべし、誰にあふたりともそのあしらひ然るべし、しからば旦(あす)の夜かならずと、何か事くどくいひかはしてわかれぬ、爰に西横堀の片邊に、工藤くわんさいとて、猛悪無道のくせもの、其身小家の主ともよばれ、人がましきていもすべき者なりしが、生れつき極々の下卑もの、一生買いぐらひを本とし、懸つたがさいご人のものを濟さず、たび／＼茶屋がたにて、はがれてもごるばか者、内々大磯に心をかけ、くどけどもうなづかず、方々宿屋を替へてよびにやれ共、兎を見せにおこすと、いなやさしあひなりとて賣らず、くわんさい日ごろ此事に胸をこがす、何としてかは聞き出しけん、年比心やすき朋友に、返江の小藤兵衛八わた三ぶとて、工藤におとらぬ無分別もの、是等を潜にまねきよせ、聞けば大磯やとひ男を一人ぐしてぬけ参宮のよし、しかも今宵の太鼓すぎに、廓を忍び出づる談合、さるもの憒に耳を打たり、いざ／＼われらも参宮し、雇男をおつちらし、大磯をうばひとり、どこぞにふかくかくしをき、忍び／＼に通ひなば、日頃の無念をはらすといひ、面白からでは有まいか、此儀はいかがと云ひければ、二人は事なく打うなづき、日頃たがひの念ごろは、かふした時のためにて有る、然らば急ぎこしらへよと、三人一所に心をあはせ、太鼓すぎより宿を出で、深江堤に出むかひて、おそしとこそは待居たれ、

〇今様分別曾我　綸屋の大磯がきどく頭巾の事　曾我の十郎右衛門が忍び駕籠の事

斯くとはいざや白浪の、たつ日を極め大磯は、二番だいこのひまをうかゞひ、東口よりそろりと出て、新町ばしを東へわたれば、夾箱に風呂敷つゝみ、一荷に荷なふたわか男、これ／＼爰にといふこゑに、嬉しさ飛

びつく計りにて、みればやつした形のおかしさ、互に云はねど心でおかしく、安堂寺町をまつすぐに、是れもおなじく深江堤を、心しづかにあゆみ行く、道の傍に火繩たきすて、二三人道をさへぎる、曾我大磯を馬手にかこひ、何者なれば往來を塞ぐ、夜ふかに通れば、此方にも用心をいたす、のかねばのけて通り樣も有る、さあのくまいかと荷をおろし、二尺壹寸のこい口くつろげ、反うちかけてつつかくれば、三人ともに驚きさわぎ、いやくるしうもないもの、參宮人にてつれ待ちあはす、只御通り候へとやり過ごし、中にも八わた三ぶがいふ樣、いかにとしても手ごわひやつ、惡敷かゝつてけがばしいたすな、とかく供なる男をかたらひ、角なるものを一つとらせ、だましてうばひ取るべきぞ、我にまかせと聲をかけ、それへ御座るは大磯ではないか、お供の男衆、少しかりませうといひけるを、能く聞けばくわんさい、其外も聞た聲、内々聞た事も有る、盗人でなし追手でなし、氣遣ひなしと落ついて、大磯をまたせをき、何の御用とさしよれば、先づ以て長の旅、女中の御供大儀〳〵、あなづりがましく候へども、是は酒手と一歩をはづみ、扨我々は大磯も、かね〴〵よく知られたもの、樣子は段々かふかふじやが、何とかたふど仕てくれまひか、一味におゐては其方の、末々ためにもならふかと、心底のこさずあかすれば、曾我はおかしさ吹き出す計り、臍をおさへて打うなづき、おのれ一ばい喰はせてやらんと、慇懃にこしをかゞめ、何がさて〳〵、わたしも男引はせぬ、なる程一身いたすべし、併しながら大磯どのいまだ合點をめされぬよし、事火急には參るまい、先は道中路銀も不自由、まあ貳三兩進せられ、下づくろひをなされませ、それから先はうけとつた、扨皆樣は明晩も夜通しに一日路、さきへ行き越し御參宮、とくと御仕舞あそばして、御下向は本海道、京都は五條橋通山本屋兵九郎、是へ御泊りあそばして、翌日是にて待ちたまへ、晝ざかりか八つ過ぎには、わしらもそれへ參るべし、そこにて段々申あはせ、御望みのやうになし申さん、たとへどうした事有ても、私は町のもの、親かた少しも知らざれば、後日のとがめは候はず、萬事は拙者に御まかせと、たゞ取るやうに請合ひ、金子三兩うけ取つて、大磯に吹込めば、なるほど合點とうなづきあひ、誰ぞとおもたりやくわんさいさま、八わ

た三さぶま、近江さま、よう思ひ立まいらんす、おつれになりたふござんすが、まだ〳〵あす一日は、追手がこふもしれませぬ、さすれば結句おためが惡い、此の男衆のいやるとをり、一日路先立て、五條とやらでまたしやんせ、まあ只今は何よりの、御心付で御ざんした、御禮は京で申ませう、さあそんならばみなさんは、まづさきへいてくださんせ、廓の衆が見りやわるひ、皆さらばゑと云ひければ、如何にも〳〵、委細は京都で、さらば〳〵と先だちて、三人の者どもは、翌日一日夜どほしのたて駕籠にて、一日路さきへ行く〳〵、二人はまんまと一ぱいすゝらせ、思ひのまゝに路銀は仕てやる、夾箱をば小あげにもたせて、二人もろとも駕籠にうち乘り、道中無事にて、外宮内宮末社〳〵のみやめぐり、ふたみあさま、磯部の御社、心靜かにめおと事して、本海道は土をもふまず、京へ着ては氏神今宮、北野の天神祇園淸水智恩院、黑谷東山までめぐり〳〵て、晝辨當より衣裳を仕なをし、兩人ともに駕籠の戶おろさず、小あげの者に荷物をもたせ、親里へより聟入仕舞て、舅殿よりおくりの女子、主從四人、されども大磯もしやとおもひて、きざく頭巾をまぶかに引き込み、五條通の宿屋のみせさき、ざんざめかして通り過ぐれど、躰が違へば夢にも得しらず、三人のうんつくどもは、みせの間さらりと明けひろげさせ、人まつ顏を見るもおかしく、大佛稻荷を殘らず仕舞ふて、伏見の問屋へ着くとひさしく、船かり切つて大坂へつい、

當世乙女織卷第六終

當世乙女織卷第七

○傾城破邪顯正　大坂にかくれもなひ糸鬢やさかたおのこ

徳次郎日終の色あらそひ、息をはり心をもがき、血眼に成つて指を折るに、一つとして意氣方のおろそかなるはなかりき、伊左衛門入道よねんなくうちわらふて、貴殿のごとく、地女の悪敷を撰り出し、いきかたのよひ傾城ばかりをかぞへらるれば、いつとても御自分の勝なり、又此方にも地女のよきをいひ立て、傾城のいきかた悪鋪をかぞへて聞せん、中にすぐれて、傾城の風上にも置まじきは、木屋の出羽也、不便や川崎屋政貫、ゆかのゆるぐ身體に成つても、いひかはしたる一言にはぢて、五百兩の身受金、圓光大師の名までを十露盤にかけて、漸々貳百兩、跡三百兩の金に胸をくるしむ、誠に一町にて一人を撰び出され、町宿老をも勤る身なれど、傾城の意氣かたにのみ氣をうばはれ、事は急なり、會所の用金二百兩、町中に斷りなしに、借りてもかりても我ひとり、かけ硯とうなづきあひて、左右の袂へ入れて歸りぬ、折こそよからね、俄に町に曖事出來ぬ、もとより町へ苦勞をかくる程の町人なれば、手前ふもとをりにて、あつかひ濟んでも、金子の才覺、只今はなりがたく候との云分、いづれも町人尤に思ひて、先づ當分は會所銀にて、先様の手前を濟ませと、寄合の談合極り、町代に預けをきたる鑰をとりよせ、かけ硯を明くるに一錢もなし、月行司大きに肝をつぶし、町代をよび付詮議に及ぶ、町代ありのまゝなるいひわけ、其夜は政貫、身受の銀渡しと出かけ、貳百兩かねを懐におし入れ、いさみすゝむで出でけるを、途中より呼びもどし、品よく云ひまはして金を取りかへす、それより方々手あひあしく、廓の沙汰は耳當てきかれず、政貫段々一分たゝず、當地のすまひなり難く、身だい仕舞て江戸への宿易へ、うち續いて仕合せよからず、終に武藏野のつゆと消へにき、うきが上にも憂かりしは出羽が身の上、なまなかに身受のさた、世間にかくれあらざれば、又の勤にも出がたく、爰への談合、かしこへの相談文、たれ有つて笑止なる顔つきもなく、所詮いかなるうき身ともならんと思ふ所に、紙喜といへる客、出羽がうかりし心をさつし、政貫が手付金の百兩を呼出して、三

百兩の金を出し、出羽が一分は立てとらせぬ、さて身の上はいかゞすとたづねければ、先づは御影にて廓のくげんはのがれ出でたり、迚の事に髮をもおろし、世をのがれたきとの願ひ。紙喜もいよ〳〵ふびんいやます、一座も感涙に袖をひたして、又貳百兩程のもめを厭はず、けいだい能き所にて庵地をもとめ、二三人もゆる〳〵と、念佛勤めてくらすほどに、してとらせんとの談合に極りぬ、出羽は一と先づ京へも上つて、親一門にも對面いたしたきとのなげき、尤といづれも是れに同じ、借り切りの御座舟に、萬の用意不足なき程、土産物までを取りしたゝめ、都へのぼしぬ、誠に紙喜心ざし、流石傾城買ほど有り、政貫は色有つての身受せんさく、紙喜はさのみ色もなけれど、折々の酒相手、色を去つての身受、ことさら一生未來をかけての情、いかさま傾城買の手本にもなるべきいきかた、古今に稀なる大盡、色にのぼつて金捨つるものはあれど、斯した所を思ひ切て、傾城の立がたき一分を立てとらせ、行するゑまでを見屆くる心底、さり迚は男かなと、世擧つて譽めぬはなかりき、昔より今に至るまで、此の色里にて多くの銀をつゐやし、後世のわらひ草になるは有ど、銀をつかふてほまれを取りしは新町始つての客、いはゞ少々の金なれど、後代に名を止る事、銀のつかいやう能といふたぐひなるべし、其後京より文下て、貳百兩の金子早々御越し、爰許に飯料の付たる、能き明き庵御座候との文躰、紙喜もつとも、金子を上すに子細はなけれど、斯した事の相談、女のわざには心もとなし、早々下つて直々に樣子をおはなし、爰許にもよろしき庵地これ有り候まゝ、きゝあはせ談合かため申べきとの返事、それより三十日餘りたてども便なし、能々聞けば大坂へ下り、去る所へ婚姻して居らるゝよし、紙喜一圓合點はゆかねど、人のさたするにまかせ、犬を入れて聞くに少しもたがはず、扨は京に明き庵有りといひしも虛、よめいりの鋪銀拵料にすべきたくみ、さりとは畜生、そのにくさ言語につきしとにくみ立て、尼になりたいといひし時の感涙も仇となれり、斯る淺ましき所存を持ちたる女、何國にてもあひその盡きるはおなじ事にや、半年たゝぬうちかしこも追出され、今は爲かた涙とともに京へもいなれず、なか町と云ふ所にしるべをもとめ、暫くは憂身を隱しぬ、爰に南久寶寺町一

丁目に升屋權兵衛といへるは、合羽を商買しけるゆへ、方々の御屋鋪がたへ出入ぬ、見るを見まねとやらん、風俗町人にあらず、心ものゝふにおとらぬけなげもの、賴むといへば一寸引かぬいきかた男、ぜんせいのむかしは、和泉屋のみなきりが一の大盡とよばれしを、出羽此男の器量になづみ、付ぶみをしてうばひ取る、三年餘りのよこ戀慕、たがひに色のいきぢをみがく、くるわの水に流をさつて、垢の拔けたぬれ色、命のせんたくをせば、斯した事でなふてはと、人人是をうらやみぬ、此道ばかりは田から行きても、あせから行きてもおなじことなり、ほれてもほれられても、銀の入端に替りはないもの、權兵衛身體、終に是より手あひあしく、世間のとり沙汰もよろしからねば、一つには孝行、次には妻子のなんぎをふびんに思ひ、艶里の通ひをふつつと止めて、昔の實事に歸へり、花の色は有ながら、冬がれの氣になれりけり、かかる折ふし出羽方よりの文とて、長町の所書いとこまやかに、くどくはあひましての返し書まで、むかしをゆかりて一入なつかしく、夕飯後早々、としやおそしと出かけ行く、所は長町五丁目東がは轆轤屋の裏なり、久しぶりでの酒事、むかしに易りてわびたる命、いりからに手作りの唐がらし、まさ色そむる酒の最中、たがいに眞顔になつての談合極まり、弟傳兵衛母もろともに呼び下し、則弟京屋傳兵衛を名代、さかいすじにて二間半間口の瀨戸もの棚、是を三人の喰ひぶんと定め、一年餘り此所にてくらしぬ、權兵衛も所在なき心底、隨分萬事に心をつくれど、ゆかのゆるぐ身躰なれば、おのづと萬そりやくになつて、月々のあてがいもとぎれ〳〵に、とだへがちなる折ふし、中村屋九郎左衛門といふもの、鹽物屋治兵衛を以ての戀仕掛け、親子三人に男女二人の下人をつかはせ、上下五人口仕着せともに扶持すべきとの媒、おとゝ傳兵衛と心を合せ、はや忍び〳〵にあひかけぬれど、いかにとしても權兵衛と云ふ邪魔、俄にのくべき方便なくて、弟傳兵衛をさきだつて遣はし、姉は跡から權兵衛かたへ白晝にわゝり込み、萬不自由なる恨みの段々、いとまをもらひ京へいぬべきいひかた、錢ももたぬ形をして、いはれざる妾狂ひ、大坂さんがい呼下し、其方計りかわれ〳〵までに、辱づらをかゝすとの惡口たら〴〵、權兵衛聞きかね、今は堪忍なりがたし

と、即座に傳兵衛を切りころし、姉めがしやつつらに腕をかけ、思ひのまゝに手を負ふせ、既に切腹に及ぶ、親宗圓は七十に餘り、行歩はかなはねど心切なる禪門、わが子のむかふに立ちふさがつて、段々聞いたが堪忍ならぬは尤々、穢多の手にかゝらぬさきに急いで切腹いたすべし、しかしながら女めは、いまだ息がかよふと見えたが、何とて止めをさゝぬぞ、おくれたるかと力を付れば、權兵衛泪をはら〳〵とながし、親をさしをきたわけを盡して、よからぬ死をとげ申段、不孝の至り、御にくしみも有べき所に、却つて力を付させたまふ、御慈悲の程こそ有がたけれ、諸事はおゆるし下さるべし、次に又女が事、とゞめをさゝんは安けれども、あのごとくなる人外には、面疵を付け置き、なかく不道なる女の見ごり、其上後日に心中と云はれん事の口惜しさに、わざと生置き候ものをと、いひ捨てにして腹かきやぶり、ふゐのくさりに太刀を押し當て、うつぶしにふして、けなげなる名を後代に殘しぬ、

〇傾城無禮講萬物は知らぬが佛

扨又次にと嘶出す所へ、都におゐてかくれなき、小紅屋の素仙法師、疾より勝手に枕ながら、始終をとくと聞すまし、高笑をして座鋪へ出て、双方の色諍ひ、段々御次で承り、壯年のむかしを思ひ出し、暫くは心も若やぎ、老衰の欝氣をはらし候き、しかし德次郎殿御方には、地女の惡敷をいひたて、意氣かたの能き傾城を撰り出し、つゞまやかに御はなし成さるれば、又是迄堂の御方にも、地女の賢女をいひ立て、木屋の出羽をば始として、いきかたの惡ひ女郎を撰り取し、指折つておはなしやまねばすまぬ事也、先づ御兩人とも、銀の五百や七百御つかひなされたとあつて、早や粹顔をなさるゝは近比推參千萬、申すは過言がましく候へども、下官事御存の通り親をたふし伯父をこかし、きをひ口とて伯母をつぶし、他人こそたふさね、一門をたふし、つかひ捨てたる銀高凡そ七千貫目餘なり、斯申したらば、銀つかふ計りが粹かと仰られふけれども、いづれのたれが申さふが、此道ばかりは銀つかはずに、すいにはなられず、今頃の二さいごもが、端女郎を二つかへば、はや粹顔をして女郎をうち込み、きかれぬわれじやれ、さりとては下卑た事ぞかし、大夫も六十三匁の銀さへ出せば、たれとても買ふ事じ

やと、あたり限に云ては見たれど、ずんぶり染の青布子を着て買てはうつらぬもの、尻手ばなしてはかのゆく金のつかひやうは、くわしく棠大門屋敷に見へたり、此ごろも御自分がたの御作意とて、作りおかれし好色物を見れば、あたまから傾城の悪口、親里のならず物がたり、納戸食の大喰ひ、買喰ひの品々、客のだましやう、虚文の書き様、誠はなひものとのしかりやう、一つも粋なる所は見へず、第一傾城奉公を勤むるに、榮耀でするはひとりもなし、よく／＼貧苦にせまられば放さぬものなり、次に納戸食大喰ひの事、飲食便利さては睡眠、是等は上つ御かたでも申すに及ばず、恐れながら同じ御事、次に亦買喰ひの事、傍輩中のまはり振舞、飯汁杉やき、鴫いりがら、温飩そば切素麪かばやき、四季の菓物、豆腐料理、是皆つねに有る事、ついんちがたの女中がたにも、紙ぼうろくで大豆煎りて參るげな、町方の内儀たちの、集錢出して朝夕の外好喰せらるゝも、道理はいづれも同じ事、男をだまし文で虚つき、泣かれぬところを泣いて見せるも、ほれぬ男にいたぶりをして嬉しがらすも、傾城の商買、看板に僞のなひ遊者、傾城町へうられぬ先は貧家の小娘、ながれのみづにて清くみがけば遊女遊君、是皆いはでもしれた事、今かく仰せらるゝは、只今まで御存知なかつたか、近頃もつて不粋に存ずる、太夫天職鹿戀端目終客の一座を勤めて、仕舞着物をめされたるは、揚屋で見たとはきつふ違ふたものなり、芝居の樂屋も同前、あたまは女で、立ながら反張つて小便せらるゝは氣うとひもの、何事も内證はしらぬが佛、萬事濃にせんさくをしてから、きれいなる物は一色もなひものなり、川水のきれいなる事をいへば、都にましたる事はなしと、かりそめにも京衆の御自慢、もつともいやと申されず、かりそめの流れもさゞ流石の水底きよく、見るから心の濁もきよまる心地ぞする、しかし智恩院の新門前すじを四條の河原へ出て、三條の橋際より半丁計り下のかたより一丁程の間は、水底にひまなくらんぐいをうち、大分牛皮を漬置く、四條のかり橋より一二丁上下に、富士山上の行塲有つて、先達並に多くの行者、晝夜に六度づつ此川にをりひたつて、さんげ／＼六かうさんげ、おしめのはつだいこんがうどうし、不二はせんげん大ぼさつとやら云ふやうな事に、珠數をすり立かうす

いをいたゞくといふて有がたがるも、誠にしらぬが佛、殊更此あたりの小魚は、餘川にすぐれて魚も能く肥へ風味も更なりとて、手毎に釣をたれ、盞を流して宴を催し、咽かつする時は此水に乾けるをうるほす、此の川するゑは大坂に流れて、萬の用水に是をつかふ、川上には死人も有り、其外牛馬犬猫の死かばね、且又在所船には、不淨なる擔桶をもすゝぐ、上下の借し御座、三十石の旅人どもは、舟がわより用を便ず、極て此浪花の津は井戸水よからねば、是非に及ばず此の水を呑む事なり、下官一とせ道頓堀足代屋長右衛門かたにて、一七日大茶の湯を興行し、多くの茶人を請待いたし、手をつくしたる振舞、天王寺の清水はちかけれど水の性おもたし、宇治橋三の間の水は聞ふる淸水なれども、とり下す內水の性心元なし、千日寺の水こそ風味もよけれと人々の申につけて、此水に極めぬ、其折ふし泥の八と云ふあばれ者の獄門首、何者の仕わざにや此井戸へしづめたり、此事夢にもしらずして、七日が內此水をつかひぬ、酢蛤に小便のきごを入るれば、殊の外ふへるよし、さるによつて念の入つたる振舞には、手前にてわりづかひにすること、

唐がらしも木にてあからむを待つといふ事なし、引すてたる田地跡いそぐゆへ、青木を取て莚に打あけ、すべ帚をもつて小便をふりかけ、莚をかつげて一夜むせば、翌日殘らず紅葉をなす、近くいはゞ一切の作物、こやしをせざるものやある、麩は水麩とて生でも喰ふ、是をこしらゆるを見れば、大いなる男桶に入り、あかがりすねを以てふむ事一日、桶の中より用も便する手鼻もかむ、其外味噌の仕込酒の糟も、踏みこむ事同前、見ねばこそなれ其水上をたづねてから、一として奇麗なる物はなひものなり、佛も膠づけにて始終を仕立て、金薄を以て是れを濃めば則たつとく、香花燈明を挑げてらいはい供養をなす、心をもつて佛とす、神も佛も御內證は衆生に易ることなし、予六十に餘りて、目もよし齒もよし腰骨もつよく、婬欲の道止む事なし、人は老樂の果報ものやあやかり物やとうらやめど、つく〴〵是をかへり見れば、果報にあらず仕合でなし、わかき時の色狂ひとちがふて、女の方に少しもおもしろみ有まひと思へば、はや我からに心おくれ、よしなし〳〵、もはやふつゝと此いろの道、思ひきらふと思へども、やむるに止まぬもの一つ、櫻

梱の枕に氣もなへず、烏芋（くわゐ）喰ふても其通り、はてきのごくと思ひの山、命のくだり坂になつての達者わざ、さりとは人の誉ぬ事なり、傳へきく、増賀聖は止めても止めぬ名利のうたてく、心を以て心をいのる神路山にまふづ、我も是より思ひ付て、しやうまん坂をよぢ登り、愛染堂に通夜申し、此婬欲の止まぬ事をいのる、思へば〳〵わが身ながらも替つた事、人は四十に餘りぬれば、地黄を呑まず玉子酒、鯉のけきりのかばやきの、冬は鹿喰山の芋、牛蒡の鰍（どぢやう）の丸魚（すつぽん）のと、水ごしらへをなしけるに、六十にあまつて、腎水をへらしてたべと御佛をいのるといふは、唐にも有るまひすまたな事、愛染様にも一應では、呑込みにくふおぼさんと、珠數すりなをし念を入れ、思ふ願をくりかへし、御内陣の傍に、通夜申してぞ居たりける、

〇天王寺斧捨谷 素仙法師愛染通夜物がたり

四十にふたつみつ、あまれる程の女子ども、四人一所の揃姿、手毎に斧をたづさへ、思ひ入れたるけしきにて、同じく寶殿に通夜す、風情たゞ事ならじと、御燈の影にすかして見れば、名は云はぬ事、一むかし以前の事、よねのすがりたるにてぞ有ける、あの如くになつてもまだ色すてぬにや、心盡しに何いのらんと、おかしさ吹だすばかりなるを、じつとこらへて小くらがりより、めかれせず詠め居けるに、合掌もせず拜をもなさず、いづれも斧をかまへつゝ、明王の尊像をはつたとにらみ、これそこながざみづら、佛が虚をつくものか、われ〳〵十にもたるたらず、親はらからのため身をうりて、苦界十年勤むる内、衆人愛敬ましましと、身受の客を授けつゝ、目出度世帶をさせてたべ、南無や愛染明王と、夏書を書つ花をつみ、禿やり手を代參、なひ内からの御供代、又月毎の十二燈、よつぽどものもつきけるに、身受の事は扨置きぬ、ぬれあふ客さへも末とげず、段々おりに端までおり、ぬれあせつたふごとくにて、漸々年季を勤めつゝ、借錢のため二三年、わけに勤めて居る内も、似合の緣がある事か、又白人と身をなして、五年六年勤めても、うき身の垢がぬけぬやら、又風呂へ出て茶屋へ出て、盛過ぎての憂きつとめ、賴みましたるかいはなし、是程利生のない事を、今頃世間に澤山な、いろづとめするものどもが、知らでうか〳〵歩行をはこび、ない錢つかふて御供代、灯燈をかけ十二燈、駕籠代までを費やして、借

銭せんがふびんさに、われ〳〵四人心を合せ、うらみ申に来りたり、なまなか御影の有るゆへに、諸人心をまよはする、去るによつて御形をわしらが手にかけ打くだき、野干の住家となしますする、さあ観念をあそばせと、手ん手に斧をふり上て、たゝきわらんず勢は、角のはへぬぞふしぎなる、其時御戸張さつと上り、尊像あらはれ出でたまひ、六つの御手をさし延べて、やれまて汝等暫く〳〵、其方どもがいふやうに、あまねく利生がないならば、今此のするどき世の中に、年を重ねて此所に、愛染みせが出されうか、何れも利生があればこそ、替らずみせも繁昌し、段々仕似せになつてあり、汝ら四人ひつそろひ、身受の縁のない事は、皆しゆくじうの因果なり、おこごら四人の前生は、道頓堀に隠れなき、猫屋といへる芝居主、代々慈悲の心深く、多くの犬猫拾ひ集め、食事をほどこしはごくめり、仁愛の心天に通じ、梵天あはれみ給ふにや、代々芝居繁昌し、栄行く末とぞなりにける、汝等猫にて有し時、芝居のうらなる難波野の、葦の葉がくれ木にのぼり、雀むら蝶蛇龍子、おほくの虫の床入りを、かきさがしぬる果ひにて、妹背の縁はなきぞとよ、又人界へ生れしは、常々理非の徹しぬる、狂言を聞きさとりを得、天人踊の功徳によつて、人間界へ生をうくる、されども端出なる功徳ゆへ、浮きふしの身とは生れしなり、かゝる道理を聞ながら、恨むは愚智の至りぞや、我も佛の身なれども、心にまかせぬ事ばかり、縁日又は六月の、朔日一日あてにして、堂をまかなひ世帯かた、佛中間の付届け、其外出事出し事まで、此散銭で仕舞へども、雨にふられて丸々に、取り得る事は不定なり、其上女郎風呂屋もの、白人茶屋もの、こそくらや、役者子どもに至るまで、いろ〳〵の願をかけ、諸願成就いたしなば、百貳十匁は御供代、毎月灯燈かけまして、参詣毎に十二燈、少しもおこたり申すまじ、此の願叶へたびたまへと、誠しやかにおがめども、願望成就しての後、か其おもはぬ者多し、餘りといへば聞へぬ仕形、もはや堪忍なりがたし、それゆへ近日書き立てゝ、つり目安をいたすはづ、とりわきむごひは瀧岡なり、給分七十五両の時、何とぞして一代に、金四百両とらせてたべ、願望成就いたしなば、御供料として十貳兩、ついの灯燈かけ奉り、毎晩挑げ申すべし、御縁日には十二燈、かゝさず参詣申さん

と、珠數すり立てゝ、頼むゆへ、心ざしをば不便に思ひ、衆人愛敬さづけつゝ、程なく給金四百兩、ものゝ見事にとらせしに、はや十二兩がおしくなり、漸々として銀壹兩、内一匁八分は、どこへもとらぬ惡銀なり、金は上づと灯燈は、よもや虚ではあるまいと、思へばしわざを聞てたも、木で灯燈を作りつゝ、定紋付けて堯山な、願主瀧岡彦右衛門、諸願成就と書て有る、外から見ては蠟燭代、見事な事と思はんが、二文も上げはせぬぞとよ、大かた斯したことなれば、愛染見世もあはぬなり、なれども是も因果ぞと、おもひあきらめくらすぞよ、斯した道理を聞わけ、急で歸れとの給ひて、御戸張おりさせ給ひぬれば、四人の女は會得して、扨御道理こそはりやと、因果の道理をわきまへて、今は悔まじ歎かじと、泪ながらに合掌し、手々にもちたる斧(まさかり)を、毘沙門坂より捨にけり、よつて此名を俗呼んで、斧すて谷と申せしを、多くのよねがふみ分けて、愛染坂とは名付たり、とかく夫婦は緣次第、能も因なり惡きも果なり、扨も秋夜の長ものがたり、もはや雞鳴き鐘もなる、たとへ夜あかし日はくゝる共、なか〳〵盡きぬ言葉なるべし、とかく今宵は罷り歸りて、委細の事は重ねて筆に、

寶永三年丙戌正月吉日

大坂本町壹丁目

書林　松壽堂萬屋彦太郎板行

當世乙女織卷第七大尾

心中大鑑序

きのふも心中けふもまた、あすか川の淵瀬かはつた事がはやりける、京大坂田舎ひさつ〳〵あつめければ全部五冊、好色の媒さして世の身持鑑、

作者　書方軒

心中大鑑目錄

附　たぐり縄は輪廻の繲
　　裙と裾を結んだ契り

(二)辛崎の夜の涙（屏風や小兵衛　おいの町おつた）
　附　あてどの違ふ行さきの闇
　　帯でからげてはなれぬ中

(三)人も集る蠅追心中（はり物や與九郎　うばまつ）
　附　よしなき長物がたり
　　生死の二つを仕形で見せるはんじ物

(四)屏風も顔も千枚張（表具や助右衛門　上繪や小かん）
　附　好色當座町伯の買がゝり
　　仕付けたる表具とて一文字に迯た足もと

(五)平野の戀の淵（豐太夫　おしゆん）
　附　かくて其後全盛の茶屋町
　　三段目は愁打も打たり拍子扇子

卷第三　大坂

(一)〇〇は見るに煩悩（丸やお梅　手代六兵衛）
　附　初に鳴く鶏の〇
　　よろこびの中の歎

(二)阿彌陀が池金二角の光（浪人奎兵衛　お山きよ）
　附　坊主にもうつかりとはなられず

(三)曾禰崎の曙（平野屋德兵衛　天滿屋はつ）
　附　袖を血染の尼寺のまへ
　　平野屋が醬油しつこい中
　　天滿屋が死出立ぱつとした是沙汰

(四)有馬の不養性（大尺勘平　わんやよし）
　附　貳升樽は喧嘩の媒
　　五月腹でならぬ嫁入

卷第四　大坂

(一)袈裟御前の裏表（石津や市郎兵衛　兄よめおさん）
　附　ぬれぬさきこそ大事なれ
　　かたい異見にやわらかな命

(二)浮世紺屋おもひそめたりし（紙やおむめ　こんや平助）
　附　芝居はぬれの吸口
　　初から熟がる娘あり

(三)色里都遷し（ほり木屋清介　櫻やおはな）
　附　踊は夜の花
　　うまい事聞てかんにんならぬ

(四)舟町の酒屋乘掛つたが不肖（津村かめいせうし新兵衛　酒や又右衛門女房おくら）
　附　鋒の丸い針立

目錄終

心中大鑑卷第一　京の部

(一)梅は名殘の正月　五條新町男井筒屋平左衛門　島原女傾城今川

京の目からは大坂堺をはじめ田舍とはいへど、色道に身を染て、その折ふしの興に遊ぶ時、かはる事はなき世なりけり、されば大坂の大夫とて、堀江の蘆とひとつ腹からも生れず、桔梗屋のよし野も難波にてさかりをみせ、薫は上りて京の詠とはなれり、しかれば花のそだゝぬ里もなく、自然と都はみやこのすがたあつて、柳櫻をそのまゝに、中むかしの花崎に眤みける男は、烏丸一條表は竹の駒よせ內證は楠分限とて、一生茶の湯能藝の遊樂をしらず、月見花見に人を誘はず、萬づ儉約を守り夜晝利まはし、歩銀の塵つもつて藏に燈明かゞやき、六十八才の春秋目出度、渡世を松が根の常盤屋とぞ申ける、世はしれぬ事かな、此人の惣領に此島原にかくれなき大臣の名たかく、松屋の源とて、丹波口の宿を出て、衣紋の馬場にさしかかるを、門番はるかに拜みつけ、明行雪のわかれにもわるい顏せず、夜は何時じや水くれよのかよひの者

まで、命を捨てまはる仕こなし、生れついてよき所ある旦那となりて、節句朔日かける事なく、仕拂ひは家久しき手代うけ給つてこれを進じ申事、若い時はたれも一度はかゝることの、ありたけ御つかひなされてから盡ぬ金藏と、こゝろよくうけ合、五節句前の算用、味にくろめてつかはしける、しかれどもつゞまる所はつかひ捨る銀のあき所のがれず、明る歳の店おろしに、親仁諸方の元利の寄銀高を天秤にいくたびかあてゝ見るに、五貫七百八十九匁三分の不足はいかにと手代にたづねけるに、若旦那の御入用とはいひかねて、私商ひの木藥の買置に損銀仕りけるを、今までは申かねましてと、迷惑なる貌つき、親仁もつての外に機嫌を損じ、大切なる金銀を其方一人にまかせ置うへは、皆までいふ事にあらず、かやうの時の請人を呼つけて、此勘定たつまではと、急度預けぬるこそ笑止なれ、扨内證詮議するに自分の取込にあらず、罪なくて此難儀無調法なりとて、ありのまゝに請人參りて申ければ、親仁あきれて早速手代を呼歸し、我おもふ子細あれば、必此事沙汰なしにせよと申付、扨枕を割て分別を究めたる事ありとて、其頭隱れなき彌八といふ太鼓持をひそかにたづね行、拙者一人の世悴今二十一歲なれども、內氣にして夢にも色道の熟きわけをしらず、さりながら親の口から留には遠慮あれば、其方を賴み今の世の大夫職にかけて、智惠を付たく存ずる上は、けふより一日も懈怠なく、先十年までの揚錢は、某たしかにうけ合の一札なりとも致すべし、此揚代十年つもつてわづか二百七十三貫六百目、小判になをして四千七百十七兩二朱餘り也、もし面白がりさへ致さば、每日つゞけて三十年までに家屋敷に疵は付ず、其外大夫の小拂折々の着物、禿遣手節句々々の小拂、末社宿屋の上下、御門番の末々までの付屆け、每年貳百兩づゝ、先內はにとつて極りし事也、おきづかひなう賴むよし、彌八これは見事なる遊ばしやうと、手をうつてかしこまりける、世には親の首尾をおもへばこそおもふまゝにつかはれず、あつたら金銀の晝寢して居る世界に、これは根づよき大盡の手に入事、日頃祈り奉る稻荷大明神の御引合せと、鈴引ならし赤き餅お造酒備え答拜して、さて親仁はしらぬ分にて、外よりつてをもつて取入すゝめ申せば、源も時を得たりと悅び、姉小路はやぶ

さ彌助おろせの棟梁として、毎日出るも遠慮貌、俄に儒學にこゝろざすよしにて、懷中に論語蒙求古文眞寶絶ず、木綿に島袴かたい貌にて宿を出で、中宿の替裝束羅綾の袂を飜し、錦織の駕籠ぶとん、八端がけのさつま織、御法度前の舞臺衣裳、七三風の仕出し男、花も實もある神風や、雨の日雪の暮、まして月夜のほとゝぎす、きぬ〴〵の雞も氣をとをして鳴ず、追出しの鐘も內證あつて日が出ねば突ず、揚屋の朝食くふて、晝を夜の氣色に蠟燭立て遊びつゞけ、折ふしは宿にかへりて、およそ三十日餘世間の風俗を見ず、鐵で作つた身でもすこしは草臥て、ある時宿にかへり、夢にゆめ見るこゝち、暮行宵のうたゝねを、親仁氣をつけて、ひそかに彌八方へ使をもつて、いかなる事にや、世悴けふ一日宿をはなれず、約束の通りすゝめ申さるべしと、きつとしたる內證使、かしこまり源かたへの早飛脚、櫛の齒を引て迎ひ奉りけるに、さりとは闇があればこそ世に月夜を面白がれ、せめて一夜は宿で夢見る事をさせぬかといへば、これは御尤ながら、お氣がかはらぬから御退屈とみへたり、けふはめづらしう東に仕り、瀨川かかもんを長柄が亭へとお供を申せば、海を山に少しは見かえて二三日、これも興はやく盡て、何とかはつた事はといへば例の白人、これを見るに島原のうつりには、さりとは目にかゝる所おほく、二夜とはならず、しからば大名戾りを申つくれば、殿樣のお天守のと聞ずかたり、生れつかぬ詭、いやなる所あつて、さらば御所すべり、これ一興と請じ申せば、次になつた盃を洗ふて來よ、夜食が出ればお供御あがらぬかなンど、下々の身におそれありておもしろからず、此うへはしやれたる浮世後家茶屋の娘比丘尼落、およそ一代女にあらはれたる目錄、一つ〳〵見るまでもなき物ずき古し、これから鐘木大坂はあれど、みな高瀨桂川の流れを汲ば、居ながら見おろされて淺ましかりぬべし、終に根にかへる花崎と、出しかけたる吸物のふた目とも見ず、西の空へぞとばれける、

かくて此里は晝夜のわかちなく、何時にても面白きからくりじかけの名所なれば、あけぼのたそがれのさかいもしらず、かぶろの小さんを枕に引よせて、まどろむゆめのうつゝのたゞ中に、親仁枕がみにたちて、思ひの外機嫌よき貌つきにて、內藏の戶を開き、

積かさねたる金箱ゆびさし、これは誰がものぞ〳〵、みじかき浮世死ねば手ぶり、のめやうたへや若いが花よ、老て悔しのなれのはてと、三返おしかへしてぞ舞れけると見て夢さめぬ、源起あがり胸とゞろき、ゆびを折てかぞふれば、宿を出てけふ十一日、たとへ繼子にしてから世間もあるべし、此遊里に來ぬさきは、夜嘣のかへり遲きも氣遣ひせしに、今東西に十餘日くれしに、尋ぬる者も見へず、今見し夢の氣げんよく、のめうたへとすゝめられしは、是ぞ夢はさかさ事なるべし、おもへばながき月日の首尾こそ大事なれ、けふをかぎりにはあらじとて、俄におかへりをつげわたり、あやまりがほにて宿につきて、親仁を見れば夢のつげたがはず機嫌よく、大酒のうへは鹽增水青き葉がよしとて、しかも下戶の身としておきの付たは、思ひの外の御馳走、源不思儀はれざる所へ彌八方より、唯今おめにかゝらねばならぬの使、源あきれて返事はうちからといふてもぞせば、引かへし來る使も目にたちてきのどくなれば、是非なく彌八方へ行て、去年の夏より此春まで三百日にはならねども、二日と宿には居ず、ふたつとなき命を取るたくみではないかといへば、されば私も今になりては迷惑ながら、申さねば聞えませず、まことは親仁さま去年これまで御出なされ、三十年までの揚錢おうけ合とて、一日も解怠なくなぐさめ申せと仰付られ、けふも御宿にとて御内證からの御使と白狀すれば、さてこそ不審はれぬ親のしかた、忍ぶうちこそ面白けれ、これはしらけて遊色、今までつゝまれし恨は舟にもつまれず、世の中の親にかはりて、子に惡性の桁梁、むごいなされやうと、町內の伯母をもつてなげきければ、親仁申されけるは、我命古來まれなる七十に及んであすもしらず、子は取がへもなき一人なり、されば身一代朝夕骨を碎き、金銀家屋敷をこれ程に貯へ置ば、九人宛遊んで喰て、一代を五十年づゝにして、七代まではあるやうにして置事、朝の嵐をしらぬ此老ぼれが爲にはあらず、しかれば我死したる跡にても惡性止ず、殘し置財寶を費し、手と身になつていかなる苦しきうきめを見るらんとおもへば、此金銀家藏はかへつて冥途のさはりともなり、此たびありがたき御念佛にあひながら、往生取はづすに疑ひなし、これいまだ財寶あるとおもふからのまよひなり、とて

も性惡く遣ひ捨るうへは、一日もはやく我此世にあるうちに、塵も灰も殘らぬを見とゞけて死なば、黃泉のまよひなかるべく存るから、太皷持とやらんをたのみてつかはしけるが、此頃はいよ〳〵老の衰へしきりなれば、此世の別れ近づくとおぼえたり、片時もはやく藏をあきがらにして、こゝろよく往生をさせよと、落涙の中の念佛、源褀一重隔てうけ給り、かゝる御心底も存ぜず、此ほどの不孝御ゆるしところび出、今よりふつとおもひ切、好色とゞまり家相續のはげみ仕るべしと、涙をながし後悔かへらずと佗けるに、少面を直し、子をおもふ闇とばかり申されぬるより、二度東西の遊里に足を入ず、孝行ならびなく、十年までの揚錢のつもり纔二年にてやけとまり、今にかくれなき分別の親子榮へてかくれなし、

烏の黑く鷺の白きもそれ〴〵の生つく色也、異見をすればそれより年上の利根發明を囀りて止みがたきは此道也、こゝに五條新町わたりに井筒屋の平といふ男、ある時廿一日は東寺參りの歸るさ、終に島原といふ所を見ずとて、おぼつかなく三筋町を見わたし、局(つぼね)もおそろしさうにさしのぞき、揚屋町へかゝる所に、柏屋とある端居より出たる女郞、此世にもかゝる美形もあればあるものと、しばしたゞずみ、行ちがひに見合せたる目のうち戀のこぼれかゝり、見送れば見かへり、すいた男といはぬばかりの此しかけ、むかしよりある手にて、覺へてまよはぬ人もなく、これよりのぼる橋をかけ、さらにうりものとはおもはれず、柏屋へたちより、只今これよりお出なされた上郞のお名はと問ば、御位梅にて今川さまと聞とゞけ、歸るさ心ならず、おもかげはなれがたく、あさ夕の膳にも夜食にも、その貌ばせ見へわたり、ついにかよひ初し魂身をはなれてこゝろ空也、諸親類手をつくしての異見、さらに耳にいらず、これも大切なる家の惣領なれば、角を直して牛を殺さぬ方便に萬づ見ゆるし、かの常盤屋の源がこゝろまかせになりて、ひとりでにおもひとゞまりし咄を、親聞つたへて、一年は見ぬ貌、二年目は氣を通し、三とせ四とせにもいやまし、中々とまる氣色見へねば、親類急に相談し、旦那寺の和尙まで賴みて異見度かさなれども、いかな事馬の耳に風、乘出してから引返すこゝろなし、頃は師走廿日あまり、方々の寄銀さい〳〵うせ、銀箱の釘はなれ、剩

親の名代の借狀、日切の問屋物、道具屋の書出し、死一倍の手形借り、二度にしな玉の種あらはれ、今は世間立がたしと公儀はれて勘當帳、五節句の揚代濟ぬから、人の情は世にありしほど、ないといふ段には佛の御合力もかなはず、伯父はあれど江戸へも羽根なければ飛れず、大坂へは無首尾一夜に舟で開わたり、身ひとつの置所朱雀の野邊の草の露も所せき、かはらぬ色を松に契りし正月買もならず、引かえたる此春のうき世、行末分別にあたはず、けふをかぎりとおもひさだめ、今川に今一たびのあふ瀨のまくらをかはしまの、水のあはれをかたりぬれば、とし頃のたのみ盡ぬるうへは、皆まで聞まするにおよばずと、かくごを極め、おもひきつたる乃にふしぬる心中、此里にはめづらしきよし、

（二）御存知のゐづゝ屋（四條ぬしや利兵衛　西石垣町井筒屋よめ）世はくだり坂に玉子をこかして、一あたりのはづみがわるうなれば、かならずひつしやりとつぶれ仕舞に、手と身との憂め河内肉桂の、辛い身すぎとはしらずやと、大坂陣の時分もそらに覺へてゐる親仁が七くどき噺かた耳に聞はづして、寺町を下へ、樋口を東へと急ぐ足もとに、長崎ほくち、唐がらしの粉、水晶の火うち石、とりあつめて纔三百十一文が物を、二脚の床にまきちらして、其身はいつも懐手、夏冬なしに柿の前だれしほたれもせず、色もさめぬ木綿衣裳布かたびら、およそ一年三百六十日、いかな夜も日も通りは絶ねど、子供が一人たちよるとも見へぬに、見事折ふしの物參り、二季の彼岸かゝさず、萬日の袋も、五合や三合の無心は開てもやる念佛かうの衆にも肩をならべて、はや七十に手のとゞくばかり、新ぶきの銀と古金の惡いとは、とつと目きゝが仕にくい道理まで、是を見るにて知たと、さま〲不審がりて行あとから、鬢つき高からず低からず、髪は當世の吹上わげ、銀座仕出しの腰ぎり羽織、緞子の五寸幅の帯胸高に卷て、着物は禾島に日野うら、脇指ばかりは牛尾親仁が持つたへて幾度かお霜月の、旅籠くいに來た時ばかり暖氣させたりと見へて、皮づかのはみ出し、下緒は眞中を繼で、しかも黑う光るは、慥に代々の手垢なるべし、かうした仕出し、取合ぬ道具さまざまに見立るに、研屋には此こしの物さのみ堀出しとも見へず、取貴には風體が能過て、供つれぬもいか

かと思ふに、あら〳〵しき皮草履、長刀になるをいとひて、古雪踏の皮つけしは、あんまり能身上にもあらじと見るに、彼胡椒の粉の親仁床を飛おり、此男に手をつぐね、きのふはいつもながら娘が方へ御仕着と申、私迄御心づけ忝なく、御禮の申やうもない仕合、扨先娘事も御影ゆへ、近々彼所を出まして、又よそへ参る筈、いよ〳〵相極りましたも、貴公樣を大ぶん見事に申聞しまかした故、さきにも一しほ取込合點、前銀もよほどくれまする約束、しかればたがひに外聞と申、其許の御詞もあれば、かならず四五日は、大よせの御さわぎ賴上るとの長口上、彼おとこ大やうに出て、皆まで聞におよばぬ、西石垣のゐづゝ屋へ行げな、そこらは呑こんだといふは古い、大かた臍の下はいふにおよはず、合點が腰ぼねへまわつて、ふともゝのあたり迄落しつけておいた事、およめが事は氣づかいめさるな、大ぶん請こんだからは、おそらく西東の石がけに、名とりさせる分別、はて日外もいふ通、親仁さへ無なると、今でも引かく心底なれば、あれが事におゐて微塵ひけはつけまいと、いひすてゝ別れける、此おとこは妖物の利兵衛とて、あたまがちなるばかりにて、尻の見へぬ悪性もの、所は柳の馬場四條あたり、椀家具の塗師屋なれば、色道にかしこく、しかも跡の仕拂は人にぬりつけるを手がらとおもひ、萬にわけわるう、挊の道は親仁にゆづり、我は隠居してゐると利口がほ、彼胡椒の粉のおよめに狂ひそめて、人もゆるさぬ一生のかため、妻にせう男に持ふと、起請まで堅地にくろめて毎日出かけ、つかふほどにけるほどに、網地なる身上、くろめ漆もそろそろと兀て、萬刷毛のまはらぬ様子、二親も見限りて、こらしめの爲の勘當分、されども母おやの歎見兼て、河西の伯母聟縫物屋の居職ゆへ、此男を引とり、朝夕縫臺の傍をはなさず、仕付ぬ糸操を敎へ、針のみゝずを通しさせなど、四十日ばかりのつとめに、利兵衛もほつとりと氣欝を病出し、食もはか〴〵しう咽にいらず、くらがりが靜でよいと勞瘵かたぎに見せかける程に、伯母も少し氣を通して、一丁や二丁の間は使にも免しけるを悦び、爰にてもまた縫地の縮緬三卷、緋綸子の小裁五端、手にあたるを幸に押つぐねて懐にいれ、夜中の鐘と共に河西をぬけ出、二足三文の質に銀拵、西石がけの死さはぎ、およめとは談合極

て、衣更衣の十七夜、淸水への歸りあし、先愛で飮あかし、明日は芝居と出る氣ざし、皆も疾ねて早うがよかろなど〻、おもふさまつのり、大酒の醉まぎれ、端の二階より萬簏の緖をおろして、先我身を地に落付より、番所の階子輕々とさし渡し、およめが寢卷姿そのま〻に迷ひゆく、六道にちかき所の名も、いと〻無常を觀ずれば、一蓮托生も安井のまへ、ともに及にか〻る身は、藤のゆかりにあらねども、長き世に名をのこしける、

（三）命のけし粉　堺町　蒔繪屋利兵衛　濡中三年坂中みつ屋よつ

馬おい船頭お乳のはて、髮結も口のわるひ中間とて、朝每の旦那まはり闇藪、餘所にはめん〳〵に身拵して、萬太夫甚兵衞、おもひ〳〵の心あて、わき狂言など見る物にあらずと、吉田黑谷から流れ渡りして、三番續のはじまり、てうど今が能圖じやと、あるひは棧敷上下のけぢめを見せ、我一とくつろぎ居て、先座つきの菓子ぼんからあらしそめ、じよの中入から酒にして、切食煮〆に口をた〻き初てより、贔負〳〵の評判、とり〳〵の批難、上へには役前の子共あづ借よせ、銀のいせいに無理酒をのませなんど、此氣になりては、中の始りの頃は、近しう定りて必晝過になるをも、またゝきする間の樂とおもふに、人手代も纔の給銀とつて、酢にも味噌にもつかはぬを損のやうに、せはしなく遣はる〻者あり、是に馴たる手代はそれ〳〵に智恵を出して、けふは大佛迄樽賣の油の口うれしく、小はやう起て、朝食も人一番に喰やいなや、草鞋に足を輕め、一息にはせつき、先四郎五郎が顏見せをのぞき、序一番をそこ〳〵に見るも、またのしみの內なれや、宿の首尾心にか〻りてとつかはと歸るに、髮ゆひはまだ朝めしもくはず、寢おきの儘のあたまつき、鼠のすにせし金平ともいふべき形して、町の若衆二三人大はだぬきになりて、二條を河原へと走る程に、長兵衞是はといへば、時行物の心中、口おしやと聞つけたり、師走の果のおもひたち、定て行ついての無分別、よつぽどやろう見へるはといふ程に、得たりやかしこしと彼手代も續て走る、大せいの人の後より首ばかりさし出して、見るよりはやく、先女はしれた、中みつ屋のよつといふて、あれはことし十七の厄年、かうあろとおもふた、じたい色中間にはない助しうにて、然も寄ほどの者を男にしたがりおつて、

問もせぬ身の上ばなし、盃は我前へに留風呂にしておいて、親は西陣の綿屋の久助、その昔は大きな島やで糸算簡大臣の數々、機も二十ばかり立て織たる人、近年の不仕合うちまきの高さに、糸も大ぶんの身もちあげ、賣口は夜を日についで少く、諸事あはぬ內證から、是を苦にしてとゝさまは死なんす、しばしはかゝさんの我情さに漸二はた立て、しゞらの賃織さんしたれど、此分では水も呑れず、しけ糸操ても米の代に足る事ではなし、せんかたつきて、かゝさんは尼になつて、賃綿くりにいかんす筈、わしはかゝさんのためと思ふてさもしいつとめ、心ばかりの養ひはおくれども、行さきの見へぬは此身の果、けふはけふでも暮すが、明日は又何とかと案じます、殊に何とても九月の末から、冬中になれば此里の淋しさ、いやらしいぞめきばかりのらついて、有たけの惡口、それはさのみ苦にもならぬが、只うるさいはお茶ひいた夜の心持、玉造の客衆、あがり事はあがつて、嬉しや手もそろふにと思ふに、あれはすかぬと只一人座敷にのこして、鼻歌たかく〱とうたふてゐる人あり、それとても茶代はさらずにもおかねど、何としやるやらと花車さまにいはるゝつらさ、哀心ある御人かな、行すへを頼んで獨りあるかゝさんにもらくがさせたいとおろ〱涙、鼻紙とんだしてしめしさるも、人によりてあはれに思ふものもあろが、こちとらは氣ばらしにこそゆけ、哀な事が聞たければ、歌念佛を呼で山椒太夫聞たが遙に增じやに、小づらにくうてならなんだ、終に是にだまされて死おつたであろと、囀るもおかしいやら笑止なやら、今一人はと、長兵衛ひとりあながちに物見たけく、のびあがり〱鳶引のけて見れば、南無三、是はゆるせと逃て行く、長兵衛何じやけはたゞしいといふに、返事もせず泣出したも道理、まきゑかきの理兵衛とて、長兵衛が爲には弟なり、此おとこつね〲は律義一遍に、髮かしらもかまはず、膝につぎのあたりたる布子をも耻ず、若ざかりの身をすてゝ、さのみ遣ふとも見へざりしが、西瓜のてりと人の心は、見かけによらぬ物でこそあれ、しかも枕もとに取かはせし起請、それ〲の形見の文、剃刀は御家の物、つらりとうつくしうならべたてゝ、見事には死にたれども、折わるい心中で、小歌にしたとてうれまいし、第一に損さうなと利勘な人は申き、

（四）恨をひく三味の手　柳のばゃきれや柳七　伏見後家の娘てう

木崎が此頃の仕出し歌に、三本木の心中、おもしろき手を盡して引そめしより、野河がかぞへ歌も、耳にしむやうに覺ゆる事、てうど行河の流れは絶ずして、しかももとの水にあらず、けふと暮明日と替るも、第一に人心ぞかし、爰に柳七といひし者の親は、昔日越後の何がしとかやいへる名將の家に仕へて、見事なる武士、氏は小槻の末葉とかや、手跡は世尊寺をこなし、儒は山崎安齋の道統を繼、弓矢とりては鎭西の八郎をあざむき、其外城形軍法の事何不足なき身ながら、去子細ありて國を立退、迚も牢浪の身とならば、王城の土とならいではと、身すがらにて都にのぼり、少の貯へを以て小間物にとりつき、楴笄紅粉白粉、江戸もとゆひ尺長、萬京女の好ふうを呑こみ、下地の發明に秤目をせゝらず、諸事大やうに商めぐりける程に、馴ればいづくにも鬼はない世の中、烏丸邊より似合しき妻をさへもとめて、是より取ませての切商賣、古手三つ物賣買と出かけ、あつぱれなる暮し、獨ある子も男にて、器量といひ心といひ、親の跡をついで、何させても利口なりけるまゝに、一入の悦び、態と家は持ずして、少ある銀は買置に利を考へ、人に借して歩を心がけ、樂々となりまさる、きのふはけふの夢なれや、いつしか二親も柳七に世を渡し、墨染といふ里に田地を求めて、後生一ぺんの樂隱居、柳七は廿四五迄女房をもたず手せんしゝて、淵の上の雨と降わく銀おもしろく、獨りずみしてかせぎけるを、二親の慈悲とて、墨染の邊に、是も去方つとめられし歴々の武士の果、父親に別れて後家ながらも昔の風うせず、萬靡をたをさじと、獨娘おてうといふ十二三の子をしほらしくそだて、假にも下輩なる態をさせまじ、我こそかくなるとも、あれは又出世させてと、心ばかりはたしなめども、朝夕のけぶりも孀の家には疎く、夏冬の着類も有ほどは賣て、今は嚙ちぎるべき便もなく成につきて、此柳七が親共の光りを頼み、纔の借銀に重代までも質とせしかども、猶手つまりがちなるを、柳七が親も不便がりて、此娘を養ひとり、ゆく〱柳七とそはせ、心やすき夫婦ともなすべし、先今の内より馴染せてと、すぐにおてうは京へのぼせ、此後家には愼に一人扶持のあてがいして朝夕を送らすれば、二人の流浪をすくふといひ、手前

にも勝手よし、且は後生の種にもと、念比なる心底うれしく、後家も手をあはせて悦び、おてうも能男もつがいやにもあらず、急ぎ京へのぼりけるより、柳七も二親の心ざし有難ものに覺へ、はやむつまじきかたらひ、迚もなら此子に琴三味線をおしへ、小舞小歌のあんばいをしらせて、月のあした花の夕べも、氣をはらすに夫婦づれのなぐさみにしたならば、恐らく大名高家の大分の銀出して、茶小性妾を買置して樂しまるゝにもまけまじき慰と、いたり心の物數奇にて、其頃の名ある檢校達彼是に通はせ、糸竹の道を學せけるに、黑染の隱居惡ひがみありて、柳七めが心底、親の目がねをもつて養ひ取たる娘を嫌ひ、舞子白人などに仕込で賣下地と見へたり、こらしめの爲なれば、爰は一思案して、柳七めに鼻明せよとて、俄なるもくろみ、所は西國の去方へ繪圖にあはせての奉公口、しかも百枚の捨ぎりで、四五日の內に極が談合、おてうは藤森祭に呼でより、とゞめ置てかへさず、柳七はかくともしらで、首を長う短う、幾度か門に出て、南の方を詠め居けるに、十日ばかりすぎておてうより文一つ、親御樣の御さしづにて、かやう〳〵の御しかた、そもじさまの手まへもめいわく、心ならぬ事に疑はれまいらすべきも悲しけれども、御隱居さまの仰おもければ、是非なく西國へ來る筈なれども、首途の日を命日とおぼしめせ、とてもながらへてはいぬ心、今までのよしみには、ない跡をよく〳〵御とぶらい下さるべくとの、墨色もうすくなりて、誠に淚ながら書たる物と見へたるに、柳七が悲しさ手に物もつかず、その暮よりかけ出し墨染に行ば初夜の鐘、つく〴〵と道すがら思案極て、二親にも態とあはず、おてうが母親を賴てひそかに呼いだし、その夜は母おやの方に泊る筈にして、裏道よりぬけ出、二度京へは歸りけれども、御隱居の腹立もだしがたく、夫婦ともに勘當するからは、おてうが母にも乞食させて見せうとの狀の內、とかく生てはそふ事もならず、死でゆる〳〵と添ならば、誰こわい物もない事をと、夫婦ながらむねをすへ、ともに刄にふしにける、

心中大鑑卷第一終

心中大鑑卷第二　京の部

(一)東河原夜明の紅　小川通　米屋庄兵衛
堀川通さはらぎ町八百屋おしゆん

紫は江戸、茜(あかね)は山科、八里半といふ芋、栗に似たる風味とて四國にありとかや、人間草木天地に私なし、種にかはらずして、自然と所によりてかはる事あまたある中に、横にきれたる女もなくして、京の水にて琢き出すひかりには丹波の繁(むくろじ)も白く、近江の這出、一年都の住居すれば、在所より逢にきて、我娘を見違ゆる事めづらしからぬ不思議なり、されば諸國より妾見(てかけ)たてに役人罷上りて河原町の座敷借り、用聞の町人に内證ありて、上下京の肝煎中間觸流すに、畫圖に合せて目見に來る女、毎日三十人ならしにして、四五十日も盡ず、さりとは此みやこならで唐天竺にもなきことなり、これらは何者の娘ぞとおもふに、さらにいやしからざる望なき浪人、あるひは五貫目十貫目の商人、相應の家屋敷を持て店賃取て渡世する者、内證せはしからず、猶老の行末をたのみに、自然一國の世繼若殿を產ば、國本妻とあふがれ、これより合力にあづかれば、孫に大名を持てゆるりと談義まいりして、老の入まひめでたがられ、雨風の氣づかいなく、人は米の高いを迷惑がれども、こち共は餘る飯米を賣てつかへば、勝手にはましで御ざると、九月のさし入から厚綿のくゝり頭巾、世に娘をもたぬ衆の心ぼそさを推量いたす、今時何をかせぎたればとて、照降のない商もなく、男の子に性のよきはまれにして氣遣絶ず、とかく娘さへ持てば、何時も相手のないといふ事なしと、見及び聞つたえてうらやましがるは尤也、されども手入むづかしく育やう口傳ありて、それに仕立るには、先襁褓のうちより肌に木綿物を觸ず、朝夕の手ぬぐひに羽二重を用ひ、不斷足袋に日野絹を袷にし、楊貴妃の洗ひ粉、花陽夫人の白粉、梅花の油兵部卿をもつて、晝夜湯風呂に入て琢きたつる時、捨銀百枚五十枚の光りあらはれ出るより、琴三味線舞の師匠をさだめ、手ならひの間に百人一首、いせ物がたり古今源氏をよませ、歌がるた貝合せをもてあそばせ、あるひは尺八一節切、碁將棊楊弓鼓謡をこゝろ得させ、鞠は繪袴までになし、平家をかたり琵琶まで彈ずる小娘もあり、色の白きばかりにはあらず、品位あ

る事ぞかし、されば堀川にすめる八百屋與助が娘おしゆんとて、美形の花ざかりなる、十七才より三年西國につとめしに、とかく大名の子になるほどの果報力のものすくなし、月のさはり滯なく、花香なう京へ歸り、又同じ望にて暮しけるに、近きあたりに米屋庄兵衞といふ男、稚馴染の妻に別れ、なき玉の歸るといふなり香を燒て慕へども歸らず、面影ありといふ蓬萊宮も京からどちらにあたりたると問へどもしる人もなくて、過し頃此おしゆんを見初つるに、戀しと思ふ女房ふたゝび蘇生ぬる品形、まざ／＼似たるにおもひつき、媒をもつて貰ひうけしかば、母親かいとつての返事、これは親仁に聞せまするにも及ばず、我等ごとき娘を、嫁入の祝言のと申事はおもひもよらず、一人のむすめにて、幼少より身代には過て藝能に物を入しは、ふたりの親樂々と行末のたのしみに、世話をいたせし事なれば、大名を相手にとはおもへども、田舍へやりての氣づかひにあきましたれば、欲をはなれて一年切にして、切のない小判三拾兩に、沙綾より上の仕着せなされてさへ下さるお方なれば、談合致すべしの返事を語れば、庄兵衞つく／＼思案し、算盤をならして三拾兩に此仕着せ、五六の三貫目にてはとまりがたし、近年の身上に合ず、たとへ大風が吹て洪水がしたればとて、借錢埋て三貫目延る米のあがりおぼつかなし、こゝは分別所なりとおもふに、こころの駒やる瀨なし、世には太夫を買づめにする者あるに、此戀しかけて三十兩の聲聞て止るは口惜、一寸さきの闇まぼろしの命は朝をまたず、およそ一年は三百六十日、必竟あげづめのさんようすれば一日十匁にはたらず、つまる所本望とげて遁世したればとて、うき世にはやおもひ殘す事なしと、一年切の高ぐゝりして、當座に給分半金十五兩相わたし、念の爲の一札、さて此方へ呼取事、女房の一周忌も過ぬに世間の遠慮あれば、それまで親の手前に預け分、一ヶ月飯料金貳歩、折ふしの酒肴の外に油薪の算用迄、毎月晦日拂に相究め、奥に小座敷をかまえてかよひけるこそおもしろけれ、

世界におもひのまゝの首尾ばかりはなき事也、おしゆん親仁久々にて持病起りて、今度ははや御暇乞に見えしを、漸と人參乘物を飲し力にとりとゞめければ、此取あつかひの氣のつきに、母親の血の道再發

し、看病手がまはらずと伏見の姪、鷹峰の甥、父方の伯母、鮑のごとく子供を引つれての御見舞、一ヶ月半月逗留して喰たて、出入あたま、湯茶に薪入増、醫者のつけ届け、鍼按摩の藥代、今度兩親病中の入用取集てそろばんに見へたる所十二三兩の物入、兼ては來る三月切に請取殘金なれども、ことはりいふて此拾五兩唯今貰ひませねばと、霜月の初めよりあまり恩にも着ぬ貌にて、親仁膝たて直して申出せば、庄兵衛こゝろあて覺悟の前には内外の雜用といひ、春渡すを此霜さきにせがむには、相違あれども、のぼりかゝりし戀の山、おりぬ氣からこゝろよくうけあひ、大津の伯父に無心にて漸調つかはしける、程なく師走の衣賦り、かたう極めし手形の外に、おしゆん兩親へきる物一つ宛、帶までの心づけ、欲にはかぎりなく、奥底なきかたじけな貌には見へず、かるほどは取て仕舞へばおもひ殘すことなく、あくれば正月もみなになる、とかく立よらば大名のおかげでなければ、あたたかな事はなし、三月に手がとゞく、貌に汁けあるうちに、熟き仕合をせいでならうか、たのむ方をばたのまねばと、肝煮中間へかけまけり、西國はさて置、唐へ



なりともよい口があらばと、俄に目見の用意、おぬしに京はふさわぬと七本松の八卦置がいふた、親仁とおれが傾たもおもひ合すると氣を持すれど、おしゆんも一年のなじみ、如在なき庄兵衛が心底にこゝろざしをたてける、庄兵衛近年の左まへ、此戀より世をとりつくろひ、金銀の當座がり給金仕著五十兩程、雜用かけての出入百兩にあまり、諸親類の手前首尾よろしからず、五兩十兩の取替も此節まゝならず、ある夜ひそかにおしゆんにかたりけるは、我かくまでかよひなれし月日は夢なり、一生妻にいたすの願ひはかなはず、せめて一とせの契りを身命にかけて樂しみつれば、今は此世におもひ置事なし、今一年もさだめの通りにとはおもへども、其方兩親の不足貌に見あき、其上我内證不埒なる事ありて、京の住居も面白からず、ひところ江戸へ下るに思案をかためし也、もし命ながらえば、必かさねてのあふ瀬を祈るばかりぞと、涙のうちにかき諭(くど)きければ、しばしは返事もせず、これはおもひの外の事を聞ます、わたくし事は親孝行ためとぞんじ、ろくな事ではなけれども、手かけあしかけの奉公、しらぬ海山にうられ舟にたゞよふ



こゝろぼそさ、ふつ〳〵といやなる事、行末にては與車に乗事も、つらさにはかえまじとおもふ折ふし、此たびの御縁うれしさかぎりなく、ながき夫婦のえにしとおもひしも早くかはり、一年たつかたゝぬに、又田舍への談合、いかに親の仰せなればとて、此中をふりきる事、只今になりておもひきられず、是非〳〵江戸へのおもひたちならば、わたくしもひそかにつれて下り給へと泣出すを、やれ親達が聞はとやう〳〵機嫌を直し、かうはいふたもの、まだ五月三日にてはしれず、あすの夜ゆるりとかたるべしと、氣のつかぬやうに立歸るに、かならずあすと起もあがらず鳴寢せし面かげもこれまでと、すぐに東河原へ出て、獨しねば手がつかず、借錢乞も幽靈せがみし咄を聞ずと、所見たてゝ自害するを、おしゆんうしろよりおしとどめ、このやうな江戸であらふとおもふて、あとからついて來ました、二世とちぎりしうへはと、ふところよりあいくち盃取出し、稍に川水をすくひ、一蓮託生とさしかはし、今はこれまでからすがなく、裾とすそをむすび合せ、さんかつ以來の心中、いさぎよき手本とはなれり、

（二）辛崎の夜の涙　竹屋町通東洞院屏風屋小兵衛　あいの町　おつた

寢たい程寢て、起たい時おきて、喰たい物を喰て、したい事をして、寒ければ綿子着て火燵にはいり、暑ければ涼み所をしつらひて、美しき者に扇れて暮しける、其人間も目鼻口手足にかはる事なきは口おしき世界なり、こゝに間の町三條近きほとりに、あしたに星を荷ひ夕に月を乘せて親子二人、暮すうちにはあらぬ駕籠の者あり、今年口に入物高直にして、いよいよ息杖たよりなし、されども一人の娘つたが成人を待て、堂にも宮にもたのみて月日を送りけるが、はや十八歲、此器量を賣て樂々と渡世する願ひにもあらず、手足達者なる聟を取て、駕籠の片相手にかせぐ程なれば、寢酒一つもこゝろよく給るまでの願ひなりけるを、相借屋の產ず後家の一群、けふは彼岸の中日に、茶物がたりはじまり、おつたほどの娘をひとりもてば、手いたきいとなみなしに、人をつかふて樂に世をわたるものを、あつたら子を唯置は、黃金を芥の中に捨てゐるやうなものとうらやみけるより、親分別替り、いかさま片輪にも產つけぬ奴をとおもひつき、親子三人飢ず寒えずのあてがひあらばと、髮に油

の世話を焼ける頃、竹屋町屛風屋の手代小兵衛、若ければ只は居ず、折ふしは清水坂の茶屋を覗き、藪の下こつほり町、上八軒の假寢、面白ければ遣ひ過し、されどよひ時分に智惠つきて、算用づくにて此娘にかかり口、熟き所に喰つきて、願ひ程のあてがひ相應に不足なく、親も荷瘤今はさもしき物に思ひて、鐘木杖にて婆々諸共に、けふは淸水あすは獅子が谷へ參り、萬日開帳に日を暮しければ、あたりほとりのあやかり者といはれて、一とせたつは夢なれや、明れば三月の節句前、小兵衛親方へ此首尾あらはれ、未だ年季の内の奉公人、妾を置て三人たて養ひ、此節其金銀の出所穿鑿するほど直にはたゝぬ屛風のかけ銀、中にてつかみ、繪にもかゝれぬふでき、いくつもたゝみあげて、今は箆のつかはれず、身のたて直しかなはず、駈落に思ひきはめて、蔦に此段々語りければ、母方の伯父さま東坂本にあり、子がなければ常々私をほしがられました、それへまいり一日なりとも足を休め、その時の思案又あるまいものでなし、かた時もはなれがたしとなげくにこゝろよはく、其夜ひそかにぬけ出、あくれば卯月二十日あまり、坂本につき伯父にたづねあたりければ、これは何としてきたぞといへば、されば唐崎さまへまいりたく、それからおいせさまへもまいり、高觀音さまから石山へもぬけ參りをおもひたち、このつれのお人は隣の兄さまをたのみてと、そゞろなる物いひ、伯父一圓のみこまず、はてさて奇特な、方々かけての參詣、しかしながら殊勝に存じがたしと、姪のこゝろやすさに遠慮なく、母からことづてはないかといへば、京を出ますする時はふたりながら寢いりばなでござつてと、てにはあはぬからいよ／＼こゝろ得がたく、二親にいとまごひせずに伊勢へまいれば罰があたるほどに、急いでまづ歸り、とくと首途の盃をしてまいれと追たてければ、小兵衛手もちわるく、いかにもこれは伯父さまの御異見のとをり御尤と、不首尾仕廻に立出、おもひつけたり、膳所によう知た西雲といふ道心者あり、これへとよう／＼に尋ねあたれば、二三日あとに熊野まいりの留守なり、もうしつたものとては、まことに松本の宿に拾年ほど已前に、祇園會に上りける二從弟の龜松をたづねければ、しらぬ／＼といふ人ばかりにて、七十ばかりのお婆々申けるは、其龜松は市助とい

ふ男になつて達者であつたが、去年の大雷落て家うち一人も殘らず死だはといひ捨てこそとほりけれ、これに又力をおとし、兎角いせまいりに極めて、腰を見れば七十五文、藥袋の金入には駒引錢一文、晩の旅籠代にもたらず、今から京へ歸りていひやうがなし、まあ山中越にそろ〳〵行て、今一度京を見て死たいと涙ぐむに、小兵衞も力よはり、たばこも味なく茶碗酒も咽へ通らず、好色は榮耀道具と、今になつては合點遲し、萬太夫が芝居にて米屋心中を見たときには、とても死なばおもふ者とふたり、あれでなうてはさうらやましいこゝろもあつたが、今はたゞ心ぼそく、山のけしきも松風も、目に見る物ごとがあはれになりて、誰ぞが尋ねて來さうなものではないかと、札の辻にたゞずめども、これや此行も歸るもしらぬ旅人、はや日も暮ゆく空に、入日は都の西の方もなつかしく、湖水をつたふて、初夜の鐘とおぼしき時、おぼつかなくも呼子どりの山中越にさしかゝる、道不案内にてけふは四月廿八日、月なき夜半の星水にきらめき、螢まじりのうすあかり、これぞからさきの宮につきて、しばし息をつき、藻にすむ虫のわれ〳〵がこゝろから、面白かりしあふ瀨は淵にかはり、此世からくらき道にまよふも、さだまりし緣にしなるべし、今京へ歸りたればとて、親方への算用たゝざれば、流浪の身になつて見ぐるしき死を見せんより、今が時節到來の至極なりと念佛申せば、蔦聲をあげ、若氣にてあて所なくまよひ出しかなしさ、たとへ生てかへるにして、此くらひ夜にひとりは恐ろし、誰も送つてはくれまいし、とゝさまかゝさまの案じて居らるゝであらうふがと鳴出すに、小兵衞中々これに氣を持て、さもしき女の所存と、帶といてしかと我身にくゝりつけ、湖に飛入て水のあはれと消にけり、おもひ合たるうへは無心中にはあらず、

（三）蠅追(はいおい)心中　車屋町はり物屋與九郎　同町　うばまつ

見も聞もせぬ人まで、辨慶とさへいへば強ものじやといひ、長田(をさだ)といへば夏でも振うてゐるやうに合點する事、いかさま能おもへば、やくたいもなき物は人也、おなじ名を取ともすこしにてもほめらるゝ樣にと心がくべき事也、此近年の時行物とて、方々の開帳、方々の萬日、年ごとにさしつゞきて我へと參りけるに、五十ばかりの男奉加場にかゝりて、何と戒名は

一文に幾人書て下さるといへば、書人も書人哉、此返事に、こちのは餘所のと違ふて、一人が一文でおじやるといふ、扨も高い事かな、一文で十人かいてたも、たとへ十人書せても、紙一枚はいらず、丸々の設と見える物なれど、後生こそ大事なれ、さのみねぎりはいたさぬ、一文で七人かいてたもれといふを、そばなる禪門があいさつにて、漸一文に五人の戒名をかゝせける、元來高利のある物なれば、墨が薄うても又麁相に書いたもとらぬ、名の字も一つ〳〵節用集で改て書てたもと物好するも惡し、あれはまあ何者なれば、是ほど迄根性きたなくは育けん、あれでも後生じやとおもふものかとつぶやくに、そばに居られしは車屋町の太兵衛といふ人、是も當寺の旦那にて、けふは一日朝から奉加場につとめられしが、此男を指ざして、あれこそ去年東河原にて心中せし與九郎が兄なり、あれは地體白川の淨福寺に、下男奉公し十年のつとめ、むまれついて愚痴から仕出して、壹貫目餘の元手、吉田の出在に家屋敷をもとめ、田畠のすこしも作りけるに、此前善光寺の開帳ありし時、おとゝの與九郎その頃いまだ十四にて器量よき若衆ざかり、物も少書といふ程にはあらねど、銀のうけ取に間を渡し、髪に櫛の歯を入そめてより、五味蔓木の實のあぶらに襟のよごるゝを厭はず、切藥の楊枝に歯の艶をみがきけるは、兄に似ぬ弟の身もだへと、人はいひけれども、是にこそ一物あれ、善光寺の和尚に思ひつかれ、あれは行末物になる奴と、開帳の間手まはりをはなさず、與九郎〳〵としばらくも唯置れぬを、兄が仕合の付時、散錢御印文代の錢高毎日かぞふるも隙なければ、車に二兩三兩宛の賣買、此兩替の肝煎して、一厘二厘のすあいに高を積りて、貳拾貫匁餘の利あひ、是みな與九郎が恩なりとて、弟を養子にしけるも道理也、されば百姓もまだるく、吉田の家も賣替、安居院に歴々のいゑをもとめて、先はしばらく蕢莟の買置、弟は此所作も好ずと、方々の口を聞て、職を習ひに奉公をかせぎ、幸張物屋の口あるを頼て、十年の勤如在なく、殊に宿もとがよければ弟の身のまはりもむさからず、ていれせし身なれば器量も十人なみにすぐれけるまゝに、我人の口にかゝり、兄分の數もおほかりき、角いれての後は、衆道の戀事手すきになりしかば、引かへて爰かしこの娘中居腰元に文を付

られ、氣のかはりたる苦勞、與九郎が身に取ては大慶ぞかし、あるが中に、町内の大和屋と云家は、ちかき頃後家にて、あとゝりとてはみつになる女の子、しかも後家御に乳がなうて、二せの御乳にそだてさせ、家あまたありけるまゝに、借屋かして樂々と過されける、此後家與九郎に思ひこがれ、張物の度々、此乳母に仲立させられけるを、世にはまんかちな事もする物かな、お主のために戀をとりもつて仕なして、まんまと我戀をいひかけ、私はそもじさまゆへに戀病します、第一くふ物が咽へはいらぬ故、此ごろは乳もほそうなりましたを、段々の僉議(せんぎ)しつめて、是みなこなさんゆへなれば、一二度はゆるす、どうなりともして此戀を叶へてもらへ、是もこちの子がかはゆさじやと、御ゆるしで御ざんすと、しめ〲といひけるに、與九郎もまんまとはまり、纔に一夜の肌をふれけるが、人の戀をかちおとせしむくひか、其月より子をはらみて、次第にわけも惡うなるより、後家も中々一ぶんはたゝぬ所、戀男を寢とらるゝといひ、子をそだつる内はふかくたしなむべき事をそむき、彼是のにくさ、思うちにあれば色外にあらはれて、迚も居にくき内の樣子、與九郎も是にあぐみて、さしあたりたる難義、今さら何ともすべきやうなければ、傍輩の宿を賴みて四五日が内預け置、さま〲と分別して見れど、ないちゑは出べき樣なくて、是非なく夫婦づれの心中出立、今夜は知恩院町の伯母の所へ、銀の才覺してもらひに行と僞り、今世の思ひ出祇園淸水を拜みめぐり、立かへる浪の東河原、二條づゝみの石原に座して、先女房を一おもひにのど吭(ふえ)をさしとほしけるに、因果や此刄物なまくらの新身、しかも堀川の夜市に、三百五十出して買たる突込といふ脇指、なまりになまりて曲りける程に、我身にあてゝもおもふやうに切ず、次第にひえかへる死人の肌、うしろ髮ひかれておそろしさもまさる、はては夜明の鐘にしらけて、はしり來る人かげにいよ〲の耻、せんかたなく手しほに蠅を追て居たりといふ、それが兄よとかたられける、

(四)屛風も顏も千枚張　油小路二條へうぐや助右衛門　同東川上ゑや小かん

おもしろや春三月、嵯峨仁和寺(おむろ)いつも見る祇園淸水、地主の瀧の下までも、花に氣をかゆれば水の流も匂ひある心地して、我人の心すゝみゆくまゝに、おもひ

あふた連一人二人、ちいさき辨當に繪むしろ一間つつみ添て、小でつちが肩に預け、火繩の烟野風に吹せながら、きせるくはへつゝ歩み行道すがら、見る程の人の評判、あの男はなに人じやとしらす、こちの邊でさい〳〵見る人じやが、何でも替たなりもせず、常住淺黄の木綿ぬのこ一つ、うへにはくろ茶のあはせ羽織、餘所行にも宿にても、ようは汚れぬやうに着らるゝぞ、こちとらはあれにあはせては、物着が惡うてたまる物でもなし、地體のかせきが違ふたゆへ、着たうても着られず、爰へ來る娘はよい器量の、先いはふやうもない顏だち、惜い事は衣裳が惡い、夕べの事は何としやつたぞ、おれは最ちつと聞たかつたれど、寢むさに戻つたれば、内には彼二條の表具屋の助右衛門、ない〳〵の事にうき身をやつして、内の女ごもを賴んで文かいてもらふやら、服沙を一つ拵へて繪をかきにやりて、其序に此ふみを遣てたも、又一度逢してたもつたら、神ぞ大分の事こそしらね、二人の衆に端午のかたびらは仕てやろと、跡先なしにつのつてゐる所へ戻つて、無理に酒買せて呑で寢たといふを聞ば、是は夷川の堀川邊にて、糞賣の八兵衛といふ男、此前の飢饉に泥龜の糞賣おもひつきしより儲初、長崎の壺割蜜漬の生姜、飴は近き頃より柱といふ名を引出しに、一頃は朧豆腐、一挺三匣の懷松明、およそ珍しき仕出し、時計繰ほど商賣を替ても、一升の袋には大海でも一升とかや、今に埒の明ぬから町白の巾着宿、酒と色とを盗賣にして、夫婦の身をぞ養ひける、是でも人なみに世を渡ると思ふは淺ましき根性なり、されば彼表具屋の助右衛門は、親達年寄ての一人息、殊におさなきより利口ものにて、皷も大倉派を見事こなし、殊に狂言は大倉の孫弟子なれども、所々の能にはづれず、およそ此組に入そめし初心の程、惡うすれば役者かたぎ、大酒呑習ひ、色にまよひ入などする事、第一身だしなみを專とし、衣類より腰の物、何から何迄も、よろづ端手に風流をつくし、鬢つき髮の風もさま〴〵と物數寄し、聲をよくつかひなして、一座に投ぶしは我らならでつゞく人もなしと高ぶり、三味琴琵琶も壊はれて稽古に行くを、親達たま〳〵にも咎れば、是も狂言に入ゆへに習ふといふ、其樣に一つ〳〵氣をつけて、付てもありかれぬ物なれば、そのぶんにして置ば、今日は三井の座

敷能、晩には中間の稽古、明日は明日で米澤屋、一日も内には居ず、夜を晝にして色ぐるひ、西は能れど中道寺の大坂屋に、遠州を買た時の埒が濟ずして、三もんじの次兵衞が、出口の升屋に東西張した面影もそつとして、東へとおもへば東西の石垣、祇園よりあなたの燒豆腐の祖母さへ、此人を田舍六齋と付たは、太鼓が多くて銀が少ないといふてあへしらはず、惡じやれする顏で叮せゝり、奉公人腰元、中居還出、子むすめもちよこ〳〵埒あけて行中に、煮賣の八兵衞とのが肝煎にて、上繪の小かんといふ娘に出かけ、假初ながら一年あまりの馴染、小かんも助さまの男ぶり、物いふての聲つき、何さんしても仕兼さんせぬお人、おそらく男一疋じやと、一筋におもひこみしより、親兄の目顏忍びて、起請も何枚か小指の血をしぼりける、うたてや此中に難儀なる事は、助右衞門が弟分澤屋の傳次、逢そめし始よりかみかけての約束、衆道を捨て女房は持たじと、是も誓紙に股の血を染置けるに、小かんと此度の戀漏れ、助右衞門に逢てさま〴〵に問ども、色々に陳じて分明ならぬ分覺束なく、直に傳次は小かんが方へ尋、娘が密通、助右衞門がありさま、針を棒に叒を牛といひ聞せ、親に耳を打せしより、小かんは毎日の異見に耳を腫し、あはれ此事を露ほどもしらせて、日頃の起請も實ならば、是を序に貰われたいと、俄に淸水を居ながら賴み、唐崎の方を寢ながら祈るに、おかぬ棚さがす鼠は常に腹を乾とかや、剩此ごろは取しきりて親達、若い女をのらつかせて置故に、えしれぬ根性も出るなれば、迚も人手に懸さする身、親方の弟子傍輩、近々に宿を持はづ成に、物入こなしに女房にさせてと、同じ上繪やへ仕付る故、そちは馴染の助右衞門とやらに、隙とつて緣をきれ、さなくばおのれ座敷牢にいれて、一代もの丶立枯にすると恐しき異見、小かんは一向にむねをすへて、なる程此事は、わしが方より仕かけた戀ではなし、いかにも去狀をとつて來ませう、とはいへ私ひとり、むかいまでやつてくださんせと、煮賣が方へ相圖して、助右衞門を呼よせおき、その夜にぬけて行道の、三途にはあらぬ二條川、ふかいは小かんが情なれど、助右衞門が臆病風、女ばうは殺し置て、よし〳〵と立歸り、あたらうき名をながしける、

（五）平野の戀の淵同 ひらの松野や豐太夫おしゆん

都の北、平野の社は、源平藤橘の四姓の祖神を崇て、年久しく齋こめし舊地、宮居は雨風に朽たるまゝに苔むし、松杉は植しまゝにて鳶烏の宿りとなりけるを、近き頃御造替ありてむかしに歸る朱の玉垣、幣殿神樂所廣く淸く、二度繁昌の地となりけるは、天下安全、國家長久の瑞相と、洛中の是沙汰、されば是によりて、日々の群集袖をつらね杖をひき、辨當小竹筒切食などそれ〳〵の樂みして、愛宕參りには何も二條口より太秦へかゝりしも、かならず下立賣を紙屋川へと心ざし、北野千本の慰舟岡大德寺の歸りも、伯樂町眞盛通の茶屋を見すてゝ、是非とも此所に遊ぶ氣には成にける、されば此いきほひにつれて、始心見に出せし水茶やは炙餅屋となり、粟餅鮨酒の家は上々の色茶屋と萬向上に廣がりて、平野の茶屋と名とりの棟數およそ七八間軒をならべ、色香をつらねて參詣の客に戀を賣事夥敷ありさまにぞありける、是をおもひたちける茶屋の頭は、松野屋豐太夫とて隱れもなき淨瑠璃の太夫にて、加賀掾が直弟子、一げいに妙を得、おそらく西陣には誰こはい者なく、祇園町を引てより早稻米の御齋、猶また曾根崎などの大時行に、殊に弟子數も彌增けるより、それを此所の元債として、勤する女も三四人居ならべ、つき〴〵の小遣迄も、心あるふうに仕立、客に無心いはせず、無理酒强られても、露の遲きを待ず、泊りも三度ともする人あれば、一度は異見して宿の首尾を繕はせなどせし程に、無欲なるになづみていさゝ隙なき松野屋が儲、いよ〳〵客達の氣を取べき謀にとて、方々と賴、娘分の子をみたてけるに、去々年室町の三七といふ客と、島原へ同道して輪違屋の小西と一座せし時、やり手のすまが妹、しゆんといひし娘、その頃十二三にて、壹貫町の丹波屋へ遊びに來りしを、今おもへばよい器量にて、目もと顏だち物ごしのしほらしさも、爰らに双ぶべくもあらずと漸に貰ひうけ、幸上林につとめし今川、大坂へ所帶をひく時より浪人して居しをも呼取て、しゆんが事萬は是に仕込せけるまゝに、我一と客も入こみて、負じおさらじと錢つかふ事にぞありし、されば物さかんなる時は、かならず魔がみいるるとや、生得此亭主豐太夫は箸まめなる惡性者、我家におく程の女、いづれも手を懸ざるものなく、しかも始のほどは人目恐き迄もしたゝるく可愛がるやうに

見へて、また我戀のなくなりて外に心の移りぬれば、打替手の氣質、さりとは他所の了簡に及ばぬ事と、皆皆寄合ての噂なり、此氣ゆへ過し冬より彼しゆんに心をかけ、晝夜をいはず持はやしける頃、淨福寺邊の客に戀つのられ、五日五夜の揚づめ、愛宕仁和寺の遊山より、芝居丸山と氣を替、晝ばかりさへやるせなきに、宵から奥の間に取籠りて、しみかへりたるむつごと、こらへ情なき豐太夫今は無分別にせきつめ、せはしく勝手より使立して、おしゆん少の間借りましたい、外の男のためにてはなく候、亭主があいたいと申ますることせがまれ、無興ながら借けるに、呑氣とはいひ乍ら、本氣にはあらぬ豐太夫、たちまち袖の下に九寸五分を引さげ、戀しらずめといふた計に、一打におしゆんを仕とめ、歸す刀に我も死にしは、泥田を棒で打た意趣、わけわるうこそ沙汰しける、

心中大鑑卷第二終

心中大鑑卷第三　大坂の部

（一）〇〇は見るに惱煩　北久太郎町三丁目丸屋お梅　同手代六兵衛

近年の世の中、百姓の鳴ぬに合せて、米の高直なるはいかなる子細ぞといふに、其所謂おもひ〳〵の料簡ありて、いづれもいやといはれぬ理窟あれども、小賣の米屋は、下直にして商事おほきがよしとぞ、さもあるべき事なり、すこし高きといふより、面々にきをつけて、五人つかふを三人に減じ、三人を二人にし、一人のめしつかひも夏季は簡畧してつかはず、物事米につれてあがりを受れば、同じ人數にても始末から雜用入まさぬは不思議にはあらず、されば難波の北濱は、東西南北の米舟、毎日入込大湊にて相場の根本ながら、朝と晩のあがりさがり定りがたく、野分の空の雲を相手に鹿戀から太夫へとぶもことわりなるべし、こゝに北久太郎町池田屋作兵衛とて、唐うすの數を並べ、よい圖に乘たる折の米の買置に年々利德を得て、よろづに不足なき身にも男の子なく、只一人の娘お梅、十九まで聟を撰み、あるはいや也おもふはな

らずの宮のちかひ空しく暮行、空にたつうき名の花ざかり、貌形すぐれて情ふかく、生ものには油斷のならぬ世界に、喰たい時喰せぬは親の慈悲にはづれたれば、いたづらするとて無理とはいはれず、町内にもお梅が手習友達のたれかれ、十四五より嫁入してはや子供二三人歳子に出來たるはなしを聞くにつけては、それとさしてはおもはねどもうらやましく、七夕のとしに一たびのあふ瀬も、ひとり寢る身には妬ましきは花なり、ある時手代六兵衛、あきれ草といふ○○をひとり行燈のかげに見てゐたるを、お梅もさしのぞき、面白書物かといへば、なるほどおもしらふてたまられねばこそ、此○○○つき餘念なく、○○○○○○○とかいてあるは、よい氣味があまりての事なるべしといへば、お梅奪とりて奥へ入、親の目をしのびてこれを詠くらし、食くふより外懐をはなさず、是よりこゝろうつりそめて、ちよつと○○○て見たら、どのやうなものであらふぞと、ときはの山の岩つつじ、いはぬ色香の貌にあらはれけるに、六兵衛もつねぐ\、熟きさかりを只置事は、寶の山を手ぶりであるくに似たり、されども手代の身と律義にかまへて、

今まではつゝみけるに、ある時先度の○○は何となされしぞ、わたくしが○○をとられまして、よるもさびしうて寢られませぬ、せめて○○○てうきをはらしまするといへば、お梅それはおれも同じ事、ついに○○○○事がないによつて、こちも○○○○慰む、女は女ともおもふに、男の身で○ばかり見てよう堪忍はなることゝいふに、六兵衛も渡りに舟を得たる心地にて、只今まではつゝみしおもひのいろをかたりそめ、さて今宵は親旦那は念佛講にお出也、おふくろさまは伯母さまの平産お見舞、乳母は血の道がおこつて寐てゐる、食燒はせんたく物の色紙をあてぬさきから舟をこぐ、男はからうすふみくたびれて、きせるをくはえながら鼾かく、小僕は手ならひするとて、筆もちながら片岡がせりふを寐言にいふてこけてゐる、これほどの首尾は千年たつてもない時節と、お梅に○○○○、こりや何しやる、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、今をはじめの道なれども、時分過たる御所柿の熟せし皮一重の下は膿つぶれ、更に○○とは覺へず、堤されてこのやうな○○○を、今まで○○○において下さる親たちのう

らめしさと、急な所での恨ごと、手ばしこくしまひてより、その胸のとゞろきちやつとやまず、これよりひたすらの中となつて、湯殿にてのかり〇、二階の契せはしなく、氣のつかぬ人めもうるさく、染るに色をいやましける、兩親夢にもしらず、あくれば二十の春の花、さかり過ては聟のながめも心もとなしと、今目に見えたるやうに取いそぎ聞立けるに、幸似合しき北濱の手代、其身利發にしてしかも此商賣を手にかけ、相性迄よしと、三月中旬に祝言と、はや云入の捧げ物、一門よつての樽開き、お梅六兵衛二人はめでたからず、よし〳〵其時節までの契り、親達の氣のつかぬこそ仕合なれ、聟めが來るよひに、ふたりいづくへもたちのき、それからそれまでとさかり合たる中々に、跡さきの分別もなく、今は大膽にしのび合ぬる事、親の目にかゝりければ、此頃世上物忩(ぶつそう)なる時分、身ぶり合點ゆかずと氣をつけしより、はや今までの通りに逢れねば、目には見て手にはとられぬ水の月の、ふたりはそらにあこがれけれども、おもふまゝならず、おりふしのふみと目よりのよすがなく、月日はやくたちて今宵は聟入祝言とて、一家寄合雜煮吸物の拵、出入の男女、肴屋八百屋參りて、それ行燈の掃除は、燭臺か蠟燭、伯父伯母のきりもり、湯風呂へお梅は入たか、髮はゆふたか、着物をきかえよと世話やき方、こゝらたづぬれど見えず、只今までこゝに御座りましてと、雲隱までさがせどとかく見へぬにきはまり、内藏を見れば物の見事にお梅をさし殺し、六兵衛廿六にて悅びの中の愁心中、

（二）阿彌陀が池金貳角の光　安堂寺町浪人杢兵衛　堀江茶屋お山きよ

千里遠しといへども、舟といふ物ありて、寢ころびて行にやすければ、嵐に氣づかひたえず、陸に馬あれども山川に難所あり、家に火事、人に盜人、兎角油斷のならぬ世界に、家業さま〴〵なる中に、士こそ立派なれ、しかれども浪人の時をはかられず、近年おほきものこそ、本知には濟ず、輕き奉公に口おしとて、一とせ二とせくるゝは夢なれや、貯早く皆になりて、始て所領にはなれたるやうにおどろく人あまたなり、大坂は諸國入込の所にて、公家の落し子、大名の乳兄弟、上下和雜の品、わかちがたき里なり、こゝに安堂寺町の裏借家に、本名を改て竹井重左衛門といふ浪人、生國筑紫より二三年前にのぼりて、時にあふかて

のたよりに手跡の指南、弓鑓の兵法は町住の法度にて、漸男女の子供とりあつめて十人あまり、これも五節句の付屆あればとて、渡世になるほどの事にはあらず、奉公の身は主人ほどありがたきものはなかりし、世は淵瀨のかはるならひ、是非なき中にも捨てがたきは色道也、堀江あみだが池のほとりに、龍田屋のきよとて姿の花の晝、暮を急ぐ夜見世のぞめきにたちより、かりそめの契り忘れがたくかよひはじめけるに、上町より此所へ一里七町をへだてぬれば、更行く夜半は泊りにさだめての續貫、茶屋遊びのかろきを傾國にくらべては、富士と泥田の相違なれども、夜晝二角なれば、雜用のけて一日一夜天神買に同じ事也、惣じて色に眤む男のこゝろ、さながら器量ばかりにほださるゝにはあらず、おもひ〳〵の氣に入所ありて、一人もあまる女は世になき物也、去年の春より馴染かさなりければ、はや二とせ、萬づこゝろの奥を見せて、一所に住ぬ夫婦よりめづらしく、行末神かけてとはまた僞りまじるに似たる風情なりしに、杢左衞門浪人の身になりてより、治まる物なりは一粒もなく、遣ひ捨てたる物のかえる事なければ、鑓を賣れば靜謐御代とて釘の價よりも安く、古折紙の太刀に疵の見へ出たるも運の盡なり、賴みきりたる道具をもつて家屋敷をもとむるか、きまりたる商賣を見たて行末はおもふものを根引にもとおもふこゝろあて違ひ、今は切羽鎺目貫の唐獅子まで放しても、當座の仕拂に不足ありて、龍田屋の火車も鼻聲にて、手をたゝかねば盃も出さず、きよが羹をなをしに銚子をもてくれば、御運上の出るは合點か、目をあいて客をしや、燈心は幾筋ぞ、閙しいときは兩手を二役つかはねば擔がまはらぬと、耳の痛き言を取りあつめての俄諫言、なまなか馴染ぬ客には氣がはらず、さりとは勤のつらさ今おもひ知りて、つゝむ涙を杢左衞門見とがめ、心ようない貌を見るはいかにといへば、すこしもお氣にかゝる事にてなし、これみなそさまに深き緣にしを末かけておもふから、外の客におのづから疎くなるにつけて、火車がおそろしきら口ろ根をさゝやくに、今は杢左衞門も內證不如意の段つゝまずかたり、最早相逢もこよひかぎり、江州澤山にゆかりあれば、立こゆるのよしかきくどけば、きよも流れこそたてますれ、貧しきお身にまこさたつるは、大磯

の虎にはおとるまじ、此うへはみなまでいふにおよばず、此身にては一日も、とてもこゝろよくあはれねば、天王寺の尼寺へかけ込すがたをかえ、高野くまのかけて西國順禮して、一まづ在所への聞えに行衛なきものに沙汰させ、月日をたてゝ後、ひそかにかへりすむ手だてあるまいものでなしと、女のはかなきたくみに、杢左衛門も此節の素浪人にかくまでのこころざし、男の身にしてあすは道芝の露と消ゆればとて滿足なり、そのうへ我も姿をかえて、未來の契り望む所と、その夜のあけぼのひそかに忍び出て尼寺に着、罪ふかき身の菩提を祈るこゝろざし、あはれとおぼしめされ髮をおろし給はれの願ひを申せば、當世は親兄弟の請合なくては麁忽になりがたし、さやうのものにはしばしのやすらひも法度なりと、追出さるゝにちからなく、迚もかなはぬうき世、又行さきもさぞあらん、ながらえてからかぎりある命、よくながき後の世に急ぐべしと、此寺のほとりにて、一蓮詫生即是の利劍につらぬきあひて、これもはかなの世や、

(三)曾禰崎の闇 内本町ひらのや手代德兵衛 新地 天まやお山はつ

好色のかまどをたてゝ、よるひるのわかちもなく、町(ちやう)汁(しる)伊勢講のよりあひ酒にも、人の子むすこ人の手代、中より下の出合は、かならず爰が參會所、新地新ちや屋の新よねと、一頃もつぱらと時行出、いまに全盛の色を替ざる中にも、天滿屋の初とて、育は京の島原の、中道寺の藤屋に出初、水上の夕べより、十年あまりのあたり女郎、ためしすくなき川竹の、流れの身の行する、此家にとゞまりて又戀しりの旗をあぐる、年は節分の夜にしれて、廿一粒の豆に有氣入(うけいり)の春、指切髮切起請の虛言(うそ)がねなし大盡ひつくるめて、新川口へさらり、こつきやこうと厄はらいまで、ひいきせし女なれば、ましてや一座せし客ども、莨菪の付さしを吞し中衆まで、あはれかねがなおもふさまほしや、あのおはつを買つゞけにして、一生のおもひ出に、ややが抱して見たひ迄と、此願ひをせぬはなかりけり、中にも內本町のはしづめ、平野屋忠右衛門といひしは、大坂一番のしやうゆ屋にて醬作(ひしほつくり)の根元、京口の美みを作りいたし、風味一りうのたまり醬油、手前づくりの樽うり、現銀かけねなし安うりと名をとり、上京にもいくらか店おろしせしに、はりまのひめぢ屋堺

のはしごや山家やなどいひし、數年のかぶにおとらず、武藏野の原の江戶舟にも、平野屋が名をつみけるより、廣い難波のいりこみの津、茶屋かたけいせい町旅籠屋中間問屋方寺がた、御城內は勿論長町の末、四貫島の邊、蜘手かくなわに、買はやらかしける程に、例年の帳閉にも、子の方といふ帳より閉初申酉戌と、十二冊の廻り帳、十二人の手代の腰に提させ、うりそめより賣初まで、方角そこ〳〵の勝手よくまはしけるが、此新地口をうけとりの手代は、忠右衞門が兄の子にて德兵衞といふ若者、まだことし廿五にて、手あしなる中に育ながら、爪はづれ尋常にて、醬油賣にはおしき男、鬢高からず低からず、中剃して髻りほそく、伽羅の油江戶もとゆひ、月代は三日剃して、人あいのある髭も生れつき御祓しやうれう會、爰ぞといふ時の出立も賤しからず、糸八丈ぬきつむぎ、はだに日野の檳榔子を着かさね、帶は花いろ繻子の中幅、中沓の雲齋足袋、よしはら雪駄を引ずり、紙は延をやめにして小半紙、古銀手の紙入に、反故染絨のたばこ入、蜀江の煙管袋にぎんの二朱きせるは奢なれども、上林の赤手拭持たが病にて、一尺六寸の白ぼしのわきざし、長門の一つ印籠迄、能圖ばかりをものずきけるゆへ、ちよつと逢そめし夕べより、はつが心もしみじみとなりて、いたくいた酒手に持ながら、酒のこぼるゝも知らず、つや〳〵と見とれ、あひのおさへのもんさくも忘れて、早うねたいといはぬばかりの顏つき、傍輩の女郎あぢに心得早く仕舞て、いなしたい氣かと悟り、小女郎のしゆんに耳く、おつと心得たんぽゝと立て、中次の間に御床取ました、德さんちとおやすみなさんせといふも嬉しく、あたまから帶紐といて、內證の勤ばなし、はつも打あけて行末をたのみます、私が角いひ出す事、くされ八まん女冥理、どのやうな客さんにも、いふたことは御ざんせぬと、底心の現なき詞に、德兵衞も行ついて、何がさて生々世々、そまつには致まい、かならず忘るな忘れじと、指切せしが誓文の手初、ひた物に通ひ出すを、人目もわろし、內の首尾は大事ないかへ、大方の客さん、皆夕ぬし前より夜へかけてのあそび、德さんばかりはさうない筈、まづおもふても見さんせ、何程わしが逢度ても、親方の手前があるゆへ、大分わしに行ついて、のぼりつめての大盡と見ては、銀はたがひに儲勝、世間

むきの習ひにて、ふられても御馬をつなぎ、無理としりても此地からあやまり、逢たいこなさんにも逢ずに歸す事もあり、それも一度や二度は了簡もさんしよが、三度とも重つたら、木で造たか、こなさんなりとも、少は干反が出まい物でもない、何くも勤の身の憂世、しんじつ私が思ふほどに、こなさんも私が可愛くば、朝食過て四つまへから、夕めし前までは遊びごく、定りて客はないもの也、同じ付の銀出して、是はどゆるしい遊びはなし、是が第一お德といひ、そうく毎日も出られぬは、お主持の悲しさとはいへ、却て德さん、身のためでもあり、一つは遠いが花の香とやら、勤る所をようつとめて、長う細うかはいがつてくださんせと、そこなき異見、德兵衞も納得して、いよく通ひ馴けるうち、此平野家の江戶棚のおも手代、方々の貢かけ高、金子谷て百八十五兩、しこだめての欠落、跡の支配すべき物なければ、旦那忠右衞門養子娘十八になりけるを、德兵衞と緣組して、江戶店の權にと思ひたつ折、德兵衞一切嬉しからず、天滿屋へかけてゆけば、爰にもまた豐後の客、大坂に來て一年あまり、慰の與も仕盡し、二三日中に國へ歸るに、女房とてもなき身なれば、幸ひなじみのかたじけなきおはつ事は引かいて行と、亭主ぐるみに大酒、はつは癪が登りて物もいはれず、二階から門を見おろし、これは此首尾ゆめになれかしと、曾禰崎の森の方を拜めども、黃なる姿の露まき散せば、亭主をはじめつぎく迄、又しては御めでたいの、おはつさまあやかりものと、忘れさせぬにくさ、是非に及ばぬあの客ども、憎に泊りと見へたれば、夜の內にあの腰の物とつて、死でのけふとおもひたつにも、なつかしきは德兵衞と、下へおりける所にて、行あふたるうれしさ、德兵衞も此やうな首尾、おはつも又同じ思ひ、つしわう丸のいにしへおもいやらるゝ貢わけぶね、こんなとならば、はておもふさま人にも知られて、草紙になりやと談合極め、その夜にぬけて行水の、梅田の橋のむかふなる、曾禰の森をけがしける、

(四)有馬の無養生　神明前心中大工町六尺勘平　中の島わんやよし

萬づの道具は古代をよしとはいへども、物によりて用捨あるべきか、根來椀の反たるは喰にくし、宗和をよしとす、近年屛風に緣なく灰吹の每日切奇麗なり、

何事もうつりかはりたる世の中に、長柄の橋杭も今はさだかならず、行水の流れも道つけかはりて、安治川のあたらしき名も聞事になれり、こゝに中の島よしのやは諸國の椀問屋にて、都の新町紀州の黒江大和路の出入絶ず、仕合の春秋をかさね、榮を蒔繪の松竹にことぶきぬる身にも、おもひのまゝなる世界にはあらで、今四十に及ぶまで子一人もなく、あけ暮夫婦の物おもひにて、愛染不動をはじめ持佛堂に向へども、只子を授けたまへと祈るに、十三年このかた利生夢にも見ず、しかるに有馬の湯治は女の下腑をあたゝめて、三七日湯治するに懐胎せずといふ事なしと聞て、留守を隠居の祖父祖母に任て置て、夫婦四月十三日有馬へ立越、橋屋へ落着入湯懈怠なかりける、夫婦こゝろにおもふやう、今まで子なきは、身の冷ふかきと人のいふなれば、此あたゝまりのうちに子種をおろさば、かならずしるしあるべきと談合して、温泉に入る度に、一日に五たび六たび○○○○べて、子種をおろされけるこそおかしけれ、惣じて藥の能は毒のきくほどは見へぬ物なれば、温泉の能より此床入あたりて三七日におよびしかば、宿より温泉にかよふちからなく、夫婦杖にて二階のあがりおりあぶなく、火動して食すゝまず、身動きに眩暈しきりに、腰痛み流れければ、付添者肝を潰し、これ温泉のあたりにまがひなしと、大坂へひきやくたてゝ、兎角迎ひの駕籠に乗物よと歸りける、かくて醫者を請じうかゞふに、大躰の湯のあたりとは見へず、腎虚にまがひなしと、彼に八味地黄丸、打老兒丸をもつて責つけゝるに、漸取直して、此世の人とはなしける、されども草臥たる病人、はかどりがたく、此度の醫者替て大工町星田玄宅功者にて、次第に快きこと薄紙をへぎ、夫婦同じ枕をあげて嬉びぬ、此病家に姿のよしといふ下女、毎日玄宅見舞の六尺の内、勘平とてすくやかなる男ぶり、玄宅藥調合の内たばこの火、藥を運びし折ふしごとよりおもひそめて、たはぶれたるのみにて、そのゝちうち絶へてあふよすがもなかりしが、天滿祭の夜宮に骨や町筋を北へ行を、勘平はるかに見懸、人めをかまはず追つき、過しかたよりのおもはくを詢き、釣鐘町の小宿へともなひしより、よしもさすがにつれなからず、馴そめて和理なきかたらひ、六齋宿をさため置、在所の姨をいひたて、伯父が御堂參りに

來てあいたがる斷いふて、奉公うはの空になるのみならず、はや四月女の役を見ず、出替り近づくにつきて氣懸りなるは、此よしいとこ女夫の名付ありしが、此季をたてたらば、在所へ呼とり祝言すべしの親のもくろみにて、きのふ內證いふて來りしを、勘平にかたりければ、おもひもよらぬ便り合點ゆかず、たとへ子どもの時分とやうのはなしあればとて、此中を引はなして弓矢八幡と色を替ての腹だち、よしも今さしあたりて氣の毒、とかく今すこしにて出替りなれば、其節ゆるりと談合すべき約束にてたちわかれしが、月日はやく三月五日になれば、在所より櫛の歯を引て、嫁入の事を取しきりていふて來るに、五月腹をかゝえてこれがなる物かと、勘平にかたるに、兎角このわけを埒明てのうへと、在所へ仕かけてよしが親に逢、拙者は今日聟入にまいりたる者と、二升樽に鯑十枚持參すれば、親あきれて、よしには幼少よりのいひ名づけあれば、今さらお約束はならず、若しお馴染あるうへなれば密夫のお名の出るも笑止に存候とて取あはねば、勘平は此方の女房といふ、親の合點いたさぬ娘を何處からもらはれたと口論しちらかして、樽肴もつて、三里半ある處をむだ骨おりて歸りけるに、跡からよしが兄追つき來りて、すなはちこなたへことづていたすもお爲なり、よしにいそぎ在所へ歸るべし、あす一日のうちにまいらねば、密夫したる女房の惡名にて、二人ながら仕置にあひ、一門のつらよごしと必申て給はれ、今もいひ名づけの男來りて、此せんさくに參るといふを、道場の坊さま賴みて、明日まで扱ひ置ましたといひ捨て歸るに、勘平返事もせず、急ぎ大坂へ歸り段々かたるに、今どうなるものぞ、とかく二人死ねばすむものをと、その夜北野神明前にて、又心中があつたは、

心中大鑑卷第三終

心中大鑑巻第四　大坂の部

（一）袈裟御前の裏表　いたち堀三丁目石津屋市郎兵衛 次郎兵衛女房おさん

商賣諸職にかぎらず、其身の勝手おぼえたる事を懈怠なくはげむべし、石臼藝とて、あそこへかゝりこゝへ移りて少づゝさしこゝろ得たるに、一つも末とげがたく仕課せたる例なきがごとし、家業も初めより取付ぬる事を、照降にかまはずつとむれば、自然と時にあふ世の中ぞかし、難波の鼬堀南側に石津屋次郎兵衛とて、廿一歳より小見世を出し、草履わらんじ一色買込、小僕一人舟のあがり場毎に付置て賣せ、自身店を守りて、外より一錢づゝやすくあきなふに、一日に内外三百足よ、極まつて賣買あるにしたがひ、諸方の草履受込、京の金剛悲田寺をはじめ、地の竹の皮草履までの問屋となり、四五年の内毎日四千足宛買込、所々出見世を出し置けるに、廿一歳より今卅四歳まで利潤を得て、町内にて先三間口の屋敷を求め、下女一人僕手代も他人は心もとなしとて、南都の寺方に小姓勤て居たる弟を呼のぼし、市郎兵衛と名を改て、随分始末に油斷なくかせぎぬるに、年々商倍へて面白き渡世とはなりぬ、されども女房を持ず芝居見ず、此所安き生肴の味をしらず、新町の夜見せのぞかず、今時の人間にはめづらしき性よしとて、町内宿老の姪におさんとて、器量十人並に利發なるを、兩爲づくと五人組のうちより取持、おしつけて祝言、次郎兵衛も根はいやなる事にてなく、人生一代になくてかなはぬ道具なれば、歴々の御指圖忝と千秋樂をうたひ、去年の春より賑ふ宿となりにけり、世に羨ましき物隣の祝言、土用干の小判、殊さら家内のやまめ市郎兵衛、血氣さかりなれば兄貴うらやましく、折ふしは近き色里へもこゝろはかよへども、形のごとく石部かたぎの次郎兵衛、氣をつけて堅う身を持すれども、鐵でつくつた身にあらねば、心動かぬにはあらず、ある時兄嫁にひそかにかたりけるは、此季の食焼の玉にのぞみなれども、そこもとお氣をとほされねばならぬことなれば、かたい兄貴しらざるやうにおはたらき頼み奉るよし、おさんこゝろよくうけ合、まことに若い御身のかたうして御座ります事、神妙なる御心底感じ入、こちらからこれほどの事ははたらきます

る筈を、ぬかりましての御返事也、こよひ夫婦ねさまに行燈を消まして、次郎兵衛殿とくと寝いられましたならば、わたくし鼠鳴をいたすべし、それを相圖に、いつも玉がふせりまする戸棚の北〇御合點なるべしと、念頃にさしづかたじけなく、扨日暮よりこゝろやる瀬なく、いつもより初夜四つもおそく覺へて閨に入、兄が鼾をうかゞひけるに、八つ時分とおもふ頃、兄嫁の鼠鳴うれしく、〇〇〇〇にぞ忍びける、ふるひ〳〵よりそひ詢までもなく、〇〇〇りに〇〇〇けぬるに、さらにおどろくけしきなく、こゝろよきもてなしあたまから、今〇〇と〇〇〇たるもおかしく、市次兵衛めづらしければ、時宜におよばず〇〇〇〇けて歸り、朝は常よりはやく起て、こゝろおもしろうそこら掃除して、おさんに小聲になり、夜前のおはたらきゆへ久々にてうさはらし、お影ありがたしといへば、袖に入置た物見たまへとばかり答けるに、片かげにて見れば文あり、こよひはめづらしき御げん、このほうよりつね〴〵おもふにかひなきおりふし、よきわたりのふねとぞんじのせてわたしまいらせ候、されど玉が手まへを奪ひとりたるは、戀のらうせきかとかなしくも、かならず玉にはさたなしにあそばし候へ、いかほどのあやまりにても、最早ぬれぬ先こそにて候へ、取返しはならぬ世に、御はづかしながらざつと申まいらせ候とあるに氣をつけて見れば、玉にてはなかりけり、市郎兵衛思案に落ず、されども人のこゝろ惡には變じ安く善には移りがたき物なれば、他人の妻をぬすみたほどにはなければ、毎夜次郎兵衛が鼾が出れば鼠鳴するに目が合ず、つまる所兄が咎めたらば、玉が方へ參りたりと耻を捨ていひわけすれば、おそろしき事なしと分別極めて忍びけるに、半年終に無首尾なる事なかりしに、ある夜〇〇〇〇〇神鳴俄に轟きけるに、次郎兵衛形のごとく嫌ひなる寢耳におどろき目を覺すに、あり明消てあるは、女房共起よ、玉、火をうてよ、初雷じや、節分の豆はどこにあるぞと喚くに、市郎兵衛あはてゝ我〇〇へ歸りける、さて火を燈し觀音の名號唱え香を燒ば、夜もはや明行空もしづまり、しかも日より照かゞやきぬるに、市郎兵衛も起出たるを見れば、おさんが着物を着て居る、女房は市郎兵衛が淺黄小紋の綿入着てかけまはり、其上おさん〇〇〇〇〇〇〇〇一折、内に〇〇散一つゝみ、

市郎兵衛が足袋かたし殘るを、次郎兵衛見とゞめけれども、こゝで氣のつかぬ貌する兄が分別おそろし、そのまゝ髮ゆふ床へ出たる間に、とり違たるきる物着かへ、足袋鼻紙取隱しけれども、氣味合すぐれざれば、二三日此事を止て忘れ時の四五日過て、燈消鼠鳴しきりなれば、忍び入て熟きたゞ中を、次郎兵衛取て押へ、二人共に必噪ぐべからず、盜人をとらへて見れば我子なりとよめるをおもひ合せたれば、むごくはあたるまじ、市郎兵衛は幼少の時より物讀をもしたれば覺えて居べし、孟子に兄嫁溺るゝ時は手を取て助るとこそ聞に、是程に不義無禮、言語に及びがたき恥辱、同胞一腹のよしみ、かつ先祖の名までくだすの惡名なれば堪忍すべし、しかれば女房事も罪に落して離別すれば人も不審すべければ、是も料簡するうへは、今までの惡行を飜がへし相替らず勤むべし、二度はゆるしがたしと、是非なき肝涙を流しての異見、二人血の汗を垂て返答なく、しづまり返りしうちに、女房手もとにありし鏡臺の引出しより剃刀を取り出し、くらがりにて市郎兵衛に相渡し、我も咽かき切音に同じくつゞいて相果しは、不義の中の義をおもへば、人と生れて活て二たび面を合する事は何としてならうぞ、

(二)浮世紺屋思ひ染たり　天滿五丁目男紺屋平助　同　紙屋　女　お梅

世に朧染はやり出たるむかしになりて、遠山暦反故染、次第に物ずきかはる人心、あけくれ工夫する仕出し紺屋、朝は水の清く一際目にたつこそ理りなれ、大坂天滿に名を取ての染屋平助とて、雛形月々に模様をかえいろある女、京まさりの色あひ、吉野初瀬の亂れ咲、野田玉川の萩薄格別のおもひを注文多き中に薄紫のあけぼの、たつ初春の注連繩すこし見せて、蹴まはしに弓弦葉二三枚、腰より下はうす淺黄の絞りに、自からなる霞こもれり、ほの〴〵と春こそ空にとよめるにはあらで、清少納言が發端の詞を取て、好める手跡の黑みやさしく、大振袖の鶴や縮緬、みづからつよからぬ女の筆とつての模様づけ、平助すきものゝ肝にこたえて、主やたれとなつかしく、使の女を見れば知れる貌にて尋ね聞に、方角は西なれども雇はれし身はしらぬよし、これよりそのすがた見まほしく、人しれぬ下焦れ、岩もる水のかよひ路もしらず、過行年もあけて睦月廿五日は天神の御縁日、群集

の袖引もちぎらぬ中に、手にかけて染しかの模様目にかゝりしに、うつゝなく歩行ゆく笠の内をさしのぞけば、人間にもかような美質をあひ見ては、むかしは物をおもはぬうかれごゝろになりてつけ行に、難波橋筋の紙屋、吉野が再來と世にうたふ稀娘、花の物いふお梅と聞て、歸る空夢より淺ましく、（◎此間恐有脱文）されども其色なく、源氏いせ物語のいたづら、其身にいまだ覺へぬ粋となりて、世のなきならひにてなければ、うれしき人の情なれども、逢ふ首尾のならぬはしつて御ざる通りと、おもひの外やはらかなるあいさつに尼力を得て、それは常にお好の半四郎が芝居に、耳の遠き婆々さまを伴ひ、かりそめのちぎりに我に任せ給へと、手にとつてのたくみ、はや日を極めて二月五日、平助に内通して、かはり狂言の棧敷に手組の三人、下女下男餘念なく見物するうち、お梅に腹を痛ませ、例の尼付添て雪隱の案內、乗物道にことはりいふて、平助がまちかねしいろは茶屋にて引合せ、屛風を引ておしいれ、何をいふたかそれからさきは、尼は此間に千日寺へまいりて、三番つゞきの序の中ほどより、切狂言のはじまりまでの間、いかなる夢の熟い所をか賞翫させて立歸り、今が限りにてなしといへば、初めての別からしつこうはなれがたき涙川、見歸り見送るおもひの色ふかき中となりて、あくれば名左衞門が芝居うちつゞきて同じ首尾、一日も絶ぬ文のかよひ路、おちてこぼれしを母親に拾はれ、懐子の此したゝるき文のとりやり心得がたし、出入の尼が芝居ごかしの手くだに極りしと、常齋をあげ、一家の門ばたもふませず、これよりたより絶て戀わたる橋なければ、今は焦れ死にきはまりしを、常に平助が宿を聞およびしかば、不斷明ぬ爐路の鑰盗み出し、ひそかに忍び出て、二月廿三日の宵闇、平助方へたづね行、今一たびもあはで戀死なんよりはと、ふたゝびあとへかへらぬ思案にて來ましたと涙を流すに、此世の契りは迚も儘になりがたしと、天神前にて又心中、

（三）色里の都遷し（東よこぼり木屋手代助淸　しゞみ川櫻やおはな）

古き塚の狐化して美女となり人を誑かすと、文選といふ物の本にありとや、されば遊君の住める名所に稲荷を勸請申す事、西の下の關をいなり町といひ、大坂に玉造の稲荷、京の稲荷前、むかしよりありふれたれば、さのみめづらしき由來にはあらず、これをおも

ふに粟田口荒神河原、梅忠の町六條九條西洞院、今の島原にうつされ、難波の三間屋、葭原、今の新町にかたまり、玉造の稻荷も、いつの頃よりか、北の新地、南の堀江に店替ありて、お山の名も氣色も所によりてかはりけり、こゝに東横堀椎木屋清藏手代清助と申者、卯の三月より酉の年まで七年切て奉公に出し申所實正明白にて、在所は大和龍田膀村より、十五才から今年四年つとめて、角前髪器量よくてかしこ過たるが疵也、萬覺帳ひとり飲込で、西國の薪舟、年中の出入、高ぐゝりして手ばしかう捌くは、旦那の氣だすかりとて、諸事任せ置て、五節句の算用滯りなくつとめける、此盆前も仕舞て廿日過の月出るより、手組の踊所々にひゞきわたる中に、道頓堀別して面白く、役者まじり小振をつくれば、外にかはるは尤也、京も祇園八坂の娘舞子、手がはりの拍子、毎年の事ながら一興あれば、むづかしき島原の踊にかえて、こゝろやすく人群集をなせり、此里も近き頃より道頓堀の仕組おどり、稻荷前にて夜をあかすと聞て、日暮より見物の崩るゝ事茶屋の賑也、清助ある夜暑さ殘りて寐られず、更ては遠き手拍子ちかく聞えて、行ともなくてたどりつき、此踊に魂をとられ、八つの鐘もまだ宵に覺へて名殘おしき中にも、生絹に紅裏の袷着て、淺黄ちりめんのしごき帶、紋は懷牡丹に карт羽の飛かふ、わざとならぬ風流、殊更振よき花といふ女、揚挑灯に貌の艶てり美しう見えしに、こゝろ身に添ず、踊崩れしより跡をつけて、櫻屋と蒲鉾行燈にしるせる茶屋に入けるを慕ひて、始て蒲團のうへに木枕ふたつ並べしより、あかぬ別れの鳥を恨み、月夜と闇の境なくかよひ馴しに、此度梅田橋筋に此櫻屋も所替しに、いよ〳〵心かはらぬお客さまとなつて、二日と逢ぬ日なく、ある時花此頃なじみの客、淸介より先に酒のんで、夜ごとにかはるうき枕と、かたり捨て面白う遊びしを、襖隔て聞に、賣物とは思へども、上りさがりしころから、見ねば各別、すこしはせいいて灰吹の破るほどたゝき、酒より水を飲うと、返事するを聞ながら手をたゝく下ごゝろ、若いときは血氣つよし、花もつとめかゝりし床を仕舞て立出るより、いつもの御機嫌とは違ひました貌つき、改たむる程口舌の種となりて、ふたゝび此座敷へ足を踏こまぬ思案と、詞をはなつて惡口いふに、引手あまたの中にも、勤めはつとめ

戀は戀、さりとはつらい御詞と涙を流して、起請までかいた中の、神ほとけは何の爲ぞと、いふ程聞ぬ氣になれば、おれひとり死ねば濟事と、花もおもひ切たる髪をなげ出し、是を永き形見にと啼喚くに、淸助も我をおつて、それほどの所存とはしらずと、顔の色を直せば、一瀬銚子を替て酒にする所へ、亭主何事かと氣遣ふて罷出、髪切たるにおどろき、是も世間にある事ながら、惣じて常々も其方樣へのぼりつめしゆへ、外の客も退、其身のさびしさは格別、拙者商賣うすきは迷惑いたすのみならず、此躰にてはいよ〳〵、外の人さまには逢ぬ氣と見ゆるを、私かゝえ置て益なし、かやう申せばお恨のかやうに聞ゆれども、さら〳〵さやうでなし、花が心根も不便なれば、御太儀ながら今私方へ七百目さへ下さるれば、年季さし引算用此通りと、そろばんをはぢいて、お手前へ御呼取の後は、髪の事はいふにおよばず、ゆびをきらふとも坊主にならふとも、拙者世話やく儀なければ、外の客をおせきなさるゝ事もなし、もはや勤せぬ者を、一時もかゝえ置事まかりならず、御思案にあらふことゝ、額に筋を立ての申分、淸助虫にさはれども、今の口舌からおこつて此仕合、いかにも亭主申され分、一々承屆けたるうへは、七百目相調此方もはや此家には置ぬ氣、手形證文我等方へ請取、今宵中に濟すべし、氣遣めさるるな、只今罷歸りて銀子持參仕るべし、此上は花に必恨みもない筈と念つかふて立歸り、常々此惡性親分しらず、今まで首尾能つとめしかば、木問屋の替せ諸拂十兩廿兩、いふやうに相渡し別儀なければ、阿波屋急に入用にて、今宵七百目相渡す筈のよし、いつものごとく親方心得、手形に念を入よと申付しを懐におしこみ、飛がごとく櫻屋に七百目相渡し、今宵から花は此方へ請狀證文取かはし、出入の駕籠の者、念の爲落つき所に氣をつけて、葛籠櫛箱もたせ立出て、渡邊橋をうちわたる時、花これは何處へおちつきますといふに、淸助はたとこゝろづき、おもへば夜中に在所へも行れまじ、七百目の事ばかり心魂にのつて、路錢一文もゝたず、こよひ中に替せの埒せず、旦那へ歸らずば、阿波屋へ問にやられたる時、跡方もない事にて、此無首尾あらはれるであらふと、さすがかしこい者も、晝からの口舌に氣を取のぼし、亭主が詞にせき、若氣といひ色に迷ひ、かれこれしどなく、立とま

りたる所、あとへもさきへも一寸ゆすゝまず、夜はなん時ぞ、近江丁の鈎鐘今のさき九つとや、こゝに立あかして濟ず、今一度櫻屋へ歸りての分別と、取てかへし、夜中の首尾さきさまあしきよし、亭主も今迄の馴染ともかくもと、二階にあがりて思案するほど埒明ず、戀も情も忘れはせぬに、行あたりてせんかたなく、又心中じやさはぐまい、

（四）舟町の酒屋乘かゝつたが不肖　津村かめいせうし新兵衛　船町酒屋又兵衛女ばう

世はようした物かな、男ばかりでも物事身過は埒があけども、着類の垢ついたを洗ふ事縫針かなはず、女は飯たいたり縫はりしても、身上の事には男を頼まいでは埒のあかぬ事とて、いかな家にも夫婦づれ、家の内の事は女房が世話やけば、町役表むきの事は夫がつとめ、年よりての樂みには、二人あいに出し合せて、子といふものまで作り立て置事、神代此方のならはしとて、舟町はしづめ丁の酒屋又兵衛と云男、似合しき妻をと尋ねけるに、折ふし津村の御堂前、龜井せうしの丸龜やといひける錢屋より緣ぐみの事相濟、千秋樂も幾度か謡て、花嫁といひしもいつの程に惣領の子を産せける、そのとしより又兵衛、米市の端にかゝり、段々の雲行惡く、買こみての下り、賣拂へば上り、する程の事左り前になりて、半季に五十貫目餘の損、今さら胸に痞たる身上、盆前段々と不埒ゆへ、夫婦の身の皮剝盡して質八と置さがし、何とぞ今迄程こそはなくとも、せり賣の荷ひ酒、生玉曾根崎傳法口、四角八方に拵て、せめて朝夕を樂しみたいと、置つけぬ肩に棒と出て、津村の舅どのに二貫目の無心いひて、家質の手形渡しけるより、おもひなしやら肩がすぼりて、女房にも遠慮がちに、いひ度事も得いはず、とかくの樣に成まさるを、女房衆の猿智惠、物一ついふての引はなしも、親里の富貴を鼻にかけ、ならぬ世帶の氣づまりさ、こちとらはこんな目に出合ず、時時は內へいんで休んでこいでは煩ふもしらずと、三日にあけず子をつれていなるゝ、ある時此女房衆、津村にて腹を痛、夜中過より散々の體、親達も氣の毒がり、醫者よ針立よと噪がれけるに、此家の下手代新兵衛といひしは、北濱の米問屋に、御定りの年つゝがなく勤、今は一分に拵筈を、世なみせはしい程は、今しばし奉公して、銀なども溜る合點に、跡の季よりの奉

公人、諸事才覺なるうへ隱藝ありて針の道功者ゆへ、さいわい誰かれと申そうより、私れうぢして見ませうと、云出すも嬉しく、親達も心発して、娘が〇〇〇たる屛風の內夜着〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇こゝにぞありける、不思議と此者の針相應して、腹のこはりも止けれども、手人のかたじけなさ、先しばらく養性を仕ぬけと親たちの勸は、新兵衛が仕合となりて、いつしか〇〇〇まで、深う療治しそめしより、娘も中々舟町をうるさく、いとゞさい〳〵の里歸り、逢がうれしうてうか〳〵と泊りけるに、運のつきとて惣領の子今年五つのあがき盛、とはず語りの口まめをいとひて舟町へ戻しけるに、新兵衛と口鼻樣とあぢな事が有たぞいと、ぐわんぜなき物語、又兵衛も此ほどけしからぬ女房の身ぶり、又しては里へといふ出たちも心にかゝり、たらしすかして尋ねけるに、かかさまの腹には、飯の甘い呪じやとて、おれが帶をまいてじやと、きかせしが百年目、又兵衛も一分たゝぬ所、ふみつけられし後悔さ、少々の銀借りしゆへ、親どもからが侮るゆへ、此やうな事もある事と、五つ子に僕をそへ、又兵衛樣今晩は俄に痫氣さしおこり、打ふして御ざるとの使に、さすがは馴染とて親達もおどろき、お內儀も肝つぶして、とる物もとりあへず、とつかはと內へもどり寐所へはいられしを、又兵衛むく〳〵と起あがり、段々の不義をかぞへあげ、ぬきもふけたる脇ざしにて女ばらをさしころし、我身もやがて吭をかき、ともにうき名をのこしける、

心中大鑑卷第四終

心中大鑑卷第五　諸國分

(一)血首の三つ巴　山崎 吉太夫 つるが 彈正 同若衆松之助

今はむかし山崎の邊に、宍戸吉太夫といひける者は、水上八田權守宗綱の孫宍戸四郎左衞門家政の末葉にて、藤原の流れを汲、今も猶武士のいきぢを忘れず、弓矢とつて恐らくとはいへど、昔の劒は今の名刀とかや、御代靜謐のかたじけなさ、小指壹つでも人の合點せぬを切る事のならぬ世の中、能おもひ廻せば、少の銀は田地にして、馬物の具の貯も雜穀俵物の詠に目を樂むこそ能れと、殘す物とては二腰の腰物と手鑓半弓など、其外は年々に賣て干鰯油糟の元債となしける程に、今は歷々の百姓と成て、しかも所にて百石ばかりの支配、夥しきくらしとぞ成ける、此吉太夫が姉婿は、斯波彈正とて隱れもなき兵法者、越前の敦賀に重代の家督ありて、世々武士の廉を仆さず、地下の侍ながらも公役をも免され、地頭代官にも膝を並べて、上見ぬ鷲と暮しける事は、足利の先祖愛洲移香といひしは此人の家本にて、烏戸權現に習ひ得し秘術を、不思議に受傳へたるゆへとかや、此彈正が妻は彼吉太夫が姉なりしが、むかへてより貳年めに、少産にて死せしより、二度女をつれじと誓ひて、折ふし劒術の弟子を集る中に、男色の勝れたるあるを假の世のたのしみとし、兄弟のちなみふかく、はかなきかね言に百年を契りて、月花の遊びにも床をひとつに寢ころび、鳥鐘の更行夜も手枕をかはしなどして、やさしき交をなしける、此寵愛もあまたなる中に、都筑松之介といひしは、もと敦賀の三日市に生れて、親は奥州の國主に年久しく仕官せし、都筑圖書といひし人の子なり、親圖書相果て後、去子細ありて牢浪の身となり、母と一所に此里に引越ける、松之介其頃いまだ十五にて、殊に色ある身の盛、小姓を勤つる器量なれば所珍しく、男女ともに見初けるほどのもの戀ざるはなかりき、とりわき武道は稚きより手馴て、六韜三略をも暗に覺て、軍の事は張良韓信が胸の中をもさぐり知りけれども、猶若き内に琢てはと、此彈正を賴みけるより、いつしか男色の因さへ深く、起請も幾度か熊野の鴉を血にそめけるまゝに、彈正も他念なく、高上の極意に近き九ケの切味まで傳へしかば、

松之介も打とけて、いよ〳〵兄弟の義を重んじ、一道の信を守りしも断也、されども松之介、いまだ年若き身なれば、山里に身を隱すべき頃にもあらず、今一たび拵で、先祖の畧をも起さばやと思ひて、爰かしこ似合しき家を望みけるに、　其頃周防の國主より御尋の事ありと聞て、內緣のつてにより、しばらく此樣子も聞んため、一つは都の名所も好もしく、彈正をともなひ西六條邊にしかるべき宿を借り、　けふあすと京の地を遊び廻り、又は西國への便りをも聞き居けるが、山崎の吉太夫も一たびの由緒あればと、　彈正に催され此所にも通路せしかば、折ふしの參會せしに、此松之介を見そめしより、類ひなく思ひかけしかど、彈正が手前を憚り、徒に程へける內、津國笠の森の社、此ごろの時行神にて、貴賤男女あしをはこび、いのる程の事應現ありといふにつきて、　我が身の武運をも祈らんため、且はいにしへの歌に妙を得し、胡曾淵の人道の跡をも尋ね、伊勢寺のふりにし名をも問、磐手の杜芥川などゝいふ、數々の古跡も此度の序、急ぐべき道ならねば、長閑かに見ありき、歸りは幸ひ吉太夫が宿こそあれと、山崎に來りしを悅び、吉太夫が計ひにて、觀音寺離宮などをも、松之介殿馳走のため悉く案內せよとて、彈正は宿にとゞめ、かい〴〵しげなる下部壹人さしそへ、そこ爰と案內しける道すがら、山崎の町より寶寺までは、野をへだて山をわくるに、人氣なき隙を窺ひ、　かねて吉太夫が所存の程戀侘しありさま、ひとつ〳〵語り出し、是非の御返事急度承り極めよとの旦那よりの云付、數ならぬ拙者めなれども、日がねを以てケ樣の事申付られし不肖、　若御同心なきにおいては、拙者が一命は今日が限、疾と御分別ありて御返答承りたしと侘屈なる云分、　松之介ぎよつとして漸暫返答も出ざりしが、　成程吉太夫殿おぼしめしの所、近頃かたじけなしとはいへども、今以て早速御返事も申がたし、　其上幸と明日は京都への歸るさ、彈正殿身の上に付て、似合しき片付の事あれば、少の內水無瀨に泊り、跡より京都へ登らるゝ筈、此樣子によりて首尾を見あはせ、　何とぞ御心に隨ふやうに致すべし、先それまでは御ゆるしあるやうに、偏に其方を賴むとの一言うれしく、　宿に歸りて吉太夫に語りけるまゝに、人しれぬ嬉しさ、兩人の者は夜の內に起出、此宿を暇乞、立出る道々の咄、　彈正殊の外に立

腹して、道よりとつてかへし、吉太夫と死なんといひけるを、松之介さま〲になだめ、兎角私の意趣に、あたら命を捨る事本意にもあらず、いかやう共身をたて、義によつて命を捨てこそ親祖父の名をもあげ、武士たるもの丶鏡ともなれ、物がつきて狂はするかと、漸になだめ、さて先爰に長居しては吉太夫を僞りし恨みに、如何なる障をかなすべきなれば、本國に歸りて後又々樣子を窺ふべしとて、俄かに歸國する支度、荷物はしのび〲に前日より下し、明れば霜月廿四日しの丶めの空を、都の別れと其夜は六條の宿を立て、鴨川に近き三本木といふ所に折ふしの慰所、槐春といへる僧の宿に泊り。夜一夜の酒事明わたる空も八つの頃、都の町を跡に見て、高野川を渡り行頃、はや夜もほの〲とあけゆくま丶に、松之介は跡にさがり、火繩の火を貰ひ居たる內、いかゞしてかは付來りけん、山崎の吉太夫物、かげより只一人顯れ出、男色の意地覺へたかと大げさに切刀、飛違ふ足をあやまりて右の腕を落され、少ひるむと見へけるを、たたみかけて打太刀に、やす〱と仕留けるが、是程の太刀風に松之介見へぬも、不思議にはおもひながら、少し心もおちついて、立退やせまし切腹をやすべきと、石原に坐して息をつぎ居たる內、松之介かけ來り、はや彈正は討れしと見るより、一文じに切てかゝり、吉太夫をも思ふ儘に討とめ、我もいさぎよく腹かき切、ともに草葉の露ときへしは、誠に武士の手本なりしと、ふるき人の語られし、

(二)夢の宇治橋 大津京町通油屋治郎左衞門 同柴や町 井筒屋 宇治橋

さゞ浪やむかしながらの山櫻は歲々散盡せども、柴や町といふ物の候へば、北國船のかよひ路絕ず、米の富士をかさね、人魚の鰤の生てはたらくをも目に見る事ぞかし、されば此色町は鹿戀を極官にさだめ、撞木町に同じ色競、此所自然と備る風俗一ふしありて、京から通ふ男も氣を替へて遊ぶ名所なり、湖水のきよらかに、花がつみあやめの色をあらそふ中に、によつと出るより朝日山、ひかり異なる宇治橋とて、衣かたしきこよひもや、ひとり寐の夜半なくはやりければ、親方井筒屋に湧出る金の水、流れの身にはあやかりもの也、こゝに油屋治郎左衞門とて、此大津に住馴て、鬧しき世わたり油斷なく、若き者にさりとは奇特なる生れつき、高觀音石山寺を信心して、捨一才より

普門品を讀誦し、第一下戸にして餅も喰ず、正月壹文出しの寶引の外、かるたといふ物を手に觸ず、終に口論せず奢らず、廿まで女の側へよらず、よろづ律義者の名隱れなかりしが、ある時敦賀の客に伴はれて、此色里にはじめて足を入、直に非筒屋にて遊びけるに、宇治橋いまだ禿にて酌せしに、治郞左衞門かはりたる大盃にしるられ、元來飮ぬをしつての無理酒に痛めるを見て、ひそかに人めにかゝらぬやうに外の器にうつしかえ、のんだ首尾にはたらきけるにて、宿へ歸りて親の手前仕廻かけたる算用、壹匣もちがはず仕上たるより、其色としもなくこゝろ聞ぬる禿が才覺、かはゆらしき所一念にかゝりて忘れがたく、さらに色にはおもひつきたるにはあらず、常には此里のぞかねば、その、ちよすがなかりし頃、若狹の客にいざなはれ、ふたゝび非筒屋に遊びけるに、宇治橋はや水上は去年の春とかや、一とせ見ぬ貌ばせに、思ひの外の色を含み、お久しやの何となき挨拶も、つねづね忘れぬ氣から、面替りせる色にうつりそめしより、はじめて此わけよき夢のうき橋をかけて、絕ず戀わたるえにしとはかよひ馴しとぞ、萬づの事によい加減といふほどを、はからふ事はなりがたき人こゞろぞかし、此をとこ染るにまさる色をかさねて、晝を月夜に宵を曉と取亂したる、おもひの根ふかく戀わたりければ、親も氣をつけて、兼てより堅田の姪をいひ名づけ、從弟女夫に定め置て、此盆の中に祝言急に取くむよし、治郞左衞門こゝろならず、此とし月の中をいかなれば離るべき、そのうへ宇治橋も今壹二年の內の身ぬけをまちて、指を折月日をかぞえ、逢たびに他事なくたゞ行末の所帶咄し、今から味噌鹽までの世話を燒ば、治郞左衞門もさらに傾城狂ひとはおもはず、常の女房を外にあづけ置てかよふごとく、染込し中なれば、堅田のいとこ身の毛たつていやなれども、親ははや用意の造作隱居所をしつらひ、嫁入に手のとゞく末の七月五日の夜にもなりぬ、迚もつゝみ果られぬ事にて、宇治橋に此おもむきを我心底に好ぬ事かたりければ、末ことのはの終るも聞ぬうちに氣色かはり、上氣したる貌をふところにさし入、淚の雨にうちしほれながら、今にはじめぬ事ながら、つとめの身ほど淺ましきはなし、されども親御樣の仰せを我ゆへそむかせますれば、御身の行末冥加あるま

じ、さればとて此とし月のおもひを水になして、胸の火の消ざるはいかにせん、よしなやかくまでおもふは、わたしがおもひをいづくまでも通さんとするゆへなり、お身のためにあしければ、ひとりこがれ死ぬればとて、ふつ〳〵申はづにてなしと、聲をあげて啼しづみけるに、治郎左衛門もとより深くおもひこみしうへなれども、宇治橋に心ざしをたつれば、親の勘氣を得、親に不孝せまじとすれば、宇治橋に一分たたず、よしや流の身とへまことを忘れぬものをと、これもひとり死ぬるにおもひきはめて立出るを、宇治橋引とめて、御心底さほどにおぼしめさば、とてもそひはてぬうき世にながらえて詮なし、いざかうしてといひ合せ、それ〴〵への書置こまやかにしたゝめ、涙わきかえる井筒屋が二階にて、廿六と廿三の花のすがたおしまず、こゝろの釼につらぬきあひて、二世のちぎりを死出の旅、たのもしき心中かくれなし、

(三二)肩先に心中黒子　和州八木村 午之助　同つとめの女しのぶ

身すぎは草の種、冷水賣てさへ渡世はなる物とおもふに、廣い都には猶ごもく捨てゝも、五人や三人は過ると聞、其中にも、手の筋を見て人の一代を占ひ、黒子の有所目利して、富貴なと貧乏人とを見ぬく事、慮外ながら、およそ天地ひらけてから此かた、神も佛も御ぞんじない秘傳を、此坊主が習ひ覺へてゐるから、ちよつと爰へ指壹本さし出す人があつても、早こちの腹中に善惡が浮む、何と恐しい事ではないかと、いかに口といふ物あつていはるればとて、あんまりてんぼなる商ひぞかし、是にだまされて、我も〳〵と信を起して、色々の手を出して見する、大かたいふ事も極つて、十人が十人ながら、今からさきの事はいはず、只あつて過た跡の沙汰ばかり口に任せていふ、年ばへなる人には、最早そなたには子が三人あるといひ、心のうかぬ顔な者には、近いころ親か女房にはなれたであろかと、能いかげんに持て參れど、世の人の心おろかなる物にて、能事に氣がつかぬ故覺へず、惡いことは誰も忘れ難い物、ちつとした事も思ひ合して、成ほどさうで御ざつたと點頭(うなづき)、いとしや親仁が去年の二月に、水間寺の初午參りして、餅を喉につめてから、腑を煩て此七月に死なれた、おもふ樣に物もおまらせいでとすゝりあげて泣、ないたとて死うせた親仁が戻る事か、能合點すれば一つも役にたゝぬ事

を、あつたら錢を出す事哉と、其の場を歸らんとせしが、さすが子を思ふ闇には迷ひやすく、獨あるむす子が、身の行すへ心もとなく、是此子が手のすじを見てたも、おれは其、あつて過た事は聞度もない、今から末の事の、見へぬ所をいふて聞しや、いらぬ道歌を聞事は、大きらいでおじやると、木で鼻こくつたる云ぶん、山伏此親仁が顏をながめ、そなたは、身がいふ事を、少おかしう思ふてゐると見へた、さらば有て過た事はいはずと、役にたゝぬ事ながら、そちが生れをいふて見しよ、先そちは和州八木村の人とみへた、年は丙子に生れてことし丁ど六十七、名には喜の字を付て居る、何と心持はといへば、親仁はあきれて一向に返答も出ぬに、むすこの馬の助いかにも能あいました、名は喜介といひますといふにて、皆見物の者ども我を折事にぞありける、扨先此子はよい生れつきの、物毎器用に才覺あり、手も十人並に書、算用も見一を中に括り、身上も親の代より能なるぞ、殊に綿商賣が相應する、したが爰に一ついやな事は、右の肩先に黑子が一つある、劔難といふて、刄にかゝる事のある黑子なり、是を掘て本命星を祭れば壽命は僅百八十二までは請合ども、それ迄生たりとも親子一門が、それまでは居まい、畢竟そのぶんで置ても、愼さへすればよし、さしあたつた所でいはゞ、當年は十七、御定りの厄年七難九厄といつて、七は陽氣の盛な最中、殊に火性はことしから、無氣に入て大いに惡し、一代の守り本尊は文殊師利菩薩、卯の年は生れどし、卯は木にあたる、性は火、木性火と生じて、人の方からほれられて、色に付ての難がある、それさへ愼まれたらば、來年からは大分よいぞ、其證據には、たつた今爰へ來る道にて、手を握た人があると見て來た樣にいはれて、馬之助も顏をあかめ、親仁も大汗かいてさりとは見通しな坊さま、爪くそ程も違ひはござらぬ、又重ねて頼ませうと、懷から錢六文出して山伏が前に置、捨ても百二十が所をいはせて、これはおやじどうぞといへば、はて貴樣ほどの見通しに似合ぬ、身うちをさがして六文の有切、いはずとも占ふて知ていさしやろがと、かへつて山伏をいひ詰られ、さりとは合ぬ顏つき、生れ付た貧は是非もなき事ぞかし、いかさまにあへばあふ物かな、いのる事も口からと、此馬の助は十人に勝れたる器量よし、手まへ溫かなれば表

つぎの配た物も着ず、鍬鋤も手にとらねば、日やけして色が黒いと人にいはるゝ事もたず、折ふし綿畠へ見舞にて、八講布水淺黃に紋に染て、おもひ入の三つ橘、さなだうちの帶かるた結びにして、加賀笠に紺のくけ紐、髮は當世の野郎縮、ふとさし足袋にならざうりはきて、下男共が綿の中するを見に行より外手いたい事せぬを、其隣には此ごろ大坂の堀江から、堺のちもりへ下る女、しのぶといひて廿二になる色のさかり、面白き大坂の馴染をすて、花車などいふ都へなりとものぼる事か、かた田舍の堺へ行身のうらめしさ、女心にくい〳〵とおもひわづらいて、此程は瘧が起りたりとて、此八木の里にしるべありて、養生してゐたりし內、此馬の助を一目見てより、人しれぬ戀となり、さま〳〵と傳をもとめ、文の數も人めわろき程かさなりけるまゝ、馬之助もむまい事におもひ、いつしかに馴初、一度二度はかわいさ、三度目には忘れがたく、漸に深いりして、女房に持誓紙まで書けれども、老女房は持せぬ、世界に女日でりはせまいし、若い美しい手前も能のを持たいでは、こちとらが中間を外すぞと友達に迄叱られ、自然ひきに引氣になりしは、若氣から仕出した無分別、しのぶは是を見ぬいて、いろ〳〵とすかし寄り、迚も女房に持やさんすまい、もたれいでおかうかと、馬之助の咽喉に剃刀を突こみ、おもふまゝにとゞめまでさして、我が身もともに朝のつゆ、消て名をうて流しける、

(四)戀の胸紐取結んだが因果　帶屋久兵衞　堺材木町　同東六けん目ひしやおはつ

聖は道によつて賢く、それ〳〵の機轉ありて、北濱の米屋は常住空を詠めて相場を立、藥種屋は長崎の指出し次第にして賣買するに、皆々目利程の利德、智分々々の儲はすれども、地獄の上の一足飛、油斷のならぬ事にかゝらふよりはと、有程の金銀糸割符にいれて、する程の事買鹽よく、所は堺の材木町、東六軒目に菱屋といふ一構、餘所目にも中ぐゝりして、檻に二三百貫目もある筈と指折の家あり、されども此の旦那公道なるかたぎにて、是れほどに仕出しても身に紬より上を着ず、魚所なれどもはしりの初ものを買ず、人も三人では手のまはらぬ所を、自身もはたらいて間を渡し、帳面のことはいつとても我手にかけて、手代にかまはせず、朝は卯の刻から起て世話やき、夜

は八つ限りに寐る事を極め、淵の上の雨と降わくを面白がりて、いつしか表つきを組屋に構、女はたとへ幾人置ても飯米のいらぬ物、欠落しても深しい損を懸る物にあらずとて、色ある組手二人、その內一人は年切に極めて、よろづこまやかに過しけるに、銀はうめくほど出來まされど、跡とりに成むすこはなく、女の子ばかりうみつゞけて、三人迄持けるを、是が出來うとて、組屋にはおもひ付けん、尤緣に付る迄は、組手に替らせて見せに置べければ、給分だけの延とは見へたれども、いつが何まで內にもおかれまじ、緣組する段からは、おつとつて三人迄只は人も請とるまじ、近頃無分別な子の產みやうかな、おれが女房どもには似合ぬと、御內儀を恨らるゝもおかし、しかも三人ともに器量よく生れて、姉のおはつは十六の色ざかり、組は恐らく上かたに名を得たる、鶴屋宗傳鼠屋和泉が組糸の手際にもまさりて、菱屋打の柄糸と、打出したる名物なり、色といひ手ぎはといひ、花のさかりの目づかひに見されて、難波津の伊達をとこ、西國のはての髭奴も、柄糸下緒にかこつけ、きんちやくのひもかぎの緒、越中ふんどしのはしぬいするいとま

で、思ひだすに任て、買に行事にぞしこなしけるゝ、おやちもはじめの詞とちがひて、恐らく此堺中に、これほどの子をもつてみや、性はようて銀まふけて、手も書針も利、やがて天晴な銀持をむこにとつて見せうと、獨ゑみをふくむも斷ぞかし、されば一寸の善には一尺の魔がさすならひ、此むかへに帶屋とて、是も同じ組屋みせ、などや帶といふ物を、近き頃より仕出しの商、內證はさのみよからねども、此の家は大道筋にて、去人のおてゝ筋、旦那からの糸荷を請て、御影仕舞に手びろき商、組手の女八人、手代でつちかけて六人を居ならばせ、よろづ寬濶にかざらせける、此手代の內、久兵衛といひしは大坂の生れ、十三にて此の帶屋にありつき、出入十二年つとめて、今年よりはじめての給分とり、地體が長堀の白髮町生れとて、折ふしに通ふ大盡のふうを移し、二十五の春までに勢も延の藪入にも、見るをみまねの伊達風俗、あわざよし原延て中男、中村七三にいきうつしと、堺中の是沙汰、むかいどしの仕合せ、おはつも心のしやれ時分、見ぬやうで見るめもと、久兵衛もいやにあらねば、用のない折も氣頭ぶり、さい〳〵御見舞申さるゝも道理、下

女のかやを賴みて、文ばかりは取かはして、かはるな替らじと、逢もせねさきから起請まで書しも、物なれぬむすめの心にはさもあるべし、久兵衞も猶なみなみならぬ者にて、菱屋の旦那手代ども、どれどれにも取いりて、若いが奇特な者じやと、みな人にかはゆがられけるゆへ、常にも風呂を燒し夕べ、手打蕎麥の相手にも、久兵衞久兵衞と招かれけるに、頃しも五月十四日の夜は、吉例の日待とて、久兵衞も宵より呼よせ、夜もすがらの慰み、三味線尺八の音たかきあそびも過て、骨牌双六のしめやかなる座敷、奥は奥で碁將棊一人も隙なものもなき間、又是ほどの手づかひも有まじ、是非ともに端の間にて、ちよこちよこと御目にかゝりたいと、中だちのかやにいはせて、久兵衞がせがみ立るに、嬉しいやらはづかしいやら、人の知ぬやうに振て出、小見せの方の戸棚のうしろに、息もせずにいらるゝを、久兵衞はねたふりして、くらがりをさがしまはりて、手にさはるを幸と、爰へ御ざれと引よせけるに、おはつはわなわなと振うて、どうやらこわいと、ちゞこなつてゐらるゝ、はてこわい事はちともない、まあござんせと手をとられ、おはつは初事の男ぐるひ、戀のいろはのちりげもとから、汗水になつて起わかれしより、夜にまし日にますおもひのたね、かはいかはいのかたまりを折こんで、惡阻(つはり)と戀病を一時に仕まへば、五月六月の帶の旬が來て、今は盜人に見せても、懷姙との見たて違はず、おやたちの手前妹どもの心、跡先をおもへば暗がりへはいるやうなも、逢ひそめた時の暗がりの報ひ、久兵衞もせんかたなく、月よどみの藥さし藥、さまざまにもがいても、露ほどもきかぬ悲しさ、久兵衞もほうどあぐみ、喰物も身に付かず胸に手をあてゝ、俄に在所の氏神を賴み、此度の難をすくふて給はれと祈るもせんなく、幸と旦那寺の生玉の正智院は、高野の末寺にて眞言宗、おれが少い時は此の寺にはいりこんで、御住持とは大い馴染、是を賴で孕んだ子を、水になして貰ふたが能筈と、右の樣子を打あけて、こまごまと狀にしたゝめ、若御祈禱の影で、子が水になりましたらば、心一盃御禮は申べし、先是れは當分の御祈禱料にとて、有合に金子二步とつくりと封じて、ひきやくきゝ立に飛出しが、運の盡とて肝心の文を、門中に落して行しを、菱屋の乙娘おなつとて、今年十一のわやくもの、此ふみを拾

ひて封じめを引きむしり、上づゝみは溝へすてゝ、こまぐゝと書たる文と金二歩を、大事さうに抱へて、錦さまわしは金拾ふたと、何心なく差出しより、段々の大もめ、久兵衛も主人から追出さるゝのみか、大坂堺京江戸迄、先奉公はせくとの云渡し、おはつはさまざまの折檻の上に、こらしめの爲めに勘當との事、むかひにゟ菱屋にもしばらく、旦那達さへ差合を止られけるに、久兵衛もせんかたなく、是迄とおもひつめ、偸に内證から文を通し、迚も私は生ていぬ氣、今迄の御なさけには、御ゑかうを賴むといはせける、おはつも元來身から出した渋、ぬきさしもならぬ身のうさ、そもじ様に別れてなんの生て居ましよ、もろともにと手筈とりて、七月十四日の聖靈棚ぼた餅のまぎれに忍びいで、落くぼの野の堀ぬきに、終に身なげて失にけり、

心中大鑑卷第五終

京都
大坂
諸國
心中後日塚 全部五卷 板行

夫婦は二世と仕組だ心中
　新町通すじ壹丁目はりまや内　みよし
　内本町二丁めやまとや　九右衛門

たまぐゝ御ざれば庚申
　ほり江通りてんまや　きよ
　にんとくの前いかりや　又兵衛

生玉ののりそめ
　ほり江南はま町あかしや　つね
　ながぼりひなわや　二郎右衛門

筑山も冥途の道
　おいけすじけまや　きてう
　ばくろ町くわしや　七右衛門

二階から出る人魂
　ほり江ちや屋町あふぎや　まよ
　うき世しやうじ七もんじや　治太郎

添事も醫者坊
　あんごうじ町ひらのや　うは

おなじ所くすしの内　七介
心中のはした物
新町壹丁目ひろしまや　くびくゝりまつ坂
かわら町せきだや　身なげ七兵衞
戀に繩屋か縮つれた命
ほり江おいけ通いづみや　きち
彌兵町なわや　九兵衞
名を流すしゞめ川
しゞめ中町まるや　らん
てんまぼり川木や　左太郎
牛房ぬきにした㒵心中
しほ町のはたけにて女ころし男は迯てしれず
戀は氣で持男ばしら
北はま米屋內　下人權右衞門
下女たつ
貳匁が命をあてがい心中
新町壹丁目いけだや　さめ
ざいもく場木屋　太介
右目錄の通は大鑑の後日にて只今大仕組いたし居申候此外にも猶あたらしい心中の行かた聞付次第追付板行出し申候明日はとうから御評判〳〵
寶永元甲申年仲夏吉日
京寺町二條上ル町　板木屋治郎右衞門
本　屋六　兵　衞
同　宇　兵　衞
板行

世の是沙汰目録

目録終

世の是沙汰巻之一

○糸は柳馬場の組屋

おやまぬ夕べの雨には、灯の光までも打しめり、隣に称す念佛の聲、釣瓶の自然と動く音、何から角からうそ淋しく、心氣ばらしの酒引うけ、うきたつ心慓と出で、夜を晝にして我が物がほに明石屋の與三といふ者あり、表八間口に長暖簾を掛け、風になびく柳の馬場から糸練りぐり、紫の朱を奪ふ千種の色々打亂し、組人の女十三人、それ〴〵の所作いそがしきをも、餘所の事に見なし、たゞ夜あそびに身をまめになして、いつぬるゝともなき闇の夜の雨、軒づたいに足をつまだて、歸る心もそらに、鳥の聲ほころびがちなれば、我が門を強くも扣かす、心しりたる女のそと排を開き、親仁は何と首尾はいかゞと問へば、頃は一向の事にあきらめたる御貌つきにて、よべもはやく御ねいりとかたる、咨に嘗られたるよりは氣味わろく、我寝所へ行んにも、親の枕もとおそろしく、女どもの中にわりなく蚊帳おし上げて、宵に取りし螢はまだ袂に光りわたるを、それながら暑さ堪へがたく、帷子ぬぎ捨て丸裸に一寝入り、伏間もなく明はなるゝ光り戸の透より洩れて、帯引結び下々を呼起し、棚おろせ水うて抔と、宵より内に居たると云はんばかりに播し、走にかゝり手水遣ひ居る後へ、親仁の宗仙せなかを扣きて、こりや因果めといへば、かなしや異見せらるゝよと、身もちゞに成る心地しておしうつむけば、君よ難面し今夜はあふ首尾もなくてなど、腰にひつと抱きつけば、與三思ひの外に、是は親仁何なさるると貌をたげ見れば、宗仙肝をつぶし、背戸口へ迯げて行く、扨々いかに取りちがゆるとて、子に戯るゝ事あまり成る仕形かな、是こそよきさり草と、背戸へ行き門へ付きそひて、何たる御用ばし候やと意地わろく否がらして、一向と物いひかくる迷惑さ、手代どもにも見よかしの氣色ばみして見せに出れば、扨もよい御形のと皆々手を拍て笑ふ、何と親仁がよいなりを見たか、大き成る麁相ならずやといへば、いやこなた様の御なりが麁相といふに氣が付き、我身を見れば曉ぬぎ捨てたる帷子を取りちがへて、地桔梗に水車龍田川と染め入れの振袖、親仁の好色に愛給ふも

理也、

○坊主は粟田口の庵

いつを昔に馴れそめたる、衣々の袖離時しもなく、夜夜の詠の秋の月、眼の中に天地を入るゝ柳はもとより闇く、花は十萬の家に色を榮ふ、物もうといへばたぞと答ふ、處は雲の粟田山、後に音羽の瀧の流も老にけらしな、黑き筋なしと髮をも剃らず、する墨ならぬ長かたびら、年寒うして庭前の栢樹枝凋むに後るゝ風情して、雲行和尚とていまそかりける、ある時碧巖を講じ給ふ事あり、聽衆よのつねのなみ〳〵にもあらず、末座にとしの頃二十ばかり成る男、月代長く引割髻して、書をも持たずそら聞して、人よりはいち早く來り殿れて歸る風情、何心とも分けがたく、一日雲行の前ちかく召され、いづこ如何成る人にや、毎座の聽聞殊勝におはし候物かなと稱揚せられ、私事元來無面目の本性、何を辨へ何を明らむるとしもなく候が、只一事窺ひ奉りたき事侍りつといへば、其もて來る心に何をか探り給はん、大かたならぬ人ざまにこそと、いよ〳〵おしかへし其故を尋ね給へば、さればさよ拙者事は、是より東大津の浦、尾花木工太夫と申す者にて候が、我住里にしのぶ山こそかたの枝折りに心まどひそめて、柴屋町と申す一構の中に、光山といふ女郎にとし比馴染を重ね、此ゆへに親の勘當を得てあなたこなたと徘徊、よしや戀路のならひ、はて〳〵は死ぬるまでぞとおもふに、恥をかへてさすが死なれぬ命袖乞のおもてぶせ、朝の糧晝夕の煙たへ〴〵に三年過ぎ行く頃、親の慈悲とて古郷へよびかへされ、つれそふ女もことゆへなく、まことの結びをもさせ候に、此をんなとし月のつかれ積聚さしおこりて、廿六の春明はつる夢とはかなく別れ行き候、つれだゝぬ死出の旅、おなじ苔の滴と袖のかはくひまなく、つく〴〵こしかたを思ふに、我ゆへ一生をくるしめ、たま〳〵心ゆたか成るそのほどもなく、末の闇路もいかゞとひとつ〳〵おもひ出し、寢ては夢覺めてはうつゝにかきくどき、夜の衣をかへしてぬる夜、その面影ふと見へ來り、ものいひかはす嬉しさかなしさとり〴〵に、後には晝も身に付きそひ、目をふたぎても形はなるゝ事なく、初めのしたはしさも今は一向におそろしく成りて、とかく思ひわすれんとおもふ心より、猶まぼろしに立まさり、我身の病とな

りさふろふ、此執着斷ち候やうに敎化して給はれと、打しほれ申上ぐれば、雲行つく〴〵と點頭て、其幽靈は何事の物語をもこと〴〵く答ふるか、中々の事、さあらば是を持てとそば成る煎豆一掴、木工太夫が兩の手に入れ合掌させ、こよりして結び封を付、今度見え來らば、此の手の中なるものは何ぞと云へ、其時妄者得こたへまじ、又いくつありやと重ね〴〵とひて、かたちの消ゆる所まで行くべしと、おじへられて此の男かへりぬ、そのゝち日數過ぎてくだんの男又來り、御しめしのごとく致し候へば、かたち消てより二度來らず候、偏に御かげにこそと禮拜すれば、さもあらめとてふしぎ成る氣色もなし、一座此事いかゞとあれば、雲行答てその事よ、心より心を引き入れて形をなす、おもふ心ひとつなればおなじ答へをなす、然れば手に入し物大豆成といふ事、我もしれば妄者もよくしれり、數幾つといふ事主もしらねばまぼろしもしらず、是より一念相はなれて物に隔あり、是にて知り給へと打笑ひ給ふ、誠に奇妙なる事ども也、

○鼠鳴はそれ〴〵のいはれ

おほやけ事に何くれと物し給ふは勿論、よし有る事なれば也、かずならぬ賤の女の作業にもしるし多き類あり、譬へば燈の消んとする時、鼠鳴してかきたつる事は、心せきて手を指出せば、あふち風にて猶はやく消るを、しづめてかゝげるこゝろならん、錢のころころと轉びまはるに鼠鳴きするは、是も見失ふまじく又その內にまはりおさむる事もあり、燈花にて明日の事をしる事涅槃經に見へたり、蜘にて吉事をしるは方朔が傳へ、また衣通姬のむかし小車の御衣の袖なつかしく、打ながめ給ふ夕つかた「わがせこが來べき宵なりさゝがにの、蜘のふるまひかねてしるしも、とよみ給へり、香の物を漬るに茄の鹽々といふこと、性として鹽つよくつけねば叶はぬもの、又は色をよくする事第一と念を入るゝ爲か、佛衆生を念じ、魚母子をおもふがごとし、くさめ〴〵とそばより聲を合はせ、あるは急々如律令と文を誦し、刀の寒鼻の緒を結びなどする事、患嚔する人その心そらに成り、弱虛にしてあやしきもの見入させまじく、風濕におかさせまじき故也、諸卿着陣の時□□れば、こよりを鼻に入れくさめするわけ故實なるよし、火のふく時雜餉雜餉といふは、他所より得ものあれど祝ふなるべし、

童の湯に嗄し時おしまぬといふは、子心にせく氣をしづめんとの事ならんかし、碁を打に白石をわたすは上手への時宜、素色はいろの根元又は夜の火かげ、老人などに見やすき心づかひも有るべし、師走に油こぼせば火にたゝるとて水あびせる事、此月にかぎり忌む故いぶかし、此心は月々おしつまり、人の心もいそがしく一人始末心も出來るおり、油をそまつにする人寒き頃つめたき水をあびせ、是にて知れと心を付る成るべし、さもなき物までも奇麗なる紙に包み、第一の重寶の白銀を反故につゝむ事は、世に心得ぬ事と思ふに、是は人々に衣類までも儉約をしめし、如此一枚紙をも惜まねば、銀はもふけにくき物とおしへたるにや、大黑の色のくろきまゝに、白粉の入らぬがごとく惠比須の背のひきいは、着ものゝ多く入らざるごとく、然らば福祿壽のあたまの長さは、何となげ頭巾かぶるにもそんならましといへば、さも有るべし、但是は世の人に、かせぐ事を精に入れよとしめす姿ならん、とかく人々何ほど知惠有りとも、左まへになりては諸事はかゆかず、化寶の下り坂といふことを心得よとしめすなるべし、人は常々一足登るべき

事を思ふべし、世間にはしがるかくれ簑かくれ笠と云ふ物はいか成りし事にや、是は鬼のもつ寶と聞き傳へたり、されば鬼神に二種の品あり、一つには無財餓鬼、これはたま〳〵飲食せんとすれば猛火ともえて、五百生の間草葉における露をもなむる事あたはず、慳貪の業ほころびて身をかくすべき衣とてもなく、腹は不二山のごとく、喉はみすや針の耳よりもほそし、又有財餓鬼とて神變自在福力充滿の餓鬼あり、目に見えぬおにがみの隱れ簑、隱れ笠これ成るべし、節分の夜いりまめに打出され、柊に强がるは鬼の目に泪、「童のあごなきことわざと思へど故有る事也」鬼すらも都の內と簑笠を、今宵やぬぎて人に見ゆらん、と躬恒のよみしことの葉有り、或る大福長者の云ふ、人は萬をさし置きて一向に德を付べき也、貧しくては生るかひなし、分限者をこそ人といへ、其の分限者に成らんとおもはゞ、先づ人と云ふものは常住不變にして、いつまでも死なぬものとおもふべし、かりそめにも無常の心あれば身體をかろくとりて、祠堂奉加目に見えぬ後世の事に金銀を費す也、次に萬事の用を叶ふべからず、我事他事につけて仕度普請振舞

なども堪忍して、折ふしごとの音信もせず、あしてまどひに成るもの丶衰へたる合力も構はず、物の入べき時は目をふたぎ見ぬにはしかじ、見るもの聞くものにつけ、かれこれしたき事止む時なし、財は盡る期あり、かぎりある金銀を持ちてかぎりなき榮耀をなすべからず、義理順義にはづれ乞食畜生といはる丶とも、さら〳〵恥とおもふべからず、それを氣にかけ腹たつる、我よりものを費し益なき事也、一日の一錢一年に三百六十文、錢を我が使ひ者下人のごとく思ふべからず、錢に我身をつかはれて、主人のごとく佛のやうに御機嫌を窺ひ、一錢をも用ゆべし、翼なふして飛び足なふして走り、恐ろしき顏強き口を和ぐるも只此錢の威勢なる事、晉の魯褒が錢神論にかけり、是は本意にあらず、當時賄賂の道さかんなりし世をいきどをりて此の論をなせり、あまたの金銀を持ても一紙半錢をも惜しむ、人は寶ありとも詮なく、是こそ今生の有財餓鬼ならん、寶の簑笠もちて心をくるしめんより、菅簑を酒にかへて明日の雨をわすれ、一朝の樂み天を幔として地を席とし、足投出して心にせまき憂なからんにはしかじ、たとへ百萬貫貯へ持ちたりとも、有爲造作よりこしらへたる財寶守るべき、其人さきだちて死行く時つきしたがふ物もなく、血脈袋に菩提實一連六文の錢ばかり、漸々の路錢たのみすくなく、但是を聞く若人の、あしく心得まどふ事もあらん、よしの丶川のよしや世の中、と妹兄の道好色事に金錢をつかひ捨て、身をはふれたるは無財餓鬼の其一つならんかし、一生身を約め寶を持ちながら死にゆく人は、いとせめて追福作善の營み又めでたく、其より平生の業成じ、佛の道に隨順し、いみじき臨命終るこそあらまほしけれ、かれこれ二色にかはりゆく志、そのもの丶別々おもふ處、生れ得たる氣質自身自得すべしと也、五月雨に鷺の首みじかく、つれ〴〵とみのも打ぬれ、山雀の世智かしこく、まはす胡桃のとにかくに、もてあつかふは人のこゝろにこそ、

世の是沙汰卷之一終

世の是沙汰巻之二

○闇はうき名の似せおとこ

はつ雁の告げわたり、夜風やゝ身にしむころ過ぎて、冬ごもりする軒ならび、隣も近き碪の音、糊すりおけと鳴く鳥に、明日の日和よき事を嬉ぶ、何がしの院にて物おぢせし夕顔のほどにはことかわり、世渡りの隙なき身はいつをいつともわかず、それ〳〵の苦は色かへぬ松原通りこそ箔打槌のから衣、かへす〴〵も辛き世のいとなみ成ぞかし、此中にも氣を安樂に角引まはし、家居つぎ〳〵しく格子やりわたし、塗籠三ヶ所礎八千代も動きなく見えて、堅い金萬の聲をよばふ、よそには心いそがしき師走の二十日あまり、月まだ出ぬ夜半の頃、門口を丁々と扣く音に内より人立出、今宵はいつよりはやく御歸へりなされ候といへば、否私は道通りの者にて須臾軒に彳み候、それは何ゆへ戸を扣き給ふ卒爾にこそ候へ、さればとよ、殊の外なる大雪下踏の歯にはさまり、過がてに候へば扣きおとし候に、思ひの外の御とがめに預る物哉といふ、内より女の聲として、たゞ野も山も悪性ぐるひ、男の夜あるきはいづくも同じ事ぞと、ひとりごちして立入るを、もし〳〵と呼びかへし、してわたくしが悪性ぐるひ、いつ御ぞんじにてかやうにおほせは承はるやといへば、暫時いらへもなく、本に誰さまも知らぬ身のよしなき事、御氣にかゝりしも御尤に侍る、はしたなき詞の末、風と申出せしも我身につまされてといひさして入りぬ、又これ〳〵とよびかへし、ちつとも苦しからぬ御事、まづはこなたの御身に物思おはしますとや、いかなりし御事にや、されば是の人は今宵も外へ御出候を待つ心より、物音もそれかとおもひ、さきのごとくとがめ參らせし也、扨はかくの給ふ詞の躰、此家の奥さまにてわたらせ給ふな、見かけから結構の屋作り、召使も多く侍らんに、御自身輕々敷御風情や、但しは御亭さまの歸るさ胸ぐらをとりて噛付き給はんとの御用意にや、あらおそろしやと打笑へば、いやなふ誓文さようの事に侍らず、風吹けばたつたの山の道すがら、夜はにや君がと心を盡せしむかしはさもあらばあれ、出で行く人は我心の御氣に入らざるものよと、身を恨み遲く歸り給ふ

ても、下々に露しらする事もなく、宵より御床とりて内にふし給ふ躰に揺し、かやふに待ちわび候わと、風聲ものごしにくからず、內と外との戸を隔て、御姿は見ねども、互に問ひつとはれつ、扨てしも有情御心かなと馴々しき物がたり、かまへて人に洩し給ふな、何がさて弓矢八幡他言はいたさじ、扨もかたき御誓おぬしさまは御侍かと問れて、いかにも〳〵二腰をも帶する何がしにて候へば、一言の契約無にはいたさじ、それはしんじつ忝なしと、打かたらふこくらがりより、やれ密夫めのがさじと、むずと抱き付くものあり、是は狼藉といはせもはてず、おのれめ弓矢八幡のいやかたじけなしとは、是こそ不義の證據とねぢあひくみあい轉ぶほどに、措力も盡き吐息くるしく、扨まづそちは何者なれば、かくばかりするぞといへば、聲にても聞つらめ、空十方氣なせそ、かたじけなくも是の亭主金澤屋の左五右衛門といふ聲に、內より女房はしり出、かまへてはやまり給ふな、あなたは歴々の御侍道行人也、左樣の事努々なき事なりと行灯さしあげ見れば、年頃四十たらずの瘦せおとろへたる法師也、かれこれと爭ふうちに麻衣の袖ちぎれ、紙子所々引さかれ、ほう〳〵辛苦命助かりぬ、左五右衛門興さめ、かゝる脂茶なる鉢ひらきに、色めいたる事もあるまじ、又侍と云ひたる詞の違たるも、いよ〳〵ふしぎといへば、法師も唾にむせながら、最前の先蹤侍と僞りて、只今化のあらはれしは面目なき事に候へ共、我婆御存知なき奥さまの御心中、云分のひとつにて候、扨も〳〵短氣成る御仕形、あまの命をと揉手して居れば、左五右衛門も詞なく、着たる物の擘裂けしを、今更不便の心に成りて、まづ內に呼び入るれば、內儀いつものごとく手づから酒の羹よく〳〵調じ、亭主是からと一つうけ、法師へ慮外とさせば、湛浮々と請、寸とほし舌打して、今迄の事苦にする貌もなし、今一つおさへたといへば、爰は奥さまの御間哂と云て賴む、心の性も懲もなき御坊さまやと、吞んでさしおしかへし亂酒になりて、さかなひとつ是非にと強られ、加太夫ぶしのてる日のまへ、おりつのぼりつとよくのや、取次筋斗の出羽ぶし、泣やうなる聲色是もおかしく、一々見るに爪はづれ、さすがいやしく育ちたる風情にもあらず、何を思ひとりて、かゝる染色の身とはなられしやと問ば、珍らしからぬ事にて云々

とかたる、元來我が好む事、してまづ其身と成りても古はわすれぬにや、傾城ぐるひといふ物は捨られたるものに候はず、今といふ今、つく〴〵此事を思ふにつけてさる物語の候、譬へ都の町を黄昏時に、年の頃及助たる女のこしもとらしく見えて、又人をも連れず只一人後々と行を、家並々の人目をとめぬはなし、其中にもわきて色好むすきもの、風と跡について何と云いかけん詞もなく、若い息女御の、しかもかひのくれに、大たむなるひとりありきや、おくり參らせんかと云ふもおほかた定まりたる詞なり、知者ならぬ男に何の想はなけれども、道の程たのみすくなくおくり給はれとも、流石詞にも云い出でず、莞爾と笑ふ睛、はや男風流に來るよと鼠路々々嚙しもて行ば、能き程阿答うつて三條通を西へかい過て、室町立賣のあたり、爰こそわらはが宿にて侍る、よく送り給はりしと戸を犇とたて入りぬ、この男何の詮もなく只惘れて立たる計也、是を思へば大方の傾城ぐるひかくのごとしとはいへど、我は一分味をやりしと人々に自慢するものなり、此法師も俗にありし時は、十文字屋の九一と申て、人の三町飛べば十町を大またげに超へ、何を學びても無器用にて一つも形つかず、儒書のかたはし詩歌の葉末、露しりたる事なく、音曲一ふしもしらず、物かくこと鳥のあとかたもつゞらず、只世を大事思ふ計りに、念佛は無有出離の身ながらも、順皮佛願故の文にすがりて、往生をこそ得めと思ひとりて、徒然わぶる事もなく侍りしに、ある夜友に誘はれ、村山の内しくみ今夜云いわたしにて、まだ狂言もしかぐ〵定まりたる事もなし、いざ見にゆかんとつれだち座を見渡せば、紫の帽子したる姿、あまた並居て酒ごとして、初から打とけ、内證の心安き一座の大小指折て見るに、高間ヶ原に神とゞまりて、夫婦和合は油臭く、是こそ人間一生の歡樂と、日々夜々かよひなれて、能いとしをして螺廻し扇がへし、雨數かぞへて四五年も過ぎぬれば、身躰ちんからりとなりて、銅煎の蓋に湯氣たゝず、それより禁酒をちかひ、三年の間行ひすまし、世の塵靜にして萩のうわかぜそよ吹く頃、もとの心をわすれぬ友どち、ふと誘ひつれて、肩輿のおしなみ南がしらにおしかけ、上林のはつむかし、世をうる事もかまはぬ里の外傳が、二階はしごののぼりおり、手たゝく返事氣味よさ、先ぬしづ

かれよなどゝいへば、此里ついに來た事もなければ、それといふ詞もなし、さまでかくさるゝもよしなし、いふてよき事はいふてのけ、それもさふよとあのゝものゝと私語ほどに、そりやこそ化はあらはに衣の紋はむかしの袖のゆかり、たちばなのかほるゆかしく、それかれと打こんで、卯の花月のみぢか夜はしらけ渡り、一ばん門に天の戸開けはてゝはいかゞと、かへるさ一入の酒事して、此おもしろさしらぬ友だちに、とわれて咄したき心となりぬ、いにし年の二月十五日、佛の別れさて尼法師のとりおこなふ日なるに、すこしの事を云ひつのりて、指きりおこせし其の時、只何となく不便なる心に成りて、終の住所までいひかはす、誓紙七度かさなる年月衰へ來るまゝに、今度は跡へも先へも身動きならず、住所をもうかれ出て、かゝる黑染の身と省はてゝも、猶その事忘れがたく、佗人の筆のあと、帶にくけこみ身をもはなさず、佛の前に手あはす心きたなさよ、

○御緣日は十七八日

我こひは人しらぬうつゝに目さめて、つくづくおもへばおほかた今日頃は、年の暇もあき出る、心のうかれし魂にやあらんと、おもふもしらぬ事ぞかし、あくる正月十七日、觀音のゑにちに參る人をしばしとゞめ、東と西との方違へ、日頃の手管又かきてつかはせしに、かくのごとくしのぶ折ふし、返事はあとよりと云ひて、何の詞も梨の礫も、うつらうつらと待日もかひくれぬ、文とり次ぐ人の僞かもしらず、かういへば皆々他のかわりゆく事のみ恨に似たれども、さにはあらず、虛實のわかちもたがひに定まらず、あいそむるうちに、何に泥みて我は是ほどまでわすられぬにや、不便なる心計り出來、今は義理合のやうに成りかかりしなどゝ、我が心にことはりをつけて見れども、元來引かるゝおもひからこしらへたる口說出かした貌に、恨みの後の笑ひがほ、さきにおもはぬ意迄道理をつけて、結構成る親の異見は尤も過ぎてふるし、只好心にて迷ふは男の心なり、又傾城の枕さだめぬ初おとこ、一つ呑む酒も勤の數にして、うつくしき形にもよらず、破躰なる仕出し名代におもひ付く、おとこ器量うちよくていやみなる風俗、年寄あるひは法師、それぞれの心をうけて、泣くも笑ふも腹たつるも、當座の首尾にまかせ虛のつもり、後には實に戀りかた

まり、根引の松の色かへぬ、家童子と成るもあり、そこしんじつすいた男は、かりそめにいふ詞も神かけて僞わらぬ心より、おもはぬ不首尾宿屋の口さがなく、隔てられては何ほど心つくしても、是もつとめの世の中、さだまりたる文躰と實も虚に成りて行く也、とかく此みちにはいつわりもなく誠もなく、縁のある行すへこそまことならめ、我もとより法師の身として、色好んで人に笑はれ詮なし、たとひ男の身なりとも、戀する人損ある事をしらず、譬へばあひ思ふ中の物、男半分女半分の心中成とも、男のかたおもひつよし、其故はおほかた男の方より戀そむる也、うつくしきおとこより、あしき女かたちすぐれ、物ごしまでも各別也、まれ〳〵女のかたより思ひつく人は、心仇仇敷するゑとげず、さりとも女にしのばるゝ身に生れつかば、戀するかひこそあらめ、さらばおもはるゝ器りやうなる男見る京にすくなし、在中將光源氏のごとき成るは、今の世に有るまじ、然るをゆかしくしたふ千束の文、とかく欲のさきだつ心也といふは、又天下無双の屋暮也、世に傾城ほど無欲なるものまたとあるまじ、徒の外に身を十年のとりこと成り、つかの間やすき心もなく、幾人ともなき人の目に、ためつすがめつ見すかされて、はや親しき風に内證のくまぐまで人にも問ひ、功者だてして浮名をたてられ、あはぬ心ざままでも沙汰しらるゝ事、能きも惡敷も皆皆身につかぬ身とも也、今の世に男傾城といふ者有て、行するゑたのもしくおもはせ、後には我からの孑孑もならず、身より出せる鋳刀となり零落て、かへらぬむかしもどらぬ金、むざと使ひてなどゝ、噺しのつまり〳〵に爲有貌するもにくし、人しらぬ約束をたがへたるは猶まさりて恥しき事ならずや、身のおちぶれは勤ともいはれまじ、鈍な心より角のごとしとは知らずや、かゝる男を阿房なりとそしる女房、またおろか也、その身の心ざまあしく、云詞姿見ぐるしきよりあかれ、時々の口舌事に泣涕、みな嫉妬のをそろしき咒咀事、味噌鹽のたぐひまでも似合敷云ひやうも有るべきを、打はれての大ぐち法界悋氣、これらをすこしはゞかりて奥ぶかく、人にもま見えぬ程の上臈は、せつかい袖胸高帯襟領のとりなり、玄宗皇帝の園もちたる女のやうに、裙しみだれたるもおかしからず、たとへば男の今や死ぬるといふ時、大かたの女

房の泣事に、あの人が死なしやつたら己は何とせんと、先我身からさきに思ひ過しするは、否なる詞也、死るほどさしあたりて、其身の難義なる事なからんや、かく申せばおくさまのさし合、とかうするうち夜も明け候へば、いとま申して法師歸らんといふ、せめて今しばし、住み給ふ所はいづくと問へば、世のうき目きかぬ聾谷といふ所に住み候と、暇こふて出ぬ、あまりの不便さに、ある時かの所に尋ね見れば、其の人は西國がたの大名にめしよせられ、昨日此家を出られしと、疊打たゝきこれ納めよと、股引したる男の持てる反故の中に、何となきいひ捨て有り、取出し見れば、節分のざれ詞と思はれて、

としにゝにまさらぬ智惠を大豆の數

世の是沙汰卷之二終

世の是沙汰卷之三

○是は目出度にせ小判

下寺町の鐘のひゞき諸行は無常也、これ生滅の法と夕々に高座をたゝき、袖の時雨にさだめなき、傘よ木履よなどゝ迎ひに來る、典琴よ龜よと分もなくおしあいたる中にも、せかぬふりして跡に殘り、談義の噂とりにゝに、有難き所々覺へ、自慢に沙汰する友立、高宮の十德手織紬の紺島、濃い紺子の筒長、踏皮黑子紙に鼻噎きて、手前ともかうもする人には、疊の表がへ壁の根繼、屋根の繕などゝ奉加をすゝめ、是皆身につく後世の土產、先祖への孝行、子孫長久と進むる功德、ともに成佛のえんなれども、かゝる人はおほかた虛戲不實にして、打見には後世者と見へて內心には利欲つよく、茶よ莨菪よ齋非時のと寺をむさぼり、足手のはたらきにて今日を過るもあるぞかし、其中にも灘屋の宗頓といふ禪門、人とかはりしかゝ物をもいはず、見るほどの人を譽めて息子の孝行を人にかたり、三太が手の引やうよくてありきよく、利口者

ぞといはるゝから、一人奉公に精出し勤むる事、元來召し仕ふ人の身の德也、惣領には谷町の家を讓り、主は外に居て供𩯭の一人はさきだち、老の寐覺の咄伽する女おも置かず、凡釜の色きら〳〵と磨きたて、せんざきの薪切琉黄猫くゞり、一間あけたる腰障子、紺屋形に人見を張て、子守か孫を連來たれば、何がなやりたし粔籹喰ふかと取出し、そちがおとなしく成たらば金のおこし米を取すべし、是れ見よと戸棚開き小判を見せて、一つから十まで算へ、後には百の指折る事子心に知りたる嬉しさ、歸りて親に此事を語れば、御隱居の奥たのもしく、嫁たち孝行を爭ひ小筐折かけたる肴籠、蕎麥粉の袋縫ひたて、上には紅の十文字もわざとならず、西の岡から貰ひしなどゝ馳走せられて、八十八の米の數大概筋の仕合、十分に眠るがごとく往生して結構なる品、七々四十九日のかさ餅、身をしる雨の陰もはれて、在りし世の金箱惣領の支配に蓋ひらき見れば、小判の形して眞鍮の作り物、大きに仰天して、扨々年來に似合ざる方便、かくのごとくなきとて一人の親を麁相にすべき、我が心と黒く思ひ給ふ志の口惜しさ、腹たてどもせんかたなく、情思案して見れば、元來金多く持れしと聞くより、存生の内にも我ほしく思ひし事は實正也、金もしなしと聞かば、不孝なる心出來んもはかりがたし、子の心を知れるは父にしくはなし、何ぞにつけ疎略なる事見えし物にこそ、然るにこのこしらへ金は、我ための孝敎和顏の妙藥、正眞の小判よりは有りがたし、犬馬にいたるまで養ふ事あり、敬を以てこそ人の禮とはいふべけれ、彌生の頃のうかれがらすのなきわかれも、母を送る心ざし、三の枝をさがりて宿する鳩の孝行、鳥類にかゝる思ひあり、しかるを利欲のため心を盡せし年月のほど、今さら恥かしく又かなしく、懺悔して追善懇に弔らはる、

〇料理には圓山の生鯉

花の山月の座敷、いづこをもよほして酒宴するよりは、思ひよらずおしかけたる客人、雪ふる夜料理鍋に物煎りて咄したるこそ、興まさりておもしろけれ、下下多く仕ふ人のやはらか成る魚、薄き酒、濃茶の口しめたる、唐物の似せ譽められて嬉しがる亭主、立花しらぬ生花、是等は一向振舞せぬがましぞかし、又氣情過ぎて、貧しき人の饗應したるもかたはらいたし、家

具は先度八文字屋の太郎の所にて見たる、宗和形の黒塗り借りて來ひ、銚入子の鉢其中に香の物二艘、おみつ殿に御無心と申せ、白搗角箸靑物は玄喜老に口合させ、當分買ひかゝりて求めよなど、一人して情味かき献立かき料理にかゝり、かしこをすればこちらが煎りつき、南無三寶湯物は大根からして跡に牛房を入るゝ等を、鈍な小女郎めやれ、飯畑が焦げくさし、鹽一つまみ釜の蓋におけ、巢がたらば米三升に酒一杯入れよと氣のせく折節、小比丘尼が油とろ〳〵つけてと謠ふを、手のひまもなきにとをれといふも忙がし、相借屋の又右衛門に勝手を見舞をたのみ、息子の長吉は晝から寺を休ませ、雷盆持せ味噌する内に、客人御出と腰手拭とりて、何の風情もなく候に、火入よ茶をもて來よ御菓子、跨と答へて袋に入れたるをそのまゝ座敷に出す、熨斗付ぬばかり也、氣の毒さに、亭主臺所へ行て貝燒しかけんといへば、又右衛門さし心へて、早さきにから生姜酢かけていためて置きました、是は酩酊な事、二の汁の鳥はなんと、成る程狐色に燒て御座ると、すつへり行列かはりて後や前、漸く取組なをし膳を出せば、御亭主樣も御出候へ、ひらに〳〵と再三强られ座につけば、内證から少と御目にと呼びたてられ、諸事不都合に長吉一人が給仕行宿ず、習ひのたけの膝車はてしなく、肴鉢に一二を付て此となりのすこしも違はざるやうにと堅く云つけ、又座敷へ出挨拶する片手に、指一つ見すれば一ばんに蛸、二つ指折りて何がな酢の物をと云へば蚫、番侍のごとく酒麩持て出づれば、何を煎りて出しをるぞ、ご致もぞんせずいやはや鹽梅もいかゞと、大やう成る躰もおかし、かゝる人時々多き事也、九文字屋の仁助といふ人は、家を買し悦び、圓山貞阿彌にて時分からの暑さ、涼しき所から町中を呼び、種々結構を盡したれども、さかなよはき六月の頃なれば、淀鯉多くとりよせ、料理前に此の庭の池に放させよと、水おもしろく興まさりて各々詠め入、龍門三級をのぼる鯉は桃の花のさかり成る時とかや、この以前猿澤の池にて大き成る鯉見侍りし、神前苑の魚は險墮なるといふは誠かや、煎餅まかば此の中にても喰ふべしや、あれ〳〵あの岩のそばへ行は何と大きな物ならずや、三年物にこそと指ざして見るうちに、勝手のこしらへ漸出來、下男鯉を取りにきたり、とやかう

隙入れば、板本料理人それ〴〵といへども鯉に勢つきて取らるべくも見へず、客人の中にも若き人は是を目前の川がり、罪も報も後の世もわすれはてゝ面白や、手襷あげて追ひ廻し、次第々々に大勢立ちかゝり、後には御宿老殿丸裸に雨の手をひろげ、ありやありやそこへ〳〵どこへ任せなどゝ岩ふみ崩し、黄楊木躑躅の枝を打折り、亭坊の難義せんかたなく、寺中の風呂敷引張りて持てまはれど、いかな事飛つはねつ取らるべきとも見えず、されども御宿老日頃のはやわざさしつたり、是こそとらまへしと抱くと否や仰向に反倒され、泥まぶれに成るを怪我ばしし給ふかと引きおこせば、鯉の面にて頤を打ち、舌喰ひちぎれ血出て、とやかう療治するうちに、日は西山にかくれ、誰ひとり飯喰ふものもなく、はふ〳〵家にかへりぬ、

〇胸は撞木町のけぶり

もうそ〳〵、赤い事にとりては城山の桃の花、稲荷の華表も彩色の、出來た〳〵と都の打もらされども、又は底から此所おもしろく、誘といふ聲きくといなや、耳塚をかいたおり過ぎて、行道のほどすこし遠きこそよけれ、九月九日は一年に一度の御祭、御香の宮の神輿が通るとてぬけ道のあくもめづらし、昔しより此所繁昌して、太夫天職の境もなく、上見ぬ鷲の摑みどり、ふりみふらずみさだめなき神な月の廿日過、橋のかほり枕の風にあらく、寢耳に水よかねよ太鼓よ同士軍と、周章鞅掌事寢入ばなの最中、上着は脱ぎすて衣ほすてふ山は、春日のしめ緒しどろに昌披、あるひはかゝえ帯二つに引合、背戸の鎰よといへども見へず、勢に力は付くものか、よつてかゝつて錠は捻切たれども、土戸がをもふて手がなへて明ず、後の垣にのぼる事は登たれども、おるゝすべしらず、小笹につもる竹の雪ぽつたりと落て、はう〳〵逃行く闇のかよひ路、井筒の町もたど〳〵敷、追々に走り行く人は誰と、問へどこたへず口なしの花色衣、裙にもつれて足がたゝぬといふを、かひ〴〵しくも引きたてられ、道行く馬かた旅人までも、いとしや女郎の歩はだしにてと、半分は色に愛でいたはれば、かゝる折節の情らしき詞は、馴染の客がしんじつよりは嬉しく、おもひ〳〵に落行く風情只分もなし、都の方よりはわれさきにとかけつけ、それ〴〵心づかひする中に

も昵まじき男ありて、すはと云と其の儘紫鹿子の女着物肌にしかと着て、道の序に祇園町の服部たばこ廿包眞懐に入、のべ紙十束背中に四束兩袖に二束づつ入れ、一束はたばこにつかへて入れかぬるを、無理におしこみ、殘る一束さながら捨つべき樣もなく、手に持て道々の手桶の水に浸し、息きれし喉を潤し、我がおもふ嫡に行合ひ、先づ寒からうと肌にあたゝめし小袖を着せ、逢ふ程の女郎にのべ紙二折たばこそへて、扨も御氣の付きし事やと嬉しがらするも、時にとつての手柄ぞかし、やがて明ゆくしのゝめより、方方へ手わけして、先づ女郎の行衞を尋るに、日頃賴む寺又は道心者、尼の庵室へ行に、仕合わるきは見しらずとあしらはれ、かひ〴〵しく大佛邊まで立のきし人は、火燵の上に膳居へて朝飯くふも心ならず、長屋の口鼻どもはいたはり貌に傾城珍敷、こちの切漬が味し、何がな馳走なされて、おいとしぼやといはれて腕々涙、かゝる折節村山萬太夫のぞましき心もありて、おもふに甲斐なき竹輿の手まはし、卸せ中間のはたらきに、さんまい肩にはい〳〵といそげば、せめて寶塔寺へ一寸まゐりたいといふも聞き入れず、おとすやらころぶやら、宿に歸りての嬉し泣き、東寺の塔が高いやら八坂の塔が直下やら、清水祇園さまへも得まいらいで願かけたる斗りなれども、日頃神さま佛樣さま信心のゆへ、何事もなくおうれしや、竹輿舁てとしごろの働き、棒のさきに熨斗付け申さんも、噺のおこしに言ひて古ければ、庭前の竹輿一丁宛今度の進上といへば、志のまんぞく今から檀那さまがたの堪へず乘らせまし、然も輕うて舁ぎよいやうにと底ためて芥子人形、突鼻とわらふも目出度し、

世の是沙汰卷之三終

世の是沙汰卷之四

○世には手ぶりでかゝる身過

松屋の庄三は、元日に見しらぬ瞽女が小袋をもて來て、是を預けませんと云て終見えず成り行きしに、其袋の中に黄金入れて有りしより、次第に家榮へたり、千切れの六右衞門は、片原町の堀の上にかた庇の家を借り、霜夜の寢覺がち成るに、大溝ゑ何やらすつる音して、跡より人馬の蹄はげしく聞へ、そこ起出捨たるものは何やらと、熊手にて探れば重くかゝりて上らず、死人かと突いて見れば、棒の先たしかに手ごたへして、取あげ見るに菰の中に小判千兩入れたり、稻荷の新助は、大かめ谷の妙三が散香入れし燒物を掘出し、文淋に極り、定家の後撰集は、藤屋の七兵衞が紙屑籠より見付、虚堂の墨跡市之が梅、撫準の掛物目かきかねは望みも絶へ、とかく果報は寢てまてとはらつゞみ打て、ふす夜の夢もふと雨に覺され、天井よりもるゝ雨の音ほら／＼、昔をかぞへ見れば物心しりてより廿四年、今から雨の手に年を持、口にて謡を教へても宿行事もあるまじ、盜みは命のおしく、とやかく分別して見れども、天からもふらず地からも涌かず、身を觀念の窓に居へ、煙筒の皿に死灯かきたて、迚も金持にならば一萬貫目半分は子に讓り、京の眞葛に、普請結構にして時々の通ひ所、御室の下屋敷は櫻の頃、六條の亭からは千日參りの人通りに氣をはらし、知恩院町の背戸ゆく川、壬生の茶園は所がらの水菜一ぱい呑んで、すぐに島原の出口から裸一歩の摑打、はりの強き太夫よりは、家童子のしんみやうらしき心ざまを見たて、請だして人にも知らせず、風俗町やうにつくりなして、行たい所氣まかせに、誰をそるゝ事もなくばと思ひつゞけて、こゝろ懸うちは分限者もおなじ事とおもふくせ度々にさし出て、あげくには家のさし圖まで書、外から金をもてくるやうに、頓て／＼と思ふもはかなき事也、かゝる事身の勤のさはり也、何事をなすにもはかゆかず張獎があてのみ成ることよりは、とかくかせぐに追付く貧乏なしとかや、廣き都の中、世わたる業のそれ／＼に替る中にも、東洞院七條邊表間中の釣格子、一間に二枚のさかい障子を立て卷純よりの門暖簾、さゝら三八

宿とまじなひ札をして、亭主の名は利右衛門、女房這ひ出の小女郞以上三人突上、窓の明りを居間にうけて、竈の前瓦艶よく、井筒沓脫きすべ〳〵とするほど拭ひ入れ、商賣する躰もなく、肩入れ奉公にもあらず、宿かへてより三月何をもふけて過るともなく、海のものとも山のものともかたづかぬ人間あり、二日寄合に年寄此事を云ひ出して、家主に云ひつけ、早々宿かへさせよとあれば、何を目あてに間をなく、角はの給ふといはれて、今時浪人の改めつよく如此は申也、商賣人としるゝやうに、何にてもすこしの物なりとも棚に御出し候へ、迚も借す家の事なれば其まゝとめ申さんといへば、利右衛門頭をふつて、身どもが事さやうの世智成る事しては、仕合のかひに成り候、誠に我事氣遣におぼしめさば、我等が商賣見せ申さん、御覽ぜられば合點ゆくべし、明日にてもあれ七條の道場の明六つの太皷打出すかしらより、拙者が跡につき半町もさがり見給べし、其時こそ樣子しれ申さめといふを、年寄にしか〴〵と語れば、いよ〳〵不審はれず、先づ望の如く人をつけて見ん、誰かれといはんよりは、明日の行事然るべしと定め、卯の刻になれば今や出たつ利右衛門が姿、伊勢木綿に絹糸入の横嶋煤竹の袷羽織、腰に三尺手拭引しめ淺黃の脚絆尻からげ、藁草履のおろしたて我町をすぐにあがれば、行事も跡について誓願寺通東へ寺の門を入り、佛そこ〳〵にふし拜み、三條へぬけ寺町へ出、一條烏丸下るとて少き紙切の落ちたるを、杖のさきに拾ひさりあぐる、行事追付き何が拾はれしと立より見れば、三匁五六分もあらんと見へし一粒銀也、扨々よき御仕合せやといへば、是が私が商賣と定りたる事のやうにいふもおかし、扨行事殿は、今朝支度はしなされしやとへば、いや〳〵かゝる事とも不レ存空腹なりといへば、待給へどこぞで金氣を拾はゞ何にても振まひ申さんと、それより室町に出で上立賣を西へ行き、油の小路四條あたりにて衫兒綿の鼻紙入一つひらひたり、隱し牡丹二所、開き見れば毛貫小がたな梅の木の和中散、義經忍びの大事卷物、牛房の傳左が控へ覺帳、三寸八歩の守り本尊、十五双の伽羅棡たてたる座高厨子の塗代ともに五兩二歩三匁八分、樋に請取し高野の覺照院樣、つり銀一匁一分と書て小粒壹つ、此のかね拾はぬ先ならばと今日の仕合、是れまで

成りとて日の五つさがり家に歸りぬ、

○棧敷は姿の目利講

霞のはれ間よりきらめきたる春日の朝から、のどかに寒からず暑からぬ今日しも、芝居見物のうちむれて、四條のかり橋うち渡るより太鼓やむころ、はじまり時分のよみ込毛氈たばこ盆、それよこれよとおしあひて雛壼の屋躰造りものも出さず、階はいりはやしかたの座まで見物入こみ、狂言のうしろよりいやいやなどゝ罄むる聲、この所の繁昌今以て珍敷からず、西の方下棧敷に、としのほど廿四五にして丸顏にておも長なる額つき、もつかうの被のひまよりもれて、とび八丈の割り格子、何とやらん物ありげに見えしに、後に地白の淺黃時ならぬ給小づまさがりに着て、紫の色うつりたる帽子上むすびにしたる四十餘の女、供とも見えず又つれにもあらず、いかさま外ならぬよし、跡にゐて時々茶など給仕する躰、出入の者などにや、其かたはらに五つばかりの子髮置したる月額の跡しほらしく見ゆるは、此女郎の生みしにこそと脇目より少し見おとりする心也、扨その姿の隣棧敷には三十ちかき面ざし、黑羽二重にむかひ蝶の紋所、ほんほりしとやかに着なして、脇の下女一人物らしき下男、木綿の羽織中脇指革卷の柄頭、町ふうとも見えず、何さま武家のしのびてこそとおもひやるに、となりの方の子しきりに泣出しかしましさ、棧敷の後より立見の男だてども、其子なかすな狂言の邪魔つまみ出せなどゝ、理不盡にいふも氣の毒に聞えて、隣の女郎何となく手を取て愛すれば、是より抱かれて、むつかりもやみ機嫌もよげ也、腰元ふしきの思ひして、さてさておいとしらしやおまへさまにも哀かし、此やう成る御子樣おひとりあらばなどかきくどき、餃餠楊枝にさして指出せば、とりていたゞきたる手のしほらしく、もちあそびながら喰て、前なる棧敷のふちに楊枝のかしらさしあたりて、ふと咽にさしつらぬき、はつといふ聲の下より血ながれて人々おどろき、これはといへどかなしやぬくにもぬかれず、とやかうとさはぐ内に子は目を見つめてとかくせんかたなし、母親のかなしさおもひより、なき怪我に氣も消へ入るやうなるを、やうやう膝にかきのせよび生き生きすれども、賴みすくなく見えてせんなきほどに、子の乳母狂人の如く𠮟りて、さてもそなたは

何事にて人の子をけがさせらるゝぞ、元の如くいかしてかへされよ、さなくば足下を立せじ、この御子はかりそめながら大事の御子にて、京にもかくれなき十二屋の新太様と申して、則ち是れなる御方と二人の中に出來給ひ、家をしり給ふべき御代つぎをかく致させて、是が何かと言わけのたつ物か、生てかへせかへせとしがみつくに、腰もとけうさめて、さてあなたには新太樣の御妾樣おりん樣と申御子よな、かげながら御名は聞しよりもあり、こなたの御かたは則新太樣の奥樣にてわたらせ給ふ、所も同じ所、御そばに參りあひて此怪我は何事ぞや、腹から出させ給はぬとて御子同前の事なれば、思ひよらずのあやまち、さりとて是非もなし、何とぞ養生もあるべし、先づその御子をといはせもはてず、さては新太樣のおく樣とや、道理なり、日頃ねたましき心よりかくのごとくはし給ひけん、大勢の中にてかくあさましく殺し給はんより、何とぞ仕樣も有るべきを、おそろしき妬の念、さやうのさもしき御心躰は、おく樣に似合ざる御心根やとわゝりかゝれば、言分せんとせり合ふ聲わけもなくかしまし、大勢はたちてねき見る目もうたてく、まづ藥屋へよび入れて子の養生をして、外治藥をつくすうちにも、母親の心やるせなし、殺せしは我等が科、楊枝をもたせましたるによりて、今かゝるうき目をも見、又はかつて知らぬ事ながら、妬き工にて致せしなどゝうたがはれまいらせて、今は何程詞をつくしても、我誠は死るより外は有るまじ、兎角生きて居るにこそ思ひつめて候と、泪ながらくどきかこてば、おりんひたすら聞きいれず、よしなき御詞やな、人の子をころしてさへ死なんとの給ふ、まして眞實かわゆき子にをくれて、殘りとゞまるべしや、子親ともに死したらば、そなたには隨分存命給ひ新太樣とそひはてゝ、御滿足にこそ有らめとくるひ出れば、太夫もとしばしと留め、成るほど御尤にこそ候へ、さりながら此儀は、奥樣にも曾て御存知なき上の怪我、もとより妬ましき心はつゆいさゝかもなき印に、死にはてゝ言ひ分けせんとの御事、是にて誠に知れ申したり、新太樣の奥樣と覺しめす一念の根がこなたに殘る故、うたがはしくの給ふ事無理とは申されねども、心の外なるあやまち、此所はわたくしよきやうに御斷り申して御兩人のすくひ申さん、先づひらに

と止むれども、兩方ともに聞きいるゝけしきもなく、只死なん〳〵と狂ひ出れば、太夫元もせんかたなく、是はやあまりなる御事や、いかなおろかなる女性の心成り共、すこしは人の了簡も聞き入れ給へ、おもひつめて死ぬる事は誰とてもやすき御事、たゞ跡に立つ名こそ恥かしく候へ、御二人今死に給はゞ、世上に取沙汰悪敷、いとおしく思召新太様の御名も立ち申さん、それにも構ひ給はぬ御事にや、我等が所作には何事にても替りたる事さへあれば、頓て狂言に作りなし候、しかれば此事もはや近日よりとり繕ひ、みな様の御名をも顯し、ものゝ見事に三番續きに致し申さんか、何と其名ははづかしとおぼしめされずやといへば、それは悲しき事、さりとてはなき跡にて左様にはしたまひそ、情なき事共やと手を合せわび事すれば、それが恥とおぼしめさば、聞き分けて狂言にも致まじ、此替りに又我等が申すごとく、御兩人の思ひつめ給ふ事とゞまり給はゞ、せつしやめが大悦此事に候、たゞし御聞分けなくば最前の通り、なき跡の名を舞臺にてひろめ申さんと、よぎなき断りにをれて、さすが死ぬる事もならず、生きてのうきおもひ、是はそも何の因果ぞやと、座をたゝきて泣き悲しむ内、妙薬のしるし忽に胸のいたみ即座にやみ、氣やうやうつきてかほのいろ脉かすかにうち出、もはや別儀はあるまじとよろこび、やれめでたしそれ〳〵と、乗物しづかにかへるころ、たそがれの人だちもなく、ひそかにおくりかへしぬ、

〇これは一かどの御禮

鹽竽笄にさして、仲丸が蒼海原ふりさけ見ればと讀みし月の夜は珊瑚珠取よし、伽羅は天竺川の流れによるをひらいて、三年壺にこむれば油浮きて上々となる、その外唐より渡り來る物、ひとつとして寶ならぬはなし、是をかはんとて新長者松が枝や福右衛門、住所は河内の百姓ながら賣買萬とみぬ、そも〳〵此家かく迄繁昌の風情、先祖の福右衛門大坂茶臼山落城の三日過て、草分衣すそぬれてこゝかしこと見廻る所に、石上ふるかね買に星甲ひとつ、ふしぎに鳥目三百文求めしが、あまりに泥土の付し故か、重きもよしなしと洗せて見るにむくの金也、年ごろたふとみ奉る聖空上人の佛力、又はつね〴〵辨天あしからず守りしゆへかと、いよ〳〵信心わたくしなきにや、金

が產む金銀米錢織物藏に充滿して、犂にまかす牛馬も人なしにまはり、何かに付けてくらからず、あかり窓あけさせて取うりが許より持て來し、枝珊瑚七寶のひとつと祝ひ、二十五兩にうり手形相濟させ、今迄是式の道具もたぬ事の愚や、如何なる公卿大名がたへも、筆架に御望あらば百五拾兩のかごちびたるもさらぬ抔、かき繪して大黑いはふ時節、所々數寄者九抛壽才老御出の由、路次より御入を悅び、そこらきよらに臾ため、三島の茶はんに物して後、かゝる重寶もとめし始を語りて見するに、壽才老顏つきよからぬに、いかゞ心もとなしと目利たのむに、少しは言ひ兼ながら、あまり切に問はれて、是はこれかるいしを紅にして、ゐんでんの裏皮にて琢し物よ、疾に某に御相談あらば買はせ申間敷に、あたら小判御笑止さよとありしにさはぎて、賣主の旅宿吟味さするに、一昨日の朝金を請取ると直に、京へとやらん長崎とやらん登られしと返事に、力盡き肝煎うらめど戻らぬすゑの露、秋雨の雫合羽にふせぎて、井澤驚夕といへる藪醫、魂まつるたそがれ小聲に成りて、何とも此盆前拵へ藥屋の代に手前つまらず、外のよき鏞鐐の中つき、

その目方二十匁ありしに、鳥目六貫文借たき由、つねづねの御心入にて、さぞ〴〵くるしかるらんと、二ことと聞かずに借してやり、此上ながら少々の御用はうけ給らんと賴もしき盃事して返しぬ、是も上々の錫を酢につけて、紫の絹にてみがく物とや、雪は馬蹄七寸につもりし朝、絹衣に輪袈裟かけて木魚殊勝に、ちと賴みませう、四國邊路のつかひ錢に迷惑仕候、かわりに輕重はこのまぬと南無佛の舍利一粒、いやしからぬ香箱に入れてさし出す、この僧から六十餘の脫天窓、釋迦の高座一寸もさらぬまじき顏色、眉毛の霜にふるひ〳〵白銀拾五匁麥三斗まいらせしに、是程はいらぬとあれども是非々々といへば、しからばいたゞきまする、近々に下向致しめづらしき土產進じませうと別れてかへる、瞬づたひふまれな道の蝸牛、女うしの角にて作りし舍利、韋駄天賴まぬ雲のあし風筋の立を、小濱の弟が方より飛脚下して買込七萬石丁銀渡して、二日目春より長閑に大まはしの舟をやらん〳〵を諷ひ木魅に驚きぬ、此度の大損かぞゆるに所なし、女房下々さま〴〵異見して、やはり今までの如く、しつけたる木綿商ひ又は百姓の所作ば

かりして、大金まふける事ふつ〳〵とまらしやれどいへども、馬の耳に風が替り、雨は八日の影見せず、きのふの植付け不殘洪水のために流しぬ、する程の事せぬ程の事皆人の物になりて、三年目の夏五月所もあはうの沙汰、聞きにくうや有りけん、多くの者共に涙の別れして、少しの便に京の東なる所に、五匁三分の棚かりて奈良機の筬あり、萬種有りと讀みにくき書付出して、うらは夕顔なたまめ咲みだれて蚊遣火いぶせく、塵もすてぬやうに心はかはりぬ、是が三年前に出れば、芝居の太鼓もきかず、六條のお國煎餅に錢つかわぬと日記ものする間屋、硯箱の鍵の穴から世間のぞく氣にも、晝寢はむかしのやまず、根來の中かさに三つ冷でやりて高鼾の音に、むかひ三軒兩隣、うら屋〳〵の鳥蠅牛蠅只の蠅、門口に市なして入れかへ摑かへ舐る舌氣味わろきに、うつゝさめて此大師講めは何迄居る事ぞ、口鼻暦見よとて言ひ寢入りの自墮落さ、枕蚊帳中々とおこされ、よさりはこちの福太郎が觀音講とやら、しやけなならちやでもせうか大豆もなし、其は外聞づくの事、まめかうて來てやろか、此暑さ蟬さへなかずむしくる晝過、吹く風砂をまきてから〳〵するに、角はちびて中ばかになりし下駄膝ぶしまで付、淺黄の一色木綿、去年もかゝしにかしぬる編笠阿彌陀に着て、何入てふくらかす馬皮の巾着前に見せかけて、三條大宮東側より上々の黑大豆一升は何程しますする、それではたかう御座る、いくら〳〵とうれぬやうにつけて、しからばちと見せさしやれ、宿へかへりて相談してかいに來しませう、かたじけなふ御ざると、一軒々々で角して行くままに、松原通にて大きなるさいふにけならぬ事、此うれしさ家にかへりて見するに、大小の有るを不審すれば、其はおぬしたちが知る事にあらず、此はなを手本にして物買ひめされ、何と〳〵薪がないとや、けふの次手に智惠めぐらさふ物を、あたら櫻のちりつかば錢にならぬか、くろぬしがいひし春の山人、東柴いりませぬか、買ふとあせかへして理屈づめのいさかひ、腹立ていぬる跡の木の葉、福太も聞ておけ箒もてこい、わらの能のは錢さしゝて袴を貰ふ、あぶら賣どのつりが御座るが、少しばかりは福太小判くせ、相場は何程しますぞ、それ程つりは御座りませぬ、しからば明日取りにござれ、かへてやりませう、鹽一升が

九文とや、つりがござるか、あす濟しませう、角して二年も過て、夕部の雨に松笠を拾ひ、朝の風に麥の穗を選り、やがて普請するとて壁下地の竹も背戸にうへて、わらび繩も細工になう程長うひろがる身躰、銀箱五つ常住持て、間口のよき家三軒つゝくり、ふしんの釘鰯一疋親子三人くふ、くわねばならぬ世の中、是がかちとぞ申しける、

世の是沙汰卷之四終

世の是沙汰卷之五

〇井澤鷺夕が盆前の謀

此中の捨子が聲も聞えず、何としたりやと松ともし見れば、可愛や右の指を口に入れて艶々寐入りたり、たま〳〵のまどろみして、親に添寢の夢や見るらん、と、服紗物そと除けたるに、鼻筋とをり中高に愛敬ありて、然もおとこの子捨る親の心、猶哀れなり、練粉地黃煎融うちに、相國寺の追出しより東雲しらけわたり、門ゆく川の水の湯氣霜柱たちて寒きあした、変衫兜綿の袷上着にして、小紋の畏帶丸腰にはや道提げたる男、此の子を見て所望しければ、幸の事ながらそなたの住所御名は何と申すやらん、われことは下高瀬川松原に、飛揚りの六兵衛とて人も知りたる者也、隨分いたはり養育し侍らん迚懷に抱き家にかへり、年月生長あげ、漸々小使のやくにもたつころになれば、才覺人に勝れ、暖簾看板の書付け讀む知恵もつき、豆腐も鳶にかけられず、十一の春より藝を仕込、金胎兩部の十六拍子をふみわけ、道なき山の水あげ

より、花井香之介とほのめかし、山田の杉舞臺、中の地藏の追出し、かはる名の所々難波にあしをふみとゞめ、元服しては藤岡屋金右衛門といひて、石四拾手の請前、山の炭のなをし酒、利は算用の外、方々の掛たふれ極々ふづまりにして、三年もたゝず百五拾兩、師走の廿九日おしつまりてちやん一文もなし、爰はひとつ分別所と、肴一二種料理すまして、五斗樽に呑口さして、其身は一間たて籠りふし居たり、すは大としの夜に成て、掛乞四十餘人居間にならび居り、算盤まくら柱にもたれ、床机に腰打かけ夜明るともかへらぬ氣色也、年の餘波も一入寒く、世間の音も漸々しづまり、眠りさましにうそ〳〵ありき見れば、肴棚あけかけたる中に、雉子の燒鳥煮海鼠のにしめ、皿鉢に入れたるを取り出し、また角をたふさぬ惡さも惡し、是喰へと一人が云ひ出せば、みな〳〵よりかゝり、爰な樽がしつかりと重し、さあ呑めとさしたのおさへたの突鼻とわめき、此やうに半散ても得言らぬ借錢もちの不便さ、少とこゝへ御出でやれ、是々金左が見へぬ、かした金左かへせと、煎銅の蓋をはやしたつれば、闇がりより前垂かぶりたる男、鼻がみ引きさきこりや何送る、金左をおくる五升樽打あけて、跡は寸切寸切やと、藥鑵鍋釜茶椀皿拍子をそろへて鳴らす程に、破やらみしやぐやらやくたいもなき所へ、金左衛門飛で出、弓矢八幡大事の重寶を損じて、もはや身躰たゝず、去りながら人々に手向ひはせぬ、切腹と脇指をぬけば皆々取り付き、尤也誤りしと侘言すれども聞き入れず、とやかうするうちに、扇は片は若夷と賣る聲とに人々先づ家にかへりぬ、元日よりの公事工あちらこちらの噯となりて、毀ひし物書立て町より問はれて、あら道具はさもあれ、代々傳はりし井戸茶碗、利休の芦屋釜、飛鳥川の茶入、其外染付け南京高麗の鉢皿及物衣類の失物、凡五百や千兩に當てゝもたらずといふを、漸々三百兩にあつかひすまし、内百五十兩負せ方に引おとし、殘金腰に付けて都にのぼり、中立賣に家を求め、沽劵古劵と請取る所十三貫五百匁、家質かりたし見かけは虛、大名にさばきても米櫃のかんこ鳥の聲、うらのとまやの秋のくれ、炭も薪もなかりけり、かくては續くべくもあらず、朝から温飩蕎麥切の店屋物、そう〳〵買いがゝりも叶はず、帶しめて火ふくちからもなし、表にものもうといふは

誰ぞと出でむかへば、旅がけと見へて大小に鞠皮したる侍、ちと尋ね申度事候、藤岡屋の金左衛門樣と申す御方は、此あたりにて候かといへば、いかにも〳〵是にて候、しからば我等主人御目にかゝりたきよし申上げられよ、いや私が其金左衛門にて候、侍飛しさり手をついて、御輿これへと蒔繪乗物ひた〳〵と舁ぎ込み、つき〴〵の女房侍中間四五十人、何事かもしらねども乗りながら奥に通し、金左衛門をよび駕の戸を開らき、打かけしたる女臈えもんうつ高く、そらだきうつるばかりによりそひて、兄さまさても御久しやと抱きつけば、一つも合點ゆかず與さめて居るを、供の女房さし心得て、打絶へての御對面物語なされ度くこそあらめと、次の間へ身退けば、彼女臈私語きて、私事此以前難波堀江にながれの身にて、よるべさだめぬものにて候を、去る御大名方に召され、御あはれみの夢とゞまりて若殿をまふけ、由緒とはれても見ぬ兩親の事、誰とさしていふべくもあらず、都にしか〴〵の兄を持て候と申せしにより、今度の京中參り、今日は北野の御緣日、局におほせ付けられ、兄に對面させよと御免しの情も、さしあたりの難儀と、こなたを頼み參りし也、誠の兄と名乘り給はゞ、人間獨りを御救ひなさるゝと申す物也、又さもなくばわが身の僞りあらはれて、いか成る目にもあい申さんと、泪せきかねて見へければ、何がさて〳〵と似合しき挨さつして、よいほどに間を合すれば、今度の御みやげとて黄金五百兩、二重雕の臺縮緬十卷、卷物時服寶の山も動き出て、夢かと目をおし拭ふばかり也、御逗留の中には、御屋敷へゆる〳〵と御出あそばし候へと、おつぼねも愛相らしく暇乞してはやおかへり、さらば〴〵と見送り、立たり居たり身を省み、扨々思ひもよらぬ仕合かな、九龍天に在る時は大人を見るに利ありと、こざしの卦躰これほどにも合ふものかは、此勢につのり龍の雲を得たるがごとく、雨つゞきの空の氣色もかはる〴〵に、難波のよしあし伊勢の濱あきなひ、津に旅居してはたかた宮かた合點づくの指折、袂の中にて千雨の金を一握りにするは此の道ぞかし、中頃より去る人の勘を付けて、茶種の花の黄ばむ頃、新茶の匂ひ香ばしき時、それより打つゞき夏米に勝負ありといへども、今は赤蜻蛉の羽風、中酉の荒もさだまらねば、二六時中屋の上にぼんでんを

立て、頭哉背の高き男が、加賀米を切て廻るはと云ふより早く、次第あがりにあがりもてゆく見きりの大事、一拍子はぐれては後さがりに成り行くまゝに、二萬石矢も楯もたまらず、京の家も賣り拂ひ辛々夜ぬけにして、東近江にしるべ有る借を賴み、衣手の田の上川とよみし、みほの山風身に引して、左は信樂石山寺勢田、柴のしもといふに袖垣まばらに庵引結び、しばしためらふ心も、すみきらぬ生れつきにて、又ゆかしき京に登り、大佛邊長刀町ふり廻しもなき三疊敷、張貫の獅子がしら、口をあいても腹ふくるゝまふけもなければ、夜ふけ人の寢入ばなに大聲をあげて、貧僧に打飯の所望とおほへいらしく通れば、衣棚御池の北爐地口の門より、是れ進上といふ聲について、光明遍照十方といふ口をおさへ、近頃御出家に御無心申しかね候へども、我は此家の者にてふと外に遊び通し、戶をしめられ入るべきやうなし、そなたの肩を踏へてとは慮外、すこしの間かして給はれ、かゝる難儀救ひ給ふも佛の慈悲、ひらに賴むと、くらまぎれよりさし出す物を先づ請取り、捻て見れば角にさはる物ひとつ、何がさて安き御用いざ召れ候へと抱き上げ、雨の肩ふまへさせ、しのびがへしの造作もなくやすやすと内に入りぬ、思ひもよらぬ一歩貰ふて雪の夜風もあたゝまり、五條の橋にさしかゝれば、眞中に大火鉢料理鍋斗樽並べたる中に、四方髮半首鎌鬚の男十四五人、踏反かへりて道に横はり、此の道心者をまねき、ものをも言はず指にて我が腹を教ゆ、何事もしれねども眼つきおそろしく、跡へも先へも進退爰に極り、すかして樣子を見るに、鍋のまはりに河豚の腸斑皮魚骨打ちらしたり、扨はこの毒にあてられたるものならん、所も多きに大道にてかゝる振舞はあまり成る事どもかな、きやつは夜盜どもにこそ、よしや死なば死次第とおもへど、さながら不便さに、先の一歩を水にせんじて呑せ腹摩りなどすれば、すこし和ぐいろめ見えて手を合せ拜むも、鬼神に横道なしとおかしき心になりて家に歸へりぬ、二三日過ぎて雨よゝ暮るゝ戶ざし時分、進物船に湯油打かけ、男二人してもて來り、御宿をたづねかね御禮延引いたし候と、庭に置きて歸へるを、こなたに何のおぼえもなし、門違ひならんこれこれと呼びもどせども聞き入れず、行がたも見へねば、不審ながらその中を見れ

ば、御樽一荷熨斗十把金子五十兩目錄の通り、菟口十五右衞門扃の才兵衞金平小次右衞門竿竹の半三行合源五郎五條大橋欄干の程よりと書いてあり、扨は前夜の禮ならんと請とりながら底氣味あしく、武州に下り絹布棚出して仕合せ風に吹ける、日本橋の富士颪白壁の藏建てならべ、大分限者と榮へたり、

○伊勢は好色のみなかみ

ながき夜を酒にあかし、短き日のうちしばらくも實事を勤むる術なき、おもしろきと否なるといづれをたとへて、何ほどゝいはんやとはいへども、人一生遊びくらす事、針を北斗につみかさぬるともそれは春の日の雪佛、如是我聞一時に滅する事薪盡き火ふくちからもなく、はて〳〵はあさましき世にあまされものとなる事、脇目よりいさめられても、異見の出やうあしきなど〻詞質をとり、或は惡敷事とは知りて居れども、身を道樂にもち來ればなど〻、かひやりすて〻誰つかはぬ戀の奴となるものあり、近曾一條堀川の西佐久間や半久と云て生れながらの阜法、衣服の着こなし身ぶりの取廻はし、少といふ詞おほからず品ありて、世に眼高く見わたして日々の遊興、閨年は三十日の有卦、是こそいはへと手を打下より、ふと目をふたぎ世を觀ずれば、古稀七十年の齡我が身その半、猶しもけふの分々段々にうつり行く無常、今呑む酒や末期の水ともしれがたし、人のしめしをうけて幻化をおどろくは、鞭影を見る馬のごとし、我と思ひつめてこそと、一座にもいふあひさつもなく、ふつと立て家にかへり一間に引こもり、淨名か一默獅子の香爐に線香のかほり、灯々煙をついてかたき事磐石のごとし、常にしたがふ末社のしんかんつどいに顏さしつどひ、おもひかねて此大盡かくのごとくこもり居給ひては、文盲の常闇ならんと、常世の國の物まねの鳥をなかしめ、定紋の指楠に白粉の看板、凸の山より天の羽々矢楊弓の絃かきならして、靑にぎての濃茶好しう、むまのやれとこ神歌あまの合羽をかけまくも、神樂をそうし銚子さかづき八百萬のさかなをたゝへ、左右のかけ聲の手つゞみ打て大盡のこもり給ふ、納戸のそばにてこれをはやしめて、人はたゞ此世にては乞食となり、來世にては根の國地獄に落るまでとおもへば、さしてこわき事有まじくこそとうたい、ものにめでゝ間の唐紙をすこし開き給

へば、面白やと手ぢからをの兩手を啞(わつ)といふて申すもおろか、天へのぼる勢に、紅毛(おらんだ)の杯中浪たふ〳〵とうけて、一座ひしやりほん醉ひつぶれ、目すり〳〵此ぢうは我家へも見舞はず、ちと折節は音信(おとづれ)も大事ない事といひつけて、はやき門のしのゝめ松原通をひがしへ行ば、因幡堂の堀水さわがしく、何事ぞと見れば、年頃四十餘の男、乳首のたれさがりて黒みがち成る女、脚布一重の丸裸にてあなたこなたへ泛(およ)ぎまはる、こりや白癡めづらしき見物、先づおぬしたちは何ゆへかくのごとくはするぞと問へば、男は一向に物をたづぬる躰にて脇目もふらず、女房泪ながら、されば我等夫婦の者は、此あたりの末社に身のほどかくす夕がほの垣根せばき所から、毎夜々々鼠のあれ候を腹たゝしく、升おとしにてとれども盡る事なく、此うへはつかはしめ給ふ大黒樣を頼み、此事をなげかましく、子の日の灯まだ宵の影なるに、いつよりもあれまさりて、大黒棚よりぼつたりと一疋おちたるを、そこ成る手拭こしにしかとおさへ、きし〳〵といはせもはてず、包みながら此堀へなげこみぬ、さて家にかへり、過し夜萬屋殿よりうけとりし前き銀五拾匁、急成る事ながら先づ大黒樣へそなへしをと、手やりてさがせども、なし、南無三寶さては鼠めがあれておとせしその銀を、あやまりて捨てしにこそ、おさへたる時きし〳〵といひしは、細かねのすれあふてなりしにこそあるらめと、穿鑿も入らぬ事やれ先づたづねよと、かやうに身をもがけども、水底の泥ふかくいまだにたづねあたらずと、おろかなる事ながらあはれにきゝなされて、是ほどのわづか成る銀に、不便なる事を見聞くもの哉と、一歩一個とらせ、これを思ふに此ひとつの物こそ大事の上の調法、命の役にたつは我命、おもひつめては捨つる事ちやん一文よりやすし、金はつまりての手柄わざに叶はずと、さとりの眼に醉さめて、我家の内の朝飯いつよりも猶うまかりし、

世の是沙汰巻之五終

世にあらゆるおもしろき事、氣味のよき事、あはれなる事、かしこい事、鈍な事、うつくしき事、むさい事、此頃の取沙汰五冊、

寶永三年戌三月吉日

西樂書

京極通書林

神原利兵衛

萬木治兵衛

板

今様二十四孝序

郭巨が子を埋む無分別、老萊子がよいとしゝてのあいだれ、是孝行とはがてんまいらず、爰になきさまある係を、文盲に綺語をついやしかける所の六冊、ものしつた人の目からは、是もほんの事にあるまじ、さはいへ規によつて直なるをしり、縄を引てまがれるをたゞす、只人の機嫌をとるわらひぐさとて、書林が袖にして行く、いやといへどきかず、そんなら表紙のうへに、今様廿四孝といはゞいへかし、

北京散人月尋堂

今様二十四孝目録

目録終

今樣二十四孝卷之一

(一)世の人の鏡山

花に富み月に榮へる日の本や、もとたつ道の敷島、秋の田の御製に、倚廬のかなしびを民におよぼし、たらちねのなでずやと黑髮をなげきし、よしみねの少將が後の係、人の子たるもの丶をしるゑ、かしこき此國の孝帝孝臣かぞふるに盡ず、されば老にしたがへる子と書て孝とよましむ、又反哺兒といへるは鳥の事なり、ちいさき時親鳥に食を口から口へくゝめられし ゆへ、老て親鳥、みづから食を求め兼ぬるを子鳥があさりきたりて、昔の如くくゝめ食しむ、さあれば人の親を養ふ事ありべかゝりにて、さのみ孝行とは云ひ難し、何とぞ父母の心を安んじ、怒りを見ずうれへを聞せず、惡をかくし善をあらはす、其しなにしたがひて、とかくあつかふを孝とぞいはめ、是成りがたくしてつかへやすく、つかへやすくしておこなひがたし、我人の道にして鳥ほどの恩をも報じ難きは、世の人の常ぞかし、唐には、父の首を切し孝行もあり、母を

わたせし不孝もあり、道は人に別れて一つを擧ては論じ難し、爰にさゞなみや志賀の花ぞの、昔にさかへる國の守の執權、鏡山光右衛門は感狀れき〳〵の侍、殿にも筋めあつて千石の身上、誠に神の位といわめ、惣領數馬に迎へし娌は、同じ家中の弓大將、矢崎外記娘にて勝れたる美形、一とゝせ石山寺の開帳の時、内陣入の折柄近く顔と顔を見合、數馬美男當世風のあわせびん、角のとれたる風ぞくにくからず、互に是を戀の初めとして、しよしんるいの取持、大守へも御上聞に達し世間外聞を取繕ひ、さつそく祝言して鴛鴦比目の契り淺からず、年月の長枕ならべ、過越し秋の末より妻女ふしなやみて、ちりの鏡に面瘦せをはぢらい、次第に元氣衰へ針藥の驗し徒に、おしや廿三歳梅の花さへ未だ見ぬ枝に、ひよくの鳥の翼を離て、十二月廿六日の夜の雪、春より先に消し命哀れや、世上は來る年の仕度賑はゝしきに、此宿は餅もつかず煤も掃かず、野邊の送りの營み、あだしが原に現をはこび、時の間の煙と立のぼる、跡はちり灰も殘らず、骨佛は拾ひかへれど物いはず笑はず、おもかげは其儘最後の合掌、念佛より外にとゞく物なしと、いかな武士でも夫婦の恩愛、はれがたき戀慕の涙、袖はみづうみの小夜千鳥、鳴音も常より心にしみて、魂は自づから鳥籠の山を離れず、瀬田の長橋いつめぐり逢ふべき、陽生即忘の思ひ、夢に夢見て俤忘れ難く、春をしる鳥の囀り、さりとは耳に入ず、かほれる花も常ならぬ世によそへて見れば、更に月とも闇ともわきまへなく、後々は身の勤めを欠き人にも交らず、世捨心になりぬ、しよ親類の氣の毒、親光右衛門見るにうたてく、左程に思ひくつほれては、却て無き人の菩提の爲にもならず、りんゑごうゐん、迷はぬ人を迷はす道理を異見し、年若ければ是非後妻を迎へて、昔にまさる閨の花、如何なる美女の有まじき物にもあらず、相應の緣を聞たてんと、有程の言葉を親一門申盡さると雖も、兎角に數馬大きな形をして貝をつくり、涙のはな紙袂にあふれて、寢食節を失ふ、さりとは不孝と申べしや、妻女のなげきはさる事なれど、かく迄親に氣遣をかくる事、愚痴文盲の至りぞかし、或時數馬おもての物見に出て、格子より立聞に、次弟に聲高くのゝしる樣子は、家來半内が親半右衛門來りて申けるは、度々半内わが方へごうりよくする事、嬉しうは

あれど近頃合點ゆかず、よく〳〵其方がきりふの勘定をして見るに、身のまはりのこしらへに足るか足らぬ程の、わづかの奉公人なり、二百三百の錢さへ不思議にようはくれると思ふに、此度金子五兩のごうりよく、其方が此金子の出所が呑込れず、口惜や貧しき親をもちける故、盗をひろいだか、若は又爰の旦那殿は、一國のしをきしやなれば、其威光をかりて町人百姓をねめまはし、賄まいないをしてやつたか、此二つより外に、耳を揃へた小判が手へいらふ様なし、そんな金ならば土へかぶり付とても、それはいやじやぞゑ、尤もをのれが母分の者、なが〳〵亂氣にて養生するにしるしなく、次第にないせうせまつて、腹がわりの妹めは、石部の宿の出女にうつてやり、其次のぼうずめはふだい手がたして、やぶ醫者の所へ二朱ひとつ取て、しぬるまでの奉公人、是まつたくふびん淺きにあらず、手を取くんで餓死なんよりはと、思ひ切て捨つる藪、身は貧なれど心は淸い、此親が首にたとへ繩がかゝるとても、子ゆへなればいとはねど、をのれが老先かゝへた若いやつが、ふびんさにいふ事じや、此小判の出所を有體にぬかせい、いひをらぬ内は千日でも爰に居て、詮議しさほさねばゐぬる事じやないぞ、まことに云ひをらぬと、旦那殿へ訴へて御吟味を願ふぞと、血限になつてぞわめきける、半内、親父様、其様に聲高ふおつしやれいでもすむ事でござる、朝夕の煙をたて兼さつしやる、病人はかゝへてござる、春も未だ寒いに、ときわけ一枚でふるふてござる、其形を見ましては子として親の爲に、盗もせまい物でござらねど、全く盗は致さぬ、少しもお氣遣な金子にあらず、あられぬ氣遣いをなされずと、をしはなして其金子をお遣いなされよ、まづ古手にても早く調へて、夜の寒さをお凌ぎ下さるべしと云へども、親父頭を振て、とかくに出所をいへ、其譯を聞かぬ内は如何にも志は嬉しけれど、遣ふ事じやないとせりかけられて、半内譯を申さずば親の氣遣い、さるにても氣の毒や耻かしや、様子と申て別儀でもござらぬ、これの若旦那の御妹ごかしく様と申て、廿五歳に成らせ給ふ今年まで嫁入もなされず、一代おばさま分にて御暮しなさるゝ、あれ程の惡女世に又と有らふか、其見にくさ古のはん額によも、よもかしあゝは有まじ、お笑なさるゝ顔が餘の人の腹立るよりは、まそつ

とすごし、其に耻かしながら、心をかけましたと申上けるに、〳〵樣おぬしの身ながら、我緣遠くかく迄一人身に暮す女を、慕ひくるゝ心は嬉しけれど、男のいかにも浮氣にて、かりそめに女をたらす事世にあるためし、まこと我に心あらば指を切れと仰られし故、さつそく切てあげけるに、扨もそちは可愛き者とて、御ねまきに金子を添て下されける、其小判すぐに送り申たり、是親の爲に指の切賣まつたく〳〵樣に心は無れども、惡女のくせに色ぶかく、男を見てはびろ〳〵とし給ふ、其お心入をおしはかり、何とぞれんぼにもてなし金子を貰い、いづれもへ御ごうりよく申たく、誠に世に云ふ男傾城のしはざ、親子の中にて語るも申も耻かしけれど、譯を云ねば理が聞へずと、言葉の内より袖をおほひ、涙の玉のかず〳〵、面の皮に火をたきてぞ語ける、數馬一々是を聞て、扨も半内が孝行、我身にくらべては耻かしくも勿躰なや、我美なる妻女のわかれに、かく迄身を取亂し親に氣遣いをかけ、いくせの思ひをさせます事大不孝なり、愚痴の至り、半内下々と云ながら孝行深き心から、心にもなき戀慕を以て、金子を才覺して親をはごくむ、是形は賤しくて心は貴しと、半内親子を居間の座敷へ通し、親光右衛門にも樣子くはしく語りて、すぐに半內を我が妹婿となし、半右衛門夫婦をも家敷の内にてはごくみ、其身ものちの妻を迎へ、光右衛門へ孝行の有限りを盡し、子孫繁昌して長く世の人の、鏡山の家ぞめでたし、

（二）布施に引くしやみせん

駒の情は春くれば風にいばい、狗は秋に淫欲を起すといへり、まして人の心の美風艶姿になづむ事、賢い人は智慧だけのはまりあり、虛は虛のしすごし、半粋も更なり、とかく士農工商坊主も神職も、色に逢てはらつちもなふ身を棒にふる事、しかる人もしからるる人も、心底においては變らず、世のあらましいふに語るに、此うまき事外に似た樂もあらず、すつる命を塵とも思はず、のがるゝ世の露草に起き、木かげに寢て、月に昔のしのぶ夜をかこち、あつて過ざたる時鳥にくぜつのはらみ句、樂なる身は今の墨染、またるゝ者なし、しからるゝ人もたず、法師は木の股から生れた樣に、色事通せぬと思ふもおかしや、我等今迄の惡性、申さば口びるもちびなん、書かばうつばりにみち

ん、仕舞て見たあとは空々、じやくは金銀、是なふてするは阿房のうわもり、あつてせぬやつはにげなや、かいしきのき木像繪像にもむかはず、浮世を足の思ひ出に、杖笠首にかけし、油單にきせるを忘れず、朝日見ぬ内の一服、煙を物ずきにふきなし、暮近き野鳥のねぐら、ひとりは寢じとあらそふ、鷺も烏もしやらくさやと、やれ草鞋にきびす小石にあたるも、するごながらに道いそぐ姿、繪に書いた樣にあろと、こぬか雨に袖かざして行、しだいにぼろつきて此ごろもよほせし空のけはひ、是は本雨に成けるよとたゝずむ軒の蔀門、しほらしうは見へながら、荒たる壁に、ゑびねかづらの我儘にはびこり、おそくちる銀杏の黄葉、秋の半をだまり顔なるもよしなく、薄に萩に菊もまじりて、をくれありはや咲きありて、それよこれよとわが庭の草むらを押分け、主がましきをんな、半びらきの花ぶさ一枝二枝手折て、内へ入さまに見つけて、旅のぼん樣さいわゐ雨も降なり、お宿と申もおかしけれど、お茶一つまいれと云ふこそ世の情、うれしく內へ入れば、外から見しよりは猶物侘しき、宿のあるじ、さい前の女の子と見えて廿歳ばかりの座頭、三味線の糸ついで居たりしが、御出家樣是へ〳〵と、さぐり出てあいさつする內に、おふくろ何やら、くめんに行かるゝ體を見るより、是申し、少もお心遣ひはむやく、今の先したくも致したれば、あすの朝迄は、ものたべ申すふくあいにあらず、我を招き入れられしは、定めて御志の台夜にてがなあるべし、亡者の戒名を仰られよ、御回向申べしと申せば、座頭、成程母人招じ申されしは、御出家に賴み上る事のあつての故なり、しかし未來の供養にあらず、御苦勞ながら現世祈禱の爲に、かげ淸だらにのくわんをんぎやうを、御讀下さるべしとのぞみける故、ふしんながらだらにぼんを讀經申せば、座頭は後に立てたる琵琶をとつて、平家をこそ彈じける、互にいとなみをはれば、八つ手の葉に蕎麥のねり餅、妻木の折箸をそへて、はづかしきもてなしと淚にゑしやくして、母人もりかへけるこそ、わびしながらの風流昔床しく、扨もあはれなり、其後お布施を引申べき事なれど、御覽の通りのをちぶれてあぐべき物もなし、され共御讀經の御布施申さぬ事罪深し、さらば御布施にせつしや、今樣の三味線を引てお聞け申さんとて、さい前糸つぎた

るからくわの三味線、細棹のねじめ豐かに三すぢを合せ、昔聞にし籠の鳥、しなざやむまい世にあるならひ、なげぶし長歌はで本手、聞くに色ありあはれあつて、都の小野川あづまの淺利粂にうつゝの姿、天人も雲のはしよりのぞかるべく、面白う感じて後、扨々聞きごさなるしやみせん、ほむるに言語も絶えたり、それよりは猶尋ねたきは、現世御きさうの御經はあまたあるべきに、施主よりの御望みだらには、惡七兵衛景清が、牢の內にて夢想に授かりし御經なり、此くりきによつて、牢を踏破て出しと申傳へて、もつさもくごく無量の御經、是をこの御所望、殊に最前語られし平家も、景清清水詣の所也、かれこれいぶかしき御心入、御有樣につけても樣子ふしんなれば、有體に御語あれと申にぞ、母子共に涙を流し、御不審尤なり、旅人ながら法の師に、深く包むべき事にも非ず、元來私父は、備前長田家の侍、小島浪右衛門と申せしが、不慮に浪人致し、神島に引込みまかりし內に、貯へし金銀なく成るのみか、せつしや眼を煩ひ、ふた親ふびん深く、養生手を盡さるゝといへ共、いかなる業因緣にや、かく月日の光を失ひ、いつくしみ深き父母の御姿さへ拜み得ず、此不孝の罪天もおそろしきに、我に隱して妹を下の關の傾城に賣てやり給ひ、其價にて此身の療治をなされ下されし由、遙か後にうけ給り、誠に片輪成る子は猶ふびん深き親の慈悲、かへつて冥加に盡し業病、これも因果それも業よさ、何事もあきらめ給ひし折から、妹ははつえと云へるが、傾城の內にふかく男とちなみ、主人の家を欠落して行衛しらず、とかくに親の許へは一度はたよるべきさ、所の守護に願を申して、父浪右衛門を、妹はつえがいづる迄の過代とて、三年此かたの牢舍、さるにても二人持給ひし子供に、是程迄に苦勞をなさるゝ事、又世に有まじき不孝ものどもなり、はつえ隣國の噂にても聞なば、親のらうくつを助けに、まかり出づべきものなるが、定て遠國へ立のき、是程親の御難儀とは、知らぬ物さ見へたり、我旨目さ成し故妹を傾城に沈め、傾城に成たればこそ欠落もいたしたれ、其行衛知れぬ故に父牢舍をいたされぬ、いづれも其初めは此つちめくらめがさがなりと、五體を投げて泣沈み、せめての事に妹が出づる樣にと諸天善神に祈れど、罪ある此の身の願ひ故か、更に納受ましまさず、三年が間のらうく

つ何卒父を助けたく、師の房より習受けしきこうの平家を、三七日じゆし申し今晩けち願の所に、幸旅僧の雨やどり、嬉しく招き入れて御經を頼みあげしに、事なく轉讀有がたし、御苦勞なりと始終をかたる時、たび僧手を打つて、扨々さあるよな、我耻かしながら其はつえと、ちなみ深くいひかはせし唐琴爪之丞といへる素浪人、はじめは武具馬具をしろなして、いなり町に通ひしが、後は萬ふづまりなる事にしくさし、せかれてはつえに逢ふ事かなはず、此上はと心を合せ、命にかけて盗み出し、東國へ一度をもむきしに、世になさけなきは去年の霜月、はつえはこがらしのあした、風の心地といひしが、遂に其月の廿七日に空しく成ぬ、此時のかなしさつらさ、共に消えなん命と覺悟極めけれど、一度流れに沈みし女の罪、未來もたれかはとふべきと、惜からぬ命をながらへ、かく姿を墨染に、なせしたもとは涙の川、身も流すべくぞなげきける、扨をの〳〵の御事、心に掛らぬには有ねど、世を狹ふせし身の上、尋ね參る事も憚りあつて、やうやう今は此姿、何とぞ世の噂もきかばや、浪右衛門殿の御事も覺束なく、此頃此近ざいを徘徊仕りしなり、扨も浪右衛門殿の御苦勞、何れもの歎き、聞も申も涙の外にあらず、とかく科人は拙者なれば、まかり出で兎にも角にも成はて、浪右衛門殿を助け申さん、はやお暇といふ時、浪右衛門出牢して家に歸り、いづれもさめぬ夢ならず、是は眞か幻かと、浪右衛門に取つき樣子を聞くに、はつえおやかたのくつわ、しせんと心やはらぎ、兎角是れは命なきはつえが行衛、知れずば知れぬ分よ、親を三年の牢舍、これにて腹ゐせとの願を守護所へ申すうへは、浪右衛門一ぶんに勿論科あらねば、早速御ゆるされてまかり歸りし樣子、爪之丞が出家のおもむき、はつえが最後のあらまし聞いて又涙、云ふにもなげき、兄座頭のぼうがこう〳〵の平家、天網受有て、くつわが心を和げさせ給ひぬ、是隱德のめぐみ、いかでまことのいのり、佛神に通ずまじきや、此上は浪右衛門夫婦も剃髮して、四人同じく住をこなふ、これもそれも假の宿、夢さき川の松陰に、古きいほりは今ものこりぬ、

(三)豚に知れぬ繼母の心

もがみ川いなぶねのかぶり〳〵、手打あわゝのはじめより、父の敎嚴に家を治め、身を立國天下のうつは

者どもなれるは、其人の心ざしにもよれり、女は蠅のとまつた樣な三ところ結ひの頭、水引のほそ元結かかりかぬる總角、のびてくらべしした形、見よげに見ゆるも母のいく世の苦勞、朝から晩までいふても盡ぬは親の恩、是を何とも思はぬ者は、どうでよい事のあらふ筈はなし、せめて身の爲となりと世間外聞になりと、親を養ふ人の天のめぐみにかなふたること、數盡ぬ濱の眞砂に貝拾ふ袖のうら、昔西行上人の、波にあらへる櫻とながめしも、今はとつと町中に成りて、其名も酒田と呼び替へて北國の美産の津、八木眞綿べにの花、青苧干鮭練の子、其問丸軒たかく藏をならべ、上方の商人爰に入込み、取分け春夏の繁昌、申さば長崎の俤ぞかし、爰に伊東淵庵といへる町醫者、妻女にをくれて後、一子介抱の爲、世帶人なくては萬取しまらぬ事多し、とかくいやといはるゝ淵庵に勸めて、にあはしき後妻を入けるに、程なく是にも男子をもうけて、成人の後は徳右衛門といへり、兄は不玉とて箕裘のいしやを勤め、療治もよほどはたらきて、やぶにこうのもの手柄多く、父淵庵の悦び限りなし、されど繼母の習ひ、いかにもすなほに仕ふまつ

る不玉を憎み、實子徳右衛門に金銀をあてがい、此津の商人に仕立給へと、度々淵庵に口のすうなる程申さるれど、淵庵如何にも〳〵と斗りにて、徳右衛門がかたづく先がみえず、繼母の惡心日毎に募りて、繼子をとつてたほす分別、人の人たる道には有まじき事ぞかし、徳右衛門是を氣の毒に思ひ、母人へ御異見申せば、りこうらしう物をいふ樣に成しは、誰が陰でおじやるぞと、たつた一口に言ひ消されて、兄ながら腹がわりなれば、不玉手前別して我心恥かしく、とかく是はわれを母のにくみたまひ、兄貴をいとしがらるる樣に、持て參り樣の有べしと、寢ても覺めても此事にしあんして、母のいさゝか申さるゝ事に百層倍の口答、問屋町で阿房つくしてよごれし下帶、母にあらふて給はれと、下女を差置きて御無心申、灸とすへらるれば背の火で煙草をのみ、雨が降ればおさらいの神鳴の眞似して、板じきを轟かせてつかへをあがらせ、すいてうたるゝ、一文二文のよみがるたの相手に來る、をなご共の尻をつめつていやがらせ、場をさまし、人の中で、こなたも若い時から、まおとこ幾人さつしやつたと顔に火をたかせ、よその葬禮に行ては、

今度はこちの母者人の番じやと、たしかにことわり、其外あらゆる不孝もおろかや、衣食寢寤につけても、隨分母の心にさからへば、なんぼ可愛がらふと思ふても、憎てにうとましくなつて、繼子の不玉が孝行、一倍心にたんのふして、さるにてもいとしきは兄よと、うつてかはりに成ける、父淵庵德右衞門が母への不孝、さるにても我子ながら例なき惡人、打て捨んとは思へど、流石恩愛にて許し置けば、愈々母を樣々欺きせたげつめる故、母は是より病氣づきて、其の症いかに定め難く、六脉いたづらに工夫をついやす、淵庵父子匙を投げて、其衆方愚案に及ばず、かれ是酒田中の醫者を招けど、いづれも此脉ていにては其症しれがたく、不適の藥にて病人次第に氣血衰へ、さあむづかしいは本復十に一つと、眉をひそめぬ術子もなし、さるにても醫家にして是耻辱のすくなきに非ず、此時德右衞門本心を以て、我つくつて不孝を盡せしも、母の惡をふせがん爲なり、それを親の慈悲にて、眞の惡人と思召すから御いたはりとならせ、しかも病症知れざるこそうとましけれ、まとに孝心によつて其病をさぐるに、知れずと云事あらじと、母人の大便をなめ、食ふて見るに、其味甘く滑なり、是脾のうれへくるしむ病なりと、兄不玉に申して、補中益氣湯を與ふるに忽ち心よし、猶德右衞門、母の大便小便を其度々に味ひて、藥をかげんさせて、とう／＼三十日ぶりに、母人鬼とも組合ふ程に本復して、德右衞門が不孝の孝行を感じ入、いよ／＼繼子本の子の分ちもなくいつくしみ深く、淺からぬ世の語り草、後には國守の耳に達し、淵庵夫婦にはつら扶持を下され、不玉は百石に召出され、德右衞門には新田五十町下され、有難き此國の人のをしゑ、ならはでつとむる聖人もこんな者成るべし、

（四）樒は敵打刀

妾と菅笠は新しきがよし、錫と下人は、少しにても古きがよしとはいへ共、其得失は物にあり人にあつて、極めていふも琴柱ににかわ、舟につるぎの治まれる御代、豐浦の城主神南備兵部大輔どの（ママ）は、文武を左右にしてしかも情にあまり、風流に富みさせ給ひぬ、一年こまの清水の青葉かげ、夏なき涼しさ、爰よと御すゞみの下屋敷しつらわせられて、明けやすき夜の御とぎには、竹原ちよの助といへる美少年、過し十五

歳より御寐間をけがし、當年廿一歳まで袖さへ御ゆるしなければ、丸額にてかはらず出頭して、恐ながら殿様に手を合させませせし事度々、後日の證據に御墨附を取置きける、斯る御じあい、さりとは姿を奉公の種にして、親類のひかり、みちればかくる天地のならひ、ちよの助親萬右衛門、日頃一ぶんの武藝を自慢して、傍輩のつき合よからず、此度も城下より爰に御供仕りて、萬相役へもいひ合せなく、我ものぶりにさばきける、諸人これをうとむといへ共、社の狐、城の鼠、憎けれ共當代のはきゝ、げには身をひくから、手をさす侍もなし、とかく憎い者はながふ見よと、人にさせてはらいるがてん、のいてとほするが今の世ぞかし、爰に石井室右衛門とて御使者役の男、十津川へ御用について罷越て歸けるに、御下屋敷に御入のよし家老しゆさしづに依て、御へんじの趣を申あげん爲に、しみづ屋形に伺候して右の様子を申上るに、殿様ぢきにきこし召さるべきの間、室右衛門御前へ參れのの由にて、まかり出けるあとにて、萬右衛門室右衛門が刀をとつて見て、扨々是は重き事かな定めて新身成べし、室右がからだには餘程あまるべき指料、猫の干鮭にことならず、惣じて御使者役を勤むる者は、武へんはニだん、尾張風のなまりをならひて、なが口上を忘れぬ様に申して聞いて戻り、あたまを仕事にして顔をさつぱりとし、あらはぬ衣類をきれば役目がざつと濟事ぞや、然ればかたなは木でも竹でも、輕いが身の爲によいはづ、拔く事もない此刀、重きはいかひ大儀な事と、さいぜん御前にて、つゞけてひつかけられたる大盃が云はすか、扨も憎い云分、聞いては堪忍ならずと、小便に立ちし角之丞といふ男も、腕をさすりける所に、室右衛門廊下まで罷立しが、我刀の噂と聞くより、立ちとまりてとくと様子聞届け、もはやゆるされぬ所と分別して、おさまつて萬右衛門そばへより我刀をさいて、是萬右衛門殿、ちいさい男が重い刀で、御自分を切殺すを試み給へと、拔きはなちてうちつくるを、萬右衛門も、心得たりと室右衛門に切付る、互に相打にして數ヶ所にて、兩人ともに相はてける、いづれも騒げどすくひがたく、此をもむき申上るに、殿様、とかく兩人打死の事なれば、倖共いしゆは殘るまじ、ちよの助は此御屋敷にゐれば早速かけ付、兩人相打の死骸を見屆、申分無レ之の趣口上書仕る、

室右衛門一子室之進、十三歳御城下にまかりあるを、いそぎ呼に遣はすに來りける、道にて樣子詳しく聞て、召連し下人に槍を持せてけんくわの塲へ來り、兩人の死骸切結びし品、打太刀受太刀の樣子こまかに見屆て、相打の上はいひ分なし、しかし萬右衛門が此うちつけにて、父室右衛門ひるみたると見へて、顏色に無念の勢見えけるとて、下人に持せし槍にて、萬右衛門が切込し刀をたゝきのけゝる時、ふしぎや室右衛門が眼少し見開きて、につこりとわらひて、死顏の怒りをなをして麗しきおもざし、さりとは武士の一念、死でも中々譌ぬいきどほりこそ頼母しけれ、室之進も申分なき口書にて相濟けるが、横目衆より兩人が死骸の吟味、甲乙いさゐに申上らるゝ時、大守聞こしめし、扨々室右衛門が存念ふびんなり、また室之進十三歳にて、父が死骸の吟味の仕方、武なり孝なる若者、行末思召さるゝ趣に依つて、新知に二百石下されて、父室右衛門は喧嘩發起の者なれば、改易してかくぞ仰せ付られける、扨萬右衛門跡目は御つぶしなさるゝなり、ちよの助儀は剃髮仕て、御菩提所を御預け下さるべしと、御情ある上意にて左右方有難く御受奉りぬ、誠に武に依て仕へる侍あり、こうぶんの御氣合にて色めく男あり、室之進こそ大孝行の武士、大守の御眼力くもらず、成人の後はあまたの手柄をあらはし、私なきいさほし、誠やせんだんは二葉より、尊い寺は門から見ぬよの人の俤、此室之進が孝行は、誠に親の敵を打たるにもまさりしはたらき、父子の心の通じ合て、憤をやすめしは、古今のまれ者ぞかし、

今樣二十四孝卷之一 終

今様二十四孝巻之二

(一)我が思ひは灸の皮切

砥石は大内山の乾の方に出る事、唐も同じく和國は更なり、あらそはれぬ松もしぐれも、杉も雪もながむるにするどからず、まして有情の物をや、衣更のあしたは定つて、四條の道場の杜鵑松の初音に耳をさらへ、こがらしの夕べは加茂の川千鳥をきゝに参る、これ紙子のきぞめと存ずる、其外目に見るもの、鼻でかぐ事、一つ〳〵いふに及ばぬ都風俗也、江戸衆の目には男はぬるくたきと仰しやるは御尤、しかし女は、上でも中でも下の下でも、さりとはいやなと思ふはなし、いづれも一かゝりづゝ思入なる仕出し、御所わげのふきびん、戀はのけて置て、先あの細工をごらうせ、よい見物なりと、唐人寺の和尚もくびを傾けられしは、何か工夫の種にし給ひけん、されば女のあたまに、白米を三石頂くと申すを、大力と存じたれば、べつかうの櫛の事じやといへり、それさへ銀匁がしれてげひたといふて、いすの木ぐしに、金貝入のふんだめにふる手をかゝせ、けんぷんとちがふは今の女の身のまはり、初心なそろばんでは、ねんもない事積られぬ雲上ぞかし、中にも上京名さへ長者町、昔商せし見世を、うちまぜの竹がうしにしかへて、しをくりせし屋敷がたの金銀も、亭主死後に御返濟有がたく、いれこしの利銀まで滿足に申受て、内藏へしこため入て、みじかい羽織きたがるむすこの手へもまわらず、さりとは愚痴に身は成果てけると、小判が無常を觀せしを慥に夢に見しと、おろせの安兵衛が申けるは、そうもあらう事なり、萬後家世帯の心安さ、世間の義理もやまず、醫者の乗物を呼ず、旦那寺の奉加も、あちらから遠慮しられてつもりの外物入少く、利銀は神鳴がなつても日蝕でもそれにかまはず、月夜でも闇でも晦日〳〵に取込んで、いよ〳〵銀が子うむ此家の樂しさ、知た奴はのどを鳴らして通りける、後家の身持、七八年此方ついにわるい噂もせず、じぢめなる後生の願ひやう、なき人の事のみ古き枕におもかげをいひ出し、忘草とて見るになぐさみ、いつくしみて育てし娘、お袋によくも似て、面體氣高く悧發にあつて、讀み書き縫針の女藝すぐれて、親の鼻高ふ引伸

す程に思ひし年月も夢にくれて、十一歳の御妻、知恩院の御忌まいりに、仲人屋が見るよりつけこんで、いづ方へも御よめ入への儀をと申せしに、いや一人娘にて、こちへ聟殿を取るのじやと聞くより、其も此方にさいわいと、廿二にて三番目の御子息、器量がよふて賢ふて、短氣にもなし、病者にもなし、みやげは銀と家とで七拾五貫匁、筋目はれき〴〵、廣い京でも隱れなし二條の御城の見ゆる町より、肝煎て緣と〳〵ゆき逢て、早速養子にもらはれ、息女十四の神無月には祝言する積りにて、こしらへ置しうへのうへを仕度して、今迄女ばかりの家も、人のおもはくかる〴〵しかりしに、平七どのと申若旦那のあれば、いよ〳〵出入者までかたがいかつて、やがて御祝言には、内からつぶでを打ふと、魚屋のむすこが、びん切した顔にうなづいて居るも、目やすつけられて、町衆の扱い頼む家にくらべては、大分目出度き事ぞかし、されば水を見て起るてんかんもあり、火を見てねむたがるかぶろもあり、或時平七ふだんいしやにてんを頼んで、せなかに灸をすへよとて、腰元のおさくに仰付られて、晝ながら雨戸さしかため、また屛風も立て風を引せ給ふなと、夜の物取出し油火にもゝの木のやいとばし、もぐさも心をつけて、小さい程はじめにすへ參せよなど、おふくろ樣の大事にかけさせ給ひ、むまき菓子いろ〳〵御慰みにまいらせて、そばを離れ給はず、先づ皮切は箒にすへて、手にてあつうない樣にまじない、さあすへますと云ふより、おさく何やら思ひ出して、笑ふて落すこと氣の毒、性根に入いよと御叱りなさるゝほど、もじ〳〵してとり落して、さりとはわいらが時分は、手の輕い筈じやが、どんな物よ、そつちへよれ、我すへて進ぜんとて、おふくろの替らる、平七、是は勿躰なし、どれへ成共仰付られ下さるべしとじたい申せど、いやすへて進ぜんとて手早くもぐさの火の立を、片手にてあたりを押へて、さりとはお上手、少しもおすへなさるゝをおぼえず、あつさもこらへよしと、上下（うへした）六つの灸を、めふる間にくろぶたに油つけて、山見てざごれとしまはれける、平七冥加もなし有難し、御手水をと、ぬれ樣にてまいらする時、はゝ人平七が顔を見入つて、あじなめもさして溜息ついで立のき、其のちねまにいつて、うか〳〵我心ながら戀は分別の外とはよふぞ云ひけり、廿三にて

亭主に離れ、枕一つにて夢見し事、はやことし八年が間、かりにも男にあじやらもいはれぬほどに、身を石とかためけるに、ひよんなやいとをすへてやつて、白き背中、くびすじのわざとならぬ生際のうつくしさ、後から見しわき顔のつや、さりとは一つに寝て、ながめ度きと思ひ込しより、金輪際忘れられず、たつ名も無分別もかまはぬ心に成きつたは因果よ、背丈のびし娘があればこそなれ、未だ三十の女房盛り、ふつふつ〇一つでは明かされじと、文にくどきぢきにもかこつ、平七はかりそめながら母人の事、御ゆるしといふも古い事なり、娘と祝言いたさねば、互に女なし男なし、ひつきやう老女房の我家へ、入聟したとおぼしめせばすむ事なり、娘はいづ方へも嫁入せて、こなたとわしと祝言してと、思ひよらざるだんこうをしかけらるゝ、平七困り果てゝ、色々異見を申せど、皆其は合點の事とて、半分いはぬ内に道理をあちらから云て仕舞、〇よふ〳〵と口くせに成て後は、下々の見るにもかまい給はずたはむれ給ふのみか、我娘にりんきして、折からはよしなき事の給ふもかなしく、お心にしたがふ事は、念もない事畜生の沙汰、たとへ家出してもすまぬ事、自害しては母人の惡名、世間へふるるも同前なり、何とぞ戀をおぼしめし切らるゝ様にと、様々心をくだき、髮のわげめへ屁こき虫を狹み、口ににんにくをふくみ、身にこせがさが出來たと申し、ふんどしにしらみがあるとて、齒で嚙ころす眞似したり、耳だれがでるとて、こよりを入れて嗅で見たり、つばき付て足の裏へ物書たり、小指の爪のばして米すくふて見せたり、あらゆる下びたる事盡して、いやがられて見れど、いかな〳〵のぼられたうへは、何にもあつちの目には、けやしやに見えて、くどきやまれず、此上は身をすつるより外の思案、膝に談合しても、胸に手置てもないに極まり、命にも小判にもかえぬ男の大事の物をきつて、母人へこれで御思召切り給へと進じけるに、さりとては〳〵、いつてつ成るしかたと、とうざはさのみおもひわけまへなかりしが、鹽のしむ如く切口をあんじ、我れ道ならぬ戀慕にあぐみ、かゝる心ざし深きなだめやう、淺間しや此身はなんと思ひそめしぞ、耻かしの人の心や、さるにても可愛い娘が、一代つれ添ふ人に、かんじんの物なくてはすまぬ事なり、それがないと我口からいひ出して

は、何うして知つたと人に我身の事から、吟味しられんもかなしく、これは何うした物と、人に談合もならず、うつら〳〵と氣をわづらひける、平七は前後思案の上なれば、娘と祝言の近付かぬ內に、出家の望と云ひ出し、まことの親立へも有やうはかくして、すぐに我弟を此家に入て、都の巽に物ずきなる庵を結びておこないける、母人も、人こそ知らね此こう〳〵はづかしく嬉しく、煩惱菩提我とよふ合點して、かみをおろしてころもを着て此家の後ろ見して、うぢへも隨分心のある限りねんごろに致さるゝは、其筈の事ぞかし、

(二)拔けば玉ちる菖蒲刀

すまでやみなん名を惜みしは、すがたのいけの昔、此國の家中に谷村儀平太といへる若侍、一人の母につね〴〵孝行にて、此取沙汰家中にも隱れなく隣國にも聞傳へて、人の子はかくぞ有べき事にぞ有ける、武の道も御家がらにて心掛深く、なさけのわけも淺からず申かはせし、同じ家中の花さき房之助、念着(ねんちやく)のちなみ互に心底をみがき、此二年のちぎり、月も花も一人はながめず、暫くも公用の外は立離るゝ事なし、然るに大島流の鑓を申たてにして、新參に相住しふぢ川峯右衛門、殿樣をはじめ一家中の若い衆を、一りうの弟子にして世に時めきけるが、房之助美形にしうしんして、心底淺からぬおもわくを書きつくせし文、房之助、數ならぬ身をかくも思召よらせられ下さるる段、神ぞ忝なく存ずれども、御斷り申すいわくあれば、御ゆるし下さるべし、猶又御こんゐの儀は賴み奉る、諸事御引廻し下さるべしと云ふ返事を見て、扨は此若衆には念者あるに極りたり、それは何者ぞと、尋る迄もなく、弟子の內に儀平太が從弟、淺澤佐右衛門かねてのあらましを申し、如何程御しう心をかけられても、なか〳〵合點致されまじき房之助心底なり、儀平太も色こそ白けれ戸田流の允可までとつて、少し心におぼへ自慢の若い者、たつて仰せられては、いなものに成るべき間、御無用にとゞめけるに、峯右衛門氣をもつて時をうかゞふ折柄、あやめの祝儀とて、弟子中あまた峯右衛門方へ參られて、酒事はじまりし所へ、谷村儀平太當日の御禮申すとて、表よりいひ入てとほるを、峯右衛門それ幸さて、儀平太を呼入れて座敷へ通し、一つ二つあいさつのうへに、儀平太

殿、御自分の弟分花崎房之助に、身がしう心なり、きやうこそそこもとの手を切申されて、我らゝ給はるべし、若し御所存もあらば、再會に及ばず只今承給はるべしと、右にある刀を左へ取直し、眼に角を立てゝ云ひければ、弟子中も、兎角儀平太が返答にて大事こそいで來たれ、日頃のけいこにこゝ成と腕をさする若い者、いづれも、儀平太子細なく房之助を進ぜられよと、近頃理不盡成いひ分、儀平太太刀先にて進ぜんといわいでかなはぬ所を、何と思案しけるにや、御しう心左程にお思召上は、成程房之助事御心任せとの云分、大慶に存ずると峯右衛門はいひながら、なんの二歳め、しゆだうぐるひはおごりなり、我れが武勇に恐れて二言ともいはず、さりとはもろい若衆のくれやう、あれほどのよわみそを兄分の念者のと、頼みにしてゐる若衆の性根も大方知れたり、かほのうつくしいは、それにこしらへたる野郎、萬つかへぬいきかたは、賣わか衆がましなり、もはや望になしとあたりへさゝやき、これ〳〵儀平太殿、所望とは申したが、御自分の下され様、餘り結構な御心底の上は申請たも同じ事也、矢張御ねんごろなされよと、手の裏かへす云分又堪忍の成らぬ所、今度はぬくであらふと思ひしに、刀を取て、兎角は如何様にも御心任せ、いづれもこれにござれ、拙者は未だ禮にまいる方多しと、言甲斐なく立歸る體、さながら峯右衛門つよき力みに恐れ、長居せば如何様の迷惑いひかけられんも知ずと、うづら立に迯げ歸りしと一座大笑ひ、まだ儀平太が玄關をおりぬ内にたか〳〵と譏りけるは、無念にあるべき筈を、何共思はぬ顔にてつとめける、房之助此事を傳へ聞て、さりとは無念千萬、儀平はかねて侍の所存、たのもしき所を見付し故、もと我方より兄分に頼みて、かくまで深く云ひかわせし若衆を、峯右衛門にもらはれてはやり、又いやじやと云へば心得たりとて、だまつて我とねんごろせんとの事、さるにても淺ましき心底、見そこないし侍、あれ程の腰拔を兄分と頼みし我までを、峯右衛門にさみしらるゝ所、八幡堪忍成り難し、先づ峰右衛門を打べきや、さきに儀平太に恨をいひて殺しての上と思案して、儀平太方へ行に、儀平太はや房之助が顔色を見て推量し、必ずはやまるな、二つなき命を捨つる事には篤と分別ある事といふに、房之助流石これ迄の所存、うろたへぬ

儀平太なれば、如何なる存入もあるやと、思ひ極めし憤りをやめて、武士の人中にて恥辱を取て、命を捨ぬ思案といふは、死にともないより外の事あるべきや、さるにても恨めしき人やとなき出し、忽ち涙の川を爰にせきかぬるぞかし、其時儀平太云ふ様、されば武士の命をすつるは、朝夕ほう祿を戴きて身を安く暮す御主人の爲か、次には親の爲に命を捨つる事、思案分別に及ぶべからず、其の外の事には、思慮を廻らして惜むべきは命なり、命なくては、忠孝の二つ何を以て盡さんや、我峯右衛門に恥辱を與へられし事は、その方と念着(ねんちやく)せし色道のあやまり、其情におぼれて輕輕しく命をすつる事、誠の武士にあらず、たとへ腰抜と笑ふ者あるとても、そいらは同じ無分別仲間なれば、更々我はゞかし共思はず、侍は必ず、恥辱も譽も事に因て、道理にくらき事世にためしも多し、必ず峰右衛門に意趣を殘さず、主人への奉公を大切に致さるべしと言葉を盡しけるに、房之助も、とかく御了簡あつて命を惜ませ給ふとある上は、さへぎつて我れ申べきにあらず、何分御いとしさのあまりて申事なりと、常よりもむつまじく語るに、儀平太、其方とは

懇をきるなり、我所存あつてとはいへども、峰右衛門に恥辱をとりし上は、其方の情の義理は缺けたり、然れば不心底のあらはれし我を、たとへ其方たゞ今までの如くに存じらるればとて、我ねんごろすべきにあらずと、思ひ切たる風情に見へける、房之助、扨は我事をもふびんにおぼしめす事は、御心底に忘れ給はぬとや、それ程に義理を思召す身として、如何にきたなくも命を惜み給ふは、能々の御思案の上と存ずるなり、最前よりとかく未練の御心底と見しゆへに、だまして刺殺し、これより直に峰右衛門方へ踏込み、無念を晴さんと心底におさめ、上はべに打とけ申たり、此上は何事もつゝまず、仰せ聞けられ下さるべしといふ、儀平太兎角に命をすつる事かなはず、かさねて其だんはしるゝべしとて、遂に心底を語らず、房之助も心もとなく、何分峰右衛門をうかゞいてだまし打と心がけ、月日を暮しけるに、儀平太母、日頃の持病のつかへさし重りて、いつもの事と油斷せしに急に取つめて、七月三日桐の葉さそふ秋の初風、もろきは露の命ぞかし、儀平太野送を營み、隨分心の限を盡し、あまたの僧を招きさせんの營み、一七日にしあげ

の御經をけちぐわんして、何事も心靜にしまいける、今日は九日、幸峰右衞門方には弟子中より集り稽古の由、儀平太おぼへある刀左文字、二尺三寸目釘をしめし、供をも連れず只一人峰右衞門方へ來り、さんぬる五月五日の意趣、互におぼへ有る事、いひしらふるにも及ばねど、我母人は繼母にて、我相果て後は難儀し給はん事おもひ廻らし、至極の無念を堪忍せしなり、實の母人ならば、かく迄の義理を立つるに及ばねども、なさぬ中の恩愛深く、武士の耻辱と孝行をかへたり、今月今日、母人ましまさねば心にかゝる事なし、御支度よくば打かけ申さんと、暫く峯右衞門が用意を相待て切結び、何の苦もなく鐺を入つて首を打ち、弟子たちの內にも、峰右衞門がたきとおぼしめす方は、幾人にても御相手に成り申べし、とかくながらへる身にもあらず、五人三人きるも、廿人三十人切るも同じ事なりと、高言を云ひかけられても、一人出る者もなく返答にもをよばず、儀平太心靜かに腹切つて、介錯と云へどふるふてちかづかず、所へ房之助かけつけ、これ迄御つゝしみありし御心底あらはれ、天晴の御侍、人でなしの刀には掛け申さじと、潔よく儀平太が首を打て、我ふところにいだき、其身は儀平太腰の物にて、我と首かき落して空しく成ぬ、哀れと云はぬ人もなく、惜まぬ者もなき昔語り、こんな事も有けるとかや、

（三）寒のうちの眞桑瓜

牛の角を箔にだみけるは、ぼたん花の物ずき、朝腹に捻餅を燒いてしてやるは、一中が雲上ぞかし、寸土寸金の今の御代に、なをたてらば大樹の陰、青山のするに馬糞の翁といへるあり、物にむさぼらず、事にとゞまらず、德を小網町の塵塚にかくし、身を廣小路のほこりにまぶれ、生涯は天地にありと朝出て暮に歸る、營みは馬の屎を拾ひかきて、價のあるだけ餅買てくい、何時も我は正月なりと腹を叩て喜べり、又千ねんの七兵衞といへる飴賣あり、らくに養ふ子の有るに、いかなくそれにかゝらず、江戸中を足を空にして童にねぶらし步き、其の錢を直に所々にて酒にして、春秋の榮枯を、いきなし呑の一盃に埒をあけて、年の寄らぬ顏を久しく見る事、ほう髭をかこち給ふ、さかい町のさる野郞のあやかりたしと申されぬ、いづれうへ樣のお城したとて、斯る異人の有るも所の廣い

故なり、其繁昌京のしづかなるに見くらべて、たとへて申さふならば、禪寺の方丈と揚屋の餅搗との違ひ成べし、爰で何したればとて、お若い衆の喧嘩の相手に、きづのつかぬ程損料でたゝかれませふ、かみ様たちのお慰に、おもしろふ人をそしる話を聞かしやらぬか、大小によらず、じやうかうばんを十文でもりませう、壹文で煙管を通してみがきませふ、手にそげのたつたをよい目で拔ませふ、猫の蚤も二文では取ます、ちんばで御座るが見せの番には入ませぬか、据風呂のしたを焚ませふと、こんな事云て歩てさへ、見事女房子どもをやしなふて過ぎる國、外にあるべきや、されども爰にも乞食あり、盜人あり、是世界の道具にて、なふてかなはぬ茶釜もあるか、なきかにくらすひんならまごらのむすめは山谷へ賣てやる事、さながら親の子を思はぬにもあらねど、死なれぬ命と聞さへ哀れ、其身に成ては嘸かしと思ひやらるれ、過しころ三浦四郎左衛門が方へ抱へし、かぶろの長彌といひしは、器量の見たて是非ごうしにと思ひ、大事にかけて萬をしいれける、女郎に成までは足袋を寢る內もぬぐな、足のさもしきは、外よりも目に立ちて見おとさる物なりといひつけゝるに、此かぶろ、足袋をはいてねる者は、親の死目に逢はぬといへばいやなりとて、何時もかくして脫ける、是孝心のきざしあらはれし始めぞかし、三浦もやさしく思ひて、取分ふびんにかひたてゝ、後はきてうといへる美君に成て、大昔の高尾にも勝りける事、知る人は能く知てゐる事なり、傾城はおもてにつよくはすわ成をもとゝし、內せうはやさしくおろかにして、賢だてせぬを上々の出來ものと、此の道の本阿彌の申されき、曲輪のはきゝ時々にたえず、全盛は昔も今もかはらねど、身請けする太夫もあれば、手形の外まで勤めてゐぬる女郎もあり、これ人の仕合のよしあしあるに極つたり、扇屋の夕霧ほどの太夫、せんごに似たる女郎もなし、全盛いわふ樣もなき情知りなれど、曲輪で死だ事、女郎たるものゝ身に引うけては、大きな不吉な事とて此名を付ず、惣じて傾城の願に、藏の有る家に行たいといふは、欲ばかりの事にあらず、てかけに成て野へんの下屋敷に一生暮すは、無念といふ事とかや、此きてう事は、全盛の只中に、さる歷々に引ぬかれて、二親も、しうと殿とて結構に養はれて、ある時寒のうちに

眞桑が食たいといわるれば、川越へ申遣し、瓜作りどものじやうこんに、いくとしも〳〵、仕用をかへてたばい置眞桑瓜、千の内に二つか三つ、師走迄とつてをきすませしを、一つを小判三十両と申せど、世界にないものなれば、高い共安い共いはれず、いふ通にして求めてすゝめける、是を思へば孝行も銀で成る事、かならずこれには限らねど、なんぼ泣てもうめいても、雪の中から竹の子の生ふとは、今の世には存せず、ねからない事なり、すべて貧乏な者の子は、孝行などいへるも、何をしても様子がはつきりと知れる故なり、銀のある奴は、銀で自由に親の氣に入る様に持て參る故、孝行のしなが見えぬ物なり、同じ事ならば、世間へ知れずと、金銀を以て親の心を慰むるがよいと存ずる、孔子も孝行の事は、人によつて様々にをしゑられしぞかし、親にひだるがらせて、ぎやうぎづよふせふより、はだかに成て働て、一盃酒も飲ませかしと、さるおやぢのくどき事こそあはれなり、

(四)おもはず知ずの入聟

此家を今ぶんさんして出ふとは、夢にも思はぬ事を、さるにても情なしと、泣きけるこそあはれ也、人の身代は張ぬきのかぶとの如し、此の亭主目の黒い内は、人の金銀を虎の子わたしにかりちがへて、門なみの商せしに、死んでのけられた今は、一人のお袋のなげき、内儀もわかいに、獨身と成られしかなしさ、もうさふやうもなき不仕合ぞかし、いせんにていしゆ弟重右衛門といへるが、いかに若ければとて、兄の身代をからにして、揚句に其身も逐電して親兄へ思を殘しぬ、是不孝の至り、今も今と此極道めはと、年寄のくど〳〵と過し傾城狂の事をいひ出し、何處にをるやら、せめてはこんな時の力にも成をらいで、ばち當りめがと腹を立られけるも無理に非ず、後家も、我こそ知らね重右衛門殿、お袋様へは音づれは有そうなものと心に思へど、なんの私がゐますからは、少しもお氣遣なされますな、御不自由なめはさせますまいと、仕なれし所を立退き、六波羅のかたはら町にごしん様のどばしやつたと申すもおろかや、何にも無いといふてからは、是程にもはきちがつた内もあらず、道具のないは火の用心より、さし當て雨の漏る時、疊を揚るにてまが入らず、わるい事にもよい事が世の中、有爲無常にあいて、一日も娑婆ふさげ、死んでやれと

思へど、嫁の心ざしの嬉しさに、年寄の泪を忘れける、抑々此嫁と申すは、さる御侍の年ごろ御ふびん深かりしおもひもの成しが、御本妻の妬ふかく、おいとま下されて此亭主方へ御しつけ下され、まことの親立はましまさず、兎角しうとめを親と奉り、かゝるおちめにもなを付そひ、孝行を盡さるゝこそ誠の道と申べし、されども何を營みとは見えねど、次第に内をあぢにくろめて、戸棚も出來れば簞笥もあり、お袋へも四季の衣更へ、暑いめも寒いめもさせず、寺まゐりばかりさせまし、亭主の居られし時よりは思ひでなる、ば樣昔風にて、氣がとほらぬともいはれず、大方は彌左衞門なれど、そこらは年よりの物にさしいでぬがよござると、氣をとほされけるぞ粹はゞなれ、然るに重右衞門は江戸にて、大商人の羽がい下に付きてよい身に成、幸ひ都の普請方の用事をかけて上り、母人へもお詫申さん、あたりへも此仕合をひけらかしてと、肩で風きつて東の町へ尋しに、はや七八年の内に世は替るもの、兄者人は死なれてあとは分散して、お袋もよばれて間のないおなげきも、別れ〳〵に成ていづ方へ行かれたやら知ず、これたがわざぞ、重右衞門こなたが分に過た、にしぐるいに金銀を遣はれて、小氣な兄きは苦にして頓死めされた、若い子供のある所へはよせる人に非ず、まだ茶うじまのたちつけ、黑羽二重の羽織が商人の風と見えず、江戸で仕合めされたとはいはるれど、百廿里あちらのうそは調べても德がなしと、何をいふても呑込まず、煙草盆もあちらへ引寄て、をとつい〳〵と何處へ行ても鼻であしらへば、さりとは口をしいやらくやしいやら、いとゞ以前のあやまり身にこたへて、兄のばち親のばちも恐ろしく、何卒母人の在家を尋んと、樣々心を盡すれど知れず、今請取し普請かたしまい次第に、足かぎりに他國をも尋んと日を送る内に、商友達にさそはれ、少しも心におかしからねど、みや川町に遊びしに、緣といふ物が逢ひ初めしよりいとしくなつて、此道の習ひ次第に面白く、外をせく程に深くなりし、はく人の身元を聞に外に親方とてもあらず、母ひとり持し由、なんと女房にして江戸へ連て下らんが、いやか應かと我心底御さぐり迄もなし、一人の母さへ御めんどうになされ下さるゝならば、此身は何に成ともぬし樣へまかせんと、いつはりのない誓文聞し

上は、その母人にちかづきなつてと、竊に六波羅へ尋行しに、是れはいかな我母人なり、此頃いひかはせしはく人はあによめなり、さりとは面目なき仕合、三人顔を見合せてわつと泣出し、六つの袖を涙にひたしぬ、重右衛門段々母人へ御詫申て、さるにても我しらぬあによめ、勤め迄してかくまで母をはごくみ給はりし心底、きどくな共孝行な共申そふ樣もなき、悪人は拙者なり、尋ぬべき母人の行衛をおろそかにして、色にあそびし天ばつにて、あに嫁に枕を交せし事のはづかしさ、自害仕らでは男立たず、せめて最後に御勘當御許さるゝ、御一言願ひ奉ると、脇指に手をかけて申せば、母人おしとめ、過しあやまりをくやむ心底、めいどの兄も嘸悦ぶべし、我も此上は勘當ゆるすぞ、これ迄嫁の志言葉にも述がたし、其方あによめとしらざる上は、かうした事有まじき筈にも非ず、さるにても世間に、兄の死に跡へ弟のはいりて、家を立る事はためしおほし、愈々此上は夫婦と成り、あにの菩提をも弔ひ、母へも孝行を盡してくれよとの仰せ有難く、いかさま思へばさしあいにて又さしあいにも非ず、斯もいひかわせしは、つとめながらきゑんこそ有つらめ、然らば祝言して、諸共母人へ孝行をつくさんと、果は涙まじくらのわらひに成て、末々重右衛門京に落着分別極めて、母への心づかひいふもおろかや、是皆嫁の孝行から、雨降て地堅まる動きなき礎、くちせぬ緣ほどおかしきはなし、

今樣二十四孝卷之二終

樣今二十四孝卷之三

(一)善惡吹わくる薄原

花咲く軒は人に訪れてやかましく、月もる家は雨の降時蚊帳まくるが迷惑、女色を樂しめばりん氣にくさす、若衆愛せば夢の間に、すさまじきにきび見るもきよふとし、いづれ一つとして二つよき事なし、おすにおされぬ世のならひ、金銀もちあきてわづらふ人もあり、そく才で貧乏なものもあり、兎角浮世かなと申す言葉は、何時迄もすたるまじき名言ぞかし、凡病は四百四症に數へける、古にかはりもてゆきて、末の世には疱瘡のなやみ、これさへ珍しき事にいひし時代もなを昔に成て、氣のかはりたる病世にある事、吉原の茂川といへる女郎の痳は、客を見るたび毎に起りて、遂にゐぬる迄ぬしも人もいな事といふてはたしぬ、近き頃新町を見事に身請なされし、茨木屋の太夫樣の口中の病、知らぬ人もありけれど、奥歯迄かくし針金にてつなぎし事、粹と云男共は皆のみこんだ事なり、永樂屋の岡山が、取はづせし事は度々にて、栢を養生にまいれど、堺の大盡りちぎに教へられしもおかし、西の扇屋のかぶろに、一文錢を耳に挾む病あり、佛孫兵衛が抱野郎の何がしは、鷲の樣なやまひあり、きり〳〵すの權右衛門が仕立子は、床で女より仰山にむづかりける、わるい客の時代にて、つくりものと云なし却て内證さびしかりき、くれ〳〵こしらへ物にあらず、成程外の若衆とちがい、つとめのうへのうへを勤められける事、長町の衣屋の客衆憶に申されける、はく人に飛頭と申たる美女あり、泊れば必ず添臥の男の鼻に手をあてゝ後、くびむくろを離れ、ねずみ入ずの煮しめのからかわを、ひや飯にまぶしてはりま程してやり給ひぬ、下の關のうねめには腹に物云ふ虫ありて、とをるの問對を口と腹とでしゝ、腸にてうたひたるを聞人興をもよほし、女郎の勤めよりは此一藝を請とりて、無病なよねは茶を引けど、うねめが賣ぬ夜と、燈ともさぬ狐とはござりませぬと、つゝじ屋の新六申けるもおも口なり、爰に萩さく國の名どころ、水の縁にあすもこんと聞えし里のかた陰、野もりの鎌は昔に變らぬ光り、是れを其身の箕裘にして、一村の土民の中に彌惣次とて、天性美質の孝

子、父惣太夫身まかりて後、其心ざしの行き足らぬ事のみを悔み、殘り給ふ母に隨分孝行を盡し、せばからぬ此國の人のかゞみともなれり、或夜大守の御內に、並木松右衛門といへる歷々のお侍、彌惣次が家に來りひそかに申されけるは、其方は大孝行者とて聞くなればありていに申なり、常の者ならば如何にもだまして、殺すべき思案なきにも非ず、樣子は大守の姬君難病にて、樣々醫療手を盡さるゝと雖更にしるしなし、然るに五月五日生れの生肝を取て、藥に調し與ふる時は其しるし妙なり、其の外の事にては、すこしも本復有べき事ならずとの詮議一應にも非ず、度々大守も此事をなげかせ給ひ、科なき者の命を斷つ事千萬御心に叶はず、有罪にて牢舍の內に、五日生の者やあると御せんさくなされし時、百六十四人の科人、いづれも五日生の者にあらず、然るにさる訴へ人あつて、慥かに其方五月五日の生れのものなり、くれ〳〵あらそふ事なかれ、國に生るゝからは國恩とて、大守の恩は親の恩より重し、殊に大人の御命をたすくる善功、おもふにすくなからず、いそぎ其方が生肝を差上べし、もつとも汝が菩提の爲に、千僧供養の御とぶらひ、又老母が事は長く榮華にあかせて、大守の御はごくみなさるべきぞ、さるにても諸侍多き中に、某かゝる役儀をうけ給はる、仕官の身こそ悲しけれと、泪雨を降しての仰せ、彌惣次、成程五月五日の生れに違ひなし、此身國恩を辨へぬにはあらねど、御請申す事成難し、我ふこうにして先だちし父が心にかなはず、此くやみ如何ばかり、いま何程に存じても、其あやまりは取かへされず、せめて殘りまします老母に、孝を盡さん心ざしなれば、我命わが物にて我儘にならず、母にたづねて後命を奉んか、よもかし母、我子に命を奉れとは申されまじ、又我が命を召されて後は、老母を榮華に御はごくみ下さるべけれども、貧しく我が養ふよりは、却て母が心にかなふまじ、一つは又親に先だつ罪は如何にしてもおそろし、如何にも母のある內は、我が命を奉る事はかない難し、御慈悲の上何卒御助け下さるべし、申すも御心底はづかしけれど、當村きた畠善次郎と申す者は、私と同年にて五月五日の生れなり、此善次郎は親もなし子もなし、兄弟はあれ其何れも成業定まりて、世に少も心ひかるゝ者にあらず、此者が生肝御取あるべし、我が命を

のがれんとて、まさしく殺さるゝ人の名をさし申す事、入道にはずれ天の責まぬかるゝ所なく、未來は奈落に落べけれども、現在の不孝にはかへ難しと、言葉に善惡をあきらめてぞ申ける、松右衛門手を打ち、扨はさあるよな、汝を訴人せしは其北畠の善次郎なり、己れが身をあやふく思ひ、ちやくと人へ讓りし心底、去るにても淺ましゝ、其方は母ある故に命を惜むの願ひ尤もなりと、彌惣次を助けて、其夜直に善次郎を刺殺し、生肝を取り御病人へ與へしに、早速御快然なされ、一國の悦限なく、千僧供養を御代々の御菩提寺にて御經營、善次郎が爲に墓所もいかめしう築て、兄弟親類迄金銀を下されける、げにやいさほしの惠も深き松右衛門は、無罪成敗役儀、此身のむくひもおそろしく、御菩提寺に入て出家し、善次郎が跡を懇に弔ひける、彌惣次は隨分母へ孝行を盡し、今は四とせ過ぎて老母目出度往生、葬送のいさなみ身分より美を飾り、田地資財を寺へあげて父母の日牌の料に寄附し、其身は善次郎が石搭より繩をさげて、首をくゝりて相果ける、誠に善次郎が生れ日を訴人して、松右衛門に殺させたる此科、親なければ命を惜に益なし、かかる捨身の有様、あはれに義深き孝子なりとて、松右衛門入道ばかり其事は知りて、世間へは知れねども、おのづから陰德深き彌惣次が心底、後々には顯れて、善次郎が塚に並べて彌惣次が墓をも築かれ、大守の御弔ひ、厚き惠におほる秋草、穗に出て招く尾花澤にかくれなしとや、

(二)壹萬兩にかゆる糠籠

おしてる難波も古き都のあさなれや、高津の宮に時鳥の折から、うの花の雪と咲く九重は知らねど、前内裏じまとて川口近き方に、芦のつのぐむ春の頃より、わや〳〵と云へば天王寺生玉、これを遊び所の道成寺にして、わきには見る所行く所なし、廣い芝居と狹き川舟のさわぎ、中より上の男共、ふなかたびらとて廣袖に大形の模様、是を持ねば額にけぬきあてるかいなかりしも、しよ心に今は云ひなして踊をやめて、舟で十種香聞くなどの雲上は、京とても二條より下の衆はならぬ風俗ぞかし、堺の昔鳥長、中ごろの具十、駿與、西南の小めろも、きやらのたきから下されました事今に忘れず、末代迄申ておかしきは傾城野郎の噂なり、妙國寺のそてつもいつの頃よりか云ひ

やみて、地に生た物なればかぶが六十六本、別して珍しからず、奈良の大佛もはじめては山の様に、どうやらすごたらしう、仰向て口を開きたりしが、二たびは大きうこしらへた物じやとばかり、なんでもなふ世界にある程の事に、諸人目が肥て肝をつぶさず、是をおもへば太平なる君が代に生れ合ひたる、我人の果報ぞかし、こゝに大坂うつぼ町、金屋三右衛門頓死の後、此家の跡目なく、一門諸親類の内似合の養子を尋ぬるに、かたぎつて相應成る者もなし、折節家久しき手代存じ出して申けるは、先旦那のげしやくばらにて、此度御死去の三右衛門様には、種一つの弟御、堺北の端のぬか屋六兵衛と申方に御座候、是を呼入て、金屋の跡目に御立なされなば、親旦那への御追悼とも申し、御家のすじめと申し、愈々御繁昌の瑞相と申しもあへず、諸親類何れもそれよ〳〵、急ぎ堺へ人を遣し、其糠買より貰ひ戻して此家を渡さん、先様にも否やは有まじ、僅の糠買せうより、此家は町内他町をかけて、屋敷は八ヶ所、中島に上田三町、現金は壹萬三千兩、商の老舗は代々のほしか屋也、何に不足一つとしてなければ、とんで參らるべしとて、堺に申遣しけるに、いやじやと云ふ返事、さても鼻こくつたるきつい云分とて色々申遣し、後は親類の内に年寄分の人、四五人堺へ來り六兵衛に逢ひ、兎角欲づくを申しては、氣に入りぞむない心底と見るから、實父の名跡此時つぶれて、親兄の位牌所なくなる事のなげきを、様々に申されける時、六兵衛申けるは、我是程まづしき糠買の身すぎにかへて、大分のあとしきしてやる事、云ふに及ばぬよい事なれど、そうは成難し、我事は、實父内の飯たきに手を掛られて懐胎せしに、世間の外聞氣の毒に思はれ、すでにおろし薬を與へて、水になさるべきだん合、十が十一迄極つたる所を、ぬか買の六兵衛、其時分は心やすく出入して此事を聞てさりとは情なし、たま〳〵此世に生をうけんとせし者を、くらがりからくらがりの水になさるゝ事、餘りにむごき事なり、其母親共に私へ給はれ、如何にも無事に平産させ申我子と致し申さん、全く御人體の宜敷を見込、末々の賴に申すに非ず、其段は手形仕り長く御自分様へ申分無レ之、元より腹からもらふ養子なれば、親子の緣はきり申たる旨燒餅程な判をすへて、母人ともにもらはれける、又申にくけれど、我

母人百人並にも勝たる悪女、何にひとつ思入はなければ、我を水になさん事のふびん深く、まことに慈悲一つの養子にて、生て後も様々苦労に預り、是程迄に成人し此恩何にたとへて申さうぞ、有難いとも言葉さへ云に足ず、しかるに三年以前の六月と八月とに、親父も母人も死なれて、六兵衛と云名と、銭三〆二百に拐とふごとを譲られて、貸屋なれどもきつと此家に住つけて、二親の位牌所を持かためし此六兵衛、糠ふごはかたげ歩けど、身代の重い軽いを持くらべて、親の位牌どころをたつる心底にあらず、それも二親そく才にてゐられなば、談合申て大坂へ共々引越し、其壹萬三千両の金子にて楽々に養ふならば、参るまじき物にもあらず、楽させよう栄ようさせうと存ずる二親はましまさず、何のはながに大坂へ参り、大分の身代を請取世話いたすべきや、萬間はねばならぬ親父は来世にいらるゝ、我一心にては行く事ふつ〳〵かなはず、その金屋の大身代が、跡目がなふて潰れふが、くづれふが、我等が熱氣にも冷にも成らず、我等は只此位牌どころが大事也とて、更々取あへず、後々は云ふ程腹立て、そつちの壹萬三千両より、こつちの銭三貫が大事じやとききやうくつてせゝら笑ひ、遂に大坂へ戻らず、さりとは孝行者かな、養父が欲を離れて慈悲一つの養子なれば、誠の親の事も大ぶんの金銀にも見返らず、一生糠買にて暮しけるは、成らぬ事共奇篤な事共、誉るに言葉さへなし、

（三）沙汰なしの引負金

謠の本は近衛殿りう、野良のぼうしはむらさき、一ころ半太夫がうらいろ、せんじゆがすみるちやを仕出しけれど、これではないと早くやめに成ける、備つた事は萬云ふにいはれぬ位あり、地女のよ程見ゆるといふも、癖の有る傾城にくらべてさへ、さりとはいやなこと多し、さればむすこ殿はねつい親父をまだるがり、若き手代は主人の異見をかまずに呑込み、ひよんな古語を覚えて、色は分別の外と、これに押しあてごふて、椅子定木に手盛の仕過し、去るにも氣の毒ぞかし、爰に廣き都の外ならぬ、両田屋長八手代傳兵衛子飼にて、性根見すゑし故、若けれど戸棚を預け、金銀の元締役仰うけ給り、叮寧に勤めけるが、人の心は色に染むならひ、桔梗ぶろのこあきと云へる振袖の美形、首筋の白いと口元のほくろとに思込み、いとし

うなつて可愛がられ、互に紋所を付合、わきさめ歯墨(かね)つけの祝義、おそらくにしの太夫も成まじきさばき、親方の物ながら我物の樣に思ひし金銀、まき散すは度々にて、もらふ人は替れど、出る所は一つ穴の吉兵衛といふ懸取の手代、もみのかくし裏を親方ちらりと見つけしより、勘定せしにいろとはたとに貳百兩の引負、受人にあづけ手ぢやう打せて、色々に詫れど堪忍いたされぬ、是親方の慈悲にて外の者へのこらじめ、此時傳兵衛あぶない所をあぢにくろめて、波風も立たざりしこそ運强けれ、然るに此度親旦那、身代を若世(わかよ)に渡さるゝに付て、いづれもの勘定、有金をめのこだてにして、ゆづらるゝ代替りの作法、是には何とすべきでうぎもなし、兎角に足らぬ所は足ぬに知れるを、知れぬ樣に思ふて、今といふ今とむねつきぬ、いづれをれはあどめのない男と、我を我と叱れどあさへんなり、はや片端よりの算用づめ、やど持手代の半七伊右衛門、そろばんを以て仕掛らるゝ時は、いづれの手代にも少づゝの引こみ、旦那へよろしう、兎角御取なしで人が立ますと、俄に奉公ぶりたしなまぬ者もなし、傳兵衛は六百兩の引負、兎角吉兵衛が手なみもあれば、なまや通例の事には有まじ、とかく死ぬるか欠落か、此二つの内にてはどちらへしたものぞと、分別せぐるしく、胸は燃るやら流るゝやら、盃でもないに踊りけるこそあはれなり、折節久兵衛身ぶんのしゆび大かたに仕舞て、傳兵衛が引負金の高を聞て舌を振はし、いかさましなんとのかくご無分別と、今更改めては異見もいはれず、何事もあつて過しをとゝし、我等親共永々のわずらいにて相果けるが、其砌我一分のみつぎにては、中々思ふ樣の療治成りがたく、若がへ責代なすをお手前あはれに思はれ、度度の合力高で金子八兩貳歩二朱、そちにはおぼへられまいが、我等は其恩朝夕わすれず、云へば男のつやらしい故だまつては居れど、そこらをしらぬ男でなし、願ふた樣なれど、若も傳兵衛が身の上に、うごきの取れぬ難儀もあらば、命を捨ても救はんと、兼々覺悟極め置しは爰也、我親もなし近い親類もなし、身がら一つの此男、欠落すべし、尤も書置にも、五百兩は我が引こみしをちど、つまびらかにあらはし、其方の難儀を我等かぶる上は、子細あるまじ、又まん更貴樣も引負のないといふては、半七伊右衛門も呑込むま

じ、さるに依て百両は、身分の引負にしていでらるべし、百両にてはなんぼ親旦那きつい人でも、よもかし身の難儀に及ぶほどに、山はあげらるまじと千騎に壹騎の談合相手、此時たのもしき久兵衛が心底、傳兵衛泪玉をつらぬきて、扨も忝なや是じやはと、まづ手を合せてのちいかにどうあればとて、科なきそなたにふり向けて、にしく＼とをれが鼻はさんでゐられふか、其心底は未來迄も忘れず、何とぞ生をかへての後の世には、親子兄弟共生れ今の志を報じたし、兎に角我存へては旦那の手前へ云譯なし、六百両に賣る命、さして惜いとも思はず、したい事も親方の金銀で樂んだれば、此世にさして殘り多い事もなし、いよいよ相果し跡を、見苦しうない樣に頼むぞや、必ずと云ふより脇指を拔を久兵衛押止、傳兵衛そうじやあるまいぞや、其身のあやまりにて其身を果して、其方一分の差引は濟ふが、お手前の親達はなんとめされふぞ、いかに心苦しいとて、ちつとは親の事を分別して見られい、大き成不孝ではあるまいか、身共が云ふ樣にして其身を全ふし、人に科をかづけて成とぬすくて成と、永く親の力に成こそ誠の人間なれ、他人にいらぬ義理を立て、親に孝行のかける事、近頃未熟に存ずると、身を引かぬ男の義理にせまり、傳兵衛打うなづき、一文とも思はぬ此身の命なれど、如何にしてもお手前の心ざしを破るは、差當てのものしらず、兎角其方の思案に從はんと泪ながらに申せば、久兵衛如何にもよい合點なりとしめし合て、金子五百両久兵衛取こみ分のあやまりを書置に認め、其夜欠落しけるぞ頼母し、傳兵衛は又、委細に久兵衛が志を云つらね、其身の科をも一々に顯はし、さつはりと腹切て死にけるを、親方長入両人が書置を披見して心を感じ、傳兵衛は長入若き時夜の友とせし者にて、ふびん深く、手代に成てもひいきめにて、人柄をよく呑込み、大せつ成金銀の元締役をさせけるに、存じの外なる仕過し、是男色の情にて我が油斷故なり、全く傳兵衛科ながら科にあらずと、長入は長入にて、身のあやまりをなげかれけるを、一子長左衛門、親の苦勞を悲しく思ひ、傳兵衛引負金の事は一生取あげず、欠落せし久兵衛も、尋出して懇に召使ひ、傳兵衛親に久兵衛を養子にさせて、はごくませける、此心ざしにて知れたり、長左衛門長入へのみやづかへ申もおろかや、久

兵衛是を身の手本にまなび養父への孝行、主が主たれば手代も手代、此家の犬猫迄がさつに啼ず、盗ぐらいせず、一人仁をおこす故に一家繁昌、祈らずによい事來る、利銀入帳毎年綴足して、表紙迄よごれるとや目出度〱、

（四）天下一ばんの大たはけ

氷は水より出て水より冷たし、客の嘘は女郎に習て、女郎の僞よりはすさまじ、過しころ阿波の國に、等持院源尊氏の庶流とて、次兵衛高久といへる人、一郷を國守よりあて行れ役なしの五千石、世のむつかしいめも知らず、榮華の春秋、いく數へくれしむかしながら、人の人たる筋目こそ由々しけれ、然るに高久孔孟の道を貴み、知致格物の公案、仁は姑息の愛を嫌ひ、義は忍刻の刀をいとひ、只百の行ひは孝よりこそなれと、あまねく其心ざしを尋ねて、孝行の誠ある者には男女に限らず、其の人に應じて御扶持を下されける、これに依て親の敵兄の怨を報ひし侍、又は古主の怨み師匠の憤を安めし手柄者、其外腰抜のお婆をおふて、西國の順禮せしむすこもあり、手のかなはぬ親爺に、年久しく仕へし娘もあり、いづれ夥多の孝子、一人々々云ふに及ばず、世に奇篤者の集り、五常も糸瓜も親に仕ふるを以て元とすれば、自から諸藝萬能に達せし者、此御屋方にぞみち〱たり、爰に外樣より次第に立身して、御側近ふ勤めける松川竹右衛門と云へる男、さりとは奉公人の鑑成べし、晝夜深更未明を分たずじやうこんなる勤人、然も傍輩の怨も受ず、誰とて竹右衛門がゆがんだと云者もなし、聖賢は格別庸人に於ては、かうは成ぬ者ぞかし、或時秋山菊彌といへる御茶小姓、高久の御前にて申しけるは、松川竹右衛門と申者は大き成いつはり者にて、かくも明智の御主人を誣し申す事、言語道斷の曲者なり、其子細は竹右衛門儀萬能にすぐれて、凡天地の內にあらゆる事心掛けぬ事なし、第一博學にて即與の詩を作る事、御家の儒者衆禪家の長老にもまけず、扨もとほめれば竹右衛門、拙者が詩などはやう〱白黑の文字合せたる分なり、我親の寢言に申されたるにも似ずと卑下して止みぬ、手跡は何流でも筆道を離れて、而かも其格にあたる事、加茂の甲斐にも並ぶべしと、御前の御意の時は、恐れながら私の親すこし手跡を仕りしに、とくと稽古仕らで、只今後悔の由を申上

る、其外馬に乘る事、太刀長刀弓鐵砲、茶香鞠楊弓、連歌謠つゞみ琴三味線、なんでも仕る事、其一藝を申たてにせし人にも勝りしを、人感じ稱美いたせば、私が親が藝にくらべては千が一つにも非ず、早く父に離れて、不器量にて耻かしさ卑下仕る事、諸家中にて隱なし、然るに此竹右衞門すうきの事をうけ給りしに、成程先知は千石にて相州家の侍成けれど、父竹左衞門と申せし者は、天下一番のたはけ者にて東西をも辨へず、まして學文手跡の心掛もいかな〳〵、弓馬の道生れついて臆病者、殊に遊藝などはかいしき、上が下やら茶杓もとつかも持た事もなし、兎角に大たはけ故押籠めて、今の竹右衞門十五歳にて召出されて代番の勤めけるに、これも親につり取程のあほうにて、三十五萬石の家中にてもてあまし、由緒ありながら父子ともに大馬鹿なれば、知行召はなされて牢人の後、親竹左衞門は病死致し、竹右衞門年を重ねて如何なる藥を呑けるにや、めつきりと賢くなり、萬事習はずに上手に成器用、さりとは人は知れぬ物と、關東にてもこれ沙汰の由、然るを竹右衞門いつはりをたくみ、大たはけの親を世のまれ者と、諸人に思はする心底直ならぬ侍、御了簡有べしとさゝへける、高久暫く御思案あつて、扨々汝は大忠臣なり、左程竹右衞門が孝行を我知ずして、打過たることの口惜さよ、世に形を以て親に仕ふる孝行は成やすし、心を盡して親の耻を隱す孝行は、もろこしにも稀なり、竹右衞門生得明智にありながら、親のたはけをおほはん爲に、暫く作り馬鹿となり、親身まかりての後は誠の器量を出して萬事をつとめ、しかも萬能のほまれを親に讓る此の孝行、思へば昔もためしあり、判官義經の侍鷲尾三郎が、西國にても軍利僉議を申し、かちての上はいつも、我が親庄司が常に敎しと、其身の譽をしりぞきし言葉、是中古の孝子なりけるを人しらぬもうたてけれ、惣じて近き世の人の振舞、あくちもきれぬ分として古老先輩を乘越、鼻のさき智惠をしたり顏にのゝしり、親兄の了簡をもどき、一口分別のあさきなしのかたつくわを申し、父をしりにしき母を睨付け、我儘いふ程に育ひたてられし恩を知らず、今竹右衞門が孝行の趣、さるにても有難き人の鑑なり、又猾彌がうわべは人をそしる樣にて、ねごゝろは善のあぐるのいさほし、主の暗き燈火をかきたつる役は、表

にあつて勤むる人の形、義は内に備へて出らぬ心の名也、愈々兩人ともに學士俗長者のよび名をゆるされ、孝弟四端の道榮へけるこそめでたし〳〵、これを思へば、若い大夫に賢いやり手をつけ、短氣な野郎に下戸の草履取をつれさすは、尤な事ぞかし。

今様二十四孝巻之三終

今様二十四孝巻之四

（一）五十兩の禮に左の小指

茶道に疎き人のきれいずきは、掃きちぎりたるばかりにて、何處に一つしほらしき事なく、廣い座敷ながら却てきうくつに、居心よからず、眺もをとましく、庭に鳥ころしの石を並べ、兵庫砂まき散すなど、大きいところてんやぞかし、まして無理やりにねぢ付し作り木、さるにても拙し、櫻の鳴子、南天の霜除は情のあまる氣配なるに、百を三文に買るゝ唐辛の數をよんで植て樂しみ、あわびのうつせ貝に風蘭をそだて、出入に頭をよけて身をこらす少さい物ずき、中も近頃無念なり、山本與次とこそ世に名は高き、坂のうへ賓閑が、はへた朝顔と自慢せしは風流のたゞ中なり、朝顔をうへて見るは未だ求たる物ずきにて、無理にしをりをこしらへ、わび好みと人に云はれたがるせんしやうくさく、印籠に芥子人形入る男と、紙一枚の隔なるべし、さるにても地女そうでお袋の昔物好こそ見よげ成るに、不孝にしてわれものぶり、物にせ

たがる風俗心の底をさがせど、智惠と云物ないに極つたり、それ〴〵の身の程を知らず、風流を辨ぬから、頭に伽羅の油を付ながら髪筋通らず、大夫の髪は音もなく匂ひもなきいたりを知らず、長湯してみがけどもきめ所を知ぬ故、結句額たゞれて鼻油つよし、ぬらいでもうけとらるゝ顔に、色々の細工をめされ、のびぬ白粉けしからず、耳せゝは臙染の如し、寢起と午時分と夜更てと、毎日三度づゝ顔に汐時あつて、相好の變る事さるにてもうるさし、人中にてつべこべと物さへ云へば、利發者と覺へ、もゝじりしてゐる人にめかりも聞かず、長口上をこね廻し、腰をよぢらして行ちがふ男に見られたがる有樣、心からしこまぬ粹形で成べきや、たとひ姿は何にもせよ、持て參り樣のいきかたにきらも沉もある事なり、伊丹の石丸はさるにても美男に非ず、色道の大ほまれ、諸國の傾城町に於て、二十年此方に隱れなし、まへの井筒がせかれてのちに、引手の妻崎を鏡にて頭を打破し恨、あづまのせんか樣も手を打れし事なり、すべて傾城は情け深く義理を忘れず、され共身の勤に僞を男に悦ばせ、はゞに風情をかざる故、借錢の淵に沈み、まぶの波風立ぬ日ぞなし、人こそ知らねふだん節季の思ひ、夢にも銀ほしうない時なけれど、しかも其さもしきもの手にも觸ず、やり手引ふねに仕拂ひさせて、足ぬ時には太夫樣の御耳にも入て、もちつと御文に、御念が足ぬ故と舌つゞみ開ぞ悲しかりき、げにや文は戀の礎、何事も是から積り出さるゝ、文よく書きこなす女郎は、幾度も切そふな指も傷を付ず、內證の諸わけも、引に引れぬいひ廻しにて盆正月も豐なり、是を思へば、公儀の目安など人だのみするは、女郎にも劣りて口をしき事なり、或時折屋にて、扇屋の井筒をそう見へさせ給ふ、客まづ表の格子あけさせて、釣蚊遣ほのかにくゆらせ、宵月夜の空、萬こしかたの懷かしく、聞かぬ時鳥に都を眺やつて、かみする長になぞかけられてながしますと、案じても見いでお氣の短い事わい、ひぞつてお歸のお客をおくつて東口へ出ける跡へ、向ひの軒の下に立てゐた男、ちよろ〳〵と井筒そばへ來りて、太夫樣まづ御盛樣にて悅ばし、私儀申もはづかしながら、此春汐干にくだられて其後はをとづれ絶へにし、六條の泉五樣のおとぎに參りし作と申す男、近頃犬畜生とお心ではお思召さん

が、あり樣に樣子を打明ません、卯月八日御重ね給の入用金十兩、私泉五樣より請取、京よりわざ〱罷下りしに、伏見の屋根や町に、親父あるに依て立寄しに、只今京へ人を登すべき所なり、親父今朝いつもの如く疾起、表をはき水など打たれしに、あれ成小石にけつまづいてころばれて、俄に半身なえて口こゞもり、生死定めなき體、近所の人々集りて看病最中、親子の氣ゐんにて思はず來かゝりしこそ、天道の御つげと悦び、醫者よ鍼立よと他人さへ世話燒けば、まして親の事なれば、樣々看病に心を盡くし、こゝ許へ下る事打忘れ、はづかしながら貧家の事なれば、調へる人參代に事をかき、懷中の十兩後先もなく取出して、萬の事に蒔散して、病中聊つかへた事なく、京の利旦(りたん)に迄さすらせて、始終廿日ぶりにて親共を、こつちのものになして安堵仕りぬ、され共ない上の遣込十兩、何處を打ても叩いても出所なし、近頃義理ちがひし事、面目灰にまぶせし火のふる身代、色々と才覺仕りて、十兩の金子只今持參仕りしと太夫そばに差置、是れにつけて泉五樣と御中惡く成し由傳へうけ給り、さりとは身をきざまるゝよりも迷惑なり、尤も間違にて御事かけぬ太夫樣ながら、やり手衆のおもはく、せん五樣御僞らしきしなに成しも、又太夫樣苦界のはゞの失せしも皆私の業なり、此科口先で申しては神ぞ云譯立ち難し、よこはらへさすがにても突込んで申す所存なれど、明日も知らぬ親を持し身、のめのめと生面さげて參りし、此恥しらずめをいつそふびんに思召し、泉五樣と御中直り下されなば生々世々の御情と、泪玉を成し鼻かんでぞ申ける、井筒も泪よわく、さるにても御心もじ、どうも〱申されぬいきかた、少しも御苦勞に思召す事にあらず、かやうの事は世にある首尾少からず、まづ親父樣御本復のよし何よりも目出度し、いかい御心遣ひの程、申しても申しても、御耻辱にもひけに成事にもあらず、泉五樣の事は、何の譯もない事ながら、いな首尾に成ましたれど、いかにもこなたより御詫申して、今一度中直り申べし、そこは御氣遣有まじ、必短氣をやめさんせ、扨此一包は、こなたにはさして只今いらぬ事ぞや、持て御歸り下さるべし、何とやら女郎のいき過た御尋ながら、此金の御才覺の品うけ給りたしと、大方合點したる口ぶりに、作兵衞ぜひに此金子は御とゞめ下さ

るべし、様子を詳しく存せし人に借用仕りしといへど、大夫さら〳〵呑込ず、扨てこな様は、お内儀様に過ぎし頃御分れなされ、御形見の娘御を、お姉御の方に預け置かれし様子、いつぞや山口屋でお年せんさくの時、泉五様もろ共の御噂、是れ座興のはなしにあらず、此の身につまされる事あつて、よく覺へゐますと、餘程あたりをもつてまいる、女郎はさりとは賢きものぞかし、作兵衛包む泪もれて是非なき仕合せ、語るもふびんの一里のゆかりと、せんほつきはて八つに成る娘、昨日此里へつれて下り、あわざのそこのくつわへ賣りしと、男泣に聲も惜まず、哀れは浮世のうへながら、女郎の身にしては、餘の事より肝にこたへて、共に泪の有ぎり泣つくして、是非に取もどさしやんせ、此上の世話はわしがやきませうと頼母しく、餘りに深き情の程、作兵衛も却つて太夫心を破るも氣の毒にて、あわざのくつわへ色々ことはり申せど、遂に曲輪へ子供どもを質に取たるためしなし、身請ぶんならば三層倍にてゐなそふと、角の生た人もあればある世の中や、二十兩の金の事は全盛の太夫ながら、手の廻らぬも口をしとなげき、作も思ひ切て京へ登りぬ、其後十兩の小判は泉五方へ戻りて、非筒が願にて、作兵衛親もとへ金子五十兩合力あつて、三十兩にて阿波座のかぶろを請出しける、此時此太夫泉五へ禮文に爪をはなして送りぬ、古今圖のない爪のはなしやう、くつわも知ぬ顔にてすまし、外の大盡も腹立てず、其心を感じてむりなくせつもたしなみ、日毎の全盛朝夕の美形、むかはぬ鏡にうるはしき姿、當代の御太夫様、すぐれて御手跡をの丶おづうにも勝り給ふ、

（二）喰はねど楊枝けづり

徒ゐて喰ふ者を國賊と云へり、たいこもちは我呑の酒に五臟を苦しめ、何ぞかぞあたらしい口あいいはねば、皃が田へあがつたりや商賣、てれんをいふやつも、枕をいくつかわつてこんたんせねば、今どきの賢い人、中々だまさるものにあらず、それ〳〵に身をはたらくか、心をくるしめるか、寝たいほど寝て世を渡るは、天地の中のついへもの、しゆつけにもあらず、神職にもあらず、頭のまぎらはしき人間、君が代のしるしなればこそ、春秋を送り迎へる、世界は廣し、傳へ聞く石川五右衛門釜いりに成る迄、惡行つもりし

も、父母妻子の糧の爲なれば、さのみ爪彈きするものにもあらず、親にかせがせて己れは骨ざかりを惜み、女房子供の飢をも助けず、碁双六に打入小便をこらへ、さし合なしの俳諧に夜更して犬におどされ、すべき家業を外にして、わるふ莊子をのみこみ、人を人とも思はず、母親の前にて大口をきゝ、父親の文盲をあらはし、知らぬ太夫の紋所を付て三夕の座敷にて、せんしやうのある限を扨も盡くすやつかなと、襖一重あちらに誰がゐるやらしらず、嘘八百に矢嶋屋三右衞門といへる男、昔は大宮通にて相應なる搗米屋成しが、母親、分に過たる浮世ぐるひを異見せしに、尻に聞せて馬の耳に風吹秋の末つかた、あたりにあやまちて火の手見ゆるより、三右衞門が家風下にて、急に吹つくるほのほの中に母を捨置き、手廻りの帳箱、貯溜めの金銀取まつべて、壬生の方へ立退けるに、折節甲頭巾に大小きめたる鬚男、三右衞門を踏倒して、持たる金銀帳の入し箱も、奪ひ取て行衞知れず、三右衞門聲を立けれ共、諸人火元へ〳〵とかけ付て、誰見かへる者もなし、無念ながらほう〳〵腰骨をのして家に歸れば、外にて燒とまりて三右衞門が家は別儀なく、捨物にせし母親も、何の子細もなかりき、三右衞門は我と持て出て金銀を盜まれ、あまつさへ踏倒されし腰骨、次第々々に痛みつのりて、療治の及ぶべきにあらず、家まづしく衰へて、後は千本通の末に楊枝を削りて、喰はぬ口に腹をしめて、世の中の哀を思ひ知り、此の時不孝の罪を歎き、痛む腰骨をかゞめながら、朝夕のなりわひを手づから營み、もへすさる木も母人の手にかけず、扨も心の直るものかな、母も誠にふびん勝り、其營みを助けんと云へば、三右衞門さら〳〵御慈悲の上は、何事も我身一人に任せ給はるべし、せめて今までの不孝に一杯の茶粥も、手づから盛りて進ぜたしとの願ひ、浮世の儀ならぬためし、如何にも樂に養はるゝ時は、隨分母人に惡しく當り、十夕もうければ、壹分もげぢく心成しが、今の孝行天も其罪をゆるし給ひ、何卒來る正月には餅を喰せ給へと、分にまかする願ひ事、極月廿六夜の月はまだ出ぬ深夜業に、かすりし油たちしまい、はつとして消ゆる燈火、あの世へ參る夢のさめぎわも、こんな物成るべし、それより親子削り臺を枕にやりちがへて、寢られぬ程冷る今年のさむさ、廿年此方の氷柱村鳥のさわ

ぎもゑようでも有まじ、鉢たゝきもしゆ行の外の口すぎ、諸人はら一つのせんさくとわらい、ねがての折ふしごと〳〵とおもてを叩く、來る人の覺へなければ聞捨にするに、猶忍びやかに叩き、頼もう〳〵と云ふに、三右衞門此内へ押込の氣遣はなしと、戸を引あけて誰じやと云へば、火をともさしやれぬかと云ふ、なんでござる今宵は油がきれましたと云へば、そんならいへばすむ事なり、別儀にもあらず、我は先年火事の砌り、其方を踏み倒して金銀を奪ひ取し者なり、某は西國方の侍なるが、樣子あつて浪人して九條邊に身を隱せし内に、貯への金銀なくして老母をはごくむにせん方盡き、よしなき盗賊の心いでき初て、其夜あとにもさきにも、其方の金銀をばい取しばかりなり、其金銀高五十兩三歩、これにて丸二とせの浪人の糧となし、時節をまち本知にかへらば、帳箱をしるしにしてばい取し金銀はもどすべきと、心願あやまりなく、本知に加增あつて生國に歸參し、此あらましを訴て罷上り、其方の事、よそながら帳箱の所書に合せて尋ぬるに、段々零落して今は此所にあらるゝよし、今日日の内にとくと樣子を見とゞけ置、深更に及で參るも、我等二字のけがれん事、外の人の聞所を憚る故なり、其方の金銀盗みたればこそ、大切なる親をはごくみ、武運の開くる時にも逢ひたり、是恩の金銀なれば十層倍にて返濟申したけれど、當分心の及ばぬゆへに此通り成と、金子二百兩三右衞門に相渡し、家來に持せし帳箱をさしをきて、重て叉尋ね參らんとてあとけして歸て後は、いかなる武士やら顏もしらず名も聞ず、親の爲に命をまとにかけてぬすみする子もあるに、我今迄の不孝、さるにても臍をかむに益なしと、泪ながらに母人へも申し、扨も武士は武士なる心底、あやまつてあたゝまつたる仕合と、親子手を取くみて悦びしが、三右衞門腰骨の痛を忘れて息才に成ける、是も不思議なり、いざ此貳百兩にて商に取付かんと、はぎつけたる米屋となり、次第に家榮へて隱れなしとや、

(三)いもせの中のはね釣瓶

もりやしにけんいにしゑの都、奈良の片里柏木といへる所に、男子二人もてる寡女あり、極めて兄弟共に孝行にて、萬母の仰にそむかず、兄七兵衞には嫁を迎へけるに、此の嫁も姑によく仕へて、七さとからる

る物怪もなく、父のしにせなれば茶を商ひ、卯月の末より七兵衛は新茶を馬に付て、南都の小商人に卸し廻りける、弟八兵衛はいまだほいろ最中なれば、商賣に精を出し、そこよ爰よと走り歩けば、宿には嫁姑、火かげんに心を配り、雇の茶摘み歌びくにののらまつごもを、言葉で悦ばせて働かせける、嫁たる人の善惡にて、中より下の身代は盛衰きのあたりぞかし、或時嫁外面にいでゝ、はねつるべの石を括り付けかゆるに、姑手傳はれけるが年寄の力よわく、取おとして嫁の背中に當るや否や、うんと云ふて目を見つめ、正念亂れて忽はだへ冷たし、姑驚き水を注ぎなどするに、口をとぢて扨もかいなかりける有樣、折節八兵衛戻り合せて、はだをあはせて水を口より鼻に入て、其後口に吹込けるに息いでゝ、あゝ苦しやと我とむねをさする時、猶よび生てよう〳〵氣つけの藥を用ひけるにぞ、しやうねたしかに成りて、人々色を直しける、是日頃に嫁姑中よからずば、樣々人の取沙汰も有るべきに、いづれも誠の怪我なりと、何の詮の付け人もなかりき、廿日ばかり過て七兵衛戻りければ、女房何のかはる風情もなく、一行先のあらまし留守のうちの無事など、語りつ聞きつ互の手枕、俄に顏色青ざめ次第に云ふ聲細りけるに、七兵衛驚き、なんとしける氣色ぞやと兎角うかゞふ脈も、絕たる玉の緒の別れと見えけるこそ、いかにうたてかりぬ、女房いまはの一言泪ながら申けるは、みづからは廿日以前に、不慮のあやまちにて此世を去りて、地水風火を離れたり、くれ〴〵姑御の御難儀思ひやるに悲しく、目くらむ心の內にも、何卒しばらくの命をのばわり、定まれる病にて相果しと、世の人の口をとゞめたく、非業のあやまち是因緣の廻るしわざ、露塵姑御の科に非ず、怨むべきに非ず悲しむべきにあらず、はてしなき夢を何時迄かまどはん、只姑御に孝行の盡し足らぬこそ罪深し、何事も宜敷く計ひ下されと、引息にしたがひはだへのつやかれ、しゝむらやつれて、番の骨々くつろぎ、ひとへに二たびいだく野ざらしの如し、扨も深き孝行の心天帝に通じ、夫七兵衛が歸る迄此世にさまよいしは、哀れにふしぎの最後、七兵衛わつと泣出せば、母も八兵衛も隔し一間より聞つけ、始終の物語、老母嫁殺の科世にははづかしき、命存へて何にかはせんと、自害と見えしを押止め、八兵衛、我兄嫁に思は

ず肌を合せ、口より口に水を吹入し此不義、人間の仕業に非ずと、母の持しながたなをおつとり直して、咽に突立つるを七兵衛引とり、さりとはさに非ず、女どもが眞實の孝行無に成るのみならず、却てよしなき世のそしりの種也、兎角は彼が菩提の爲に、我は出家し母人を伴ひ、西國三十三所の順禮思立んの間、八兵衛はつゝがなく、此家をゆづるの上はかはらず商して、母人のいりまい所といたせとの仰せにて、母は兎も角も、いとしき嫁の爲ならば、乞食しゆ行の身となるともいとふことにあらずと、嫁の死骸にいだき付てくどきつ泣きつ、哀れははてしなき泪ぞや、八兵衛兄の仰そむくにあらねど、是程のうれへを引うけて、世を立てん心更々思ひよらず、同く出家して母の供致したしとの願ひ、一應もつともなれど、それにては先立て過給ひし、親父への孝行欠るなり、云ひ甲斐なく父の名跡つぶす事理にかなはず、其方一人は此家を立てゝ子孫繁昌さする事、夫孝行の至極なりと再三の異見に、八兵衛は心ならず出家を思ひ止りける、七兵衛は女房の骸を無縁寺に送りて、直に戻り來りて、母人の供してしゆ行の道に赴きけるが、折節水無月の風なきあつき日の、旅づかれねがての夜々は、嫁の面影いづかたへも付隨ひ、團扇をあをぎあつる夢のみ見て夢ならぬ有様、涼しき極樂の風有難き、さても嫁の孝行や、これこそ人の鑑うちわなれ、

（四）千夜をひとよの神鳴

小兒に腎虚火動の症、今時珍しからず、すでに難波の鯉といへる男、十六歳にて千兩のあづまを引ぬき、並びなき分限を、もしやくしやとしてしまはれける事、さるにても萬づ取越たる今の世中、とつかにぎらぬさきに、楊弓のきりあなを念がけ、御傘見ぬ内に俳諧の點者となり、嫁入の長持に出來ぬ先のうぶきをつめ、赤子に額ぬく毛拔を用意し、ながうたから習ふて、吉野の山ついにしらぬ三味線、野郎に十六番の小舞、こんなまだるい事に便々と日をついやさす、頭からあくにんがたと詰合いのせりふ、さきへ〳〵と氣がはやりて、何事も元を辨へず、花が咲いて實がのるべきや、親父死なれたらば、さらりと此家打崩して、當流の江戸ばたの腰板にしかへ、軒の捨石も氣に入ず、書院のなげしの彫物、竹の子のにもの〻やふにて、見る度に顔がしかまれ、雪隱の狹いは今時はやら

ぬ事と、しやらくさや親父のかげにて、若旦那と敬はるゝ身の程を知らず、不孝の有限り言葉に足らず、先祖累代の家を、野傾の爲に打こぼつ、此科五逆罪にも越えつべし、爰に世間をよう呑込んだ茶わん屋宗半とて、もとは勢州しろ子出の人にて、江戸の眞中に商を見すへて、萬の荒物店を飾り、次第に所繁昌の幸ひを其身に、得たりやかしこき老舗にて、しこためし金銀をうめかせ、貧者の耳のちいさきを哀ならぬ程の慈悲、しかも名聞を離れしおもむき、陰徳陽報の天の惠に、一子孫太郎、天生美男にして萬きようはだへ、しかも女のいとしがる風俗は、身に付たがらなり、ふり袖は、しゆ道のもや〳〵おそれあれば、早くわきつめ、角入し十五の暮、大ぶりなる故よく似合て、一入麗しきひたいつき、女に成て見まくほしさよ、遠く遊ばぬ白鼠にて、近きあたりの諷の師春藤何がし、儒者のこうげん方より、外の交りもせざりしに、大坂屋のうたひ講のくづれより、小道具屋のさふに誘れて、初て桐屋市左衛門方にて、つれしゆの引合によつて、あたまから茗荷屋の太夫、すこしあどなきよねに新枕して男の水揚、こゑ今宵よりぞかはるらん、此事からうの十兵衛、傳へ聞くより氣の毒がり、下にては中々すまぬ大事の前の小事ぞと、額にしわを疊んで宗半へかくと申上れば、親父うなづいて、如何にも其方たち、此の家を大事に思ふての注進、臣たる者の道至極せり、さりながら我等了簡には格別なり、よく聞かれい、惣じて若い者の悪所に遊ぶ事珍しからず、是をひたすらに折檻する故、結句逆馬に成て、外にて銀を才覺して高利を出し、人目を忍ぶ心から、生れつかぬてれんをいひ習ひて明徳をくらまし、行先を宿にていはぬ故用のある時の間に合ず、友をかくす故不善のつれを誘ふもしらず、是皆子を育つるすべしらずのむるたぐひ數えるに盡ず、爰に傾城買に只一つだう文盲親世間に多きゆへ、重代の家を亡ぼさせ、身を沈だうおとしの異見ありと、急ぎ孫太郎を呼出し、其方三谷へ参り傾城狂をすると聞く、一だんなり、隨分宿に用事さへなくば、毎日にても参るべし、扨申渡すは、其ちなむ女、本妻には勿論、手かけ抔に召抱へ置事ふつ〳〵ならず、傾城の內は隨分ふびんがりて、金銀多く取らすべし、か様に傾城狂を、おしはなしてゆるす親は、世間にまひとりと有まじ、其かはりに只今申渡

す趣を急度守るべし、たいこには手代ども替はり番に、二人づゝ附添參るべし、これも同じ手代を二度と召しつるゝ事有まじ、必ず番ぐり相違有べからずと の仰せ、十兵衞も泪を流し、御尤成御意、若旦那にも能々御聞取あそばせと申て罷立ぬ、さりとはでんご はれたる傾城狂ひ、世間の老人とはちがふたる、親父の了簡に孫太郎夢覺て、兎角傾城は慰み一片の遊物、とても妻にも妾にもせぬものゝ、誠も僞もたゞする迄もなく、心底を引て見るも無駄事、只こちの氣の張ぬ樣にするが德なりと、五六年の内に女郎三十人ばかりに逢て見ても、いづれもしらけて深入もせず、おかしうないでもなし、又面白いでもなし、雨だれ拍子の三谷通ひ、やまねば成ぬ親の異見もあらふ事なり、何時しか孫太郎氣うつして不食の面やせ、醫者衆もむづかしい仕出しの豚あぢと、親父の氣遣大方ならず、扨はあまり世間はゞからぬ遊び故、張合が拔けておかしからぬから、氣をつかされしものよと、十兵衞打わつて孫太郎が心底を是非にと問に、全く傾城狂の事にあらず、さりとは雲にかけ橋とはいふか、霞ケ關の邊りに、御中屋敷のありしお大名の御小姓、ちくさ染之丞殿と申す御かたを、過し神田まつりに見染、あられぬ胸の戀草、露の命を捨る程の思ひ、さるにてもやくたいなや、今時それにこしらへてある木挽町さかい町の美形、心安ふ銀で成戀もあるに、それを何共思はず、ほとびすぎた大名のふびんがらせ給ふ若衆に戀慕するは、我餘程冥加に盡た事と思ひ直して見る程、さても攻來る戀のせつなさ、御面影忘れられず、叶はぬ思ひにどうでおれは死るであろと、はらはらとこぼさるゝ泪に十兵衞もうつりて、けふたく成り、さりとはそうも其若衆樣を戀ひ給ふかや、是だんな金銀にて成ぬ戀はなし、近頃御心よはし、如何にも傳手を求め、お前の御心入を申入なば、先樣もお若衆なれば、よもやお情らしい御事の有まいものにもあらず、拙者へ御任せと、いふより十兵衞手を廻し、小判をしいて、ないせうを染之丞殿に通じけるに、去とは左程に此の身を思召下さるゝ事の嬉しさ、もつとも殿樣の御寢間をけがす我身なれば、心の外に身を任せます事成り難し、さは云へ一度は何とぞ御心に從ひ、ぬし樣へ御こと譯を申して、思召きり給ふ樣に仕るべし、兎角御側はなれぬ奉公なれば、たやすく御

げんも成難し、兎角首尾を窺ひ、こなたより御知せ申べし、其時は如何にも忍びて通はせ給へと、御情深き戀しり樣、誠にかみつかたのうへぞかし、此うれしき御いらへに、孫太郎十兵衛を拜んで、そちは命の親と申されけるぞ、よく〳〵の事と猶あはれに成ぬ、是より孫太郎氣色を取直して、萬まめしき風情に、親宗半の悦び、手柄もなき醫者殿、いつかどの藥代してやられけるぞ、世の仕合ぞかし、かくてあなたのよすがをまつ時、日くれ月たちて、やう〳〵五月四日の夜、竊に長屋のあな門より、かう〳〵の姿にて忍び參るべし、明くれば節供だちにて、殿樣御入國にて御供申して下るなり、今宵こそ御首途のにぎわいにて、一家中の取込、よこめのまなこだまのくらむ折、今宵ならではなき首尾との、詳しき御指圖のおもむき、孫太郎天にも上る心のたしなみ、忍姿の身ごしらへ、悦勇んで十兵衛が、萬の世話にて出立すまして、初夜のごんごん開くより宿をいでゝ行く、戀の闇路に飛ぶ螢、風にちりて一あしの村雲、ふり出す雨は竿竹にひとしく、濡ていとはじ忍ぶ夜の仕合せと、心うれしく行惱むも面白きに、とゞろきの神、ひしやり〳〵ごろ〳〵と、東西の分ちなくいくつか響き渡りて、落かゝるべき空の氣色、孫太郎親父の事思ひ出すに、さりとは人の性に依て、何事にもつかへぬ心の人ながら、上もなき神鳴ぎらひ、いつとても重ね夜着に御身をちゞめ給ひ、我手を力と握りおはしますに、今宵此大鳴に、嘸かし恐れおのゝき給はん、それに我のめ〳〵と、戀ごころには有るまじと取つて返す、いや此戀今宵限りにて、翌は國へ下り給へば、重ねて逢ふ事かなはず、ことに二腰も指す人に、せつなき思ひと申たればこそ、樣々の心を盡され、今宵の首尾をつくろはれけるゝ、此ぎりといひ戀といひ、行ずばいつはり者仇惚れよ、町人の心はさもしく、神鳴に恐れて忍ばざると、さみしられんも口惜し、兎角參らいではたゝぬわけなりと行かへりしが、いや〳〵義理をしり戀を知るも、是親の恩ならずや、あら勿體なやまよふたり、しれてこわがらるゝ鳴神の、塚に伽せしためしもあり、それは云ふた分にて誠なき孝行ぞや、現在の親につかへぬ不孝の罪、神鳴より空おそろしやと、ちゞの分別一途に極め、足を限りに走り歸りて、親父のおそばに參れば、例の如く二重天井の座敷に蚊帳を垂て、大夜

若の下にかゞみ給ふ、扨こそとごしん香をたき、加茂の守りを頂かせ、お臍の御用心に氣をつけ、桑原々々を申續けに、程なく東の山のはに明方の雲棚引きて、神鳴もしまはれける、去とはせつない戀路にかへて、親に仕へし孝行孔子に聞せたいまで、

今樣二十四孝卷之四終

今樣二十四孝卷之五

（一）目の玉ひつくりかへした因果

花もさこそと人を見るらん世を、ねばふかたふねちみやくするは、鬼も笑はんあすの事、今日九重や八重の汐路、波間に見ゆる隱岐の國の、城主につかへし舟越芦右衛門、食しやうして一日一夜のなやみ、遂に四十二歳を此世の限り、跡に殘れる妻子の歎き、たれかは鰛汁にて相果しと取なし、芦右衛門事家老しゆまでさへしこそ、げに大疫の印ぞかし、殊に男子もなく、跡目女子にて立難く、屋敷取上られ、元より芦右衛門他國者にて、土地に親類もあらざれば、泣々後家は、十歳に成娘をつれて上方へ登り、世のよしあしを難波津、少しのゆかりを目あてに、安土町と云へる所にたな借して、人は一藝に用ひらるゝならひ、よき女筆とて、何時となく手習子供かさなり、いと取わたつみの師匠屋となりける、水の流のうたかたや、此人の昔をしれる人の語りしは、其かみは都櫻の御所に宮仕へして、姿心ざしも共にやさしく、見る人の思ひ、

うつゝにこがれ夢に慕ひ、あまたの戀文見るさへひまなかりし身なるが、いづれにひかるゝ若草の、三味線のばちびんに思入て、御内の青侍芦右衛門と、何時となくなびき合、後はほに出て人も名を立て、共に御暇をいただき、折節衣紋づけの申たてに、西國へ相住み、夫につるゝ浪枕、かわせし夜のしるしに娘をもうけ、みがゝぬ玉の光り自からの艶女、父母も自慢に田舎ながら京ぞめの小袖、重ねし年月行末を頼母しく、鳥や花見も忘れし親のほんそう子、分よりはゑように育てられしに、今は浪々の身といひ、父なければこゝろはそむにさもしく、氣儘にもあるべき筈なるに、さるにても此娘、母への孝行年よりもをとなしく、聊心にそむかず、夜の寝ざめもわざとならず、母の枕の外れるを直し、冬は寝衣に心をつけて、我小袖を脱ぎて、母人の知り給はぬ様に着せまいらせてすそをおさへ、夏はあたらぬ程に、團扇の風に心を運び、晝も目めもす親の機嫌を伺ふ、あはれ父ゐましてみせまほしく、母も子ながら心はづかしく、いとゞふびんのまさりける、此母人うまずめにもあらで、淋しときの猫を三疋まで手飼して、轉々も見えねば、萬のことをうちやりて呼び尋ね、人しげなく申さるゝにも、娘更々心にそむかず、倶に尋ねもとむるに、三毛のを猫くれてんに見えず、屋根續きのあいがし屋をこゑをからして呼たりけり、たつ町の魚屋の内よりなく聲を聞つけ見れば、三毛を縛りて度々此のら猫めが、賣物を盜み喰ふのみか、今日は二尾て廿匁に値をせし鯛の、目の玉へ爪を立てかぶり付き、さづ物にしをつたかはりに、今夜東堀の橋より石をくゝり付て、さかさまに沈めに落すとのゝじるを、娘見聞くにかなしく、母人の我にかへても、ふびん深く愛し給ふ三毛を殺させては、今宵より物思し給ふを、見ぬ内にむなつぼらしくなりて、色々に詫るに魚屋合點せず、幾度か〳〵、こいつにかゝつての損銀、高も算用もしれず、まこと猫が助けたくば、魚代を持ておじやと、角ふりたてぬ計りこわききつ相に、娘是非なく内に歸り、よしなか染の小袖ひとつ、ひそかに取出して、手早く魚屋へ持來り、是にかへて猫を助け給はれといふに、魚屋やう〳〵合點して猫の綱ときゆるすを、悦びいただきてつれ歸り、母人に見せ參らするに、ほゝに入給ふ猫なで聲に、自づからのご鳴らして、こいね



ぶりける其夜、三匹の猫魚屋に行て、亭主の留守の折ふし、女房一人うたゝ寝の枕近くありし、ひるの小袖をたゝみながら、四の足にてたがへて、仰向きになれば、一匹の猫其尾をくわへて引ずり歸る、女房目をあき合せて、留めんとすれば、一疋の手明きの猫、鳴たける聲もすさまじく、ふきたてゝ眼を見出し、女房ののどぶえへくらひつかんと、念かくる勢ひ、おのづから女房身ぶるいたち、ゐずくませて、とう〳〵小袖を取かへし、主の家に持はこびて、其あけの日三疋ともに、行衛なくなりしこそ不思議なれ、魚屋はおそろしく、我から沙汰なしにすませど、世の人の口に戸がたつ町よこ町の噂と成て、邪慳の魚屋とて、あきないの得意も次第に門ふさがり、身代びろくして夫婦分れ分れになり、行末も世にしれず、手習屋の娘は、常々孝行のみやづかへ、人もよい事をふれあるきて、勢州白子の分限者、美形の養子を詩らるゝ折節猫の噂、此娘の心ざしよく器量よき事、是こそ望の年ごろもよしとて、早速談合して母人も倶につれて、白子へよび取ける、誠に孝行深き天のあはれみ、ひる世もたのしく行末も目出度、水にすむ魚屋が成行きめぐる因果、さてもおそろしの世や、

（二）竹にうまるゝ鶯大臣

過し東の口ずさび、霜月半ばの夜の雪、ついそれとも見せもせぬ、どんす三ぼんにて、上下に袖のある仕出し夜着をこしらへて、贈りし大じんに鼻をあかせて、深川の下屋敷へ引抜て取給ひし、かへ名を竹様といへる女郎の果報、さるにても玉の輿に、乘りすましたる女のゐげん、如何にも男の子をもちたる母の、かたすぼりたる浮世ぞかし、此竹様の御腹より出生なされし若大臣様を、かへ名を鶯様といへり、扨も江戸衆ふる口かな、沽徳桃隣もゐるに、しほのからいぎりの取様とて、吐海上京の折から、名にあふ今しよまつ社共あつまりて、吐海が胴をみたす時、此法師眞顔に成て、いづれも聞かた違ふたそふな、竹に生るゝ鶯と云ふて、今此世せ界に人がゆるして置かふか、汝等此鶯れ鶯は春の初音の面白さ、どうもいへずの時鳥におとつたと、清氏の女もいぎたなしと書きしは、鶯はひるはしあるけどよるは音がなし、されば此大じん二親への御孝行中も中々おろかなり、其身見事な御身

代なれば、人に人をつかひ給へど、御隱居御夫婦の寢間のあげをろしを、御自身に幾年かつとめさせ給ふこと、世にかくれなし、三谷に面白くあそびの油のゝりし最中にも、いかな〳〵一夜も忘れず、四つの時計を中橋できくやうに、ぜひに戻りて寒暑のよるのふせぎを、ねんごろにしつらい給ひぬ、此孝行天の惠みいつはりなく、次第に家繁昌して幸時に逢ひ給ひ、まき給ふほどもうけつよく、一ころ時むね樣と申けるも、つよい大じんといふ事にあらず、吉原でよつてかかつて貰ふよりは、十層倍で內へもうけ金がはいると云ふ事ぞや、女郎買にはよるがよいと云ふものずき、三夕酒のむ男まで申す事なり、晝はしらけておかしからねど、それは金銀次第にて、ひるでも大晦日でも、しづかにしよふとやかましうしよふと自由自在なり、御兩親の御氣遣をかなしみ給ひ、晝はあそんで暮ぎりの大じん、なんと古今例しなき傾城買ではないか、こんな事を存じもなさいで、江戶者をつかまへて、ふるいのかたいのとはおいてもらをふといへば、何れも一度に手を打ち、扨々御奇特なる大臣樣や、此連中いづれも親のある者共なれど、そんな事はけもない事、養ふ事を天にも地にもない樣にいふて親に恩にきせ、もらふて戻る小袖羽織もきたい程よごして、もつたいなや子の身として親に古着をまいらせ、さき〳〵にてのみすごした二日醉の頭痛を、母者人にひねらし、八百屋見世を出しては親父に掃除をさせまし、異見らしい事ををむしやれば、眼玉をひつくり返し、このんでをれが夜ふかそうか、何も身すぎなればこそ、取りぐるしい人のきげんのよい時もあり、わるい時は劍の舞めさるゝもおそろしけれど、そこらも人に疵のつかぬ樣におさめてまはり、何ぞ見えぬといはるゝには、こちらからはやふぎんみにかゝり、くぜつの時は女郎をひかずに、何となふたてゝやり、さし合のはなしがでれば、ちやつとあぢにくろめて廻り、或時はのぞまれて、烏の糞喰まね、ざとうの手てんごうまつる狂言して、おかしがらせねばさき樣に氣が付かず、田舍の客には手ばしかふ立まはつて、錢のいらぬゐんしんして氣をとつて、さきの手を見て女郞に通じ、かぶろを芝居見せにつれて行く日は、わがまゝなれどちいさいほうげたから、どの〳〵とぬかすも憎し、世にたいこもちといふものには何

がなつたぞ、三百六十日木枕ばかりして、朝飯と夕めしと一度に食ふ事、其外輕口あたらぬ日は、しやうじんのまけくじにお白洲へつくばふ、心からすいものものごへ通らず、こんな苦勞も親の爲なればこそつとむれ、身一つはごきをさげてもすむ事と、百萬だらの説法を親にいてきかして、我ばかり世界に錢儲する樣に是れは何事ぞや、きやうこうはたしなむべき事と、一代になきじつばなしに成りける、あずま法師申樣、汝等もおぼえあらん、我等も幾人か手にかけし大じん、孝行なと不孝なと、其身の行末さかり衰へ、さりとはきつい針のさきなり、まづ死一ばいをかりし大じん、疊の上で死んだ人を見ず、まさしく是、親を調伏するむくひなり、此まへ江戸に里よりおふくろのけはひ田にでんつけられしを、とつてげぢかれし侍は、月夜に日本堤にてにげきづを被り、直ぐに逐電して、木曾海道にでん樂やをしてゐらるゝと見知し人のいへり、又貧堂銀をへづられし人は、さりとは見苦しく成さがり、上野に近きさる寺の墓守して、人のうれへのつゝみ錢にて、露の命をつながるゝもあはれなり、此かくな事上方にもあらふ、云ふて見よと申せば、四條通の古まつしやうなづいて、如何にもわかげといひ色といひ、前後の分別は尤なれど、大方のことは人もゆるせば天の咎めもなし、上京のさる大じん女郎あげ屋我々に至るまで、今こそ手がまはらね、親父まいられ次第に見事なぎをして、今日も明日もさまさそふと、口だんばく常々申されしが、此親父年のよる程、次第にかつしりとなられ、つかれし杖も苦になるとてとつてほかし、帶のほそいは力がないとて、もうせんのいつた幅廣にしかへ、貳尺壹寸の大脇指、利休形のひとつ印籠、ほつたいながら、醫者にまぎれてうるさしとて、大きな紋所を好み、しつかい歩きぶりは、きやうゝんに、もちつと大あしにて寺參り、精進などゝいふは若い内の事、年寄つては食いたいものしたい事、のこさぬこそ世の思ひ出と、名のりかけて老をおこされ、さながらにしぐるひは遠慮して、はく人のおしんがおもよといふた時、是れに出掛けてたのしまるゝを、むすこ殿わかされて、どうであの氣丈には、一ぷくさせいでは埒があくまいと、毒藥を調へ折を窺ふ時こそ得たれ、親父何としられたやら、俄に目まい引息絶々なるに、一家驚きそれ醫者殿よ、まづ

氣つけはないか、如何にも是にといひ樣、むすこどのおぼへずかみわつて、親父の口へ入ぬさきに、其身うんといふてそりかへり、廿六歳にて我と毒藥を呑で、死なれけるこそ淺ましや、おそろしや忽ち惣身紫だちて、毒藥のしるしたれいふとなくあらはれし、親父は早速、出入の醫者はり立かけつけて、とう〳〵こち物に取とめけるが、さるにても親の慈悲にて、夫程の惡人を哀れにかなしみ、逆樣川の手向水、露も涙もしぐれ降る、其年の十月に親父も果られ、あとはとをい親類のものとなつて、鎖のおだれつり、軒の松根はつれなく殘れど、ぬしはかへらぬ昔語りに、そうそうがぐにやりとなつて、無常を觀じ因果を辨へ、すべきものは孝行、ほしき物は小判、泣く〳〵ちへも是がいれかしとねがいぬ、

(三)八年のうらみは夢の尺八

ばてれん切支丹の宗門、累代御停止の御制札、所々にたゞしき今の御代には、ころびのやからも御帳面にとまりて、其所としてはごくみ、妻を持たせねばおのづから子孫絶て、うろんの宗門みんせつせし、正法の時津代こそ有難けれ、爰に一とせ稻葉山、松澤定太夫といへる郷侍、同國今木勝左衛門と境目の論を公事に取結び、決斷所に於て對決し、勝左衛門非道あらはれ、愈々野心をはさみ、定太夫を闇打にして所を立退きける、定太夫忰、定右衛門定介早速追懸けれ共、兼てぬけ道の山越を案內せし故、打止めざるこそ無念至極、是より兄弟しめし合せ、資財田畠をこきやくして所を取りのき、母人を伴ひ勝左衛門をねらひ、上方にも暮し四國にも住宅し、樣々所をかへて讎の行衛を尋ぬると雖、今年迄知れざる事、さるにても深く忍べる年月、八とせの暦を見盡せしこそものうし、今は播磨潟市の河原の片里、牛堂に住みつけて、明暮姫路海道を窺ふ、爰ぞ西國順道上方への往還、絕えず敵のつてに心をくだき、明暮母人の心をいさめて、兄弟寢食のみやづかへ怠りなく、うや〳〵しく禮儀を亂さず、母人の衣類、鼻紙楊枝迄も置き所を別にして、尾羽打枯らしながら、其不自由を見せず、隨分心の及程はつかうまつれど、永々の浪人はりを藏に積んでも、八年九年に貯へ盡きて、今ぞ風なき木の葉のたきゞにつき、米からうとのさやなり、心の刄もたゆみて、刄金ならせし昔を夢に、現の今のあさましさと、いと

ご無念さかさなり、武運に盡て勝左衞門に、廻り逢はざる事のかなしさ、昔曾我兄弟の敵打、武士の子としてゝ三つ五つよりはたちに及ぶまで、手をのばせし事油斷の至りと、侍の上には少しさみすると云へども、敵をねらふ身に成りてこそしれ、さきには命にかけて隱れ忍ぶ故、思ふ樣に打るゝものにあらず、されど祐成時致は仕合せ者にて、敵の病死せざる内に、打すましで名を殘しぬ、我々かく日を送る内に敵病死せば、云甲斐なき腰拔の名を取らんも、口惜や無念や、又見かけたる敵ならば、ゑぞ千島のはてへもさがし赴かんなれど、雲を目あてにしあるかんも、覺束なき母人の御事、ひとりは母人に付け置て、一人は敵をねらひ出べきにも、兄弟いづれがおなじ思を引分れ、一人打べき道理もなく、兎角に運强きかたきやと、今日は弟定介往還に出て、敵のよすがを窺はんといつものいでたち、敵をかくる天の網笠、深くつゝみしゆだんに、念力の一腰たすき掛に引むすび、子を思ふ鶴の巣籠といふ尺八の手は吹かで、我は親の敵を打ちたさゆへに、じだんだ踏む鹿をどり哀れと開けや、世の噂往來の諸人に目をつけ、氣をうつして泣々歸る雀いろ時、我住む軒のしばがきにやう〳〵取つき、覺束なき足元、是此ごろより鳥目といへるを煩ひ、七つさがりては盲目同樣の有樣、兄定右衞門立いでゝ、手を引て内に入れ、早く歸らずしてうとましき、病度々起りてさぞ難儀に思はん、かなしきは見る目の養生せよと、わりなき御仰せ有難し、されば段々手まへ零落して、母人をはごくむに心も足らず、拙者も斯る病者となり、共に御苦勞掛申す事、さるにても迷惑なり、爰にくつきやうの事こそあれ、天下御きらいの御宗門の者の訴人に罷出なば、黃金五枚下さるべき御制札たちてこれあり、拜見の上存じよりしなり、拙者を其ばてれんものと御申し、御自分樣訴人に御出ありて、御褒美を御もらいて、母人を心安く御はごくみ下さるべし、拙者儀、とてもか樣の眼病にては、夜の用に立難し、敵に何時か出合はんもしれず、其時生中をくれたる振舞ありては、生前の耻辱末來の怨み、思切て母人の爲に命を捨るは、父の敵うたざるかはりなれば、孝行の道かけてかけぬ道理なりと、思込し心底聞くさへふびんに、定右衞門泪にくれ、如何にどうあればとて、現在の弟を兄の身として、まざ〳〵殺さる

る訴人に出づる事、人道にかけたる事云ふも愚や、兄弟一緒に敵を打てこそ、父定太夫殿も悦び給はん、たとへ我一人首尾よく本望をとげたりとも、同じ父の子の其方を、云ひ甲斐なき死をとげさせては、其手向父も心よくうけ給はんや、一つは現在の母人、汝かく相果つると聞給はゞ、御嘆深く、大方は御命も危し、しかれば其方存じよりし心底は、孝行ながら却て不孝の限り、兄への不悌云ふもいまはし、呉々思ひ止まれと、泪の数々理をつくして申さるゝを、母人物ごしに聞くより泣さけび出て、兄弟が心底、さるにても親の身ながらも、頼母しく嬉しくかなしきは、如何に世に有る人の子どもに、義理分別もまけぬに、かくも永永の浪々、偏にかたきの行衛しれぬ故なり、何卒早く本意をとげさせ、再び松澤の家を榮えさせ、馬に乘り鑓をもたす風情見たきと、泪の中に兄弟を祝ひ給ふ母の心のせつなさ、定右衛門定介も、おつゝけ敵の首をとつて本國に立歸り、武命の名を揚げ目出度世をへて、母人にも思召しのまゝなる榮華にあかせ、御壽命は五百歳孫のまご、つるの毛衣龜の孝行、兄弟憂を慰めて、有合せたるさかしほを母人にすゝめて、二人連吹の音竹、きゝね入にし給ふ、おすそにおほふ薄衣のひまより、ふしぎやれいくとしたる心火の玉、飛んで行衛なし、さるにても如何なる事やと、母人の御いびきを伺ふにひとしづまり、常にかはりし御風情、心もとなくあきれ、兄弟顔を見合たる折節、最前の心火は、いづくともなく飛歸りて御裾に入と母人夢をさまし、あゝ嬉しや明日こそ兄弟に、本望遂させんと御悦の御言葉に、心落付き様子を語りて、あらましを尋ねけるに、我日頃敵の行衛の事のみ思ひねにせぬ夜はもなし、さるに依て毎夜うつらくと、しらぬ國さとを廻る夢のみ見て、さめて後語らんと思へど、其方角もおぼへ忘れてせんなし、今宵兄弟が尺八をきゝ寢入にせし夢に、此國のかこ川の渡しに、行ともなしに佇ずみしに、敵勝左衛門、九州より都へ登るとて脇道にかゝり、彼の宿にこよひ泊り、明日は此河原を通る、仕度云付けし家來二人、しかも用心の爲に、かいぐしき者を召連れしなり、八年此のかた毎夜見し夢に、心にかゝりながら一度も敵の姿を見ず、今宵まざくと見しは正夢、氏神の御告げ疑ふは勿躰なし、夜明次第にうつたてと、母人の御すゝめ有難

く、よく〳〵御心にかゝればこそ、しれぬ敵の行衛を、御夢に見てしらせ給ふ、是親の恩猶深きめぐみ、天道を笠にきて出むかう我々、理の劔といひ、念力いかで仕損じ申さじと、兄弟日頃用意の着ごみ、鉢巻目釘をしめて指す刀、母人も兄弟が働き見物せんとて、なぎなたを持て出給ふを、初は御あやまちもやと止めければど、もろこしのためし、母衣は母の衣にあらずやと、御いさめの上は御供仕り、なほ吉事をうしろに、母人の御扣へ心頼もしく、河原に出てまつ所に、勝左衛門主従三人にて向ふより見ゆる、扨は正夢、まさしく今木勝左衛門おぼえあらん、卑怯者、おのれが欺し打にせし松澤定太夫が悴、定右衛門定介すねんの念力、只今むくふぞ、尋常に勝負せよと言葉をかけられて、勝左衛門もあらそふに及ず、二人と三人切結びしが、助太刀の二人を、定介切ふせけるひまに、勝左衛門を定右衛門ふんごんで、二刀まで手を負せ、ひるむ所をうしろより、定介くるまになぎたほし、兄弟左右より、恨みのとゞめさしつらぬき、首をはねて勝左衛門が定紋付し羽織、是幸におしつゝみ、敵の旗迄取たる心地して、親子三人悦び、其日に牛堂のかり屋をしまい、本國稲葉に立歸り、國守に御屆申上けるに、御褒美の御言葉有難く、御直き人に召抱られ、定右衛門二百石、定介百五十石にて、折節明屋敷のありけるを拜領して、軒に見越の植込み、松澤の家とて隱なし、

(四)相手向ふ位牌の喧嘩

何町何屋誰に負ふせ方の者共、ふうゐん掛定の御願早速仰付られ、御慈悲を悦ぶ一群、預け金高壹萬五千兩とかや、されば今の世の姿、四歩にてあつかふは、極意、五歩にてすむつもりと心得、六歩出せば上々吉のつぶれ、負せかたより草履をぬいで腰をかゞむる事なるに、あの人も今一歩どをりいださるれば、何れも中分あるまいにと、かゝりつながる組中の迷惑、よい事いふ樣に白晝にも步かれず、夜に入つてから、お宿に御座りますかと尋ぬれば、あつかい衆の聲ときて、旦那は能出ましたと、手代共が中にて返事すれど、奥に夜食喰ふてゐると慥にしれども、さすが左樣にもいはれず、いつもかはらぬ口上ながら、とかくおひざをだかねば成ませぬ、又明晩參るべしとて、歸るなみ、打寄りての相談、手が入足が入て、四十五人の

負ふせ方、四十四人迄得心の判すみけれども、平又一人合點せず、兎角金銀ずくにてはなし、あの仁のいたされ方が不屆にござると、口ごわく云ふには困り者、町衆も手のじゆつ盡きて、せんかた梨地の硯箱、すみはん取たい事山々なれども、とり付島もないとき、舟久といへるが、年寄の河六へ申されけるは、平又と隣町の木作とは、したぢ少し緣者のうへ、近年は色友にて、同じ家中の太夫にあはるゝときく、なんと木作へ折入て賴み、袖にすがらば木作も世話燒自慢、殊に揚屋にて云ひ出されなば、なんぼいぶりな平又にても、女郎の手前のせんしやう、木作申さるゝ事ならばと、ほくりと折れて埒明くべし、なんと木作を賴んで御覽もやとの時、殘の組中、一段是はしかるべし、仰の通り、色所でこんな事は互に外聞あれば、どう成共と我人いふことなり、さあ御年寄樣、木作へしかけてお賴みなされませいと申に、年寄の河六、にがひ顏してかぶりをふり、いづれもは木作方へお出なされてお賴なされ、我等は參る事ならず、よし此事木作を賴まいで、平又合點いたされずば是非なし、本人よりの不足程は、此河六が出してすまし申すべし、いかな〳〵木作へ參り手を下る事はおゐて、露程も賴むなどゝ申一言は、いやでござると木で鼻をこくられける、組中、是はいかな、段々仰せになさるゝたをれけん、緣に緣を求めて四十四人相すみしも、皆御自分樣の御はたらきなり、今一人の平又へのわびごと、木作などの緣は又有るまじと存ずるなり、其上遠方にもあらずおちかづきの事なり、それをお賴みなされまいとの御心底は、どうでござると口を揃へて申ければ、河六、されば〳〵不足金を、たとへ身どもわきためて出してなりとも、すむ事ならば濟せませうづ、木作方へ賴にまいる事まかりならず、其子細を申て聞け申さん、いづれも此内に御存じのお方も有べし、木作只今の居宅は、拙者をぢ河吉が家にて、河吉身代しもつれて、木作親父へ六拾貫目に質に入て、遂に流して帳きり仕りし時、我等親共も其時分は世間にうたはれ、大方つゝはりのはづれそうなる所、れき〳〵町中參會の中にて、ついでに河六殿の家も貰いませふと、申されしこそ口惜けれ、尤も木作親、其時分日のわうじやういたされぬ、申せばをこがましけれど、親のかたきを打つ程に存じて、隨分晝夜油斷なく商のかけ引、仕

合もてつゞひて、慮外ながら是程の身代にまかり成り、筋目とて一町のたばねも、皆がゆるさるゝゆへ上座へあがつて膳に据り、やきものゝ大きなも、たべるは時の仕合、めくそ金を鼻にかけて、せんしやうくさい事申されたる親父の子と思へば、今の木作も心よふは存ぜず、是侍ならば刺違へる程の憤り、親の無念を忘れて、今如何にどうあればとて木作方へ參り、馴馴しく頼むなど申事、近頃心外に存ずる、かう打破つて申からは、公儀の御意でも、木作に手をつく事はいたさぬと、兩眼に泪を浮べて、疊をたゝいて申されける、誠に深き孝行かな、凡親の志を繼く事、武士町人も品かはれど、道理は同じ事と、いづれも無理とは申されず、果して舟久より木作へ通じ、木作内證のあつかいにて平又得心いたされ、惣なみのぶんさんとつて埒明きぬ、其後きいてあられし町衆、此上は木作と河六と中なをりいたさすべし、兩方共に代がわりの事なれば、意趣も消てしまひし年月を、重ねて色々申るゝ上は、河六かぶりをふつてもゐられず、然らば和睦仕るべきか、我々同士の遺恨にあらず、親々の宿意なれば、まづ兩方のゐでの世ざかりにて、千兩二千兩の家屋敷五つや六つ買兼ねぬ、いかに身代なればとて、人の賣らふとも拂ふとも申さぬ家屋敷を、賣らぬかと云ふのみならず、正五九月の町汁の出合にはひたと此事を云出して、うらしやらふならば、身共外より五十兩はこうりよくに高ふ買申べし、望はそこもとの三階藏の骨組丈夫なと、書院の庭のそてつとがほしさに申事なり、母屋を打くづして小貸家にしたらば、裏むかいに卅軒などはたつべし、屋賃は是程あがるべし、つゞくり普請に何程は入べしと、のんだ樣に算用をして、諸人に面目を失はす、此あん外、切らふか突かふかと思ふ程に腹が立共、手前しもつれし折節、短氣は損氣、とかく金がいきらす事也、此無念は貧乏がきかす事と、むしを殺しても腹が立やまず、あの世へまいる迄も只是を無念がり、くれ〴〵我に申すは、異見にもあらず、だんぎにもあらず、必ず人は身代が大事なり、隨分商に精を出し、人の股を潛つて成と、頭をはられて成と、手まへをしなをし金銀を溜て、あの木作が家を買もどせ、あれはそちが爲には祖父、我爲には父、道休の葬禮をあの家より送りて、先祖累代の屋敷を、伯父が不仕合にて人に渡して殘

念と、此の事ばかり申して、ねんぶつはすなかむやうなさて、齒ぎりしてはいをもちより、東山雙林寺にて精進飯を進じ、中なをりの大法なれば盃二つ出し、兩方よりさし合ひ、いたゞき合ひてすますべし、扱衆もいづれもあの世へまいられたしゆぢうなれば、家毎おさまりて後に、河六と木作と現在の和睦して、末はより位牌を持出て一座を取持、形の如く酒事しまい互に兄弟同然の入魂、男は當つてくだけるもよし、世に珍しき和睦ふるまい、祝を客人にせしは、雙林寺はじまつて、是が跡にも前にもはじめとかや、

今樣二十四孝卷之五終

今樣二十四孝卷之六

(一)繪馬に書きし傾城

此寒やうでは麥がよかろふと、慥に來年の四月の事いはるゝおやぢ、ほくりをうじやうのたゞ今も知れぬ身を、忘れ勝なる浮世をぬすみ過ごされし、みづからは死なぬ身と思はるゝにや、又日が暮れたらば出かけふと、齒をみがいてゐるむすこ殿、何時の間にかちよろりと、此家人の者に成事を辨へず、町奉行の仰せより、かたふ揚屋への義理をたしなまるゝは、如何樣面白い事のあるに極まつたり、されば太夫買に、一年二百兩にては、ひけぬ程の大盡樣なり、是ある上にては無性な遊といふものにあらず、家内よろづのしめくゝりよく、商に油斷なく氣をつめた上にては、出掛けてたのしむまじき物に、かへすぐ\もあらず、世界に傾城買ふと、身代潰れるに極まつた樣に思ふは、了簡違ひなり、身代の厚薄、其人の智惠次第にて、又たゝき揚る事も間のなきものなり、此頃さる太夫樣、見る人毎に汗拭を、手づからづかぐ\切て下さるゝ

事、大分見事ななされ様に見えけるが、引ふね申されけるは、一夏にさらし一疋はなんぼでもゐきらぬとかや、そふでござらふ、天しよくの隨分筆まめな女郎に、年中のふみ書き紙、ふうじ紙を請負て進上つかまつるが、奉書二束みの紙一束、今何程高直でも七十六匁にてすまします、のべ紙の儀はわれらかぶりなり、きやらもとめ捨の分は、金子六匁にてあつわりのやくそく、かうぐやへ渡しに仕りぬ、莨一年に廿七斤、刻賃共に九十匁、楊枝の錢が壹貫二百文、あいせん様の提灯代、蠟燭共に九匁七分、何かに五百卅匁餘づゝといふ時、與市殿、こなたは御死去めされた親父様とちがひ、其見事な身代で、ついに揚屋の疊が高麗べりやら、土器で酒のむやら、御存じないといひしに、何時の間にふかまが出來て、それ程迄女郎の內證を、なされてつかはさるゝぞ、是はいかいほり出しな粹友達、しらでお名を問ますも無粹な事、御紋は九曜巴か丸に桐か、祇園まもりか、ちよつと〳〵申せば、與市泪ぐみ、おの〳〵御存じの通り、我等親父は加十と申て、身共が母の方へ入聟なり、以前新町大坂屋ゐぐちと云ふ太夫、敷島の道に心ざしふかく、白女が昔を思やり侍れど、言葉巧みにいやしく、歌はよむ事より、心をなす事のかたきをしるながら、自然と下にをよばぬつゞけがらも、神國のみちにしてをそるべき言の葉なり、是より俳諧を好み、四季の思ひをのべ、心ざしをつくすに、情かたくして一句のはしりよく、いひすての發句あまたある中に、頃は極月廿九日、我等親父、歲暮の禮にすなばの伯母の方へ參りて、もどりに通筋を通りがけに「小げいせい行きてなぶらん年のくれ、と申す江戶の其角が句を吟じければ、兩側の格子の內より「かしがまし遣手に問へば年のくれ、といふ古き大名の御發句を、少し取かへて口ずさみけるこそ、誠にあたらしく作りたるよりはやさしく覺へ、是戀の種に成りて、其明の朝ごみより正月のかたをもらい、横童子へ出かけ、入むこの持參銀のこらずはたきける、我等祖父ながら宗入はむごき人にて、押付わざに暇の狀をかゝし、母人へ握らせて、其時分のはやりものにてふるの給羽織、着のまゝの小袖貳つにてまくし出されて、誠の親元へも歸られず、うへしほ町にて、梅岸ぬりのあんどう莨盆をしならい、身一つの口をぬらし兼て、袖はかわかぬ泪、我等は其時五

つにて、親父の顔おぼへてゐまするに、なんぞや前のはおぢ様で、今のが本のとゝ様と、いづれも合點さするを、心ではをかしけれど、一はいくふた顔にて、とと様〳〵といひし人も、思の外中住へ出かけ、木屋のゑちせんにのぼりつめて、遂に其身まではたかれぬ、かの上しほ町にゐられし誠の親父は、太夫江口が情深く、傾城から物もらふ身と成けるこそ無念なれ、七年以前の八月、そば屋のおどりの大よせを忍びて見しに、めふるまに草履を盗まれ、これより急に世を味氣なく思ひとりて、四つ橋から水に入りて、死骸は下博勞にてあがり、ひそかに墓の寺へ送りぬ、ゑぐち事は傾城には珍しき心中者と存じ、我等祖父より身代請取し日より、尋て親父の恩をおくらんと存ずれ共、最早曲輪を出てしれず、其ゆかりをとせめて尋しに、只今申す天しよくのよねは、ゑぐちかぶろにて、是も親父へ深く心ざしを運びしよし、如何樣にも、爲になる致方もあるべけれど、兎角實父と申、養父と申、皆傾城にて其身をうち、なき跡までも、やくたいなしの樣に評判にのり申す事、千萬子の身にしては悲しさ大方ならず、我これを愼みて、親共の名を淸めいではと分別極め、まことの傾城は勿論、座摩殿の繪馬に書いた女郎の姿さへ、横目つかふて見せぬと、泪萬行の玉を貫けば、一座ももらい泪して、俄にけふたく成ける、中に一人いふ樣、其者をつかわさるゝ女郎に、貴樣近づきてあるまじ、何と我等貴樣のかり名をいたして參り、たんとかわゆがられたい事じやが、傾城の名は何といひますと尋ねしかば、おはると書いて文が參るといひける、誠に内證の用にたつてやりながら、女郎の名をしらぬもよし、女郎も勤の外ねんごろなれば、親の内での名を書くは、尤なり哀れなり、

（二）新禱石

馬の沓が鰯になり、強飯がときんかぶりし昔語り、神心感通の理に於ては、聖人もさばけかぬる事あり、世界を一口にふ云はまだな詮さく、岩根になれるちとせ山と聞へし、丹波のあるじは源氏の末にて、頼政の記錄を集めらるゝ中にも、近衛の院の御時、ぬえと云ふ鳥災をなしけるを、頼政射て落しけると也、其化鳥羽をやすめける石とて、西の洞院二條、閑院の冬次公の家のあとに、今も殘れる荒増きこしめし及ばれて、其石の形うつしまいれとの仰せを、うけ給はりし

人は筆澤墨水、物に心えて才覺一家中に勝れたれば、此度の御用も首尾能く勤め、歸國仕りて大江山より、其時代ごろの石を求め出し、然かも形大方似たる上を、墨水いさいに圖し來りごほりに細工させて、新鵺石と名付け、村雲山の麓なる、御下屋敷の庭に居ゑをかれける所に、指出崎之丞と云へる生儒者申けるは、是一國の凶事なり、物の一念こりかたまるをさして、石になる身と申し、汐干に見えぬ沖の石と申すも、袖の泪の乾かぬに喩へたり、蟻に負せて運ぶ共とよみしは、人の心の賴み難き事なり、又唐に、二郡督郡と名づけしは、宜都建平のさかひにたてし、人に似たる二つの石なり、其外燕石を得てみがくに、力盡たりときこえしは、宋の國の阿房の名とかや、又溪南の石は女郎と成りて、人をおびやかして家をほろぼす事ぐさ、中も限りなしと苦々しく子細をくねる時、墨水、それは一ぺんなる申され分なり、もの丶吉凶は人にあつて、人にかつ災なし、必ず心より感じ出して、様々奇異なる事を我と見、我としるなり、いでさらば石の目出度事申て聞かせ申さん、まつ常盤石とは、元よりかはらぬ色をいへり、まこうの石は年ふりぬることわざ、川の石のぼりて星となる事、是臣として君を忘れず、君として臣をすゝむるたとへぞや、よにね鳥とはいわほの名にて、みさご、眞砂、しらすなご、ざれ石、いさご、さゞれ石、玉しく庭といわひ、千代に八千代に老をのべけんと、八百日の濱にたとへ申さぬか、又いわとがしはのとことはと聞へしも、かはらぬ御代のあらましなり、千引の石とは强き事、是武士の好める所、又石、山にあるとは、君によき臣下のある事なり、醉石に夢を結ぶとは、唐土にて類なき忠臣陶淵明が事ならずやと、互に物識自慢、後にははたし眼になるを、居合はせし人々よのはなしに紛らかして、是は是迄にてすみけるが、さりとは不思議や、殿樣此下屋敷に入らせ給ふ夜より、新鵺石に一むらの雲覆ひ出て、御寢間の上に引きはへて、大守おそはれさせ御病となりて、けしからず鵺の執心、星霜數百年は經れども、一念はものによつて相感ずる道理、今此石にうつり出て此身を惱すと、御はしたなく口走り給ふこそうたてけれ、御近衆の若侍に明石兵庫之助、弓に矢を番い、かの石を目當に引きしぼりて放つ時、石に聲あつて、兵庫之助、をのれが親なるが、親を射る

か、天命しらずめと云はれて、兵庫之助引設けたる弓をゆるめて、我親沼太夫相果て後三年になる、其新しき沼太夫が靈、古きぬえ石に感じあふ事不思議なり、其うへ下人の身として殿樣をなやます事、不道の至極、我れ親を射るにこそ天めいはゞからん、其の不道の魂を射るは更に不孝にあらず、遠慮すべきにあらず、これ惡を憎んで人を憎まざるの道理合點かと、又引もうけて切て放つ矢に手ごたへして、引はへたるむら雲石中におさまりて、後は大守の御病惱、手の裏を返すが如く、御心すゞしく御機嫌すぐれける、是れ指出崎之丞が、一念はものにこりかたまると、感じ出したる凶事なり、又兵庫の助が、主の爲に日頃弓矢をたしなみ、事もあらば、いで人に弓精を見せんと、心がけつよき忠の者、古の賴政にも劣らじ、誠に世のことわざに、鵺は賴政が親の靈にて、我子に弓矢の名を揚げさせたく、化鳥と成て賴政に射られけるといへり、是よいかげんないつはりなれど、人の言葉に感じ合ひて、兵庫之助が親沼太夫が魂も、眞似をしたと聞へけり、其後石を打くだきすてられて、今は跡形もなし、されば兵庫之助が親なるはときいて、引もうけたる矢をゆるめたるに、孝行のがくもんなり、是れ誠のまことにて、人の子たる者はきいてをかう事ぞや、其上主に仇する災を射てとりしは、孝あつて忠あり道あつて理あれば、大守御寵愛の京女郎杜若どのと申に、黄金百兩と何やら丸藥とを添へて、下されけるぞ有難し、

（三）名はいはじ親は長鋏

山城國伏見の里に、秋山といへる人の昔は、備後の福山に仕へし身なりしが、世をやかましい物に思ひとり、不幸にそむるすみの袂にはあらで、髮結ふがむづかしさに頭を剃り、竹のたるきかやがのき、かるふ身を愛に取をき、浮世をのぞけば、ひがしにしに行て歸る人、みな善惡の辻を股にかけて、無性に錢ほしいと欲面ひつぱる眼には、木槿の花の哀もしらず、深草のうづらもやいてしてやりたいと、耳からも鼻からも算盤をはぢきて、めつたやたらにもうけたがるは、後に何する事ぞや、其しづかならぬ事は、人倫のみにもあらず、おのへを出る雲は、雨を催さんとていそがしう走る氣色、おかべの牡鹿は、妻をこふ思ひを、聲のかぎりにはこびつくす、かへり見れば此身程ひま

な者はあらず、悪心の作の無量佛一體、是必ず念佛の爲にあらず、先祖より持ち傳へし道具なれば、是非なく御術中ばかりなり、未來上ぼん上しやうの蓮臺に座して、樂したいと思ふ欲なければ、地獄に落る筈もなし、死ぬる迄生てゐるであらふと思へば、春秋のくるゝをも二文とも存せず、籬にこぼれ種の朝顔、ゆがまふがすなろふが勝手次第なり、あんな物と思へば、日陰にしぼむをけしからずおどろかず、薄もほに出てびらりしやらりめさるゝは、いらぬ御世話の小夜時雨、降ろとふるまいと我一人の苦にもゝたず、寢る筈の目なれば、晝も蚊帳にまくらし、歩く爲の足なれば、夜一夜しあるけど、盗みせぬからは人に不審もうたれず、膝いるゝ二枚じきに、糙太瓶もめしつぎももたず、萬事を一の土釜に埒をあけて、雜炊喰はぬ者には、きかれまいともいはぬ鶯を樂み、夜着持たぬ家とて、ゑこひいきせずに窓もる月に打向ひ、覺へた事なければ忘れた事なし、年も數へた事なければ、三十やら四十やらしらず、かゝる道人末の世にはたぐひも非ず、或夜此とぼそをたゝきて入來る男、三十ばかりにて大小をきめながら、しほ〳〵と秋山にうち向ひ、頼む心あつて一筋に尋ね參りぬ、我生國は武州川越に於て、瓜田三左衛門せがれ三彌と申す者、父三左衛門浪人の後に病死して、母一人の介抱にて成人致し、其恩を辨へず、江戸に罷在て奉公の望をかせぐ内に、吉原へ人にさそはれて參り、三浦のせきしうといふ傾城と深く馴染み、互の志は僞あらねど金銀　手づかへ、面白なき耻辱をとりて、遂にせきしうと刺違へて相果、かばねに浮名を唄はれ、老母に嘆を殘す事不孝の至極、其罪のがるゝに天に肩つかへ、地に足の踏所なし、貴方我に成かはり、東に下り、老母が身まかる迄、御介抱なされ下されなば、海山深き情、高き御恩なりと泪ながらに語り、大小を秋山が前に置て、かきけしてうせにけり、秋山不思議の思ひをなし、了簡に及ばねど、我人情をはなれながら、頼むとの一言、よし何にもせよむになしがたし、腰の物を見るに、如何樣古はよしある男と見えて、銘は見えねど慥に相州物にて、刀の物打五寸許り下りて、きりこみ二つ見えける、此上は川越に下り樣子を尋ねんとて、元より住捨つる心のいほり、何にも殘おほきものなし、此むりやう佛ばかり、身にそへんものとしたゝめい

れて、八月十三日猿谷を越へてあづまに心ざし、同じく二十八日川越に着きて、瓜田三彌が母を詩ねしに、六十ばかりの母、三彌が最後の嘆きに目顔を泣はらし、くづをるゝ身のゆくゑ、よるべなき涙ながらに、秋山が物語を聞て、少しはうたがいしが、大小は正しく三彌が差料、父三左衛門重代にて、柳ケ瀬にて先祖比類なき働せし時の切込のきず、其武功の子孫として、三彌は云ひ甲斐なく、義にもあらず勇にもあらぬ遊女の爲に、命を捨て瓜田の家を穢すのみか、老たる母にかくまでの思ひかけし事、猶其魂のはる〴〵かよひて、母が身の行末を頼む言葉、聞くにつけ云ふにつけ、兎角につきぬ泪は身をはなるれど、なげきは離れぬ此身の因果と、伏沈みてわけもなく取亂しける、秋山先は安堵いたしたり、此上は嘆きをやめられて、我を三彌と思召萬の力になさるべし、我も三彌魂に頼まれし上は、ひとへに三彌に成かはり、隨分孝行つくし奉らんといさめけるに、嘆をやめて、扨々不思議の次第、世にためしもまれなり、三彌其身不孝の罪をくやみ、孝行の身がはりにそなたを頼む事、是れ誠に其身のみやづかへせしにも勝る孝行なり、又そなたにも、如何に三彌が魂頼みたればとて、遙々此あづま迄下り給ひ、行衛もしらぬ我に孝行盡し下されんとの事、言葉にも述難き心底也、此上は愈々此三つわぐみたる老の身を、兎にも角にも頼むなり、扨そなたには親達はおはさぬか、國は何處とはれける、秋山かく親子の契約申す上に、何か身の上をつゝみ申さん、我は備後福山にて藤井忠右衛門と申す者の悴、忠太夫と申して、一度は仕官の身なりしが、我はてかけ腹にて、惣領ながら繼母の計らひにて、弟に家督をたてさすべき內々の計らひ見るより、我世を立てゝありては、母の望にかなはず、又をとなしづくにて、我分知を取て弟に本家を立させては、父忠左衛門を世間よりよからぬ男と申さん事、氣の毒千萬なり、兎角世をのがれて長釼を帶せぬにはしかじと、分別極めし折から、父忠左衛門病死いたしぬ、是幸ひと存じ、一周忌に御暇を願ひ、藤井の家を弟に渡して、國遠仕りぬ、福山も其後は、大守の跡目なき故御家つぶれ、家中惣なみに浪人にして、弟も九州へ下りしとや、此無量佛は先祖より家に有し惠心の作、父がかたみと存じて、今此所へも持参致しぬ、是を進上申すの間、

朝夕念佛のたよりとなし給へとて、母へ渡しければ、母つく〴〵物語をきいて泪を流し、さりとは不思議の縁にて、再び親子廻り逢ふ事の嬉しさ、其方が誠の母、おまきと云ひし女は我なり、昔忠左衛門殿におもれて、其方を懐胎して産みおとすと其儘、いとまを取て福山よりのぼり、都三條白川橋に有しを、縁とて瓜田三左衛門殿、三十三間堂のけいこ矢かずにのぼり給ひ、思はず馴染みまいらせて、此所へいざなはれて三彌をもうけしに、七歳の時三左衛門殿身まかり給ひ、母一人の介抱にて成人し、異見云ふ親類もなく、三彌若氣にて色にまよひなさけなき最期、是も前世の因果なるべし、さるにても此御佛は、成ほどおがみおぼえ候驗佛(げんぶつ)ぞや、其方が臍の緒包みし紙に、我書付せし年號月日、時も有べし、是は我忌あきてのぼりし時、わざ〴〵書送しなり、又六寸の丸鏡一つ、其方成人ののちにやりて給はれとて、忠左衛門殿へつかはしぬ、其鏡の家(す)のうらに、親は子に似るなるものといふなれば、こひしき時は鏡をぞ見よと書付けをきぬ、今にも有ば取出して見よとの御事、秋山なみだながらに、其鏡は御形見とは存じたれども、此世にもましまさぬ樣に存じて、大坂のてつげん堂のかねいの時に、寄進仕りぬ、成程臍の緒は是に持しとて、取出して年號月日生れ時を、母にいはせて合するに違はず、さては誠の親子とて取つき、四つの袂を海となして、後にはうれし泪も交りける、此上は互にへだては愈々あらじとて、母も三彌にまさるいつくしみ深く、秋山も一かたならぬ親子の緣、世にためしなき孝行一つ一つ語るに及ばず、

(四)養老酒德の門

高下貧福、世間はじやうごすご六のさいを投げたるが如し、なんの五十年の内の事、樂も苦勞もいふて見た時は皆夢なり、夢ならば惡いよりはよい夢見ることよけれ、ゐせいが夢もよければうたひにもはやさるれ、こつじきに成た夢ならばたれが取あげていわふぞ、さるにても、成ると成らぬと人の身代、其違樣はどうであるべきぞ、町人は金銀を氏素姓として、娘に取親して、どんな御方へもしんせらるゝ、嫁も手を廻して、いづかたの御息女も申受る事、是が科にもあらず無理でもなし、いかぬ事をやるに金銀、ない上にはりちぎも正直も、まだら〳〵としては世が澁ら

れず、おぼえてうそをつき、合點で横と出る、誰か天性に私なし、善惡いづれも彌左衛門ぞかし、貧しうしていつはりなきこそ人の人たれ、爰に都富の小路とはいへど、貧乏なかぢ屋仁兵衛といへるあり、女房は昔島原のかしはやの見世の女郎、高島といへるがあふみや通の質屋のむすこ馴染にて、借錢を濟してもらひ曲輪を出て、暫くは此むすこどの、とつておかれけれど、とかく内へ入れる事ならぬ首尾、互に恨つらみなしに暇をもらひ、ついのゐにしは此鍛冶屋のおか様になりにける、此女房見かけはぼつとりとして、ならぬ世帶のかぢを取て、壹文を百につかふてうぎ、常の女のなる事にあらず、昔あまたの客に、無理なくせつもわけよくさばきし、其かくを以てまいり、節季節季の借錢こいに、内あげもせずに笑はせてゐなす事、第一目の見えぬ姑、人の氣に入事は、朝はらの丸藥のみこんで世間をつくろい、繼子をかはゆがる事はおばゞに泪をこぼさせ、夫の友にあいさつする事も、悧發を鼻へ出さず、しかも者のはてなれば、かまはぬなりけりに麗しく、顏を仕事にする地女よりは遙にみよげなり、かくも揃ふた身なれど、緣とて仁兵衛が妻と成りしは、浮世はあぢな者ぞや、仁兵衛ものらにあらず、一服の煙草にもひま惜みして、たゝきやめば、喰止まねばならぬ身代に、母人ひだりをあげらるゝ事、晝夜に八十では足らず、是をそも〳〵元日より大晦日迄ござらぬといはぬは、餘程孝行と申べし、母は見えぬ目で、もうけがあるやら無いやら、近年ひなたにこほりになつたやらしらずに、酒々と好まる、其くせ若い内よりのみつけし諸白でなければ、皆い顏をめさるゝがかなしく、さりとは似合はぬこれの内から、二升樽のかよひ、なる人のちんたにもかけ合ず、ころは千早振神な月のすへつかた、仁兵衛持病のせんき、今度程久しく寢た事もなし、米がきれゝば薪もなし、手にかゝり次第に曲てしまひ、母人の酒手にげぢきけるが、さあこよひといふては煙管のつぶれもなし、されども女房はだかくせしときわけを脱いで、ふたのゝうへに前垂して、あつい冬じや汗がでるとて、錢百に質にをき、八十にて酒を買ふて、もどりしなに十文が餅むすこが心あて、六文でわり松いわうとゝのへて、母に心よく酒をすゝむるに、目は見えねど、かゝ様はだかでと、孫のいひし口に手をあて

しを合點して、嫁の姿をさぐらるゝを、ちやくと仁兵衛が袷をぬがして女房うちかけて、なんの此寒いにはだかで居りませふと、おばゝにいらはせて合點させけるが、又おばゝ、どうでも仁兵衛がさいぜんさゝやいた、はしくれが氣にかゝれば合點ゆがず、仁兵衛とよばるゝ時は、又女房袷をぬいで夫にきせて、母にいらはせけるに、これもはだかではゐそむない、まいちどおかたもこゝへ、一緒におじやとよばれて迷惑しけるが、仁兵衛さくいを出し、かたをぬいで女房に袖を通させて、一つのきる物を二人して片身づゝ着て、やう〳〵間に合せける、お婆呑込まぬ顔にて、をれは酒をとまらふと申さるゝを、なぜでござる、はて目かいも見えぬ母を養ふてたもるさへあるに、毎日百たらずが酒をのむ事、さるにてもをれが咽には、どの様な燒石がある事ぞ、ようは今迄ならぬ内から、飲ましてたもつて嬉しい、最早酒にも浮世にも飽ました、いかいおかたの苦勞、あの世まで忘れませぬ、ああ早ふ參りたいと、味氣ない事なんでござる、私身代ゆかぬと思ふて、のみたい酒をとまらふと思召すか、いかな〳〵母者人に酒を進ぜる程の、しがへ成らぬ仁兵衛ではござらぬ、それ女房共、錢を鳴してきかしまして、お心を落つけませいと目くばせすれば、女房合點して、此頃打をきの鎰を、二つかみ三つかみおばばの耳近くならして、こづかい錢は澤山にござれば、少しも御氣遣なしに御酒をまいりませ、なんのおや子の間で、せんしやうがござりませふぞ、間なをしませうとすゝむるにぞ、何事も知らぬがほとけのお婆、おがみ上戸でいや〳〵といひながら、又引うくる盃に夜半の夢を結びぬ、所へほうかぶりしてふたこしきめたる荒男、七八人して表の戸を引明亂れ入て、理不盡に仁兵衛夫婦に繩をかけ、いきぼねたてなとねめ廻し、最前の鍵をさがしとつて、うちをきのかぎは是斗りか、まだあらば何處にあるぞぬかしあがれ、我我は名のりかけて大盜人共なり、押込みし先々にて大分かぎの入る事あれど、をのれを先としていづ方の鍛冶屋にても、かぎを買ふには、錠をさきへ持て行くが大法にて、錠なしの鍵ばかり賣事、一つ二つにてさへ町所を吟味し、たしかなる口合うけ人をたてる事、其では身共等が商買の間に合ず、さるに依て、をのれが樣なるとりめのないかぢ屋へ、ひまづいやし

に今夜來りしも、此かぎを買ふばかりなり、全く是へのぬす人に非ず、誠に鬼神に横道なし、此五くゝりの鍵を、只取てゐぬるもふびんなれば、價に金子廿兩つかはす間、我々歸る迄はだまつてけつかれと、夫婦が繩をゆるして心靜に立出て歸りける、明くれば此事仁兵衛家主へ有體に申、兎角是はぐち〳〵とだまつてはゐられまじと、昔其時の御役所へ訴へければ、早速訴へ參る段御聞屆なされし也、今日中にも申まいらずば、明日は上より御吟味なさるべき御事なり、夜前の盜人と申せしは、いづれも此方の役人共なりと、取來りし鍵を御見せあり、往古より錠なしの鍵を責事は、かたく御はつとに、鍛冶屋共へ仰付けられし所に、近頃はみだりに鍵を仕る故、諸方にいたづら者ありて、密藏の重物をあい錠して、何時ともなしに盜出して、其盜賊の御吟味殊の外むづかしく、科人相しれざる事、皆かぢ屋共が鍵をこしらへ置故なり、よつて此段を世間一ぱいに相しるゝ樣に、態と仁せ盜人をつかはされしなり、仁兵衛わだかまりなく金子を持出る事、きどくにお思召の間、其金子は直に下さるゝとの上意の時、年寄町人言葉をそろへ、仁兵衛儀内々正直者にて、殊に老母に孝行の趣、女房がみや仕へねんごろなる次第一々申あぐれば、上よりの仰せに、いかにも仁兵衛夫婦が孝行、先達て聞こしめされて、鍛冶屋は多くある中に、心底をたゞされての上金子を下さるべき爲に、仁兵衛方へゑつて遣はされたるなり、尤も孝行のきどくを以て、金子を下さるべけれども、子として親に仕へるは、さのみ珍しき事に非ず、不孝の者にくらぶればこそ善人なれ、人の常を行ふ者をふしぎそうに稱美すれば、却て惡人いでゝ、世にまぎらはしき作り孝行者、褒美を貰はん爲に、下さして上を犯す大罪人、ためしある事おほし、是によつて孝行の御褒には非ずと、理のあきらけき上意有難く、いづれも御白洲を罷立ぬ、是惡を罰せずして、善をすすむる上の風下にうつりて、おのづから道は常なる事を辨へ、常をはなるゝ惡人は絶けるとかや、仁兵衛は頂戴仕りたる黄金にて、老母を安樂に養ひ、夫婦愈愈むつまじく、其かせぎに追付貧乏神を追出して、手前をしなをし、次第に弟子多く抱へ富み榮へける、月花の都田舍までも隱れなく、昔鍛にまさるなる、今燒刀鍛冶の元祖日人とて、世の人の口の端にのる正

直者、大孝行の世の手本、並びうつせし板もさ、千秋萬歳萬々歳つきぬ君が代ぞめでたし、

寶永六己丑年六月吉旦

江戸通石町十軒店
野田太兵衛板
京
萬屋治郎兵衛板
京寺町通二條下ル町
書林善兵衛板

今様二十四孝巻之六終

風流日本莊子目錄

目錄終

風流日本莊子卷之一

○戀の棚をろし　附り大佛の夢想　いしや坊屁力

元祿十四年辛巳今月今日、京二條通にて、大明一統志九十卷と入銀看板出したる、書林のみせに腰打かけて、和漢名數といふ文を披閲れば、京江戸大坂是を合せて三大都と名け侍る、此三の都の中に繁昌の勝れしは、申もおろかむさし野の廣き御めぐみぞかし、太平記に此野をほめて、四方八百里に餘る武藏野に、駒の立所もなかりしと書置き、ちんぷんかんの唐人に肝先をひやさするも、日の本の自慢ぞかし、雲雞さしやる御月さまさへ、此野で晝寢をなさるゝからは、其外の事は沙汰にをよばず、士農工商諸共に江戸を目當のかせぎ、これは極つた事なればふるし、當世は佛達さへ惡功にならしやつて、後生の配劑は廻り遠く、いしや坊なれば現世の匙加減を以て、萬金丹の調合を願ひ給ふ故にや、嵯峨のお釋迦は江戸療治を請て、大驗を得させ給ひき、續て眞如堂の如來も貧病養生の爲、當春東に下らせ給ふ、それに付京の大佛、ある人の夢想に告ての給ふは、かやうに二佛をはじめ、洛内外の佛たち、あまねく江戸へ出みせして、銀まふけをし給ふ處に、たゞ我ひとりすご〳〵と、都に殘るも無念なり、幸又富士山と長くらべして見たい事、内々の望なれば、彼是急に思ひ立、武藏野へ赴て飛商をしてみんと、思ふはいかにとありければ、彼者夢中の返答に、いかにも仰せ御尤、さりながら、嵯峨のお釋迦と眞如堂の如來樣は、天秤に掛けてみば十四五貫目あるかなし、三度飛脚に渡しても、駄賃の高はしれた事、御前樣のはことの外荷が過て候へば、千萬人足でも、自由に持ちては下られまい、どふした者で御ざりましよ、大佛重ての給ふは、いやその事は氣遣ひすな、我身を持ては澤山有る、そちはしらずや我が門前に、銘々に暖簾をかけ、大佛もちありと看板を出すからは、持ての多きを知給へと、慥に告て夢覺ぬ、かゝる佛の御身さへ、利欲をふかく考へ給ふ、ましていはんや凡夫身、世智を思ふはにくからず、判官の御事を太郎冠者に取りなし、御前義經記と改め、富士野の夜打を寛濶曾我と題號して、家暮てんの敎とするも、みなこれ世智のなす所、善か惡か　こふした事は、

しらぬ人もまれにして、知る人またすくなし、よしや名利にほだされて靜なる暇なく、何の興有てか朝夕人の爲に、此身をまかせはてんや、心は緣に引れてうつる物なれば、靜ならでは道は行じがたし、所詮ひつそりと口をつぼめて、手と身と紙衣ばかりになり、風寒暑濕は高天原の店をろし、生死もまた天の下す相場なりと目利して、四條河原に自身番、花見涼みの追風にて、六時の虫を養ふ君子あり、武州江戸の生れにて、むかしは武家に宮仕へ、筋目正しき侍、其名を友部彌市といひけり、志學の年より發明に、文は獨叟玄光も衣の上に汗をかき、詩は丈山をも片手に提げ、和歌は季吟と袖を比べ、儒教は源助爪を噛む、筆取ては志津摩雲竹手をふるふ、誠に名譽な生質、木の股から出たるかと、老若小鬢をかたぶけて、我折らぬ者はなけれども、玉に疵ある世のならひ、彌市廿歳の夏のころ、色に浮名を取られん坊となり、山谷土手の露に身を濡らす事を嬉しがり、ひた物曲輪に通ひ車の、榻に物思ふうかれ男、今は性理も闇くなり、心愛にあらざれば、みれども見えぬ四書五經、是は堅いと取納、世之助が島渡り、三勝が心中、梳久がもんさくなどに心をうつし、色を色として賢に易へたる浮氣の沙汰、和尙の評は耳をきぬ、素人目にも不詣り也、父母是を氣の毒がり、靑い顏して異見をすれど、小鹿の角に蜂なれば、つくすに詞消え語るに息はづむ、實にこふしたれば、つくすに詞消え語るに息はづむ、實にこふした挨拶に、血で血を洗ふもめいわくなれば、他の人をしていはせんと思ひ、幸ひ近所に山下元安といふ醫師あり、日頃彌市が父母とは、一家のやうに親しみ、實の厚き人なれば、元安を呼寄せあらましを語りつゝ、何卒貴樣の了簡にて、彼が惡性止やうに異見をして給はれと、眉をひそめて口說かるゝ、山下委埒をのみ込、彌市を密に一間へ招き、仰天顏にていふ樣は、扨もそなたは、人體に似合ぬ阿房を盡し、親一門に苦勞をかけ、明暮色欲におぼれ、不孝不義のふるまひをなす、三十に近きよはひにて定まる妻を嫌ひ、うかれ女に魂をとられ、辛き世に持ちにくひ金銀を、水の樣に遣ひ捨、夫を塵ともおもはぬは、大ざらともうんつくとも、評にをよばぬ次第なり、とくと胃の腑へ氣を納め、陰氣になりて平常を二季の際じやさ心得、今からは傾城を借金乞ひと思ひ、金銀をば主親方のごとく大切に心得、浮氣のそゝりをふつ〳〵やめ、親の心に

したがひて、とつと今度の後の世迄もちぎり朽せぬ女房をむかへ給へ、

○遊女あらそひ 附り女童の出立欠落の下染

彌市くつ〳〵笑ひながら、これはあたらしき御教訓、我れ幼少より此かた、親に向て無理いはず、博奕はうたず盗せず、不孝の科みぢんもなし、そも又母の胎内を生離して此かた、富をねがはぬものもなし、それ金を持、家を求むる願は何事ぞや、命の内に樂々と遊興に心をよせ、一代氣儘に暮すべき爲ならずや、病にうかされ死に臨む時、金銀財寶いか程有ても、少も用に立たぬなり、伯樂天の詩に云く、此身死して後、金銀を積上て流星と勢くらべさせても、生て居る内に米の小歌を肴にして、一盃呑にはしかじと長慶集に書れしも、道理なり〳〵、今時阿房の出さして、金を溜ては子に讓り、孫にやらんと思ふ、欲心ふかくなりては、味なき物をくらひ、穢き衣服を肩に掛、何時花見やら涼やら、彈に郭公、犬の年寄ごとくにて、金の番して、一生むなしく朽はつる族あり、かやうに苦をして溜置いて、子や孫にゆづれども、長者二代なしとかや、其子の心により、千萬貫の金銀を半季の内にも遣ひ捨て、親の名をうしなふ者いくばくぞや、亦親は貧乏でも、子の代になりて長者になるもあるぞかし、とかく富貴は天にあり、人の智惠には叶はぬなり、しまつを好み、費をいとふは愚者の業、いかほど金銀貴しとて、むなしく藏に入置かば石瓦にも劣りたり、算用なしにつかふ故、他人のよろこび此身の樂しびとなる、將亦妻を求むる事、現世にての肯かせ、佛たちのきらひ物なり、男といふ物の持まじきは妻なりと、兼好坊のしかられ候、元安顏にひだをよせ、さても無法ないひやうかな、かくまで氣强き破家者に、いかなる金言いひ聞かすとも、水に灸をすゆるごとく、醫者坊ならんとおもへども、又煎大豆にも花咲、鬼の目にも涙といふたとへあれば、そろ〳〵理詰にして閉口させんと思ひ、聲作りして申されしは、そも〳〵遊女といふは、本より氏あるものならず、その出生を尋ぬれば、寸度田舍の片山家、父はといへば、作りたをれのやせ百姓、それが外は、都にうろつく日用取、馬やろ、駕籠やろ、火の廻り、かゝるものゝ子となりて、壹石六斗の相場にも、雜炊ばかりに生立あげられ、憂かんなんに成長し、たま〳〵未進借金の爲に賣渡され

て、親は他國の死めなりとも、年の間は曲輪の外へ一足にても、ふみも通はせ申まじと、二枚手形のさし引相濟、轡屋が手に渡り、小麥の引削小豆の粉、へちまの皮にて研き立、八歳の頃より小學に入れて、女童と名を付、さま〴〵やき手をおしへ、すでに十五大學の年に、付出して位をあたへ、奥深き商事を勤めさせけり、段々彼地の德に入るにしたがひ、いつの間にやら粋の發明を開き、髮も身ぶりも物ごしも、目うつりよしと身仕廻して、日に〳〵櫛のさし替る、模樣は千々に染なし、曲輪の水にしやれてすむ、流れ朽木の根もない心を以て、浮世の人をはまらせて、ひやうきんとなせる樣、人をめつたに燒く故か、傾城の異名をおんぼうと名付けたり、女童死してはしやくといふ虫になり、遊女の生れ替りは蚯蚓といふ虫になる、轡屋の死たるは挾虫に成るとかや、惣じて馴染の殺言に、眞似目に成ていふ樣は、引手あまたに候へ共、つとめは勤戀は戀、いかふ分けある事ぞかし、思ふ客衆のいとしさは、寢ても覺ても忘られず、思ひ切ふと思ふ程、猶々增來る物思ひ、夜な〳〵毎の通ひ路も、逢て戾せしわかれには、そのうつり香を其まゝに、抱て寢々して居る心、あはで迯せし其時は、外へも寄りてましますか、又揷花の詠かと少は妬き心も有り、路次のほど內の首尾、如何かと思ふ氣遣やら、高い所から後飛落るやうなる夢をみて、扨もその夜の寢ぐるしさ、とやあらんかくや渡らせ給ふぞと、枕のかはく間もなし、世には男もないやうに、かたさまのかはゆさは、たまつた物で御ざんせぬ、是も因果の內ならんと、泣いて見するはうその皮、生爪燒金入黑子、起請誓文指切髮切いか程しても、そつとも罪にならぬ事、上は松梅格子鹿乞局山茶、下はころり北向まで、その〳〵格々の習有て、西へ向ても北へ向ても、買手をば取つて落して、丸はぎにする手立のみ也、百千萬億、恒河沙阿僧祇の遊女の中に、實ある者露もなし、さる程にいとしや、不可思議のそゝり人、一度彼地へ足をはめ、ちらと御げんになりそめしより、たちまち明德闇くなり、まゝよわざくれ今日斗はと、人もゆるさぬ惡智惠を出し、黃昏に行ては夜の更る事を忘れ、あしたにみそめては暮るゝをしらず、末は野となれ山となれ、それからそれの無分別、立ても居ても寢ても覺めても、わすれかぬるは遊女なり、すべて馴染の重り、彼等が情

の嬉しさがつもれば、いかなる福者大臣といへども、ちよろりと身上ひすらぎ、内證さびしくなりては、巾着の輕をうらみ、捻ぶくさのおもからぬを歎き、讓り受たる家屋敷は、色の爲に賣りはなし、其事つもれば天命にはなたれ、主親の勘氣をうけ、あなたこなたに惡まれ、火吹く力もなければ、とにもかくにも爲方浪の、よるべ定めぬ海士小船、つなぎとむべき所あらねば、阿波の鳴戸を桴に乘る心地して、東の人は京大坂に、夜ぬけの草鞋はきもあへず迯げうろたへ、都の人は江戸へ下り、心にも發らぬ道心者となり、諷ひ舞ひ辻狂言、橋の上に立て壹錢を求るより外なし、すべて遊女にたはぶれし人、千萬人に一人も身持直なる者はなし、そふある故にむかしより、文につゞり詩に賦し、後代をいましめ給ふ、凡色々の化物と、死したる人の歸りたると、傾城に心中よきは、有とはいへど見たる人なし、薪を負ふて火事場に行、酒に醉て氷の上を歩むとも、傾城には契るべからず、あら勿體なし勿體なし、人間の風上にも置くまじきは遊女なり、今時風流る疫病の神とは此事ぞや、除の札を貼つて家々におそれ給へ、

○難波の心中 附り遊女の異名 町田の惡性

市開てかぶりを振り、そも神事をば禰宜がしり、佛の道は僧が知る、病は醫師色は粹、酢いも甘ひも喰ふた物が知る、然るにそこらの家暮口にて、和氣の德ある奴にむかひ、得たりがほなる御異見こそいやらしけれ、先女郎の出生をいやしき物と、すもじあるこそ淺ましけれ、遊女と云文字は君あそぶと和訓なり、それ君といふ事は、伊弉諾の諾を取り、伊弉冊の冊を取り、二神の御諱を取合せて君と名付、遊女は至て貴き物にて、陰陽の德をそなへ、萬物をそだて養ふ事、さながら神のごとしとて、萬乘のあるじのいたゞき給ふ御名を、假り用て傾城の異名とす、亦けいせいといふ事、むかし漢の孝武の時、李延年といふものあり、彼が妹の李夫人の形、世に勝たる事をほめて、一度かへりみれば人の城を傾くとうたひしより、傾城と申也、されば大將の智惠を出し、軍兵を以て責るといへども、たやすく城をば傾けがたし、かくなりがたき所を、やす／＼とかたぶくるは、是れ傾城の力にあらずや、目に見えぬ鬼神の顏へも、ゑくぼを入れさする事亦むべなり、天地開けはじまりしより以來、頭に耳の

明きたる人、陰陽和合の道を離れて獨立する者ありや、かやうにめでたき名物をおとしめそねみ給ふ事、勿躰なき御事なり、萬に一つも遊君に、生れいやしき者ありとて、女の身に氏あらたむる事なければくるしからず、火々出見尊は龍女の股より飛出で、聖德太子は救世菩薩の化身なれども、御湯殿腹に宿らせ給ひ、藤原の元祖は、讃岐の海士に濡事して、房前大臣を懐妊給ふ、此外允恭帝の御内義さま、弘法大師の御袋さま、是れ皆氏なき女なり、扨色里へ賣られて來る女は、親のたすけか兄弟の、かなしき貧苦をすくはん爲、勤め物うき流れを立つれば、常にまれなる孝女なり、所作第一と身ぶりをなし、女童遣手や姉女郎の掟そむかず、日々に廻る紋日の苦をするは、是譽への忠節、更々彼等が私にあらず、阿房律義な男をも、たちまち賢くする事は、仲尼の教に勝りたり、僞いはぬ客に逢ふては、貞女を盡していとしがり、天津國津の神かけて、誓の文に指を切り、なでさすりたる黒髪も、のぞめばふつと切て遣る、痛さいとはず爪をはなし、あつさかまはず燒金を當、君の名乘を黒子、さて又一座のもてなし、馴染ての息はり、その甘き事舐るに絶えたり、ちかき元祿卯の歲大坂新町に於て、京屋のお琴といふ米は、松の位のわかみどり、常盤の色の名に高き、天人の遊ひ子と呼るゝ程の器量、宍戸與一が假名文、菱川の浮世繪もおよばず、風俗のあてなるには、阿部晴明を生み出したる篠田の狐も、似せるに術をうしなふ程なり、美目がよければ心もよく、手書三味引歌謠ふ、酒も自慢の砂鉢呑み、何から何迄ふそくなし、爰に町田勝藏とて、お江戸生立の侍なるが、上方役を云付られ、よしあし知れぬ難波の藏元、鴻池又吉といふ者を大鞁にして、道頓堀の男色、新町の女色にたはぶれ、心まかせに和氣さがしするそれが中に、いつの間にやら調べそめけん、引手色よきお琴になれそめ、かはす枕の數重なれば、智惠の鏡は雨夜の月とくらくなり、暗成峠を住の江の、波はこす共かはらじと、互に指の血をしぼり、終には外へ水もらさじと、夫婦のあいさつたがはず契る事良久し、夫の心と夏の酒、替りやすきは常の事、勝藏いつしか約束をたがへ、ます花にうつり氣の、木屋の金太夫といへる新造にのぼり詰め、お琴が事は思ひも出さず、お琴は神とも佛とも、賴みをかけし町田が心に、秋風立事

をかなしみ、外の勤は身に入ず、こぼすは涙ぬらすは袖、千々にこがるゝ物思ひ、男畜生悪性もの、こふした心は露しらず、うか／＼とたらされて、此の年月のうき苦勞、海とも山ともたとふべきやうなし、もしや心の替りやせんと、思ふうたがひはらさん爲、牛王に書た誓紙をば、反故になしたる腹立や、あの心中ぬす人物しらず、女の罰は當らぬ物か、常々頼む愛染様、扨けつこうな守り神、夏書夏花は何の爲、返させ給へとかきくどき、佛を怨み身をかこつ、世話がつもつて顔色痩せ、茶漬もすゝまず酒もいや、いや／＼君を恨むまじ、性の悪きは人さまの、常ある習ひの事なれば、そこらを赤顔は家暮轉なり、とにかくわが身に如才なき、實の心あるからは、どこぞの通ひに付出し、日頃のうさを晴さんと、次而を待もかはゆらし、先とよ思ひを卷こめて、消息にしらせばや、墨と硯は善い中なれど、人が水さしや薄くなる、よしやうすくと戀衣、くろみ過たるはしり書、長延閉て一握、封目にする五大力、結ぶの神の取次で、ちよと御返事待ますと朝夕に文を遣り、又ある時は人にもいはせ、色替品かへもがけども、ろくに披て見もやらず、みぬ程なれば返事もせず、かへつて嘲りいふ様は、筆まめなる女郎や、氣根強なる長文屋梳久が時代ならば、中奉書一枚が、三百目にはなる商ひ、そふした事の仕合は、唐の横町にもあるまいなど、ゝあいそう盡たる云分なり、それでもお琴はちつとも恨みず、はてなんとせう、さまが心がかはらば替れ、我が身はふつ／＼他人に、枕通さじ物させじと、心中一途に思ひきはめ、外の客に逢ざれば、親方こらへず松の位を梅になをす、それでも猶まへのごとし、欝やいよ／＼腹立積り、又位を下げて鹿におろす、をろされても客をせず、こはこりもなき賣女かな、此上は大に耻をあたへんと、端に下して二疊半の局をあたへ、しぶとき女郎がなれの果見よと、詞いやしう耻かしめ、其上打擲小刀ばり、目も當てられぬありさま也、かやうに痛目をすれど、みぢんも此事厭ひもせず、月を重ね日を積まば、終には町田が氣もやはらぎ、むかしの情に立歸らば、我がいさぎよき心中は、をのづからあらはれんと、それのみにうつら／＼、杜暦の爪形も、皆むだ事になりて行て、勝臧が方より絶て音信あらざれば、よしや何事も、皆過去生の因果じやと思ひあきらめ、頃は六月十日の

夜、うかりし勝藏をはじめ、むごき親方、又は傍輩あね女郎へ、つらりと殘す形見の文、すでに丑三つ過ぐる頃、あたへし局にとぢ籠り、鏡臺に祐天の名號を懸け、香花を手向けいと靜かに念佛し、いかにや〳〵佛立、戀は曲物皆人の、命の敵氣の毒や、自らいかなる惡縁にや、つらき男のいとしさやるかたなく、心中をみがきたて、只今自害仕る、十萬億土の闇路を照し、極樂淨土の玉の臺に、勝藏もろともすくひとり、諸和氣よろしふなし給へ、ひとへにたのみまするぞと、合掌の手に小刀を握り、をしや十九の春の花、散て名ばかり殘りけり、夜明て人々おどろき、書置一通町田が方へ送れば、そもそれは誠かと、日頃にも似ずむねとゞろき、足ずりをして泣ども甲斐なし、文をみれば、あふ瀨たへての戀しさ、數通の文に返事なきうらみ、我心中のたがはぬ事、物の哀を書きつらね、猶くどふはあなたの國にて、ゆるりと御げんをいのり〳〵、をく一首、

ちぎり置しそのむつ言をわすれかね
　　いつはりならぬ身をしらせけり

書とゞめたる形見の筆に、勝藏袂をしぼりかね、頭はすらねど心計りを出家して、火屋の煙に無常を觀じ、中寺町日輪寺に石塔を立、則町田も逆修の改名を刻み添へ、其後江戸へ下りしに、時節因緣とはいひながら、かりそめの口論によつて、同年七月廿五日、傍輩平塚藤兵衛と、打果しけるよし聞へければ、木屋の金太夫大にかなしみ、彼寺に卒都婆を立、忌日々々にはかぶろを參らせ、永くその跡をとぶらひけるとなり、みよ〳〵かゝる心中もの、地女とてもあるべからず、いへばいふほど足引の、山ほとゝぎすの初聲より、聞かまほしきは色の沙汰、笠屋三勝東のお七、都のお梅をはじめ、其外限はありそ海の、濱の眞砂の數々多き心中事、三露盤にも積り難し、

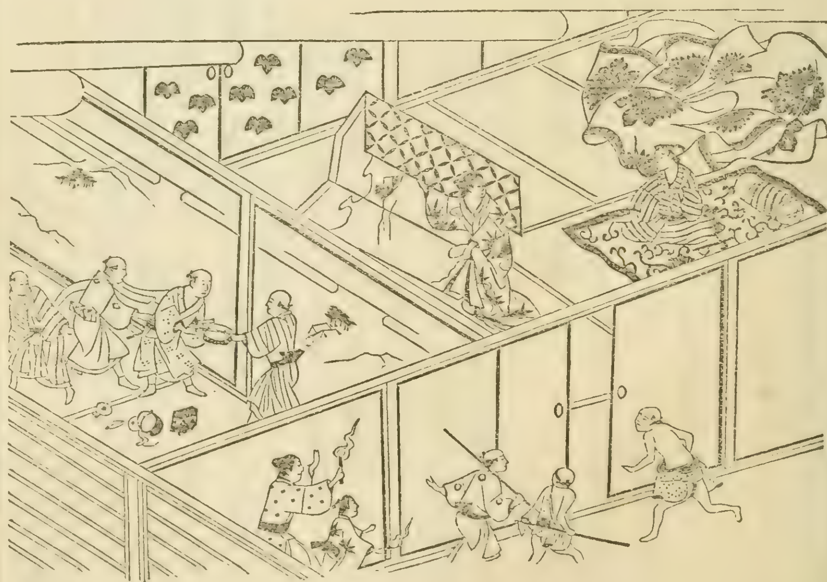
風流日本莊子卷之一終

風流日本莊子卷之二

○長崎の大盡 附り島原の大笑ひ 醉興の口堅め

山下くわつとせき揚り、傾城に威をあたへんとて、勿躰なくも神代のむかしをたとへて、横しまなる了簡こそつたなけれ、をろかなる人、戀は我國の根元なりとて、罪を諾冊の二ばしらにをゝせ、いたづらに主ある妻を犯し、さかしまなる色に迷ふ、さればうれしうましの神宣は、たゞ淫亂をおさへ、夫婦の道をとこしなへにおしへたまふ、その道にあらずしてかりにも邪色にまじはらば、天津罪を身にうけて、國に住むことかたかるべし、爰に去年の春の頃、洛陽朱雀の島原に、よし野といへる太夫は、類もなきぬれものなれば、男盛のうつけ共、あまねく是に貧乏の種を蒔く、その折しも、長崎の商人八文字や新六といふ大盡、よし野に馴染の枕をかされ、心中の深き事は、龍宮城の堀井にひとしく、生ての契りは四十二の厄年を二つかさねて五度迄とかため、死ては九本蓮花の床に、七つ蒲團を敷寢にして、妙法れんぼの口舌を遂へじと約束し、偕老同穴の和氣を立る、紋日々々も懈怠なく、實から甘く買つゞけし處に、いつの頃かや中たえて、朱雀なはての音信なければ、よし野此事にあこがれ、風の心地か誰が中言か、文を送れど返事もなし、もしや色ます花染に、うつりし事やと氣味わるく、松吹風の音までも、其かたさまの便りかと、朝夕むねをもやしけり、やう〳〵彌生の上旬に、とぼけた形の出立にて、揚屋が本へ來る、垢なれたる古布子に甚むさむさと月額長く、古る元結に茶煎髮、百合若のなれの果、俊寛が御影のごとし、よし野を見てしほ〳〵と耻入たるあり樣、扨も替つたみせかけ、是に先とふした物で御ざんすぞと云へば、申さずともすもじあれ、をれが口からわけてはいはれずとばかり、眞實めいつたあいさつなり、良酒事も治りて、屏風を引もいなものなり、時に新六よし野に向ひ、めづらしからぬ事なれど、かね〴〵契約ある上は、何によらずわが申す事、やすく聞入給ふべきや、よし野につことわらひ、こはあたらしき御せ言、身におゐてせつなるものは、玉の緒に過たる事はあらず、そのかけ替もなき命さへ、とくより君に奉れば、ましてその外の御用は、猶

いふにたらず、何事なりともつゝまず仰られよ、新うれしさのあまりに、我かく淺ましき體になる事は、此年月あそこ爰にて僞をつき、他人の金銀借用して、濟すべき樣あらざれば、方々よりのさいそくに、身も世もたゝぬ仕合なれば、命を置べき所なく、今ははや此世の限りも今日ばかりと思ひきはめ、身ひとりともかくもならばやと存ずれども、　おなじくは君もろともに身まかり、三途川を手に手を取り、心やすく渡らん爲、命の所望に來りたり、いよ〳〵只今の詞にかはらぬ所存か、いかにも〳〵一たびかはせし上は、何うたがひの候はん、時に新六起直り、げにも心中たがへじとの一言、うれしく侍る也、時刻うつして障もいかが、もはや曲輪に執心留むべからず、南無阿彌陀佛と諸共に、よし野が胸ぐらをとらへ、懷より九寸五分をぬき出し、ゑしやくもなく心元にむかへば、よし野しばしとおさへ、　さては御最後うたがひなきとみへたり、しからば少の暇を給べ、りんじうのつとめをなし候はんと、かい〴〵しく起直り、西はどち北はいづくと、尋るふりして隙をうかゞひ、屛風蹴倒し逃出、やれ人殺と呼はれば、相座敷の客をはじめ、家内の者ご



もおごろきさはぎ、帶を引ずり枕をかたげ、三味一張に二三人取付、上を下へとませかへすは、曾我の夜打にそのまゝなり、揚屋の亭主聲をあげ、行燈が消たるは、火をたてよといひければ、かぶろやり手下男、銘銘に紙燭を持、棒ちぎり木にて取まき、のがさじとひしめくに、新六ひつそとしづまり、何喰はぬ顔つきして、そのく驚く事なかれと、あげ屋夫婦を近付、よし野をはじめ其外一座の上郎をならべ置、やうくつめたき太夫さまの心中、詞に似合はぬ逊ぶりの見事さよ、實は我れ死する覺悟にあらず、あのよし野が心をためし、少もたがはぬ心底ならば、今日直に請出し、明日よりしては春の花、秋の月と打ながめ、出入の者どもに奥様とかしづかせ、下女腰元に仰がせんと、思ふはいかに是みよと、九寸五分をなげ出だす、何れも立より見てあれば、實は檜の木の荒削りに、銀箔押たるばかりなり、其上持せし挾箱蓋を開くをみてあれば、今極の小判八百兩入てあり、よし野が今の心の中、うら島太郎が玉手箱、明けてくやしき思にも、まさりて見ゆる笑止さよ、座中の者はみなく身請の祝儀をもらひ、德付べきに、いひ甲斐なき事やと、

尻目にかけて元の字の極印を、睨むといへどかへらず、かくて八文じやは金子を元の箱に納め、其日の揚賃ばかり濟し、南無諸々のぬれ佛、遊女のあそび今日迄と、心中にちかひて旅宿に歸り、永く此事を止けるとなり、よし野はたして不心中のうき名立ち、客にきらはれをや方に惡まれ、曲輪の住ひもならず、下り下りて此ごろは二條河原に、夜なく風呂敷を床にして、高なしの戀をせらるゝよし、或人の申されし、むかしより色にめで、身をうしなふ者少なからず、もろこし沙汰は廻り遠し、我朝におゐてためしをさるに、用明の皇は、豐後の國まのゝ長者のしやれ娘、玉よのまへにほだされ、牛の角文字引立て、草刈童に名をしづめ、すへの世にいたる迄、久しくそしりをうけ給ふ、光源氏は須磨の浦に袖をしぼり、千早振神代もきかぬ惡性じやと、その噂在原の中將は、すこ貧乏のはつたる故、京は散々不首尾になり、遣ひ錢の用意なければ、西馬丹を調合し、東海道中賣ひろめ、それを便りに武藏に下り、角田川の諸白呑て内損し、仇名を伊勢が筆に殘す、その外むかし今にいたる迄、色にながづみ、家をうしなひ身を捨るもの、胸算用にて濟がた

し、春の駒の毛をそこなひ、秋の鹿の角を折るも皆落欲のゆへぞかし、おそるべしつゝしむべし、爰に元安退而了簡をめぐらすに、わ殿が遊女にたはぶるゝ事、平生心で起る念ならず、めつたに酒を好むゆへ、二人機嫌の醉興にて、狂ひ歩く所なり、無明の酒に醉ひぬれば、本心を亂して狂人にひとし、そのかみ禁戒の比丘、鷄を殺して夜食に喰ひ、婬欲を行ひしも、是五分一の科なりとて、佛それをにくみ、五戒の第一に飲酒を禁しめ給ふぞかし、されば上戸はあやまちおほく、財をうしなひ病をもふく、萬の病は酒よりこそおこれど、つれ〴〵草にも書かれたり、江の邊の猩々は、酒によつて血をしぼられ、大海の犀は、酒を好で角を切らる、只狂藥にして非二佳味一と作られしは、范魯公のいましめなり、頻に愚智の醉を醒し、色をすゝむる中立の、酒をふつ〳〵止給へ、

〇けいせいの拂物 附り判官の高鼻息 大儀のなさけ

市ちつともめいらず、左扇をひらめかし、佛の世にも鬼があり、聖の時にも盜人あれば、千萬人にひとりや二人は不心中な女もあらん、其よし野かごとき女郎は、地の底の雷六月の氷ぞかし、さて亦用明天皇玉よの姫の水揚によつて、錦の御衣に御涎を流させ給ふ事を笑ひ、在原の粹方が、東あそびのたり死を惡んで、評を付給ふ事、しやかたはらいたし、今時彼君達を誘るは、ひつきやふ法界りんきのせんさくなるべし、孔子一貫の敎をば、三千弟子の其中にて、曾子とつくとなめ過、釋迦一代の工夫をば、迦葉能つく吸ふて取る、とかく蛇の道蛇ぞかし、いまだおぼこの眼もさめぬ顏つきにて、好色の發明らしき口上、あやしふこそ物かなしけれ、いでやむかしの通り物、九郎大夫判官は、土佐正尊が夜打の時、茶椀呑の大酒故、たらふく醉ふてわけもなく、馴そめ靜が膝枕に、蚤の喰ふをも御存なく、高鼾してましますを、もし是殿樣々々と、ゆすり起して甲斐々々しく、鎧腹卷着せ參らせ、自も長刀取りのべ、むらがるお敵を、他邦千里が外へ追はらひ、君のもがりをすくひけり、日本貞女の守り神、大磯の虎御前は、眉なし顏のぼつとりと、ひつこき髮のつとなしに、油つきたる肌には殘の雪もけをされ、在鎌倉の諸大名、弓手矢手より戀こがれ、馬物具を質に入れ、和田の老父を初として、千葉宇都宮國宍戸、皆々出仕の腰骨をなやし、せめては、玉の盃の

つけざなりとも、聞し召度思へども、虎が心に請付ず、律の僧にはあらねども、一食にて日を送る、曾我の十郎を深間とたのみ、伊豆箱根の神かけて、此世もあの世も、替はるまいとの起請文、おいとしや素浪人は、不自由な物なりと、浅黄帷子黒小袖、庵の内に木瓜の、定紋付て送りつゝ、小遣錢も事欠かせず、寺から里への付屆、終には外へ水もらさず、くされ付たる因果な縁、うらやまぬ人もなし、祐成の打死の後は、餘の人には物もいはず、髮をおろして引籠り、彼なき陰をと弔ひけり、惣じて是等に限らず、古今遊女の心中をいはゞ、露の五郎兵衛、鹿の武左が舌先を借り、難波の鶴が工面を以て、大佛の岡元春、一代筆をふるふとも、中々盡くる事あらじ、此道に於ては、何としてかはやめられん、世の中に遊君絶てなかりせば、若き者は血氣中に餘りて、癆疾をわづらひ、短命なる者多く、其上執着をこらへかね、人の女房娘をぬすみ、ぬれの訴訟の絶間なく、病死の外に非業の死多からん、彼を以て是を思へば、傾城は命をすくふ萬病丹、たつとむべし〳〵、

○三國の大盃 付り佛のゆるす上戸 祇園の御神酒

そも色狂るひの源は、やとひ力のする所なりとて、月雪花の友となり、うさをわするゝ名物の酒をにくみ、抹香臭き佛のをしへをうれしがり、不飲酒の沙汰を以て、人倫の交りをやぶらるゝ事大なる過なり、晉の七賢、陶淵明、唐の樂天、上諸白を絶やさず、神代には八しぼりの酒を以て、八岐蛇をいたましめ給ひしも、糟をすてゝ汁となす德とかや、禹は洪水を治めて酒作る水となし、儀狄を藤次と定て、諸白を作り出し世々に傳へ、老をたすけ悦びをまし、憂を消す事ををしへ給ふ、百福の會にも酒にあらざれば交らず、隔ある中をも酒を以てしたしみ、物の堅にも是を賞翫す、むかしもろこしに、ある女繼子をにくみ、毒酒をあてがひて殺さんとす、其子此の事を知りて、あたへし酒を、杉木の三本ある控にうつして歸りける、或人かゝる物とは夢にもしらず、なめてみるに味甘露のごとし、しかのみならず、なめて味ふ者病もうせ、はだへもうるはしくなる程に、帝聞召して、是を取よせなめ給ふに、いふばかりなき珍味なり、そのゝち彼子をめして御詩ありければ、右の次第を奏し奉る、やがて内裏へめされ、宰相の官を下されける、されば三本の杉

より出生すればとて、酒をば三木と名付たり、今の世にいたるまで、酒を入る器を杉の木にて作れるも、此故事より起けり、亦酒は風寒暑濕を去る事三寸とあれば、則醫書には三寸と云、すべて飲食物の中に酒はすぐれて益ある物なればとて、平生の食物に五割增じやとほめられたり、紀貫之の歌に、

酒がめにわが身を入れてひたさばや
　ひしほ色にも骨はなるとも

げに酒は百藥の長とかや、いにしへ藥のなき時は、酒を以て病を治すよし、もろ〳〵の醫書に見えたり、先初春の屠蘇の酒、一家打より是を呑ば、一町四方無病なり、亦は彌生の桃の酒、色もとり〴〵あやめの酒、汲て知る名のよしあしを、きくの酒ともいふぞかし、唐のしやれ者、王積といふ人は、壹斗入の盃をかるがるとかたぶけ、斗酒學士と稱せられ、憂を拂ふ帚とは粹の大白名付けたり、もろこしには、上戸を名付けて君子といひ、下戸を小人といふ、堯舜は千盃孔子百盃かたぶけ給ふ、ひとり子路下戸たりと雖も、十盃飲みたるよし、孔叢子に見えたり、是にて知るべし、聖賢の上戸なる事を、釋尊は又飲酒をいましめ給へども、祇陀太子と末利夫人には、酒をすゝめて飲ましめ給ふ、その時舍衞國に一人の波羅門あり、天性そなはる家暮てんにて、酢い甘いの和氣しらず、或時友達の所へ念佛講に行き、夜更てたらふく醉機嫌、うつゝ心なきまゝに、思ず祇園精舍へ參り、出家にならん事を求む、佛即ち是をゆるし、髮を剃て袈裟を懸けさせ、名を醉入と改らる、やゝ有て波羅門醉覺め、頭を扣いて大に驚き、こはそも何の爲に斯樣の姿になし給ふと、ねだりかゝれば、釋尊くつ〳〵わらはせ給ひ、善哉善哉、汝無量刧の中に出家の志なし、故に三の途に浮沈み六道にさまよふ、今たま〳〵醉興にまかせ、思はず出家の心を起す、是によつて過去生々の罪を滅す、有難し〳〵と立つて拜し給へば、波羅門忽ち角を折り、此世からあの世迄の通り者と成て、大阿羅漢の果を得たり、此波羅門醉興にあらずんば、出家する事固からんに、思ひがけなき佛道に入り、無量の罪を清滅する事、是一盃の德なりと釋尊大にほめ給ふ、佛祖統記には、酒を呑で彌陀の來迎をうけ、往生せし人を載たり、司馬選が聞書には、郊天禮廟も、酒にあらざれば不レ享、君子朋友も酒にあらざれば不レ義、鬪爭相和も

酒にあらざれば不ㇾ勸といへり、內典外典醫書術書、神書歌書に至る迄、酒の德を擧し事語るにいとまあらず、此頃京童の世話に、古酒を祇園會といひ、新酒を御靈の祭といふ、其ゆへは古酒は味重くして、身の內上下ともに濕ふて醉ふ、祇園會の祭には、上京下京ともに賑ふがごとし、新酒は味薄ふして、頭上ばかり醉て下は靜なり、御靈の小社の祭には、上京斗り賑ひて、下京さびしき故かく云へり、誠に酒を神事に譬へしは、其德至て尊ければなり、酒といふ和訓はさばけの中略なり、酒はよく〳〵物をさばく故に云とかや、嫁入の中立ち、初對面のあいさつ、夫婦喧嘩の中直りにいたる迄、諸事むすぼふれがましき事を取りさばくには、酒に過たる物あらじ、げにさばけたりの和訓おもしろく侍る、島原のむらさきが詠歌に、

いましめの酒が科なら咎じやまで
　　酒の地獄へおとせほとけめ

亦江戸吉原三浦屋のかはら崎がよめるは、

頓死いや又病死いやもし死なば
　　腎虛內損さてはしんぢゆう

とよめるも尤なりと、點者和及が金長ぞや、萬葉集には大伴の卿、酒をほめて作れる歌十三首有、その外詩人歌人、酒の德を仰ぎし事いくばくぞや、とてもかくても、下戶ならぬこそ男の仕合、

〇掛當の智惠袋　附り東海道道行八はしの二朱判

山下ほろりと泪を流し、頭を掻て顏つきは、花のいろなる口なしになり、有漏路より無漏路へ通る通り者、釋迦といふ佛さへ、緣なき衆生は度し難く、口を開けは仁義を說く、孟子程の粹にても、齊の國をば手持不沙汰に欠落し給ふ、ましていはんや此元安、分別の箱をひらき、思案袋の底を扣てあらそふ共、非義不道の性惡を救ふ事なるべからず、爲方事もなし是からは、西へなりとも南へなりとも、這ひ度方へ這ひ給へ、さらば〳〵といひ切て、塵をひねりて歸りける、父母今は詮方盡、流石名高き山下さへ、閉口せし上からは、外の評議に及まじ、扨是非もなき仕合と、おごり揚つて腹立し、座敷牢に入置、さま〴〵のせつかん目も當られず、一門を初め親しき友ども集り、色替品替詫言すれど、さら〳〵以て聞入れず、終に公に訴へ、元祿十三辰の秋、ありあ〳〵と掛當帳にしるし、給壹枚あたへ、それから直に追出す、親類緣者はいふに及ばす、

他人の中をもしたしき所は、きびしく出入をとゞむるゆへ、かはいや彌市行先をふさがれ、たのしび盡て悲來る煩惱の闇、身のはれ所なきまゝに、よしや是迄淵川へも、身を沈んと思へども、いや〳〵若木の事なれば、花咲春もあるべきぞや、命長き龜は蓬萊に逢ふといへば、一先都方へはこび、身を立る用意すべきと思へども、路銀さへあらず、しかりとて亦江戸にとゞまり、非筒やの源六が名代を借り、まじりなしの引賣り、番子どてらで鏡研すべきも口惜しければ、とやせんかくやあらましと取つ置つ、くい〳〵と思案盡たる有樣、哀とは云ながら、心からなれば天をも恨ず、人をもとがめぬ所なるべし、天地廣しと申せども、五尺の身體の置所なき是何故ぞや、闇よりくらきに迷ふ己が私より出る事なれば、何方へ掛りて悔むべき筋もなし、あゝ花とよみ雪とよみ、龍田の錦吉野の雲、現なければ夢もむすばず、水溜らねば月もやどらず、迷ふが故に三界に着す、悟る時には十方空、本來一物なき物ぞや、所詮落髮して、棄恩入無爲の道心者となり、有漏の責道具をなりとも、放下してんと思ふ心有り、淺草の寺内金剛院といへるは、師檀の契あればかう〳〵の願ひをはたし、こつそりとそりこぼし、則一止入道と改名す、むかしは浮世一分五厘といへども、當世はむだ目にもかゝらぬ時節なれば、まゝよ是から修行せんと思ひ、西行笠を帆に揚げ、宗祇草鞋のとも綱を解き、風雲の輿に乘かゝり、初秋の末つかた、爪先を前にして、踏を後へするがなる、うつの山邊を通るにも、夢路に雪踏はく心地して、雲に流るゝ大井川、旅の衣手ぬれ〳〵て、空行雁のかへるさに、物わすれせぬ古鄕を、三河の國に成しかば、いたづら男の開山業平の君、阿房拂になり給ふ時、此所にいたりて、かきつばたの五文字を句の上にすえて、たびの心をよまれければ、みな人燒飯の上になみだ落してほとびにけるも、今身の上に思ひ合されいとしかりけり、かゝる所に江戸にてちなみし惡性の友立、堀坂源八といへる者、西國順禮して下向道に行あふ、彌市がさま替りし有さま、わるびれたる取なりに氣を付、源八是はと橫手を打、してわけはといへば、おどろくも道理、わが身ながら馬鹿な形ふり、つるてつるてんの仕合、かう〳〵の大ごら打て此體に成たると、身の上段々を語れば、源八脚半に淚を落し、扨々いしやな

仕合今更思案に及ず、乍ㇾ併江戸へ歸り時節をまち、七重の膝を八重に折ても親立へ詫事して、追付迎ひを登すべし、都へ落付給はゞ、我が方まで住所をしらせ給へ、かまいて氣をふるくし給ふなよ、何とぞ此節爲になる程、合力して得させたけれども、我も永旅にて存の外遣ひ込み、品川迄の旅籠代もあぶない加減なれば、心に任せずとて、やうく貳朱判一つあたへけるに、まだいにしへのりきみをはなれず、請まいといふをむたいに握らせ、扨又知音の方へ文をやらぬか、言傳せぬかといへば、文を遣ふも言傳せうも、爰は池鯉鮒の松原なれば、筆に事欠き硯墨はあらず、猶もお江戸に御下りならば、日本橋から四五町北で、こふした形といふてたもれ、さらばといふて泣分れ、今の言葉をおはりぞと、かれが名殘もつゝましく、熱田の宮居ふしおがみ、一度は親の勘當をゆるさせ給はれと、柏手打て行けばげに、命めでたき龜山は、誰が爲永き萬代と、かこつ涙は關とめて、一休和尚の開眼せし目あかしめ地藏堂、せめて未來を頼まばや、上り下りて坂の下、沓や草鞋の商業に、賤が藁打土山や、京に親子のあるならば、土産に買はん水口の、つゞら笠着てはるぐと、駒に餉する草津の宿、こちの家には如才の御座らぬ和中散、一服宛振舞て、いやながら買樣な仕懸け、虫氣もないに藥の買置益なし、此あたいを以て、即座に利きのよい一盃散を用ひて、草臥をはらさんと思ひ、十二錢提つて杉林を目がけ行けば、阿蘭陀迄もかくれなき姥が茶屋、是々餅まいらぬが、一膳飯も御ざんす、

風流日本莊子卷之二終

風流日本莊子卷之三

〇八景の見立 附り出茶屋のせりふ 中直りの酒事

色の出茶屋に腰打かけて、そより〳〵と吹來る風は、花のふゞきか面白や、お茶の花香に水さす女、お茶まいらぬか〳〵と、さへ切たる物ごしは、都の水の奇特なり、もへぐいに火の付やすきといふごとく、今剃髪の身の上にも、むかしのうつりわすれかね、寢初し夜半の夢消て、ある甲斐もなき道野邊の、草木は入をそしらねど、下の心ははづかしながら、茶屋の女房衆の手を握り、もし是むかふの山は何といふ、さん候あれこそはひえの山と申て、 禁中樣よりうしとらに當て候、げに〳〵兼平のうたひに、麓に山王廿一社まつるめでたき、御世のしるしにあふみの海の、水のみどりに影うつる、しげりし森は八王子、十津坂本の人家まで、霞がくれに見え渡る、はや明なんと民の戸の、きしるひゞきに山のはの、朝日の帶のとけるをも、むすぶ片手にみせ明て、賣買物をそこ〳〵に、あをかを荷ふ商人の、元手にあはずと鬨けはげに、粟津の晴嵐愛なるべし、上り下りのやばせ舟、おも梶とり梶とりどりに、聲を帆に揚てはしり行、見わたせばいとゞ涼しき庭の面、夏の夕べはふたり寢の、いく夜とめてもとめあかで、語らんとすれどわかれ路の、まゝならざりし道くらく、片手に燃す提燈の、むかふ強雨に笠かたぶけて、脇目もふらで通るこそ、是から崎の夜の雨、雲はみな〳〵、吹はらふたる秋風に、綠樹水鏡にうつり、魚も木末に躍撥ね、 月海上に舞遊ぶ、此絕景を見て、深草の元政小鬢をかたぶけ、肪杖着き、 唐土洞庭の八景に、生移しぞと悦んで、石山の秋の月と題して草山集に載られたり、そろり〳〵と指折て數ふれば、八景には限らず、八々六十四景目の前に見えたり、あれ心なの鐘がなる、是こそ三井の晩鐘なり、いざ〳〵都入を急がんと、草鞋の紐を締直す所へ、茶屋亭主賣殘しの甘酒を荷負て、ちんば引々戾るをまちかね、女房はしり出、是そこな雲助殿、もうよつ程で御座らいで、女子をみてはびろ〳〵と、酒買ふ人もない所に、べん〳〵だらりと長居して、 日の暮たのがみへぬかと、聲はしたなくいひければ、男聞て、 有名はよばで雲助とは、して先それはごふした事ぞ、をふ居所しれ

ぬといふ事よ、男けら〳〵笑ひ出し、いやはや爰な横車、口が過るといひ返せば、何みづからをよこぐるま、をうしらずばいふて聞すべし、横車とはいかずといふて、をのれがやうな女の唐名よ、なに〳〵わらはを横車、是やる方もない身をしりながら、何とて夫婦になり給ふぞ、座興も座興による物を、ゑゝどうよくなたとへ言、死しても忘れぬ一言と、うろ〳〵涙のあどなさを、亭主いよ〳〵おかしがり、いや〳〵泣ても其手はくはぬ、定めてとくより見世餝、さぞ大分にまふけがあらん、さあ〳〵賣溜みせよとて、さし縄出しどつかとすはり、空うそぶいて居たりける、女房大きにめいわくがり、まだあきなひはなけれども、あまりおそさにまちかねて、やらぬ腹立に申せしなり、是何事もこらへてと、もたれかゝるをつきたふし、しやほへ顔見度もなひ、さあ錢つながぬかと、火吹竹にて討んとするを、女房茶椀で丁と請る、やれうろたへ物、男が腹を立かゝり、茶椀一つを始末して、立腹居んと思ふかと、又振上て打所を、徳利を取てごふ〳〵とつぎかへれば、あゝこぼれる〳〵と、我をわすれてづゝとほし、さあ中直りにとさしけるを、おさへましたとつつかへす、そんならあいとさしもどせば、手本が見たいとをし戻す、一止入道をかしさに、思はず床居をすべりをち、あまりといへば急な事、手本の相をいたすべし、さて〳〵深きいもせ川、水入らずの大酒盛、むつましのあいさつと、うらやみながら近付ば、亭主も流石通り者、よふこそ御氣の付ました、こなたへ入らせおはしませ、酒わかやがせ申べし、足袋も脚半も脱ぎ給へ、

○嵯峨の寝言　附り日のあかぬ親方守田のはなし

憂事を思へばいとゞ胸の火の、消やらぬ身といひながら、何のむくひか浮世の闇、戀慕のきづなにむすぼふれ、思ひ切られぬ生道心、今一度古郷の戀しき君に粟田口、江戸の便りを松坂越て、馬引く籠舁く車押す、老若男女貴賤都鄙、袖をつらねてをびたゞし、爰ぞ都の名に高き、三條の大橋なり、一止道心むねとゞろき、爰迄來事は來たれども、洛中に知る人なければ、落付べき所あらず、さありとて薦かぶりの勤もならず、どうした物で有べいと、橋のらんかんに肘打懸て、思案たら〳〵する内に、あつぱれ思ひ付たり、嵯峨の御釋迦さまは、此春江戸へ下らしやつて、護國寺

御滞留の內、ゆるりと御げんに入りました、夫々あなたへ參りて、身の置所を歎ましよと思ひ、道すがら黑木賣る女に問もて行けば、程なふ御堂に參り着ぬ、南無大恩教主、釋迦牟尼無上大覺世尊、滅罪生善臨終正念、往生極樂とふし拜み、來迎柱にもたれかゝりて、うつゝ心なく居眠れば、初夜の遠つ鐘もほのかなるに、傍にさゝやきの聲聞ゆ、あやしやと御燈明の光りにて窺ひみれば、萬能膏の仕廻屋か、手の筋のなれの果かと覺しき、髷髮一人、又救民妙藥集を見て、食傷にひるも草の陰乾、霍亂の胡椒二三粒用ひて、匕の先にて自害させそふないしや坊と只二人、頭さし合せてしめやかに咄す、耳をそばだてゝ聞けば、いづれも初參會にて、おのれ〳〵が身の上を懺悔するなりけり、醫者坊の名は頭光と云、四方髮をば敬中といへり、頭光後手してしはぶきながら語りけるは、我が身其いにしへは、守田十右衞門と申て、江戸本所に住で松本氏の方に宮仕し侍り、男子一人女子一人まうく、しかるに年老い勤に飽き、隱居の願ひ望の如く叶ひ、一子を召出され、心齋と名を付け茶道坊主になさる、母壹人彼に預置て、我身は樂人となり、江戸より西に當りて、四谷村といふ在所に引込み、田畠一二反まふけて作徳を樂しび、あるとき思ひつゞけ侍る歌に、

世の中は上田五反に味噌醬油
　芝たくさんに小もの一人

此外に願ふはいらざる事じやと、世間の人の上迄をしはかり、四五年程彼所に住居する內、へそくり銀三貫目餘ころび出たり、うれしや是で死金は澤山、骸體を砂糖漬にして、卷繪の早桶に入れ、弔ふも好奇じやと思て、此世から何の苦もなく暮し侍る時、江戸に殘せし妻は元來板橋の出女なるが、黑川玄仙といへる醫者坊に身請せられ、目黑といふ所に圍はれて居たりしが、玄仙死去の後、思はずも我が夫妻になる、手前へ呼入るゝ時は其分もしらず、子供出生の後、どこともなく已前の委細を聞出し、かはす枕もうるさけれど、馴染ての後なれば、仲人姥の恨めしさも、今更改るに及ばず、いやながらそひふし侍る、彼れが生立そふした者なれば、禮も義もわきまへず、我れら四谷に隱居の跡にて、松木立右衞門といふ味噌奉行と密通して、人しれず夜食の茶漬、甘そふに喫らるゝよしなり、しかるに某田舍に於て三貫目の死銀を、たゝき

出したと聞からに、女房と密男と枕の上にて談合し、その銀を取よせ心やすく暮さん事を思ひ、其時は嫡子の心齋還俗して、守田十內といひけるを、何の手もなく抱込み、扨主人への願ひには、父にて候十右衛門事、足手もたゝぬ老の浪、明日の命もしらま弓、居る空もなき片田舍にて、諸事不自由に候へば、あはれ御免を蒙りて手前へ呼よせ、膝元にて養ひ度候と、眞似目になりての訴訟顏、主人聞て尤がり、その孝行の心ざし奇特千萬とほめられ、則望の通に云渡せば、十內翌日四谷へ行、綿に包し針金の、內には曲根性の、惡人方を勤ながら、表面は實方を遣ひ、孝行の本間を似せ、泣つ笑ふつさま〴〵にいひすかせば、さすが我子のやさしげなる心ざしにほだされ、除きともない四谷をはなれ、二度江戶に立かへり、件の銀子を十內に渡せば、取物は取たり、それからは、苦い顏して我をいやがり、朝夕の給物には雜炊ばかりあたへ、湯茶をも直に飮せず、折々は宛付けて、親父も今迄あなた參りのおそいぞや、おめで度なられてもをしからぬ年そかし、命長ければ耻欠く事の多い物、なんどゝいふて耳こすり、扨も〳〵恨めしや、本の白地がましなればゝ、預し銀を取戾し、重ねて靑梅へ行ん事を願ふに、とやかくいひまぎらかし、かつてその事をはたさず、氣の毒ながら一日々々と光陰を送る、德內元來生馬の眼をくじる馬喰口にて、右の銀を借し多さん事を思ひ、我が銀といふては、家中の沙汰もいやらしければ、大非玄德といふ醫者をかたらひ、玄十を銀主にして十內は口入分になり、その家の用人をはじめ、平侍中間にいたるまで連判を取て、御定りの十兩一分の利足をくわへ借し預けゝる、むかしも今も葉苞に、國のかたぶくならひかや、一家中の貧乏人、事ある時は腰をかゞめもみ手して、やれ十內樣は孝行なる御生れ付、直體なお人じやと、樣々さまの百も付け、親兄弟より大切がること、阿彌陀も錢とは能くいふた、かく樣に人々もてなす故、旦那樣にも能く思われ、さても十內は律儀もの、もろこしの鎌堀、我朝の今泉とても是程にはあらじ、孝あれば忠あるは定り事、末賴母しき者なれ、取立て得させよとて、昨日迄は步行の者、今日は又引替家老役になれば、いよ〳〵以て家中の尊敬、前々に十倍せり、扨又十右衛門事、十內と一所に住ては、よろづ遠慮がちにて氣詰りなるべし、いまだ杖つ

く程の年にもあらねば、座敷のはき掃除をもいたさせ、奥表心やすく召仕んとあれば、さながら主命もだしがたく、十内も又悦んで御請を申せば、則二人扶持下され、落髮して頭光と名付、枯木に實の生るとは此事なるべし、されば日々の出仕に、猶子の十内は上座につつしと居つて、左扇の咳拂ひ、親の頭光は下座に蹲踞ひ焙金を研き、十内が煙草の火を持はこぶ、同輩の役人は、十内殿ごふなされ、頭光そふしやれといへば、足輕中間は、十内樣頭光殿と、あちらこちらのさかさま事、他人には聞かされず、さるによつて出入の者ども、侍農工商ともに腹筋をよつて大笑ひ、もろこし四百餘州、わが朝六十六國の內に、我より下に親を追下げ、親に給仕をさする事夢にも聞かぬ事ぞかし、心ある人十内をみるたびに、爪はじきして人間の風上にも置べき者にあらずと、四方のそしりまち〱なれば、顏に手を當てる隙なし、所詮かゝる裏表の宮仕へ、親子の間に恥をかくのみならず、主君のうき名迄、ひろく世間にもるゝ事うとましければ、此上はいづかたへも立退、行先を宿として、あらばある程食て見て、なければさんと是切に、餓死ぬともそれ迄と思ひ詰たる一筋に、此所まで參りたり、語るにつけてはづかしの、老曾の森の木がくれて、くらきにまよふ此年まで、白髮頭のながらへて又けふまでもしのばるる、うきに絕せぬ命をば、哀とおぼしめされよと、大形して泣くも尤、

○結納の違損 附り川井の私欲 宮内が忠義

やゝ有て徹中が身の上を語るをきくに、是もそのかみ、西國方の領主に家老職を勤めて、俗名は林宮内と申、藤原氏の正統にて、系圖は却て主人に勝る、仁義をひろげて表を飾り、明德をちゞめて裏を守る、未だ壯りにたらずして、君子の風忽然とそなはり、十目の見る所、和して流せぬ氣質なり、其時亦かの家の出頭人川井三藏と申せしは、中國方のやせ百姓、年々未進を首長背負ひ、後には田畠をはじめ、鉦鈸迄賣て仕廻ひ、やう〱破れ布子一つ、さび脇指壹本かたげて江戶に下り、地頭の屋敷に肩を入れ、四斗俵二俵半のあてがひを得て、二合半の杓子を取る役になり、六月の土用にも手足に煇を絕さず、廿二歲の春より四十二の厄年迄草履をはくとなく、尻抱をおろす事なし、緣はいなもの此男、過去にて蒔た能種故か、寢耳に水の

入るごとく、ばたくと取立られ、位のしれぬ侍となり、殊に其身瘡毒を煩ひ、惣身瘊まだらにて、二目と見られぬ體なれど、主人それにも構ず、膝元に置て寵愛する、元より下人の生揚り開にてもかくれなし、夢にも着た事のない絹布類、犬に肩衣乞食に朱椀、不相應なる出立にて、俄にやつす口上、立ふるまひのおかしさは、西國兵五郎がむこ入、南北三郎が公家の眞似に其儘なり、そふして次第に時を得、月々の立身、すべて近習をも勤め、家老役にも手傳ひ、或は金銀の請拂ひ、亦は味噌鹽の備畧に懸り、お爲じやくといひて、主人に外聞をかゝせ、世間のそしりをいとはず、主の金銀を盗み取る、是も貴樣の御咄なさるゝ、十内とやらんがごとくに、內證にて家中貸銀をする事おびたゞし、其銀皆主の目を闇がし取溜たる所なり、かるが故に天罰いやといはれず、忽に五體不具になりて立居心にまかせず、瘡毒いよく面にあらはる、しかれども猶主人其事をきらはず、公界へもゆるしを得て大床居の勤、めづらしき事なり、いづれの家にも五體不具なる者を、役人にする例ありや、假孔子程の才ありとても、片輪者をば用られず、勤をゆるす主も

主、ゆるせばとてそれを請合ふ家來も家來、あふたりかなふたりといひて、家中をはじめ四方のそしりまちくなり、かやうに氣に入上なれば、めつたに殿樣風を吹せて、一家中をば我まゝにふるまひ、わが黨の百姓に氣に入たる者あれば、やたらに引揚げければ、此家の奉公人は、老若男女に限らず、皆川藏に馬をつなぐ、爰に川井と同じ流の百姓に、加右衛門といふ者あり、下々には奇特者、物も少と書小算用もしけり、しかるに川井は無筆無算の事なれば、加右衛門を愛付己が祐筆に賴、壹文二文の小帳迄彼を雇て書かせける、それゆへに加右衛門をば、天から降たやうに心得、一度は取立侍にして得させん事を思ふ、加右衛門元來惡性もの、博奕亂酒を好み婬亂不道にして、從親の三藏が女房を盜む事度々なり、しかのみならず、一させ主の召仕へる中居女、かやといふ者と密通して、あれ是の耳に其沙汰ばつと聞ゆ、三藏元より知る所なれども、我が贔負の者なれば何喰はぬ顏にもてなし、その事かの事をしかくして、加右衛門と云ものは結句御爲によき者ぞと、あらぬへつらひの山を重ねて、取なしをいひ上れば、百錢の口三十抜たる旦那殿

尤さうなづき、則山地加右衛門といふ侍になされ、いよ〳〵三藏が巾着になる、誠に道なきさばきなり、其外川井が口入にて、土堀の鎌取氏俄に刀をさし、袴を着る者多かりき、童のいひ種に、美女は惡女の敵とかや、まさるをそねむ世のならひ、取立者の似せ侍一つ所に集り、宮内が身の上背語りつゝ、うるさがる事限なし、ある時主人命を以て、宮内祝言の取むすびをしけり、舅は内藤又右衛門といひ、娘の名をおさよといふ、此女のうつくしさ、伊勢小町を一つにからげて、彩色したるやうなる生れ付、當流の釣しまだ、針金入の匕簪、木佛の不動も身動きあそばし、繪像の孔子も涎を流させ給ふ程の器量、つご〳〵にいふ迄もなし、親立是を自慢して鼻を高ふし、能聟取て妻合せん事を願ふ。幸ひ宮内が生質、業平の幽靈が光源氏のおとし子かと、沙汰する程の美男、聟に取つて不足なければ、結納の祝儀事を濟まし、娘も縁付を嬉しがり、見ぬさきの男思ひ、脇明ながら歯付て、いつの其日と良辰を定め、待かぬるも樂びなり、宮内方にても所帶道具を改るのみならず、肴懸には、わな鳥の雉子、雁鴨于鯛鰯、串鼠串貝熨斗昆布、其外苞の物數をしらず、

五つ目の献立、勝手口の戸に張付、こもかぶりの樽山のごとく積重ね、送り荷物の引出物、青貫迄も用意して、家來の者にいひ付、除〳〵の去るのといふ詞、必忌むぞとをしゆるも、禮の端とて尤なれ、抑一寸の善事には、一間三尺の魔がさすとや、彼が主人も、いまだ緣の事なるに、兼々宮内に申さるゝは、其方が知るごとく、こちにもそちにも定る妻なければ、一家中落付ず、黄蘗派の寺の樣にて、外の見入もいな物なれば、相應の縁を求て、互に祝言せばやと思ふ間、急いで其方婚禮の取結び然るべし、我も亦近々に、その事を催べしとの一言、げに人倫の至極なれば、尤と請合、内内耳寄の方を聞繕ひ、主人の緣邊も十の物、七つ八つ迄極りし處に、ごふした人の入性根やら、主君の心むら〳〵と變り、隱居の母の召仕はれし食燒に、わかよといへるを戀染て、寵愛の甚しき事、殷の紂、周の幽が嬖亂に五割增りてみゆる、此日頃は超過する事常に百倍して、若よが喰餘をなめ、脛のあたりを咶らるるよしなり、かゝれば兼て契約せられし、祝言沙汰は毛もない事にて、頓而わかよを奥樣に直し、朝から晩迄くされ付て、腎虚せん事をねがひ給ふ、此わかよと

申は、相州高座郡の土民の娘、父は作り倒れて江戸へ出、青菜小菜を商ひ、ぶいやつこその日々を送りけり、あまつさへ亦若よに定る夫あり、しかれども名より徳取る浮世なれば、男も內證は合點致にて、日和を見合せ銀にする分別、さはり三百は常の定、此上は三十貫目といひ懸られてもいやといはれぬ、あゝおつかない事かな、宮內是に肝をつぶし、時有て色を犯し諫言するといへども、苦い藥は呑に飽き、善事は耳に飽く、斯る災發つてより、內とゝのほらずして恨の女多く、外治らずして佗人私欲を抱く、宮內つく〴〵時の變を考ふるに、災一朝一夕の故にあらず、下讒者の言を納るゝより起つて、罪上一人に歸す、然れば家の亡ぶべき事掌を指がごとし、あら笑止千萬歎くに絕たり、よし〳〵今は身を輕くし、義に依て命を捨い微子が跡を尋るか、比干が道に赴くか、二つ一つの思案所と、臍下に分別を隱し、三行半の去狀を書いて、日取迄極りたる祝言を變易へ、おしやあつたら新枕、空く朽し果ぬ、おさよもさすが武士の娘なれば、二度餘人に嫁せん事を思はず、髮切て節を守る心體、今の世には珍らしかりける、粹な人の了簡には、宮內が志を感じ、智あり仁あり勇なり義なりと是を譽むる、彼祝鮀がともがらは、何の善惡もわきまへず、氣違者じやと取沙汰する、或時讒者口をそろへ、そも〳〵宮內婚姻の事、かりそめながら君命の重を以て仰付られ、彼が身の幸ひ冥加何事か是にしかんや、さればその御高恩には、富士淺間を十宛十重ねても足りとせず、然るに宮內此所をかへりみず、我儘を働き候事、不忠孝の兩罪のがるゝ所なし、一家中の騷動又此上もあらじと讒口すれば、主人忽顏色を犯し、理非の決談にも及ばず、時に宮內が父入道して七十餘、法名土入と號す、則此隱居を以て申さるゝには、宮內が事命を輕んじ義を破る、その罪莫大なれば、すみやかに暇をとらする間、早々屋敷を立退べし、幷に家財武道具鍋竈桶鉢摺粉木に至る迄、指もさゝせず留置べし、箸一本にても持出る者ならば、重て曲事たるべしと情なき云付、主命なれば力なし、南蠻北狄の法はしらず、唐土日本に於て、隱居して世をのがれたる老親を取次にして、其子の暇を云渡さるゝ例をきかず、宮內心に思ふには、聚歛の臣を以て暇を給はる者ならば、一旦存念を申開き、數年の非義をあらため、近江鏡を以て生

肝を取らるゝとも、議者の實否を正し、不道を殺し、有道に付き諫を納れ、吳子胥が跡追せんと願へども、父を以て云渡されし暇なれば、親を相手に理は說かれず、當り障りのもどかしければ、兎にも角にも爲方なく、齒ぎしみして淚を流し、臣々たれども君々たらぬ恨めしさ、功成らずして身退くは、天道の變なれども、易は變易、佛も亦有爲轉變と說れたり、あゝをしいかな、卞和が璞ありといへども、目利する人希なれば、石瓦にも劣れり、猶又命を全して、天の時地の利を得ん事を樂しび、頃は水無月中旬、帷子壹枚かたに懸け、餓死ぬ共武士の魂なれば是計りは離さじと、藤原の系圖一卷、すわまの太刀一腰たづさへ、宮內を改め敬中と名を替へ、武者修行の爲あなたこなたを流浪し、國々所々の名所舊跡、めぐり／＼て都に出、思はずも今夜不可思議の御げんに入り、善惡なき嵯峨物語、中もいなもの、

風流日本莊子卷之三終

風流日本莊子卷之四

○萬民の先祖 附り神代講釋 正直のほまれ

一此道心かたはらより、そろ／＼とにじり寄、麁骨ながら此法師、宵から爰に屈み居て、御兩人のむかし語を聞くにつけ、そゞろに感淚を催し候、をこがましけれど某も、生れ古鄕は武藏野の、大腹中なる心から榮耀狂ひに身を打て、こふした形に罷成る、衣の袖の振合せも、他生の緣と聞けばげに、わけてそこらの御咎もあるまじ、かやうに參り會ふ事、是も然るべき前世の機緣、無上世尊の引合なるべし、さなきだに秋の夜の、千夜を一夜のかこち草、草引むすぶうたゝ寢の、寢覺がちなる手枕も、うたて物憂く候らへば、此わびしさを終夜、互にとぶらひ參らせん、あゝゆるさしめと側へ寄、頭光敬中諸共に、品こそ替れそなたも又、やつす姿は同じ事、うきもつらきも世の中は、渡りくらべて今ぞ知る、あはぬ先こそ遠慮づく、いざ是からは休足て、足もたせつゝ不禮講、心置なく咄しましよと如才なき挨拶、謠ふも舞ふも法の場、爰ぞ則極樂の

出店、こうした内が命ぞと、御燈の火で煙草吸ひ浩然の氣を養ふも、無二亦無三の境界ぞかし、時に敬中申樣、さても今の世は二帝三王の餘影ならん、中國はさら也、四夷八蠻にいたるまで、くさめ程の鳴りもなく、げに武藏野の廣きおほむめぐみ、筑波山のしげき御影、五日の風莚を動かさず、十日の雨火事太鼓を濕す、世の全盛は民囀り、天の壽星は時を照し、能も能も治りたる、目出度御代に逢侍る事かな、周公孔子ごときの、わた持の聖人の出さしやつても、此上に云分はあるまい、此故いかんとおぼすや、頭光答て、只萬品平等の故ならん、おほけなきながらつく／＼思ふに、佛法といふ君藥に、神儒の左臣右使莊老の加味、各等分に調合して、萬能圓融の匙加減にや、四時風雪の氣血循環し天腹中和して、元氣いよ／＼すぐよかなり、中にも人參佛法さかんに、山々里々堂塔錐を琢き、老若貴賤男女より、唔々といふ犬の子まで、此佛法一味配劑にて、百病萬邪に用ずといふ事なし、見給見給此お釋迦樣なればこそ、東海道中五十三次、纔か行戾り廿日餘りの旅、御供の者上下十五人、旅籠錢遣ひ捨にして、佛の手錢四十六貫には過ず、しかるに江戶からの土產には、鬚水入の底に元の字の居つた物、貳千枚ほど取て來た、三井が京大坂江戶、三ヶ所の見世店を合て、三年の懷も是程にはあるまい、是々佛法の匙加減にて、現金に欒代の集る事、天竺の廣小路唐の橫町にもない事じや、神儒の萬病圓も、是程の利はあらじといへば、敬中頭を振り勿論それはさもあらん、しかしながら、我朝は神明の掟として、八百萬代の末葉まで、神道を以て敎へずんば、中々國は治るまじ、それわが神明の道は、かならずまさに無名をさとし無理を却け、道理を持つ事を知るべし、中頃役體もなき佛法の糴商時行、高利を貪り人の目を闇す、京も田舍も夫も婦も祖父も祖母も、押並で佛欲になづみ、不實を懷いて無名に沈る、無名は常闇にして體なし、體あらざれば事なし、事なければ理なし、理あらざる時は法なし、さあらずんば緣なく、緣あらざればはじめ終りもなし、しかする時は泝もなく量もなく、闇夜の礫當所も知らず、めつ法界といふものなり、異かなそのめつ法界の中に、妙なる形をはします、あゝ慮外ながら陰陽全體の大神是なり、この神體には、目もなく鼻もなく足も手もなし、なきかと思へば、大になる

時は富士山をも蹴け、水うみをも呑盡し、大津邊に繋ぐ千石船を、一息で八鹽路に吹はなち、人間はいふに及ばず、鰻鱺の腹中にも入わたり、氣隨に變化し、ちぢむれば蚤の牙にも隱れ、蟻の耳にも出入す、遠近なく新疎なく、目に見えず手にとられずして、しかも今我がものいふ聲に伴ひ、歷々としておはしまし候、此替名を陰陽の理といふ、此理にあらざれば萬事にわたる事ならず、元日の雜煮、盂蘭盆の蓮飯、大晦日の掛乞に至るまで、埒をさばく事あたはず、あゝ片々なるかな孔子の門徒等、その文學を用ひて實理をうしなひ、詞章に走る、又佛教を信じて正道を捨る事、愚者の中の長點也、天竺は夷國なれば、人の風俗田舍めき、陽氣の男盛と雖も、金を遣ふすべをしらず、嫁入り頃の娘も、濡の意氣地知る事なければ、一向田夫野人にして、親を愛し夫を思ひ、子を可愛がる道をしらねば、釋州是を氣の毒がり、家葬の凡夫に甘い諸和氣をしらせん爲、埒もない無名の所に、方便の假名を付て、悟故十方空と說き、或は本空といひ、又は眞如の一理を示して地獄にはまらせ、極樂になづませ、諸々の阿房釋州のやき手にあひ、歌舞の菩薩の三味線にのせられ、妙法の濡文にほだされて、佛にくされ付く事一千八百餘年なり、因果や今とても其執心に着しとゞまり、虛言をつき人をこかす事無量無數なり、是れ大なる國の費ならずや、いでや日本に生れてねがはしかるべきは、天照大神の教を稱として、神をうやまふはいともかしこし、神道は我が國の根源、誰人か是を仰がざらん、然るに天地いまだわかれざるの時、渾沌として圓なる事鷄の卵のごとし、天は卵の白實のごとく、地は卵の黄なるがごとし、是陰陽元始未分の一氣なり、其の氣わかれて、淸く明らかなるはたなびいて天となり、重く濁れるはつゞいて地となれり、其中に一物なり出でたる形葦牙のごとし、則化けて神となる、國常立尊是なり、今度の〳〵とつと今度のすへの世迄も、此神の御かはりなく、海山草木人物に至るまで、此尊のかはゆがらせ給ふ事、親の子を思ふが如し、かるが故に國常立と申奉る、とこしなへに立といふ事、是なん神道の根源なるべし、神といふ事は鏡といふ略言なり、明鏡は諸分をうつしてもらす事なく、しかも正直の德をそなへ、淸く潔き事神の心に生うつしなればとて、鏡の中のがを略して神と申す、

かけまくも神は我々の先祖、殊に宮社の鎮座は代々の帝の靈跡なり、草も木も我大君の國に住むからは、一日も神道をたのしまずしてあるべきや、さて日本に生れし人ならば、此國の大恩いかにして報じ給はん、佛法は天竺の道儒はもろこしの商事也、それになんぞ我國の貴賈を本とせずして、遠き儒佛を取捌くは、たとへば我が親を捨、他人の親を愛するが如し、然らば我が親うれしかるべきや、其如く他禮を守つて、他の聖人をうやまはゞ、我が國の聖人いかで悅び給ふべきや、天神地祇のたゝりも恐ろし、天照大神の御詞に、吾不レ預レ穢々惣て佛法也との給ふ、釋氏は神道を惡んで、現世の祈禱禰宜神主の口業にて、未來をしらずといふ、いぶかしや〳〵、未來も過去も現在においてこそのふれば、此世こそ大事なるべし、いかなれば佛敎には、人道の誠を捨て寂滅爲樂とたてゝ、後の世を樂しめとは申にや、神道には現在に於て人倫の誠を盡し未來を捨つ、いはゞ未來を取も現在を取も、一得一失はおなじからん、思ふに佛法において、仰をたのみ未來をたすけ給へといふは、大欲の道ならんかし、當前の道をうしなひ、知れもせぬ後の世の樂をねがふは、明日雨や降らんとて今日より笠着て待が如し、まことに神理は甚深微妙にして、天兒屋命發明し給ふより此來、面授口訣は道を學ぶ證、祝詞祈禱は岩戸よりはじまり、面白やの詞、千早振分髮の情、めでたく候かしこの祝言、高天原の買初にいたるまで、是みな神道の意氣地なり、今日の本の平げくやすらげく治る事は、寶祚の絕やらずして、御裳濯川の清明らけく、神路山の高き御めぐみゆへに、昆虫の災なく、筑前駒の水上を廻るごとく、くるり〳〵とまん丸に治りたる太平の御代、ひとへに神德のいきほひ、大神宮の智惠自慢ぞかし、八百萬の氏子達あゝをそれながら、畏貴をそれみ申す、

○佛の出見世 附り水波のへだて 大神の御歌

頭光少はわくやになり、をう神道の看板にて、大かた商事が成そふな、乍レ併時々相場は立ず、又我佛法の大廻しは、三千世界の藏元、無二佛屋の釋迦右衛門にて、遍く衆生の貧乏に落入るをかなしみ、花嚴般若の手形を取り、法花の淸帳に印して、黃金の膚に成る事をすゝめ給ふ、されば神といふも本地は佛にして、佛神の內證同一なり、神道は一法いまだ起らざる所を

守りて、起る所の萬物をば皆穢惡なりと忌む、佛法は二途既に分れて後、諸の迷ひあるを悉く實相とみる、然れども佛法に專ら本初不生を談じ、神道に亦和光同塵の利益普し、されば互に欠く事なけれども、暫く神を面とする時は、本を守りて穢を忌み、其末を導かん爲なり、佛は又末を導き本を示す、むかし聖武天皇の御宇に、伽藍建立の御志あり、しかれども神國の遵法を恐れ給ひ、行基菩薩に仰せて其効驗を窺ひ給へり、行基則大神宮に參籠して是を祈り給へば、其の時の神託に、夫日輪は大日如來、本地盧舍那佛也、衆生此斷りを悟りて、まさに佛法に歸依すべしと告給ひてより、帝いよ〳〵菩提心を發し、件の御願寺を建給ふ、今の東大寺是なり、抑々內外の兩宮は、金胎兩部の大日、盧舍那佛は、一切諸佛菩薩の惣體なり、中頃後嵯峨院、杉堂法樂寺を以て、御願に准せらるゝ官符に、大神宮の本地大日たる事を顯し給ふ、さて神宮には佛道を忌、安良々木、染紙、中子髮長なんどいひて、內外の替詞ありと雖、建長七年の冬の頃、外宮の世喜寺にて、千部の經をよむべき由申けるを、神宮其に支へけるを、禰宜惟房が夢に一首の歌耳に聞ゆ、

染紙を千々に手向くるこゝろきけば
　いかにうれしと神もうくらむ

是大神の御詠歌なり、仍て千部をゆるし法花經を讀せけるなり、すべて日本國中の神祇、貧乏神、塵神、疫病神にいたるまで、いづれも佛の化身なり、悲花經にいはく、汝勿ニ啼泣一、我滅後現ニ大明神一度ニ衆生一と說れたり、いで〳〵佛法の金藏を開き、無量の天秤を担き方便の秤に掛て、神道の借金を濟さんと、噦嚶して居せし時、一止しばらくと押へ、是やこなたへ御免候へ、神儒釋の三道は天下の寶にして、金銀錢の三色のごとく、彼を捨是を取らんといひがたし、錢も金の名代をつとめ、金亦銀の替に成る、桓武天皇の西天の法を我國に置て、第一の臣下とし、震旦の法を第二の臣下として、神明の左右をはからせ、神道の潤色をなし給ふ、されば我國を日輪の國とさだめ、天竺を星の國とし、震旦を月輪の國とす、三光共にあらずんば、天地いかにして全からんや、然れば天地人の三才は、しばらくもはなるべからざる道理を以て、今日の上に押くらべて、世に立ん事こそ尤に候、先今日を勤むべきは五倫の道、道に於て何か是に過候はんや、此道を背

いては神の御心にも叶ふ事なく、佛の內證にも違ひ侍らむ、頭光敬中此詞を聞て、ほく〳〵とうなづき、いかにも〳〵そうじや〳〵、さあらば五倫の正道を、說て口說て語りて見やれ、一止道心舌長申分なれど、

○孔子の賣買 付り君臣のいきはり使者の自慢

君臣父子夫婦兄弟朋友の五つは、義を以てかなうといへり、君子は本間を勤るなり、本間を知る者は末間に能くうつる、其本間といふは五倫の道也、君として人を使ふ埒をしらず、臣として奉公ぶりの質をしらずば、ともに國家は治るべからず、人の君としては仁にとゞまり、人の臣としては敬にとゞまる、一國の能治る事は、君の智明らかなる故なり、君の智明かなる事は、臣下の諫言を能聞入れ、非を捨て是に隨ひ給ふが故也、君の智闇き事は、下に讒人有て其所言を偏口に信じ、理非を決せざるが故也、それ明かなる君は、能道を行ふ者には袖の下を握らせ、才能ある者には小半酒をも振舞、學者の口を用ひ、かりそめにも文盲なる人のいふ事を聞べからず、愚智なる人は、天地自然の理をしらねば、我心に能事じやと思ひても、學者の上よりみれば、愚人の善は智者の惡なり、上智は敎へずして道を知り、下愚は敎ゆといへども益す事なし、上智と下愚とは挑燈と釣鐘のごとしと、文宣王の金言なり、堯は太鼓を打て諫を待ち、舜又拍子木を扣かれしも、身を正して國を治めん爲ならずや、しかのみならず天竺には、隣の夷に國を任せ、民をそこなふ事をいたみ、唐には蝗を呑んで天に誓ひ、我が朝の稚足彥尊は、貧人をはこぐみ孤獨の者をあはれみ給ふ、仁德天皇は、高樓に登て竈のけぶりを悅び、顯宗帝の御代には、民に課役を懸る事なければ、百姓末進を負ふ事なし、銀壹匁を以て稻一石に代へるとは、此御時にや有らん、是等は皆末世にいたりて、賢王の名を殘し給ふ、粹方なる君はかならず、かしこき臣下を求め政を預け給ふ、むかし楚の國昭王の時に、王孫圉といふ者を晉の國へ使者に遣る、孫圉元來能き器量、四方髮をべつたりと伽羅の油で撫付、金鍔の長刀當世に抓指し、その頃楚國に時行たる楚呂綃繻の袴を着て、晉の國の玄關に至る、時に晉の定公座敷へまねき、二汁七菜の料理を振舞、押へ返への盃の上にて、定公の家老趙簡子といふ者、挨拶に出て、晉の國の名物、佩玉織の羽織自慢にて、王孫圉に問はれけるは、楚の國

には、楚呂絹とてかくれなき織物、五寸四方の切れにて、金壹枚の札を附、茶入の袋に仕るよし承及て候、其外にもめづらしき重寶御座候や、孫閣答て、我が國の寶とする物は、さやうの物にあらず、先觀射父といふ家老あり、彼は能敎訓の辭を作りて、禮義を主人に行ふ、それゆへ君の詞にあやまちなし、亦近習役に倚相といふ侍は、學問を能く勤め、諸分をとつくと吞込ば、朝夕主の傍に居て、君を諫め善惡の理を知らしむる、さるによつて我旦那の行跡に、不埒なる事みぢんもなし、依レ之楚國は能治り、乞食といふ者壹人もなく、椼走る鼠迄棚捜しする事なし、是則大なる寶ならずや、只今お尋なされし楚呂絹は、是々身共が袴に着し、又は芝居の太鼓幕にも仕ると、大やうに答へければ、趙簡子肝を消し、それでゆるりと御茶參れといふて勝手へ退く、されば君は賞罰の二つを以て臣を使ひ、臣は忠義の二つを以て君に仕ふ、君臣の道ひしびしと合ふ時は、をのづから國治る、君は仁にして臣は義也、仁とはあはれみの心をいふ、義とは二心なく君に仕へるを申なり、我が主をすてゝ、他の主に奉公するは不義なり、たとへば戰場に命をすて、事の急なるに望で死をみするは義なり、或は私の怒を以て命をそこなふ事、是義にあらず、飢て食ひ寒て着るは義なり、しかれども取まじき衣服を取、受まじき食物を請て、しばしの飢寒を救ふは義にあらず、今世間に義を立るといふ事をみるに、わづかなる物をば、義をまもりて請ざれども、多の財寶をば受まじきものをも、辭退せずして請る也、義にあらざれば許由は天下をさへ請けず、伯夷は首陽にのたり死、范蠡速に五湖に退く、是みな義を守る臣なり、義に於てよろしき處あれば、國郡を受ても欲とするにはあらず、舜は堯の天下を請け、禹は舜の讓を受く、是亦義のする所也、凡義は常に我心に具へずといへども、時にしたがひ事により所に望みて、それ〴〵に道理を捌く事ぞかし、堯舜は禹、皐陶、益、后稷を得て天下を治め給ひ、湯王は伊尹を以て國を靜め、文武の大公望を得て、仁政を民に施し給ふも、臣下の粋なる故ぞかし、とにも角にも主の目鏡が大事なり、家來も又主をよく撰び、不義な家には仕へまじ、第一臣の守る所は義の一つに止りたり、忠といふも義の名ぞや、右の條にうたがひあらば、腹に錐をさし無明の眠を覺まして、經書に性根

を入れ給へ、

風流日本莊子卷之四終

風流日本莊子卷之五

○親子の挨拶 附り唐人の涙 看病の了簡

君と臣とは、義叶はざれば離るゝありといへども、それ父子の道は、天性なればはなれがたし、親は子を見て涎を流し、子は親を見て猫撫聲する事、人間は申に及ばず、空をかける呼子鳥、地を歩行牛馬に至る迄、恩愛の心限りなき事とかや、廬山の遠法師、はじめ俗たりし時は大なる惡性ものにて、獵する事を好みける、或時山に入て鶴の雛を取りけるに、親鶴深く是を悲み、終に焦れて死けり、依て其腹を割て見られければ、腸寸々に切れてありしを見て、則弓切折り佛道心を起し、惠遠法師と改名し、鉢を開いて一生々臭物を食はず、女の手より茶椀も取らぬ戒行、唐國の浦店迄も隱れなかりし、誠に道なき翅すらかくの如し、ましていはんや人の上においてをや、されば子としては專ら孝を縱にすべし、孝なれば天理にかなふ、人は天地陰陽の氣を以て形を生ず、天地と其形を同ふす、頭圓くして上にあるは天の如し、足方にして下にある

は地に同じ、腹は和らかにして前にあり、南に海あるがごとし、背に骨ありて堅く靜なるは、北に山あるがごとし、春夏は人の氣も陽氣盛なり、秋冬は人の氣も陰氣になりて物さびし、晝は天地と共に動き、夜は天地と共に靜まる、是によつて見れば天地は我大父母なり、人倫の父母は小天地なり、故に子たる者其形大かた父母に能似る物なり、父母の氣を受て形となる、然れば子の體は親の形なれば、指一本をもやぶりそこなへば、父母の指を破るに同じ、もろこしの俞石珍といふ者は、高縣といふ所の代官にて、知行百石のあてがひなり、父を天乙といひ、隱居して三人扶持とり、ねだり食斗りして安樂に暮す、ある時父惡病をうけ、くるしむ事限りなし、石珍夜晝父の側に付添、さま〴〵の藥を用るのみならず、御封をあたへ祈禱をすると雖更に驗なし、爰に或庸醫教ていはく、生たる人の骨をくだき、血に交ぜて呑む時は、此病かならず愈ゆべしといふ、石珍思ひけるは、誰ありて我が父の爲に、生ながら骨をあたへて此病を救ふべき者あらんや、然るに今我が身は、父母に受たる所なれば、あへてやぶり損はざる事は、ひとへに孝の初たりといへども、父の病の爲に我が身を傷らんに、天道なんぞ是を不孝とし給はんやとて、自ら手の指を切て、人のをしへの如くこしらへて、父に奉りければ、其病則愈えけるとなん、すべて親に仕ふべき道は、孝經小學に、いにしへの聖くわしく教給へば、つまびらかに申に及ばず、我が國におゐて孝行をあらはす者亦多し、藤井蘭齋是を感じて、本朝孝子傳を作る、近くは富士の今泉、難波堀江の土持、是皆公より其恩を厚くし給ふ所也、遠くもろこしには、金の釜を掘出して質物に入れ、雪の中に筍を得て拔物にし、氷に伏して魚を求め吸物にする輩、二十四孝と譽られしは、天より其行を感じ給ふ所にあらずや、不孝にして雷に臍を抓まれ、蝮にねぶられて匕首になる者は、是天より惡み給ふ故ぞかし、げにやつとめて飽たらぬは孝の道、大なるかな深いかな、

〇夫婦のむつ言 附り女房のやり取 陣中の密夫

東西々々、天地の間に男女なければ人種なし、故に男女を以て人倫の本とす、されども男と女とは、各差別ありて亂るべからず、男は外面を勤め女は內の所帶治め、男は色に溺れず、女はうわなりねたみせぬを能

き道とする也、男女ともに親の家を出まじはる初は夫婦なり、さあるからは其本は夫婦ならずや、故に禮記には婚禮の事をのせ、詩經には女房の德をほめて、關雎の篇をはじむ、女の道といふは必しも、才智人にすぐれたるをいふにあらず、貞節の心を専らにして、助兵なる根性を退け、内證向の事、味噌鹽にいたるまで始末を好み、夫の家に肩を入るからは、所品をやめ、白粉口紅に至りても、人の目立たぬやうに嗜むべし、爰に女房を去るに七つの品あり、一つには夫の父母に順はずして不孝なるを去る、二には子の無きを去る、女房を持事子を出來すべき爲なれば、不生女をば去る也、三には惡性なるを去る、四には悋氣深きを去る、五には瘖病三病の煩有る女を去る、されども初は其病なく、夫の家に來りて後に、病あるをば去るべからず、六にはへら〳〵と口を扣き、かしましき女を去る、七には口まめにてうそをつき、人の中言などいふ女を去る也、又女房を去らぬ事三つ有、一つにははじめ嫁入する時に親兄弟ありて、夫の家へ來りて後に女の親類失せはてゝ、歸し送るべき所なければ去らぬ也、二には夫の父にても母にても死る時、夫と同じく弔ひて五十日、十三月の服忌を請け、忌日々々に精進し、香花を手向たる女をば去るべからず、三には夫初は貧乏にて、女房自ら手鍋を提げ、骨を折苦勞をして後に、夫身代能く成たる時は去らぬもの也、それ夫婦の間いかにもじつくりと、むつましき事こそあらまほしく、よその聞へもめでたふうらやむ心も侍らめ、一度夫にまじはり故ありて離るゝといふとも、二度緣付せずして後家を立るこそ本意なれ、貞女兩夫にまみへずといふは、唐も日本も同じ戒ぞかし、彦珍が妻魏氏は、道を守る事尤厚し、しかるに彦珍重き病に臥て、今を限りと見えたり、妻の魏氏夜を日に繼でいたはり、左の手には子を抱ながら、右の手にて病人の手足をさすり、粥の粥をば時々に秤にかけてためし、さま〴〵心をくばり、身を動いて看病すれども藥力聾程も利かず、石に針する如なれば頼むに甲斐なし、魏氏歎かなしびて、淚と共に語りていはく、君の命すでにあやうし、今は何とも爲方なく侍る、そさまむなしくならせ給はゞ、我が命もながらふべくもあらずといふ、彦珍こたへて、人の死ぬるは常のならひ、今更おどろくべからず、我たとひ身まかるとも、

かまへて心を取亂す事なかれ、幸ひ我子幼少なれば、いかなる方へも後家入して是を生立、家門の繁昌をいのり給へ、それこそ身共が願なりとて、終にむなしく成りぬ、その〻ち其國の大名に、敬業といふ者謀反を發し、天下已に亂れたり、敬業則彦珍が妻魏氏を抓へて、己が陣に連行、日頃聞及たる三味線の上手なり、軍陣の草臥直しに一曲所望じや、壁に蔦の葉〳〵と囃立て、たがやさんの調を前に置けば、魏氏ぶつ〻りとして、已前夫の死し時共に死ぬべかりしに、子ゆかはゆく思ふ故、よしなき命ながらへて、斯る無理所に望逢事面目なき次第なり、しかし是人さまの科にあらず、禍は浮身より起れり、此指こそ恨めしけれとて、刀を執り右の指を切落す、軍兵共集り魏氏を抓まへ、往生ずくめにして物せんとするに、いかな〳〵堅く防で成ませぬ、聲を上ていふ樣は、おのれらは犬猫よりも劣りたり、其上國をそこなふ大盜め、汝等に犯されん事存じもよらず、死る命に芥子粒程もいとひはせぬ、いつその事に早く殺せと呼はりければ、軍兵大に怒て、大膽なり女郎め口が過るといひながら、おへなく首を打落す、誠に無二の貞女なれば、魏氏が髮毛一筋を今の世の女に、煎じて呑せたい物じや、其外竇滔が妻は、夫遠國の地を守て歸らざる事を歎き、錦を織て天に祈り、早く戻して下さんせと、火の物絶して宰相に奉り、或は夫の別を悲しび、石になりたる女もあり、望夫石といふは此事ぞかし、惣じて女の所帶を持てば、萬づに目をくばり心をこまかにわりくだき、人をあはれむ事はいふに及ばず、むしけだ物の上までも、露のなさけをかけそへて、面はしだり柳の風にうちなびき、心はゆたかにして梅の梢に雪のつもるごとく、ほつとりとやはらかにふるまひ、身持やさしく、さゞれ石の岩ほとなりてこけのむすまで、さかへひさしき二葉の松の末々迄も、めぐみにあはんと願ふこそいとしらしけれ、つら〳〵あんじ候へば、夫婦の間のよきは女の心入なるべし、夫はいかに我が女じやと思ひ、いやしめあなどるといふとも、其をとがむる事なく笑顔よく立廻り、抱て寢々してさすつてやらば、木に竹を繼ぐ男なりとも何とて腹の立物ぞ、其身富貴にして、四條河原の石の數程金を持ても、病にうかされ立居不自由ならば、寶もよしなき物ならずや、その如く人々夫婦有ても、互に心がふしぐ〳〵な

らば一生女房持こととといらぬものなり、紀の有常が娘の、風吹けば奥津白浪立田山と讀て、忍歩行の不用心を氣遣ければ、河内通とやらんもふつ〳〵とやまりしとなり、それ是世々の貞女の沙汰、草双紙に澤山ある、或人の申されしは、狂言芝居で心中を研く貞女の意氣地を、丸裸にしてみせるは、性惡女房の手本に能事じや、此春江戸から歸り新參荻野左馬之丞が、山下半左衛門芝居に出て、新嫁鏡といふ狂言を勤め、京上郎の白顔をくわつと赤くさする事度々なり、何と都の米立覺があろ、そふじやないか、註にいはく荻野左馬之丞事江戸にては澤之丞と申候へども京へ歸り候ては昔の名に改申候以上

〇夢の明ぼの 附り兄弟によい中友達のまじはり

兄は弟を憐み弟は兄に從ふ、兄弟は手足のごとく常にはなるべからずとは、粹の莊子が詞なり、もろこしに兄弟の者あり、父の手より各黄金五百兩宛もらいて、二人連立行きけるが、道にて弟件の五百兩の金を水中に投捨たり、兄大に仰天して、それは先どふした事ぞ、氣は違はぬかといひければ、弟うろ〳〵涙を流し、あゝひょんな思案が出來ました、我此金を持ちたる故に、そなたの金をも奪取て都合千兩に成し、宋の國の横町にて、五間口の家買て妾狂せんと思ふ、惡根性の起りし故、とにかく金は災の種じやと存じ捨まいらせ候、兄ほつと息をつき、某も亦御手前を殺し、五百兩を引執り衞の國の米市に出て、飛商をせうと思ふた、あら恥かしやと云て、是も又其金を投捨る、斷金の契とは此事をいふぞかし、およそ兄弟は、專ら互に善を責て交るべき事、朋友の道に同じ、げにや高きも賤きも賢き心をこそねがひ侍る、狂人の眞似をすれば則狂人、賢人の眞似をなせばさながら賢人の如し、酒は盃の大なるに順ひて醉ひ、人は善惡の友によるといへり、朋友の間は互に信を以て交れば、其道末遂げて能き也、若僞あればやがて中惡敷なるなり、我より信をせば人も亦信なるべし、我より僞をせば人も亦僞なるべし、我より疑をなさば人もまたあなどるべし、我が方より誠を以てせんに、人未だうたがはば、扨は我が信の心いまだたらぬ故なりと思ひ、身を顧みていよ〳〵愼むべし、是を朋友有レ信と申なり、されば人の交りは、利欲を先とし合ふ時は、中能く甚念頃なれども、損得に望む時は却て敵となるなり、是を小人の交りといふ、君子の交りは私欲をすて、禮義

の信を以てまじはる故に、末久しく相うやまひて朋友の道を守る、此故に君子に友あり小人に友なしといへり、世にまじはるには先友を撰ふべき事第一なり、人々に我慢邪欲多によりて、互にそねみあらそふ心根あり、上面は親しきふりなれども、綿に針を包むといへる諺の如く、此心を種として、さま〴〵見ぐるしき事ども出來て、はなはだしきは仇敵のごとく相爭ひ、我が好た友へは、いやな友の噂をあしざまに取なし、互にそしり笑ふ事淺ましき事なり、爰に侍二人あり、一人は中臣右平次といひて二十四歲、一人は塔本惣兵衛とて五十有餘になる、常に傍輩の交むつまじく、諸事甲乙なく勤めける所に、惣兵衛は元來世智がしこく、主人の御鬚の塵を取、御爲ずくの始末自慢あらはれ、一夜檢校の立身して俄かに高慢、右平次を茶とも思はず、然るに主人の知行西國方なれば、大坂表俵物入津支配の爲、右平次此役にいひ付られ、彼地に半年程滯留の內、若氣の至りにや有けん、折々南江裸世界の色の問屋に行、米の買置する時もあり、又は西中女郎土にはまつて、九間揚屋の盃臺にのぞみ、うその皮をむく事度々なり、それ故に大に遣込み、讒五十石に五人扶持の身代にて、百枚程の借金を出來し、勝手の振廻しいなものなり、されども中臣氣一物なる生れ付にて、それを強ち苦にもせず、すでに俵物皆濟を遂げ、藏元のさし引埒明け、頃は七月十五日、指鯖二三の國へかへる、大坂滯留中の勤方、請拂のさし引は目錄にあらはし、爲替引替手形何十何枚幷に俵物の送り狀、買物の請取り、宿拂の日記等にいたるまで、鐚半錢のくもりなく、明細に分を立れば、主人大に感じ給ひ、則皆濟御判下され、ゆるりと休息せよと忝なき御詞なり、すでに年暮新玉の、御慶々々も事納り、右平次を呼出され、さても其方若年ながら、去年中難波の勤方、ちつとも殘る所なく、年々の古借金をも、あじまやかに年府になし、殊に米の賣樣、物の買樣、どこもかしこもよふ勤めた、はや我身代はくわなやじやと稱美せられ、則二十石の加增を云付らる、強て辭退に及ぶといへども、再三の主命默止難く御請を申す、爰に塔本惣兵衛此事をねたみ、右平次を見る尻目遣ひいやらしさ、土人形の梶原か下手の繪像の達磨かと思はる、同じ年の夏の頃、思はざる了簡違にて、寢鼻を鼠の喰る如く、俄に右平次に暇を給はる、

病目に芥子を塗たやうに、何の分もない事なれば、一膺科の樣子を聞屆んと思へども、六尺間の三間鑓なれば、跡先に支多く、所存を空しふして立退ける、跡にて惣兵衞疫病の神で敵打たる心地して、悅びの眉を開き、主人への讒口こそおそろしけれ、扨も右平次事、去年大坂勤の中西南の悪所にはまり、分に過て金銀をば、土佐堀の水のごとくに遣ひ捨、大分引負をいたし、御損を懸る事をこばくなれば、御暇とは生ぬるし、鍛冶やの三藏にみせても、切腹道具に極つた物ぢやと、逃た鹿の調義、緣の下の力持、見聞く人もあらざる所に、かたはらに高木庄兵衞と云老人此詞をとがめて、若是惣兵衞殿、そなたには似合ませぬ、右平次とは、昨日迄水と魚とのごとく契まれし處に、今彼者不慮に御扶持を離さるゝとて、鳥なき里の蝙蝠になり、頭で口はきかぬ物に候、先とくと了簡して見給へ、當春右平次に御加增を下されし事は、去年大坂表にて役義首尾好勤め、惣勘定殘る所なく皆濟いたし申によつて、その御褒美として二十石下されしにあらずや、惣兵衞いかにもそうじや、庄兵衞そんなら只今そなたの仰らるゝ通では、殿樣の御心入にはそむく、惣兵衞それはなせに、庄兵衞はて思ふても見さつしやれ、右平次が旅役を勤めしは去年の春夏の事よ、秋は江戶へ下り、御前に於てをの〳〵我等も共に立合、滯留中の勘定吟味の上にて、一厘も滯りなく明白に相濟、御墨付迄下されたではないか、然るに右平次實に引負あらば、其時の詮議にこそ是非をば分ため、すでに一埒首尾好く濟で、當春御褒美迄仰せ渡されし上に、今更古きを尋て何の證據もなき事を取出し、後指をさし給ふ事、傍輩の禮には似合ず、若亦右平次事、實正引負に極ればとて、一度勘定埒明て、皆濟御判をいたゞかせ、淸帳をば御藏に納めらるゝ上に、是が違たあれが足らぬといはるゝ物か、云へばいふ程主人の唐名を、裸にするといふ物じや、向後そんな阿房をば、盡さぬ物ぞときめ付られ、額に寒汗を流し、其後二言といふ事なかりし、いまし世の人の、おやをつかない心には、たまり水を海とかたり、塵塚を山といふなれば、よしみしたしみの間も一つの言の葉を以て、互に限りなき野心をさしはさむ事、是れ皆凡夫の心也、されば富貴にして一盃酒をも飮ましめ、美食をとものへて食はしむれば、兄弟の如くに親しき友、千人

も出來るなり、我れ時をうしなひ貧賤なれば、常にしたしき者も疎みはて、近付者まれなり、後漢の馬援初若き時、公孫述を友として、一口の物をも食合ふ程中能く交りけるに、後に馬援大名に成りて、對の挾箱御先で振らせ、片肱張て通らるゝ道にて、公孫述は古の形、かみ子布子で切編笠、馬援早く見付つゝ、馬より下りて公孫述が手を握り、さても久しやどうして居やるぞ、遠慮なしに來て咄しやれ、小遣錢もなくば、何時でも合力してやろと、昔にかはらぬあいさつ也、是をこそ信友とはいふべき物なれ、それ人の淨不淨は、皆友の心の好惡取捨によるべし、若好樂して取る時は、破れ家に膝を入れ襤衣に身をまとひても、耻とする處にあらず、若厭惡して捨る時は、銅瓦で屋根をふき、瑪瑙の柱に珊瑚の板敷をならべても穢はしとす、祝鮀がごとき佞者は名聞利欲を潔とし、伯夷顏淵が如き人は、却て是を濁れりとす、つくづくと世間の人相を考るに、彼が智惠がまさりおとりぬるとて、世にほまれをとるにはあらず、きはめて道をそむかぬこそ人のほまれなるべし、心にて心をなぐさみ、しれぬうき世をたのもしく、家來は主に忠をしらせ、子は親に孝を見せ、女は夫に可愛がられ、朋と友とは、信を以て交るこそ本意ならめ、そもそも今申所の五つの道、天地と共にそなはり、唐は伏羲の產湯の時、日本は天照大神の髮置より此かた、此一止入道が口を扣く今の時に至る迄、少時もなくて叶はぬ者なるべし、此五つより外に人の行ふべき道なし、此道を能く知て盡くすを聖人と申す、その道を得て心にうしなはざる所を明德と名く、この五道それぞれの理に當りて、至極する所を中庸といひ、此五つの物を人の生れつく所を性と名く、それを具するを心といふ、是を習得て身を治るを、儒者の學問と申なり、此外に別に道ありと申は、皆異端の敎にて候と、しめやかに語るに、追出し鐘滅法界に撞出し、夫婦鳥の濡の聲ひよつと耳に入れば、きろきろとして眼覺めたり、されども尙現心なくあたりを見れば、嵯峨堂じやと覺えしは四條河原の石の上、只ひつそりと薦をかぶりて茫然たる體樣、是何人ぞや彌市がなれのはてなり、有難し有難し、今こそ一生の迷ひをはれ、透脫の活路に赴いたり、凡そ夢に四つの品あり、神夢靈夢妄夢煩夢是なり、天竺の摩耶夫人は、白象來り股藏に入ると見て、

釋尊を生出し、間人の皇女は、醫者坊來りて口を吸こ夢み、聖德太子をもふけ給ふ、是等は神夢靈夢なり、聖の窟の日藏上人、地獄廻りして延喜帝に逢給ふは、妄夢なり、大森彥七楠とのせりふ、口上の詰開き、是を名付て煩夢といふ、しかるに今見る一止が夢は、右四つの外にして、名の付られぬ夢なり、おもしろしおもしろし、邯鄲の枕引よせ晝寢の內に、五十年が間榮耀食して、玉の床に樂遊びせし、夢のぬけさくも、百年花にたはぶれし胡蝶のうんつくも、今日の阿房が嵯峨のむだ夢も、秤に懸て輕重なく、荷負はゞ棒がぽつきといはむ、南無三〳〵、とにもかくにも三露盤の外な浮世じやと、つぶ〳〵獨りかこちて、

ぬるまのみ世にすむ甲斐は有ながら
　　さめてことなるあかつきの風

と聞へしも、哀れなる夢の覺際ぞかし、こんな意氣の能い薦着は又となひ、粹な人さまから、仙臺米壹俵づつとらせても惜しふはあるまい、西明寺殿はおはせぬか、

京麩屋町誓願寺下る町
板元　八文字屋八左衛門

風流日本莊子卷之五終

風流今平家目錄

(一)今宗盛一門振舞
大晦日は誰身の上
身勝手に七福神の掛物ぞろへ
年わすれの參會
せまじきは勝負事人の心これよりぞしる

(二)今樣操身體
五つ子の知惠碁盤人形の働き
繪草紙が異見の物種
書ならべたるもしほ草
手代に過た日野袴
鬼が千びきせつない事の

(三)今重盛敎訓狀
當流町人の善惡耳をふさぎかぶりをふる
道をしらぬ兄弟は他人のはじまり
手細工のうつろ舟乘て行身は哀なる事

七八之卷　東山の色櫻思ひの山
(一)今俊寛涙の足ずり
憂身は爰かしこに流よる舟
情は漁夫が心ざし
居ながら熊野詣の風景

別は生爪はなさるゝほど哀なる事

(二)今樣歌學娘
亂心子ゆゑにまよふうば櫻
散もせぬ姿九重の色くらべ
祇園香煎降がゝりのうらみ

(三)今の世の火の車
我よきに醫者の惡敷があらばこそ
醫者の惡敷は我惡敷からなり
かぎりの熱病おしやかねにみかへる命

九十之卷　欲と情と門ちがゐの男
(一)今の世の身賣評
形見に殘るかね手形
歸り花また散かゝる姥櫻
ふりくじは勤と佛道の道引
廿兩の小判あたまから突出し奉公

(二)今樣女忠度
傾城の下聞
身につまされて諸分の指南
名殘のふくさ書捨の歌合せ

(三)今知盛惡性入

目錄終

風流今平家一二之卷　町人身の手鑑

(序)戀慕かこち草

九重の花武藏野の月難波の舟遊、これらは年々の遊興にて何かめづらしき事なし、居ながら自由を駿河の府中に富にあきたる何某、惣領に世をつがせ、其身はひとり娘をさすらゐ、江府にくだり谷中のほとりにかりの笹ぶき、わざと目立ぬ家作り、誰おそるゝ者なく朝暮酒ゐんにちやうじ、四季の花を手づから作りて老の樂とす、息女は三五の月くもらぬ姿、心やさしかりければ父殊更の寵愛、姥腰元あまた付置、晝夜のわかちなく歌がるた貝合、或時は歌淨るり、上方にはやる色草紙あまねくもとめさせ、獨寢の友是程よき慰あらじと明暮すかせ玉へど、心地常ならねば姥腰本驚き、よみ物は御氣にさはらん、幸ひ京商人の語りし翁淨るりとやらん、ふし付おもしろきとて、腰元衆がなづみもつぱらけいこ仕、いざ姫君にもおしゐませんと、車座に居ながら是より翁上るり所千代までおはしませ、我等も千秋さぶらふ、鶴と龜とのよはひに

て幸ひ心にまかせたり姫いや〳〵何程そち立がいさめても、任せざるは戀の道、千早振神掛て、思ふ程なき戀人に、いはで病なんもなし、戀にはやつす習、昔用明天皇は、玉代の姫を戀わびさせ玉ひ、山路が草かり笛とて、世のことはざに成り玉ふも、戀ゆへにてはあらざるや、我なまじゐ弓馬の家に生れ、あまたの人にかしづかれ一間にのみかくれ、安かりし事をしらず、何とぞ此身を儘にさせてくれよと、誠に狂人たる風情、姥腰元御側をはなれず、其戀人はと尋ぬれば、よしなやいわではつべきを、やさしふもとふ嬉さに有增を語るぞかし、此頃父上方へまいる、よしといへる瞽女を見るに、女共見へず男なりけり、業平の面影、風義しとやかに情有音聲、琴三味線の爪音けだかく、自然と居ずまいしとやかに、三十一文字をつらね、何に不足なき身の、いかなる神のたゝり玉ひ、あたら目をしゐけるぞ、男になして見まほしやと、あてなき戀に此身をせむる、かならず父うゑに咄してくれなと、手を合させ玉ひけるに、やくたいもない御事、何に御不足なき御身、殿ごはお望次第御婚禮有べし、わろびれたる心などもたせ玉ふなといさめ申に、少しは笑ひ玉ひ、然ば彼瞽女名寄、歌うたわせてとの仰、其こそ易き御事、先お氣ばらしに御酒一つ御肴は何々、いやとよ方々、君常に秘藏有し皐月の花あまた有中に、すぐれて五本の名木、今を盛りと咲亂たる花の顏、此お座敷へとりよせ是を肴に酒あげん、其内瞽女も參るべしと、腰元あまた入つどひ、色よき花に振袖の、びらしやらどけの帶しどけなく、一人〳〵一本宛御前にはこびけるにぞ、姫君わざとよそ〳〵しく、姥は花の名付親、わすれぬといふ自慢顏、はなしてきかせとの仰、主樣こそ御存知あれ、此姥がうと〳〵敷を、笑はせ玉はん下心と見えたり、なれ共まかせの身、覺の通り申あげん暫御免有べしと、曲彔に腰をかけ金のざいふつて、一つ〳〵の花の名を尋けるは、誠に興有る慰也き、一番は姫君樣、朝な夕なになでしこの、名も唐あやとめされしなり、御持參の腰元衆、僞花に唐がすがたに作り木や、小蝶にあそぶ勢おのづから、木隱れ、どなた共見定がたし、迚もの事に名を御名乘り有べし、さん候私は小柳と申て、一年たゝぬみやづかへ、未だ御屋敷不案内、御局樣の目金にて、宜しく御引まはしを賴ますとお目通に畏、でかされたりと

ざいふつて、其次の花は白鷺と覺たり守人たぞや、はづかしの名は有明の月小夜、御家久敷者なれど、いつがいつ迄獨寢の、枕恨るばかり成き、すこしは氣をも通し玉はれ御局樣との笑顏、御不足は尤ながら、御家の御作法もだしがたく、三十までの緣付、ふつ〳〵かないませぬと聞もうらめし、せめては忍妻御免もやといひすて、御前に出けるにぞ、若いはよしなことはりなり、三番は薄紅葉花守ぞなた、私はかた樣の御世話にて御やかたに召出され、ぞをやらかをやら物のわけ、しつた顏して折ふしは、いたいめしたが身にこたへ、今五人目の役目を勤、お髪揃の通り者つげと答てあゆむふり、アノいきすぎた風俗が、まだやまぬかと見るうちに、跡より出る子櫻丸、親はなけれど年每に早咲の名木、花の姿も愛らしく、子を抱いたるうば玉は、お姬のお氣に入生田殿にてましますか、子櫻に心を付、もたせぶりは當座の知惠、されば一條院雪のあしたに、香爐峯の詠はそのたまはせければ、淸少納言北の軒端の御みすまきあげける、遺愛寺の鐘は枕をそば立て聞、香爐峯の雪はすだれをかゝげて見ると、樂天が詩の心もかくや、さすがおめ聞の腰元、ちよい〳〵とほめられ御前に差置ぬ、五番に見えし花の山重盛といふ名木、いづれにおろかはあらねど、殊にすぐれてもつたいよし、されば此花、重々咲くゆゑに重盛と名付たり、女中の力におよばぬを、獨り守來る守人の名は何と申、五七日もあはざるゆゑ、御見わすれは法事ながら、誰か我名を白露の、きへ〳〵となるきりやうゆゑ、玉章ちづかにおよべども、一度の返しも致さねば、重て慕ふ者もなく、又こなたより文すれば、そちから賃をかく共いや、厄病の神歸れとて、爰かしこにて追出され、不自由に暮す寢屋の內、今年三五の廿八、振袖白ばが命にて、お姬樣のおそばを勤ながら、我人共にいやと申女也、女中あまた候へ共、此重盛を一人して持人並ぬ力づよ、ちつとほめてくだんせと、かたはだぬいて胸たゝき、しやもの手もと猶おかし、いづれもどつと打笑ぬ、姬御機嫌一かたならず、旣に御酒ゑん中場ゑ、瞽女のよし參りしかば、いよ〳〵よろこばせ玉ひ、すぐに盃玉はり、何にても替し音曲、又珍敷咄のあらば語きかせとの仰、御覽の通り兩眼しゐ、晝夜ともし火を失ふたる身、何か御機嫌に成べき事もあらず、手わざとて、琴三味線はやり歌

より外をしらず、すが〳〵きりんせつ吉野の山、また寢の床も古し、只今御次の間にてうけ玉はれば、御秘藏の花の名重盛と召れしに、幸ひの事に思ひ付たり、此程去屋敷に、風流今平家と申本をもてあそび玉ひぬ、よませ玉ふを聞に、昔の平家物語にことよせ當世のことわざ、哀れなる事面白き事のみなりき、有增覺はんべりぬ、是をやお咄申さん、殊に地讀の外音曲所は、琴三味線にてあふもふしぎ、あはぬも時の笑草、いかが仕らんといふ迄もなし、とく〳〵との御所望にまかせ、出る儘の妖言皆樣おめなりませう、

（凡例）今平家の大意

諸行無常の鐘の聲、じやくめつゐらくのひゞき有、沙羅さうじゆの花の色、盛者ひつすいのことはり、おごる者久しからず、人界の有樣は夢幻のごとし、たけき人もつゐにはほろぶとなり、秦の趙高漢のわうもう、梁のしうゐ唐の祿山、これらは皆、舊主先王のまつりごとにしたがはず、天下のみだれん事をもさとらず、民のなげきをも歸りみねば、おのれと身を責るとかや、我朝にては將門すみ友信賴、平の入道清盛、此人人のおごれる事とり〳〵ながら、殊に身の程をわすれ、明暮まうあくにおごり子孫の繁榮をしらず、一生の榮花のみきはめしは、安藝守清盛にてぞ有けり、先祖はくわんむ天皇第五の王子、一品式部卿かつら原の親王九代のかうゐん、讃岐守正盛が孫刑部卿忠盛の嫡男たり、高望の王子の時始て平の姓を玉はり、それより次第々々にへあがり、太政大臣までになり玉ひぬ、御子あまた有けり、嫡子小松の內大臣重盛、次男宗盛三男知盛四男重衡、息女あまた持ち玉ふ、其外一門の公達かぞふるにいとまあらず、かく目出度かりし平家、世を取て廿餘年をかぎり、賴朝公の爲にほろぼされ、或は一の谷の合戰にうたれ、又八島だんの浦にて入水し、哀れはかなき水のあは、きゆるがごとく成玉ひぬ、其子細を十二卷にしるし、平家物語と名付し作者は、大織冠の廿三代のかうゐん、和泉守行宗が次男信濃守行長、東洛吉水にて是をつくれり、後鳥羽の院かぶの御論義の御時、行長をめされ七德の舞を仰付られしに、二つわすれければ、五德の冠者とよばれしを、行長心うき事に思ひ、學文をすて〳〵とんせいす、慈鎭和尙聞召、斯る初學辯口の人をと、下部まで召おかせ扶持し玉ひぬ、或時生佛といゑる盲目を

まねき、平家物語をおしゑかたらせけり、彼生佛がかたり聲を、今の琵琶法師まなびけるとなり、今平家の作者は文盲にして、文字さゑうとかりしが、竹馬より假名草紙を好み、我と書集め我とあづさにちりばめ、我と樂み、世のそしり笑草を儘にして、又十二卷を略し來る春櫻にきざませ、世のつゐゑをいとはず、殊に平家物語の俤さらにあふ事有まじ、誰人にもせよ笑玉はん所をよく耳に覺え、ひそかにしらせてくれかし、あやまりを聞文才の師となさば、おのづから又耳學文のたより共なるべし、本平家の作者は行長是は惡長、生佛は座頭我は瞽女、殊にふれ時により替も浮世の樂、うけ玉はりし一通、昔はむかし今は今、色こそ替れ品々の清盛公に生寫し、是程まで似る物かと、筆の林硯の海する墨のはてしなく、書ちらしたるちらし書、人の行末水の流ほどしれがたきはなかりき、我人たしなむべきは色欲の二つ、なんと左にはあるまじきや、

（一）今清盛すがた比

日本の大湊難波の濱の人心、五尺までなきからだに富士の山をのみこんで、懷手して十千貫目の商賣、きのふ迄花麗に見世かざると思へば、今日は裏棚をかる者有、六疊敷から五けん口の見世をはり、下女が下女をつかふて見れど、俗姓つたなき者どこやらつまらぬお家樣、世間皆飛鳥川の淵瀬かはりやすく、一夜檢校に成ば此湊にてとゞめぬ、其頃伊丹の何某といへる有、手前富貴にして西國方の御用を聞、いつとなくとり入、米藏の出入もおのづから自由に、段々仕合つゞき、金の中より目をむき出し、年々榮へ男子四人女子一人有けり、惣領は重右衞門次男宗左衞門、三男友之助四男重五郎、いづれもきりやうの若者、嫡子重右衞門其頃二十七歲なりしが、定まる妻もたず晝夜學文に心をうつし、四書五經前後漢書まで見つくしぬれば、仁義禮智信の常にわすれず、近所にては孝子の重盛といへり、殘三人は心々にして惡をわすれず、すべて町人俄に福者と成事、商賣の外よき事なくて成がたし、道を守る者かならず富貴する事なし、人惡敷云ふも馬の耳に風の當るがごとく、只欲の一字に五躰をからめられ、おのれが釜戶より外をしらず、人のよきをそねみ惡敷をよろこび、好でまづしきに金銀取替する事、利銀つよきゆゑなり、利とゞこほれば

本銀に直し、五百匁が七百匁の手形となり、又此利銀せつかるゝなど、貧乏神に鑪子を持せしより猶はかの行事也、切にすまさねば代官所へうつたへ、威光をもつてさいそくすれば、賣掛したる者迄さしあはしてせつく、いやといはれぬ負目の門、片手打にもならねば、身躰ふるふよりほかなく、有たけ負せ方へつき出し、配分して取くされとあら涙をながし、着のまゝ出るも金やめがわざ、今におのれも此身にならん、人間の盛衰をしらぬかなどゝ、恨も愚痴なれど、借方了簡すれば自然と濟よせ、身躰つゝがなきものなり、いかに山吹色の光つよければとて、あまりなるしわざ、かゝる手前者、此世から金につかはれ、身の樂をしらず、晝夜十露盤を枕とし、借方の根帳をくり公事する門の指折、目安の分別するうち、夜明烏迄かわいやかわいやといはれ、一夜ゆるりとふす事なし、是等の富貴年月のかざり有、伊丹此ごとくにして、今年五十歳までは目出度かりぬ、過つる秋妻におくれしより、いかゞおもはれけん入道して可運といゑり、二男宗左衞門を武州にくだし俵物の賣買、三男を下の關に下し、何によらず所々の出買、四男は京都にのぼし錢見世を出させ、毎日の相場を聞四季の天運をかんがゑ、いろいろの買込あがりを待て賣拂ゑば、いかな事そんをしらず、明暮德取てする程の事よければ、三ヶ津にて賣買の高下掌をさすがごとく、入道彌々さかんにして四人の子供に嫁を取、歡樂をきはめん取沙汰すれば、出入のもの仲人して禮銀さらん事を悦び、草履雪踏のやぶるゝをいとはず爰かしこをきくに、ねをひの何某はかぶりをふる、相談すべきといふは入道のみこまず、有はいやにして思ふはならず、緣は時をまつより外なかりき、入道寢覺さびしきあまり無分別の思ひ付、上町の藤見に事寄、先玉造の稲荷に參り、此うへにもまだ福德をねがふは、欲にかぎりのない人心、それより野中の觀音に趣、壽命長晉にいのり、小橋の煙寺町のかね、我爲には金神なりとて、わき道より上鹽町森野勘七方ゑ立寄、奥に通り心底のこらずかたれば、亭主請取、さいはいくつきやうの者こそ候へ、名はからん小らんと申て、兄弟ながら適なる器量、手書歌を讀琴三味線よく、女のしよさ一通事をかゝず、本國は紀州、加田粟島より樣子有て此所に出現有、母一人有けるをはごくまんと、兄弟ぬい物綿

なごつみて世をわたりぬ、されど女の手わざはかどらず、節季々々のふづまり魂にこたへ、我と手わけ色奉公に出、母の心をやすめん分別此間きはまり、ひそかに此男がたのまれぬ、人づれせぬを賞翫に當分は三人扶持、妹が事は算用の外、先御らうじませとすゝめられ、是耳よりな相談、しかし粟島より出現と云ふが、腰より下に申分はないかと大笑して、めしの使程なく兄弟來りぬ、入道つれ〴〵詠め、居ずまひ物ごし風俗に氣を付、兩人共に歸して後、妹は年若なり、姉はかつかうよし、きやつにせよと勘七が辯にこかされ、捨金十兩わたしきれいなる座敷をかり、下女一人つかはせ四人の扶持し、明暮通ひ老の樂とす、

(二)今祇女仕掛事

其頃は五月雨の、空定めなきしぐれにも、我通路に關はなく、老木も今は若木に歸り、詠にあかぬらん菊、よき中川の水のよどみ、いつとなく梅の香をのぞみしかば、母悦のあまり神佛をたゝきまはし、ねがはくは男子をよろこばしめ玉へ、御本妻の子達あまた候へ共、いやといはれぬ妹脊のかたわれ、十の内三つは私が孫がもの、諸願成就せば常燈明あげ奉らんと、長範があて飲、相借屋のとゝかゝ小半酒に顔かたむけ、尾にひれ付てのつゐしやう、わ子に成すましたと、人も聞ぞかし先沙汰なしと云ふ所ゑ、入道來り座敷にとをれど、姉は勝手に高枕、妹の小らん罷出病氣のていをかたれば、入道心に思ふは、きやつは早懐妊とみへたり、よろこばしくいらぬ物、月重ならん内ながしてくれんと、心に思ひ口にては、先めでたい随分けがなき樣に、高き所へ手なんどあげさすな、懐妊の内くさい物を食すれば、かならずその子病者と成、かたまりは右か、左は男にして右は女なり、同じくは男子こそよからめ、娘の子は親の苦に成事久し、男子はくびかせになる事あれどそれは定まり事、女氏なふて玉の輿に乗など百人に一人、いかなる手前者を聟に取とも、女親の鼻が天狗に成事まれなり、何にもせよ無事に產するを待のみ、萬氣を付身持くづさぬ樣に、足をのばして寢さすな、かりにもげたあしだをはき、つまづきなどすれば產安からず、腹立いかれば其子たんき也、女の身持大事と云ふは懐妊の内ぞと、親のいはざる事をこま〴〵かたれば、妹は悅び姉の身にしてさぞ嬉しからめ、我人若木の盛りには、色よき男に

そひ寝など、末もとをらぬ戀草をかこち、よしなき憂名をながすもの有、かた様ごときは跡前のしめくゝり、とけぬ枕のむつ言さぞとおもはれおうらやまし、我もそもじ様ぐらゐの殿ほしやと、いなせりふになれば、入道また妹にうつり、そちは年ゆかずこさかしき事をいふ、其詞いつはりなくば身爲惡敷はせまじ、約束の酒一つのんでこなたへさせ、はゞかりながらあげません、いつはならずと一つはきこしめせと、ひざにもたれつがんとする手をしめられ、わけもない姉様心地惡敷內、おとぎ申せとこそ仰つるに、人も聞兄弟ゐの戀慕、有るべき様におもはれず、ざきやうも殊による、なぶつてもらゐますまいと思ひもよらぬ返答、いゝ出さぬ內は其の通り、生年よつていつはらば、八幡もしやうらんあれほれとをす心底、いやと云へば親子三人流浪せん、扨兄弟に戀する事非が事にあらず、平家の大將清盛其身榮花の餘り、祇王祇女といふ兄弟の白拍子を召れ、左右にならべ寵愛す、ならべこそせまじ、兩人心を合せふびんがりてゐさせなば、行末めでたからんとくどかれ、暫返答せざりしが心に思ひけるは、今我いなといはゞ、是を幸にとをざかり玉はんもしらず、姉様まめに成玉ふ迄、思案のめぐらしつりよせんと、思ふもさすがやさし、詞にてしたがはんも道からねど、當世の勝手左にもあらじと胸をきはめ、御志の嬉敷餘りいか様共成ません、しかし逢夜は首尾次第とさすがに恥る風情、入道悅、さしあひくらぬは犬同前、互にさゝられぬが命、志と金三兩懐ゐねぢこまれ、なんじやとばかり、萬心のはかなきは是よりぞしる、今一つ御酒あがりませいと、さしむかいにて、あいのおさへの夕暮より、四つ迄の酒盛小らん酒に亂、面に紅葉をちらし只にこ〳〵と笑顔、姉と替酒飲での機嫌、苦しからぬにやすまれよ亂詞なんといはんすぽん様、ちとたしなまんせ、內には子達もないかなんぞのやうに、あまりきやうこつ東がしらむ、こちのかゝ様の茶のみ時、よしやさがなき身のふもと、古今まじりのはやり歌、うたひながらふしたりぬ、入道彌々のぼり、色は若いが花こりや風ひくなと、ゆりおこせど鼻で斗の返事、首尾は今宵と勝手をのぞけば、姉は前後をしらず母はとなりへ茶のみ語、爰ぞしかけの初枕、ゐふたふりして手をとれば、誰じやといふ口に手をあて、おれと云ふに驚き、姉様

につげますといはれ、入道魂をとばし、やれおがむ姉がきいたらたまる物か、最早歸ると立出るを、うしろより袖をひかへ、今のごとく申さねば姉樣ゑわけたたず、あたまからさとらねなんの樂が有ぞ、逢言のはいつまでも、誰中宿を拵へてとせなかをたゝかれ、それでこそ嬉しけれ、母にも姉にも心得て又あすの夜と立わかれける、

風流今平家一二之卷終

風流今平家三四之卷　町人身の手鑑

(一)今樣妾揃

伊丹入道身の榮花のみか、一家共に繁昌し、麻の十德も縮緬とうつり替る世の習、秘藏の娘を里ならび萬代何某とて近年の手前者、聟舅五格の身躰、是より男子共に嫁とれば何か望の有べし、なれ共、惣領惣右衛門が孔子くさい顔には、いかな親父も秋風や身にしみ〴〵とこたへ、俄に隱居の思ひ立、六七町脇にきれいなる家作り、一生喰餘る程の金銀あそばしてゐきなしさ、入道古がいの手代七兵衛は鎰(かぎ)あづかり、次郎兵衛といへるは借方の支配、萬氣づよく埒をあくれば旦那の耳に入事なし、是程の手代有ながら、五節句の棚落しを聞き明暮十露盤はぢき、寺道場は東やら西やらしらぬが佛、世躰佛法腹念佛とわるい世話を聞、あたら年月を只欲にのみ暮し、殊に寵愛の娘緣付させてのさびしさ、お出入者來り、此程聟樣ゑ參り、御夫婦のあいさつよそながらうけ玉はれば、お中吉野の櫻花、追付子持櫻の枝榮、爰もかしこも姥櫻、御

世の盛今の事、おめでたやとのつゐしやう、誠に入道が身程目出度はなし、此上にも長生をこそねがへと、書はらんがもとに通ひ、兄弟が佛詠にあかぬ別路、宿に歸れば寢覺さびしく、是ではすまぬ浦の浪現にもわすれがたく、せめて妹をむかひそひぶしさせんとおもへど、しのぶ戀路は儘ならぬが命、さしあひくつて目に物いはせ、すげなき顏見るなど樂の一つ、是は儘にして、よの女をかゝへ情くらべをさせんと、あくるを待兼ね又勘七に語り、世話しやうじのかゝに、櫻しやうじのとゝ方へ人をはしらせ、右の通りを申わたせば、我も〳〵と名有妾を召つれけるにぞ、入道が門前女の市をなせり、一人づゝ勝手に入、風呂敷包より着替を出し上を下ゑするなど有、つき〳〵のかゝにめろう、髮なでつけ帶の結びを仕替、今や〳〵と待所へ、勘七目錄をひらき入道が末座にひかへ、一番に奴のお品はや御出と申けるに、七けんの間につゝ高に取、おめずおくせず御前に畏り、入道目金をかけ念頭に詠、そちは他國者か年はいくつぞ、當年が十八生國は備後、海上をへて此所へ參りました、樣子は御緣次第お咄申ませうと勝手に立、次はやりぱなしのるい殿これへといはれ、あいとこたへて立田川、流の末のあゆみぶり内八文字、大やうにべつたりとした居ずまい、古鄕は都の西年は天神の御緣日、御參詣の折からはちとよらんせと、闇に石打とはず語りいか樣子細有べし、樣子はこなたよりと歸して、跡はぐめんのさつ、私は當地の者親獨子獨、世躰持身に秋はてゝ互の隙を取やり文、三くだり半もござんすの、口もとそつて氣にいらず、はやくいなせと目はぢきしられ、しほ〳〵と入さ山の月、ほの〴〵と出られしは實方の浪とかや、ことし二八の薄霞、おのれと笑る風情、目に戀をもたせ入道を見るしかけ、手足じんじやうに物ごし愛らしく、男ずれぬかたぎ、是にきはめよと勘七にさゝやけば、迚ものお慰に今二三人ごろうじませ、殘る花こそ色よけれ、殊に生娘と見ゑ綿帽子着たるは、ねざめのせきとやらん、是見ずばなるまい爰ゑまいれと、入道右の座になをらせ、懷へ手をさしこみ、くるしからぬに綿をとれ、恥敷ながらかゝる座敷は只今がはじめ、御緣次第とは申ながら、千代を重てかはゆがつてとしめかゑされ、綿とりしを見れば卄餘りの女、入道驚き二目とも見ず、たゝんとするには

なさず、殿達の詞はりんげんにひとし、殊に大事の懐迄さがされ、男へいひわけたゝぬのみ密夫のつみのがれまじ、互に名のたゝぬ内首尾よく埒を明玉へと、思ひもよらぬ筒もたせ、にくさは海山なれど、近所の手前旁々よろしからずと、前巾着のひぼをとき金二歩さしつけられ、これしきの金にて悪名とらん事思ひもよらず、誰こちの人よんでこい、誠の契なきを男に見せて腹いさんと、調子高にわめかれ、入道腹にすゑかね、きやつが心底割てもあかず、一分の捨代官所へうつたへ上の詮議をねがはん、存分にせよと二三間取てなげ、大の眼に角を立、左右をはつたとにらまへければ、坊様其手はくわぬ、命を捨ての商賣どなたでもおそろしからず、いづ方ゑも御供せん、いざ御立と引立る、勘七とゞめ女を勝手にまねき、子細を有程これまはし金貳兩にてあつかはれ、それほど難儀あそばすをいなと申は物にかゝり、みなんたはむれぬは神佛も御存知の事、こちの人がきかれてもさのみ腹も立まじ、御暇申と歸るなど誠におそろしきたくみ、入道手を打、油斷のならぬやつばら、迚も我とにせぬをさとり、思ひもよらぬ金をとられぬ、尤浪とやらん目に入しかど又しかけ者にてやあらん、親元きも入吟味の上かゝゑん、先々歸れのぶきやう顔、勘七わつと飲かけ、旦那の御身躰にて、口くさり金二兩や三兩何事かあらん、私請取、明日から浪お浪の浪枕海老のかたらひ、しやほてつ腹のくねる有樣、今見る樣に有べし、其にても御機嫌悪敷やとそゝりあげられ、いづれ浪めはたまらぬ器量、萬端そちにまかす、前後に念入早く首尾せさせよ、先程取替たる金一兩か二兩か、いや三兩でござりますと、ちよりと一兩下され先私も我男、入道樣に金子取替る時節、利銀はまいらぬかと大笑してさらば〳〵、

（二）今佛御前の最來

世間皆金の光、小判の花をさかせ、何事にても儘ならぬはなし、勘七が辯にこかされ思ひもよらぬ浪枕、下女と定めしかど、引をろしつかはんもむげなしと、小女獨つかはせければ、奥樣同前かりのそひ寢も過去の縁、大勢の中より召出さるゝは御縁ぞかし、かならず驕心もたせ玉ふなと、しゆやかなるあいさつ年にこそ、うはきはとつと昔の事心よくつかゆるなば、氏なしと玉の輿乘るまじき物にあらず、御詞にいつはり

なくば誓文にてきかんといはれ、けふの天道に掛け奉る法もあれまつたく虚言にあらず、それは誠しからず、日もはや西にかたむかせ玉へば誰か罰あてん、是は拙者があやまりと、折ふし十五夜の、くまなき月をかけまくも、互にかはらぬ妹背のむつごと、月山にあやしきものこそ見ゆれ、あれはと尋しかば、入道うなづき、あれはそれがしが秘藏せし色紅葉、世に有名木常にしておかしからず、氣を替へ人の形に作りぬ、見る人驚く事そちばかりにあらず、あれを肴に酒一つ、お咄を聞てあんど仕りぬ、是は私が御異見申、花のすがたをかゑさせません、如何樣共心任せなれ共、此秋の盛りを詠其後はともかくも、先うれしいと打もたれ、さいつさゝれつ機嫌中ばへ、下女文もち來り入道にまいらせしかば、上書よんでかくさんとす、浪これを見付け、くるしからずば見せ玉へ、いや見せまじ、見ねばならぬとむたいにとられ、にが／＼敷顏ひらき見れば何々、

文此ほどはたゑて御おとづれもあらず、御暮しのほどいかばかりあんじまいらせ候、殊にたゞならぬ此身なれば、今までより猶御とはせも有べきを、さはなく、さりとは心づよき御事、母も妹も御越なき噂のみなり、もし御きもじなど惡敷やと、思ひにたえかねわざ／＼とはせまいらせ候、兎角の樣子御しらせまつに候かしく、

讀もはてず淚をながし、誠に女ほど淺ましきものはなし、此文どなたかはしらねど、かたさまとはふかい中、殊に御懷胎と有身をすてさせ、又わたくしゑの御戲れたのもしからず、誠の契とはかゝる時をや申さん、我御屋方へ參（ママ）り御通ひあらねば、若草に目くれ捨られもやせじと、女心のくい／＼と、私へ御恨のほど思ひやられぬ、それ程惡性にては又外の花にうつりやすく、自もよそにならん事とほからず、思へば行末心もとなし、身にさはりなきを幸ひ、御暇玉はるべきよし、入道手もち惡敷、推量の如く年を重し女、殊に只ならぬ身となりしより、寢覺さびしきにこまりそちをかゝゑ、やさしき詞にほだされ、彼が方へ遠ざかりぬ、文をかくせし事もしは嫉妬の心もやと、思ひの外成る貞女、蘭が身にしてさぞうれしからめ、此うへはせつ／＼通ひそりやくにせまじ、今の心底誠ならば其儘勤えさせよ、もしそねむ心もあらば望にまか

せ暇をとらせん、二つに一つの返答いかにといはれ、心やすかれとて硯にむかひ望のごとく書やりぬ、三度いたゞき守に入、我かゝる心とはしり玉はず、歸つてねたましくおぼしめさん、身はいかなるうき身とならばなるまで、幾久敷いとしがつてしんせさんせと涙ぐみたる目遣、よしない事ゆへおかしさをわすれぬ、いざやすまんと入道一間に入ければ、跡に殘りし浪枕、よるべ定めぬ身のはて、一生いかにくらせばとて生はつる身にもあらず、入道今かく目出度わたらせ玉ふ共、人間の盛衰のがれがたし、たま〳〵うけがたき人と生れ、いかなる榮花にほこる共、いくばくのよはひをへん、なまじゐ我、錦をかざり美をつくし歡樂をのぞむゆゑ、おのれとおのれが欲にまよひ、一年切に男を替年々人の氣をかぬるも、世渡りながら思へば傾城にひとし、親有る人は親に孝の爲、いやしき勤するなどことはりなりき、我はそれにかはり幼少にて父母におくれ、たよりなき身の只獨りはるばる此所に來り、しる人有てかり初ながら此身と成、爰かしこの手にわたり、年月おもしろう暮せし内にも、本妻有と聞てはどこやらにそねみふかく、ともすれば心意の焔きへがたし、此つみ思へばおそろし、もつとも入道情ふかく寵愛かぎりあらねど、自らに思ひかゑられしおらん殿の心ざし、思ひやらるゝ哀なりき、爰かしこを思ふに付、せまじきものはかゝる宮仕、是を勤のかぎりとし、佛の道にいらんや、又殿目開して一生の樂をきはめんやと、思案中ばに目もくらみ、我手枕のしどけなく〳〵、またあすの夜も有ものと、うつら〳〵とひとりねをする、

(三)今祇王嫉妬の紅葉

其夜うしみつ過る頃しも、寺々の鐘かう〳〵ときこゑ、空の氣色物すごく、月山にあやしや女の聲して、時の鐘を指折數へ、うれしや八つと見ゑたり、我親の爲入道にかしづき、心にそまぬ色にほだされ、たゞならぬ身と成ぬ、若草の色ふかく老木をとめられ、通路もいつの頃にや、わすれはてたる許り成りき、是浪とやらんが情ふかきゆゑなり、さはりなき身にだに、戀をねとらるゝは口惜かるべきに、わすれ形見をのこされ、いつか〳〵と待身のつらさ、男の心と川の瀨はかはりやすき物かは、文してとふにこたへなく、一度返しのあらざるは、そちが戀路の關となる、女はあい

み互成りき、我もそなたも忍妻、いづれにへだてはあらねど、はづかしながら自らは、はや五月の帶するにも、誰何といふ人なければ、口惜やねたましやと、思ふ心のいつとなく〱恨中に來りぬと、紅葉の木末に僞うつし、なノ、より外はなかりき、折ふし入道手を打、浪よ〱と召れける、はつと驚きたヽんとする、紅葉の枝おのれとうごき、やらじとひきとめられ、ふすとおもへば心の魂が入替、妾は浪のおとばかり、帶しどけなく入道が一間に來り、何のいらへもなくむなづくしをとり、恨てもあかぬは君がしわざ、此身になして捨小舟、浪のうね〱老しげぬらんときくもうらめし、いなせを聞て死ぬる共いきる共、我身事はゆかじと思ひつめたるかこち草、入道物すごく、そちは浪にてはあらずや、おそはれけるか只し狂氣せしか、形はそれにして恨は蘭がむつごと、心を付よと藥などあたへしかば、猶照まさる紅葉の木末に浪が聲して、はづかしや思ひもよらぬ御恨み、人こそしらね君が事、いまだ御見參にはいらね共、身に替へ御いとほしく、入道樣に御異見申、明日より御返有るべきこよひかヽるうき事を聞、是も誰ゆゑ入道の御仕かた、



つらきよりつらきにまよふ我とても恨はつきじ、いかにいやしき身なり共、すべなき戀は見もきかじ、誠は自らが心をあかし、あなたのうたがひをしらし玉はれ入道樣と、紅葉にかゝるしぐれ、雨か淚はつらぬくばかり成き、入道今はたまられず、表へにげんとせしを、きたなしかゑせと引もどす、そちゑはやらじこなたへと、二人が中に取まき、愛着のはかなき妹背を互に諍ひ、心意のほのほふきかけしかば、入道氣をうしない前後さらにしらざりき、おのれ夫の敵、取ころさんと紅葉にすがり、枝打おらんとせし時、情なしとよ女郎、まつたく我入道樣をねとる心さらになし、かた樣の樣子をきゝ、度々御暇を願ひしかど、さらに承引あらねば、折をうかゞひ忍び出ん折ふし、思ひもよらぬ御げんの恨、かならずうたがひ玉ふなと、いへ共更に聞入ず、ねとらぬといふしやうこは有まじ、今取ころされんをなげき、色々のはかり事近頃みれんなりと、猶つよくせめられ、いや／＼命は惜からねど、誠有る心をいつはりといはるゝもかなし、暫く爰をゆるめ玉へ、證據はあれにかけたるかき見玉へ、心得たりとさり出し、口をとかんとせしが、常にねがひ奉りし、弘誓觀世音の御尊顏の功力にや、手もなへ五躰立すくみぬ、おのれが自力かなわぬゆゑ佛力を賴み、歸てあたをなしけるにくさ、何の證據やあらんとなをいかりぬ、尤ながら我すがた有ながら魂互に入替、我身ながら我ならず、本心かゑし玉はらば、御うたがひをはらさせん、もしいつわらば立所にて取ころされよ、恨は更にあるまじきことはりを聞、紅葉に歸る蘭が魂、姿にうつる浪が魂、其儘守の口をとき、入道書きたる一札、是にて恨をはらされよと、紅葉が枝にかけしかば、此木おのれとひらき讀て見れば何々、

一、我等樂の一つをきはめ、蘭といふ女に年を重ね寵愛の餘懷姙す、誠に老の寢覺さびしきをくやみ其方を召抱蘭が許ゑかよふ事を忘れぬ、今日彼女が元より文の來るを見とがめられうらみんと思ひしに、さはなく貞女を守り蘭を見捨もやせんと歎きひたすら暇をこふ、女なれ共心ざしをかんじ今迄の如く通ひ猶あはれみふかく我一生の内蘭を見すてまじ、若いつはるにおいては日本大小の神祇おどろかし奉り、此世にては淺間敷病苦をうけ子孫ながく滅亡せん、依而證文如件、

年號月日　伊丹入道可運判

なみがもとへ

よみもおわらず涙をながし、か〻る心とはしらず恨ふかく、よしなき姿を見せまいらせし事のくやし、いかで此御恩のほうせん、入道様今よりのち御通ひあらねばとて、たれをかうらみん、歸るもさすがはづかしの、もりて人きかばさこそわらはめ、此身此儘此所にて、露ともきへたき心、自らははや子持むしろのうらぶれ、見る目もうとましからめ、此うへながら私に替り、入道様の御事賴ますと涙ながらのいひわけ、それにやおよばん、殊に只ならぬ御身のさはり共なるべし、とく〳〵御歸有べし、はや明方の鳥もなく、名殘はいつもおなじ事、さらば〳〵の別れの聲、入道驚き、うろ〳〵顏にて爰かしこを詠め、五躰のあせを手づからぬぐひ、浪が一間をさしのぞけば、出家にもたれよねんなくふしたり、やれおきよ目をさませよさゆりおこされ、ため息はつとつき、見しは現か幻か、夢にもあらぬしるしには、守の口もとけ、入道玉はりし一札なかりしかば、兩人手を打夢は夢にして、書たるものなきは誠なりけり、おそろしの世や、

(四)今の世の貞女鏡

夜明の鳥のしばなくにも、入道枕をあげず、浪も立居苦しげに、二人共に見し夢物語、我人女なれども、愛着の一念はなれがたき事、あまた有ける中にも、花山院のふぢつぼはかうきでんをそねみ、光源氏のみやす所はあおひのうへをねたむなど、雲の上人にのみ、是皆戀慕愛着よりおこれり、武士にかぎらず民百姓にいたり、此の道より本妻妾をのろゑば、妾はまた本妻を嫉み、北野祇園梅の宮、又難波津にては、生玉高津座摩天滿天神、此神木に四十八本の釘、灸じ〳〵にうつ〻なや、却つておのれが身をせむるをしらず、かく貞女を守るだにおそろしき恨、永い浮世にしばしの命つながんと、互に心意の焔もえつもやされつ、身にあだをなしくるしみをうくるなど、さらに人間にてはあるまじ、今日をかぎり達て暇を乞ぬれ共、入道耳にいれず、惣じて夢は五臟のわざ、思ふ事おのれおのれが魂はなれざる時、かならず見る事となり、既に眼ひらき本心に歸る時其印有や、夢をみて夢のごとくせば今いふことも夢にして、もしそちが手にかけ、入道を殺すべき夢など見ば、其ごとくわれを討べき

か、女なればとて、くやむまじきをくやむは愚痴也、某がくれたる一札なきは、ふしぎにてふしぎにあらず、定めし猫鼠こそ引きつらめ、何にもせよ氣がゝり成る事一つもなし、萬我にまかせよと、扨も氣づよきせんさく中ばゐ、蘭が方より人來り取次をもつて申けるは、未だ御產月にあらねど、しきりに御腹をいため御くるしみふかく、中々見るめもかなしみはやはや御出のよし、入道さらぬてい、追付見まはせんと使を返し、旣にゆかんとせしを浪聲とゞめ、私參り樣子を見屆け參らんよし、未だ對面もなく、殊に見し夢の俤互にほどけざる下心、折こそあらめと仰けるを、是非御暇申し尋ていそぐ君が庵、あないをこへば母妹、此女ゆへ入道とをざかり玉ひぬ、何の用にかきつらん、存分いふて腹ゐんと親子うなづき、先こなたへと奥にとほせば、蘭が伏たる枕により、互に顏を詠めあひ、暫し物をいはざりき、蘭は寢卷をかづきながら、誠に過る夜ははしたなき對面、うらなきしるしあらはれ、御見舞にあづかる事彌々うれしかりき、御出の樣子心元なしと尋しかば、淚も打かけの袖顏にあて、はづかしきは互、いつ逢言の葉もなく只今參る事、御心地あしきとの傳に驚きはるゞゝ來りぬ、いかゞわたらせ玉ふぞ、夢ながら私ゆへ婚きへがたく、其とがめもやと念頃に尋しかば、いやゝゝさうした事にあらず、私こそ入道殿より玉はりし一筆取歸りしあやまり、是を大切に仕る事、もし入道心替りもあらばにくさもにくし、是を證據にかぶりをふらせまじき下心、彌々玉はれかし何が扨と思ひもよらぬ物語、勝手にて母妹俄に盃の用意、先酒一つとすゝむる中堺、蘭くるしげなる息をつきけるにぞ、皆々あはて是只事にあらずと、醫師をよびむかへば、道宅脉を取やゝ工夫し、正敷く是は小產なり、いづれも油斷すべからずと藥參らせて歸りぬ、人々驚き小產とは心得ずと、不動院召寄せ占せければ、法印算木をならべ易をくり、當年は二十きのへ子の年にて性は金性也、ことしだじやうだんの卦にあたり、守り本尊不動明王にて、うごかすさはがず、身にさはりなき年なれ共、毒藥のさがめのがれず是非小產有べし、時はなん時一二九十は子午卯酉のこくに安く有べし、あやうき命なれども、私のなせる惡にあらねば命つゝがなし、此上にも信を取り玉へ、某も宿に歸り護摩を燒き、壽命長普に

いのらん、お暇申さ歸らぬ內無事成顏、先めでたいと悦の酒、是に付思ひ當る事有り、過つる二月しかもけふ、産に宜敷藥とて入道直に給はりし事有、思へばおそろしき心にてぞ有りけり、かゝる人共しらず枕をかはせし事ぞくやし、女はいさゞ罪ふかきに、あるまじき殺生我とてものがれまじ、是を菩提の種とし佛の道に入るべしと思ふに付、いよ〳〵心地すゞしくなりけるとなり、

風流今平家三四之卷終

風流今平家五六之卷町人身の手かゞみ

（一）今宗盛一門振舞

其年も暮らかく、我人大晦日の胸算用さしあたりての分別、寒の內にもろはだぬいでそれ〴〵の心當、手廻しよきは節季々々の買込、銀かしての分より商賣面白を悦ぶなど、心々の世わたり、或は他國へかせぎに行くも大晦日のやく拂、西國の入舟北國よりの上り銀、江戶棚への替せ親おや方へ勘定、上りくだりの道ふみわけくるは誰ゆゑ、鼻の下やしなふばかりにあらず、妻子有身は一寸にても油斷大敵ぞかし、分限者諸方に出ばりし年の暮、春の明ぼの一夜あれくばにつこりさした戎顏、入道やかたにも、京江戶下の關より三人の兄弟上り、惣領重右衛門方へ荷物をはこばせ、思ひ〳〵の算用厘毛迄しるし入道に見せ、當年も仕合よきを悦び年忘の振舞、亭主は二男入道が宅にて有べきよし、肴や八百屋入つどひ、料理人の八兵衛眞板をはなれず、はしりにすりこ鉢の音たへずたうたり、我此所にひさしかれとぞいわゐ、松竹かざる

烏臺、床には七福神の掛物、燈明の光座敷をかゞやかし、正面には入道今織の蒲團をしかせ大やうになをれば、右座は宗左衞門、左は友之助次は重五郎、脇の上座ははなむこ定六夫婦、末座は手代七兵衞次郎兵衞、其外のわかゐ者思ひ〳〵のはれ小袖、袴の模様一様に揃、次第々々に畏は顔見世の座付にひとし、子細有て嫡子重右衞門此座にはなかりき、入道申されけるは、世に分限者あまた有中にも、某程くわほう成はなかりき、子供の内いづれか身持くづすべき者一人もなく、第一金銀に不足なければ不自由成事をしらず、家禮なれど當年の年忘は宗左衞門が參會、心よく遊又來る春より精を出し、入道によろこばせよ、扨此間吉凶の掛物をもとめ、今日の馳走に掛置ぬ、皆々見物有べし、七福神とのみ聞て心をしるまじ、樣子をかたりきかさん、先一番は鞍馬山の毘沙門天、百足を愛せらるゝは、衆生の者共手足をたゞおかず隨分はたらけ、かせぐに追付びんぼう人も、喰分に事をかゝぬとのおしへ、大黒天は一生の内俵の口をあけず、愛を大事とふまへられし所を一寸もにじらず、五節句きのへねの外は、二またの生大根より外はさいを喰ず、

酉の宮の戎三郎殿に、明暮一疋の鯛を作物にして、一代買ふてくはぬ始末を見せ給ふ、辨才天は内藏の鑰を暫もはなさず、白紙一枚も人手にかけず、自ら出入かしこく、布袋の袋は何によらず只取込分別、吉祥天女は、男女にかぎらず若き者、是をもてあそぶべからずと三味線をもち給ふ、壽老人は某にゑなじく、かり初にも無常をきらひ、人は死ぬる共我は死なじ、みぢかい命はゆるりと千年は生るにきはめ、鶴を愛せらるゝ風情、町人是をわするべからずと勝手ばかりの講談、此座に有ける者皆ゑてに帆柱、いづれも尤らしき顔するもおかし、はや御料理よしと申けるに、今日の珍客とて聟殿よりすゝみける時、入道座敷を詠め、未だ重右衞門は見ゑざるか、近頃我儘成しかた、きやつをまたず座敷を仕舞鼻あかせと、膳ひゐてこん〳〵の酒盛、他人まぜずにあいのおさへの兵物のまじはり、たのみ有る中の酒ゑんも亂心々の慰、基將棊双六かるたかた手に現なきてい、負腹立て兄弟いさかひ兄をたゝけば弟をふむ、妹聟は夫婦いさかひ取みだしたる座敷、是心欲貪欲はなれず、兄弟の中をさく事天理をそむくが故也、入道は酒にゑい前後もしらざ

りしが、此聲に驚き左右をなだめ、皆々賴母敷口論、惣じて商賣人一錢の事は扨置、血眼に成ても損する事なかれ、兼て其心忘るまじと、扨も非道の了簡、父父なれば子も子にして人外とやいはん、入道が詞嬉敷にやぬからぬ顔して、親でもそん致さぬとは、扨もきやうがるあいさつ、心有者わらはぬはなかりき、事しづまる所へ惣領重右衞門、黑羽二重に淺黄小紋の上下、廿ばかりの女房五歳に成ける男子の手を引、入道が前に畏り、早速參るべきに公用に付き延引仕ぬ、いつもながら今日の御祝儀重々目出度仕合、折をうかゞゐ申あぐべき所に只今にいたりぬ、恥かしながら女は私の忍妻、六年の春を重ね此世悴をもふけ、夫故御指圖の妻を定めず、何とぞ御免の承りかゝる目出度參會、かれらにあやからせ度心ざし故、召連參りぬ、哀れ御得心もやといふ迄もなし、先立て入道にしらせし者有、嫁初め孫の見はじめ嬉しき事の重ね重ね、嫁舅中よきはもつけのうちとやらん、世話をすて今より孝行にしてたまはれ、出孫惣領に何がなとらせん、爰へまいれと二朱判壹つとらせければ、稚心にいかゞおもひけんいたゞゐて後、築山の泉水になげしかば一門口を揃へ、とをとい寺は門から、きやつは錢もふけるやつにあらずと、めん〳〵が心にあてゝ笑ひぬ、重右衞門はでかした顔、子供は欲をしらず御志をむげに仕り、入道の御機嫌をそんじぬ、詫言がてらきやつが手なれし棊盤人形つかはせ申さん、御覽もやとうかゞゐしに、是近年の慰先盃をせんと献々の酒、常にのまざる重右衞門ひさし野にて三ごんほし、びやくらいたまる物でなし、坊主よ早々はじめ祖父伯父達へ御馳走申せ、淨るりは拙者が語り、三味線は女共にひかせん御免といはれ、皆々口をふさぎ、孔子といはれし人が俄につくさるゝもおかし、耳のあかをとつて聞もうたてや我身のうゑ、

(二)今様操身躰

▲ごばん人形やつしきやうげんのはじまり　▲か様に候者は此あたりに住福者でござる、誠に人間の果はしれぬもの、私の古へ親よりゆづられたる物は、古掛帳の外、直打のない古道具ばかりをもらひ、それより段々仕あがり、今といふ今分限者と也、四方に四萬の藏を立、金銀米錢はりさくほどつませ、居喰にしても一生歡樂に暮ます、殊に子供を五人持ました、一人は娘にて是も仕合な聟殿と

めあはせ、殘る四人は諸方に見世を出させ、年々のびるかねあたかも山の如し、今日は去方へよばれ中々機嫌で罷歸る、たゞゐるか、手代人形御前に、福者ねんのふはやかつた、留守の内誰も見へなんだか、手代いやどなたも見ゑませなんだ、福者一段々々、手代扨今日御子息樣町方へ御出なされ、何やら面白き本をもとめ、親父のかゑられたらよんできけましやうと有て、ながうみぢかふなつてお待被成てござります、福者はて孝行な者じや、さりながら身が書物ぎらゐをしつて讀きかせんといふは、定めし銀もふける事を書たる物ならん、早くよんでこひ、手代提りました親父樣のお歸り、子方人形御機嫌はよいか、手代中々の御機嫌にて、召ました書物の儀を申あげたれば、はやう聞たいとおつしやりますゆゑよびにしんせました、子でかしたかう參る、福者手代が咄をきけば、身の爲に成る本をもとめ見せたいといふげな、さりながら老眼定かならねばそれにて讀きかせ、子心得ました手代共もうけ玉はり候へ、扨此外題は、

○町人身の手鑑　我人の爲教訓狀　並現在ぢごくのつみ

全部十二卷是より讀出し

つれ〳〵なるまゝ硯にむかい、こゝそことなく書つゞけたる物語、そも〳〵今樣の分限者、さま〳〵有とのみ見ると聞との品々、先當世の誰身の上まづしき時かならず善心あれ共、富るにしたがひ其善を忘れ、惡心日々にまさり氣もつよくなるぞかし、其心つよきが故金銀をもふけ、いつとなく福者といはれ、昔の事は夢に見た事もない顏、俄に身を持あげ、おのれがゆたかなるまゝひん者をそしる、かねがかねはらんでかねをのばす事、きのふ生れし赤子もしる事ぞかし、去所の福者現ともなく、夢の内にかう〳〵たる道にふみまよい、ぼうぜんと立所に、跡よりつゞゐて歩む人、我をもぐし玉はれかし、かく物すごき山林行さきとてもしらぬ身、旅は道連れ世は情ぞかし、是非にといわれ、我もさび敷道の程いざつれ立申さんと、跡になり前になり、行道はてしなき所へ、こづめづの惡鬼こつせんとあらはれ、おそし〳〵汝等はやくまいれと鐵棒おつとり、ゑしやくもなく打立られ、生たる心地なくなく王宮の庭前に居ければ、くしやうじん赤札をひらき、難波の誰々二人、娑婆におゐてつくりし罪

のがれず、只今むけん地獄の責を受るはや引立と有ければ、兩人詞を揃へ、まつたく其罪の覺なし、迚もの事に其子細を仰せきかさるべしと、爰にても氣づよく答しかば、大王はつたさにらまへ、合點ゆかずば語て聞さん、左座の男、近年の分限を鼻にあて、貧者をまねき高利をとつて金銀を取替、定めの通りに一日のびてもこらえず、所々の年寄五人組へうつたへ、其日暮のあい借屋にも隙とらせ、さらば本銀にても取事か、五分三ぶのあつかひをきゐてすます、ないものは何程さいそくするとも、すまさぬとはしりながら、家主町人にわきまゑさせでかした顏するにくさ、惣じて外樣に成事かし方負方のいぢなり、おのれ〳〵が理窟をあらため御前をかるしめ、又しても公事日訴訟日をかゝさず、度々御苦勞をかけたる者一生ぶじ成はなし、おのれも其ごさく、銀かしながらすべあしく、又身の榮花にほこり、姿するゑ者をこしらへ、懷妊すれば我子にあらずといひかけ、通路の道切て二度顏を見あはす事なし、隨分ちんじのがれぬ時は、血落藥をのませ小產させるなど、皆欲惡なり、たま〳〵うけがたき人と生ずるを、あへなく水となす事、佛の御にくしみ何ほどかあらん、か樣の罪一つ〳〵のべがたし、今壹人は姿婆に有し時人にしられし商人なりしが、美をつくり見世をかざり、借銀又賣物を取込、朝夕美食を好、女房子供有ながら野郎傾城狂に身をはたし、節季節季のふづまりあはぬ毛貫であはさんとす、そう〳〵詫言もならず、胸に手をあて有だけの知惠をふるひ、借錢の首ぬけせんが爲、好で分三し、埒が明とひとしく見世をはり、いつたをれたやうな顏、是己が私欲なくては成がたし、もつとも手前おとろひ、或は掛ぞん或は諸方へ一跡をつみ下し、其荷物はそんじ、又子供多く自然と喰へらしたる者、是非なくたをるゝなど、借方世間の評判尤にして哀みふかし、おのれが仕業損かけながら、人のそしりをかまはず間なく見世をはる所存、現在にて立身する事不定にして、死して地獄の罪なをふかし、迚もの事に貧福にして世をわたるに上中下有、其子細を語て聞かせん、

一、銀持のよきといふはいたつておごらず、常に慈悲ふかく情をわすれず、出入者にも心をつけあやう

き事にかゝらず、銀かすにも少利を好、借主其銀にて立身する事をのぞみ、一生の内御番所をしらず、公事の噂聞ても笑止がるなど、自然と理にかなひ子孫永く繁昌する也、

一、商人のよきといふは、おのれ〳〵が商賣物を多く買込手びろく商内し、節季々々の買物も、賣手の足もとを見ず常の相場に買ゆへ、年中賣物に事をかかず、掛銀のすたりをしにせとし、一生是を樂むゆゑ日々に榮るとなり、

一、銀持の惡敷といふは、其身喰分有ながら欲にあかず、諸事の買込し、諸人のかなしみをいとはず、おのれ斗り分限者となる分別、淺間敷や長者二代なしをしらず、是等の福者あやうきをしる、かならず其子まづしく謠淨るりなどかたり暮すものなり、

一、我人子にまよひ金銀のたくはへ、屋敷あまたもとめ、其家は惣領此屋敷は次男と、心あてする事、皆親の慈悲ながら歸り見るときはあだなり、されば親より讓り請たる子、かならず惡性にて我儘に暮し、博を打ち又色狂に身をはたし、金銀財寶皆人のものになし、手と身とになりし者いくたりと云ふ數をしらず、親子に慈悲といふべきは金銀をゆづらず、稚きよりそれ〴〵の家業をしらし、下人にひとしくつかはゞおごりをしらず、幼少よりおのがわざを知ゆゑ身すぎにうとからねば、名跡つゝがなきもの也、誠の慈悲とは是か、何程金銀とらせばとて身すぎをしらぬもの、猫に小判見せたるに同じ、人皆子ゆへに迷ひおよばぬ欲にうつり、後のわざはひを歸り見ず、道なき事をたくむ者多し、一生は只夢にして空なり、よく分別すべし、

一、手代の身持といふは、稚きよりかいほうにあづかり、成人するにしたがひ家業の道をしる事親方の恩なり、すべよき奉公人、主人の恩をわすれず私欲をしらず、萬お爲に成者立身せぬといふ事なし、道をしらぬ奉公人、身にはもつたいの有程付、むしやうに鼻を高くし、物買も鼻であしらい、親方の分限をおのれが物と心得、世話に云やくたいなしが、虎の威をかるとやらにみじんたがはず、人が樣つければ誠の樣と心得、あたまから大平に又しては恥らかゝされ、恥を恥とおもはぬゆゑはづかしき事をしらず、其心から色町にかよへど、人より一倍つ

かひながらわらはれのぼするを誠にし、跡前ふまへずつかふ銀背親方のものなり、勘定前に成て胸をひやし、十露盤あはさん爲俄に博をうてど、天理をそむけるゆゑ、取事は扨置若替まで打込、剩請人にあづけられ、奉公の先々をせかれ、身の置所なく、五百か三百のもとでを拵へ、割たばこ下油をうれど、人のにくみつよきゆゑ、わらひこそすれかはんといふものなく、遂には橋の下のすまいして、寒の内にもこも簾閙、是皆親方の罰なり、又せちかしこき奉公人は、惡性につかはず、おのれが身をくろめんが爲、年季の内にもとでをくすね、自分に小見世をはり、一旦はあぢをやる共末だ心元なし、身躰何事なければ惡敷病をうくるか、又子孫にむくふものなり、高きもいやしきも世渡り自力と思ふべからず、皆他力ぞかし、汝等が惡かくのごとくにてのがるゝ事なし、いそぎむけん地獄におとすべしとの給ふ内、夢はさめて失にけり、とつばいひやろのひ引、

(三)今重盛敎訓狀

重右衞門罷出、是にて夢物語はおはりました、是より此者共、地獄に參るまでを道行に仕、女共が三味線で私が語ます、御たいくつながら御聞被成ましやうか、入道重右衞門をはつたとにらまゑ、なんぞ世悴が慰に事寄せ、親兄弟へのかんげん聞度もなし罷歸れ、もしいぢばると手討にせんと、あい口の柄に手をかくる、重右衞門さはがず居なをつて申樣、只今の狂言が各々の耳にかゝるうへは、未だ本心慥にして嬉し、いづれの所か御とがめ候ぞ、次男袴の上を取いづれとはおろか、銀持の惡敷といふを聞に、萬の買込し諸人のかなしみをしらぬとは誰事、數年我々俵物を買込、諸國にまはしあがりを請て賣事、町人家業の一なり、買こまれほへばらかまへんより、買込樣に成こそ本意、それはよきをそねむといふ貴殿の樣成る惡人の事、返答あらば申玉へ、時に重右衞門涙をながし、汝等迄其心にては父の御運もはや末に成ぬ、人運命かたぶかんとては、かならず惡事にもとづく者也、夫我朝は邊地そくさんのさかいとは申ながら、忝も天照大神の御末をくみ、かりそめならぬ人と生れ、いくばくながらへんとて、よしなき惡心にもとづかせ玉ふ、殊に法躰の御身なれば沙門におなじ、なんの爲の法

衣ぞ、すがたは佛にして、内にははかいむざんの罪をまねかせ玉ふは、仁義禮智信の御存知なきとみへたり、世に四恩有り、一に天子二に國主、三に父母四に衆生の恩是なり、殊にすぐれたるは朝恩なり、皆人我身を我物と思ひ、金銀有をもおのれが物と思ひおのれが樂をきはめ、人のそしりなげきをもいとはず、晝夜惡念はなれぬもの、神慮のとがめ遠からず、若し御身の上あやしき時、御貯はへの金銀御身替に立べきか、それ日本は神國なり、神は非禮をうけ玉はず、今さかんなる共一たんおとろふならひ、哀れ惡心さつて善心にもとづき、人の爲には益々ぶゐくのあいれんをたれ玉はゞ、神明佛陀の冥慮にかなひ玉はん、たとへ入道我儘をふるまひ玉ふ共、和殿原が御いけん申こそ道共誠共いふべし、度に狂ふは何事ぞと理にせめられ、返す詞もなき所を三男もゝ立取、其ちんぷんかんは昔の事、某一つ讀ん親子に家督をゆづるに、其子うしなふ事かならずあるとは、杓子を定木ならん、親より申請たるうへ家業ゆだんなくば鬼に金さい棒、氣遣なきをおしなめそれとは心得ず、此返答いかにとつめかくる、尤そちは發明にて、入道より玉はりし金に花も實も咲べし、なれ共所存さもしくば心の惡風吹かけ、つみ重たる金花ことぐく吹ちらし、我しらずかれ木のみ殘るもの也、是を獅子中身の虫共いふぞかし、詞をのこすは見事にしていひすぐるはあやまりのもとい、殊に手代ども近年身持惡敷、聞人わらはぬはなかりき、上にごるゆへきやつらまで人のあざけりをうくるのみ、ことになるまじきをも入道にすゝめ、又しては御代官ゑうつたへ、人に難儀をかくる事多し、誠有臣ならば何程の出入にて、入道いかり玉ふ共達而とゞめ、下にてすますを臣の忠共いふべし、御前をおそれぬものいかにしてものみこまず、汝等ごときが無分別にては、入道の御身のうへいかゞあらんとかなしみの餘り、御推量のごとく世悴におしへ、今日の祝儀に事寄せ是非御異見申さん、御聞わけなくば髮をおろし出家と成、過ゆかれし母の菩提、又は入道御存命の内御身にあやまりなき樣に、佛神にいのらん心ざしにて、是御覽あれと諸はだぬげば、經かたびらにくわらげさかけたう、入道いよいよ立腹し、親に口あかす間敷しかけ、おのればかりが子にて弟共は子にあらずや、子孫繁昌すべきをと

ごむは天魔のしよゐ、釋迦に提婆太子に守屋、入道におのれ何程いふ共とゞまるべき心底なし、一子出家すれば、九族天に歸るといへば彌々めでたし、望のごとく髪をそり明日より門に立、觀音經よんで渡世を暮せ、見るも中々腹だち、それ引出せとありける時、女房重右衛門をかこひ、尤一通はさる事ながら、理非をしらざる人々に氣をつくし、心をくだくはこなたのあやまり、是入道樣子なればこそ異見をの玉へ、他人は指さして笑ひこそすれ、こちの人のいはるゝ事わるふお聞被成ますは御そん、いやならばいやまで、こなたの出家は誰ゆるしてこの姿、自らはともあれ此子はぶびんにあらずやと、袂に取付なきけるにぞ、尤ながら兼て此心ざし成き、迚も入道合點なきうへ世を立おもしろからず、そちは世悴を養育し我名跡をつがすべし、入道玉はりし財寶あらためかへすべけれど、樣子有うへ指置べし、かくあらんと萬世悴が名代に付替置ぬ、名殘はいつも同じ事、望所なれば、是をや幸ひに高野熊野へ參詣せん、か樣の座敷に永居するはけがらはし、いざ歸らんとするを入道目はちきし、そいつらくゝれといふより、はやぐるりと取まき、三人一繩にからめ納戶の內へ押こめけるにぞ、中にも重五郎申けるは、人聞なば御身爲あしからん、さうなく御返しもやさといへ共、入道耳にいれず、親が子をくゝりせつかんするに誰何といはん、汝等がしる事にあらず、きやつが出家するうへ、財寶のこらず取替すべき所にことはりをとげず、なんぞ下女腹の世悴に我家督とらせんやうなし、なれ共町内をきやつが名代に切替たる上は是非なし、所詮三人のやつばらひそかに追ひうしなひ、其うへの思案といふに、殘る子供同心し取々の評定、なかにも二男知惠を出し、うつろ舟に拵へ三人を入、川口よりながさんと是にきはめ、夜るゝゝ舟を拵へ明る夜半の頃納戶に行、宗左衛門いふは、入道の立腹ひとかたならず、然を我我申なだめいましめをゆるさるゝ、さいわい重右衛門殿熊野參詣の心ざし、折ふし熊野の炭舟こよひ出舟す、此舟に便船し參詣しかるべきよし、女房心得がたくや思ひけん、是非御參詣あらば親子三人まいらんと中々はなれざりき、ともかくもしかしから路は難所にて心うかるべし、幸のふね有いざ同道せんといふ程えてに帆、こよひの風にて明日は本宮に參り

玉はん、それ〳〵川口ゑ供し彌太夫舟ゑのせませ、心得たりと三男提燈とぼさせ舟の案内、尋ぬるていにもてなしわざと火をけし、三人うつろ舟にのせ前後に錠落し、沖の方へつきながしけると也、

風流今平家五六之巻終

風流今平家七八之巻　町人身の手鑑

(一)今俊寛涙の足ずり

心だに誠の道にかなひなば、いのらず迚も神佛守らせ玉ふにうたがひなし、川口より浪にゆらるゝうつろ舟、誰漕行ともなく鹽にひかれ爰かしこの磯邊に打あげられ、又引しほにこがれ行く身の果いかに成らん、兵庫の湊須磨明石、播磨のしかまとより風はげしく、舟なげ石にあたる時、今をかぎりの命もがな、がなく、室津の湊あこをの浦、備前のうしまど、八島水島だんの浦、備後の鞆安藝の國多田の海、靑の島龜がくび、周防の國にながれ渡り、ゆらかむろ上の關、島じりいわうが島迄ながれぬ、折ふし北國米つみのぼる舟にあたりぬ、船頭驚き立出見れば、あやしきもの皆見られよと舟ばりに出で、ふしぎのものござんなれ、川流は拾ひどく、わりて見ばやと手ん手に艫おつとり、みぢんにせよとひしめく所へ、りやうせんあまたこぎよせ、各々暫、むざとたゝかば内の樣子しれ

まじ、我々にまかされよ、もし金銀ならば人數に割て取べし、ともかくもといふよりはや、りやうせん取まきよく見れば、丸太のごとくふたとおぼしき所を、鎹にてとめたり、それこぢはなせと舟道具にて打はなし、ふたをひらけば、内より三人夢のさめたる心地、しほ〳〵と涙ぐみたる風情、そりや川うそよばけ物よ、打ころせといふほどこそあれ、我も〳〵と立より旣にあやうかりしに、重右衛門驚き是々そつぢめさるな、まつたくまよひけしやう者にあらず、我々か樣のていにてながされしは、段々樣子有事なり、あからさまにいふも恥かし、又申さねばかた〴〵のふしぎもはれず、せんかたながら語り申さん、いづれも艫をひかるべし、先爰はいづくぞと尋ぬれば皆口を揃へ、物いひ眼ざし人間にはきはまりぬ、いか樣子細こそ有らん、こゝは周防の國いわうが島といふ所、人家はなれ行かふ舟のみ也き、扨はきやつらは密男してあらはれ、命の替に此舟にのせ、岩にあたりみぢんになる所を、此世のかぎりとなすべきたくみ、か樣の者共とりあつかひ、後日の詮議むづかし、もとのごとくふたしてつきながせ、尤しかるべしと立寄を、情なしとよ

かた〴〵、此間親子三人、日のめおがます食事もたべず、哀也ける身のはて一通を聞、其後はともかくも心任せに致さるべし、生國は津の國何といふ所、伊丹屋の可運と申者の惣領重右衛門と申者、是成は女房世倅なりき、親入道惡心日にさかんにして、世上の風聞きくも中々かなし、折をうかゞひ御異見申ぬれば、歸ていかり玉ひ、某が弟三人一つに成、かく淺間敷き姿とは成ぬ、およそ西國にて親入道が事、御存知有方々多かるべし、我々非道にしてか樣にならば誰をか恨ん、道を守り孝をつくせし身に有間敷仕業、佛神三寶の加護にも見はなされぬるかなしさ、尤親の子をせいたうするはあまた有ける中にも、餘り成ける邪慳ぞかし、くれ〴〵他言有まじ、中程親子の恥、いかなる憂身に逢ふ共いふまじとは存ながら、申さねば方方の御うたがひ、又不義の惡名取々の評判も口惜し、子として親の惡名語るなどもつたいなし、此うゑにもうたがはしくは、心の儘にはからゐ候へと涙をながしけるに、船中手を打ともに涙をながし、いとほしき心底、心安かれ何とぞはからひまいらせん、先此舟ゑと乘替させ、皆々錨をおろし評定取々成ける時、北

國舟の船頭米一斗ばかりやうせんに投入、我々は急用殊に大分の俵物、しばしも隙取事きのごく成き、心ざしのいたはしければ是をや參らす也、身をまつたう其子をはごくみ、何とぞ世に出玉へ、同じくはりやうせん乘を賴み、此島にとゞまり時節を待玉へ、然ばくだりに御めにかゝらん、おの／＼情をかけ玉へ、先さらばさていそぎぬ、れふ舟共きごくに思ひ、人々を島に伴ひける、折ふし村雨しきりにふれど、雨をしのがん軒もなければ、爰よかしことかけめぐりたまひぬ、漁夫の中に那智の藤七といへる男、さいかく物にて、舟笘二三まいもち來り、竹をうづめ柱とし笘をふゐて、先これに入てましませと、世に賴母敷情をかけたり、稚き者はちゝ母にすがり、何にても食すべきとなげきしかば、母髮かきなで、心やすかれまいらせんと答しかど、磯のみるめより外なかりしかば、夫婦は顏を見あはせ、只なくより外はなかりき、皆々哀れをもよふし、何をか參らせんとあんじけるが、誠に思ひあたりぬと、くれたる米の口ひらき、舟に有けるくごかきあげ、たばこ火燒付木の葉をあつめ食になし、親子の人にまいらせければ、夫婦は千度いたゞき、世にはかく情有る人もがな、もし我々世に出なば、此御恩はほうじ申さん、又此島のもくずとならば、影身にそひ武運長久を守らんよしの玉ひければ、漁夫共詞をそろへ、誠に哀なる事を聞て歸るべき道をわすれぬ、日もはや西にかたむかせ玉へば、我々が埴生のふ屋に御供申べけれど、御代官庄や殿をはゞかるうへ思ふに甲斐なし、こよひは爰にてあかし候へ、鹽風はげしくば是にてふせぎ玉へと、めん／＼笘をまいらせ皆々舟に飛乘ければ、夫婦袂にすがりかゝる御恩を蒙りし人々、誠有る氏神と覺さふらふ、同じくは今しばしおはしめせよ、かた／＼に別れ、かく人倫はなれたる此島に親子三人のこり、うさつらさをば誰にかたらん、逆も情のしぐれの雨、是非こよひは爰におはしまし、此所の名所古跡をも御きかせ候へ、殊に那智の藤七殿は生國熊野にて有けるにや、さもあらば我當に熊野三社權現を、しんかうし奉しかど未だ參詣せず、かゝる身にしあれば參るべきよすがもなし、せめて御山の樣子をも承りなば參りたるにおなじ、哀れ御語り候へかしとゞめられ、漁夫共きごくに思ひ、然らば藤七はのこれ、和殿こそ父母なく妻子な

ければ、誰まつ身にもあらず、其上新宮の者にて案内はしりつ、樣子を語りとのゐせよ、明なば脊參らせんと名殘おしくも立歸る、浪おしわけて行舟のすがたも見へざりぬ、人々の心をかんじ嬉しきにも涙、かなしきにも涙、いよ〳〵昔戀しく、妻子なき寢入したる姿、見るに付て猶胸せかれ、鹽風ひくなど涙かた手に筥をきせ、いとゞさびしき夜もすがら、いざ御語りもやと取つかれ、藤七あたりを見まはし、よき事を思ひつけたり、凡此島の風景熊野山とおぼしき所有り、指圖を仕くはしくおしへ申さん、則此所をみつの御山と思召し、晝夜御參詣もあらば、誠の信心きもにめいじ、追付世に出玉はん事何うたがひのあらん、いざと御供申爰かしこを見る所に、或はりんとうのたへなる有、又うんれいのあやしき有、紅錦しうのよそほひ、へきられうの色一つにあらず、山の景色木のこ立にいたるまで、外よりも猶すぐれたり、南を望めば海まん〳〵として、雲浪のけむり深く、北を顧見れば、山岳のがゞたるよりみなぎる瀧有、其音しん〳〵と神さびたるなど、飛龍權現のおはします、那智の御山にさも似たり、此峯は新宮となし、是は本宮爰は何の王子と、岩窩のしげりを社と名付、居ながら熊野詣のまなびをなし、三社權現とおぼしき所にひざまづき、南無や權現金剛童子、ねがはくは哀みをたれさせ玉ひ、親入道また弟共が惡心ひるがへさせ玉へ、殊に我々親子三人壽命長吾に、今一度古鄕へ返し玉はれと、かんたんきもにめいじ祈られけるに、藤七涙をながし、かゝる邪慳の親兄弟をうらみず、反つて武道をいのらるゝは聖人とや申さん、心やすかれ御身の爲惡敷はせまじと、さま〴〵諫めける内、東の方もしらしらと鳥の聲のみつげわたる、もはや御暇申と舟に乘り、ともづなとつてこぎ出す、夫婦舟に取付、御詞いつはりとは思はねど、ねがはくば其舟に我々をのせ近國迄つれ玉へ、夫婦は爰にもすむべけれど、此子がしばしも有間じ、いづれの御城下へ成共ぐし玉はば、情有るかた〴〵にいかで難儀をかけん、其迚もかなはずは其儘爰におはしませ、はなちはやらじとなげきしかば、藤七あぐみ行くも止まるも憂事ぞかし、我獨りが了簡にてはすまじ、先宿に歸り相談申べしと振切、こぎ行くにせんかたなく、高き所にあがり沖の方を詠め、くれ〴〵賴申ぞかし、只御名殘おしきと

ばかり、ないて其日をくらしけると也、

(二)今樣歌學娘

月日に關守あらざれば、きのふと暮けふもはや過行けど、あふは別の初め、入道寵愛の蘭小產せしより、心ざしも只俗をはなれ、晝夜佛前に參り香を燒しきみあかの水を替へ、六時念佛けだいなかりしかば、浪も同じく佛の道、互に打とけ、髮をそらぬ斗り心は道心とさとり切、二度入道に逢ふ事なかりき、母是をくやみ、情なきは入道殿、たま〳〵もふけし孫を見ず、胎内にてころされしゆゑ、行末のつみおそろしく、此間姉が身持出家にも成べきそぶり、左もあれば年老たるわらはが入まひ、いかゞあらんと明暮これをなげき、是を病の種としばんしの床にふし、今をかぎりとみへけり、兄弟前後の枕に近付、夜る晝となきかいびやう、浪も歸るべき首尾もあらねば、同じかり寢しともに藥など參らせけるに、げんきさらになく、次第次第におとろへければ、醫者さじをすてゝにぐる、老母覺悟し、たとへ藥をあびるとも中々本復すまじ、此程嬉しかりしは、孫見てたのしむべきをさはなく、あへなくころされし縮きへがたし、恨つきぬは入道にてとゞめたり、今死す其魂れい〳〵とあたをなし、孫に手向えさせん物をと口ばしり、虚空をにらみ齒をくひしめ、是をうき世のかぎりつゐにむなしく成ぬ、三人死がいに取付なくより外はなかりき、されどもかへらぬ死出の旅、野邊のいとなみそこ〳〵に、淚かた手にしやうごをならし、いよ〳〵念佛けだいなく、母とんしやう菩提と回向し、三七日も過て後、三人心をあはし京東山に上り、鳥邊野のほとりにしるべの有けるを賴み、出家とぐべき心なりしが、妹は年若にて未だ殿もたぬ身、いかなる方へもゑん付させ、其後はともかくも、先東山の名所見物させん、殊に我々發心の下心、かゝる姿もかぎり有身となれば、我と此身のみをさめ、京女郎におとらぬ風俗せん、尤と一やうに加賀笠、蘭は茶縮緬に牡丹唐草ぬはせたる小そで、浪は紋紗綾に靑海浪の惣鹿子に、蘭は白光に鼠糸にて四季の花づくしをぬはせ、人をもつれず三人淸水に詣で、奥の院地主權現田村堂、音羽の瀧のこらず參り、三年坂をくだり八坂塔庚申堂にまいれば、茶やの山衆がすだれをあげ、すがたといひ風俗、かみしもそろふた器量して、下女ひとりつれぬは何人ぞ、あのか

たちがこちとらにあらば、親方よりの仕着せに壹年を壹貫目は取にと、扨もあはれなねがひ、かなはぬこといふ女のならひ、又蘭は勤する身をつれ〴〵詠め、あれは山しゆとやらん、誠に勤はせつなきといへど、我々が身よりはるかましぬるよわたり、殿達のきに入ば心にかゝるうきこともなく、酒のんでじやらくらとおもしろかろといふに、浪おかしく、それ程うらやましくば勤してみさんせ、らくなといふは一昔、今色茶やの勤傾國に同じく、月々の物日は客にあげられ、しばゐ見物に行と、爰かしこのみやてらへ參るもかご、大盡ははなげの有程のばし、そばをはなれずつきまとひ、人にわらはるゝをしらず、あてなき時は身あがりし、念頭にかたる茶やに出心にそまぬ慰、物日勤る客はすくなく身あがりはとし〴〵にまし、つけとゞけの文もはんしのべはつかはず、かり初にも奉書に書ながしたるとりの跡、ろくによめぬ手して思ひ〳〵は、かみのとがめもおそろし、しれた身にをごりつよければ、できまじき借錢のふちに沈みうかむ世なく、剰心中するも是よりぞ起れり、先こちはいやでござんすといへば、見ると聞くとの物語よふしつてじやが、かたさまも其身であつたかといわれ、今は何をかつゝまん、わしも一年あの勤を致しぬれど、どこやらがつまらぬゆゑ、とりをきましたと語る内祇園林に着たり、暫やすみませんと水茶やにこしをかくれば、色ある娘茶を參らせこしかたの物語、茶たんすを見れば和歌題林愚抄八代集も見へたり、手はざこそいやしけれ心は花の都人、なにはにてさたの有しはかたさまのことならん、何にてもくるしからず一筆かいて玉はれかし、我里へのみやげぜひにとのぞまれ、行成の短冊取出し筆くゐしめてさら〳〵と、

　　もえ出るもかるゝもおなじ野邊の草
　　　　いづれか秋にあはではつべき

御所望のうへはづかしながら書參らす、かならずわらはせ玉ふなとかひやりぬ、浪これをぎんじ、誠に此歌は其昔平相國淸盛、祇王祇女といへる女を愛せらるゝ所に、又加賀の國より、佛といへる白拍子の來りしかば、入道是に心をうつし兄弟がことをわすれ、剰へ屋かたを追出しぬ、祇王せんかたなく住なれし一間を出ける時、書のこしたる歌にてぞ有けり、是はふ

しぎと三人めとめを見合せ、あきれはてたる風情、此娘我々が身のうへ、くはしくしりて書くれしか、つらつら思ひまはせば入道殿は清盛、お蘭兄弟は祇王祇女自らは佛御前、かく迄似る事のつらさ、殊に此歌は祇王が形見にして、身にひしとあふたる辻占、とかく出家せよとの敎ならんと、心に思ひ口にては、またちかいうちゆるゆるかたりませんと、念頃に暇乞立出んとせし所へ、伊丹入道其頃、京都にのぼりようじとのゐよぶねにくだらん道すがら、祇園清水見物しすぐにふしみに出んと、供人少々めしつれ其身はかごにて行く道筋、茶やのむかふに立けるを三人はやく見付、かくれんに所あらねば、笠をかたむけ袖にて顔をかくせしを、入道それとはしらず、さすがに都女郎、顔かくさるゝ程なほ見たく、かごよりとび出茶見世にこしをかけ、ちやはんかた手にめをはなさず、三人いきたるこゝちなくなく互に袖をひきあい、そろりそろりと出んとせしを、入道袖をひかへ、おのおのは此禪門を見、顔かくさるゝさへ有に、ことわりもなく歸り玉ふは、わるい所へ參りしか、但しまつ人有けるに心なく立よるゆゑ、花に嵐とおもはるゝか、様子をきかねばはなさぬといはれ、物はいはれずうなづいて斗りいたりぬ、いやとよそれではすまぬぞかし、せひはなされよと小首をかたむけ、顔と顔を見合、蘭か入道様かといふたばかり、暫物をいはざりき、殘るはたれ浪か小らんか、餘りといふもふしぎ、夢にてはあらずや、其後たがいにたよりをとほざかりぬ、何ゆゑ此所へは來りしぞ、兄弟口を揃へ、母にをくれかなしさ、御こつをとりべのにおさめん爲わざわざのぼり、つゐでながら東山の名所見たく是迄參りぬ、まづ御そく才で一だんと、わざとうつくしきあいさつ、しばしの内らうぼのさいごをしらず、そちは小産と聞たのしみなく、我もむじやうきになり、夫より後世をねがひ、此度登りしも知恩院くろだにへ參り、五重相傳に預り只今くだる道、きよみづへさんけいす、幸なればだうだうせんと、年にこそよれ扨もきやうがるうそつき、あらためいふはあひそづかし、誠に我々此人に二度宮仕する身にはあらず、只うつくしく此ばをのがるゝ思案、先祇園黒谷に參り其後御供申さんよし、入道下心有るにや、しからば同道し名所などをしへんと、まつけしきなかりき、ともかくも先お茶一つ

と妹がはこべば、入道茶碗かた手しりめにてにらまれ、ム、いやらしさにべなきあいさつ、名物の香煎とはこれかと、何心なくのまんとせしに、ふしぎや蜘蛛のすとおぼしき物、入道が茶碗の内に入けるを、何となく吸ければ、忽ち日の色かはり五躰こんらんし、わな〳〵ふるひ立所にてふしけるにぞ、供の者共あはて、薬よ水よとひしめきさま〴〵のかいほう、御心はと尋ければ入道いなをり、あゝたへがたやくるしや、いかなる恨の有、十月にたゝぬみどり子、胎内にてころされし恨の一念、めぐり〳〵て今爰にあらはれ、命をとるが思ひしつたか、思ひしれといふかと思へば又左もなく、なつかしの兄弟親子は一世の契なれど、詞をかはすは二世におなじ、此母独りやしなはんと、よしなき人になれそめ思ひもよらぬうさつらさ、歸らぬ憂世うらめしの入道やと、様々口ばしりけるにぞ、下部共驚き此儘にてはおかれじと、むたいに籠にのせすぐに難波に下りぬ、跡にのこりし三人、ぼうせんと互に顔を見合、正敷今のは母の詞、思へばおそろしの世や、いかに女儀なればとて、歸らぬ事に入道殿をくるしめ玉ふ、悪念のとつて成佛の身と成玉へ、南無ゆうれいはゝさんじやう菩提、うかみ玉へと涙ながらの回向、名殘をしげに見かへり、入相の鐘もろ共いづく共なく行けると也、

（三）今の世の火車

伊丹の家にはかくとも白浪路、三人の兄弟思ひ〳〵の旅立ち、古例にまかせ一所の門出、馬の下乗籠の用意、出舩の荷物中衆あまた、濱出しに肩ゆかるまなく、茶舟の久作は舟にあしの入過たをわめく、中衆は二ケの駄賃がたらぬを、せりあふ聲やかましければ、近所の者は腹を立、いかに銀のびるが面白ければとて、あの身躰してわづか五かへか七かへの事で、けんくわするのが人間わざか、少しは世間も恥くされ、主が主なれば、内との者迄あれほど似る物か、ひろい世界にまたと有まい、是きけがしといへ共さらに物いはず、耳に留守つかふもおかし、人はともいへ德なき事に、あい手になるは一わり半のそん也、かもふなといふ所へ入道歸り、供の男様子をかたりしかば、一家驚き先奥の一間にともなひ、養生の相談中場、あゝあつやたへがたや苦しやと身をもがく、兄弟そばによりひたひに手をあてみるに、火にさはるがごとく、ぞ

ばに有だにたへがたければ、こなたの一間にひかへ、醫者評定のうへ先近藤秀伯院へ使を立る、安き事ながら入道の療治をし、本薬屋へたしてやる銀なしと、扨もきやうがる返事、歸つて此の由申せば、ぬからぬ顔して次男、やぶいしやのぶんにて舌ながなる一言、然ばとて片山壽庵へ人をやれば、貴殿方には薬種の買込多く、藏の角にふしかんざう砂糖のはきだめ有べし、それをあつめせんじ用は、常のごとくやすい物なれば、しやうが一へぎ入もちゐらるべし、入道に相應の薬と、変にても恥をかゝされしかば、きやつもろくな醫者にあらずと、波多玄格へいひつかゐば、早速來り入道が枕元に立寄り、脉をうかゞひ暫工夫し、何共のみこまぬ熱病ながら、療治をせば快氣有るべし、しかし前金廿両わたされねば療治かなはぬよし、三男おかしく、先銀取醫者今迄きかぬといふ、ふしぎ尤なれ共、おの〳〵はしるまじ、入道常に地薬を好み度々御用に立ぬれど、只今迄禮銀をとらず、入道にゆかり有身にはあらず、我物喰てお爲はならぬ、薬ほしくば金子もたせこさるべしと云けるに、宗左衞門袖にすがり、醫者は人をたすくる者也、なんぞ禮金の沙汰御人躰にもおぼへず、快氣あらば五十両百両のかね何惜からん、是非にと頼みしかば、親子とてそれ程にもにずば、其手は入道に度々ふるまはれこりてゐる、尤薬代とらず療治する門多し、それはいきかた格別也、先餘人をたのまれよと歸りぬ、山も見へぬ坂、あたまから金出すこと三人共にのみこまず、上手下手にかぎらず、入道の壽命此時にかぎらば、耆婆が薬にてもかなふまじ、時きたらずば捨をく共快氣有べし、先一両日様子をうかゞひ、其後醫者をかけんとは扨も不孝の子供、またと見る事のならぬ親に替へてもかねはおしきや、親の心々なれば子も其心になるぞかし、親の仕業にてもよきことは見習、悪敷ことはまなぶべからず、人は子寶といへど、入道親子は犬猫の生れ替り、聞も中々もつたいなし、親に孝をつくさんと思ふは不孝のもとひ、只不孝にせまじと思ふが孝々ぞかし、入道親子四人は、引息つよく世間をかまはず、かねさへもてば一生ぶじにくらすと、思ひの外成る因果病に取付しかど、醫者にかくることのみかなはぬは、此世からの餓鬼ぞかし、漸々聟の方より醫者連來り、病氣見分のうへ快氣心元なし、御最後三日

はのびまじ、遺言あらば聞おかれよといゝ、捨踊りぬ、人々驚き前後の枕に近付、老病なれば今の命もしらず、何にても仰おかるべしと口々にとひけるにぞ、入道枕をすこしあげ、口惜や今五十年ながらへなば、日本に獨の分限者と成べきに、思ひもよらぬ病に取付、若死する名殘をしさ、尤家屋敷兄弟四人が名代に付置く上後日の詮義も有まじ、有銀もそれ〴〵に仕わけ、かねて書置したゝめ置ぬ、此家は聟殿に送るぞかし、我相果て後兄弟中よく、此上にも銀をのばし始末を第一とし、むざとかねをつかふべからず、商賣今迄の通りに致べし、別して重右衛門家督は、三人にとらす間宜敷はからい、下女が世悴に我儘さすな、追善佛事もつゐへぞかし、一七日過なば早々くだり商賣油斷すべからず、いゝおく事は是斗りとつらぬく涙はながせど、念佛の一遍にても巾氣色なかりき、あれあれ子供よ、丑寅の方より鬼女が火の車を引く、我をまねきのれといふ、あらおそろしやと顧見れば、うしろの方には一つにたらぬみどり子、こつせんとあらはれ、いかに入道にぐる共にがせじ、祖母樣はやく來り玉へ、心得たりとよばはる聲いづく共なく聞ゆ、時に入道たへ入り、熱やくるしやと斗り、人々立寄り迚もなき命ならばと、庭前に大き成手洗を据ゑ水を汲せ、入道を中に入ければ、はじめは心よかりしが、次第に此水湯となる時虚空に聲有、うれしやほんもうとげたりといふかと思へば、息たへつゐにむなしく成ぬ、年は六十歳にてぞ有けり、皆々取付涙ながら歸らぬ死出の旅、野邊に供する人もなく、漸々一家下部ばかり送りぬ、誠に淺間敷次第、我人是を手本に心得玉へと云々、

風流今平家七八之卷終

風流今平家九十之卷　町人身の手鑑

(一)今の世の身實評

人には命のかぎり有、親死してなつかしくおもはゞ、存命成ける時孝行にすべきもの也、それも心々にして定めがたきこと、既に入道あだし野の露、きへてはかなき印の石をもきらず、佛事供養も十露盤にかけて、國土のつゐゑと米一つかみ非人にとらさず、誠に裏屋住の後家にもおとれりと、近所の風聞もきかぬが佛、七日たゝぬうちはや根張り手形のあらため、一本づゝのみこんで殘る一本の手形を見れば、蘭がははゐ取替手形、ひらき見れば何々、

預り申銀子の事

一　丁銀壹貫目　　但し新分銅掛也

右之銀子預り申所實正明白也何時成共御用次第返辨可申候若右之銀子濟し申儀難成候はゞ兄弟の娘之内壹人銀子之替に御取被成いか樣成方に成共奉公に御遣し可被成候其時一言の御恨申間敷候爲後日如件、

年號月日　　かり主　らん母判

請人　勘七判

伊丹屋可運老

此女はさゝおよびたる入道の思ひもの、きやつらがそゝなかし、大分の銀とらるゝさへ口惜しかりしに、か樣のやつばらに銀かされし親父、本氣にては有まじ、にくさもにくし御代官へうつたへ、厘毛かけず取べし、尤とうなづき、先請人なればと勘七をまねき、證文の通銀子をわたさるべし、異義におよべば御代官へ申上ると、三人の兄弟盃取服しての催促、御尤ながら母は病死仕ぬ、なれ共兩人の娘共罷在上は、此者共に詮義あそばし、濟さぬ時の私、かぶりはふるまじと尤成る返答、其儘兩人へ催促す、兄弟驚き尤前金かりぬれど、かうした奉公のならひにて捨銀といふもの也、其外一厘も借用不申、但し證文にても有かと尋しかば、勘七罷出御兩人は御存知ないこと、お袋御存命の時去年大晦日の拂につまり、拙者への御頼み故壹貫目かり遣はし、いやといはれぬお袋の判、此銀埒明ねば私がめいわく、どうぞ頼ますといはれ、兄弟は寢耳に壹貫目のかね、何ゆゑかられたかはしらず、手

形有うへ、異義をいふにはあらねど、先證文を見ましし母の判にきはまらば、身を責てなりとすましましやうといふ、捌七悦びそれこそ親への孝行、取寄御めにかけんといふ所へ、手代七兵衛手形を持參し、かたがたは入道殿のお姿か、生年よられけるをそゝなかし、親子三人懷手してのせぶり喰、其上大部のかねを取込、そしらぬ顔は何ごとぞ、近日すまさるれば其通り、若し不埒なれば、兩人の內壹人銀の代に連歸るは定めの通、いつわりならば是見られと手形を出せば、涙ながら捌もきやうがる證文、うたがひもなき判見るうへ申ぶんは少しもなし、いかにも濟しません今四五日をわびけるにぞ、下にてすむは珍重、隨分とゝのへはやくすまされよといひ捨歸りぬ、三人は目とめを見合せ、涙かた手の談合とりどり成しが、大分のことゝない袖なれば此かね何とならざるや、此事に行なやみなくより外はなかりき、浪兩人をいさめ、殊に寄り御前の沙汰におよばゞ、勝ことも有べし、ねがひを上てみさんすまいかといへ共、姉かぶりをふり、尤いひわけにて濟事もあらん、兼てしれたる入道の所存、其うへ母の恨をうけ、淺間敷死をせられし志も恐ろし、何とぞ濟度心なれど、何をしろなさん力草もなく成りはてたる身は、尼衣いかにせつなきとて、又俗心にかへるなど、佛のちかひをやぶるにゝたり、さればとて捨おかば、たれ取あげとふ人もなき身のはて、いかにならんと互に袖をしぼりぬ、妹さかしげに、われ今まで御身のかいほうにて、成人いたせし御恩現にもわすれじ、かゝる折こそ我身をしろなし、此銀すまして玉はれかしとなげきしかば、姉もろ袖をしぼり、もつべきものは子成り兄弟也、誰か其一言をいはん、母におくれみなし子と成しも、そなた斗りたのしみ草、月花共思ひの外なるうきことを聞、昔にかへるうらめしさ、そもや佛神の御とがめ、過去の因果にてこそあらめ、いかなる方へも緣に付、親立の名跡しるべきはそちならで外になし、迚もぬれたる身のはて、佛のちかひやぶり、無限地獄におつる共、それはそれからそれ迄よ、是非々我身をうらんといふ、妹はつらぬく涙をながし、今迄の御恩だにいかでかほうぜんと思ひしに、又ぞや御身をうらせ、此身の罪いかゞせよとの御こと、何程とめ玉ひても此度はとまらじ、殊に尼にも成り玉はんを引替、目前惡道に落しませ

んこと思ひよらずと、とまらん氣色なかりき、姉わざと詞をあらゝげ、行もとゞまるも孝行にていづれか同じことながら、せめて獨りは世をも立させ度、のぞみをむなしくなさば、兄弟の緣を切ぞといはれ、いかに妹なればとて餘りむごい御詞、御勘當がおそろしければ迚、とゞまらんとは中間敷と思ひ切たる顏ばせ、それこそのぞむ所、兄弟のあいさつきれば他人ぞかし、身賣したくば心まかせ、惣じて親の名跡は、惣領の支配にて自らが儘なれば、此度の出入もそち立にはかまはせぬ、いきたい所へいきやといわれ、兎角の返答なく淚ながらのいひわけ、うれしや勘當うけたれば、我身をしろなし、母樣のしやくせんなさんと思ひの外成る一言、今迄の御苦勞舟車にもつまれず、浪樣こゝはよひやうに、御了簡を賴みますと手を合せけるにぞ、いづれをいづれと詞につくされぬ心底、うらやましきは兄弟ぞかし、おふたりながら尤にしていやといはれぬ譯、それにてはすまぬと、殊に大分のかね、何奉公したればとて手取壹貫目は心得ず、つまる所勤より外の思案有間じ、御兩人の志はいとほしければ私はからひ申さんと、もみくじ二つ拵へ兄弟の中に置、是は神の御指圖互にゑこなき了簡、江口此印にあたり玉ふは勤、佛原此印は跡に止まり玉へ、若妹君とり玉はゞ、姉君の替姿を墨に染玉へ、然ば御兩人の望外にならぬといふもの、いかゞあらんといふにぞ、兄弟悅び天地神をはいし、自らを奉公に出し玉はれ、いや私をと口々にのゝしり、くじを取てひらき見れば、姉は佛の原、妹は江口に取あたり、なふ嬉しやとよろこべば、姉淚をながし、尤佛神のみくじなれど、私へ玉はらぬは尼になれとのおしへならん、迚もうきふしの身賣りせば、京大坂をはなれ、室の津下の關宮島などにて勤め玉へと、淚かた手に何やかや、取まじへたるうき思ひ、浪がしるべをたのみ、爰かしこ尋ねけると也、

（二）今樣女忠度

飛鳥川きのふ見し娘すがたも、けふは色里のかり寐、わけよし原は道とをし、京島原はしる人有、もとより新町は我里なれや、人にわらはれんもよしなし、ひなの色里しる人ありて賴みし折ふし、藝州宮島より、つちや市左衞門といふ女郎屋上り合せ、目見えの日限に蘭がすがた、見るとひとしく飛あがり、のぞみはと

尋ねける時、口入の京三罷出、此女中餘の奉公人と替り、金銀のぞみにもあらず、先壹年切と定め給金廿兩かし玉へ、御手に入べきよし市左衛門思案顔、今迄壹年切の奉公人抱へたることなし、尤突出しなればさのみそんは行まじ、てんぽおゐてもみよかと、茶一ぷくのまぬ内埒があけば、先目出たいと手を打、證文のうへ金子を渡し、近日出舟すべし其内身仕舞めされと、暫の暇を乞姉がもとに歸り右の金子を渡し、分一銀二兩引のこりを入道方へすまし、母の手形を取戻し、判を切て佛前にそなゑ、いよ〳〵極樂にいたり玉へと、兄弟涙をながし回向のかね打おさまり、爰かしこの暇乞はや出舟と使立ば、名殘おしげに立別れ出のやかたのおきふしを詠、姉様さらば隨分御息才にてましませ、壹年のくるゝは今ぞかし、切々文も玉はれ浪様頼みますと、夕暮方の星月夜、迎の籠足をいそげば、住なれし里もはや五七町過たり、いかゞ思ひけん又取て歸し表をたゝき、只今御暇乞申ぬれど、ちと申事有て又々來りぬ、爰をあけさせ玉へといふにぞ、兩人驚き內にとほし、何故歸り玉ふよしとはれて妹涙ぐみ、されば自らあの里へ行よりはや、突出しとやらん其儘うきふしとなり、あまたの客に逢と聞、定めし勤の品々をしゆる人も有べけれど、およそ樣子も聞まほしく、姉様こそ御存知なけれ浪様はすいぞがし、あらまし語り玉へといはれ姉はきやうがる顔、何ゆゑと思ひしによしないことを聞たがる、それこそ親方はうばいなど指圖を請て勤玉へ、やくたいもないこと問はんより、とく〳〵舟にのりやと、ふ、浪小蘭をつれ〴〵詠、誠にさかしき知惠ぞかし、成程樣子をかたつてきかせん、先方樣は突出しとて我人色にうつる客、殊に田舍のやさ男、世に有人は四枚がた、飛鳥の如く籠をいそがせ、くるわの門に着とひとしく、末社とは太皷のこと、これらが前後をかこひやれひ、先新造は誰樣よべと七度半の使立、勤のすがた町御出とひしめき、揚屋の座敷に御供し、御機嫌うかがと替り、まゆ置ずみに薄ぐもらせ、駒くらなしの高島田、京も田舍も同じこと、一筋かけの平元結、おくれをにくみぬき揃、二尺五寸の袖の下、腰のまはりに綿いれず、末廣がりにつま高く、中いれなしの中はゞ帶、つゐ折かけてしどけなう、結びはかくす習ひぞかし、衣裳は凡三つ重ね、道中はくり出しのうきあゆみ、屋

ごや入はぬき足しづかに、居姿おのづとけだかければ、いかなる高家の息女たり共、是ほどには有るまいと、いづれの客も戀しがり、魂うごかす計り成き、愛に一つのしかけごと、さうした勤の內からも、誠の戀が有ものにて、其思ひ人かならずも、手前すつきり會我ぞかし、いやなおとこは有とくして、今頃世間に大切な山吹色にことかゝず、身の爲よきと見るならば、めつたにのぼつたそぶりをし、目遣の大事有、是は道中或は揚屋の格子にて、見る度ごとに見歸り、目でしめすてにして行もの也、いかなすいでももがいてくる、所を氣を替くるわの文章さらりやめ、あたまから壽命の毒な男樣、ぬけがらよりと書てやる、ふみが物いふならひにて、つゐには手に入しかけ有、好色ごくゐのかんもん、萬の實ことこめ置たる、是すいごかゝの手くだぞかし、勤する身の詞など皆いつわりといふ人有、其いつはりが此程は、取もなほさず誠にて、くるわ通の殿立、見付所の一大事傾國の口傳事、情あらそひいきぢくらべ、指切髮切爪をはなし、血文日文のつけとゞけ、七枚起請金手形、是も勤のすることにて何國もおなじ秋ぞかし、かまゐてきづなど付さんすな、誠の戀に誠とは、戀といふ字にとゞまりぬ、そうした戀の有時は無量のうそも皆誠、それを悟らぬ殿立、思はずはまる物ぞかし、此ほかのくるはざた、語るもいふも同じこと、せつない勤の樂みは、間夫の有のが命ぞかし、又大盡と見る時は、いやらしく共そこらをこらゑ、くるわのくげんのがるゝを、はつめい共かしこい共、りこふ共いふぞかし、うはさの戀はせぬがよし、いやしき業といひながら、出世するのも傾城のと、地獄におつるもこれから也、此外の傳授事、さしあひなればいわぬぞかし、あね女郎が引まはし、わるいことはおしゑぬ物、隨分はうばい中よくし、かりにも腹は立ぬ物、夜もはやよほどふけぬれば、はや御歸りとすゝむるにぞ、妹はとかうの返事もなく、いやらしゐは勤奉公、なれ共一年のこと、まゝよとは思ひながら生死のならひ、又逢迄の形見にと、淺黃ちりめんのふくさを二つ出し、無地成が心がゝりと硯取よせ、一首の歌を書たりぬ、

難波津やわがふる里をみのこして
　　また咲かはる梅のはやざき

是はあね樣に參らせん、形見といふにはあらねど、自

らが心志とて參らせければ、姉は涙ながらふくさの裏をかへして、

あかずしてわかるゝ人の名殘をば
後のあふせにつゝみてぞおく

妹今一つのふくさにまた〳〵歌を書たり、

勤とて夜な〳〵かはる寢やのうち
思へばつらき人や有なん

是は浪樣へおくりたり〳〵と書けるにぞ、嬉敷心志とて詠、其裏に、

川竹のながれの水はかはれども
なをすみあかぬ宮のうちかな

と互にやさしき心遣、身をいはひ心をよろこび、名殘の盃、さいつさゝれつしばし時をうつしぬ、籠の者共大あくび夜番太鼓に目をさまし、表をしきりにたゝき、何とておそなはり玉ふぞ、こよひの出舟申さねばとてしれたこと、名殘はいつも同じこと、とく〳〵いそがせ玉へといさめけるにせんかたなく、又籠に乘りさらば〳〵、隨分舟中無事に皆樣賴みます、未旅なれぬ者萬心をつけてと、念頃にお願ひなければとて、大事の奉公人惡敷は致さねど、暮方より今迄またせ、あつゐ茶ものまされぬは、上方衆にはにやはぬぶすい、こちとらにひだるいめをさせ、おの〳〵ないて腹ゐらるゝは、あんまり氣づよいふるまい、せめてたばこのまされよと舌鼓うつはことはり、名殘にかきくれ心のつかざるはあやまり、先酒一つといはれ、のまぬは田舍藝お時宜なしにと、茶碗酒引かけ何よりの御馳走、お妹ごの儀おきづかいあられな、追付御出世の吉左右しらせん、さあこいいざとかたかへず、西國橋迄中腰にて、行もかへるも酒の勢々、

(三)今知盛惡性入

事過時さり、入道方にはよしなき手形をしるべに、女をせちがい非道の銀をむさぼり、なげく者悅ぶ者商内の門出よしと、次男は江戸道をいそぎ、伏見迄は夜舟にのぼるべき用意、三男友之介は、宮島の市より下の關へ志し同日の出舟、船頭の六介着替櫃かたげ廻るにこゝろせかれ、はや旅立の盃、四男は入道名跡の支配、うしろの七兵衛、京の出見世は次郎兵衛にあづけ、友之介は乘掛にいそぐ、手代川口迄送り、追付御仕合よく、松の葉のちりほこりも殘さず、銀にあそばし御のぼりと、おもたい口でいはれ、三男悅び大義大

義別して留守を賴む、入道死去なればとて不奉公をめさるな、注文のぼり次第油斷なくとゝのへ、段々下さるべし、小遣帳付おさすな、せど門はくにも只紙くずに氣をつけよ、風吹時こけらをひろはせ燒付にせよ、かならずわすれなさらばといふて別れぬ、折ふし此舟につちや市左衛門、小蘭をかゝへ本國に下る同船、しらぬが佛樣でも船中は御免あるべし、互に遠慮は御無用、此風にては近日着船すべきと、市左衛門もたせの樽の口をひらき、一つのんで先友之助にさす、忝ないお時宜なしにたべんが、わり付は出ませぬか、はてわけもないといはれ、忠のりならばとさしうけ引請け、五七はいさらりとほし、義樣ゑもどすはふるし、あなたはおないぎ樣とみへたり、はゞかり申さんがていしゆおかまいはないかといふ、くるしからぬといはれ小蘭にさす、爰はおさへる所なれど、獨してのむにくさ、いたゞゐて旦那ゑさせば、友之介打笑ひそれはこちゑもどるはづ、外へ遣さるゝは酒あい御存知ないかといはれ、いなことをいふお人、もどるといふにきはめは有まい、私が盃なればさしたい所へさすぞかし、氣のみぢかい御人樣じやと恥しめられ、

市左衛門取あげ小らんゑもどせば、爰はちつとさはりといふ、友之介盃ひろひ、さらば拙者があいじやおもしろいかとつゞけのみ、もひとつのまんとする所を、小蘭にとられ手拍子打てはやり歌、逆もあいする此盃を、とむる心のそこゐはどをじやと、文七ぶしの片言まじり、船中笑ひ同音にあまりげび衆で、人が人とはいひませぬぞや、ちつと身もつたお衆のぶんは、よつてかゝつてわろふをしらず、入道相果忌中をしらぬは畜生におなじ、兎角するうち明石浦着たり、市左衛門國への土産に、野郎がるたをもとめしが、舟中にて氣ばらしと小蘭下人をまねき、一文四文のよみをはじめ、二をもつた市川團四郎であがつたは、上手にはあらずやと又打しこる、小蘭が手には吉澤あやめ水木辰之介萩野澤之丞の三枚もつて三度のごひつめ、つまる所があやめであがつたは、なんと上手にきはまりぬ、友之介うしろより見物し、小蘭が前なる錢を見付け、是女郎其錢四五文きをはされぬか、よくには仕らぬ我も打氣ざしさといふ、そんならござんせとはじめけるは暮方、ちやうちんとぼさせうつゝなや、はじめは友之介勝たりしが、次第々々に負腹立、通櫃

の錢五六百引さげ是をもまけ、後には壹貫の錢間なくとられ、ひたいに血筋をはりわな〳〵ふるひ、男にまくるは常のならひ、こよひのかるた此女郎の獨勝、いざおすまいかといはれ、それは御法度のばくちせぬことにきはまりぬ、よみさへいらぬことながら、つれ〳〵の慰勝負してしれたこと、然ばおきましやうといふに、友之介眼色替り勝にげはさせぬといふ、ともかくも此方欲は少しもなし、勝錢負次第置をけいやくに又打始め、宮島に舟着迄友之介が負五貫八百也、我一文錢あだにつかはず、よしないことに大分とられ、取返さんに力なく、市左衛門が宿を尋ね、逗留の内今一度參會、かならず御出と舟より上り、めんめん宿に歸りぬ、友之介は初ての市立、宿の亭主罷出御馳走の有たけ、所々の作法とて國見振舞のさしづめ、諸國の商人四五十人、其夜の雜用百五拾匁拂、つくづく思ふは、未だ商内せぬのみ貳百匁餘り遣、思案におよばぬ仕合、取かへさでは死ぬる迄の思ひ種、意趣は舟中の女に有、所詮立越取もどす迄いくさうと亭主をまねき、此所の色町につゞやの市左衛門といふくつわ有やと尋ければ、夫は存光寺と申所の女郎屋、同船の女中も傾城にて、しかも明日よりの突出し、おのぞみならば我が太鼓にて御供申さんといはれ、扨女郎の直段をとへば、さん候廿八匁と二十三匁又十七匁、其外壹匁貳匁は五七人ならでござりませぬ、なんと壹匁といふも同人間にて、顔のすまいに替なければやすいもの、又同船の女郎はいかほどするぞ、されば廿八匁とうけ玉はりました、扨もたかし、なれ共其女郎とかるた打約束あれば、是からよびにやられよ、亭主かぶりをふり、くるわでお買被成ますれば、かるたうとふと淨るりきかふと、お心まかせといふにぞ、二十八匁のかねつかふは、生爪はなすよりかなしけれど、無念暫くもやまず、遊を只にするか廿八匁とらるゝか、二つ一つ案内せよとふたりづれ、備中屋といふ揚やに入、新ぞうよべおなじみの大盡、御逗留の内は見ごとな事、わつといふて召の使、いつしか替る色すがた、小蘭といふも一昔、よしや吉田と名をあらため、思ひよるべの水あげ大吉日のはつ賣姉、女郎のかいほうにて、揚や宿やのめみへをすまし、浪がをしへし道中あたまから膓づめ、けふのくがひは備中屋、亭主立出、新ぞう様の御らいりん、それお盃お肴お引合

せをどさめく時、友之介はかぶりをふり、お目にかゝらぬさきにてこそ七日迄の舟同行、外の客とはちんちんちがいの拙者ぞかし、此間はよい懸かるた大明神のお引合せ、又ぞや御めにかゝる事御ゑんつきぬといふもの、逗留の內役者がるたの御指南に、あづからん爲廿八夕の揚せん、思へばをしいかね、是にていわうとうしみ買はゞ、茶舟一そうにはあまるべきと、扨もきやうがる座敷付き、まだ色なれぬあいさつ、難波人には珍敷い御客とわらへば、宿の亭主驚き何もそれはおめちがい、難波にて誰あらふ伊丹可運樣の御子息、ひよつとお氣に入玉はゞ身請にてもなされん、皆々まはりやとさはいする、吉田ははつと肝にこたへ、人の因果はしれぬもの、此父の惡心ゆゑ、母をうしない姉樣に別れ、わづかのかね故所をもさはがし、せんかたながら此所へ身賣せしも、此兄弟が仕業ぞかし、此男に逢こと思ひもよらず、所詮かへらんとせしが、いや〳〵爰は分別所、何とぞのばし、かね遣はせてはらゐんと、俄につくる情の目遣、おのづからまはりじかけ、友之介は露しらず、欲にひかるゝ三昧のをと、それよりかるたとのぞまれ、一時ばかり現なや、わざとまけるも思案ぞかし、友之介は貳貫許りの勝、歯に血を付られ一先宿に歸り、つく〴〵思ふは、今五七日買たらば負を取のみ、我物いらずの傾城狂ひと心の外の思ひ付、商內はそこ〳〵に明暮色町に通ひ、十日許りは續け負、わざくれ心となりひら氣、かるたも外成吉田が仕懸に腰をぬかし、毎日の揚詰、商內せねばかね廻らず、あげせんにはせつかるゝ、宿やを頼み、賣物のこらず廿日切の質に置、其銀の有たけつかへば、質やからは請よといふ、吉田からはつけとゞけの文日に幾度といふことなく、あいたやみたやなつかしやと戀しさふなる文づら、宿屋ははたご代御算用と催促す、賣物はうけられずゐるもゐられぬ羽ぬけ鳥、着のまゝ宿をぬけいづく共なく出けるが、道にて入水しむなしく成りけると也、誠に欲は其身のあた、無欲成者一生の內あやうき事なし、只たしなむべきは此みちなり、

風流今平家九十之卷終

風流今平家十一十二之卷　町人身の手鑑

（一）今樣商人心

年のうち春は難波に有ながら、なつ季になれば東方、しな川の邊に住なれ、武藏野東西南北かけまはり、家業油斷なく、毎日錢小判俵物の相場を聞、月六度の飛脚京大坂への狀日をかゝさず、寢る間も十露盤はなさねど、去年と替ることしの不仕合、舊冬迄はさはることによく、內證の始末に氣を付、朝夕燒鹽燒味噌より外のさいをくわず、日々に商賣のあたりよければ、なんでも今年はと、心のねたばあはして待に甲斐なく、する程の事がひだりまゑ、隙ゆゑ美食を好、本挽町堺町の芝居を見にまかり、歸り足のそば切宿には、友達共車座に居ながれ、すは宗左衞門歸りぬ、いざ同道せよとむたいに吉原に伴なひ、三茶ぐるひの相談本心を酒にとられ、また寐の床に明日を約束し、ゑいさめて後俄に歸らんといふ、友立口を揃、親妻子なき者か樣の時のたのしみ、今歸れば今日の揚錢そんに成といふに是非なくあそびぬ、殘るは思ひ〳〵の慰、三味線をひくやら太鼓を打て躍り、はありやはありやと上方風のおんど、江戸にては猫に小判ぞかし、惜や其日も暮かゝり名殘を床に殘し、又こんといふわかれ路、宗左衞門喜び早舟に乘したくに歸れば、下部はぶきやう顏、ちとおたしなみ被成よ、當年はけしからぬぞけよう、內に水はつきませぬ、獨つかはるゝ私にろくな物もくはせず、仕着せと云へば、古手やの見世晒しを買てきせ、小遣帳に一文たらねば、だるま殿のやうな目していかり、元結も手ひねりをつかはせ、八年奉公すれど鼻紙半帖くれず、髮の油は藪入の時母じや人が付てくれられた斗り、朝夕のくひものも一つ〳〵いひこそせね、上々吉といふが大唐米、仕かかつた奉公なればこそ勤ますれ、內をひづめ御自分のゑようはせぬこと、重て御無用と利窟をこねられ、いかな旦那も返答なく、にや帳面に取かゝり十露盤はちき〳〵、商內はなかつたか誰もみへなんだか、錢一文うらぬくせ向いの猫が參り、夕べ買ておゐた生いわしを喰ましたといふに、宗左衞門筆を捨、八幡十二文は死ぬる迄のそん、重てうせたら討ころせと、血眼に成ていかる所へ、いつも小買にくる女來り、又今

日もと壹匁出せば、男は米舟にかゝりはからんとする時、宗左衞門詞をかけ、明日はしらず今日の相場は五しやくたかし、やい角兵衞はかりに氣をつけ、生いわしの無念をはらせといふにぞ、女房何の氣もつかず、はてよいやうにとはからせ暫賣場に腰をかけ、是御てい様、少しづゝ買に參るを、心よくうつてくだんすは上方衆のやさ男、御心ざしのうれしければ、人にかたらぬ事ながら身の上をかたりません、もと私は吉原の傾城おだまきといふ者也、くがいを勤めさる人と夫婦になり、半年餘りそひ寢し、此男行ゑなく成給ひ、今日迄三年ほどに成さふらへ共、いづ方にゐらるゝといふたよりもなし、定めし相果給はん、此おとこ常に秘藏めされし書物有、名を東北瀬の證文と申き、内を見るに五穀賣のる年、賣のらぬ年をくはしくしるし、殊に土用八せん入梅十方暮など、暦になきことをみさいに書たる本也、此間つく〴〵思ふは、かたさま杯の商賣に此本あらば、御勝手にもなりませんと思ひよるべも色からさ、しり目でにらむふたかはめ、宗左衞門一十を開心の内に思ひけるは、何とぞすかし此本我手に入なば、さしもの運氣を考、買込賣拂にあぶなげなく、獨もふくる傳授本、たらしもとめん下心わざと大やうに、そうした書物我々家業の第一にて、あまねく見つくしぬれど、手がゝりおもしろき所のあれば、何にもせよ金壹歩にて給はらばもとめをくべきよし、いかにひんなればとて先は男の形見、わしが心には暇の狀と思ひながら、人樣のお爲にならばしんぜたもよしと、方樣思ふての心ざしを見立たお人かな、そんなことならおきましよ、さらばといふて歸りしを、宗左衞門押とめ、是は拙者があやまり、是非所望仕心底何とぞ御意にかけらるべし、御恩は生々世々わすれまじ、今迄は御つれあいが有かと存一言いふもゑんりよづくめ、有樣てない咄二三年たよりせぬ男、定めし替を拵ぬつくりとしてゐられん、若し相應の縁付あらば心中立ずと嫁し給へ、我も仲人仕らん儘にならぬは浮世ぞと、とを火にかけてやきければ、此の女わざととぼけ、いわんすればそれもそう、不心中な男にこちから立るはいらぬもの、今日を限よいことあらばしらしてくだんせ、それはそうじやが方樣にはお内儀は有か、いや〳〵今迄やもめ世躰、古郷にもなければこそ年中當地ずまひ、それ

は誠にて有べけれど定めしいやであはふといふに、それはまづなんのことぞ、さればよそ〳〵に年ごろ器量もわしぐらゐ、なれど是も男ざりにあふて今は後家、かつこう大事なけれど、荷數がないゆへひかゑてをりますといふ、是おか樣錢銀はわきもの、女房さへよくば談合にのる氣ざし、しからば先樣ゑとひ御合點ならば見せましやう、さらばと出る袖を取、見ぬ商內はせぬがよし、近日見る手はづはともかくも、今の書物は私がもらひます、かならずわすれまいぞや、ほしくばわしが所へござんせ、所はそんじよそこなり、望をかなへさんすならまだお爲に成物しんぜません、先歸りますと立わかれける、折ふし屋敷衆と打見ゑ長刀の一本ざし、こつがらよい男なるが、三日に壹斗づゝの米得意今日もまた來り、直段違のない樣にはかりもよくめされ、見てはからすことなれば別義はないが、宿に歸つてはかり見れば、壹斗の內にて五合づゝへることと有、なん共合點がまいらぬ、身がぶ調法にならぬ樣にと來る度ごとの念、それははかり樣にて、五合三合はへることと有又出ると有といふ、尤にうけ、二朱判壹つと錢を出し請取りめされといふにぞ、金錢を銀になをしての賣上、いや〳〵是では旦那ゑ見せられず、二朱代何程錢いくらとみさいにかゝれといわれ、是非なく又書なをしける、

賣上申一札

一 九匁三分　但し白米壹斗代也

右之代に二朱壹つ代七匁壹分錢百六拾二文此代貳匁貳分但し壹匁に七拾貳文遣也二口合九匁三分右之銀子慥に請取出入無之相濟申候以上

月日　米や　宗左衞門

酒林吸右衞門樣

と書けるにぞ男悅び、是々御ていしゆはりちぎもの、また其內買にまいろう、さらばといふて歸りぬ、扨もきつゐねんじやとほめけると也、

(二)今重衡身欲の錢見世

昔は生れ子目をあかず、乳のめど大やうに、赤子より大食せねば成人の後長命成き、其子生るゝとはや目を明き、なき聲せはしく水子から欲をしり、あまもの乳のむ口男女共にひすらこく、後ばりにかしこ過るゆゑ短命成り、子に能きと見するもあやまり、惡敷こと見するもわざわいのもと、人おのれが釜戸斗り見

て、世間しらぬは世に住たる甲斐なし、氏よりそだちながら一つは氏也、あたら年月をむげにくらすはあだなり、花さへ時をしり、春は姿をかざり人に見つ見られつ、琴三味線の音を聞、人の見ぬ女中を居ながら見るも盛の内、花散り實のる時稱美するものなし、人間是に同じくいづれか此土にとゞまる者なし、命は水のあは老生不生をしらず、晝夜悪念はなれぬもの淺ましき心にてぞ有けり、手前まづしく共欲にうつるは非の非也。伊丹宗左衛門女の物語せし書物に氣をなやまし、我手にい[◎はてカ]れんことをねがふに、此女二度來らず、くるを待ばとけしなく、暦をのぞきさるといふ日を吉日、立出て峯の白雲、花やあらんの鼻歌をしゑの町に尋、此あたりに傾城のひつこみ、名は三輪の諷に有し人也、御存知あらばおしゑてなど、闇に石うつといやう、朝から八つ迄尋てしれぬはことはり、折ふし諷けいこする門をとをれば、おだまきに針を付もすそといふに思ひ付、其おだまきといふお傾城しる人あらばおしゑ給へ、それはそこじやとおしゑられ、障子にゆびまごあけさしのぞけばおだ卷也、なんとひさしや、いつぞやの詞にほだされはるぐ\來りぬ、お咄の女房見たいといふにぞ此女驚き、みぐるしゐ所へお尋、お約束のこと先様へ申入、近日御左右有はづ也、先お茶一つとさし出す手を取、お肝入の女は山も見ゑぬ坂、今かたさまはあきで、いとしがる人有もしらぬが佛、此男が思ひを助てほしや、しき銀道具に望もなし、此身此儘丸はだかな女房持、着物してきせるが好き、女房になる印にいつぞやの本、御持參銀と思ふべし、此程さるかたより、銀二十貫目に三十荷もつてくる女房しかもみめよし、是非もつてくれぐれたのめど此鼻がきかぬ、德をとるより名のみのこす心底、お肝入をやめ方様に乘替、分別きはめきたしぐれ、ぬれぬさきこそ露をもいとへ、なんといやかといわれ、うそにもせよ先はうれしい心ざし、何を見付そうしたことをいわんす、姿形はともあれかた様の心入は、いかにしてもわすられず、殊に目のはりすゞしくほさきのほくろが福の神、髪のゆひぶり柳腰、第一男思ひとみへ大事の書物、私の爲にくれんとは爰がかんじんかんもん、此詞にほだされはるぐ\來りぬ、はだのよしあし見ぬも氣がゝり、ひへもの御免と懐ゑ手をやれば、はてわるいことぬしの有のもしらずい

やらしいとにげ樣、かの本おとせば宗左衞門ひろい、此本ゆゑの氣あつかひかたじけないといたゞき、歸らんとせしを押とめ、大事の書物ことわりなく取かへらるゝはぬす人、品により參らせん先かゑされとひしめく、いやかゑさじやらじと互に取付はなさぬ所へ男歸り、宗左衞門女を手の下におつふせ、密男くみとめたり、御近所さはがれなといふ聲、そこらあたりおどろき、手ん手に棒を引さげはやまられなとせいしける、此の男さはがず宗左衞門見しりぬ覺悟せよ、此罪にかぎらず段々の惡人皆々きかれよ、きやつは何町の米やそれがし度々買に行、宿に歸りてはかりみれば、壹斗の內にて五合づゝのはかりべり、ふしぎに存じ女共迄買にやれど替ことなし、にくさもにくしと此頃其升を取歸り見れば、升の內に薄板を打そゑ、人の目をぬくのみ、錢小判世間の相場よりやすく取事、慥に賣上證文取置ぬ、か樣に惡人世界の見せしめ、ころさんとは思ひながら是非なく暮す所に、かかる惡事にもとづきおのれとめつすること、みよみよ日前のむくひ、女め共にかさね切る念佛申せと、片手にねたばあはすを見て、ゞ宗左衞門淚ぐみまつたく不義は致さねど、男の留主に參り內義にたはむれしは此方のあやまり、命を助給はらば御存分に仕らん、おの〳〵あつかひ賴といふ、思へばふびんなり、何とぞ了簡召れと口を揃てのわび言、男はあたつてくくるもの不義なくば助けん、なれ共望の證文有、此趣合點ならばと下書して見せけるにぞ、近所の者共ひらき見れば何々、

永代買請申書物之事

一、貴殿所持被致候代々之重寶東北剃傳受の證文と申書物我等身躰に替望度々所望申所に御得心無之段尤に候然所に其方留主を考其上內義にたはむれの上右之本取歸らんとせしを見付られ旣に手討に可成所を近所之衆を賴段々詫言仕命御助之上望申書物迄被下候段忝奉存候彼是御恩の爲我等身躰有切右之本代に進候永代買請申所實正明白也爲後日一札如件

年號月日　　　　伊丹　宗左衞門

酒林殿右衞門樣

各々此證文ふしぎに思召さん、私以前は武士、不義の惡名取ては一分たゝず、宗左衞門此書物望をさいは

いか樣にすます、然ば互に惡名なく無事に濟分別、皆尤さうなづく、宗左衞門悦び、命助かるうへ何の中ぶんあらん、然ばわたしません御大義ながら御出と、皆皆打連やかたにともなひ、着類諸道具は宗左衞門にとらせ、しろものは賣拂ひ、有銀共に請取やかたに歸り、きやつが金銀いらぬもの戒の爲ぞかし、我々欲なきしやうこと、毎日町に出非人にとらしうへをたすくると也、人には天地の違ひ有、又宗左衞門は月夜に釜ぬかれたる風情、近所にてもうとまれしゆゑ、笑止がるものなくわろふのみ也、下人もうとみ隙を取り生國に歸りぬ、家主からは宿替と日に百度の使、せんかた淚ながら諸道具しろなし、ひそかに大坂ゑ登る分別、思ひ立日を吉日、道すがらの本みせに寄、東北朔置文といふ書物有やと尋ければ、出してみせる、直段をとへば五分といふをさいはい一部もとめ、とつ川に泊り、引合し見るに一字にても違なし、是なんぬす人におい、思へば口惜き次第、身を恨つくりし罪の因果さらし、道中の神々をたのめど神樣にも留主を、つかはれ、やう〳〵大井川に着たり、折ふし雨あがりにて水ましぬれば、川越小錢でわたさず、人わたるを見て宗左衞門着替をぬいでせをい、跡よりと渡りしが、川の中ほどにて石につまづき、ながれ死しけると也、是天のなせる所、のぼり下りの旅人それ〴〵といふた斗り、せなかにはらさやらめん〳〵が身をかばひぬ、昔のむくひはさらのふち、今の世は針のさきおそるべし、たしなむべきは欲惡ぞかし、人々こゝろ得候ゑ〳〵、

（三）今維盛出世の祝（ことぶき）

人間の盛衰のがるゝことなし、世にすむ者欲にはなれ世渡りなりがたし、其欲にこそ品々有り、當世の人さかしけれど欲に目の付所あしゝ、胸に手をあて分別すべし、十惡といふは伊丹を手本とし、町人たしなむべき一なり、兄弟三人の内二男三男は心から東國西國にて水におぼれ、淺ましき死をとぐるといへ共、誰か古鄕ゑしらす人なし、かゝる惡事を夢にもしらず、四男重五郎どん欲日々にちやうくわし、殊に手代五郎兵衞が無分別にそゝなかされ、五節句見世賣の錢にて銀もふくるを、いづれの錢屋より始けるにや、近年節季々々の拂錢、壹貫にて五拾三十づゝの不足し、時の相場より壹分或は二分宛下直に賣者有り、買

て賣る錢屋あまた有り、是をもとめこのんで拂する者有り、わづかの世をくらさんとて人の心かく迄悪敷成る物か、それさへおそろしきに小判にての賣買、もつたひなくも無きづの金をためつひがめつ、又はかまはぬきづをも切といひ五分壹匁引、おのれが方にては無きずにしてつかふ者、是目前の悪人、かゝる非道にて立身する者、其身一代にかぎらず子孫にむくひ、右やひだりのお長者様に成物也、旦那のしらざるは手代共のしわざ、お爲らしゐ顔してめさる共、つまる所親方の爲にはわたもちのはんめう也、重五郎も共ごとく不足錢を買込、人の目をぬくことを悦、七月十三日田舎侍金二兩が錢を買、日通にて小數をあらため、二兩の内にて二百拾三文の不足をいゝつのり、旣に御代官所へうつたへ、兩方召出され御詮義の上、重五郎並に手代が悪事にきはまり、京の出見世迄召あげられ、主從共に追放しられいづく共なく成ぬ、其後町人を召され、此者共がゆかりを尋させ給へば、皆口を揃、かれらは五人兄弟にて末子は娘去方に縁付致し、惣領重右衛門と申者筋目成を、親弟三人うとみ、西國方へ追うしなひ候よし此頃風分仕りぬ、哀れ重右衛門を召かゑされ候はゞ有難由尤に聞召、町人共に仰付られ近日尋出せ、惣領なれば家督は重右衛門にとらすべしと誠道成御さばき、町人悦したくに歸り、尋に出ん評定取々の所へ、十二三の小わらはこつぜんとあらはれ、重右衛門が有家われより外しるものなし、心やすかれおしゑ申さん、折ふし我舟こよひ出船す、迎に心ざし有るかた乘り給へ、嬉しやたよりを菊月中頃、風しづかなる海上帆は十分にあげ、三日めの暮方いわうが島に舟をつなぎ、各々島にあがれば、わらは先に立ての案内、年寄茂太夫五人組重右衛門が庵に尋、互に久しき對面うれし涙の物語、かくすさまじき所朝な夕な食すべき物も見へず、かたちもかはり給はんと思ひしに、さはなく昔にかはらぬよそほひ、何をか食しおはしけるぞと尋ければ、さん候我此島へながされ、よるべ定めぬ礒枕、衣なければまろ寢し、ふたりが中に此子をつゝみ、あけを待つ間のとけしなく、浪の音鳥の羽たゝきに耳おどろかし、東のしらむをあいづに、おきふしの床をはなれ、礒邊に出て行かふ漁船に魚をもらひ、鹽水に煮燒き三人のかつめいとし、只今迄うへにつかれざること、熊野

權現の御利生成りき、殊に是なるわらは折々付まとひ、樣々の御情詞にもつくされず、我本國を出る時父弟共が行末心元なかりしが、あんにたがはぬなれのはて、親にはなれ兄弟におくれ、何の樂有て歸らん、所詮此所のもくずと成ことをまつのみ、人々の御心ざしわすれがたし、此まゝに捨置御歸りもやと涙をながしぬ、人々驚き、我々大切に思へばこそはる〴〵の渡海をしのぎ、迎に來る心ざしを外にし、親子兄弟に義理を立、他人のおもはくかまはれぬは、日頃の心底とは替りぬ、親の名跡立るを孝行と云也、是非いやならば此子に跡をつがせ、成人の後は心まかせとさまざまいさめられ、げに是はあやまりぬ、此うへはともかくも御指圖にまかせん、かく物すごき島にも別となれば名殘をしゝ、殊に三社權現をくわんじやうし奉りぬ、門出の禮參申て後御供仕らんと、念頃にはいし、名殘おしけに見歸り〳〵舟にのれば、中にも重太郎悦び、うれしや難波に歸り、出羽義太夫を見物せんと悦の和歌をあげたり、謠高砂や此浦舟に帆をあげて、月もろ共に出鹽の浪の、あはぢの島がくれ、とほくなるをの沖過て、はや住の江に着にけり〳〵、皆々舟

よりあがり、四社明神にひざまづき、かうべをかたむけ禮する時、付まとひたるわらは妙なる御聲して、よきかな〳〵我は是熊野三社權現の神勅也、汝常に信心ふかく道なるこゝろをかんじ、かりに舟長と現じあやうき命を助く、今世に出ること正直のかうべにやどらせ給ひぬ、いそぎ本國に歸り一子に家督をゆづり、老の樂をきはめよ猶行末を守らんと、神は跡なく成給ひぬ、人々肝にめいじ御跡千度はいし、やかた入のぎやうれつ住吉より籠をならべ、昔に歸る伊丹の家二度さかへ、毎日の振舞爰かしこの付屆、あなたこなたの對面、悦の盃取ごりの中にも、熊野權現の御利生忘れがたく、俄に金屛風を拵へ、名有繪師をまねき、いわうが島の憂こと三社ごんげんの社をかゝせ、爰にても居ながら信心をわすれず、其後お蘭浪が行衛を詩、出家すべき心ざしをかんじ、嵯峨の奥山に草庵の立させ、心まかせに致されよと、白むくひとかさね花のぼうし絹衣まで給はり、剩へ妹が身請し花の都室町邊に縁付させ、其身は熊野に詣で常燈明の金燈籠一山四方にかゞやかし、下向には高野山に登り親弟の追善、あまたの僧を供養し日牌月牌立置、かた

のごとくとむらひ、それより屋形に歸りあまたの下部をかへゑ、心のまゝに商賣し針口のをとたへず、目出度春をかさねぐ〳〵の繁昌、くめどもつきぬ伊丹酒、千代萬代のてうしかはらけ、島臺かざるぜうとうば、よはひ久敷鶴と龜、千代に八千代にさゞれ石の、岩ほとなりてこけのむすまでめでたくかしく、

おもしろからぬをなが〳〵とさぞお氣もつまらんとぞんじ是にてやめ、もしお慰にもならば跡は後日さし此秋お噺申ましやう、

難波のごせ
與志口上

風流今平家十一十二之卷終

亂脛三本鑓目錄

一之卷　國は色より出る雲

(序)妹脊の緣定め
神の仲人にも目逢ひの有人心
魂の宿がへ
色ゆへひつくりかへる水の小夜衣

(一)御前の能舞臺
夜ならぬ晝の素顏
繰返し見る戀の下心
女中の濡衣
かはく間もなき御局の悋氣

(二)出雲の大御社
御緣日のかこち諳り
逢ふたり叶ふたり神の御利生
まきちらす人めの關
さゞめかれたる新枕

(三)嫁入のぎしき
男ぶらみ二度の祝言
目利の茶筅ふりにくい男
其夜からおなかに溜る子持草

二之卷　國は色よりの次

(四)戀の元しのび
茶の湯はお家出の玉の井
兵法戀慕の亂脛
白きを見て通を失ふ男

(五)闇男のうみ溜
子だ藥つるやぶれかぶれ
あらはれ月夜脫けの蟬
泣くも泣かぬも忠義の腹切

(六)門前の狂歌
書置の探り足
差當りての難義
寐耳に惡事を囀る村雀

(七)現のかけ橋
女敵の訴へ胸躍り月
義理には歸られぬ兄弟の中
二人が命橋の上には何されたさ

三之卷　國は作州津山、所は大坂田邊屋橋

(一)作州津山の沙汰
方便の提重
開いて見る二幅對の掛物
尤さうな杯の文詩
呑込だ所が戀慕の下染

(二)播州賀古川の夢
ぬけ參りは男の願ほどき
さびたりまいたり獨寢の旅
うつゝに男の噂おそろしや
これ申おしゆん樣

(三)明石の浦の難義
敦盛の石塔は姿の隱れ家
雲介を惡人方に仕立奴
念力云はれぬお禮銀に伊丹酒の諸白

四之卷　作州津山の次

(四)欠落の評諚
褒美にあづかる手錠
うつゝにも兄を敬ふ弟の忠義
舅を探る聟の心底
證據に取るゝ掛物は不義の名取川

(五)片上の辻堂
兄弟連の夜道明方知らず
馬子の惡口淸十郞おなつが
身の上は今にある姿の辻占

(六)血汐の大川
芝居の追出しは命の果太鼓
夢路にのる駕錢六道のみち引
田邊屋橋幻に打つ女敵
婿舅の恨み報ひの刄

五之卷　國は丹州篠山

(一)立身の十文字鎗
門出は粟田口の盃
もり潰さるゝ色の拔道
刀さり火打箱の光り
命はよしやよしが立聞

(二)祇園林の色咄
女中誰が身の上語るに落る淚川
渡り參かれたるかれの言の葉
積る恨みふみ付たが忠義の履物

目錄終

亂脛三本鐙一之卷

（序）妹脊の緣定

出雲の大社は諸國の神々、毎年神無月此社に集まらせ給ひ、六十六國にてぎやつと生るゝ男女に未來を考へ、夫婦妹脊の緣定をなさしめ給ふ會所たり、うへつ方は殊なく千秋萬歳子々孫々繁榮たり、禍は只下下の事にて、昨日まで中よきめうとも今日はのき去り、道にて過ふても婆婆で見た彌次郎顏、或は身躰もちくづすのらあり女あり、子ある中をふりすて三くだり半をとるとはや、すぐに隣の茂助方へ嫁するのやから、男も亦さの如し、左右方牛に馬乘りかはるさ、馬から牛に乘りちがへるも世の有樣、親の許さぬ妻もとめ、いとしいが嵩じ〳〵て、添はれぬからの無分別、心中して死するもあり、勤めの契りはしやれ過ぎ、粋が身をくふ喩へも、もと銀詰りより儚き死を遂げ、歌繪草紙の種となる、密男は男女の水澤山にて、痒い所へ手がゆかぬからなり、これ等は出雲の大社へ、寄あはせらるゝ神々たちの御存なき事なり、其中

に入たる女房をたぶらかす事、八逆罪の科人、其罪同前たるはまゝ多く、就中京大經師のおさん、大坂にては樽屋のおせん、粟田口野江に屍を曝されしためし、是等は町人なれども國法のがれず、それさへあるに近年武士たる者、人の妻をぬすみ國を立のき、難波に上り身を隱すといへども、天の網にかゝつて遂に及に伏して、一家に恥を與ふるやから一人二人三人あり、先作州津山の何某、一とせ大坂田邊屋橋にて見付られ、大川に紅葉を流す、其沙汰止まざる内又々丹州篠山の誰、是も大坂にてめぐり遇ひ、丹波國猪野目村へ逃げ、こゝにて打たるゝ是二つ、三つにはことし七月十七日雲州のそれ、大坂夢の浮橋にて本意を達し、橋上をくれなゐになせし事その隱れなし、打も武士打たるゝも武士、殊に鑓一筋づゝも持たせる仁躰、近頃あるまじき事、よつて亂脛三本鑓と題し、諸國を飛まはる鴈にはあらねど、跡なるが先へくり出す事、先高麗茶碗の破れたるを口にかき集むるも、珍飾たるに因つてとうん〳〵、

享保三つの年今月吉日　　　西澤編集

（一）御前の能舞臺

雲州松江の大守初めて江府御參覲遊ばされ、目出度御歸城の御祝儀としてお能を仰付られければ、役人承り番組改め御前に差上る、御上覽の上にて三輪の儀は小姓の内にて、シテは池田軍次郎、ワキ小森彌七郎に仕れと、已に日限きはまり、家中の者共見物致させと有難き上意を承り、老若男女思ひ〳〵に出立、未明より御門前に相詰め、今や遲しと相待ちける、已に明六つの鐘打つ頃、番の侍人數を改め二重三重の門を通し、御前近き舞臺の前に群集をなし、靜まりかへつて見物す、早殿樣正面の高家にあがらせ給へば、家老の面々左右に分り、雨手をつゐて畏まる、御みすの内には御臺若殿お乳の人お局方女郎頭女中方、すは始まるといふ所へ、今を初の旅衣日も行末ぞたのもしきより、さつ〳〵の聲ぞ樂むと、高砂一番果てければ、次は兼平三番三輪、是こそ拙者が世悴彌七郎が勤むる由、此一番こそ見物と、親小森幸右衞門娘おかんを初め、かたづを呑んで見る所へ、これは三輪の山かげに住居するけんびんと申沙門にて候といへば、三輪の山本道も無し、ひばらの奥を尋ねんと、素顏に掛し女かづら、池田小森兩人今を盛りの男山、花と紅

葉の色競べ、一たいふんじんの御事、今更何と譽められもせず、おかんは軍次が姿を見そめ、はや戀風のちら〳〵と、心せきの戸夢ともなれ、現に見るが如くにて、果つるや名殘なるらんと、是を仕舞に定められ、家中の見物、殿樣の高家の方へかうべを下げ一禮して歸りぬ、使者を以て仰出さるゝは、小森彌七郎池田軍次郎儀、今日のお能首尾能く相勤め、中々御機嫌能く御座候まゝ、有がたく思召せ、別して御褒美として呉服二重宛くだされば、兩人謹で、有がたき御諚、若輩者の我々無調法御座あるべき所に、却て御褒美に預り面目これに過ぎず、憚ながら御前の首尾よろしく賴み奉るの旨、取次仲右衞門承り、まづ〳〵したくに下り御休息有べしと奥に入れば、つゞゐて御前樣より卷物を臺に据ゑ、お腰元の花世十六の振袖恥しからぬ風情、兩人の前に畏まり、御前樣より仰出さるる趣、誠に年若にして晴がましきお能を勤めらるゝ事、別して彌七郎樣の僭わき、みづ〳〵としてどこやら殊勝らしく、我々如き淺ましき女人も、御勤めにより成佛得脫の身ともなり、又撫下なる御心ぞならば、立所に於て鬼女となり、奈落の底までもつきまとひ、



戀慕の怨思ひ知らせん、色も情も知る人こそ知らめ、せめて一夜のおなさけを頼みます、これは〳〵わたくしが云ふ事斗り申ました、御前様よりは首尾よふ勤めたと有て、下されし御褒美有がたふ思召ませ、兩人かうべを疊につけ、殿様より拜領仕たる上、又々御前様よりとは冥加に餘る仕合、家中の聞へ一家の外聞、然るべく御取成頼み奉ると、慇懃なる挨拶、花世承り、お返事はそふばかりか、外に御用は無いかと云ふ所へ、お腰元の松が枝、上下を臺にすへ兩人が前に置き、若殿様の御意には、大義の役を勤め殊に面白かりしは神樂の段、重ねてまた御覽なされたき由、暫く休息致さるべき旨、御嬉しう思召ませ、さて千早振神も願のある故に、人の知遇にあふぞうれしき、と謠ひ給ひし目つきは、何といふ目づかひぢやへと尋ねければ、軍次郎承り、今日のお能の儀、素面にて仕れとの御意、面はかけませず、どうした目やら私が目で私も存じませぬ、其日に何ぞ御用でも御座りますか、成程其目に付段々怨もあれど、あから様に云はれもせず、云はねば胸に思みち、せきとめ兼ぬる戀の淵、沈まばそれからそれ迄、さりながら重ねて能を遊ばしますとも、面は御無用になされませ、いつも今日の通り素顏こそ美くしけれ、此きめ細かなるお顏のつや、鼻筋は通り者なれど、どこやら通らぬ所もあればこそ、今日の目付の凛々しさ、こゝでは心も沖の石、人こそ知らね乾くまもなき、誰ぞが思ひ氣の通らぬお若衆様、しんき氣の毒よ、ほんに惚れました、花世殿取もちてといへどもそ知らぬ顏、こちの戀さへ埒あかぬに、よその戀取持など彌七様の手前もあれ、ナア左様ぢや御座んせぬか、先私がせんなれば、否か應かの返事を聞き、其後は兎も角も戀は互じや取持ましやう、惚れるといふて此様に、けうとう惚れるといふ事唐天竺にもあろふか、とても情をかけるなら、此女房にかけてやらいではと、打たり舞たり獨狂言、松が枝は腹を立て、惚たを手柄に申そふなら、遠い唐より手近くな日本國に、私程惚拔いたも又あろふか、今日見て今の思草、引手も許多多けれど、或は綠鬢猿眼、つり髭奴もみ髭奴、かんだと壁と年寄坏、玉章千束に餘れども、下さくな色には目もやらず、廣い家中でお前をば、一目見るより惚れ拔た、底の心は知らぬ其、つい應といふお返事を、サア〳〵今といふ所へ、奥よ

獨寢の淋しき夜半の物思ひ、忘れもやらぬ戀衣、現にも只彼人の目にちらつくも色の道、小森幸右衛門の娘おかんと云へるは今年廿五、器量風俗廣い家中に指折る程の濡者しな者、ほつそりとして柳腰肉ふとからず痩もせず、鼻筋頸筋目のはり、爵には任めど氣も洒落、都の風儀おのづからまなびしかど、此年迄縁付遲かりしは、十五六より色を好み男ゑらみのせゝりばし、ある年一家の意見に恥ぢ、御城下歷々の町人へ嫁せしに、不縁にてやありけん程なく親里へ返りぬ、それより方々云入あるといへども取敢えず、盛の花を散す折から、御前の能を見物し、其場より軍次郎に思ひそめ、うつら〳〵と心も爰にあらばこそ、たよりを求ぬ文してくどかんと、出入の小間物屋市六といふを頼み、文のかず〳〵通はせしに、折もあらばの返事いつ之は逢ふ事の折もあるや、さりとは果のなき日を數へ、夏の夜も長う覺へ何とやらんうか〳〵と、斯ては命の程も覺束なし、せめて大社に詣で、妹脊の神に誓ひなば、いかで利生のなからんと、心安き下女出入の男を賴み大社に詣でける、折柄の御縁日、近在近國の老若袖を連ね參詣す、途すがらの藝者物

り局立出、二人の衆は何してじや、御口上の趣申渡されなば早歸られ召しますと、いはれて二人の女郎衆は、月に村雲花世に風、逢ふ夜をやがて松が枝も、あいと答を名殘にて姿は奥に隱れ入る、跡には局只一人兩人の側に寄り、各〻は卒爾、御法度は嚴しきお家、假にも女中と戯れ、若役人衆のお耳に立たば、悔むと甲斐はあるまじ、疾く〳〵屋敷へ下り、御褒美の品々御一家方へ御披露あれ、如何樣これは我々が不調法、お暇申さ打連歸らんとせしを、局軍次郎が袖を控へ、か樣に申も何とやら法界悋氣らしけれど、惣じての若い衆年寄は禁物にて、あたりほとりへ寄せ付けぬ、心にさへ從へば來世は舍利々々佛となる、若し承引なき時は身の果如何に覺束なし、それでもいやかと取付けば、兩人目と目を見合せ、如何に佛になればとて、お前にヲヽとは得こそ申まじ、身の果惡しくばそれからそれまで、ゆるりとそれにと迯て行、待おれ軍次の戀知らず、どうで祿には果おるまいと、苦口のある程年はひねても此道の、思ひは誰も同じ事、アノまんがちな老ばれ〳〵、

（二）出雲の大御やしろ

賣群集をなせば、田舎には珍しく善悪共に喜び、家路に歸るを忘れ面々氣を張つての見物、爰かしこには酒肴うどんそば切、れんがく茶屋こそ奥深にして委の隱家、まづ爰に休み酒一つ飲でと奥に入らせければ、不思議や襖一重あなたには、軍次郎中間島介を相手に辨當開かせ、あいの押への旦那は御無理、最前から幾度かのあいに草臥まして御座ります、最早お許されませいと云ふ、尤なれ共差向ひの酒は無理なくしては飲れぬもの、眠も奉公といふ喩、其程にはあるまいぞ、特に此度の手柄、殿樣御前樣若殿樣より御褒美に預りしは、武士の冥加といふ者、あまり有難いまま此社に參詣する事、氏神の御利生汝も喜んでくれ、御意の通り此度のお能の義、尤彌七郎樣も御上手とは申ながら、申さば脇役、旦那には仕手殊の外出來申たやう御家中はこれ沙汰、骨柄はよし殿樣の御氣に入らないでなるべいか、拙者風情のお草履摑みまでにお心を付けられ、飲めの喰へのとはあんまり有がたくて、涙が目からほろますと少しは舌も縺るゝに、軍次郎可笑しく、如何樣やりはご酒に身も醉ふた、まだ日も高し、己も勝手へ參り少しの間伏せれ、身も暫く夢見て歸らんと枕引寄せ給へば、島介喜び表に入て高鼾、襖こなたのおかん一十(しじう)を聞き、心の內は早鐘のつく〴〵思案の廻らし、下女男を招き、そち立はアノ籠拔け讀賣なんど聞たいとやら、幸ひかな我草臥を休む內、心任せに見ておじやと、紙入より小まがね出しやりければ、夢に金拾ふた心地、德助ごされおいま殿、見て花をやろ嬉しやと、後先なしに飛で出、殘るはおかん只一人、どうしてかうして何とせんかたつき詰めた、女心のやるせなき襖をそろりと押あけ、軍次郎が枕許に立寄り、額をゆすり鼻つまみ、搖り起されて軍次郎、これはおかん樣何故の御出と、いふ口に袖をあて音高し人も聞く、何故來たとは胴慾な、兼ての文は何とよみ、折もあらばのお返事、かうした折が又あらうか、出雲の神の御引合せ、手短かいふ時は日頃の思ひ只今はらして下さるか、いやかおゝかの返事次第、わしやかくがふと云ふを聞き、先以て忝し、併し私の申事御聞屆有るべし、お前のお年は廿五私は十七、なまなかに馴染め末の屆ぬ色の道、濡ぬ先こそまじならめと思ふが故と答しかば、おかんは顏に紅葉して、すりや老女房でいやとの事か、それは世界

にあるならひ、いやでもおゝでも添はねばならぬといふ、いや何程仰せられても、一期と申御契約は得こそ申さじ、私こそお年の參りたるを合點なれ、お前の親達私の親共中々得心致すまい、然れば仇なる戯れ、只御許給はれと詞を放ち申にぞ、おかんは暫くさし俯き、御尤なるお詞そこを聞分ぬわしにもあらず、然らば一期は止めにして私の緣付するまで、お前の御內儀樣持たんすまで、折事の御情はあるまじや、其段は兎も角も一夜逢ふても千世の樂み、つきぬ思ひを今こゝで、はて人も見るお供の衆、歸られたらば如何せん、其氣遣ひはいらぬ者、お前もわしもめなしをなし、何恐しい事あらん、浮名が立たばそれからそれまで、命は露共思はぬと、もたれかゝれば岩木ならず、たつた一度じや今日ぎり、思ひきつて下されうか、はて嫁入する迄は女夫じやないか、必そうと〇〇〇、〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇夢の間の、契り朽ずば又とのみ、互に目と目を見合せ、溜息ほつとつくところに、島介目さまし咳拂ひ、すは、奴子めが目をあいたと、いふに驚き襖をあけ、元の所へ身をかくす、爰にから下女や下男、あらゆるところを見物し、サアお歸りと呼立る、そち達を待くたびれ、うつら〳〵と寢てのけた、さらばといへご彼人の、あとに殘るも氣戀り、先へ立つては跡見返り、見歸り本尊と拜む人、一町さがつて軍次郎、熊谷笠に下袴、草履取の島介、がいに御酒に給べ醉ひ、五躰なまけ兩脛ふんぞり、捌けた旦那御発十面、靜に〳〵お草臥ならお駕籠に召ませ、心得ましてごはります、いざお召なされて行方は何地行らん姿もなし、振り殘されし女郎花、君が姿を見失ひ、亂れて物を思へとや、我も駕籠にと夕暮方、いそいそとして歸りや〳〵、

（三）嫁入のぎしき

已にその年もくれ羽鳥、翼なければ逢ふ事の、絕て再び顏見る事もなかりき、月日の立に隨ひ、深き戀路も次第に淺々しくなりぬ、誠に去る者は疎しといふにぞあらん、家中の內に村上宗知といへる茶道役、小森幸右衛門方へ來り密に內談の旨申入、奥の一間に通り只二人差向ひの物語、餘の儀にあらず拙者同役玉井宗義事今年迄やもめずみ、方々より緣組申來れども、有やいやにして思ふはならず、其上器量を好む男にて、彼是相談成難し、某も一家の事何卒宜しき事も

さ、内々存じ寄るは外にあらず、貴殿の息女おかん殿器量發明年の頃、すつて附けたる縁組、御同心もあらば某中に入り宜しく計ひ申さん、先以て御心にかけられ忝き御心底、宗義殿の儀兼々所存も知合ひ、殊に筋目さ申いづれに愚ならねざ、娘が儀當年迄何方へも嫁せぬ我儘者、さればさて年長けたる者を打擲もならず、今日迄手前に置事、家中の思はく如何なれざも、縁づくなれば是非もなし、きやつめに様子を尋ねその上にて御返事を仕らんさ、あらまし契約して宗知に歸りぬ、その後幸右衛門、おかん彌七郎を招き右の趣語りければ、彌七郎は然るべき御相談珍重に存ずるの返答、おかんは何のいらへもなく差俯いて居たりぬ、幸右衛門眼に角を立て、母なきやつさ我儘に育ておけば勝にのり、諸事目に餘る事あれざ、さても内にはおけぬ者、今少しさ心計の了簡仇さなれり、一たび縁につきしかざ、氣隨より家出をし、その年まで親の手に入こさ、世間の評判いか許りさ思ふ、背之幸抱なき故なり、但一代後家にて濟す事や、今いふ宗義は、茶道役とはいひながら殿様の御氣に入り、仁躰さいひ家さいひ、年頃も相應、返答により成る成らざれの返事、宗知方へ申遣す間、篤さ思案のきはめさ荒げなくいひけるに、あやまりました、何がさてお詞に從ひお心休め申さん、宜しき様にさいふより、さあ埒が明たさ宗知方へ云入れしかば、宗知喜び宗義方へ右の首尾を語り、取る物も取敢ず吉日改め、頼みの祝儀を遣しければ、善は急げさ宗義方へおかんを遣し、夫婦の盃千代を重ね、婿入舅入五日歸りお部屋見舞、兩家の門前市をなし、一家の喜び毎日の振舞、三國一じや婿に取り濟したも事終り、おかんは早懷胎し酢い者を好むより、目出度い事を重ね月、帶の祝ひ、高い所へ手を擧げな、足を伸して寢る事なし、くさい物はくわぬもの、酢の蒟蒻のさいふ内、當る月になれば目出度ふ産の紐を解く、娘にして名をおよそさ付け、宗義夫婦寵愛のあまり、お乳をさりて育てけるに、ほざなく又懷胎し、三年目の六月に男子を産めり、別して宗義の悦び外ならず、いつ迄も堅固なるやうにさ鐵太郎さ名を付、これにも乳母をさり養育させけり、昨日さ暮れ今日さ立ち、月日の數も矢を射る如く、姉よそ十一歳鐵太郎九歳の春、大守江戸御參覲の御供仰付られ、宗義畏奉り僕に旅の用意兎や角する内、日限

仰出され、一家中立振舞とて舅小森幸右衛門子息彌七郎宗知を初め、皆々宗義方へ呼び、此度江戸勤の事たしか二三年は逗留仕るべし、永々の留守萬端幸右衛門殿御親子宗知殿をお頼申、世悴共は幼少殊に鐵太郎儀宜しく御引廻しなされ、兵法稽古は池田軍次殿へ頼み置候、茶の湯は宗知殿の御指南、手跡は彌七郎殿、諸禮萬事は孰れも御相談の上よろしく頼み奉る、女共淋しき折毎には、幸右衛門殿宗知殿方へ參り憂をも晴さるべし、姉が事御家中の內磯妙貞を頼み手習致さすべし、留守の儀譜代の武介年寄たるにより、內外の見まつべきつと申付たり、不屆あらば許さぬとは、永々の御留守拙者に諸事をまかなへとは有がたいお詞なれど、年罷寄り物覺なく耳も少は聞へず、心一杯愚には仕るまじと手を束ね申所へ、はやお立と呼立る、いづれもさらば、委細は書中にて申上げん、乳母共子供粗略致すなと立出る、皆々門迄送出で互に御無事の詰開き、其折節軍次郎暇乞の爲來りしが、門外にて出合、只今の御立、諸事仰置れし段一々相心得候、御心安く思召、道中御堅固に御着と互に一禮事終り、乘掛馬にゆらりと乘る、鐵太郎跡につきと

と様さらば土産は何ぞ、宇津山のとう團子日坂の蕨餅桑名の名物焼き蛤、口をあいたる憂身の上、後にぞ思ひ知られけり、

亂脛三本鎗一之卷終

亂脛三本鑓卷之二

(四)戀の元しのび

やがてと別れし夫の旅立、昨日と暮れ今日と過ぎ、はや一とせの春も過ぎ、三人の子の愛らしきを見るに付け、男のいとしきも子のなき內が花ぞかし、姉よそ妹くめは妙貞世話にて、一筆申まゐらせ候の手本も數をあげ、弟鐵太郎は茶の湯兵法に身をやつし、夜に入れば同じ頃なる友達を集め、袱紗茶巾の取捌き、人には負けじと稽古する、母立出鐵太郎が手前をながめ心よげに打笑、夜食なんどもてなし、宗義殿歸られなばさぞ嬉しからめ、隨分精出し給へといふ折ふし、家來の武介罷出、軍次樣の御見舞と申、それ通しませといふより早、軍次奥に通れば女房挨拶了り、幸の御出鐵太郎が手前にてお茶上げましや。あいと答へ差出す、軍次推戴き、宗義殿にはあやかり者、御器量骨柄お仕合哉といふ所へ、子供衆のお迎といふよりはや、お暇申し面々宅に歸らるれば、續いて軍次も立袖を女房引留め、鐵太郎兵法の稽古仕るとのみにて、竹刀の持樣見もやらず、今宵の御出幸なれば、ちよつと見せて下さるべしと望まるゝに、是非なく武介を呼び、鐵太郎のお合手仕れと云ければ、畏りて武介、これ若旦那拙者がお合手仕る、御容赦なく心のまゝ打伏せられよ、鐵太郎悦び、圭なればさて容赦すなと互に詞をかけ合、二三度四五度打合しが、隙を窺ひ鐵太郎、武介が肩先散々に打ければ、起もやらずかうべを疊に付て居たりぬ、軍次郎立寄り何程打ればとて所を去らぬは何事ぞ、さん候だき抱へしは昨日今日、年を重ねさせ給ひ兵法も人並の御稽古、旦那お歸りなされ嘸お悅びなされんと、嬉し淚がこぼれましたとしほらしい一言、譜代のしるしとおかん軍次も貰ひ泣き、暫くして女房、か程目出たい事のあらんか、鐵太郎が竹刀打の見初め、そちを打たも軍次樣のお影、それ御酒上げましやといふよりはや盃銚子、まづ其れからお前から、然らば夜酒と申亭主方、鐵太郎取上げ軍次へさす、憚りながらおかん樣へとさしけるを、爰はちよつと押へませう、然らば武介あいしてくれ、畏まり推戴きずつと乾せば、潔き飮口、とてもの事に二つ三つ重ね〲とは、下地は好きなり御意はよし如何樣其

仕らんと、續けて三獻ほし軍次に戻す、ちやうど受けておかんにさせば一つ飲で軍次方へ戻す、お前の眞假なれど受は又押へずば、然らば此あい鐵太郎畏り母方へ戻す、一つ受けて軍次にさせば武介にさす、忝しと引受け〳〵飲む程に、荐りに醉て舌廻らず、鐵太郎も醉けるにや、か〻樣いかう寢むうござります、ぶしつけながら臥せりましよ、軍次郎樣もそつとお遊なされてござりませと、禮儀細かに奧の一間に入けるにぞ、武介も次第にねむく行儀も崩れけるを、女房氣の毒に思ひ、そちも勝手へいて休め、いえ〳〵お咄申ませうといへども、ふらつく躰見るも氣の毒はや立てと叱られ、わるい事聞くにあらねば、軍次樣早お歸りなされましよ、私暫くすいめんのぎよふう〳〵と、千鳥足にておのが部屋に入りぬ、勝手には下女共餘念なく寢入る、女房軍次差向い、おかんも酒廻りたるにや、又しても前ほがらかに、脛の白きをちらりほらりと見ゆるにぞ、軍次も今は怺へ兼ね、これ申おかん樣、昨日今日とは申せどもはや一昔となりぬ、社詣での首尾今に忘れぬ面影、次第に美しう何がうまいやら肉も付き、くつきりと色白に、宗義殿と緣の行合いけるにや、子供衆も三人まで出生す、わたしは今に鰥住み、馴れし昔をお忘れなされたかといふ、女房酒に醉たるにや舌もしどろに、何いはんす幼馴染といふもの忘らはる〻物かは、その時のお詞には、老女房じや何んのかのと人に計り世話やかし、如何さま氣の強い男ではあつた、わしがお前の女房にならば是の裏の飯粒で、しんから底からいとしがらふに、移れば變る人心と、いふ手を執れば放しもやらず、これ人が見る、今では宗義殿といふ大切な男のあるは合點じや、そこを存じながら不義を申かくるはよく〳〵と思召せ、いやそれはお侍の一言が違ひます、いつぞやお目にか〻りし時、たつた一度ならばとある無下な詞を聞ても、思ひ切られぬ色故に仇な枕をかはし、その座を限り思切り、それよりこれへ參りました、殊に人目もあるぞかし、はやお歸りといふ詞に取付き、されば一度で思切つて下されといふたは嘘の誠、それを飜しか樣の事を申は、よく〳〵愛念深き中ぞかし、侍の大事を云出し、叶はねばとて無下には歸られぬ、所存を極め申上は、是非あふてもらはねば〇〇〇〇を突放し、何程仰られてもふつ〳〵叶はぬ事、夜

の更けぬ内はやお歸りといふ、實正なりませぬか、はてくどい、よし〳〵これまでと太刀引提げ、子供が一間に入らんとするを引留め、いづくへござるぞ、軍次聞て、叶はねばとてすご〳〵歸り、もし此事の風聞あらば犬死するより外なし、重ねて死なん命鐵太郎を刺殺し、こなたも打て某腹切るまでの事、放し給へと馳出る、女房縋り差俯き、それ程思ふて下さるか、その御心底無下にはすまじ、しかし二度とは成ませぬ、一度で思切つて下されうならともかくも、とは誠か、何の僞りをいはふぞ、まづ以て忝い、しからば合ふたも同前、此座切思ひきりました、さらばといふを引留め、いやそれはなりますまい、主有る女をおごし今更思切つたとは、わしが名を立ん謀が、但しは宗義殿に賴まれ所存を探り見るためか、詞で落たも肌を觸れしも同じ事、合はねば心が濟ぬぞと、中々放す氣色なし、軍次悅びしからば只今首尾もよし、さあ此方へと手を取て、しよえん先へ行くと思へばもだ〳〵と、心も消ゆる身も消ゆる、命をかけてといふ戀は、此ためしかと思はるゝ、兩人顏を見合まづ歸らんといふ折ふし、武介目さまし大あくび、軍次を見付け目に角立て、未お歸りなされぬか、女義一人ござる所御遠慮あるべき事といはれて、女房、軍次樣はお腹痛みお歸りまにと答へしかば、左樣の事も無遠慮お前さまも無遠慮と、しかつべらしき顏底氣味わるく、手持無沙汰にさらば〳〵、

（五）間男のうみだめ

七人の子はなすとも女に心許すなとは、如何なる人や言ひけん其如く、おかん三人の子を持ながら、軍次と馴れそめ、一度で思ひ切る、二度でぷつゝりやめます、三度あふては又あひとふ、四度目にはまゝよ濡れぬさきこそ露をも厭へが高じてお腹に物いひ、俄に月水流し子下ろしの有程賴みをかくれど、非道の戀慕因果のはろぬき、いかな〳〵聾程もきかず、次第に月かさなれば、納戸に引込つかへ氣癪といひなし、見舞の人にも逢ふ事の、絕へて仕樣もあらざりき、其折ふし宗義より近日殿樣御入國、よつて某も御供申くだるとの文、見るとひとしく胸せまり、いかゞと案ずる所へ、軍次來るを幸ひ右の趣語り、所詮生きのびる命にあらねば、一向刺殺して給はれと只管に賴みしかば、軍次つく〳〵思案し、いやむざと死ぬる所にあ

らず、命こそ物種密に國を立のき、二人共に隱れおほせぬ事あらじ、もし天命盡き見顯はされなば、そこを最後と定め潔く死すべし、それまで長らへあふならば又あるまじき樂み、死ぬるを高と分別し、そもじもわれも身の貯へ命限り足限り、行先々に鬼もなし、此國ばかり日は照らず、上方は知るべもあり、片時も早く御覺悟と勸むるに、返答なく涙を流し、心からとは申ながら、子中なしたる目を掠めし、天罰遁るゝに所なし、御身樣の事は若いともいふべきが、親とも云ふべき身を持かゝる惡名、親兄弟子供の思はん所もはづかし、よし何事無きにして不義をせし此身、添果ててから面白からず、子供の成人するに付いよ／＼心耻かしからん、とても冥利に盡きたる此身、密に立のき淵川へも身を亡きものと、思ひつめては有ながら、子供が戀慕はんこそ不便なれ、是迄の親子と思ひ、立のく日を命日と定め、思出さん折毎には、一遍の回向を頼むぞ、又宗義殿のお心には刻んでも飽足まじ、なれども前世の約束、畜生にも劣りたると御了簡下さるべし、差當つての後悔、取返されぬ戀慕の絆、切ても切れぬ因果の塊、許し給へと軍次が膝に靠れ。聲をも立ず歎く聲、武介聞くより差足し、納戸の此方より覗き、あつと云たる口ふさぎもやらず、打て捨んと思ひしが、いや／＼卒爾をせば奥樣生きてはござるまい、しかる時には子立の歎、旦那上られ出かしたといはれふや、外聞失はせけるとて、反つて窮命致されんも知らず、某が心一つに藏むれば、浪風立たず濟む事と了簡一圖に極め、何となく咳拂して音なひければ、兩人驚き兎角は最前示合せし如く、今宵七つの頃と頷き軍次は舘に歸りぬ、武介は素知らぬ躰おかんが前に畏り、御氣色はいかゞ、旦那も近日御上りの由、荷物も段々先立て參る所に、いつも痞（つかへ）の癪のと仰せられ、一圓お藥も參らぬは作病と申もの、御見舞の衆中幾多ある中にも、お逢なさるゝは軍次樣斗り、これ又不埒の御身持、尤内外お頼み置きの軍次樣事、疑ひ申にあらねどお見舞毎に夜も更け、下々とても滿足には存ぜず、武士の魂も時によりては變るもの、重ねてお出なさるゝ共お傍近くへは御無用、何分お藥上りませと殊に取ませ申ければ、おかんはつと思ひしが、わざと詞を荒らげ、推參なる今の一言、今いふ所は軍次殿と不義も有やうの言ひ分、假初ながら小林

幸右衛門が娘宗義が妻、今一言いふて見よ手打にするとのゝめく、武介罷出、これ奥様不義と存ずれば許しは仕らぬ、なれども色といふものは分別の外の無分別、此道かうじて浮名と恥を洒されし者まゝ多く、私譜代として年來白紙一枚違へぬ男、事起りてはお爲にあらず、燒鳥にも何とやら、今申所がお耳に立、お手討と有るからは違背申に及ばず、然し此段を御親父幸右衛様彌七郎様へ申、理非を正されての上御存分になり申さん、篤と御思案あるべしと云捨て部屋に歸りしかば、討にも打れず、此事の明日まで延びなば如何なる詮議にもあふべし、今宵の内に立のかんとは思へども、子供が名殘り別れの涙こぼるゝ袖にかくし、さらば〳〵といふ折柄、七つの鐘のうつゝなや、裏門の邊りにて手拍子二三度打つ音す、すは時こそとそつと出、かきがねはづせば軍次手を取り、首尾はと問へど物云はず、しく〳〵泣いて濟まぬ事、今何程悔めばとて歸らぬ昔、とても二人はあの世の者、時刻移して悪からんと、手を取組んで行程に、はや二三里も程ある内、武介俄かに胸騒ぎ、手燭引さげ爰かしこ、見れば裏の戸開けて有、只事ならじと奥に入、おく様かん様と尋ね廻れど姿はなし、いよ〳〵不義に極り、立のがれしにまがひなし、追かけんとは思へども、三人の子を棄てゝ行、鬼にも勝る心柄留むるは僻事、某旦那のめがねにて永々の留守を預り、これ程の儀存せぬなどゝの言譯立まじ、速に腹を切り浮世の暇を貰はんと、所存の通り書置認め、六十二歳は夢の間の、露と消へゆく名殘惜しさよ、

(六)門前の狂歌

夜明けて一家、武介が死骸を見るより驚き騒ぎ、幸右衛門方へ訴へしかば、小林父子駈付け、まづ書置を讀む、何々、

一、私幼少より御手廻りに召仕はれ、當年六十二歳迄何の御用にも立ず、年來無念に奉存候處に、旦那江戸詰御留守の儀仰付られ、是迄の面目と油斷なく相守候處、此頃奥様御病氣之由御見舞の衆中にも堅く御對面無之候、御近所迄御通りなされ候は池田軍次様ばかり、不思議に存夜前病氣の様子御尋申、是非御藥を召上られ候やうに申、其上にて二つ三つ御意見がましき事申上候得ば、御心に當り手討にもなさるべき御氣色、御心任せに成べき心底に候へ共、一通り

御兩所樣へ御物語仕り、その上は兎も角もと存候內いづく共なく見へさせ給はず、追手を掛くるに及ばず、私の不調法申上げたるよりかやうの儀出來仕候、近日旦那御歸りなされ御詮議の上一言の返答も無之候故相果申候、只今迄の御恩生々世々忘れ難く忝奉存候、私か樣に成候儀奥樣御聞なされ候はゞ、早速御歸りなされ候儀可有候、左樣にもなれかしと願ひ奉り候以上、

月　日　　　武　介

小林幸右衛門樣
同名　彌七郎樣

幸右衛門始終を聞き何と思ふ彌七郎、此書置はのみこまず、娘方よりは氣づかへ癪にて、人挨拶もむづかしなど云ひ越す故、その方に限り見舞の人も止めをきしに、軍次ばかり見舞ふ事武介が不審尤なり、意見をするが惜しさて宗義の留守を預りながら家出をせしは心得ず、若し亂心して出たる事もあらん、扨又武介主人を見失ひ尋るに及ばぬと書き、自害せしは前後揃はぬ事共と眉を顰め居る所へ、軍次を尋ねに來る者追々、彌七郎軍次が家來を招き、其方旦那はいつ頃より出られしぞ、さん候夜前より見へ給はず、方々尋ね候へども未だ在家知れずと云ひ捨歸りし跡へ、宗知來り、軍次逐電の由又おかん殿も見へぬといふ風聞心ならず、樣子如何にと尋ねしかば、包むに及ばずおかんが欠落武介が最後くはしく語り、扨は兩人が不義を武介に見付られ連立のきしに紛れなし、追かけ搦め來れとひしめく、宗知押止め追手かくるに及ばず、不義に極りなば宗義が了簡次第、まづは一國の騒ぎ無用たるべしと、達て止むるに是非なく、まづ武介が死骸を取置き、下々にも此沙汰穩便に仕れと固くいひ付、三人の子供には母が病氣しか〴〵なき故、養生のため有馬へ湯治に參りしと僞り、宗義の歸國今や遲しと待居たりぬ、一日延び二日目の暮方宗義目出たく屋形に歸りぬ、幸右衛門宗知彌七を初め、先は御堅固にて珍重千萬と互の禮義事終りぬ、暫くして宗義女共はと尋ねしかば、幸右衛門罷出、おかんが儀は何共申難しと、いふより押肌ぬぎ腹を切らんとする所を宗知押止め、こはいつきやう切らしはせじと取付く、續いて彌七郎某とてもながらへじと同じく腹を切らんとす、宗義押止め、我久々にて上り未

落付かざる內、御親子一所に死なんとは心得ず、是非御生害に極りなば、御介錯は婿の役他人の手には掛けさせまじ、先は止まり給へと制しられ、其婿といふ詞を聞くも恥しながら申さねば濟まぬ事、近頃面目も無き仕合、かやう〳〵の次第と武介が書置、軍次おかんが逐電の樣子細々語り、親子が心底御推量下されなば、こゝを放して給べと手を合し拜みける、宗義段々聞屆け、御兩人の心底尤ながら、二人三人の子を成したる中、よも不義がましき事はあるまじ、折惡しく軍次欠落の夜なれば左樣に思召すは尤なれど、軍次に限り左樣の不埒すべき男にあらず、殊に拙者が姉娘を彼とめあはす契約もいたし置けば、我々夫婦は親同前、定めし樣子こそあらめ、必ず早まり給ふなと、少しも驚く氣色無くさあらぬ躰に挨拶す、小林親子返答無く差俯いて居たりぬ、宗知重て、長の道中勞れ給はんまづ御休息あるべし、それ〳〵小供お供申せ我々も一宿せんと銘々一間に入りぬ、明れば門の戶に怪しき物こそ書付たり、家來これを取り宗義に奉る、讀で見れば、何々、

江戶土產密男のうみだめ結ぼをれ
解くにとかれぬ判じものかな

と書きたり、宗義つく〴〵眺め、家中に不義の沙汰あればこそ、斯る狂歌を詠で我に知らすと見へたり、最前各々申されし事共不義とは心に徹しながら、三人までの子の親、惜き餘り却て不便に存ずる故、心の內にはまゝよと了簡せし所に、此如く露顯に及ぶの上は、尋ね出し討て本意を遂せねば、武士の家名廢るの道理、身躰茲に谷りぬれば、右の段申上げ御暇願ひ尋ねに出づべし、然る上は宗知殿へは鐵太郞を預け申、又姉妹は幸右衞門殿へ預け申、御兩人共に御介抱賴み奉ると云へば、兩人詞を揃へ、子供の儀は我々預り申うへ心安く思召せと互に固く契約し、明るを遲しと待つも久し〳〵、

（七）うつゝのかけ橋

家中城下の評判軍次が不義に極り、おかんを連れ上方へ上りし風聞、聞くより宗義あるにもあられず、右の段家老中へ訴へ暇を申うけ、路銀の用意一家の名殘り、天運に叶ひ首尾よく討おほせば、再びお目に掛るべし、若し反り討に合ひなば、今日を命日と定め一遍の御回向賴み奉る、悴共が行末宜く御計らひ給は

れと懇に暇乞、まづ大坂へと心ざし、夜を日に續で七月十三日の朝大坂北濱に着きたり、すぐに藏屋敷生田城之介に對面し身の上を語り、軍次事當地に罷在る由承り上り候、今日よりうち立方々尋ね、いづ方にても見付次第本望を遂し度候故、御斷の爲參上仕りぬ、城之介聞屆け、不慮の儀出來仕り御心底察し奉りぬ、先達而家老中より書中に申來り候上は御心任せになさるべし、忝仕合と已に立んとせし所へ彌七郎來り、城之介宗義に對面し、互の屆け終つて後、私此度上り候事、姉が不義に付宗義殿の手前、親幸右衞門初め私とても一分立たず、因て軍次姉當地に隱れ居るよし、何卒兩人を討て出し宗義殿への申譯、且は家名の恥辱を雪ぎ度所存、御聞屆下さるべしと申ける、城之介聞き御父子の憤り尤なれ共、その願叶ふまじ、子細は、弟の身として姉を討たるためしを聞かず、殊に御國より何の樣子もうけ給はらねば、私の了簡にも成り難し、宗義殿の儀は御家老中より申來らし故帳面にも記るせり、貴殿望みは叶ひ難き由、彌七郎承り、御詞を返すは如何なれ共、御了簡の上せめて助太刀なり共御赦願奉ると達て申ければ、宗義罷出、御志滿足せり、御兩所を疑申す心底なれば悴共は預け申さぬ、助太刀なされし同前早々國へ御下り、いや歸りては分立たずと互にせり合ひけるを、城之介中に入、彌七郎殿も遙々上られたる所、某了簡するにはあらねど、助太刀の儀は宗義殿心任せ、まづ御歸り、有難しと、屋敷を立て旅宿は天滿老松町に座敷を借り、毎日芝居生玉天王寺住吉堺、其外寺々町々小路裏々まで、つけねろふこそ怪しけれ、かくとは知らず軍次おかん諸共、上町邊のしるべを頼み、やう／＼浮身を隱家の、ねずみは知らねど彌七郎、かね／＼軍次が遁れぬ者上町邊に有よし、只一人尋ね來り近所の者を招き、國本より小林彌七郎上りたり、直に物語り仕度仔細言入しかば、軍次遁れぬ所と覺悟極め、先おかんを外へ忍ばせ奥に通し、討たば突かんと鯉口くつろげ、對面の上にて申けるは、思案の外の誤り前非を悔いて歸らぬ仕合、近頃面目も無き次第、して只今の御尋ねは御存分を遂げらるべき御出か、拙者國元を立のくより生延ぶる心底なければ、思召す儘に御計らひ候へと潔き挨拶、彌七郎聞推量尤、其節は追かけ恨みの及を立べき心底なれども、母たる人姉が身の上を

歎き、三人の子供も有事何卒身をもかくし、命全うあれかしと只管歎かるゝ、折節宗義討手に上ると聞き、見へ隠に上り、いづ方へも立のかせてくれよとの仰により、夜を日につゐで駈付けたり、兎角當地に足を留むるは虎の尾を踏む心地、何卒思案あるべし、扨おかん殿はと尋しかば、笛吹頭を疊に付御心ざし滿足せり、よも左様の了簡とは存せぬ所思ひもよらぬ御恩、此上は宜く御指圖をなし給はれ、おかん殿の儀今宵はさる方へ參られたり、歸られなば様子を語り悦ばせん、しからば御暇申と言捨て歸りぬ、明くれば七月十七日の暮方彌七郎又來り、今朝宗義當地へ着、然る上は此地に居られまじ、今宵夜舟にて京都へ上り給へ、某知るべもあれば同道せん、早疾く用意と勸むるに、尤と云ふより早く身拵へ、わざと暮方より旅宿を出八軒家まで來りしが、上り船一艘も皆出たり、餘り考へ過ぎ遲かりしぞ、明晩に仕らんいざ歸らんと濱づたひ、高麗橋にさしかゝり、欄干にもたれ暑さを凌ぎ居る所に、いづくよりかは宗義つと出、見忘れたるか軍次、妻敵覺悟といふより早打かくる、心得たりと拔合せ、受けんとせし右の腕を打落され、逃んとせしを後より大袈裟に切付られ、橋上にたをれ伏す、女房驚き橋詰なる床の後に隠れ居る、宗義追つかけ爰かしこを尋ね、打もらしぬる口惜しさと又引返し、軍次が上に乘りかゝり留めを刺しのきけるが、軍次が刀を踏付足の裏をかきたちぐ〳〵さする折節、女房濱より這ひ上り西の方へ逃んとす、弟彌七郎向ふに立ち、卑怯なり姉人、是程の大事を仕出しいづくへ逃んと思はるゝ、御身の心一つにて我々親子は朋輩家中の笑はれ者、何卒討取らん計り事、軍次がゆかり當地に有事某より外知る者無し、それを便りに兩人をたばかり、まんまと是迄おびき出し、宗義も本望遂せしなり、御身も逃れぬ覺悟と、云ふを聞くより返答なく、東の方へ逃んとす、宗義見るより嬉しく飛かゝり、大袈裟にこそ切たりぬ、すは荒れ者遁さじと、棒引提げ駈け出づる、宗義大音上げ、これ〳〵町人りやうじすな、妻敵討にて昨日番所へも訴へ置けば騒ぐ事なし、是より屋敷へ參り本意を遂げたる由申上、御検使受けて參らん、そこ開かれよと心靜に行くかと思へば、検使の役人宗義同道にて橋上に立ならび、様子を見屆け、あつはれなる御手柄、百姓共宗義を介抱し老松

町の旅宿へ屆け、足の疵をも養生致させと念頃に申べし、兩人が死骸は吉原に取置くべしと仰付られ、役所に歸らせ給ひぬ、誠に武士の憤りお手柄々々、てんから〳〵と樽太皷、片端し家並繪草紙かな物諸國のみやげ、いさぎよき物語の種とはなりぬ、

密男　池田軍次　廿四歲　壬戌の歲

大袈裟右のかいなを切落され、左の肱尻削げて骨出る疵三ヶ所、眉間疵二所、留めあり、

帷子縮立島、帶紫縮緬、金もうる紙入、脇差越前國下坂國綱長さ一尺七寸五分金拵へ、

女房　おかん　三十六歲　甲戌の歲

背中に大疵二ヶ所、其外小疵、留めあり、

帷子下に白帷子、上は光琳の梅立木墨繪桔梗入、帶花色綸子、白縮緬の抱え帶、鼈甲の丸櫛、紫縮緬の帽子、

玉井宗義　四十八歲　庚戌の歲

右三人十二違にて三人共に戌の年、不思議と云ふもあまり、一犬吠ゆれば百犬さいふに、三犬揃ひ花々敷事、三ヶの津は云に及ばずこれのみの評判、

亂脛三本鑓二之卷終

亂脛三本鑓三之卷

(一)作州津山の沙汰

其頃作州津山の家中に小出重左衞門といへる侍有、大守によく勤むる事愚ならず、其年は三十あまり、骨柄といひ武藝を專らとし、非番にも油斷なく家來を相手にして兵法弓馬を營み、勝負は時の運なれば主從の遠慮仕るなと、稽古場の向ふに制札を立て置、暫くも休日無く愛をせんと勵む、尤古參新參の朋友と立合稽古あるべき事ながら、若し勝負の爭ひに因て一命終る事そのためし多ければ、扶持せらるゝ主君の御役にも立たず、私の意趣にて身體果す事皆一心のなす所、他を除いて下人まじりの武藝を勵むに、たとへ勝ち負あればとて聊意趣有るまじきと、扶持する所の者共斗り招き、心のまゝに稽古するは尤あるべき事ぞかし、然れども重左衞門はまだ妻無し千鳥、寐ざめ淋しきあまり、同家中富永助右衞門が娘おしゆんと云ふを迎へとり、互に替はす新枕變るな變らじの睦言、今や比翼の契り偕老同穴とや云はん、其折

節殿より急に召さるゝの使者、何事かはと登城し其儘屋形に歸りぬ、女房迎ひに出、けわしき御用如何なる事やと詩ねしかば、重左衞門聞き、いや餘の儀にあらず、明朝打立江戸に下り、用事相調へ下るべき旨仰付られ、相役淺田久右衞門同道にて罷り下る、其方儀嫁して未一月もたゝざる事、留守せられんも如何なれば、我れ下る頃までは里に歸り給へと、しか〴〵の事共言置きぬ、おしゆん聞き、世に武士程きをひおくれする事無し、やう〳〵此屋敷に來り廿日餘りの添ひぶし、語りたい事も百に一つ云ふて、九十九殘るを誰に語りて樂まん、されど共侍のならひ、隨分御無事に道中も靜に怪我無きやうにといふ內、相役久右衞門使として御揃へよくば御同道仕らんとの事、只今仕度の時節少々御待久しからん、暫く御立入御休息下さるべしと互に慇懃なる挨拶、然らば町はづれ並木の松原にて相待申さんと云捨打て通る、重左衞門後れじと暇乞そこ〳〵に華やかに出立、隨分御無事息才にと立別れ行くその跡は、お留守見舞の何のかのと、五日立十日立はや一月に及べり、同家中に倉橋藤九郎と云ふ者あり、生れ付田夫にして情の道に疎く、武藝も我儘に稽古し、出合の挨拶も表向一通りにて込入りたる事なし、然れども剛力たる扶持を取り、榮耀のにもなるべきやと、分より過たる扶持を取り、榮耀のあまり餅の皮むく喩、元來色深く衆道女道の嫌ひなく、當るを幸ひ爰彼所にて喰散し、間なく孕み代を出して濟ましけんを以て埒明くるも有り、何時しか此惡性のふつ〳〵止みける事、富永助右衞門娘おしゆんを見染め、何卒我手に入れ千代も重て結ぶえにしを待ち、直談にて助右衞門に貰ひ掛ると雖も、先約なれば重左衞門方へ取られ、是非なく月夜に叶はぬ事くど〳〵思煩ひしが、重左衞門江戸に下りしと聞くより嬉しく、胸の痞も退き頭痛も自らなをりにけりないたづら物、主ある花も折れば折ると楊枝を丈木にとりなし、おのれやれ此留守を幸ひ日頃の思を晴し、せめて盃なりとせずんば男にはあるまじと、無體の道を一筋に或時重左衞門舘に來り、久々の御留守にて淋しくおはさん、若し便りも有らば此文を屆け給はれ、朋輩數多有る中にも別して睦しく語る事、せめて筆にてなりと無事を尋ねん、將又留守中何にても御用あらば遠慮なく仰せ越さるべし、夫々と下人

に持たせる提重取寄せ、これは是某が手づまにて拵へたる肴、無下に開かんも殘念故、御見舞の爲め持參致し、封を切り一献づゝたべ、御親父助右衞門殿へ贈らるべし、しかし此提重の中に子細こそ候へ、手づから御開き候へと差出す、おしゆん聞、先以御志の程忝し、去りながら主の留守と申、殊に一人の下女も使ひに遣りぬ、彼是卒爾に盃いたし人の噂になりなば、大切な方樣を笑はせ、又私も何とやらしければ先御へんしん申ます、御文は明日の飛脚に遣しませんと戴いて戾せば、藤九郞聞、いかに重左衞門殿の與樣になりたればとてあんまり堅い挨拶、云ふてみた時は此藤九郞が戀渡りしは先約なれど、少しの無念にて重左衞門方へ緣に付かれたは此方の不仕合、幾く慕へばとて人の內儀となられし方樣に、二念つぐ男にあらず、殊に重左衞門殿と懇意の中更に屈託なし、然れ共志は木の葉とやら、是非々々開き一つは賞翫あれかしと、いふに是非無く口を開けば、內に掛物を仕込たり、不思議に思ひよく見れば七十許の禪門、六十許りの老女を描き、裏には倉橋藤九郞一念發起仕候、再び此戀慕ふに於ては、目の當り兩親の御罸を蒙らん、今月今日と記るせり、おしゆんは愈心得ず、此うつわの內に誰人かは存ぜねど、二人の像を込られしいわれはと尋ねられ、さん候、我年來そもじを慕ひ、夢現にも忘らるゝ事なく、思切らんと思ふ程猶忘られぬ面影、立居苦しき身となりぬ、何卒思切らん事を思案し、あはれ兩親の像に願を込めなば、思切る事もあるべしと、此間日に七度のこりを取り、思切る瀨を祈るに甲斐あり、四五日以前よりそろ〳〵忘、我れと得心する事親の慈悲、今日を限り深く思切つたるの證據、是程迄子は不便なる物か、假にも思はゞ兩親共に無限地獄に落ち、我亦所を去らず白黑の病を受け、未來永々浮む事あるまじ、かゝる誓言の上はかまひて心をも許し、折節の參會外ならず思ひ給はれかしと、差俯いて語りぬ、おしゆん手を合せ、只今の御一言骨髓に通りて有難し、誠を申て見る時は御前の心入も案じ、若し重左衞門樣とどうした事もあらんと千々に碎る心も、今といふ今晴れまし嬉しうこそ候へ、左程の御所存ならば何が扨、御盃私より取上げ進せませうと、一つ受けてさしければ藤九郞喜び、三献乾して返辨し、長居は怖れお暇と、立別れ行く後のたゝみ、

如何樣人は恐ろしい物、

(二)播州賀古川の夢

僞りを誠と思ふは皆これ女の心ぞかし、小出重左衞門御用向首尾能く調へ、二月を經て本國津山に下りしかば、上よりの仰によつて、役義相勤め下りし段珍重に思召、廿日の休息を仰付られければ、時の面目これに如かじと、一家を招き酒宴を催し悅びぬ、酒數獻廻りければ、舅助右衞門申されけるは、此度首尾よく御勤めなされ早速下着の段、我々が一家身にとつて滿足せり、それに付娘おしゆん、貴殿の役義別して心許無く存じ、伊勢兩宮へ願を込め武運長久息災延命を祈る、尤も御自分の御働きとは申ながら、一つはおしゆんが願ひも空しからず、かゝるめでたき上内々娘御參宮の望み、何卒休日の內御暇をも下されなば、如何許り悅び申さんと機嫌の伺申されければ、重左衞門聞き、仰の如く此度の御用拙者分に過ぎたる義、若し首尾致さねば御暇申すより外無き所に、侍の冥加に叶ひ、相調へ罷下り大悅これに過ぎず、拙女共願ひの事、外の物參りと違ひ苦しかるまじき事、望みに任せ申さん、して御連はと尋ねしかば、さん候、某が一家しゆんとはいとこ、御存知の米澤久八郞がむすめまつ、下女下人一人づゝ、道中の案內萬事心安き者共相添へ申候、御得心の上は明朝立せ申さんと悅び、したくに歸らんとす、重左衞門暫しと押へ、これより直ぐに御同道なされなば、門出を祝はんと路銀の出し、道中無事に追付下向いたさるべしと、千秋樂を奏で門送りして別れぬ、此事藤九郞聞付け天の與ふる所、此度思を晴さでは又いつの時をか期せんと、只一人俄に旅の用意、姿をやつし見へ隱れに二里許り先へ脫けがけ、とある水茶屋に腰を掛け今や遲しと待つ所へ、おしゆんおまつは駕籠に乘り、下女下男かひがひしく此處の名所彼處の古跡を數へ、一夜泊り二夜越し播州賀古川まで來りぬ、その夜の泊りは素麵屋八郞兵衞方に付、奥座敷一間を仕切り此頃の休息、日も高ければ足休め、宵から寐て朝疾く立つべしと、枕引寄せ、四方山の話し過ぐれば初夜の鐘、藤九郞は跡よりつけ込み、相宿次の間に取り、仕度すんで肱枕、煙草の烟にほむらを燃やし、最早爰にて名乘つて出、年頃の思ひを語らんや、然しおまつ下女男の手前を憚り、云はぬはいふに勝り草、伊勢路までの內にて

首尾なき事はあるまじ、先づ名乘らぬも一思案と心を靜め、世の中の儘にならぬも樂みと、夜着引かづき空寢入り、聲を聞くさへ物かはと、獨りかこち居る折節、奥の間におまつが聲して、おしん樣お前の緣程おかしきは無し、初め云入れられしは倉橋藤九郎樣なりしが、何として又重左衛門樣方へ嫁入りをなされました、おしゆん聞て、さればこれには樣子の有る事、尤藤九郎樣が先約なれ共、挨拶人が不埒に付、一旦いひ入れ打捨て兎角の沙汰無き内、重左衛門樣より貰ひかけられ、今かうした緣になりました、お前の事はと尋られ、私が事は磯へも波へも片付かず、遲かれ疾かれ嫁入りの口は極つてあらふけれども、神ならぬ身の淺ましさ、早う殿御に添ひ閨の睦言語りたや、おしゆん樣はあやかり物、重左衛門樣のやうな良い殿持つてといへば、いや器量のよいはほむらの種じや、同じくは不器量でも氣立よく、惡性にない男が悋氣の世話が助りましやう、それはそうじやが二つどりには器量よく、心立のよい惡性に無いがほしい、但重左衛門樣は性が惡いかと云へば、惡性なやら何やらそこ所へはいかね共、十人並の器量じや程に、性の能い方へはいりますまい、藤九郎樣と主とはどちらがよかろふ、されば藤九郎樣は短氣そうで女の好かぬ男、お仕合と云ふは爰の事、わしが取ふなら重左衛門樣じやといふ、下男下女聲を揃へおまつ樣は目高じや、わしも藤九郎樣は好かぬと、互におかしき𦗟詞の内つや〳〵寢入しかば、次の間の藤九郎、紙入より鬢鏡を出しともし火にさしあて、我と我顏を見上見おろし、生れ付ての不器量にあらず、此あむしは疱瘡の時分かきみしやれたるとがめ、今更取返されぬ極印、器量は重左衛門に劣る共心ばせは劣るまじ、心にまけねばおしゆん女郎の望の通り、此顏にて心が惡性ならば三國の廢り者、兎角重左衛門に寢取られしは拙者が誤り、さればとてのめ〳〵添はせては一分立たず、一向重左衛門を討、おしゆんをばい取る思案か、但し道すがら口說いて、おしゆんさへ合點なら連立のき、埴生の住居をせんやと千々に碎る閨の內、其を樂みうつら〳〵と伏したりぬ、時は八つの過と覺ゆる頃、おしゆんが聲してなふ悲しやと駈出る、おまつを初め下女男慌てふためき駈出、如何遊ばしけるぞと、額をかゝへ脊中を擦り、水なんどまゐらせけ

れば、稍あつておしゆんあたりを見廻し、恐ろしき夢を見たり、最早御休み給はれかし、おまつ心ならず、如何に夢なればとてけしからぬ魘はれやう、如何なる夢を御覽じけるぞ、されば倉橋藤九郎殿重左衛門と出合ひ、私のことをいひ募り、互に扱合ひ深手を負ひ、兩人命も絶ゆるばかり、目の前夫に手負せたる憤り、長刀をつとり藤九郎に渡り合ひしばし闘いけるに、女の小腕かなはず遂に手込に合ひ、心に從ふや從ふまじきや、有無の返答聞かんと云ふかと思へば夢さめたり、若し國元に何事も無きやと思ふ夢物語、思ふ事夢に見ると云ふたとへ、兼々その事のみ思召す故なり、總じて夢は五臟のわざ、草臥ある時は必ず見るものぞかし、夢を誠とせば、藤九郎殿と夫婦になれとある夢なんど見ば、重左衛門樣を捨て藤九郎殿に添をふか、やくたいも無い事案じずと、酒でも飲でゆるりと御寢なりませ、外にも相宿有りて人も聞くぞかし、渡りては如何といふ内に、東の方も白々といざ身拵へ旅立と、云ふを聞くより藤九郎、早仕度して先へ行く、跡よりおしゆんがちゞの旅、途すがら又夢ばなし、

（三）明石の浦の難義

よこしまの戀慕に氣を碎くは箱入りの無分別、色は算盤の外とはかゝる事をや、已に藤九郎一時ばかり駈抜け、明石の此方なる茶屋に腰をかけ、暫く休みつく〴〵思ふは、所詮捗どらぬ事に苦勞するは僻が事、如何せんと煙草の煙と、思案するがの富士權現も照覽あれ、男の念力通さで置くべきかと、とつゝおいつ分別きはめ、われと頷きわれと合點し獨り喜ぶ所へ、道中筋を徘徊する雲助と云ふかち荷物來り、旦那樣持つ物はござらぬか、兵庫までいにがけの駄賃も安しといふを幸ひ、持たする物のあれば某が行く方へ來れと須磨の浦まで伴ひ、濱邊に座して顏つき合はし、そちを男と見て賴みたい事餘の儀にあらず、某は西國方の武士 年頃心をかけし娘家中にあり、人を以て貰ひかくるといへども承引せず、娘は大方合點なれども親のせいとう強き故、痒い所へ手が屆かず、時なる哉其娘參宮する由、聞とひとしく跡を追て來りぬ、何卒そちが思案の持つて彼娘をばいとりくれなば、酒手望み次第得さすべし、女なし男なし連のき上方へのぼり、小貸家借りて世わたる內、いやでもおふ

でも兩家の親、機嫌なをるは知れた事、それまでの堪忍、愛を賴むといふに、雲介始終を聞き、旦那長口上はいらぬもの一言で呑込んだ、お心安かればいとつて進じやう、しかし御一人か但しお連もあるか、成程連は振袖の娘下女二人男一人、それより外は鼠もなし、その內拙者が思はくは若づめにて、かう〳〵したる模樣の着る物、年は二十ばかり、それはお言葉が合はぬ、未ふところ子なれば振袖白歯たるべきに、わきつめ眉もとり齒も染めてとは、何とやら人のおか樣らしい、先づ此段止め申そふ、いかにもよい念、一旦は嫁入し離別して歸りたる娘、假令人の女房にもせよ、そちに尻のくる事はない、附々の毛虫さへ追つ拂ひ、娘ばかりをばいとり拙者に渡すまでがはたらき、その跡は此はなが受取り未來までも捌く、何と談合にのるか、心得ました、然らば働き代は金子一兩やらふ、いやそれは安い、此の前五十ばかりのかゝを盜んださへ一兩くれられた、是は若い女中、殊に附々の下人力量ある者にて若し手なんど負ひなば、一兩や二兩の藥代か却て笠の臺まで失ひ、日ほんにもかへまいと思ふかゝや子供が、路頭に立つは知れた事、さらば〳〵と立つ所をしばしと押へ、然らば一兩二分に伊丹の諸白一升、はて困るな旦那殿、かうした事を賴むに雜魚鰯ねぎるやうに、なれ共しかゝつた相談、足許見ると思召すも氣の毒、何のかのなしに金子二兩ならしても見よふか、まゝよやりもせい、しやん〳〵と手を打ち、金子は女と引替、これや聞へた、然らば手付に金一分渡した、受取つた、拙者はあの石塔の後ろに隱れ居るぞ、しかし其の躰にては旅人とは見へまいと、脇差さゝせ頭巾も假の浮世と戯れなんどいふ所へ、それ〳〵そこへくる女中、先きに立たるが戀人、賴む、心得ましたと海道に立塞がり、扨々美しいお女郎何づ方への御出、お供に召連れ給へと手を取る、取られておしゆんつき放す、下人挾箱かたげながらそりを打ち、慮外者まなこつぶれとひしめく、雲介騷がず、美しいお女郎故手を握つたが誤りか、惡い女房は握れと云ふてちんかいても握らぬ、嬉しいと思ひ禮は言わいで、そりを打つたはしやらくさいと、少しもせかぬ顏、おしゆん聞て、色あればこそ手折りもすれ、苦からぬとの給ふには、いよ〳〵腰が拔けました、あはれなさけの盃を、さきの宿で戴きたいとはつ

けあがりのした男こ、脇差ずばと拔く、心得たりと拔合せ、水車に振りまはせば、おまつを初め下女下人、最早御免と手を合せ、南の方に迯て行く、おしゆんは何の氣も付かず、北をさして迯んとす、やらぬと追つかけ抱き留め、さあおなさけと言ふを聞き、狼藉者卒爾せば後日に難儀をすべし、殺さば殺せ出合々々と、わめけどかひもあら磯の、濱邊によする浪の音、如何はせんと思ふ所へ、藤九郎ほくそ頭巾に顏かくしずか〳〵と立出、まづ雲介を引のけ、旅の女中に手をかくるは追剝か人賣か、これ女中氣遣ひめさるな、此男鐵石と思召せ、お連にも合はしませう心靜かにござれと言ふ、おしゆんは藤九郎とも知らず、よい所へ來てくだんした、これも太神宮の御利生、有難しと伏拜む、雲介立寄り、旅人そりや手が合はぬ仕組みが違ふた、女中を渡したからは金子をと、手を出す所を推參と拔打切付ける、うんと斗を最後に、濱に倒るゝ所を取て押へ、留めを差して脇差おつさり、死骸を海へ突流し、さあお女郎かうござれ、お連にも合しませふと兵庫の方へ連立行く、いや私が連衆はこれより戻られました、後へいても先へいつても出合所は一筋道、某次第になされよと、おしゆんを先に藤九郎、ほくそ頭巾に顏かくせば、それとも知らぬ夕間暮、夢の如くにうか〳〵と、兵庫の濱に着きたりぬ、折節大坂への上り舟、船頭岡に迎ひに出で乘手を招くその中に、藤九郎おしゆんを伴ひ、一間をしきり假の舟、これまでは名乘りもせず、暫くしておしゆん、誠に一河の流も他生の緣に引かるゝ習さて何かの御世話、我々は參宮人、舟に乘りても歩みても連衆に合わるゝ事か、時に藤九郎頭巾をぬぎ、久しやおしゆん女郎、やあ藤九郎殿かと飛びのくをだき留め、御不審御尤、某持病さし起り御願を申しあげ、有馬へ參る道折柄の狼藉者、嬉しやか樣の時の御用にこそと、危き場所の御役に立、その節名乘るも合點なれ共、さし控へ是まで同道仕りぬ、明石より有馬へ參るは近道なれど道中も心許なし、とてものことに大坂へ送り屆け、お連に渡し申さんためと、につこらしく言ひければ、おしゆん聞き、いかさま不思議の緣にて御目にかゝり、殊に危き所を助けさせ給ふ命の親、とてもの事に大坂まで連給ひ、連にも合はして給はれと淚を流し申しける、氣遣ひあるなお宿まで屆け參らせん、先お休み、おひも

じにはござらぬか、船頭飯の炊たは無いか、茶をはんなりと入れて茶漬しんせてくれ、いや私ゐの御心遣ひなら御無用、いかう草臥たやら寐むうなりました、少しの間臥せりましやうと、布呂敷包枕とし、つやつや寐入る顔かたち、月にうつして猶美しく、折柄夏の暑さ、せめて蚊なりと追ふて進ぜませうと、枕許にて扇の風、冷かなりし夜の御伽、藤九郎も思はず知らず肱を枕に伏しける時、おしゆんはそつと起出、藤九郎が指添抜かんとせしを目をさまし、是は卒爾何をなさると脇指ふところに入れ、素知らぬ顔して空寐入、おしゆん今は感付かれ、所詮身を投げんと身拵へするを藤九郎見付、諸事の儀爰で申せば乗合の手前もあり、いかな〳〵卒爾はさせぬ、無事で供して重左衞門殿に渡し、きつとしたお禮に預る思案、然しか樣の世話燒くも何からなれば、木はもとがほんなれど、そこを見破るなさけ知らず、某がやうな田分は日本の稀者、頼まぬ事に大事の命を露ちりよりも輕く、色に氣を盡す程主君に仕へなば、天晴な武士といはれ高知にも預るべきに、儘ならぬ浮世かな鮑の貝の片々思ひと、どこぞのはづみには、おかしいせりふを耳こすり、おしゆんも今は合點し、思ひはいづれかはらぬ思ひ、誰やらが片思ひなればわしは片破れ月、になはゞ中や絶へなんと、どうやら雲にしるが出るや、東の方もしら〳〵と、明くれば北濱田邊屋橋、關東やの濱に船が着けば、乗合の人々は思ひ〳〵に立別れ行く、おしゆん藤九郎はまづ國宿へ、ようおのぼりまづ御休息々々々、

亂脛三本鑓三之卷終

亂脛三本鑓四之卷

(四)欠落の評諚

明石のうらよりわかれしおまつ、下女下人一まづ國に歸り、すぐに重左衛門やかたに來り、右の段委敷語り涙を流し居たりぬ、重左衛門驚き、こは心安からぬ事かな、如何はせんと思ふ所へ、富永助右衛門米澤久八郎あはたゞしく駈付、承れば娘おしゆん儀、何者共知れず奪取、行衛知れざるよし、おまつをはじめ下女下人を招き、なにと其者の面體格好見おぼへざるかと尋ねければ、下人又助まかり出、さん候須磨の浦まで參候所、年の頃は三十餘の男、脇差一腰山下頭巾とやらを着し、おしゆん樣へたはむるゝ、狼藉者と私も一腰ひねくり廻せどびくと共せず、だんびら物を引拔こくうむてんに追拂ふ、おまつさまに怪我させましては如何と、跡をも見ず迯延ぬ、其隙におしゆん樣を連れ何處へ參しも存せす、近頃面目もなき次第とあら涙を流しければ、助右衛門始終を聞、おまつは女の事懼れ迯しも曲事に非ず、己は武士の扶持を食ひながら、主人たる者を奪れのめ〳〵歸りしは何事ぞ、剩へ其者の面さへも見知らぬなど、言語に絶せぬ臆病者、詮議濟む迄は手錠を打て角内にあづくる、きつと番を仕れ、畏り己が部屋に連れ歸りぬ、かゝる所へ藤九郎一家倉橋孫太夫來り、藤九郎儀何方へ參る共なく罷り出いまだ歸らず、近頃不屆千萬、殿樣より御知行を申受年月安樂に暮し、一日他出致すべきも老中へ斷り出べき所に、左もなくはや四五日も歸らぬ事、承れば貴殿の內儀、久八郎殿の息女御參宮のよし、若きやつの事、もし浮氣より同心なぞせざるかと態々尋ねに參りぬ、左もあれば御老中へ申上樣の品も有べき事、おの〳〵御存知なきやと尋ねしかば、重左衛門弟重介、袴の股立おつとり太刀引提げ駈出る、孫太夫押止め、私の物語を聞きあはたゞしき體心得ず、先何方への御立ぞ、重介聞き私の推量かも存せねど、おしゆんどの拔參りを聞付け、藤九郎殿も參られたるに紛ひなし、道にてかどわかせしも樣子あらん、拙者そと聞つる事もあれば、一まづ上み方へ登り、有無の實否を糺さん放し給へと駈出る、むざとは放さじ先づ待れよとひしめく、重左衛門子細を聞き重介を招

き、只今藤九郎他出を聞と駆出る體様子こそあらめ、
兄弟の中遠慮も事によるべし、なに丶よらず不思儀
の有ば包まず語れ、其上にては思案も有べき事、さん
候此儀は確とは申されず、事をたゞし其上にて歸り
申さん、私次第になされお暇くだされと云へども放
さず、夫は他人向、兄弟をかわにし他人を身にする心
底かと云、近頃是は耻しき御言葉、他人を身に仕らぬ
所存なればこそ、御自分に代り詮義を仕る、されば身
に代り是非を糺すの心ならば、所存を打明け某が差
圖を受、其上は兎も角もと退引ならぬ言葉、返答にあ
ぐみ然らばお話し申さん、是は私の推量を申事也、元
來藤九郎おしゆん殿に心を懸、此邸へ嫁せられぬさ
き、人を以て助右衛門殿へ貰ひ掛られしかど、一旦云
入れごして其沙汰なく打棄置ぬ、其後此方へ呼迎し
事、藤九郎本意なく胸に迫ると雖も、己が過りより
手さす事なく年月を送る所に、御自分江戸御用向の
留主を幸ひに入込、とやかく不義を申掛たるの風聞、
誰知らすとなく某が耳にとゞまる、折柄の參宮爰ぞ
と道にまち受、奪ひ取たるは必定なれ共、證據なけれ
ば確とは申難し、併し拙者が存ずる所、天地を打外す

共違ふまじ、重左衛門手を打ち心をまはし見る時は、
其方の申所尤也、さればとて打付にそれ共極め難し、
七人の子は成す共女の心は量られず、某と其方心は
それにして、助右衛門孫太夫には何とか云はん、何と
なく尋に出ると斗りの御返答然るべしと、おもてに
出、兄弟相談の上此儘は置がたし、願を立お暇申、奪
ひし者を捜し出し、其上の存分と兩人一圖に極めし
上、各には如何樣共御思案次第と申せば、助右衛門聞
き、それはつれなし聟子と申たとへ、御身の耻は某が
耻にあらずや、尋にお出なさる丶心底ならば、鬼界高
麗までも召し連れ給へ、孫太夫殿は他門、私に於て尧
る丶所にあらずとおもひかうだる一言、達て申は不
調法先づ御家老へ申上、お暇出なば一所に罷り立つ
べしと兩人連立番所へ出れば、孫太夫は舘に歸りぬ、
重左衛門兄弟助右衛門は口書認め直に邸に出る、門
前には諸道具由の如く積重ね役人これを改る、不審
ながらも玄關に通り、お取込の體何事やと尋ねしか
ば、侍共口を揃へ、さん候倉橋藤九郎事、頭へ訴もな
く何處共なく逐電す、家老中御立腹の上今日屋敷を
召上られ、諸色殘らず缺所藏へ納るよし、御尤の義扨

我々兄弟、御願の子細有て推參仕ると口上を指出し、取次賴み奉ると申ければ、同心宇田勘八受取り奥に入、暫くして直にお尋ね有る儀御通り畏り、三人一所に入ければ、役人立出口書の趣尤に存ずる、御前の首尾我々宜敷申上んと、御暇くだされければ、有難しと喜び、已に立んとするを暫しとの給ひ、今日藤九郎屋敷御缺所に付、諸道具改めの内心へぬ物こそあれ、もし詮議の筋にと三人に見せ給へば、何やらんと重左衛門立寄り見るに掛物二幅箱にあり、ひらき見ればば七十許りの禪門、六十許りの老女の像、裏を見れば何何、倉橋藤九郎一念發起仕候、此戀慕に於ては目の前兩親の御罰を蒙らん、今月今日と記せり、重介罷出憚りながら、此度おしゆん殿を連れ退しは倉橋藤九郎と存ずる、内々おしゆんに心を通はし此度の留守に入込、戯の上斯樣の事を仕り思ひ切などゝ申、盃仕りたる由承る、折柄の參宮が同道を拵へ、道に待受けば ひ取りたるに紛ひなし、兩親の像に此如くの誓を立、又々おしゆんを戀慕ふ、其罰所を去らず屋敷をも召揚られ、諸色御缺所たるは已れが心から成せる所、もし藤九郎に極りなばいかゞ計らひ申さん、役人聞召、其段尋るに及ばず見付次第討て捨よ、おしゆん事詮議の上にて、不義に極りなば共に討つべし、未だ不分明の内早まる事なかれと、委細こまかに仰付られければ、有難き御諚と朋輩しるべの方へ暇乞、心靜に身拵兄弟一所に立出る、助右衞門は一日路跡より尋んと手筈を取り、夜を日につぎ先づ大坂へ登りしと也、

（五）片上の辻堂

重左衞門兄弟本國津山を出、夜晝となく急ぐに、程なく備前の國片上と云所に着たり、時は四つの頃打續く道中につかれければ、如何なる方にも一宿せんと、此處彼處尋ると云へ共、人やどなければせんかたなく、野中の辻堂に立入り肱を枕に伏したり、明方とおぼしき頃馬子共二三人、坂は照る〳〵の聲張揚げ、唄ふて來るに兄弟目さまし、未だ夜深なるに何方へ通る馬子共やと耳を清し居たりぬ、先なる馬方の云ひけるやう、こりや豆藏、此頃須磨の浦で女をうばい取り、兵庫まで連退きしは、何處から釣出して來たれんぼれゝつじや、おぬしは樣子を聞かぬか、豆藏聞て、ゑぐ内は知らぬか、おれも確とは聞かぬが、ざつと聞はつゝた所が、女も男も津山者で、下地からもやもや

の有中をかまはず外へ縁付し、其女房參宮するを彼男開道に待受けばふて退たともいふ、人買で大坂へつれ登り、茶屋傾城屋へ賣るとやら、はくとやらでいとやら、けんたん國へ賣るともいふ、其沙汰とり〴〵じや、まづ女房のきりやうよしの、初瀬の花と紛へる生れ付、其美しい容より事起れり、おぬしもかゝ持なら、みつちや面に鰐口、立臼に菰卷いた如きのおかさまもて、ゑゝほつこしもない事ぬかす、女房は一代の見物、よいが上にも美しいを持つ氣じや、いかいたわけ者、よい女房は人が唯置かぬ、わいらやうらがやうに、朝星を戴き、夜は四つ夜中まで此街道を家にする者、一生罪を作る道理、隨分稼いでかゝ養ふて、人のおかさまにするはいや、そんな事を云なら一期やもめで暮せ、しかしそふもいはれぬ、不器量でも片上のおなつを見よ、あれこそ日本に名を流せし、播州姫路但馬屋おなつがなれのはて、手代淸十郎とせゝくり合ひ、あげくの果におなつを盜出し大坂へ立のきしが、主人の娘をかどわかせし咎逃れず、終に顯れ二人共姫路へ引戻され、淸十郎は首を刎られ、お夏はいたづら者と浮名立嫁入の口なく、二人の親はころり山椒味噌、兄弟なければ誰取揚る人もなきの涙、身ずから此片上へ引越し、生れながらの後家となり、茶見世を出して旅人の足を休め、茶の錢取て渡世とす、當座はお夏が茶と持囃せしが、次第につむりの雪山をなし、下地の惡女に寄年の、額に皺も寄來るや、行くも來るも脇目して立寄る者なし、おなつが事を思へば、色にしびつけないは世界の捨物、津山のぬれも今では水の出ばな、次第に年寄りなば、互に愛相を盡かしくさろふと、出る儘の惡口仇口、口のさがなきを、馬追ひ船頭お乳の人と云ふ譬に外るゝ事なし、重左衞門かれらが話しをつく〳〵聞、まづ辻占は大吉、兩人の者大坂にゐるは必定、一日も早く登り本望を達せん、去りながら早まつて仕損ずる事多し、少しの道中心靜かに行べし、今語りし但馬屋おなつ事は、國元までも風聞の女、道筋なれば立よらんと互に語る内片上に着たり、爰よそこよと見る中に但馬屋と云へる書付、まづ休まんと床几に腰を懸れば、七十許りの老女あるほど腰をかゞめ、旅人茶を參れと指出す手鷲熊鷹のごとし、湯行水もいつ仕たやら知れず、頭に油付けず、櫛の齒入ねば鼠の巣にひとし、そなたは姫路

のお夏とやらか、老女興さめたる顔ふり上、旅人は何を云わします、それは昔々の名今更聞も恨めしと、少しは耻る顔そうづ川の姥より釣取る俤、人間世に有時ぞかし、さしも名高きおなつも、寄年のつれなく斯まで衰ふ者か、たとへば今藤九郎おしゆんが色に迷ひ連のく共、形古びるに随ひつひには見放し由なき死を遂ん事、悪さ餘り反て憐を催し、足をはやめ兵庫の湊まで着たり、折節藤九郎を乗せたる船に乗合せ、手枕して寝ながら梶とる船頭に向ひ、此頃三十餘の侍、二十許りの女を連れ上方へ登り船、もしそち立は乗せざるか、されば上り下りに間なき船、お尋の人かも知らねど、此中津山の侍衆若い女中を連れ、此船に乗合せ唯二人差向ひ、否の應のと云ふせりふ船中をもやつかし、こちとらまで夜ものに成しと語る、して其女の衣裝は、地白に褄は唐猫にみすの墨繪、帶は黒繻子、大坂は何方へ着かれしぞ、されば北濱田邊屋橋關東屋と云へる方へ落着かれしと語る、嬉しやありかは知れたり、もはや急ぐ事なしと心を落つけ、後は浮世話しにとりなし、つや〳〵寐入し内大坂に船が着けば、兄弟悦び急ぎ船よりあがり、すぐに關東屋方へ行き、兩人が事を尋ねしかば、主答へ、お二人共に今日は、道頓堀芝居御見物にお出と云ふ、芝居は何れへ參りしぞ、其段は存せず、然らば其内參らんと立出直に道頓堀へと急ぎける、かくとは知らず藤九郎、おしゆんが心を慰めんと芝居を勸め、人も連ず唯二人嵐が芝居、是こそ今の世の名人、立役は京山下半左衞門、若女形は武島林之丞、敵役篠塚次郎左衞門、いづれ甲乙なき役者、始まりよりうつたち續き狂言、目も離さず見物す、おしゆんは終に見ぬ歌舞伎芝居、少しは心も晴れけるにや可笑き時には笑顔、藤九郎笑壺に入り、斯樣の時には酒一つと、手づから酌して呑んでさせば、一つ受て戻す、おさへますと云ふ時おしゆん胸を抱へ物も云わず、藤九郎あわて何事やらんと騷ぐ、いや苦しからじ、俄に胸騷ぎ致したりいざ歸らんといふ、藤九郎も胸騷ぎしかば、斯樣の時は酒を飲んで忘る物と、茶碗酒二つ三つ呑ければ忽ち止ぬ、おしゆん女郎も參れと勸る内、はや切狂言の果太鼓、明日より始り早い御評判〳〵と、のゝしる聲を聞捨てに、ゑびす橋より駕籠に乗り田邊屋橋へ歸りぬ、重左衞門兄弟まんまと付出し、見へ隠れに跡を慕ふて

付て行く、

（六）血汐の大川

富永助右衛門は一日路跡より來り、其日八つまへに田邊屋橋關東屋方に着き、藤九郎を尋ねしかば、亭主罷出、芝居御見物といふ、然らば歸らるゝまで待申さんとあがり口に腰を掛け、そしらぬ體にてたばこ引寄せ呑むうち、茶を運ぶ下女に近付、此頃逗留せらるゝ夫婦の人は病氣もよいか、有馬の湯相應の話はなかりしか、さん候、あなたが御夫婦なれば中の悪いめうと、つゐにはつこりとした御挨拶を聞かず、御内儀様は明け暮れ泣て斗り、殿子は酒肴の有程調へ、毎日毎夜御きげん取て御座る、あれでめうとの挨拶濟むものか、但し侍衆の夫婦はあゝしたものかも存せず、私は御用の時と御給仕の時斗り參るさへ、ふせうそうに見へ見ゐめが御笑止、おまへはあなた方の爲にはどなたでござります、助右衛門聞、身は男の爲には伯父也、兼々不挨拶なりしが女房に湯治をさせ、男は見舞の爲登り、つゐでに大坂見物に來るよし、某は又彼等が病氣心元なく登りぬ、其外二人が中の睦かりし事なかりしか、されば御逗留のうち毎夜〳〵、なるの成らぬのと云ふせりふ、泣いたり笑ふたり譯はござりませぬ、去りながら夕べからお内儀樣も御機嫌なをり、今日は朝からの笑ひ顔、なにやら耳にさゝやき芝居見物にお出、口が明きました程に、今宵からはめつたやたらに御機嫌がよからうと存じ、私共も嬉しいと云ふ所へ、表に駕籠を下す、助右衛門きやつと心得物陰へ身を隠す、それとは知らずおしゆん駕籠より出、今歸りましたと云ひ捨二階へ上る、藤九郎もつゞいて駕籠より出るを、重左衛門重介後と先きより狹み、藤九郎見付けた覺悟せよと、云ふを聞捨内へ入らんとすれば、助右衛門つゝと出、逃さぬやらぬと斬付る、かなはじと藤九郎受つ開いつ働きしが、三人に切付けられ、深手あまた負いながら大川へ飛込み、川中にすつくと立、倉橋藤九郎が死物狂ひ、よらば突かん切らんと眼を配り大音あげ、やい重左衛門、元來おしゆんは身が先約、それをおのれが拔駈し、女房とせし事年頃口惜しく、折もがな奪い取んと心を碎く所に、此度の參宮幸ひと思ひまんまとばい取、此頃枕を並べしうへは本望は遂けたもの、密男不義とも云はば云へ、元より覺悟の上なれば今更驚くにあらず、お

のれら如きが手に掛らんより、速かに立腹切り此川の藻屑とならん、高なる者の手本にせよと腹十文字に搔切り、終に空しく成けり、因て死骸を引揚げさやめを指し、本望を達したり、おしゆんを捜せと云ふよりはや、皆々二階へ上り見れば、おしゆんは心元を刺通し今を最後の體、助右衛門側より、侍の娘と云はれ重左衛門と云ふ夫有りながら、斯る不義はなしけるぞ、我々討手に來たる故言譯なくて死しけるか、己が心一つにて家名を失ひ一家に恥辱を與ふ、寢の目に刻んでも飽き足らずと、拳を握り齒がみをなし、怒る眼の內よりも落る涙は、親と子の別れぞ哀れなりけらし、おしゆんは息の下よりも、恨めしき御言葉、全く不義は致さねど、一所にあれば立難しと、云はせも果ず重左衛門、やい卑怯者、藤九郎が最期に枕を並べたると云ふからは、陳じても甲斐有らじ、今更死する心底なら、藤九郎に付纏わず何故先立て死ざるぞ、さればこそ、死ぬる命は惜からねど心物は見せず、淵川へも身を投んとは思へ共、一寸も側を離ればこそ、詮方涙流て暮すより外なし、藤九郎血に迷ひ由なき事を云へばとて、枕交せし事共は夢々覺へ候はず、されば共言譯立ぬ故斯樣に相果て候、せめて不義の惡名を免るゝ樣にと手を合し、拜むと息も有らざりき、三人目と目を見合せ、不便にも又心惡し、兎角此段申上げ上みよりの仰に任せん、其時助右衛門押肌脫ぎ既に腹を切らんとす、兄弟押止め何故の切腹所存を明し給へ、助右衛門涙を流し、唯今お聞の通り娘が言譯、さも有べき所もあれど、とても此惡名免れず、人々に顏をながめられ、何の面目に國に下り、上への言譯朋輩衆の手前、立ても居ても居られぬ身とはなりぬ、死なせて給べとあら涙を流せば、兄弟言葉を揃へ、心底尤なれども、斯くなる上は是非もなし、おしゆんが今の一言にて疑も晴れたり、必ず聊爾有るべからずと兩人に止められ、しかと左樣に思し召すか、左も有ば御誓言と望まれ、弓矢八幡大菩薩毛頭不義にあらず、先以て忝けなし、惜しからぬ命なれ共、御疑なきに切腹致すは誤り、此上は國元へ同道致さん、扨上への仰上られやうは、はて拙者よろしく申上ん、まづ當地の御代官所へ參り、本望達したるの旨申上げ帳面も消し、彼等が死骸も取置んと詮義中ばへ、檢使の役人來り、死骸を改め書付、重左衛門兄弟助右衛門を伴ひ、

御代官の御前に出、此頃御帳に留められし女敵倉橋藤九郎、今日田邊や橋にて討留候、帳面御消させくださるべしと申上る、代官聞召し、早速討留め滿足たるべし、女房不義なき樣子尤さも有べき事、不便なれども是非もなし、藤九郎が死骸は飛田に棄て、おしゆんが死骸はくださるゝ旨、有がき御諚と一禮し御前を立ち、すぐに一寺の僧を頼み敢なき煙となし、涙ながら三人一所に本國津山に下り右の趣申ければ、老中御きげんの上家名恙なく仰付けられ、歎の內の喜び、今に田邊や橋の女敵討と譽れを取りし物語、話しの種とはなりぬ、

亂脛三本鑓四之卷終

亂脛三本鑓之五卷

（一）立身の十文字鎗

丹州笹山の家中に、出石勘右衛門といへる侍あり、子細ありて浪人となり、女房おかね下女よし下人滿助、以上四人代々法華宗、擔僧且那に紛れなき寺請狀、たしかなる仁と京知恩院町に小座敷かり、少しの貯へをくずし食いに日を費し、遠に兵法の指南して世渡業の立木とす、元來勘右衛門關口流の鑓を鍛錬し、江戸に一家の有けるを賴み、今一度主人を取り會稽の耻を雪がんと、只管賴み遣しけれども、未だ吉左右のあらざりければ、爰かしこより弟子を招き、しなへ鑓の稽古晝夜勵むにひまなし、其頃水島小八郎と云ふ者あり、是は笹山邊の大守へ小鼓を言立、少しの扶持を下され、安樂なりし身なれども、性質色深く、段々立身すべきを踏外し天竺浪人となりしが、勘右衛門に因み深く、行所なき身の切なきまゝ出石方へ駈込、お鬆の塵を取り付ひつ付、賴むと云ふ一言默止がたく、大名氣に成りて扶持を分けしを、よい事にしてに

じり込み、勘右衛門が向脛のごきかぶりと、出入者の仇口も馬の耳に風吹く如く、聞かぬが命を繋ぐ元ぞかし、毎日の稽古にも弟子衆を相手とし、見るを見眞似に小太刀取手、鑓も大かた呑込ければ、當分の間を渡し、勘右衛門他行の節は、小八郎相手となりて濟しぬ、小寺友十郎稽古場に直り、小八郎は鑓友十郎は小太刀、兩方互に打合しが、何とかしけん小八郎打れぬれば、勘右衛門見て、小八郎突止むべきを却て打れしは、みつめの引手ほぐれたる故也、我相手となりて止て見せんと立合、何の苦もなく友十郎を突止ければ、さすがは師也けりと皆々感じ居たりぬ、今一度と望む所へ江戸より飛脚來りぬ、兼ての吉事たるべしと飛札拜見す、當地何某さまへ願ひをきし所に、漸々此頃おほせ出され、近日目見への儀仰付けられ候間、取敢ず御下り然るべく奉レ存候の旨、まづ以て有難しと三度戴き、先づ飛脚をも休息させ弟子衆に向ひ、某儀身上向大方首尾いたしたる由申來り、追付け江戸へ罷立申す、相濟みなば引越のため又々登り、其節御意得申さん、小八郎殿の儀知るべ無き御方、某中登りまでの内に借家をも拵へ、世渡りの勘辨しかるべし、それ迄は留守の儀頼入るのよし、小八郎うけたまはり、只今までの親切忝なき仕合、まづは御身上相すみ申段珍重、とてもの儀に私も江戸表望みに候まゝ、なにとぞ御世話にあづかり奉り、將又留守の儀御心安くおぼしめし、首尾よく御登りをこそ願候と、もたれ掛る挨拶こと終り、弟子衆皆々屋かたに歸りぬ、勘右衛門は内外の用意女房おかねに言付、其方兄彌内殿へも、知らせの文急便に遣すべし、身のまわり江戸にて整へん滿介供仕れと、そこ〳〵にこしらへ、明方に屋かたを出れば、女房おかね下女のよし小八郎諸共、粟田口蹴上げの峠まで見送り暇乞の盃、やがてめでたく御登、小八殿頼みます、畏り奉る、また拙者儀も頼み奉る、其は互と挨拶終りぬ、下女のよしは、滿介殿江戸にも山茶うめ茶ふり茶とやら、あたまの丸いお茶も有げな、ずいぶんふられ、茶栓の先のへらぬやうにして戻らしやれ、手がゝりの有者むざと小錢を遣はぬものと、滿介には肌も合ふた挨拶、氣遣ひめさるな此度は、旦那御出世のお供、今に吉左右を知らせん、そなたも大事のおるす、おかね樣を猫にひかして呉れな、つれ〴〵紛れにめつたに合點すな、爰は則ち

粟田口、大きやうじが身の上人の事ではない、世間女の見せしめ所、生根を遣へてくれなと、こま事の有程云ふて別れぬ、それより宿に歸り、近所のおかさま呼で、あと賑ひの酒宴、いまだ善悪は知れねど先づお目見へに下られました、留守の内はいよ〳〵賴み上げますと、小半酒に田もやろ畔もやりばなし、なにゝよらず御用の有れば承んと、わや〳〵云て歸りぬ、事に紛れ丹波への狀遲なはりぬ、ヘ小八郎樣大義ながら持てござつて下ださりませいと、云ふを聞より小八郎、俄に腹痛めりおかね樣藥はないかと云ふ、梅の木の和中散でも進じませふか、梅の木でも山歸來でも苦しからぬと腹を抱へて高枕、下女のよしは小腹を立、さしづめ行かずば成まい、これおかね樣、小八樣の腹痛は、酒足らぬのかねむたいのか、旦那樣がお留守故にはかなげんの見せやうと、ぶつくさ云て出にけり、あとにはおかね唯一人、はや暮かゝる入相の、鐘もろ共に火をとぼし、よしが仕殘す棚まわり、椀をふいたり膳ふいたり、獨り打つ鼓に拍子の無ものと、獨言いふ後には小八郎立ながら、拍子なくばお手傳申ましやう、おかね振歸り、お腹の痛いはよいか、ようなければ算用の合はぬ事、おまへも夕べ迄は勘右衛門殿と云ふ相手の有し故、狂言も出來ましやうが、百三十里隔てぬれば、夫婦の中も隔てた同前、さりながらお留守を預るからは勘右衛門殿に同じ、お氣つまりなば囃しでも致しましやう、但し芝居は近し祇園清水は手が屆く、南禪寺の湯豆腐、明日あたり喰に參ろふかと、手鼓打てばせを葉の、もろくも落る露の身の、置所なき虫の音の、よもぎが本は色ゆへと、後から抱きつけば、おかね興をさまし、これ小八樣何さしやると、振きる所を又抱つき、其はつれなしおかねさま、かね〴〵ほれて入さ山、登りておるゝ道もなく、此家の内をうち〴〵と、立も立れず居る内に、勘右衛門殿は江戸下り、年來の戀人を、預る拆とは深い緣、一夜の情を掛て給べ、あづまの君と口說ける、女房いよいよ氣の毒がり、おまへは氣ばし違ひしか、本心にては云はれぬ事、まことなれば此内に、片時も置事なりませぬ、うそか誠か返答と、つめかけられて小八郎、惚れたにうそが有ものか、一向手にかけ殺してたべ、此世こそかなはずとも、未來で念力通すまで、將又愛を出で行とは、存じも寄ぬならぬ事、しかし戀さへ叶ひ

なば、後共云ず出て行く氣、首尾せぬ內は動かじさ、にらみ付たる眼ざし、片岡福田に生寫し、おかねはせんかたうろ〳〵さ、表に出んさする所。小八引止め、云出すからはなるならざれ、返事を聞かんさひしめく、金輪際ならぬさ、云せも果てずずばさ拔く、なふ悲しやさうろたへ、行燈に當り火を消せば、當闇の夜さなりけらし、女房ちや〳〵さ思案の替へ、何さぞよしが歸る迄、なだめて見んさ火打箱、現か夢か幻か、冴のひかり胸に應ゆる石の火、やう〳〵につきければ、小八郎は二尺五寸を引さげ仁王立、聲を立なば一打さ云はん許りの氣色、おそろしさには有らね共、ぬし有るわしを夫程迄、戀慕ひ給ふ段、腹は立ねど今云ふて、今返事とは急な事、せめて四五日待給へ、いやならぬ事是程まで、はづんだ戀を手延さは、つまる所がならぬかさ、胸ぐら取て拔き刀、心元に差當て返答きかんと罵る、いやさ云へば殺すであろ、應さ云へば不義になる、さやせん角やさ思ふ內、酒に醉たを幸ひ、舌もしどろに餘念なき、たは言斗云ひ續け、わんさ云ふたり抱付たり、笑つ泣けば小八郎、こりや醉たのか氣違か、算用合はぬさ突離され、餘念たはいも有ばこそ、前後も知ず寐入らるゝ、止めを刺すは易けれど、死人の切るに異ならずさ、火を吹けして側に臥し、共に添寐の夢を見る、よしは疾く歸りしが、暫く表に立聞し、咳拂ひして戶を明くれど、咎むる者も有ざりき、知らぬ體にもてなし、火をさばし座敷を見れば、二人共前後も知らず寐入ばなな、起こしてはつまらぬ事、私も寐たがましならめ、見ざる聞かざる言はざるさ、口に手を當て口のうち、世なをし〳〵夢になれ、

(二)祇園ばやしの色咄

立出て峯の雲、花やあらん初櫻祇園林の風景、花にかこつけ佛をだしに使ふて、おかねさよしは二軒茶や、松の內なる床几にあがり、今日こそ浮身の洗濯さ、燒豆腐にかん鍋さし對ひの酒もり、肴には行くる人のよし惡、かたるに付ておかね樣、世の中に女ほど淺ましき者はなし、十二三になれば閾より外へ出る事なく、十五六には嫁入し、程なく身もちさなれば十月の苦み、產落してから其子に世話をやき、三つめに又重ふなる事跳い女も同じ事、夫の留守にもゆるりさ寢ず、一年立て一日、是はさ思ふ遊をせず、朝から晩迄しよびたらし、ひよつさした事すればきのふ滿介が

語した、粟田口で浮名と耻を晒します、これ程胴慾な事はあるまい、男は女房有りながら手かけ足かけ、夫でも足らぬかして茶屋はくじん、いそせせりしても誰咎る者なし、其如く氣儘する程に、女房のま男、五人十人したればとて、さのみ咎むべき事にあらず、とかく身勝手な浮世じや、わしも滿介と云ひかはした中なれど、江戸へ行かれし永の留守、獨寢斗りはなるまい、可愛らしい男かなと思ふ折ふし、小八郎様か何のかのと云はるゝ、さのみ憎ふもない男、おかね様どうした者でござんしよ、智慧を出して下んせと云へば、おかねは是を幸ひに何とぞ小八をゆづりたいと、それはよい事、滿介より男はよし器用には有り、乘替て損のない商ひと、云わせも果てずこれおかねさま、おまへの心を引ん爲、滿介と私が事を啮せば、のりかへて見よとは水臭いお心、聞ば小八殿おまへに心を懸け、大かた首尾も成た様子、其を夢にも知らず二三度もあひました、わしもおまへも同じ不義、しまいを如何してよかろふぞ、御思案はないかと云ふ、さては小八殿がわしにも逢たと云れしか、なる程夕べも逢はんしたげな、いや／＼微塵毛もない事、尤不義を云ひ懸けられしが、耳にも入ず聞寐入、そなたの歸られたも、知らぬが佛きかぬが花、いや酒ごかし夢ごかしにはなりますまい、今日おまへを連立爰へ參りましたは、小八郎殿との様子を見付し故、わたしが身に曇りはなけれど、おまへの口を聞ふ計り、問ふには落ず語るにおちて、おさまる所はどうならふ、其お心とは露知らず、遙々國より付纒ひ是迄の艱難、おいとしや旦那様、江戸さんがいへ行かんしていつ戻らんす事じやゝら、留守を幸ひお前には、男狂ひをなさるゝ所存、美しい顔して心の内は、犬ゑのころにも劣れり、下人持たと思し召すな、今迄の好みだけこれを形見に進ぜますと、はいたる草履おつ取り、さん／＼に打擲す、おかねは涙肩身もすぼり、夕べの品を聞れし上疑は尤も、段々言譯も有事まづ一通り聞てたもと、云へ共中々聞入れず、振切り出るを又取付、過つた此上はそちが存分にならふ、まづ／＼待つてと引とむる。わし次第とは嬉しい、然らば申て見る時は内へとては歸られぬ、私存知の方へ同道致し、二三日も隠し置其上にての分別、彼是する內旦那から吉左右もあるべし、それこそ望む所、兎角はそなた次第と有る、お

ぼこなお心から起る事、勿體なくも三代相恩のお主樣を、履物にて打擲せし事天罰いかで免れん、唯御免しと手を合せば、身の過りより成る事、悔と更に思はずと互の心語合ひ、二人が姿かくれ蓑、かくれ笠着て歸る宿、其の頃丹州笹山、野口彌內と云へるはおかねが兄、此度勘右衞門江戸下り吉左右の文、見るとひとしく喜び夫婦連立登り、先常宿なれば丹波屋方につき、暫く休息の所へ下女のよし來り、御無事で御登り旦那樣には江戸へお立、其時分御狀も進せられました、おかね樣も御息才でござります、まづなんとしてのお登り、彌內聞き、勘右衞門儀身上極まり江戸へ下らるゝよし、留守中おかね其方がとせい氣づかはし、殊に掛り人水島小八郎留守致すのよし、此男某はのみ込ず、尤勘右衞門とは懇意たるべきが、評判宜からぬ人と一所に置く事災を招く道理、留守中はおかねその方國元へ呼取り、我々が心を安めん爲め迎に來りぬ、早々用意致せと有る、よし承り、私も左樣に存じ此頃去方へ預け置ました、しかし彌內樣は先へ御下り、お內義樣斗り殘らせ給ひ、彌內樣御病氣故お迎ひにお上りと僞り、御同道しかるべし、其段は宜く計へと彌內は先へ下りぬ、女房は跡に殘りおかねに逢ふて右の品を語れば、さすがに兄弟とて取物も取り敢ず、嫂と連立笹山へ下りぬ、よしは跡に殘り知恩院町へ歸りければ、小八郎は千葉の百聯も懸る顏、おかね女郎はと尋る、されば兄彌內樣御氣色惡きよし申來り、兄嫁ご御同道にて丹波屋より直に笹山へござりましたと云ふ、小八聞、何共是は呑込ず、彌內氣分惡きに內義迎いに來るとは心得ず、定めし樣子こそあらめ、其方知らぬと云事有まじ、眞直に申せ、包むに於ては糺明して尋るとはなめ過た男、こなたの扶持はたべず、何故の糺明ならば心次第、其返報にこなたの惡も云てしまひ、さつぱりと此屋敷をはき出し、行所なき素浪人、門々に立謠歌ふて步かるゝを見るやうなと、にくて口有る程云へ共、むざとせば此家に居られぬを分別し、とかくきやつめを瞞着し、身の貯へするこそ第一と、手の裏返し猫撫聲、およし腹を立らるゝな、留守を賴まれし事なれば、內義の行方そらが身とても不詮議はならず、かく大切に思ふても思ひ甲斐なき人心、氣にさはりなば堪忍せよと、俄に機嫌とり〴〵に、酒でも飲んで閨のかき金外れぬやう

に早うねや〳〵、

（三）明家の世たい

或時水島小八郎下女よしを招き、其方は篠山に下り彌內殿の病氣見に參られまじきや、但し某下らんやと尋ねしかば、よし思ひけるはまんざらの作り事に、小八郎をくだしては不首尾と思ひ、此頃左樣に存ずれども、おまへの手前を存じひかへております、然らば參らんと俄に身ごしらへ、手に菅笠持ながら、追付歸りましやう、淋しくばをりは雙六でも打、啼ずに留守を賴みます、菓の物は襲物箱、香の物は南の方より出してあがりませ、大かた存じてをる氣遣ひせずと早う歸られ、委しい事は文にあるおかね女郎に渡してくれ、心得ましたと出けるが心に思ふは、さしてもない事に遙々の道を行く事國土の費へ、行たぶんにして大坂の姉じや人に逢ふて來るがよくと、伏見より夜船に乘り大坂へ下りぬ、小八はまんまと下女を篠山へ下し心に懸る山の神はまく、家主方へ行き內義は兄彌內の氣色に付き下られ、よしも今日呼びにまいり、あとの儀諸色賣拂ひ私にも丹州へ下るべしと申こし候と、僞文をこしらへ見せければ、家主此文をながめ、いかさま勘右殿の上りも知れず、又彌內殿の氣色勝れぬを見捨て歸られまじ、御自分一人に高家賃出し養はるゝも費へ、引越さるゝは上々の思案、今の世界は勝手づく心任せに成さるべしと、云を幸ひ道具や呼寄せ、片端道具共を付立させければ六百三十五匁、家主立合ひ銀子を渡し道具を受取歸りぬ、あとを見れば勘右衞門が秘藏せし十文字の鑓を見つけ、又々道具屋を呼返し、とてもの事に此鑓も賣んといふ、是には直打も有べしと百目と定め、外に賣手形とり銀子を渡して歸りぬ、合せて七百三拾匁、內六十匁は二箇月の家賃すまし、殘りを小八郎懷にぬくめ近所へ暇乞し、其夜丹州猪野日村に知邊の有けるを賴み、暫く影を隱してゐたりぬ、二三日すぎ江戶より勘右衞門上り、直に家主方へ着ければ德右衞門悅び、まづ〳〵御無事の上京仕合と尋ねければ、勘右衞門申けるは、何かの御世話拙者身の上首尾よく、一月の御暇願ひ上りぬ、滿介宿へ歸り女どもにも知らせ、支度のこしらへ風呂も仕れと云ひければ、畏りて立、家主押止めお內義樣は昔日以前、篠山の兄彌內殿御病氣に付御下りなされ、此頃小八郎殿方へ斯の如き狀

を上されしより、小八郎早速道具共賣拂ひ此方の家賃も相立、笹山へ引越されしと語りしかば、勘右衛門驚き心得ぬ事と彼状を開き見れば、則ち小八郎が手跡、いよ／＼心ならず暫くして申けるは、女共より頼みこし小八郎支配いたし、諸色賣拂ひ代銀笹山へ持參致せしは尤なれ共、貴樣にも御存知の如く拙者秘藏の鑓、外の道具は格別千萬兩にも代へぬ物と、道具屋を呼寄尋ねしかば、此頃侍衆に賣りたるよし、それは殘念某此度小知に有付しも其鑓の德、それを離しては一分たゝず家名もすたる、何とぞ其方働きに買戻し給れ、一生の御恩たるべしと淚ながら賴みしかば、道具屋承りなにが扨それ程の御たのみ、先樣へ參り隨分はたらき買戻し申さんと立出、暫くして歸り、御侍さまへ其段申せしかば尤に思し召、おきにお渡しなされんと御同道仕りぬ、先以て忝なしいざ先是へと奥に通し、初對面ながら武士のあるまじき事共、申あぐるも耻かしながら早速御得心なされ、下さるるのみ直に御出有がたき御心底と、手を束ね申ければ侍聞き、武士は互ひ、さぞ御難義たるべしと御所存を察し、是迄持參仕と渡しければ、受取押いたゞき若し御開屆けなき方の手に入りなば何程悔めばとて歸らぬ所、御量見により二度手に入る事武命の盡ざる所、扨代金を尋ねしかば道具屋まかり出、私は首目に買あなたへは百五十匁にてあげました、とかく本銀道はさるべしと申、しからばとて金子にて貳兩貳步さしをき、此度の御親切死ても忘るゝ事なし、重ねて御禮申さんと所と名を留置、御酒一つと留むれ共御緣有らばと互の禮儀終り屋形に歸りぬ、勘右衛門悦び此鑓再度手に入は立身の元、宿の樣子心元なしと滿介伴ひ明き家に入れば、家に付きたる物より外は棚板一枚もなかりき、何とぞ小八郎に逢ひたきものとさま／＼思案する所へ、下女のよし大坂より上り滿介を見るより、嬉しや旦那樣はお歸りかと內へ入んとせしが、爰は明き家と出んとする、滿介よしが胸ぐら取り合點のいかぬ眼付、此家明家にせし樣子眞直に白狀せよ、これ男組相めさるな、爰は此方の家ではない門違へじやと云ふ、やいうろたへ者、明家になればとて住家を忘るゝ者か、己こそ血迷ひいろ／＼の事をぬかせ、あらまし樣子も聞いて居る、そちは何方へ參りしぞ、不審尤、おかね樣幷兄實內樣御病氣に

付笹山へお下り、小八郎様の指圖によりお見舞に參り、唯今歸り何の樣子も存じませぬ、小八郎さまに御尋と云ふ、其小八郎も逐電しけるはと云ふ、よしはつと思ひ、さては小八郎がたくみにてわらはを出し、其留主に諸色を賣拂ひ欠落したるに紛ひなし、それとは知らず誑られし事今更言譯立がたし、まつすぐに云ふ時はおかね樣の身の難義、とあつて事を明かさねば我身一つに迫る事、如何はせんと思ふ時、滿介よしが懷へ手を入、小八郎よりかね方への文さがし出旦那に渡す、勘右衞門受取開き見ればなに〳〵、それよりはやかたにも御歸りなく如何と思ふ折ふし國元の兄樣御氣色あしきとて御見舞とやらに御下りのよし御心底は御尤ながらせめて暫しの御暇乞も不申さて〳〵御のもしさ御推量あれかしなま中に逢ぬ昔がましかに候あまり心ならざるゆへよしを御見舞がてらそもじさまの御容躰をあんじかくまでに候御心のほど御返しにまつに候かしく小八よりの文を懷中するはいかに、ことに文體たゞならず、己が中だちして斯樣の不義を勸めしか、逃れぬ所覺悟せよと鎗をつ取突んとす、よしは驚きこれには段々樣子もあり、一通りお聞の上過り有らばお心任せになり申さん、滿介中に入りきやつが申通子細もあるべき事、御きかせの上は拙者料理仕らん、さあ眞直にとせめられ、よしは淚を流し、あらましを語り、女ながらもあつぱれ忠義をいたしたると存る所、刺殺さんとは天地の違ひ、これにても不義の媒ならば、如何やう共なさるべしと思ひ切たるありさま、勘右衞門聞届け、其詞に僞なければ女には稀な者、命を助け褒美をくれん、何分小八郎が行衞を尋ね存分遂げずしては腹いず、まづ某が上りし事沙汰なし、今宵はお家主殿へおやどの所望々々、

亂脛三本鑓五之卷終

亂脛三本鑓六之卷

（五）娘子の男だて

水島小八郎、恩深き勘右衛門が妻女を犯さんとする のみ、諸色を賣拂ひ其價を取て京都を立退き、丹州篠山の近在猪野目村と云所に、鷹安鷲太郎と云者あり、少しの緣故を便りに彼が所へ立越えしに、折ふし他行せしと女房らしき者の挨拶、是は殘念、拙者事御亭主とは知るべある者、丹州宮津に用あつて下る道、なつかしさの儘立寄り、昔をも語り酒一つ盛りて通らんと、道筋の寄りをも厭はず參りぬ、お前はお內義さまかと尋ねしかば、女房聞き、鷲太郎がおかさま去年よめりて參りぬ、お手前樣は上方衆か、今にとゝの歸られふ、暫く爰へのめり待めされ、其間にお茶ふつてふるまい申そふと、扨も興がる挨拶、賴みにして來る事逢ねば須磨の浦さびしさ、草鞋の紐とかんとする所へ鷲太郎山より歸り、小八を見て扨も久しよくこそ來れり、京へ登りしより此方文一本くれぬ不屆者、面談せば存分云つて面の皮をむぐべしと思しが、向ふ獅子には矢も立たず、門わきの姥にも用と云を知らぬ人でもなし、のふずも大かたなをる年、まづ何んとして來るぞ、恨の段尤、不屆も怠りもひんより成せる所、其段は免し給へ、此度下る事餘の義にあらず、拙者もさる方に見出され、商せよとて資本をかり、丹州一國の絹を買受け京大坂の中がひへ賣渡し、口錢とつても五人三人暮さるゝのよし、金親の指圖に任せ下りぬ、先悅んで給はるべし、見ればお內義樣を入れられし事めでたい、拙者當地に在合せなば、きつとした祝儀も致すべきを遠路とて殘念、是は心斗りと、金壹歩紙に包さし出しければ、鷲太郎につこりと笑ひ、如何さま器量ある男やがて立身すべきと、見た所違はず、絹の中買めさるは餘程金の入る事、隨分精を出し金親の氣に入る樣にめされ、祝儀とて與られしを返すは不調法、辞義なしにかゝ納て酒を買てこよ、肴には鳥でも燒て出せ、時分じや飯の出來るまで麥飯でも參れ、まづ二三日も逗留し此邊の絹をも買れよ、其が第一下直にさへ有れば數には構はぬと、大びらに見世を出し、一寸逃れ一日暮しと思ふ內にも、なにとぞ便りを求めおかねかたへ文して、釣出し奪ふ

て退かんと無分別の上々吉、これこそ小八が運い極め、或時あたりの娘絹二三段前垂に包み、鷲太郎殿に教へられ絹持て參りぬ、京の客は內にござるか、折節夫婦は留守、小八郎獨り煙草のんで居たりしが、むくむくと起き絹賣人ならこちへと內に入れ、絹ひねくりまはし子細らしうは云へども、芋の煮へたも知らず、まづ惡い絹是は此方の勝手には合ねど、直段によつて買ひも致さふ、壹疋につき百四十匁には高し百匁位ならば談合いたさふ、こなたは絹屋か、此絹を惡いと云ひ百匁とは十里も違ふた付やう、今迄いくらか絹屋衆へ賣しが、こなたの樣には云はぬ、どうで商ひはなるまいと前垂に包み歸らんとす、それは聞へぬあはずば談合もあらふ、商人の習ひよきを惡いと云ひ、安きを高きと云ふは常也、絹よりおまへのきりやう山家には珍しい、絹買ふたら添へて下されうかと、ひつたりと抱付く所を捕て投げ、こゝな男田舍者じやと思ひなぶつて遊ぶのか、京の生ぬるい水呑んだと山家のすゝどい水呑んで、達者業するとはいてくる程違ふべし、鷲太郎殿も聞へぬ、騙りのやうな者を宿してこちどらを呼廻り、なぶらして遊ぶのか、あた見苦しいやつと、臂を張て兩眼むき出し睨むありさま、さながらあをひの上の怨靈顏、小八二目と見もやらず誤つた免してたべ、こなたのおつしやるやうに買ひましやう、と云ふ程賣らぬ氣じや、重ねててんがうまつゝたら、山家大根でたゞき殺すと、女には珍らしいりきみ、びんしやんとして歸りぬ、程なく鷲太郎歸り、眼玉有ほどむき出し小八を睨み、こゝな惡性者、まだ直らぬかして今も今、また介が娘おくなに絹持せて越したれば、商はせずてんがうして一在所の噂となり、身が一分捨たり、鷲太郎は此年迄身口さん打れた事なし、善惡に强き事兼て其方も知る通り、呑込でからは首の座に直つても構はず、呑込まぬからは露一滴呑込まず、たまたま下り人々に耻を振舞やから一時もかなはず、そちが手前よければとて養なはれはせず、此中くれた壹歩で此男が面をはるのか、川渉りは川で果つ、惡性者はろくで果てぬ、早や行けおかぬと犇めく、成程尤、拙者が過り、其如く不きげんでは迷惑、つれづれの慰免し給へと云へども、いかな事聞分る男にあらず、片時も置ぬと突出され、小八手をつき、出て行く事易し、さりながらなじみを重ね

し中、不挨拶にしては此男も立たず、二三日のときげんを直し、買物もさせてと詫ければ、女房聞きかね、男の手を合さるゝからはきゝ分、二三日のこと買物もさせてやり給へとわびるに、男も詮方なく、女共が挨拶いや共云れず、重て此在所の女を取らへてんがう口聞れなば、丸裸で追出すときげん直るを幸ひ、晝休みに酒一つ中なをりの茶碗酒、引受さしうけ飲む折から、彌内が下人通り合せ小八郎を見付、又立返り我とうなづき、足を早め直に知恩院町に來り、勘右衛門に用事のおもむき云ひ渡し、探ね尋ねの小八を今日晝時分猪野目村にて見付候、時刻移らば悪しからんと、云せもはてず勘右衛門悦び、よくこそ知らせけるはや打立んと鎗提げ、滿介一人召連れ足を計りに急ぎける、斯共知らず小八郎近在へ絹買に出しが、何とぞおかね方への通路を開かんと、編笠かづきに一本ざし、一里四方の在々に入り、有程の絹つむぎを出させ、十疋見ては一反買ひ、朝から晩迄腹へらし、鶩太郎への口ふさげ笑かしこをさまよひ、或家に立入絹買ませうと云ふ、三十許りの色ある女機にあがり、只今は賣切り一兩日致しなば此機の絹を賣りませうと、何とやら情有氣なる詞つき、うたてや小八郎が持病起り、鶩太郎にかまれし事を忘れ、女の後ろからはたをながめ、是はよい絹直段は如何程仕る、されば一疋に付百五十匁ぐらい、それは見よげに見ゆる絹の色うつりにけりな徒ら者、こなたは獨りか夫が有か、女答へ獨にあらず夫もなし、中にぶらりとは扶持でもあてがふか、いやさうした事にもあらずと片付かぬ云分、日本人氣が短かい、有か無かをさつぱりと聞かして下され、有らばいやか無くばいやか、小八郎此返答にあぐみ、有ても無ふても惚たとは口の詞も片付かぬ、男が有つてもなふても、惚とをす心からは談合も有ふとは、さあ埒を明けて下されるか、氣の短かいなんじやぞいの、何でもかでもたまらぬ〳〵、先づ酒飲で其上の談合、酒御所望なら調へて參ふか、慮外ながら賴み奉ると、細ま金出し肴はないか、山家に何が有物ぞ、梅ぼうし干物より外は夢にも見ず、初對面から千年もなじみだやうに成るは色酒、一つ飲で下され押へます、あいしてと差向のやりはご酒、二人共に醉ひ、たは言の有程抱付ひつゝく、餘念他愛も有ざりき、折ふし亭主とおぼしき者歸り、此體を見るより

小八を取て押へ密男やらぬと犇めく、近所の者共立合、それ〳〵れ殺せと手に鋤鍬振上る、小八もあぐみ全く不義は仕らぬ、絹買ん爲め來たりひだるさの紛れ内義を賴み、酒買て貰ひ飲だ斗り、いや其言譯は立ず、男の留守に入込寐ころぶからは不義者、代官所へ訴へんと口々に罵る、小八いよ〳〵迷惑がり、中にも分別らしき男を招きなにやら囁きければ、此男かぶりをふり、京大坂のまゝ男さへ三百目ぞかし、爰は山家密男たしなければ、五百匁七百匁では聞れまいと壁訴訟すれば、男如何にも〳〵のかぶりをふる、然らば銀十口と賴むに是非なく、安い首代なれども負けてもこませと、銀子を受取り誤りの一札を書せ、損耻かいて歸りぬ、男は思ひも寄らぬ金の顏、何れものお世話にて近年見ぬ金、祝ふて氏神樣へお神酒を上げよ、酒屋へ走らせ皆樣の骨折に一膳飲、斯樣の事ならこちのかゝも、密男の稽古をせよと云ふもおかし、大體の仕掛にて行く事にあらず、私の女共は京で口きいた巾着とやらけんたん女、それこそ密男のせりふ付作りの三八もはだしで〳〵、

(五)出世のむかひ駕

出石勘右衛門は、急ぐに程なく猪野目村に着き、鷲太郎が宅につゝと入、小八郎事を尋ねしかば、鷲太郎聞き、成ほど其者は此方に一宿す、各の躰心元なし子細有らば語り給へ、其時勘右衛門始終を語りしかば、夫婦の者手を拍ち驚き、お侍の一言僞は有るまじ、思へば小八郎めひし〳〵に刻みても飽足らぬ惡人、心易かれ追付歸らん、併し爰は足場も惡るし殊に近在の騷ぎ、歸る野道に出向ひ存分遂げさせ申さんと、勘右衛門を先に立て、兩人をとある木蔭に隱し、其身はあぐらをうち煙草を吸付、今や遲しと待居たりける、かくとは知らず、小八郎心から思ひも寄らぬ金を出し、やう〳〵命を助かりつく〴〵心に思ひけるは、若此事鷲太郎聞なば一夜も留めまじ、弱みを見する所にあらずと彌〻肩を怒らし、手鼓打て東北のれいちを謠ふと雖も、後ろ姿見すぼらしく、いつもなる手鼓鳴らざるも不思議、鷲太郎に行合ひ、こなたはそれに何してと云ふ、何してとは大盜人と、云わせも果てず勘右衛門鎗提げ驅出で、久しい小八賴み置し留守を振捨、女と不義を働き、其上某が諸道具を己が儘に賣拂ひ、其金盜み欠落すると雖も、天罰逃れず見あらはされ、

今手に掛て討つて取る、覺悟せよと突掛る、小八も今は是迄と飛しさつて云ふ樣、豫て女に心を懸け是非手に入れんと思ふ所、おのれが留守を幸ひまんまと手に入本望は達したり、一念殘る事なければ身の覺悟は豫ねてする、今更驚く所にあらず、尋常の勝負せん、參りさふと打て掛る、心得たりと突く鎗、乳の下へ突立れば、突れながら後ろの田の中へ轉びしを、續て切り付ければ、數多手を負ひ眼くらみ、大手を廣げ虚空を摑み、あなたこなたへ伏し轉ぶ、隙を窺ひ滿介つつと寄つてもろ臑をなぐ、勘右衛門取つて押へ思ふ儘に留めを刺し、扨懷を搜し見れば首に掛けたる守、口を切て見ればおかねが起請、思へば惡し不義に極る上は、此起請を兄彌内方へ持參し、唯今小八郎を討留候所に女が誓詞御座候、御覽の上如何樣共宜しく計ひ給へと委しき口上、滿介承り、飛が如く急ぎしが、程なく彌内おかねを縛しめ猪野目村に來り、先以てお手柄、次に妹めが不義の證據おごろき早速縛め、御自分の目通りにて首を打申す心底、唯今まで詮議怠り候事さしたる證據無レ之故也、其段は御量見下さるべし、妹ながらも不所存者見るも中々腹立つと、已に討んとする所へ、下女のよし遽たゞしく駆來り、おかね樣の身に於ては更々不義はござりませぬ、證據の書置先づ一通り御聞せの上、不義に極りなば御存分になさるべし、さも無きならば御助下さるべしと、淚ながら讀む、書置の事

一、かねぐ〵の御心づかひの嬉しさ御れいの爲め認め進候又兄彌内樣勘右衛門殿へも御披露にも預らんと一通を殘し置候御事

一、勘右衛門殿此度江戶御下りの節私に口置れしは留守の儀小八郎に賴み置候間心に合ぬ事の有候とも我等登り候までは堪忍いたし何事によらず愼み申さるべし留守の內やかましき事出來候へば身の爲め惡きこ申は旣に我兩度迄淚人いたしたる故世間の評定如何なれば例令一命捨る程の事あり共量見いたすべしと御申なされ候事

一、小八郎夫の留守を幸いろ〴〵の不義を申懸られ勘右衛門殿宿に御座候うちは假りにもなぶられたる事のなかりしを懼るゝ著のなければ僞られ申に付いよ〳〵勘右衛門殿を大切に存申置れし事堅く守り申さん爲め詞に品を飾り一寸拔に

欺し置候事人目には不義がましく見へ申べし殊によし私を疑ひ祇園まで誘ひ親切なる異見嬉しうも又口惜く言譯いたし候へ共よも誠とは思候まじ兎角勘右衛門殿御歸候はゞ諸事申譯をいたし其上にては小八郎を刺殺さんと存じ誤りたる體にて私の身を任せ置候事

一、二月四日の夜小八郎怪しからず不義を言掛け難儀仕候ゆへ異見を仕候へば却つて私を刺殺さんと仕候其節相果候はゞ不義の惡名を取り申事悲しく存じ勘右衛門殿歸られ候までの謀事に僞の起請を書小八郎に渡置候へども一度も枕とては交し不申候御事

一、二月廿七日兄彌内樣氣色惡きよしおすが樣御登ゆへ連立笹山へ下り申あとの儀は何物も存不申候御事

一、三月二日小八郎より私方へ文こし申候文體書僞りにて候あの如く書こし抜差ならぬ樣の思案にて御座候御事

一、前書の通り兄彌内樣へだん／＼語り候へば不義なきには極り候へ共とかく勘右衛門殿の指圖次第に仕るべく候とて今日まで相待候所に小八方へ遣し置候起請滿介持參仕り僞りながら右の言譯立難く自害仕度存候へども今一度勘右衛門殿の御目に掛り夫の手にかゝり相果て跡にて不義なき樣子を知らせ給はゞ憐れと思召さん其御心ざしを末期に仕度存じ候全く不義がましき事は少も是れなく候間さやうに思召一返の御回向頼上まゐらせ候かしく

三月廿日　　かね ゟ

彌内さま御内

おすがさま

參る

讀も終はらず大地にどうと倒れ伏し、息を計りに泣叫び、斯樣の御心底とは存じながら、女は愚なるもの故、ふと欺かられ如何なる憂目を見給はんと、是のみ案じ色々の御異見申せし事の悔しさ、此書置尤有べき事御了簡の上、何卒御命御助下さるべしと、聲を立て歎きしかば、兄彌内目に餘る涙を隠し、其詮議先立て事濟み不義は毛頭あらねど、僞りにせよ小八方へ起請を遣りし言譯立たず、かくご極め一返の題目を

も唱へよと、刀を抜き後に廻り既に討んとする所を、よし遮て中に入り、とても叶はぬ事ならば私の首を打ち、世間の人口を塞せ給へ、夫とても承引なくばおかね樣より先に私を打て給れと、刀持手にすがり前後を忘れ歎きしかば、彌內を初め勘右衛門滿介、さしもの鷲太郞共に泪を流しけり、少時有て勘右衛門彌內に向ひ、起請の言譯立ぬとの一言、千萬尤ながら、女の墓なきより今斯有べきとは知らず、一圖に小八を宥めん爲め書遣はせしに紛ひなし、此一つに止り命を取らるゝ事ふびんなり、私の願と申すは餘の儀にあらず、命を助け尼ともなし遁世修行の身となさば、殺せしも同前、何と御助けなさるまじやと尋しかば、此言葉に付て滿介よし鷲太郞同音に、有難き御心底御助け下されと、聲々に願ひしかば、かねは勘右衛門に手を合せ、御恨を捨させ給ひ返つて命を助んとは、冥加に餘る御言葉、助けられしも同じ事、只首打つて給れと合掌したる其風情、彌內も共に泣く泪、打太刀の手もわなゝゝ震ひ、これ勘右衛門殿尼となさば誤りにはなるまじきや、其時滿介罷出、憚ながら御兩人の量見にて助させ給ふ命、誰有て何とか云はん、小八郞討れしは盜賊の咎逃れず、此道理を思し召分けられ、おかね樣を御たすけと淚を流し申ける、勘右衛門も詞に付、おかねが事は內證小八は逃れぬ刑人、貴殿拙者への言譯に繩を掛け、是迄曳れし御所存討れしも同前たり、其心底を感じ御助けとも申せ、彌內持たる刀を捨て、勘右衛門が前に手を束ね、餘り忝なき御心底、面目ながら御詞にしたがひ、命を助け申さ後ろに廻り、長けなる髮を根よりふつつと切、嬉う存じ出家堅固に勤め、兩親の菩提を弔ひ、一年過なば菜方へ出入すべしと突放され、立も立たれぬ羽披け鳥、よしは嬉し泪いざ御立と手を取り、私御供申さんと泪と共に禮儀を述べ暇申て立ければ、勘右衛門見送り息才にて暮らされよ、命も有ばまた逢ふべし、さらばゝゝと別れ行、一二町も行く先には、鷲太郞駕籠を立させ、何れもの心底感ずるに所なし、是より立のかせ給ふ所迄御駕籠は拙者が餞け、重ねて御目に掛るべし、嬉しうござる賴母しゝと立別れ行都の空、鷲太郞が所存を感じ、山家には珍らしき男とて、彌內勘右衛門取立て、去る御邸へ召出され、鷲尾源八と名を改め、鷹野鹿狩の役目を承り、數度の高名次第々々に立

身し、女男を使い、明け暮れ二腰を指つめ、安楽に世を暮らしけるとぞ、

今月吉日

京寺町通四條下ル町

菊屋　長兵衛　板行

亂脛三本鑓六之卷終

傾城風流杉盃目錄

京之卷

(第一)揚屋町のうたひ初
家々の吉例えはうむいての瀧のみ
金子十両のもとでに無分別のかひ込
難波にさくや花咲がしあはせ

(第二)樂しみは次第不同のぼりつめたる松山
打てやはらぐる一はらのかり枕
七十九の身がはりの死、今の世のさねもり

(第三)千年の御息
かたじけないあらひぬきの心てい
つるぎの気だがさはりませふと御免
あとのしまひ風呂は此世のひ之物

(第四)辭世に曰
君ゆへにすつるみふねのこがれ行
あとの白なみたつもいとはじ
と白むくにのこす一首

江戸之卷

(第一)芥子人形のくび取て三百石
金龍山まで三ちやう立の悪性舟
沖をこいだけいせいの義理物語

(第二)世わたりは四度橋のはしぐゐ
ゆるがぬいもせが中にしあんをねるさやらのあぶらや
死の道に邪魔の入は青道心

(第三)比丘尼の色商ひ
佛にかくすかつをのさしみ
こまかうきれどきられぬは思ひ
ほうがいの入ぼくろ戀がかうじてあとのなんぎ

(第四)仕合の日の闇
必竟笑ふてしまふあほうばらひ
善と悪とにかへかごの皮ぶくろ
ひらくべき運のまはり切
西瓜の實になみだ一ぱいのこぼしぞん
うらみは淺草のくわんせおん

大坂之卷

(第一)作り鬚のあぶらずみしたゝるゐなか奴
伽羅の香についてまはる四人組の美男卿は

目録終

傾城風流杉盃京之卷

第一 そもく是は三大臣総職によりてこしをさすらすれば、千兩の金箱座にみてり、

婬酒の二つは樂しみの上もり、無分別の媒ともいへり、開闢より此かた物換り星移りて、色一とほりのつめびらきは、凡そ釋迦如來の時代はしらず、今日本にて粋とよばるゝ者共のかんを付て見るに、婬のかたに八千百三十一色に品をわかつ、其中に得あり失あり、酒また三十六色の次第をたつる、是も得失の二つははなれず、是をちかういへば仕合無仕合の二つ、必竟はり合人形のをもりのごとく、しばらくもはなるべからずといひしは、こまかいせんぎなるべし、今色道さかんになりぬる中に、とりわけ京の島原江戸のよし原大坂の新町、各三筋の町なみ、太夫天神半夜かこひの位をわかちて、好色最第一の場ともてはやす、中にも京の島原は諸國の色のつかさにして、江戸も大坂も手をおくは、都ぞかしとすいもゆるして、暮てゆく年も、初空にうつりし元朝の揚屋町の明ぼの、清少納言も書もらしたるはいと無念なりき、朔日は

太夫達の御禮日、ていしゆ〳〵も一きは品つくり、くわしやもきのふの面しよくとは引かへて、けいはくのいひ初、二日は家々の嘉例事、柏屋には三味せん引いて、もとの河内がうたひ出せしなげぶしをうたふ、ありべいかゝりの初祝儀、松屋には前年の帳面ぎんみして、たくさんにあげられし女郎の二布に、天筆和合樂の書初させてとしとく棚へ奉るは、かきぞめにくるゝ所を、其家中の女郎達に次第々々につぶさするに、當年はいつより數をつぶして目出度と嬉しがる、どうした事やら心はしらず、定りたる吉例とて、三文字屋がうたひ初には、其年諸客にうへこす大臣をせうだいして、高砂をうたはすを嘉例とす、其頃都にかくれなきゑびすやの吉、大こくやの金、ほていやの德といへる、三人の大臣をかねつかひの中興開山とあがめて、毎年此吉もんじやにて、五年つゞけてうたひ初せしより、打つゞいて吉事多く、此三大臣にうへこす者はなしとて、又當年もめでたく高砂よりうたひ初しより、高砂の三ふく大臣とあがめ、庭錢の山をなし、黄金のひかりくるわ中をかゞやかせば、やりてもかぶろも一きは大きに返事して、太こ末社がおもひつくこと、じらやくばかりのすいさまと、ふいちやうにしたがひ、揚屋の下々までよい物とらせてうれしがらせ、自由に太夫の手に入をじまんし、此三大臣に逢ふ太夫達には、外の男をせき、金銀のついえをかまはず、無理なる口説をいひかけても、けがにもまくることなきゆへ、しだいにあたごの太郎坊のはなを笑ふ氣になり、おそらくせかい廣しと申せども、此三大臣にはり合かひてあらばつれておじやれ、物の見事にゐせいくらべ、先三人共に若うて無事で、金は持てゐる、親はなし、其身利發にして、しかもしはい氣みぢんもなく、太こまつしやが目づかひにても、其肺肝を見ぬいて見事なる義ども多く、あげせんは先がねわたしてかひまする、是ほどねづよい儻なる客には、ねぶたくと目を明いて、みやうがのためなれば、酒もぎんみしてのましたがよしと折々のじまん口、きくやの平といへる新大臣、是も同じく此里にかよひて、人の笑はぬほど金つかふて見すれど、やゝもすれば此三大臣にかさをさられ、しごくむねんにおもひしゆへ、何とぞ手くだして三大臣をはまらすし

あん、身にしたしき太この彌八と、打よつてだんかうして見れど、つい酒事にいきついてらちもあかず、もがりの久内に此事を聞て見れば、金借てかへさぬ手はいくらもおぼへてゐますれども、こんなこみいりたるだんかうには、其まヽねぶたうなると、はや大あくびしてゐる所へ、しろうと太こにこうやのもん七といへる男、すヽみ出ていふ樣、われらが旦那寺うら寺の妙かくじに、江戸よりのぼりし樂介といふらふ人者あり、親の代よりやりさきの塲數をふみ、傾城の直筆の感狀何百枚といふことをしらず、好色の城ごり、おてきとりはづしの鐵炮のさばき、くるわ大寄の軍法、其の外力わざには、女とすまひとりてついにまけたる事がないと、口出して手柄咄の次手に、おそらく色一通りのむつかしい手くだにても、はまらす事にてもあれ、二日も三日も夜のねられぬほどの、思案を出してさばいて見たいと、つね〴〵くわうげん申されし、此の男も江戸よし原にて、けいせいのひとつがひもしたる侍、近年濕を煩ふて兩の耳よほど遠し、是をだんかう人にして見ませんと、よび寄て始終をかたり、きやつらを一ぱいはまらして、かさねて此里にして高ぶらぬ樣に、ちゑをかりてはからふてもらへば十分の勝といへば、樂介聞いて、こんなちよろい事は、しあんもひやうたんもいる事にあらず、當分金子十兩の御損金を御いとひなされずば、請取て三人共に疵付ずにはまらしませふ、萬一しそんじましても、をの〳〵の無調法にならぬ樣に、さばいてのけばかまはぬ事、たゞわきよりさたなしにして御らん候へと、扇子しやにかまへて獸面つくる、是はやすいだんかうさゐ手打と、即座に金子十兩わたしてわかれぬ、それより樂介寺へかへりて下男をよび寄、手だての通りいひふくめ、其身は目せき笠に立付、旅の出立に成て、金子入のかはぶくろ一つ、から尻馬に付て打のり、島原の大門口より、三もんじやはこヽかとこわ高にたづねて、ふところよりをくり狀を一通とり出し亭主にわたせば、亭主ひらひて見しに、此男身代どうもこうもするもの也、江戸の色里はかひつくして、此上はあらじとよほど高まんに成しゆへ、都の島原の君達の事をかたれば、此男しきりに都を見たしとせがむゆへ、當分金子千兩相そへて、そこもとをしるべにのぼせ候、諸事せはらしい事は、むろ町の橋屋

がさばくやうに申ふくめぬ、きづかひなしに客なみにして下されとて、おくの名を見れば、江戸にかくれなき小判の花をさかせし、桐のとうの七さまといへる、大臣かたよりのをくり狀、よみもをはらずていしゆのみとり眼になり、天のあたへの御大じんと一まにいざなひ、くわしやがちよぼぐち、やりてがけいはく、先づたうぶん酒の御相手にと、家中の女郞ありたけかり出せし中にも、太夫うきはしかしはぎ兩人の女郞を、ずいぶんおきに入るやうにとおそばちかうまいりしに、はやあたまから足さすらして、いなかものなればこんな事でなければ、くたびれがやすまりませず、生れ付て耳がとをければ、御用の事仰られふならば、ことばにみをいれていふて下されいと、まくらして高いびき、是はと平さのらくがんのすひ物も、あんばいちがふとてきのごくがり、ゆすり起せど、はらの中で物いふやうなへんじしてらちあかねば、先其まゝをいて一ねいりはさせませいと、かたへのかはぶくろを、客のかたへをしやるふりして、輕重のけんみやくされば、しつとりとをもたきをよろこび、ていしゆもくわしやもちよこ〳〵ばしりして、となり座敷の三大臣にかくとうつたへ、いづれもさまの御祝ひなされしおかげにて、かやう〳〵の大臣がとれましたともてはやし、おり〳〵氣を付て風ひかしますな、おめがあいたら此方へしらせと、かぶろやりてに氣を付け、酒もしらけてゐる所へ、手代らしき男是も旅しやうぞくにて、三もんじやはこゝかと尋ねきたり、きのふにてもけふにても、若こゝへ江戸より客はまいられませなんだかといへば、成ほど今日御出にて、おくたびれやらん、たはいもなう御ねいり、なにほどおこしましてもらちがあきませぬ、御たいくつにござりませうけれども、御酒でもまいりまして、しばしはそれに御ひかへといへば、先あんどいたしました、しかしながらねさしましてはならぬ事あり、江戸より手代の吉兵衞がのぼりましたといふて、むりやりにおこして下されと云、うきはし立よりゆり起してやうすをかたれば、樂介けうさめたる貌つきして、それは何の用にのぼりしぞ心もとなし、それよべと座敷によびよせしに、手代ふところより雨紙包の狀箱をとりいだしてわたせば、いそがしそうに封を切、披てさら〳〵とよみて、是はめでたい大吉左右

と、四五十遍ほど狀をいたゞき、是ていしゆ、此めでたさたゞはをかれまいと、かねぶくろ引よせ口のくくりをといて、あたり合に金子二兩、先是は心いはひの內上、猶此上にもしゆびよろしくば、八まん跡では鷄さばき、くはつ〳〵と見事な義、やれ目出度酒とみづから扇子を開て、西に三十餘丈に、こがねの島原をつかせてはと立てまへば、亭主は盃洗ふて、此きほひ口にえはうむいてなるは瀧のみと大さはぎ、さて書狀の內にも、いさいは此者口上に申合ると有、口上はどうじや、をれが耳へ入る樣に申せ、人がきいても大事ない、吉兵衞手をついて、內々おまへの御出入のおやしきにて御沙汰のありし、大坂いばらぎやの女郎、花咲さまの御事、いよ〳〵殿樣の御そく女さまにきはまりし段、ぁんまの換安が始終を聞切、まぎれない段を御役人中迄申上候故、近日御むかひにのぼる談合、それより每日ごたくたと、一家中上を下へかへしてのよろこび、此方にても手代ども相談には、いかにとしても其おひめさまを、色里よりすぐにお屋敷へといふとも、且は所もよろしからざれば、殿樣への御ほうこうに、其花咲さまをとんとうけ出して、京都へつれましてのぼり、知恩院町にうら座敷をしつらひ入てをきましたら、早々江戶より大坂へたづねにまいらぬといふ事はござりますまい、其時花咲さまにはうけ出されて、今は知恩院町にと申さば、さつそく役人中京都へむかひに御のぼり、そこでこそだんなには、大手柄者におなりなさりなさるゝのみならず、その跡はどうなり、共おまへ次第に金銀のつかみどり、一門一家のうかみあがるは此時節と、江戶にて御家の吉事なり、拙者めにのぼりて諸事談合いたす樣にとの事故、さつそくのぼりましたと申せば、そりやざつとすんだは、たゞいまよりすぐに大坂へと思へど、酒事すんで目出度、氣がゝりにない樣に立んと、となりあさきかまはず大さはぎのよろこび酒を、座敷の三大臣のうち、大こくや吉といへる男、大きなる耳たぶにて始終を立ぎゝし、さてこそあぢな談合を聞たれ、けいせいぐるひもかねまふけになる時代もあり、かひ置させふよりましじやと樣子をかたり、何と爰でとなりの江戶者のたくみを、先をこして此方のまふけにせん、是よからふと三人談合しめし合、俄に宿に用が出來たと、一座無首尾に三人惣立にし

て、宿へもかへらずすぐにおろせが方にて、大坂迄よごほしの籠しつらはせ、金銀にかまはずはやうやれと、一町に七人がけ、暫時がうちに大坂新町へはせつけ、すぐにいばらきやへのりこして、何がなしに花咲をうけ出す談合、あはたゞしくしかけしゆへ、亭主もあまり急なるゆへがてんせず、花咲事ははりまのらうにん衆、近日千七百兩にてうけ出さるゝ筈、大かたしゆびがなりよりましたと、うそまじりにしぶいて見てぴんとあしらふ程、猶おくゆかしく、此時にはづまずは數日の功もむなしとて、一きほひに十兩廿兩づゝせり上、あちらこちらではり合かけて、なんなくはりまの客のうけ出す金高一倍に談合すまして、三千四百兩にて物の見事にうけ出し、さらりと手打て、唐の玄宗の時代にも、是程金出してうけ出す事は有まいと、ありたけせんしやういひちらし三人が大坂の出店より金子才覺しよせて、ねだ切に皆濟して、亭主へもくわしやへも、うれしがるほどしうぎをくばりちらし、太こまつしや出入の座頭、日頃花咲が心安う語しやうじ屋のおやぢまでに、ぐわら〳〵とかねまいて、やぶいしやの德あんは、花咲さまの合いしやをいひ立にして、是も五人扶持やるやくそくさだめ、引かいて京迄は川御座七艘、だんだらすぢのまくを引て、琴三味のひゞき雲にとゞろき、盃吸物のしたみ汁は天竺までもながれつきぬべし、太こまつしやは申に及ばず、あげ屋の男出入の町人、一やうに染小袖にて、御をくりの其爲に舟を引てざらめきわたり、すぐに知恩院町のうら座敷、一ヶ月金貳兩づゝに相究、前金廿兩わたして、こしもとはした下女物ぬひ、としがましきまかない男、以上七人付て、うを屋酒屋は上下を着し、御息女さまとあがめ、けふは江戸よりたづねてくる、あすは役人がのぼるかと、御きげんとりの者ども、くふて出るやら持て入るやら、ばたくたとのみつくして、四五人づれでかご通る人も目を立て、半年過れど何のさたもなければ、後には三大臣われわれになりて、いはれぬ其方が才覺だてと、かた〳〵にはら立れば、此期にのぞみてとかういふはぶしやれといへど、はやそろ〳〵しんだいぶんさんの談合、ひとりは夜ぬけにして行がたをしらず、たゞ樂介ひとりが智惠にて、大臣一人前に二千百十三兩七匁二分と、錢七文づゝの損金ゆへ、無分別の二大臣と、俄に

名をきくやひとりが詫び、又しあんもあれば有物か、是三人が無分別ぞろへ、

第二当流うしの時まいり長きよのうらみはきゐてゆく、はつ霜がほむら、

とし寄親と持佛堂とは、置所にめいわくすると、いひ初めはとたづねてみし、むかし遊女町六條に在りし時、松柏齋とて此の道の太こ、關東武士を相手に酒のみて居て、ひよつといひ出せしよりの一言、出來口とて今につたはるぞかし、其時節にはいきかたもかうとうに、けいせいも律義に有りけり、もと親仁とても格別の者にもあらず、若いものゝ過たるなれば、さのみうるさがるべき道理ならねど、中にも色ぐるひ第一と心がくる男は、とし寄親仁も死一ばいのかねかるに重寶と、人の氣の一がひならぬで持たうき世、あしたの事いへば鬼が笑ふ、とかく酒と色とは樂しみのこんげん、それをうなづくは、人間五十年のひざ枕し、心にことかゝぬ江戸紫の半水とて、今樣の御大臣、お出入のあい口太こ、以上六人なじみの道しばをはじめ、其の外わしう八千代大さきかるも、魚鱗くわくよくの大寄、向ひの玉屋には道はし長門柏木、みよしの　あげまき、とはうなしのあづち大臣が引いて出し太こ、枝がへしの庄介、萬年藏の甚左衞門、かれこれくわしやまじりに高なしのわめき酒、北となりは、瀬川うき舟を立物にして、めつた八十酒、南となりは、一もんじ屋の若草に舞はせ、大臣とおぼしき男手つゞみ打つて、是れを樂しむといひさうな貌つき、奥は床入口は口說のたゞ中、目のとゞく所みな色ならぬ座敷もなく、戀ならぬくるわもなし、大なれ小なれ、一座々々の金銀のさばきて有て、時々の付とゞけ折々のなしはらひ、一兩二兩はちびつかずにやり過す、それ程にしかけねば、此里ばかり面白うない所故、三代とつゞいて、けいせいぐるいにほまれをとりし者なし、十人よれば八九人までは、かけおちぶんさんと出れども、たえずはんじやうするは、けいせい妙しかけ妙に目の見へぬゆゑぞかし、是を思へば、ひろい世界とは今のとなるべし、さしもに廣き好色場に、錐をたつべきらいちなしと、當流しだしの音げい、加賀の掾がふし章を直に傳授し、是より口先の秘術を極め、楊弓は琢波一品が表に立、金石糸竹匏土革木禮樂書數、ひとつとしてうろんなる貌付せず、自ら此の器用でけいせいぐるひにかゝらば、おそらくはと、

自慢に吹花やの三四と名に高き大臣、十九のとしよりこの里にかよひ、まつ山にのぼりつめ、わるずいの七九にそやしあげられ、中どし十二年の間に、三千五百兩の金に羽をはやし、親の手前もふしゆびに成り、借金のなるだけはかりつゞけて、さあならぬ段になる春、三十といへる明ぼの、明星を見てあげやよりすぐに夜ぬけにして、釋迦のむかしを引合せて、こんでいこまの三枚がたのかごをたふさず、しやのゝの甚六といへる異風太鼓をめしつれ、若狹の方へ立のく、今出川より駕籠をかへし、はきならはぬわらんづ、あづまからげといへば、けいせいの名もゆかしく、雨ぞらのならひ日高のやうに見へて、くれかゝるをきのごくの上に、道にまよふて市はらといふ處へ出て、宿をからんといへども、風ぞくお公家さまの尻つまげを見るやうなれば、いなかものゝくせとして、かたむくろに宿をかさねば、ぜひなく甚六とふたりと有る川ばたに、なり平の東くだりを思出せど、なみだ落すべきかれいひもなし、懷中せし火打にて火を打、はながみなはになひて、火を付たばこすふて樂しみ、りさんきうのあげやのざしきも、蘇臺一すいの夢とかはりゆく、まのあたりのせいすい、小判化してけいせいとなり、けいせい化して小判となると、かりにもいはぬ一言木魚たゝかぬ悟りと、涙まなこににじみたる折ふし、南のかたよりともしびかすかに見ゆるにしたがひ、ちかづくを見れば、かしらにかなわをいたゞき、みつの足にらうそくの火、大臣身の毛よだちて、是人間にあらず、見付られなば生てはをくまい、とても死る命なら、金たくさんにつかひつぶして、くるわの露ときえふものを、なまじいなるふんべつだてして、是はどうじや、とても生ぬからは、手足の生れ付たこそ幸ひなれと、あいざめの一尺八寸、つばもとにぎり、ふるひ〳〵かたひざ立て、うはかはには見えぬ心魂、まづかつかうは男らし、よく〳〵見れば女、それよりむねのをどりもなやすく、扨は人をのろふ女、きぶねまふでするさ見えたりと、すいりやうするほど心地よく、甚六が袖をひかへて女と見て、むでに通すはづはなし、其方もうしの時參りの太こ持たためしは有まい、此いせん袖屋にて大崎にだまされ、にせゆうれいのあいさつして、ふるひ〳〵付けざしのみしこと、岩戸此かたない格と、くるわ中の大笑なりし

が、又一重こしての圖なるべし、跡先に人は見えず、究竟の男二人して、うつそりとはやられまいといふ、火かげに女二人を見付、あゝこりやと立返るを、大臣はしりより袖をひかへ、此方も人間こはいことはござりませぬ、様子見かけますれば、人をのろはせらるゝ御風ぞく、六條のみやす所以來女中の心しやれて來て、うしの時參と八挺がねとは、すたりましたとぞんずるに、まだはやるは此道、男にくうてかうした事か、どうじや／＼と問かくる、かねつかふたおかげにて、きめ所／＼にてくどけば、此女がんしよくをかへて、そんな輕いせんさくではござりませぬと、ふり切て行かんとするを、三四猶もすがつて、ひんしやんなさるゝほど初心なり、世に男ひでりは行ますまい、戀もぬれもよいことしつてから、五十までのたはぶれ、見た所がおとしは廿一二、是から先はだかれてねづめにしても廿七年、其算用なしにぶ心中な男を、十分のろひころして高がしれた事、きぶね明神のごとく鬼に成て、よい事したといふためしをきかず、たま／＼節分の夜出て氣をのばせども、色有る者共はにげて寄りつかず、やはり人間の時がましじやと、松原、二條の河原にてそうかのぎうに、鬼がはなしたを慥に聞いたといへば、此女しほ／＼として、洞空和尚のお談義聞ても、つゐになみだのこぼれたる事はござんせぬに、今の御一言にて、もはやうしの時まへりも是ぎり、あつちはあつちこつちはこつち、めん／＼さばきと、かなわもらふそくもかなぐり捨る、面しよくきつとせし處は、何とわちがい屋のわか山にいきうつしじやと太こがいふに付て見れば、誠に鼻のあたりにほくろがあらば、とりまぎらかすと、夕月ほんのりと出て、水底に銀縄をはる風情、ひしき物にはそこらの草引かなぐり枕とし、去年の夏子規の初音聞に、名におふ橋屋の太郎が方へ、ふりがゝりに行て八千代と初會、末しやには杉やうじの權六せがきの才兵衞と、ちようごこんなあぢはひ、あゝ酒と三味線がほしいと、すめんでいふは此道にこりぬしるし、女、さてはこなさまがたも、けいせい狂ひに身を打たお衆か、わたくしは井筒屋のしゆんといへる後家なり、となりの丸屋の六さまといへる男と、人しれずなれそめしに、此男かつかう不相應に惡性者、それをせんぎしあがつて、あいさつを切たといはれて、いつそ其

男めをのろひころしてと、女心の一すぢに、道もたがへずまいよ〳〵此所へかよひます、幸ひわしに男はなし、こなさまにも金つかふて、内かたがぶしゆびなら、わしがよひやうにといふより、三四ゐなをり、さても目斗りはすいかな〳〵、親の手前ぶしゆびにして、たゞ今たんばごへと心ざす所に、好色大明神にもにくまれぬせうこと、もや〳〵じまいのしゆびの後、つれ立て七條たかくらなる處へ立かへりて、まんまと夫婦表口七間、うらへつきぬけし家のあるじより、一家のちなみもとのごとくはんじやうせしが、もえぐゐにつく火の松山がこときかまほしく、甚六つれて行初し門口にて、うき舟に出合てあれはたれじやと云ば、甚六、あれは一もんじ方にてくわつとならせらるゝ上風、なげぶしはもとのながとがかたわれじやと、此里の風聞、お茶は利休が死れて殘念、先第一がなさけしりと申せば、三四手を打て、しやば往來八千度此里にかよへど、今迄見ぬ艶顏、すぐに付こめと甚六にさゝやけば、かしこまり候といふよりはやく立かへり、太夫さまには先約のよしと申上る、其先約おもしろいと、小判和尚をあいさつ人に、たのんでのむりもらひ、くわしやもていしゆも命一ぱいはと、手に汗をのみ出し、いよ〳〵しゆびしてお出に極りましたといへば、こは有がたしと待所へ、しやんとせしとりなり、いしやうのきこなし、のつしりと座につくより、酒の風味一しほ増りて、是はごうじやの森のじゆくしがき、つぶせのへせのと のみしこり、のうれんはづして打かづき、かよひぼん二枚合て獅子舞の曲すれば、盃の臺にひぼ付て顔にあて、三味せんのばちにてちやせんをすり、にぎりこぶしにてからかみ障子をたゝき、ありや〳〵どんど〳〵と太こがそゝりに、大臣十めんつくり、予いやしくも此道に足をふみこみしより、さはぎ一通りにはつゐに手をつかず、されども後代にいたりて、誰が時にかうしたさわぎありしと、名にさゝるゝ程のこと、いたさいではうれしからずと、亭主が耳に口あてゝさゝやき、是はおもしろう有まいかといへば、うけがはぬ貌つき、そこを手うてたうぶん是じやと、黄なる光を挑灯とし方々とかけ廻り、御願成就しぬとすた〳〵いふて立歸る、辻かご一挺しつらひ、兩方のたれはづし、さきがたが上露 はつしも 松風、跡かたが しのゝめ 松枝 玉の

井、かれこれ十八人にかごをかゝせ、大臣をのせ申、せきやらんぎくの、二八のかぶろはしやみせん持、うたの才三はてうしさかづきの役人、島原の出口より一町半東をかぎりてはうじをさし、あれまでねつて行やくそく、ぐぜいの駕籠とは是なんめり、外八もんじのいたりがきは新しく、諸方の大臣立ならんで是を見物せしに、大もん口を東へかいて出る折ふし、三四が親浄閑東寺へ日参の次手に、茶えんかひに島原あたりを通られしに、もや〳〵と人立ゆへ、しもく杖つきはしらかし、立とゞまりて見しに悴三四郎なり、浄閑けうをさまし、大勢の内をおしわけて、をのれは悴三四郎めではないかといひしおやじの目つきを、さき方かきしはつ霜ちやくと見てとり、是は雨がへ町の竹屋の久さまとて、かた足みじかく御こゑもしはがれてと、まんざらのうそをいへば、浄閑まゆあひにしはをよせ、世にはようにた男もあるものかな、はて麁相申ましてと立のかるゝより、めいる大臣をそそり上またさはぎ立て、もとのあげやへかへりて三四いふやう、さいぜんのせんもんは、親仁にまぎれなきゆへ、見るよりけでんせし所を、貴所のきてんにて虎口の難をのがれしこと、ひとへにあたかの關にて判官殿を、辨慶がちやうちやくせしいきかた、此御禮とかう申されぬかはりに、此里を引ぬいて、ふかうおあひなさるゝ大臣に奉らんといへば、初霜うれしくぞんじもよらぬ御なさけ、しんしやくするもゐな物と、つねにいひかはせし、紙屋理介にかくとかたれば、理介涙こぼしてよろこび、とかくあたゝまりのさめぬ内と、はつ霜が借金彼是一つに算用しあげて、都合金子五百十六兩、此上に五兩十兩入ましても、ぐわいぶんのよい様にと、此者に金子六百兩わたせと、三四は手紙かいて、おも手代五郎兵衞方へ取にやりし折ふし、五郎兵衞は淨閑とひそ〳〵物がたりしてゐる所へ、手紙を出せば、淨閑披てみて、言語道斷、けさ島原にて見しは世悴めなれ共、あいさつせし女房のきてんにかんじ、ざつとかへりぬ、我子を見ちがゆる親が有ものか、其上俄に五百六百といふ金子の入こと、いよ〳〵がてんゆかず、うしの時まいりを女房に持さへ心得ぬに、けさのなりは何ごとじや、五郎兵衞大義ながら、島原へ行て居所せんさくして、三四郎めをかんだうしておじやれと、ないもせぬはぐきにて

はぎりせられし音、下臺所まで聞えしはよく〳〵のはら立と、彼里へ立こへ三四にあふて、隱居の思入共をかたり、拙者としよりての迷惑、御さつしといひもあへず淚をこぼせば、三四今こそ正眞のけでん、酒のゑひもさめて、とかういふべきことなければ、ちりの有たけひねる所へ、はつ霜來りて三四樣はと問へば、二かいにお手代と密々の物語とかたる、扨は彌〻金持て來て、うけ出して下さんすと、中づもりに心得て、いき〳〵して二かいへあがれば、五郎兵衛は座を立て、はしごの下にうづくまるは、ぶしゆびが中のぶしゆび、三四はつ霜にいふ樣、こなたをうけ出す事、しばらく延引せねばならぬしがく、只今親仁頓死せられしよし、卅五日ものびさうに思へば、もしや二年のびようもしらず、三年引づらふもしらずと、あとさきそろはぬいひぶんに、はつ霜おどろき、さりとは手のうらをかへす御一言、是ほどにばつとさた有てからぶしゆびになりては、わしが一ぶんがたちませぬと、色ちがへしてゑりに貌をさしこみしが、暫くしてようござんすと立んとするを、三四袖にすがり付、御風ぞく思召切給ふていに見へ給ふは、一ぶん立つかくごと見へたり、拙者も不慮の仕合にて此てい、何共いひわけすべきてだてなし、いひわけには死で見せませんといへば、成程御推量の通り、是がつまらひでは理介さまへのわけたゝず、らちのあかぬことをくど〳〵いふてもせんなし、お前もわしも死なねばならぬわけ、共に死でのけませんと、櫛箱よりかみそり取出し、わしからさきへころしてとわたせば、しばしも時ののびる程、たがひの爲もよろしからずと、かみそりをつ取、はつ霜が心もとをつきたるに、つかれてあつといふこゑを、五郎兵衛聞付かけあがれば、三四のんどにかみそりを立てんとせしをもぎとり、御尤千萬、とかう申されぬ御いき方、爰は御命を助けましたしと申せば、人をころしてのびしためしなし、せひ死なせともかくを、五郎兵衛猶も止めて、こゝにこそしあんあれ、拙者かひなくも、御親父淨閑樣の生れなされぬ先より、けつかうに召使るゝのみならず、人のわらはぬ家屋敷三ヶ所、せがれによめよびて、當年迄に孫も五人あれば、うきよの望芥子程もござりませぬ、あたら〳〵長生して、是ぞ主人の爲に成しと思ふ事もなければ、只今お身がはりに相果、世間へは初霜

と心中して死だむきにすれば、諸方の一ぶんも立ます、拙者めは七十九歲、今死でもいきがけのだちん、此度死ぬるがわしが爲じやと、懷中硯取出し、思はくの通さら〳〵と書置て、三四が持たるかみそり取て、いさぎよく自害しければ、やれ心中よと俄にわめく、不相應なる心中なれど、三四も心入をかんじて、そこを立わかれて宿へは歸らず、ぜひなく江戸へと心ざし、つかひ殘りの一步三つ、つえにも柱にもと賴にして、白川橋にて三匁で、もゝ引かふて行雲の、あゝさだめないうき世、

第三 ぼんなふ即ぼだい、好物はまめのここに ぬりぼうず、思ひを染込風呂ゆかた、

花に鳴うぐひすは、ほうれんげのさえづりをなし、水にすむかはづは、いなゐずまゐして、腰つきに氣をうごかさず、是はをろかなる尼入道に示して、色の道の妙をあらはす、まして經論聖敎に眼をさらしては、其いきぢの正脉を、見いださずといふことなしと、自慢高きが故に貴き、金澤山持錢とて、形は法師にして一寺の住職を持つといへども、常に豆腐と念佛をきらひて、色ごとには五重相傳を我物にし、説法談義の折から、諸旦那の參詣の內、しぶかわのむけたる娘をみては文をつけ、人の妻の手をしめ、こしもとはしたはいふに及ばず、鹽のめして思はるゝしかけ、人の見ぬまにうなぎのかばやき、ふなずしの風味に心をうごかしける故、一向一心の宗門のごとく、御恩報謝の惡性ぐるひと思ひけるもおかし、たま〳〵しさいをいふ旦那來りて、御住持の身持うむに法師のなすわざにあらず、拙者親代々の御寺故、おためをぞんじて申といへば、持錢にこ〳〵わらひながら、われ親のはらを出て十一歲にて坊主になり、今三十一といふまでに、天台眞言禪律、其外一向日蓮淨土まで、をろ〳〵內證をうかゞひ見るに、落る所は何ぞと思へば、只佛になるの一道也、さらば佛になりやと、此身を觀ずればくらゐせんさく、たとへを以て申さば、愚僧が寺へ、彼岸あるひは祖師の忌日などには、旦那方より相應の重の內を送らるゝ、是はぼたん餅是はせきはんと中づもりに推して見れば、ぐわらり〳〵とちがふに、まして十萬億土のあなたの淨土、さりとはせばいせんさく、かやうの事はさらりとさりのけて見れば、地ごくもまたかくのごとし、とがをすればから臼にてざいにんをふみつぶし、うそをつけばまきろくろ

にて、舌を引ぬくなんどわけもない事、佛もじちめなる貌つきして、よくも仰出されしと思へば、はらすぢをかゝえ侍り、只ちか道に申せば、現在の果を見て過去未來をしるといへる言ば、まだとりえあるいひぶんなり、今生にて金銀たくさんに持て、それ〴〵のすいた樂しみ、わきから見てそれをまなぶ者は、同じ樣にかねつかふて樂しむ、かつてならぬ者は、其樂をみてうらやむ、此一通りにてたらりとしれたり、惡を作るな〳〵と誡めらるゝ佛は、佛中間にて樂しみ給ふべし、朝に道を聞て、夕に死すとも可なりといはれし人も、一生きうくつなめして、死んでゆかれて先もしれねば、是だけが損と見ゆる、かやうに氣を持上からは、ゑんま大王もとろう見え、淨はりの鏡まだるうござる、人のそしりおもしろく、親師匠のゐけんも、うけて用ひねばくにならず、まんぢうくへば口に甘く、たうがらしは舌にひりつく、是ほどちかいせんさくをさしをいて、一生きうくつな事せんとは、よつぽどうつそりなせんぎと、ちりもはひもつかぬいひぶんに、旦那も口をあいて去ぬ、顏をもつてあつまる色功者共、今の御一言にて思へば、今生にて三昧せん引、

嫗酒二つをわが物にし、樂しみて死んだら、先でも此通、一寸先はやみらみつちやりしらぬが佛、さあをせ〳〵と引立られて、付したがふ太こには、やんしうの勘兵衞、いんねん上戶の作平、おまむきの念入、ふらすこの三九郞、上下七人、おろせに花をおしまぬせうこには、あい〳〵の聲せはしなく、御かごをしつらへば、持錢いふ樣、むかしより色里にかよふかごには、定まりて三枚とて三人がた、四枚は四人、只人數を多く入るほど艶里に行く事はやし、是は片時もはやくかけ付て、少にてもあそぶを第一とする故ぞかし、此趣を思ふ事、上代も今もかはらぬ事しらるべし、愚僧今より品をかへて、只二人にて四枚五枚よりはやくやらせて、持錢かごとて、一風異名を付させねばおもしろからず、手足がんぢやうのせんさくは此方ぞんせぬこと、此旨おろせに申付て、はやうやりたる者には、其あたひのぞみによるべしといへば、おろせ兵助ほうご持あぐみ、格のちがふたいきかた、しあんするもしろうさらしく、去とは旦那おもしろうござりませふ、此時御意にちがふてならぬ場、おろせ大明神も力をそへてと、日頃近所にてすまひをとる明月の勘

六、一石持の八右衛門、逸足と沙汰せし兩人に内證申ふくめ、跡につゞく籠の者に目くばせして、汗と籠とをかきみだして島原へはしりつゝ、さりとははやう御出とそやし立て、桔梗屋のとこよにあたまから口説酒、わるロ大臣の惡名をかまはぬ法師、男ぶりがお氣にいらずとだいてねてもらひませふ、申はせんしやうがましけれども、わたくしが身には、桐のとうとあふぎの地がみ、常是はめの極印、肩のあたりには元の字がござれば、人よりははだがよいげな、いやならいやにして、よろこぶかたへまいるでござらふと、人もなげなるいきかた、是はだうり尤じやと、まつしや共のわめき酒、とこよむつとせしか共、心にふかふ思ひ入有ゆへ、こゝは見事にしてのかんと、づかづかとあゆみより、持錢に打もたれ、さりとはすいな法師さまじや、けいせいを丸はだかにして、見たやうないひぶん、まだいひのこさんした事が有が、わたしが仕合じや、いはれぬ先にちやつと申ませふ、とかくけいせいは人形のやうな物、すそから小判を入てつかはんすと、自由になるはいな、むかしと今とは客のいきがたもちがへば、けいせいも其のとをり、人はしらぬことわたしはさうじやと、ごつかりともたれかゝれば、持錢よだれをながして、日本廣しといへども、また此やうなおもひ入の合たおてきはあるまい、とりわけ酒に色が出來た、さあのめやうたへとわめく、持錢かねしたくみしにや、やんしうをよびて何やらささやきしが、あいあいといふて、大きなる鉢に一歩こまがねの山をつかせ、銀のさじをそへて、左の手に宗和なりの吸物わん持つて、持錢が前にさし出す、持錢吸物わんに酒一つうけてさらりとほし、ていしゆにさしてしろがねのさじとりて、一歩こまがねのしやべつなくひつすくひて、是ていしゆ手を出せといへば、是はかたじけないと手を出せば、ちといたしやうはげびたれども、かたがたが酒のむに、大盃にては急にいきつき、小盃にてははがゆし、只上戸下戸のしやべつなく、平のみに數盃をかたぶくるは、是ならくのみ、其吸物わんに一つのみし者には一すくひ、二つのみし者には二すくひ、みすくひよすくひも盃數によるべし、圖のかはりたる酒もり、此里はじまりて有まい事、たれなりとものぞみ次第にのませよとの上意、そばに在あふ太こまつしやくはしやをはじめて、や

りてかぶろ下男、聞つたへにあつまりよれば、八百屋とうふや肴屋の七兵衛まで入つどひ、是は大すいの大盡十方無碍光の御さはいと、腑腎の二臓より出る大わらひ、われ先にと引かけ〱のみしこゐ、手まづさへぎる大酒もり、我しらずにいきついて、まき舌にしてこねまはる口上、持錢むしやうにのぼりつめ、とかくとことよを引ぬく談合、言舌まはらぬせんさくを、とことよは聞より、むねふさがりし其しさいは、此とことよといへるには、長崎屋の三ぶとて、久しきなじみの大盡、十年といへるに、身上とことよゆへにつぶしてより此かた、あげやのさばきも、不埒じまい成りしかども、かぶろやりてがなさけにて、おり〱の出合男と成て、行々年の明くを待て、たがひにかたいせんさくに、思はず持錢が身請けの相談、酒の上にてのせんさく、よも眞實にては有まいと思へど、此事誠ならばをしかくしてもいかゞ、さりながらせひうけ出されて其上は、しあんもあると高をくゝりて、先あらましを書したゝめ、門口の茶屋に賴で三ぶにかくとしらせしに、三ぶ大きにけでんし、聞ずてにもなりがたく、其まゝ桔梗屋へしのび行、かぶろがちゐにて箱はしごの下までにぢりより、しよくだいの火のかげのあるを幸に、そろ〱とはひあがり、床のわきにごばんありしをふまへて、床ばしらの折釘に足をかけ、どうやらかうやらしてちがひ棚へにぢりこみ、身をひそめいきをのみ、さしのぞき〱、心にのらぬと死る覺悟におとしつけ、血眼に成居し時、持錢ていしゆをよび、明日とことよに身請けさすべし、諸事金銀のせんさくらちのあく迄はと、外の客をせきて當分手付をわたす上は、此法師が女房、それ迄其方に預け申、くどくはあすのつめひらきと、千秋樂百へんもうたふて立かへる、跡にすんごりとことよひとり、ゐりにかほさしこみて、さはりたらなきさうなていを見て、三ぶがちがひ棚よりのせきばらひを、きくよりうれしくそばへよらんとせし所へ、はうばいの上郎、うきふねいづみ川金太夫大くら、かれこれかぶろに盃もたせて、はたんといきついてと心にそまぬ酒もり、心にそますと、そこをのむが大事のつとめと、三ぶにきけがしの下心、とことよが遠きいひぶんに、ちがひ棚にてうなづくをよろこび、やう〱酒をすまして、あすあひま

せふのことばの引すて、長きよもはや七つのかねをきくより床とりて、よものねしづまりしを待合、三ぶをひそかにいだきおろして、人めをつゝむ物がたり、指にてはらの上に書て見せ、又は耳に口をあて、さゝやく中のさゝやきことば、にはかにせけんをはゞかるき、是だけがむかしとちがふ身の上と、いきをのんでなみだをながすに、とこよいふ様、とかくこなさまとわたしとは、二世かけてのけいやく、うけ出されては一ぶん立ず、一ぶんを立んとすれば今死なねばならず、死は何時も成事、只何事もわたし次第にしておいて下さんせ、はてはかうするがてんと、おとこの耳にさゝやきしは、つねとちがへば枕もしらず、それは誠かそなたの返事ひとつにて、生死の二つにおとしつける、生死の次手に障子がしらけて見ゆるは、夜や明ぬらんとひそかに出て見れば、となりの淨林、あさぢのおつとめのころ、ゆふべは長客と見へて、あくびまじりおふみさまよむにおどろき、もとのちがひ棚へはいらんとすれば、とこよはきづかひさんすな、わしが仕やうがござんすと、かぶろもじのをよびて、ねだうぐ入しつゞらへおとこを入て、表のかたへ出しつゝ、まんまと三ぶをかへす所へ、すりちがふて持錢は金子もたせていりかはり、ぐわらりとこよを請出し、今より拙者が北のかた、二せや三せはふるい事と、はやかごのり物もたせて、すぐにつれてかへるしがく、とこよいつよりうれしげに、もはやかうなるうへからは、猶々かはいがつて下さんせ、さて是よりすぐにおとも申て出まし度物なれども、此里見るもけふ斗り、ひごろねんごろにせしあげや、其外ほうばいの女郎へも、一言づゝの禮をいひたし、跡よりまいりましても、だいじない様にして下さんせといへば、持錢聞て、夫もさう有べき事、此上ながら氣まかせと、先に立てかへりぬ、それよりとこよは、かぶろひとり供につれて表の門を出て、百くわん町まで出でしが、かぶろをよびて、急に出し故大事の物をとりわすれしほどに、とりてこいと、あり所ねんごろにをしへてかへして、かごの内より跡を見をくり、ゑもんの馬場をはしり行、道のり二町ばかりも行ぬらんと思ふ折から、此かごを下立うりあぶらの小路へやりてといへば、かごの者聞て、かしこまりましたが、かぶろ殿のござらいでも大じござりませぬかと、すぐに下

立うりへかいて行しに、とある辻にかごをおろさせ、みなの衆はこれからいんで下されといへば、かごの者きもをつぶし、其ふうぞくにていづかたへ御こしなされます、とこよいふやう、此あたりに立寄てあはねばならぬ人あり、かうしたなりでいかねばわけの立ぬ事、きづかひなしにはやういんで下されとあれば、身にかゝらぬかごかき、其通にしてかへれば、それよりとこよは、其わたりにて長崎屋三ぶさまと、たづねまはれどしれざりしに、あたりの者共いつに見ぬ風ぞくゆへ、かはりたる女ごが通るはと、われ先とのぞきまはるに、三ぶも人のさはぐにおどろき、はしり出て見て是はと手打ば、うれしげに打わらひせかぬ足どり、しやれた所を見る事じやと、いひ〳〵あげや入のごとく、のうれんくゞりて内へ入て、先是迄來りし道々、かぶろをかへし、かごをもどしたる事共をかたれば、さりとはちゑかな〳〵、是ほどに思ふてたもるかたじけなさ、まんまと坊主を出しぬいて、大分のかねをつかはし、こちの花になして見る事との大わらひ、さりながら是ほどの事を、此まゝにはすてをきがたし、しばらく所をさりて身をかくさんと、近所へもいとまごひなしに夜ぬけにして、北山舟岡のあたりに身をひそめ、とこよも風ぞくを持なをして、かうがいわげにほそ帶、手づから米をかしぎ、すり鉢にてみそする相生の夫婦、樂しみといふもをろかなりし、かくて持錢は先へかへり、とこよ來るやと待共來ぬゆへ、又あげやへゆきせんさくすれば、それはたしかにまいられましたといへども、こぬが誠なれば、かぶろをよびよせ、其時分のかごかきを手がゝりに、籠の者先に立ておろしたる辻にてといへば、其時の女中は島原の、太夫さうなと沙汰せしが、成ほど此町にゐられました、長崎屋の三郎兵衛といふ人の所へはいられましたが、今はどこへやどかへてまいられたもぞんせぬといへば、さてはとこよめが出しぬきをつた、いきずりのけいせいめとくやめどかひなく、くれて行年もはや二年過て、あらたまる春も夏山の青み、郭公聞きに持錢は例のまつしや共打つれ、北山あたりを通りし折しも、夕立しきりなるに、とある家の軒に、あみ笠かたぶけ立やすらふ所に、地白のもやうかたびら、島りんずの中はゞ帶、すげ笠のはしを持て、雨そらをしんきさうに行足どり、つねの女にかはり

たるに氣をつくれば、ひぢりめんのふたのゆかしく、かつかうどりなりどうもいへずと、ちかより見ればそこよなり、持錢大きによろこび、其の女めのがすなと、家賴よつてばたく〳〵とつかまへ、段々うらみ有女なれ共、今愛にていふに及ずと、持錢がかごにむりむたいにをしこみ、飛がごとくに寺へつれてかへり、をのれいきぬす人の大がたりめと、さん〴〵にしかれども、物をもいはずないてゐしを、持錢かんにんせぬ坊主、拙者が女房にうけ出したるにまがひなければ、打きつてすてんといふを、太こまつしや左右よりとり付、尤うけ出し給ふにまがひはなけれども、もはや一兩年も過たるうへ、そこにはしそこなひも有まい物ならずと、たつてとゞめ申せども、千年が二千年過ても、金出してうけ出たは此鼻なれば、どなたがとめても中々こらへぬ、立かゝりたるはらの、いかな〳〵立やむ事なし、たゞきりころさねばと、めんざうにありし一尺八寸、利劍即是みだ號とふりまはせば、是はゆるせとにげるやら、あはてふためき寺中のもの、まづとこよをかくせと、こゝかしこと引づりまはり、上臺所のかたわき成る風呂の中へをしいれしを、持錢ちやくと見てとり、風呂屋の戸をあけんとすれば、内よりはあけさせじと、せり合ふ勢ひに風呂屋の戸おちて、持錢こけこむところをにげ出んとせしを、うしろのかたよりむづとだいて、あがり場のかたわきにて、はやさしころさんとせしを、とこよをしとめ、なるほど御腹立は御もつとも、わたしも命がけでいひかわせし男ありしゆへ、末でかうなるがてんをせぬでもなき身、今までそひましたが此うへのよろこび、申ぶんはすこしもなし、いか樣になさるゝとありても、露おうらみにはぞんじませぬ、もとよりわたくしが身はおまへさまにうりましたればと、手をあはせてねんぶつ申を、はらたちまぎれにきゝいれもせず、今となつての長說法、聞たくないとつてふせ、こゝろもとをさしとほし〳〵して、風呂屋よりとんで出しが、よく〳〵おもへば人をころして、いきてゐらるゝ場ならずと、とこよがしがいにのりかゝり、其身も一所にふえかきゝり、自身のゐんだうにてしにけるは、ちとあなかしこはいはれますまい、

第四露　身やどる北の〻草の葉、世は一すいの夢のかり枕、なげきの中の心中かし座敷、

さあ〳〵これは洛中に御評判、今度島原大坂屋に、み

ふねと申女郎、大のちいんをすとんとはまらせ、六十匁小判、一両二分位のとしの老ぼれと、よく廓へ揚屋で心中は、さりとは此よの物わらひ、此よのはぢさらし、只一文でしれまする、古かね から金、きせるのつぶれにかへてもやりませふ、 きのとほりたる女中には、たゞもやりませふ、はや〳〵きた〳〵、 はやうきたの丶花見まく、中に色有るくれなゐは、園生にうへても隠れなき、戀ざかりなるこしもと、はづかしさうにこでまねく、幕のひまより内を見れば、旦那と見えしは白がひげにして、六十ばかりの長ばをりに、二八ばかりにうたうたはせ、ごぜがみすぢのいと〳〵ぶし、どうも〳〵とほむるをきけば、みふねがこゑなり、是れはぞんじもよらぬたいめん、 にくさもにくしふみこんで、つかみころして、しまはふかとたうわくしたる折から、大臣さうし取あげて、はんぶんよみてこれみふね、是はそなたにうらみ有男、其はらゐせにはぢかゝせ、物笑にさせんため、かいてうらするとおぼへたり、其の草紙うりこちへとよびこみ、あみ笠とれば、みふねと日頃いひかはせし重平也、みふねぎよつとせし貌つきを、さあらぬていにあひしらひ、なふさうしやどの、 さだめて是は人がこなたにうらすであらふ、こちに聞度事あれば、やうすあらましはなしてみや、さればでござる、 先此みふねにふかうあふ男、はなげのありたけよみつくし、 其上親のかんだううけ、一門出入の所迄、よせる事かたくむようと、 廣い都にあしをとめず、 つねにけいこせし嘉太夫ぶしを身のさし合と、難波の方へ立こへ、重平太夫となをついてしばゐする折から、 みなとやといふかね持の後家、 浄るりに打こんで、わたしと死で下されと、よるひるなしに死たがる、さやうにおぼし給ふ事、神かけて忝し、 どうしたわけに死たいことたつてねをして聞きしに、されば思入にはいろ〳〵がござる、其重平が浄るりのよいに打こみし故なれば、 生てをいては人のほれるがはらが立、 とかく後家ひとりの詠め物と、せきせばふ死たがるゝ、重平是にがを折て、 成ほど仰にまかせ死ません、 さりながら都に母を一人持し故、少死る事成がたしと、いはせもはてずそれこそやすき事、 金さへあればこなたはゐさしやらいでも大事ないこと、京へのかはせ小判二百両有、品々京

へのぼしませふ、死ぬる上からはやりぱなし、さあござんせとせがまるゝに、分別して千日寺までいざなひ、とあるかしの木にかの後家をくゝり付、くらがりまぎれにめつたやたらにつきさして、其足で京へのぼり、いきぢく生のみふねゝとしらず、まだあひ度氣が出るも、わるいゐんぐはとすぐに島原へ行て、やりてのかめに様子をとへば、車屋町あたりへ身うけしてとあらかた語るを聞、口おしやだまされし、見付しだいにうらみんが、先それまでのはらゐせと、さうしにつくりうらされますと、よその話に引合す、みふね聞いて、こちの心を聞きもせいで、先の男もたんきなといひながすほど、我をわすれてはらを立、みふねが貌をうちければ、だんな見とがめ、をのれがていがてんゆかずと、むかし作りのかたい立ふく、やれらうせきものしばりたゝけさいふ音に、すはけんくわよと近所の幕、あはてふためきたゝむやら、うばはわこ様と取ちがへ、三升樽に乳をのませば、座頭は三味線かと、火かきをさげてにげるやら、重箱にふみかぶり横なげにこけながら、たこをつまんでくふ隙に、重平みふねに羽織を打きせて、引づるやうに手を引いて、平野のやしろのうしろの方、木かくれあるを幸に、汗をぬぐひ息をしづめ、さるにてもそなたゆへに、さいさいあぶないめにあふが、なんとそなたの心中を、ちつと見たいと夕月の、曇らぬ心これ見さんせ、こなたさまに逢ひしだい、どこから成共大坂へぬけて行しあん、其内どこぞて死だらすぐに、そこにて埒の明やうにと、これ見さんせと白むくの、下着の袖に一首のじせい、木の下やみにすかして見れば「君ゆへにすつるみふねのこがれゆく、あとのしら波たつもいとはじと、扨々かゝるしんていと、しらでうらみしくやしさと、なみだはのべのはな紙をひたせば、みふねいふやう、まだ此のうへの身のなんぎ、わたしも身うけせられてまいりましたれ共、今の親じと、ついど帶をとかぬゆへ、親仁大きにはらを立、老後のなぐさみに引かいてをきしに、いつのそひねも帶しながら、そばへよればこけてのく、此の上のはらいせとて、人をきの三がかゝをたのみ、新居のくまの色茶屋平岩やといふ所へ、又うりてやる共はづに、かゝしての談合也、又々つとめせふよりは、さし合のない極樂で、まゝごとをして遊びませふと、しやくりあげてなきく、人

めもわかずなくこゝろの、もれなんことをきのごくに、袖にて口をおほひ〳〵、心中せふも何せふも、刄物ぎれがないといへば、きづかひさんすな、そんなことがあらふはじに、茶辨當のわきに、まかなひ人があひ口を置しを、そつとふところへ入てきましたといへば、さりとはぬけめのない氣のつけやう、ざれ〳〵こちへわたしやと見て、何是れがわきざしか、扨もそうな、火吹竹じやとなげ出し、死る中にも大わらひ、死は一たんにして安しといへば、神前をけがさんよりは紙屋川へ立こへ、身をなげてなりとも死んとて、そろり〳〵と行道に、河原きれいに砂をならし、一間四方に小石をつみ、心中かし座敷と札立てゐる男有、重平立寄り、なんと此心中座敷は、いくら程でかさしやる、どこで死るも同じこと、是も緣なれば爰で死んでやらうといへば、錢二百文でござるといふ、それは思ふたよりはいかう高直なり、尤やすい邊、二條川原にはやすい所もあれども、まづ見物の場所わるく、其上さい〳〵死そこなへば、一つは是も場所じやとせかぬふりしてゐれば、みふね、はてちつとの事いふてあちこちとせんよりは、やはり爰をからんせといふに、そんなら先當分手付に錢百文やらふ、あとの二百は死でからとりや、おまへさま跡でたれにとられまするぞ、はて死さへすれば跡は二ころりさいへば、さりとはすい哉〳〵と大わらひしてわかれぬ、されど刄物ぎれなく、身をなぐるに覺悟究りしに、重平きつと思ひ出し、はながみ袋にはゞびろなるさすが有しを、取出して中に置、たゞ世は夢なり、二百兩をくはい中して、きほひ三重で上りしに、今又うれひぶしにかたりつめることのはかなさよ、あすは平野の心中と、うたはれんことせひもなしと、いひもあへぬにさいぜんの男ども、てうちんさげさせあないにて、くきやうの者共數十人ひつとりまはして、女ぬす人あまさじと一度にかゝれば、心得たりとひねくりまはす懷中小刀、心はやたけにはやれども、足手まとひのある故に、くる〳〵〳〵と桛に藤、かゝるなはめのむねんやと、いふこゑもかれ〴〵に、兩人共にひつ立て、くるまや町に立かへれば、だんな立出、ぬす人をとらへしよろこび、先兩人共にわけてをくべしといふ折から、表をたゝく、たぞといへば平岩屋吉兵衛、ひるは御しのびのよし、それゆへ夜に入金子持參いたし、

みふね殿もむかひに參りしよし申せば、則みふねをよび出し、明日しゆくらう殿へつれゆかれてうきめを見んより、平岩屋へゆけ、しからば男めも命たすけてやるべしといへば、なみだにくゞもり聲もよはよはと、なるほど參りませんと手形も金子も取かはし、當分重平を兄といつはり、幸あれが兄がゐますれば、こなたまでをくらしませんと、籠について茶屋の內へはいれば、諸事は明日々々、先休み給へとふたりながら二かいへあげ、玉とことりてしんぜましやと云付て、亭主はおくへ入、跡にて玉二かいへあがり重平を見付、こな樣は平樣ではないか、わたしこそはみなとや後家、ようも〳〵わしをころすとて、かしの木をつき通し、むごうもこゝへ來てゐさしやる、わしもいたづらのうきな立しゆへ、一つの談合にて、此所へうられしもみなこなた故、よい所であひました、今こそしなねばをかぬと取付、平しばらく淚をながし、なじみもないに嬉しやな、死なねばならぬわけなれども、しろういふほどあぢはひわろし、とかくかうなる上からは、三人共にのがれぬ所、爰をしづめる一分別、こよひはひそかにふしてから、あすのばんにとしめし合、玉をだまして下へおろし、中二かひよりやねづたいに、みふねもろともぬけ出て、もとの平野の草の露と、きえしはあとのかたりとぞ、

傾城風流杉盃京之巻終

傾城風流杉盃江戸之巻

第一　一倍ましのおもひ草四火のやいとのすゑ　あんばい、いしやもしらぬ命の切もぐさ、

安きに居て危をわするべからずといへるは、とつと以前千七百年ほどの昔語、今は安きに居てやすく、武士は具足ゟ曾祖父より傳はりしを、所々修覆しなをして胴が合ね共、化儀一へんにこしらへて、虫干より虫干ならでは出さず、偶〻干戈の動きくは、能あやつりならではなき泰平靜謐の御代、それにつれて町人も、樂しみといふをしる時節になりしぞかし、爰に武州江戸に、しかるべき侍有し、いまだ其年三十に二つ三つあまらせ給ふが、御器量ゆゝしく屋敷をおさめ給ふ、其頃殿の若殿當年三歳にならせ給ふが、御廣書院にして うば おち、小法主の可愛まじりに、御きげんよく遊び給ひしに、あやまりて芥子人形の頭を、耳の中へ入させ給ひしを、おそばに有し者共、かつてしらずして、むつかり給ふに氣を付て見しに、御耳の中にくろき物有しにおどろき、是は〱と手に足をにぎり、さま〲とりいださんともがけども、奥へこそいれ口へ出る躰見へざれば、次第々々にくるしみ給ふなきごゑもれて、奥さまをはじめ殿にも出させ給ひ、耳療治の靜耳は申に及ず、しるべあるほどのいしや、外科 針立 其外按摩のたぐひ迄召しよせられ、耳の中なる物をとり出すべきとの仰なれども、つゐに回春にも素問にも見あたらぬことゆへ、をの〱一間に入りて工夫すれども中々埒あかず、時刻うつるほどはれなど出ては、穴せばまりて取出すに難儀なるべしと、ひそ〱と申せば、奥がたに抱かゝへて、はやかたはしよりなきわめくゆへ、殿御廣間に出給ひ、家中殘らずめして、右の次第を仰わたされ、若かやうの物を取出す者あらば、其役義より引上てめしつかはるべきとの仰なれども、たれ一人とり出して見んといふ者なかりしに、末の足輕の中に、澤沼鷲太夫とて、さまで武功はなけれども、才覺者と名にさゝれし者、お頭役千次瀧右衛門に申す様、若殿の御容體只今承り、我等迄きのごとくに存じ奉りぬ、去ながら仰渡されし趣なれば、拙者早速取出し申べしと申上る、殿大悦まし〱て、此上はともかくも其方才覺にて、ずいぶんぬき申せとの上意有がたく、すぐに若殿の

おそばに立より、ほそき管の先に、ふきやのごとく紙を付、御耳へさしこみをき、くだの木口より、けし人形のあたまをすひ付、何のこともなふ取出しければ、殿をはじめ奥がたの御悦び、一家中どよめき立て萬歳をうたひし、御悦びのあまり、則三百石の知行くだされしうへ、直に奥なんど役仰付けられ、此以後其方こそ、大門の出入にかぎらず、いかやうのことなりとも心まかせにいたせと、かたじけなき御意ども、うら山ぬ者はなかりし、ある時御出入の呉服所、くれはや織右衛門御臺所へ伺公し、明後日は山王の御神事、則拙者表を御通りなれば、當年目出度若殿様、御見物にお入りくだされ候様にと御役人中迄申上しに、誠に當年はいつもより目出度年なればと、則鷺太夫にお供役仰付られ、本町二丁目に御こしを入れられしに、亭主上下を着しお迎に罷出、先御神事の渡らせ給ふ迄はしばらく間の有御事と、酒のうへにて亭主鷺太夫にいふ様、か様の御神事のたぐひは、御覽あそばされてもゑきのなきこと、其上刻限もはやければ、いざお氣ばらしに拙者御供いたすかた有、若殿様御きげんのよきこそ幸なれ、ゆるりとして御歸あそばされても、いかな〱御神事のわたり濟ことではござりませぬ、諸事は拙者めに御打かけ、ざつといふて御供と、一はいきげんにしこりあげいざなひ申し、すぐにうら道より、金鍔丸といふ船をしつらい、五挺立の櫓をゝして、飛がごとくに金龍山にいたり、それよりあみ笠をきせ申、ひそかに色町の見をはじめし、角町二丁目江戸町をうろ〱とあるく中、まんじや庄左が格子に、玉川といふ名とりの女郎、表のかたをうしろむけて文よみてゐたりしが、よみしまふてはうばいの女郎にいふ様、是見さんせ、わしは實をつくせど、けつく男の方にはうそにしてのけさんす、今から實をつくしたぶんがそんじやとねじむく艶顔、鷺太夫見るより心うかれて内へいり、何と此方から誠を以てまいつたら、こなたも誠をつくす氣かと、かい敷のしろふと了簡を玉川聞き、はてすぐなる刀のさやへは、すぐなるものならでは入がたし、すこしでもゆがみましてははいらずに、たんときのごくといふ一言にこしをぬかして、どうじやうふむ鷺太が足つきにて、はつ床のたはぶれも、ついそこ〱に首尾して、若殿の御こときづかはしと、かさねてをちぎりて、ま

たもとの緒に取のり、本町二丁目に立歸れば、まだ祭のねり物、四五十ならでは通りすまず、それよりおそばにひざまづき見物し、首尾よく立て屋敷へ御供申せども、玉川がことねてもさめてもわすれがたく、あるひは公用にかこつけ私用を斷り、御使者先より彼さとへかよひ、たびかさなるほど、たがひにしみこむたはぶれのことばも、もと思ふから出るならひ、玉川も身はつとめしながら、心は眞實の男のおもひをなせば、鷺太夫も誠の妻の如く、人めもはぢもかまはぬきになりし故、家中一ぱいのとりさたとなれり、こゝに鷺太が古はうばいに早道善介といふ者、是を聞き氣の毒がり、ひそかに鷺太が家老をよびよせ、旦那はよし原のけいせい、玉川にくびだけ打こみ、あげもおろしもならぬよし、以前より心易く語りし拙者なれば、外の事開樣にも存ぜぬ、どうぞ彼さとへかよはぬ樣にと、さま〴〵しあんして見れども、是ほどにしみこむ上は、けつく云出し、身のがいになるまい物にあらず、只何となふそのけいせいをうけ出して、屋敷へ入ては何と有らふぞといへば、家老手を打て、日本一の御ふんべつ、幸ひ奥とてもなきこと、今家中にてはかたをならぶる者もなければ、けいせいをうけ出して、屋敷へ入れらるゝと申ても、たれ一人否といふ者有べからず、か樣のことの取さばくりは、拙者かたのことく不調法なり、とかく貴樣に打まかしますうへは、どふぞよろしうして、うけ出す手だてを頼み上ます、金銀の入ることなら、いかほど成共御意しだいといへば、左樣ならばと則金子七百兩うけとり、下人に持せまんじやへ立ちこへ、がらり六百八十兩にて、玉川をうけ出し歸り鷺太夫にわたせば、鷺太大きに悦び、かよふ斗りに氣をうばゝれ、かふした事を打わすれたり、此上のねがひ何か有ふぞと、これよりよし原がよひをとまりしに、玉川も身持をかへて、かうがいわけにほそ帶して、みそしほのさし引迄に氣をつけ、馬とり鑓持それ〴〵に、うれしがるしかけの言術、是斗りはくるわにつとめしおかげとおかしく、諸事心をつけし故、內外ともに味ひよふ治り、玉川のはつめいをかんじぬ、折しも九月十三日、宵には小雨一とほりざつと降りし跡、洗出す新月、影なをさへわたりて一しほ面白く、大殿例より御酒も數多く、召上られし興のあまり仰せ出さるゝは、何と今宵の明月、むげに

見るにはあらぬ共、同じくは家中にて、百石以上の者共の女房をよびあつめ、打こんで酒にして遊ばんと仰せもはてぬに、中小姓硯紙取出し、たれかれの女房と、かたひしに書付し中にも、あるは病氣又は忌中のさはり、乳のみ子を捨ても出られずとのたぐひ、さはりあるぶんはのぞいて、わづか頭役八人の女房ならでは出ぬよしを、ふれ役の何がし早速是へと申せば、大殿には蘭の間の付床のわきに、らうそくによりかかりて御覽有、らうそくの光輩をあざむく所へ、一ばんに與家老蘆分舟右衞門の妻女、としの頃廿五六と見へて、うすげしやう中かうがいにかみゆひ、金のかんざし指して、下に緋むく上に秋の野を、色糸にてぬふたるうすわたの小袖を着し、しとやかにあゆみでる、ほつとりとけだかき風ぞく、蘭のふすまの上の方になをれば、跡よりゆみ大將きり穴いざゐもんの與、是は家老舟右衞門の妹にして、とし廿八、めんてい面長にして所々にそばかす有り、小ばなひらいて見へし、おしろいがちに面を作り、をき墨の色こく、すかしびんに中島田のかくしもとゆい、象牙の染ぐし、白小袖にむらさき京染の明ぼのぼかし、腰ばかりの破手もやう、其次に居なをる、よこ目役の谷川水右衞門の内室、四十と見へしはたけすぎたれども、面ていの地はだきれいに、小袖は大島ぐんないにもみうら付て、薄紅梅にあし分舟の染入の上着、大すべらかしにかみゆふて其次の方にゐなをる、醫者德入がふさいは上方むまれにして、きめこまかなる面色、口もとひろくほうがいの赤みがちなるは、推するほどおかし、黃むく黃八丈に黃うら付て、一體しやれたる風俗にしこなし、菊の霜といふかけ香の匂ひゐならぬ、それにそふて鷺太夫が女房玉川、すがほにじねんびたいのはへぎは、中しまだのかくしもとゆひ、淺黃染の下着、黑りんずに黑糸にて、くらぶ山のよるの體をぬはせ、梅の立枝のあやなきは、やみにこゆれどしるき風俗、くり出しの八文字、目に立ぬしこなし、次第をみださず座に着し、其外膳奉行の手かけ、幕預りの妻、書記役筆介內儀は、俄にけがつきましてと斷り相立て、以上七人なみ居しに、大殿座敷のていを見わたし給ひて、月に映ずる女色酒たけなはの樂しみ、折しも玉川三味線ひきて、くるわのなげぶしをはり上てうたひしより、大殿ござとなふ心まよひ給ひて、立ふる

まひ物ごし、するほどなることと御心に入るのみならず、其後ひたすらに玉川をめしよせ給ひしかども、かくと仰も出ざりし故、御色あひ青ざめて、食事もすゝみかねさせ給ひし故、徳入御脉をうかゞふて、是は欝氣内にあふれ面部に走りしなりとて、四火といふ灸を進め奉りし故、毎日の灸するゑ役玉川に極りて、お心よふするゑさせ給ふが、或時玉川灸をひよつとあやまりて、おせなかへおとしたりしに、殿ねぢむきたまひて、其方ゆへなれば燒ころされてもくるしからず、今の灸のごとくさんとおちてくれまいかと、玉川が手をにぎらせ給ふを、玉州ふりきりもぎはなし、それよりおめしありても、氣色けといつはりまいらぬゆへ、さて鷺太夫めがせいたうすると、ゆがみなりに氣をはらせ給ひ、所詮夫の有る故にしたがはぬに極りしと、かへつて御にくしみかゝり、今日夕飯にふぐ汁の相伴鷺太夫に仰付られ、毒の有をひそかにくはせしに、しばらくして五たいのふらんし、御そばにもたまりかね、御禮を申早々宿へ歸りしかども、物いふことも叶ずすでに死なんとせしを、玉川あはてゝ、御膳の料理の體など尋しに、しかぐゝと申により、是魚のごくにあてられしに極りしと、急いで酒をあたゝめ、ひたものすゝめし其才覺、家中一ぱいにかんじければ、大殿しそんじ給ひしをきのどくに思召、いしや徳入を召て、みゝに口をさしよせ、うちぐゝと宣ひしが、いか成わけ共しれる人なかりしに、徳入御意畏りて、療治するふりにもてなし、鷺太夫に毒をもりし故、さいせんのなやみいまだこゝろよからぬ上に、又ごくをのみしにより、必死にかくご極めて跡役の御願ひ、早道善介、一器量有とて申上しに、早速相違なふ仰付られ、親子のけいやくにつれて鷺太夫も命をはりければ、玉川が歎きたとへていはんかたもなかりしが、所詮かみをもおろし夫の後世を願ひ度趣、御願申上しに、中々御許容なきのみならず、度々參れとの御使かさなりしまゝ、主命せひなく參りしに、涙をおぶるめの中、殿彌なづみふかく、御しん所近く召れ大酒のゑひのあげくに、其方を我手に入れん爲、夫鷺太夫にどくを以てころせしこと共、あからさまにかたらせ給ふ故、玉川驚き、扨は夫の敵は殿樣也、ぜひ此上はお恨を申さいでおかふかと、思ふ心こつすいにとほれど、さらぬ體にてもてなし、誠にさほど迄私を御ふ

びんに思召下されますこと、冥加にかなひしうれしさ、おろそかには存じませぬと、ちよろい男を取込むじかけに酒をしゐつけ、御こしを打足をさすれば、是は忝ひ命取め、どふじや〴〵とまき舌の口上の跡は、ぐぢ〴〵にね入給ふを幸に、お枕刀をつ取ずばとぬき、心もとに指しあてしが、さるにても能々思へば、夫鷺太夫、一生あんをんに暮されしのみならず、御加増度々に及ぶ上、みづから迄請出されしこと、みなこの殿様の御かげ、是を殺し奉るは冥加をしらぬに同じこと、又さやへ納しかども、げんざい夫のかたきをめの前に置て、むざ〳〵と立のくこと、思へば〳〵口惜し此うへは徳入めをさしころし、みづからも夫の供していひわけせんと、違棚より硯おろしてこまごまと書認、御ふとんの下にをし込、指足してにげ出しが、所々に錠をおろしければ、もれて出づべき様もなく、いかゞせんと御泉水のあたりに立ちやすらいしが、きつと思ひ付て其まゝ泉水へ飛こみ、水の落つるとゆ口よりなんなく外へぬけ出、それより宿へかへり、俄につかへおこり、いきもたへなんとくるしむ體をつくり病、徳入をよびよせ、脈みするふりにて徳入がむなづくしをしかと取り、其方自が夫の敵、しらずして今迄延々にせしこと、夫の手前へ立物かと、心もとを二刀に指殺し、其身もじがいせんとせしを、人人取付をしとゞめ、かくと御前へ申上しに、殿大にけでんまし〳〵、書置の品一々ぎんみの上にて玉川が貞節をかんじ、皆我無分別よりことおこれり、必其女殺す道にあらずと、それよりこひを思召切給ひ、玉川には善介がうしろみを、やはりいたせとの御意なり、

第二 ふつてわいたる夕立の夜のれんぼ、思ひもきらぬ無銘のかみそり、往生もふのやきやの煙

夫衆道念着のむつびは、五倫をはなれて然も五倫の胴ぼねならざれば、義通せず、爰に武州江戸四度橋といふ近所に、油屋の二郎作とてちよろい油見世出して、其日過のかつ〳〵の身上、一生しまつのかたまり男にして、十露盤枕にねいる夢にも、一りん二りんのせり合ひならでは見ず、物におそはるゝこゝろして、まよるうめくを引おこして様子をとへば、やすい物じやと思ふて物の買込をしたれば、さがりをうけたと思ふたと、身うちにあせをながして、ゐゝ夢なら二分の利づけでうつてのけふものをと、ぐぢ〴〵じまひにねる、其かんりやくにや身上持もさげず、上下三人

おなじ調子にくらす、ある時となりのたばこや少用ありて京へのぼるを幸に、此方のつかひごろのでつちあらば、年季極てつれて來て下されとたのみてのぼすに、緣〳〵のいき合年にや、とし十六になる男の子、しかも生れ付美質にして、髮のかゝり、わたりなみのいやしい小でつちならず、よしある者の子と見えしを、かんりやくなる二郎作も、天性男色にかたぶく所ありて、心ようけ合、中年十年のねんをさだめて、初めの名はさし合ふ方ありとて勘太郎とかへ名して、晝は商のしやうにせこをいれ、よるはたんばござのそひぶし、初の程はいんぎんに主あしらひ、かたづまりてこゝろよからずと、よる斗りは言ばつきをなをさせ、主やら兄やら女房やらのよい中ほどありて、諸事のかけ引き、勘太郎が身に引うけてさばくのみならず、人のにくまぬ生れ付おぼこにして、しかも發明の臟腑よりしあんし出して、うるしの實にてきやらの油をねりはじめ、麝香の入かげん、木の實の油のせんじあんばいに氣を付しゆへ、次第にうりひろめ繁昌して、後はだきをもだかの勘太郎油とて、お江戸は申に及ばず近國まで名を發しけるも、もと男色の美なるをもとでに、見世に出でて油の功能をいひ立て、都の野郎より、秘密のねりあんばいを傳受せしと、辨舌にまかせ、往來の人を相手にしてせりふ口上、若衆のよい風俗なるにより、かひはやらかせしも理ぞかし、二郎作もいよ〳〵ふびんをかさね、土藏穴藏の鎰までわたし、金銀の出し入をも自由にさせ、わが眞實の子のごとくして、居宅の外、南隣をも半分買たして、おも手代の新助次に佐次右衞門下男の權六、其外小遣の小でつち二人、ゆるりとせし身上、もと勘太郎がしあん一つの出來ぶげん、二郎作がめいにおくまとてことし十五、天然艶顏ありてまへうつしろ見る最中に、しかもわたりなみのむすめの子よりはこましやくれて、十二三の頃より戀にはつめいなると、武家の奥がたのきうくつなるに、茶のきうじ奉公させしに、氣のうかぬ病を煩ひ出して、しばらく養生のためとて、永うおいとま申て二郎作が方へかへりし、或時二郎作近所の友達の方より、兩國橋の花火けんぶつにと舟遊山に誘はれ、夕飯過より出て行かれし跡に、おも手代の新助は、假に在所いばゞがとりつめたとて、請人方より人をこしけるゆへ、勘太郎にこ

ことはりて、こよひは請人方に一宿いたし、明朝在所へまいるでござりませふと、とる物もとりあへず着のまゝかけ出すに、勘太郎おとなしく、路銀のたくはへ、すげ笠きやはんにきを付て、めでたく門出をいはふて出しぬ、折ふし小雨一通りふりて、南西の方にははしのかげところまだらなるに、いなびかり時々し遠方になる雷のひゞき、心よからぬよはと、用心のため、表の見世に佐次右衛門をねさせ、權六は南見世と、そこ／＼に心をそへし内にも、しきりに雨大つぶにふり出して物音もきこへず、かみなりしきりに鳴りし故、勘太郎手燭とぼして、穴藏へ水はいらずやとそこら見まはすに、奥のかたよりおくまのこゑして、勘太郎々々と手をたゝく、勘太郎心に思ふやう、此のかみなりにおくまさまのひとりね、こわいものでかな、わたしをよび給ふと思ひ、手しよく持つながらのうれんあげて、かやのはたにうづくまり、何の御用でござりますといへば、おくませきあげて、何の用といふとが有る物ぞ、雨はしきるかみ鳴はなる、此ざしきにたゞひとりをいて、どこをうろ／＼とうろつきやるといへば、此大雨に穴藏へ水ははいりませぬかと、見にまいります所といはせもはてず、其の穴藏に氣を付けて、○○○には氣がつかぬかといふ、こゑの下よりぴか／＼とひかる、あゝこはやとかやの内より飛出でて、○○、○、○○○○○○、○○○○○、○○○○たる、えもいへぬにほひしどけなく、勘太郎がくびすぢに○○○、ああおそろしや、しぬる／＼とその御こゑに、勘太郎わるびれず、此のひかりの跡にそのまゝなるかみなりは、大きにておそろしく、ひかりてしばし間のあるは、それほどにはない物でと、いふよりぐはら／＼となり出せば、これ見や、間があつてもなりをとの大きなに、そなたも手出して○○○○○、○○○○○たもと、いひにくさうに上氣して、さりとは勘太はうそつきじや、是ほど大きなかみなりに、どうして今夜はあかそふぞ、勘太いふ様、此夕立はしばらくの内にははれます、それほどかみなりがこはうござりますかといへば、いや／＼かみなりはこはふはなけれど、をれはそなたがこはいは、其よい器量して、どこの女のうへゝおちやらふもしれず、おとしてからはとりかへしがならぬ、どうぞこよひはよいしゆびじやに、此か

やの内へおちてたもるまいかとあれば、勘太ぎよつとして、はれわけもない、じやれこともよいかげんがようござります、どこの國にか、主が内の者にほれるといふ事が有るものでござりますかと、立んとするをおくまそでをひかへて、さりとはわるいがてんな人じや、そなたも色があればこそ、二郎作様のかはいがらしやるではないか、主が内の者を○○て○ても大事ないせうこ、女のはしたないはぢをすてゝ、是れほどにまでいふに、がてんしてたもと、こゑをふるはし、汗水になりてくどけども、勘太郎ちつともたゆまず、いかやうにぎよいなされましても、是ばかりは御請合ひは申されませぬと、すんとしてゐるおもざし、おくませひなく、涙ふりそでをしぼりて、さりとはかほに似ぬはぬつよい心てい、わらはが心にしたがやらぬを、もはやせひとはいはねども、きのどくなる事はそなたが、主と内の者の義理を立てすごしやるゆゑ主ころしの名をとりやるが、大じないかといへば、勘太郎もきもをつぶし、是はめいわく、何のわたしが主ころしのうちへいりませふぞ、さようのことはけがにもいふて下されますなと、色をむすんで申せば、おくまなみだをぬぐひ〳〵、しやくり上てなき〳〵いふ様、さればそなたの心づよい氣な人に、かうほれ出したもわるいゐんぐわ、といふて心にしたがやらぬを、つい其まゝにをかるゝものか、淵川へも身をなげて死ぬるにかくごきはめて、くどきかゝりし内證のふんべつはしらずして、いやといへばよい事かなんぞのやうに、むしやうやたらにいや〳〵といやる、そなたゆへにわしがしぬれば、何と主ころしではないか、勘太此一言に行つまりて、それほどの御しんていとは、露ぞんじませぬゆへ、つれない御返事は申ました、此上からはどうなり共といへば、おくまうれしさうに、さいぜんからそなたにかゝりて、蚊のゐる事をしらなんだに、埒が明いてから此蚊のよる事、○○○○○○○○、○○○○○○○○、それからのせんさくは、○○○○○○しらず、しめやかなる物がたりの跡の方にといきついて、つをのみ込音いはれて、立ちかへらんとしさまに、からかみしやうじにあたる音して、表のかたへにげ出す、扨は表の佐次右衛門めが立聞せしにまがひなし、かうした事を

佐次右衛門が耳へ入と、だんな殿にしれます、しれますればお前のお爲もようないとせけば、何をあんじやる、そなたも女房の有る身でもなし、わしも男の有身でもなし、しれたらしれた時のふんべつ、ぬれぬ先こそいとふべき露の身、きえなば一所苦にしやるなと、かたいやくそくの最中、だんなさまおかへりといふこゑに、おくまは奥へにげ入り勘太はむかひに出、それよりおくまと勘太郎が中、なんとなう納りしに、其夜立聞きせし佐次右衛門、日頃おくまに思込みしに、せんをこされしを無念におもひ、此ていならばたとへいかやうに思ふとまゝ、手に入ことはかたかるべし、手にいらぬとて打すてんは一生のちじよく、何とぞしてあいさつをきらするしあんと、晝夜これのみ工夫し、或時だんな二郎作きげんのよい折から、あたりに人のゐぬをよろこび、ひそかにいふやう、おまへさまのめいごおくまさんを、てんま町中ほどらふそくやの徳齋殿、いつ御きりやうを御らんなされましたやら、御惣領子と一所にしたいと仰られて、下されふか下されまいかの内證を、拙者めに聞くやうにとの御事、御返事次第にて表向より仰入らるべしとの儀と、うそ八百の神おろし、いそな口上ぬつぺりとかたりつける、二郎作うなづいて、とかくくまめが爲とあらば、いかやう共相談せふが、さりながら其内しあんして、返事すべしとおくにこそ入、勘太郎にかくとかたり、なんとした物であらふぞとの談合に、勘太はつと思ひしが、さあらぬていにて、どちみちお爲づくのせんさくなれば、おくまさまのすへのよい事なら、いかやう共御さうだんあそばしましてと、一通格式の極りたるあいさつ申て立のき、それより奉公も身にしますへやへ立入りつくねんとして、とやせんかくやと物思ひ、おくまさまのお心入を立てんとすれば、主從の禮を忘れたるに似たり、禮を立てんとすれば情をしらず、いつそ髪をもおろし高野の方へや行かましと、千度百度分別をかへて見ても、とかく生てゐてはよろしからず、死ぬるにむねを落し付し所へ、おくましやうじをあけ來りて、いつよりむつまじ物きがたり、こよひかぎりのたいめんと思へば、忍びなみだゑりに玉なして枕にみなぎり、死ぬる心と戀慕の心と、とめはざめのあはぬあいさつの、くひちがふこそあはれなれ、されど色をさとられじと、よもす

がらかたる秋の夜も、みじかうおぼへて今なるは、増上寺の七つか、つれない時のかねや、夜の明けぬ國があらば尋出だしていきたし、人めをつゝむ身ほどなさけない物はなし、かたりさいた所はあすのばんにと、ついおきわかれておくまはへやへかへりぬ、其跡にて心しづかに、なれそめし初より生きてゐては御爲にならぬ義理合の、いりわりを書おきにしたゝめ、かみそりとりいだして、心もとをきらんとせしに、いたちにおはれたるねずみ、天井よりうしろの方へ落たりしを、人やくるとおもひつゝ氣をせいて、ふかう切りこまんと思込みしかみそりの刄、のんどのあたりを切そんじ、死もやらずうめく聲、二郎作聞付、けしからぬこゑのするはと火とぼして來り、此ていを見てきもつぶし、是はどうした故にかくはせしぞ、やれ勘太郎と思はず立つるこゑ、おくまね耳にふつといり、驚きあはてねまきながらにかけ來りて、見るといなやに氣を取失なひ、あつと絶入るていたらく、尤ともいふに言ばぞなかりき、やゝありて書置披て見て、さりとはいきづまりたる氣哉、死なば諸共といひかはせしはいつの爲ぞ、ともに死なんとそばに在し相口取て、すでにじがいせんとせしを、勘太郎ふか手おひながらあはてゝをしとめ、くるしげなるこゑをあげ、かならずたんきなお心をお持なされますな、わたしが今死する皆おまへゝの忠死、それをかへりみずに御じがいあそばしますと、先の世ではふうふではござりませぬ、わたしをふびんとおぼしめすお心ならば、髮をばおろしなき跡を御とひ下されませ、外の者千人萬人より、おまへひとりの手向の水、くさむすびより知たを幸に、あの世であぢはひませふ、また私が申分をもどいて、共に今死でそはふとおぼしめしたら、あてがちがひませふ、きしやうに誠を御書きなされましたら、必死なずとゐてくだされ、それにせひとも死ぬる氣なら、わたしもしあんをかへて、未來では外の女房を持氣、尼になりて下されたら、ごくらくで居所を半分わけて待ませふと、くりかへし／＼いふこゑ跡ほどかすかに聞えて、つゐにこときれし、二郎作なみだながし、扨々ためしなき忠義の勘太郎、物ごとたまかにしてくれしゆへ、わけてふびんに思ひ、ゆく／＼は此のおくまと一所にして、我身だいをもゆづる氣なりしに、よしない佐次右衛門が談合に

ふは〳〵とのりかゝりし故、かはひとおもふ子をころしぬ、武士といふても此の子がやうな者はなしと、たゝみをたゝきくどき立てなげかるゝ、おくまとかけ合のなみだの玉のを、たえ入〳〵せしを、いさめあい〳〵して、おくまもなく〳〵勘太郎が自害せし、かみそりにて髮をおろし、貞れん尼と名を改め、比丘尼寺にして、晝はひねもす、むつ言を思ひ出してなみだを流し、夜はよもすがら、みだの御まへにして一蓮托生のねがひ、只佛に成度とは露おもはず、諸佛菩薩の御本願あやまたせ給はずば、先立し勘太郎とさきの世で、一所にそはして下さんせとあどないねんぶつ、申せば申ほどおもかげに立ちそひ、わすれんと思ふ心わすれぬよりは思ひ、とかく生きてゐてくど〳〵思の苦に、身をくづをらさんよりは、死んで鬼にせめられたかたが遙かましじや、其上勘太郎の死んでから日限も立行かば、先でよい女とそふてかも心もとなし、居所のかた付ぬ内におひ付て、一所にそはんと遺言をもどいて、日頃取かはせし文共あつめて、ほつとつぎ合せなはになふて、菴の外の桐の木に打かけ、かはひ男の跡追て死ぬる身の、書置するにも及ばずと、おしや十七此の世の緣を桐の葉の、ちりてむなしき後の世がたりとはなりぬ、女わらべのくちずさみにいふなる、往生もふの物とかや、その二三げんとなりの菴に、福入とてうはき道心、うを屋のかひがかり七貫五百十六文、茶屋のあげ錢七兩三歩、是れにこひつめられ、すりぬけ〳〵せしが、のつぴきならぬは門前のふのやき屋、のむすめのおなかに無分別のかたまり、此はらひかたにいきつきて、友道心の雲擇方へ文を一通書きのこし、右二所のかひがゝりと、ふのやき屋のむすめがはらの內とを、拙僧身をはなたずねんじ奉りし、一尺三寸の十體がしらゑしんの作のみだ如來と、ひぢりめんのふたの、是れはよし原さんごがかたみにくれしなれども、たからは身のさしあはせ、此ふたいろをうりはらふて、わつぷにしてしまふてくれよと、貞れんが死ける日に、福入もくびくりて死ける、わけしらぬ者は、そりやこそ貞れんと福入が、心中してしんだはとばつととりさた、さりとは忠と貞烈との中に折わるう、死の道にさへ邪魔のいるさだめないうき世、とかく往生も、ふのやき屋のむすめぞかし、

第三 付ざしにくびだけ打こむ比丘尼のひざ枕、しごゝろのよい八疊敷のおく座敷、

武士の奉公人の具足拵る氣では、飯汁くふは、けいせいぐるひするより無分別なるべしと、むかし頼朝殿の仰られしより、人も其心有故にや、繁昌の地ほど色道もさかんなる中に、定りたる色町の外に、茶屋女、くら宿、手かけ者、かこひ女、びくに、そうかのたぐひ又夥し、取わけ江戸は、小歌びくにといへる有て、をしはれて色をあきなふ其風俗、ちよつと見ては髮の有る女の如く、冬なれば地うこんにかくし紋の下着、上にあさぎにもみうら付て中はゞの黑帶、ぼうしにてかしらをつゝむ其品、びんのはへぎはまでたくみにこしらへ、うしろはしまだといへる髮のごとくにさげて、夏はさらしきぬちゞみに、むらさきあさぎのひつしごきの帶して、人通りの多き町々を白晝にびらしやらありく、中にも美尼の聞え有は、八くわん町の淸林知淸、ほそまゆの祐林、竹町にて尻振の西湖、同知うん、鹽の目の淸三、めつた町の林蘭、赤坂にてはつまみぐひの紫元、是等は第一名とりのびくに、そも〳〵比丘尼といふ事、佛、韋提化女のために十六觀經を説給ひしに、三千人の侍女かみをそりて、佛の弟子となりし、是を本の比丘尼といふ、別して女は罪重しと、佛すいらしく内證まで見そなはし給ひて、二百五十色の六ヶ敷戒法をさづけ給ひしに、今日本にては聖德太子の官女、はじめて比丘尼となりしも、もつぱら戒法のとりさばくり、かぶりのふられぬ様なる事をうれしがりてつとめ給ふ、此氣根にて男持たしたらこはやと舌をまきぬ、世すゑになりて、比丘尼も山ぶしを男にもちて、をつとの熊野まふでに相應のみちづれと、したゝるき比丘尼があとをしたふてまいり初、それよりこゝかしこのやしきがた、町屋の樂隱居へよばれてさけなどのみ、其うへにてうたうたひしより、少々不行儀になりさがり、今はまんまと色商買の中間物とは成ぬ、これをかふてなぐさむものは、武士の中小姓、やりもち、ざうりとり、そのほか町人の手代、下おとこ、お寺まかなひのらうにんものなど、色町へゆく事のかなはぬ者、ふりがゝりにあひたいして、しゆびさすことぞかし、これを竹くぎ丸太なんどとゐみやうをつけ、人に對しては、比丘尼とねるには、命有か屑かをまくらにさゝねば、あぶらくさみがないなんどといへど、此道ばかりはかんにんの

ならぬもの故、かなはずぶしに美尼にほださるゝ事、あげてかぞへがたし、ある江戸のやしきがたのなにがしわか殿さま、けふは糀まちの山わうへ御しやさん、それよりお下やしきにおいて、廿六日の廻り能のお下げいこ、よひより御供役をふれられし中小姓には、蘆浦雁介、浮洲岩右衛門、物頭㙒月十五郎、秋の夜長左衛門、惣吟味役常盤松右衛門に足輕兩人相添へ、下屋敷の案内ながらおさきへまいり、掃除等申付て待合せしに、御機嫌よく殿樣にも入らせられ、明日午の下刻上屋敷へおかへりの筈、それ迄は隨分下々以下まで、無作法のないやうにと、へや〳〵きびしく申わたす所に、蘆浦雁介松右衛門にいふやう、拙者儀おつぼねさまより、今日山わうへ十二とうあげてくれとたのまれしゆへ、うけとりて出でし所に、殿樣のおこしはきうにして拙者あとよりおつゝきし、其まにはや御下向ゆへ、御供にをくれじとあたふたいたし、十二とうの事をとんと打わすれて、今おやしきへかへつてからおもひ出し、おとしよりの、せつかく拙者儀を侍とおぼしめしてたのまれしものをと、きのどくに存ずれば、しばしの御いとまを申うけ、あげてまいりましたきと、ことわりながらしんじつに申せば、中さるゝ所もつともなれどもそれは下人に持せてあげられてもくるしう有まいといへば、仰のとほり家來にやりてもすむことなれども、若殿御武運長久御息災延命のためと、しちくどう賴まれしまへもあれば、御前の首尾はどうぞ宜しう賴みますと、ひたすらねがひしゆへ、さやうなら短日のみぎり、ことに諸事御遠慮の時節とて、わづか一時半のいとまをもらふて、こごりまはしに身じまいして、けらい一人召連れ、松町をよこぎれに糀町へとかゝりしに、八くわん町にて第一の名とりといはれし、清林といふ艶尼、供につれし小比丘尼の心月、俄かにはなぢをたらし、面の色あをざめしゆへ、清林肝をつぶし、ひたいをかかへはなぢをぬぐひて、かんびやうせし所へ、雁介おもはず出合て、何心なくとしてかくしてとさしづして、ふとかほと〳〵見合せし其おもざし、又有べきうつくしさならねば、しりめづかひにおもひ入をやる、此道こうしやの清林、かつて色にうときものさへどうやらかうやらものにするに、まして手ごたへせしめつきゆへ、つまり〳〵になさけらしきものいひ、め

にて見せたり口にていひ、あてぬやうにして手をあてなごせしゆへ、羽のぬけたる雁介立も立れぬじぶんを見ぬいて、是は存じもよらぬ御なんぎをかけましておとましや、わたくしは女のことなり、か樣におびたゝしき血を見ました事はござりませず、なんとしませふとたうわくいたしましたに、おまへさまの御出にてちからをえまして、かたじけなうござります、いくえに御禮申上てもあきたらぬうれしさ、幸わたくしがゐます所は、是よりわづか道なら一町半ほごかうまいりますれば、ついそこがわたくしが家、をし出してさけ一つまいりましても大事ない所、此うれしさを急に、立ながらの御禮ではすみますまい、しつかりと申上ませふ、ぜひとも御出なされませいとせなかをたゝいて、羽織の袖をひかゆれば、岩木ならぬ雁介。ふりあをのいて日あしを見て、家來に何としばらく隙をとりても、時切の時節までは大事有まいかといへば、下人も一ぱいなる口、少許り日がかたぶいても申わけはたくさん、其段拙者に御かこつけと、いさぎよういふを幸にいざなはれて、四疊半に三疊半の座敷を、三尺許りの二枚屏風にしつらふて、お定りの梅干、わたくしが座敷には、丸いものはさし合じやと、比丘尼に似あはぬかまぼこくひさいせねば、權現さまもおゆるしと、後はこうじてかつをのさしみ、はまぐりの吸物よりのみしこりて、盃まだるしと吸物わんにうつり、はぎやきの茶碗にとりかへ、舌もまはらぬ行儀ぶり、懷より手を入れてしめ合てのたはぶれ、下人きのごくがりて、おやしきにてお約束のこくげんよりは、日あしに大ぶんかんが立ましたといへば、何さ一寸さがるも二寸さがるも同じ事、此おもしろさがどうなるものじや、其方もこゝへ來て一盃のめとふとんかづいてもや〳〵と、上手ごかしにしゆびしまふて、此かたじけなさ、八まん大菩薩も御照覽と、付さし三盃の格をはづさず、是に大きにいきついて清林がひざまくら、じやらくらいひしを、清林も後はきのごくがり、たんと酒のゑひも見へますれば、おきていなんせ、あしたもあるに、おやしきのしゆびも何かと心もとなし、是ともにいく久しう御ゐんをねがふゆへなりと、さいさんしゐていさむれ共、いやさ大じをりない、そこしんいねとはおびんさま、是はどうじや、君ゆへならば別はない、是でもさし上る氣

ざしじやと、清林が手をとりてくびすぢにをしあて、ゑゝありがたいにして、おくびまじりの長口上、清林も持あぐんで、ぜひにおきさしやませぬと、お顔に墨付ますといひしに、雁介是はかたじけなし、さぶらひみやうがにかなふたことゝ、同じくはすみ付ずとも、爰に歌一しゆかいて下されとそばなる硯引よせ、手づから筆に墨付てわたせば、わたしもおまへゆへなれば是じやとたはぶれ、ほうがいに命といふ字をかいたり、雁介手を出していたゞき、とてもの事にそもじの御名を、此命といふ字の上に書いて下され、さふらひみやうり、いやとはいわせぬと、むりやりにのぞみしゆへちから及ばず、鬢と目との間に清林命とかきしを、ふところよりびんかゞみ取出し、ためつすかめつ見て是れがきえると、をれもしなねばならぬ、大じのお手をたゞをくはと、さしぞへのこがたなぬいて、ちよこ〳〵血のでるほど、もじなりにつきやぶりて、そのうへにすみをすりこみ、まんまといれぼくろして、ざつとほんまうはとげたり、かさねておめにかゝる迄の御かたみと、ふせう〳〵にざうりはいて、あしもとよろ〳〵とやしきへかへりし折ふし、御前より雁介をめすところへ、もどりかゝりしをさいはいに、うれしややしきのしゆびをあんせしに、重疊よいところへかへりしとよろこび、さけのゑひさめ、なに心なく御前へ出しに、殿雁介がかほを御覽ありて、其方がびんさきには、なにのためすみつけしとの仰に、あつとせきめんし、むづ〳〵としていひわけ立がたく、ぎんみ役松右衞門を召され、あのものが面の墨、いかさましさいあるべし、ぎんみせよとの御意ゆへ、立よりて見れば清林命といふいれぼくろなり、かくすべき事ならねば、松右衞門文字のおもむき申上る、殿御立ぶくし給ひ、是侍のすべき事にあらずと、すなはち雁介が供につれし男を召出してとへば、有のまゝにはくでうせし故、身が手討にもとおもへど、をんびんなるにしくはなし、一家中の見せしめに、大小をとりあげて、あほうばらひとの御意にて、すぐにきのまゝおひ出されて、いづくへゆきしもしれず、

第四 しゆかうは新し心は古あみ笠、きて見て興のさめたるびんばう神、西瓜の投打夫婦お手柄、

人間一生は運の強弱によるにや、其證據には、不斷くふ食にあてられて食傷し、疊の上にてけつまづいてかたわに成るたぐひ、時のまはり合せはぜひもない

さくやまぬは、いけせいをかひほうけたる人心なるべし、其極意を推するに、色よりねりこむこゝろのさばき、唯識止觀に眼をみだし、結跏(けつ)にして鼻端(びたん)を守らんよりは、けいせい道のさとりを極めんにはしかじと、ある寺の三人談義の上にてのべられし、すいの和尙のいきかたは格別な物じやと、口うつしのかた咄し慥に聞いて來たを、また傳(づて)にはなす中京のかしは屋が物語、是も上京にかくれなき、木綿屋の久といへる大臣、本名をかくして布久々と字して、三代つゞいての大がね持、常住ぬき入手して萬事は手代まかせに、盃と師走の帳尻を見る迄なり、てりふりなしに、きは〱に、二千貫目づゝのびる身だいがらにも有まいと、我ながら高うとまりて、萬古不易の大臣と自讃し、物ごとのさばきも、人より上かさをはたらく故、色里にてせんせいの名をとり、いたらぬことばづかひも、八まんすい樣ごうじやと、ついそやし立てられ、三年といへるに五千貫目、一もんじやの和國にすひ上られし引つゞきに、江戸大廻しの下し荷五十八梱、鳴戸崎にて打こみしより、身上左まへに成てするほどなることに、損のゆかぬこともなく、わづか八



年が内にちよろりぶんさんと成て、あるは借金のかたへ引おとされ、又かひ物のかたへとりあげられて、さりとはへればへる物か、こんな事思へば、咸陽宮のほろびたるも、さも有べしと思るゝぞかし、やうやくうり殘りの金子十一兩一歩三朱、鳥目二百六十三文持て、これをもと手にもと思はずして、金は身を守るに貧しく、かへつてがいをなすのもといと、ほうこぐがなま悟りを引て十めんつくり、すぐに島原に行き、めいらぬせんしやういひちらし、十一兩一歩の金子、山寺のゆふべさびしく、手代共いひ合、やくたいなしのだんな、こらしめのためとさやうの正脉たがふ男、此方共ハ御出御無用といはれて、なまじいのをとこ氣、なんの手代づれに、こしひざをかゞめてと我を出す、其年もくれて初はるの明ぼの、山の色合、むかしは揚屋より見しも、夢となりゆくを思へば萬事塞翁が馬、枕を軒頭にそばだてゝ、雨を聞いてねぶるまはしばしと思ふ内に、あふぎあふぎとうるこゑ、まんざいがつゞみ、大こく舞のはやしに夢をせゝられて、つくねんとおきかへり、かね持しあんに氣をつけてたくみ出す商買、身に紙子のひとへものきて、前にもうしろにもかるたのちらしもやう、かたより袖のあたりにはけいせいの名を書て、細帶にちぎれあみ笠、やれうちわ持て、さあござつたはくびんぼう神がござつた、十二灯でかへるはと、正月の中時分より、人の門々へわめいてはいるゆへ、是はいまくしい物がきたわと、錢やつてかへす家も有、たゞ通りやといふ家一軒もなく、剩さへものいはひする親仁、かるいうら借屋のかゝ連も、呼かへして錢をやる、ふりがかりに見し者共は、さりとはたくんだり、是ははやりませふといふて行もあり、是を思へばよくの世中ぞかしとおかしく、京中十七日ふりあるいて、もらひためる所の錢三十七貫五百十六文、米六石七斗八升せんぢちやが二斤許り、とかく氣をしなさぬが金事じやと、殘らずうり拂ひて金子にして、一歩七十三切錢五百文こしに付て、江戸のかたへと心ざし、大津迄かごをかりて行くに、日の岡の上にて、田舍らしき男をのせたるかごとかゆる談合、大津の八町迄七十くせといひて、ちよろり手打つてかへ、のりかはるといなや小いねぶりして、やつこぢや屋にてかご立つるに、目をさまして見れば、かごのまへにちいさきかはざ

いふ有、扨はさいせんの者が、さいふなるべしと思へど、いづくの者ともしれまいと推して、ひそかにざの下へ引こめ共、若はかごの者めがさいふもしれずと、さはらぬ様にしてうごかして見れば、おもたい程出るかはりじあん、是から俄に用事有よしにてかごをかへさば、若はかごの者めがさいふならば、とりて歸るべしと思ひ、是々かごの衆、拙者は此所にて、あふていなねばならぬ人あり、かごはこゝからいんで下され、是は身共が損なれ共今俄に思ひ出すが、こなた衆の仕合じやと、其身ばかりかごより出しに、かごかき心得て若し旦那さま、是がなふては江戸へはござられますまい、道々もお氣を付られませいと、さいふをとりてわたせば、誠にいかいそさう〳〵と、ふるひふるひくびにかくれば、かごには何もござりませぬ、御靜にやすんでござりませと、わかれ〳〵に成し故、ふところの內にて、さいふをぎんみしてみしに、かるた一めん、すご六のさい二つ、金子七十兩、銀十七匁三分、錢二百五十文、布久見るより是天のあたへと悅び、京へやもどらん、江戸へやゆかんと思へども、もと江戸へと心ざす道に、此樣な仕合に出合へば、江戸

へをもむくがよい道理と思ふ內に、大津へのもどりかご、卅八文じやといふを幸に打のり、海川のわづらひもなく、馬とかごとにのりづめにして、十一日ぶりといふに品川口に着て、江戸のにぎはひにきもをつぶし、大名の往還、旅人の出入、商人の走りまふてい、ふだん萬日のゑかうばのごとく、うつかりとはあるかれず、京のにぎはひとは、格別のせんさくじやと、むしやうに氣がさに成て、京を出し時の心とは、京と江戸ほどのちがひ、道のゝりは百廿里なれ共、是程にもちがふ物かと思ふ程、此大ごみのけいせい町、見ずにをくも氣がゝりと、すぐに品川よりかごかりて、吉原の門口につくとひとしく、けいせいかひの氣になり、ひとくせ島原にて鶯の治平が、西國めぐりの旅すがたにて揚屋へ來りしに、道中出立をすぐづけにをしこむこと、しやれて新し、又有まい圖じやと、それを肴に、ざつと一夜のみ明したることありしも、今身のうへにきのまゝのあはせすがた、しらぬ里のきさんじと先江戸町を一覧しをはりて、しん町へ取かゝり、けいせいの道中、都とは一風かはりてゆたか成足ざり、むな高に帶してわきめふらず、かぶろやりて

も、水へいらぬ時々のはやりもやうきて、跡先に列を引いてねりもつて行く風俗、にればにるものか、京にていひかはせし和國がおもざし、はなのあたり、口もと、見めぐらす程いきうつし、身は江戸に在りながら、目斗は島原かとおやしき程に思ひ込しより、色は分別の外にして、もと七十兩の金子も不慮のまふけ、ひらはぬ先と思へばくやしからずとむな算用極て、そばにゐたるとしがましき揚屋の男に、不遠慮に名を尋しに、長崎屋平左衛門内にて、千手さまとて、此里にかくれなきぜんせいの御太夫と、りちぎにをしへしまゝ、すぐに付こみて、京でかねつかふたるおかげにて、初會のしこなしより思入り、常とかはり月日立にしたがひ、次第々々にしみ込て、ほんのめをともかくやとわきからも推量するほど、七十兩の金子もいつのむかし語、剩へあげ錢七兩二歩の殘銀に、我ながらかたみすぼりて、をのづから行がたく、其よりしるべの者を賴みて、かんだの見付先須田町に、氷水うる親仁と相店して、西瓜の切りうりあきなひ、西瓜の上に役者の紋所をほり付けて、もん西瓜と名付けて五文七文づゝ高賣して、其日ぎりにしまふかつ〴〵

の世わたり、かなしいせんさくぞかし、一せきの身代かねつもりにして見れば、むかしくるわにて、太こにとらせし、かりそめの露ほどのせんたく、許由がひさごすてられぬ身ひとつと、我ながらおかしく思ふ折から、所の者とおぼしき男、風ぞくいやしからぬが、使にやりし下人が歸る間、相店のひや水うりがみせにこしかけてゐしに、親仁ひや水あがりませぬかといふに、のんどかはきし故、大分さとう取込で、二三ばい我まゝにのみちらして、錢をかずに立んとするを親仁とゞめて、是だんな殿、錢をいていかしやれといへば、げびたことといふ男が有、かさねて黃なる物をはづまふといへども、亭主一圓がてんせず、きなる物とは何のことぞ、其樣なしやれたることはしらぬほどに、たゞひらたふ錢くせとこは高にいさかふを、布久内より見付て、是れていしゆ、其御方の水めし上られ、あたひを置かずに御歸りなさるゝと有て、見ぐるしい何ことじや、其水代は拙者うけごふだ、お歸りなさるゝなら、だまつてかへしませいといふに、此男悅び、先西瓜屋に立入り諸事の一禮いひて、拙者は御當地にかくれなき、俵屋の七といへる男と語りよる程、

色咄しにわり符のあふたごふし、こころ〴〵ことばの引はなしは、七より色ざたには、上こすしこなし見へしまゝ、七もたいていの西瓜うりほどにはゑこなさず、都上郎のもの語を聞きよるに、一ていしやんとして物ごとしつこからず、一座しとやかにして床の内やさしく、琴棊香茶に心をよせ、ことばにみじんかたことなく、ふるべき所をふらずふるまじきばを、けつくふり付、ゐなか者と見ては情をかけ、すいと見てはこなさず、おりめ高なること諸國にうへこし、ひよつと出ては手をとり、むづかしい口說には打こまれ、けつくかね出して、きうくつなめしにゆくにひとしく、やりてもかぶろも、客のかたからつかひはせいで、かへつてつかはるゝ様になるほど、するほどなことにおめる氣出て、一座おもしろからず、かたらふなら申さふなら、こんなとではござりませぬ、ひつきやうはけいせいを米といふは、ふみこむほどおもしろふ成るといふ心なるべし、きのふよりけふはおも白く、はやあすのことも、今から面白からふと推量する程、けいせいの氣も其の様になりゆく、物は初手が大事じやといへば、上ゐずまいをなをし、拙者儀上がたはしらず、當地の色里にてはかねつかふすべも知たれ共、こゝに一つきのごくなることあり、巴屋が方の淀野といふけいせい、此里第一のふり手、是をしこなさいではと太こ末社にもみ上げられ、しよ會一座見事に首尾してから、其跡不通に四五十度もふられし、佛のかほも三度なづれば立はら、よほどむつとしてゐれども、何ともすべき様もなく、初會はなせにふらなんだぞといへば、淀野いふ様は、されば私は此里にかくれなき、ふり手じやとおぼしめし、そこをのぞんでおあひなされましたれば、もと戀ではござらぬ、ふる一種を思ひ込でおあひなさるゝ上、是をふつてはおかしからずと、一ぱいはまらしました、其跡からが私がくせじやと、すんとしてゐる、どふぞ是をつゞいて、しゆびの手は有るまいかといへば、成程其には能きしあんこそ候へ、首尾の有無はしらぬこと、一生たれにあひましても、今日よりふりますまいといふ手形さしたら、なんとござらふといふ、七大に悅び、それ程に仕あふせたらば、いか様成るとなり共貴殿の御望次第、大分小分にかまいは致さぬといへば、さやうならば若しおふせましたら、銀子二貫目下さるべ

きむね、手形をしてといひきらぬ内、みな迄いふないふな、其段たヽみこふだと、はや二貫目の手形して出せば、是は早速の御心入れといたゞいて懐中し、日頃心易くかたりしゐはい屋の權左といへる、和泉風の浄るりの物まねしをいざなひ、手だての通りいひふくめ、兩人ともに武士出立にて、則權左を家來ぶんにして三人共に立こへ、七獨かたわきに忍ばせ、其身は千手にあふて、たくみの趣のみこませ、是さへ首尾よふしおふせると、貴さまとはめをとになるやくそく、八幡大菩薩いつはりはござらぬと、互に悦びてのみしこる酒の上にて、ひよつと千手久と口說せしを、權左はら立て、下人に持せしはさみ箱の内より、わき差取出し、千手が首水もたまらず打おとして、其まヽからだには小袖打きせ、首ははさみ箱の内にこけ込み、權左其わき差にて、すぐにはらきらんとせしを、久あはてヽ飛かヽり、をしとめ／＼する、ころ高成るにおどろき、揚屋の亭主下男、棒ちぎり木にて取まはし、太夫さまをころしたる相手は、則ち取とめたり、打のたヽけのとひしめく、久大手をひろげ、かならず少にても棒をあつること、むづかしう成る、其子細は今きられし女は、拙者が常にあふけいせい、今日拙者身上相濟しいわひに此所へ來りしを、目出度塲にて、此女かぶり付きたりしはら立に、下人が其樣に切害しぬ、家來の身にしては道理至極せり、拙者も此首尾主人へ聞へては、一生のすたること、知行にかへてもをんみつにせねばならぬ所、此上はかねせきならではすまぬせんさく、とかく亭主の了簡にはもれまい、先棒を引けとて引かせて、扨此上の了簡、もと千手がきられしも、人をふりたる故ころされたり、此以後此里の傾城連、客をふりますまいといふ手形をして渡せ、さなくば相手權左にはらきらせ、拙者も武士をすてる氣に成と、其方達はめいわくし、此方は別義なふ濟とむる也、手形して渡さば權左がせつぷくを止て、其上にはいづれもの了簡次第といへば、よくづくのせんさくにて、とかく千手は五十兩にてかひ切ました女なれば、もと銀の損さへ參らずば、かんにん致しませふといふ、布久聞て、それは安いこと、必竟五十兩の金子さへわたさば、其方が申ぶんないはづ、とかくぶじにすましてやるべき間、今いふ通り、諸客をふるまいといふ手形をするか、成ほど相心得まし

たと、則内のけいせい、太夫天神鹿戀はし迄も、をし込にして四十一人、開傳へ〳〵に五人三人、かさねて客をふりますまいといふ手形して見すれば、久請取て名書を見れば、道芝、かく山、ここうら、あげ卷、與に淀野と書て有りしをうれしく、さんちや手形と名付しは、ふらぬをいへることなるべし、久大臣七をよびて其判形を見せて、もはや是程慥成ることはなし、御約束の銀子三貫目申請けんといへば、大臣きやうさめがほして、成程銀子やる約束、それをとかふはいはね共、慥手形は二貫目と有、三貫目とはいかゞとあれば、それは大臣手がわるい、三貫目と手形有る上はのがれぬぼと、むりに三貫目取がてん、七聞て、成程手形には二貫目と書けれ共、其方があふ傾城千手を切ころしたる上、五十兩の金子を、かはりに立てんと思ふ故、二貫目の二の字の間にすみを付て、三の字に書まぎらかせしにまがひなし、其上千手が首切しは何ことぞ、人をころしてことをさばけとは申付ぬ、先大なれ小なれ死人の有る上は、をしだまりてもゐられぬ所といへば、布久くつ〳〵とふき出し、誠千手はまんぞくにてゐられます、今日のたくみ、千手が首と見へしは、拙者が商賣にする西瓜に女かづらをかけさせ、おもふさまおしろいをつけて、まんまと人の面に作り、西瓜を切てなげ出したり、其時西瓜のくろざね三つ四つ飛ちりしに、はつと思ひしが、此家の六助めが西瓜のさねを見付け、あれ御らんなされませ、おいとしや千手さまの、おはぐろ付たはがきられてござりますといひたる時は、ふき出す程おかしかりき、それから氣を付けて見れば、誠の首を討たるに其まま、そこ一ぱいの思ひ入、江戸に似合た手くだ、都なればかふはしませぬ、是々千手たいくつ成るべし、おきよ〳〵と引おこして、後は惣座中大手を打て、扨もたくんだり〳〵と大笑になり、此悦びの次手、あたたまりのさめぬ内に、三貫目の銀子を申請けて、千手が身請けとごしめけば、亭主がてんせず、初は五十兩なれども、今あのとし迄やしなふて五十や百では、いかな〳〵、やることならぬといいじばれば、久がんしよくをかへ、まだ間もないに、手のうらをかへすいひぶん、二貫目でかふてをいたとはいはぬか、それ故大臣に三貫目のやつかいをかけて、請け出してもらはんと思ひしといへば、七のみこまず、二貫目こそ手形し

てやりたれ、三貫目は思ひもよらぬこと、其上大事の手形の、二の字を三の字になしたれば、是れほうご同前、謀書といへる物なりと、赤面していひちらし、こんな手はくはぬ男と、わめき〳〵歸られし故、どこもかしこもくひちがふて、もはや請出す手もきれはて、やりてかぶろはゆびざして、すりよかたりとつぶやけば、人におもてをあはさんより、兎角死ぬるにかくごきはめ、其日は笑れなりに歸りて、夜の明るを待かね又よし原へ忍行き、せんじゆにあふて段々のいひわけ、二の字を三となをせしも、もとはみなこなた故と人めをつゝむなみだに、せんじゆも今迄のいきかたしりぬいたる上、とかふへんじもなりがたく、とかく死ぬるにおとしつけて、目で物をいはせ、二かいへあがり、久は廿九せんじゆは二十一、おしやくるわの露ときえし、死人のしもくなりになりたるは、かね故じやと、きしろい中のかゝる口いふ所へ、七は三貫目のかねもたせて來り、いかにしても久といへるは才覺者、千手を請け出して一所にをき、色ごと一通の談合相手にと此所へ來れば、只今兩人共に死にける由、七大におどろき、扨々淺くさくわんをんへよらずに、すぐにきたらば、死なすまい物を〳〵と、あたまかくゆび先に、たまるは三ぐわんめ、

傾城風流杉盃江戸之巻終

傾城風流杉盃大坂之卷

第一 沖をこいだ夜ふねの物語、おばゞの上唇にあぶら墨の作り鬚、

當年は豐年にして、米のをもさ一升に付、例年より七八十匁ほどをもたく、一日々々とさがり口にして、大津口より大坂は、一石のまへにて三十匁餘の大さがり、木わたが河内和泉では、八九十匁位のせんさくじやとかみゆひの床風聞、なぐさみながらあたつてみて、やすかわたでも米でもかふてわけてとらんと、おなじ思ひ入の親仁共三人づれにて、大坂和泉へと心ざし、ついでに開山忌おがみて、すぐにふしみのしもく町、是をみすてゝは通られまいと、こゝかしこのぞき行き、三味せん引く格子あれば、小歌うたふ女郎有り、人の心の同じからざる事、其の顏付を見るが如しと、むかしの物しりのいはれし、是ばかりはいやとはいはれず、目口鼻の有る所同じうして、少しづゝのちがひにて、それ〲のうつくしさ、心もかはれば物ずきも一がいならず、とかくけいせい町とよ市の道具とは、ひる見てはけでんじやと大わらひして、京ばしより三十石の乘合、ぢや〲いふころばかりにて、物の色あひもさだかに見えぬ宵やみ、淀のあたりよりほんのりと山のはしろみ、水車の樋に月引こぼすと詠じ、日頃の中納言と異名付けられしむかしのことなど思ひつゞけて、月かげにのり合を見れば、坊主もあれば若衆も有、參宮のだうしや、さるつかひ、思ひ思ひの小歌淨るり、義太夫やら嘉太夫やらいろ〱のたのしみ、片わきには七十許りのばゞさま、下女を屛風にむすめをかこふて、四角八方に目をくばりて、大事にかけらるゝも道理ぞかし、はるかわきに武士のやり持らしき男、作り鬚をいらゝかし、たゞ乘たるをせんしやうに、こりやせんどうめ、たゞのせたをはら立に、舟などをそくやると八幡かんにんいたさぬといへば、せんどうゑせわらひ、二合半くふしやちほこ殿、何をがや〱いひめさる、お手まへひとりに作た舟ではおじやらぬ、去八月中頃にも、ちやうどおてまへが樣なやつこが四人、千日で物の見事にしまはれたといへば、やつこそらいびきかくもおかし、三人の者共聞いて、それは京でも沙汰の有し事、舟かす事も他生の緣、はなして聞しや、これはなすにもとで入

た事ではなしやすい事なれども、だうくやうがなければ、鰐口のねがならぬ、茶碗に一ぱいきしんさしやるなら物語りしませふ、それはやすいこと、そこらは京もの、きさに一盃のせしゆ、かいみやうは三人ともにまだないとわらふて、さあ〳〵とせがめば、せんどうこはづくりして、先づ難波にかくれなきあばれもの、大將分にはゑたの小八郞、したがふ者共にはいけだの八介、きやらの彌市郞、三九の平內、此の四人の者どもは、病中組と名付けて惡性者の頭取、ふだんいろぢや屋けいせい町へはいくはいして、人のたのまぬ酒のあひ、むりなる口舌のかた持て、いひぶんにしあげて人をふみ、物を取る事數をしらず、其外そんじやうそこの茶屋へ、ゐなかより珍女が來たの、新町へつき出しの女郞が出たなんど、さたを聞と否やにかけ付、初會に逢ふを手がらにし、かぶろやりてもいやがりて、うそついてあはせぬか、又は大臣初會をのぞみ、しつほりとせし一座をも、むりにかるといひかけて、しやりむりかつてかやさねば、二かいからは手をたゝいて、太夫がをそうてさびしいと、やりてかぶろをよびにやれど、あい〳〵とへんじして、あちらこちらともがけども、此男共かへさねば、持あぐみてひそ〳〵と、後は大臣はら立仕舞、花代をかずに立かへれば、それだけていしゆのくぼみになれど、つぶやきながらせふことなく、めいわくがるをおもしろがる、先ゑた小八がふうぞく、やせぎすにしてせい高く、もめんぬのこにもみうら、中はゞのうち帶、筋がね打たるはなねぢをこしにさし、けいせい町へのらついて、むかふよりくる人は、鬼が來てもよけることなく、侍と見てはさやあてし、力わざいか物ぐひ、爰に天滿橋の內の方に、やうじ屋角兵衞とて、生れ付女のすく風一種をたのみに、あつびんに大ぞへにかみゆい、きやらのあぶらたつぷりと付けて橋のうへを通り、おりわるう小八等に出合しが、やにはにつかまへられ、其方がびんつき、人はすいてもをれがきにいらず、ただいまこゝですれば其通り、ゐぎをぬかすと此川へつきおとしてのけるがと、にが〳〵敷貌つき、角兵衞ふるひ〳〵、御意に入りませふなら、あたまのぶんはどうなりと、御じぶん樣しだい、命はどうぞ〳〵とわぶれば、それこそ一だんの上ふんべつと、ふところよりかみそり取出し、なんなくいとびんにすりこかさ

る〻、其時のおそろしさ、はふ〳〵にげてかへりし跡へ、佛師のそうりんとて、四方髮にしてりちぎ一ぺんの男、出合ふを幸に是もやにはにつかまへて、ふところな物引たくり、其方が名のそうりんといふは坊主名、それに四方髮は似合はぬと、りふじんにすりこかし、ちよろり坊主にする惡黨者、其の外か樣のたぐひが、かうじ〳〵て自滅せり、扨又いけだの八介は、元來江戸者にして、かつかう小兵なれ共、ごうよりきものふとき男、若輩の時分、江戸にて火事のじせつやねへあがり、すべりおちて高水道の箱のかどにて、眼の脇七寸許り、めへかけて疵をかうぶりし、それをとりえに男達にまじはり、人のしらぬをよろこび、疵自慢し、拙者江戸にてよし原へかよふ折から、むかふは五人しかも侍、此方は拙者一人、金龍山より喧嘩し出だし、よし原へ取付きの土手のまん中にて互にぬきあひて、火花をちらしてたゝかふて、なんなく侍三人やにはにきりふせし、其時きられたむかふ疵、此疵をかかへて、のこつたる二人は田のあせへふみおとし、そこをのきはのいたれど、人をあやめて江戸にもたまられずよぬけにして今爰へ來て此なり、江戸に居ためてゐれば、七八百石許りに有付く口はたくさんと、疵自慢する天性のぶさい男、ばくちの場にてつかみ取、風呂いろ茶屋へ立こへては、めつたにはいりて酒をねだれ、人のふところへ手を入て、はながみぶくろを引ぬき、金銀斗りを打あけて、あとはそこへすてゝをく事、其外ちぐさいめにはたび〳〵出合ひたれども、つゐにかみなりといふ物を手にかけてきつて見ず、どうできつて見たいと夕立の折りから、大わきざしをさしこはらかし、爰かしこをはいくわいし、かみなりおちたらをのれ〳〵と心かけて通る、或時四つばしのほとりにて夕立に出合て、こえぶねの有しを、せんどうにもことはりなしに打のりしに、折しも此舟はしの下を通る時、はしの上を通り合せしゐなかざとう、かみなりのなると、ふみはづして落るとが一時にて、此舟の內のこゑたごの中へ、まつさかさまに落る所を、八介、かみなりめ心得たりとて、拔打にかたもゝ切ておとし、もゝのふとみを一つだ、小口切に切てとり、手はしかく立のき、年來の本望とげたり、是をあぶりてせしめんと、急ぎ宿へかへり、火ばちに火をおこし、たうがらしみそからくすりて、うら表よ

り付けあぶり、徳利もたせて女房に酒かひにやり、すでにくはんとせし處へ、さいぜんの船頭をさきに立て大ぜい來り、こゝへつけこふだ、其方何のいしゆ有て座頭を切た、のがれは有まい、かくごせよとわめけば、八介せゝわらひ、終に座頭を切たる覺なし、それがし平生の望みにて、かみなりを切て喰ふて見たいと心がけ、今日はしの下にて、かみなりの落る所を切ころし、ふともゝにたうがらしみそ付てくふ所へ、何をじやまをいひかくるぞ、それにはせうこばし有やといへば、やがてせんどうをよび出し、此者がせうこ人といふ、いや其時はかみなりじや、いやそれはざとうじやとあらそへども、切たにまがひなければ、ざとうがふともゝにはたうがらしみそ、八介がくびはころり山椒みそ、つゞいてきやらの彌一郎、見た所はにうわにて、銀をかる上手にして、かりてからつゐにかやすといふことなく、いぢのわるさどうもいへず、大上戸にして大食、かりそめにもりくつをいひ、ねたれかけて金銀をとるゆへ、近邊の者共持あぐんでゐたりし、ある時父親の淨味に、きやらのあぶらをかひにやりしに、錢をくしやれ、調て來んといひしを、彌一郎淨味をはたとにらみ、今まで物かふに錢やつたためしがない、あはうつくさすと、いてとつてわせいと、はらばひにねながらいへば、おやじとかうのことばなく、むづ／＼として出られしに、をのれは二かいへあがり、日あたりにかゞみ立てゝ、ひげぬいてゐる所へ、淨味あぶらかふてきて、二かいへあがりわたせば、彌一郎かひのふた明て、やがてびんに付て見て眼をむき出し、やいおひぼれめ、としにこそよりたるもの、このあぶらがかたうて付らるゝ物か、大かた人のあたまに付らるゝほどらいが有、是では髮がぬけてわるい、とりかへておじやれとなげかへせば、おゝそんならかへてきておませふと、ねぢむいて立さまに、あやまり貝をふみわられしを、彌一郎むく／＼と起あがり、其まゝ親仁の顏をつゞけさまに十二三ほど見しらし、ちかごろ慮外千萬、拙者があたまに付る物を、をのれがそのすねにかけて、持あつかふは何ごとぞ、いで此すねであしらふて見せんと、おやじ淨味が胴ぼねをしたゝかにふみ、あげくのはてに、二かいより下へふみ落したりしに、折わるうはしごの下に、たばこぼんの有りし上へふみ落され、胴ぼねへはいふ

きがにえこみて、たばこ一すいの夢とはきえぬ、女房是をきやみにして、ぶら〳〵とわづらふを、近所のいしやをよびあつめ、さま〴〵のりやうぢ、はかどらぬをきのどくにおもひ、さかひに上手のいしや有とよびよせしに、脉第一草臥(くたびれ)見えて折々打され、ねあせ、ほつねつし、ふくちうあひのくだるまで、一つとしてとりえなき病人ゆへ、たつてじたいめされしを、ぜひともねがひ、人參三分づゝ入て十四五ふくの藥かずでも、しだいにげんきもよはりて見えしが、廿日ほど頻てつゐにむなしくなりしを、彌一郎大きにはら立、へたいしやのまいすいしやのといふ所へ、かくとはしらで長ばをりこしにまいて、お見まひ申とのり物より出てはいられしを、やがてあがり口にて引こかし、をのれ大事の女ばうを、まだら〳〵藥をくれて、あげくのはてにころしたは、何のいしゆでころしたぞ、大ずりのめくらめと、さん〴〵惡口するのみならず、ふみこかしてのけしゆへ、いしや大きにはらを立て、はじめより大せつの病人ゆへ、たつてことはりいひし所を、ぜひともくすりをのぞまれしゆへ、ぜひなく調合いたせし處に、此いしやが藥でころしたりと

て、ちやうちやくせらるゝこと、ぜんだいみもんの惡人、をのれおもひしらせんと、あいざめのあひ口ぬいて、ひねくりまはせし處を、彌一郎かいくゞりてもぎはなし、大がまにうちつけて、さゝらのごとくに及をうちかいて、いしやぼんになげつけ、をのれ女房ころすのみならず、又それがしもころさんとや、ちかごろのぶさいい醫者ぼうず、げんざいの女房のかたき、ふみころしてのけんとて、うでまくりしてかゝりしを、近所のものどもかんびやうのめん〳〵、是はいつけうおいしやさまにも御かんにんと、やう〳〵になだめしかども、いしやのいきどほりしづまりがたく、是をぞもとにしまはれしとのとりさた、又三九の平内は、男ぶり小ひやうにてはなの下につりひげ、さるまなこにしてめの内ちばしり、みつちやづらにてやりおとがい、ばくちの頭取、しかも手のながきこと、ゑんこうよりつり取くらゐ、けん〳〵わずきにてわうちやくもの、百千のやいばの中も、物のかずとも思はずして、人を見る事ちりあくたのごとく、ふきぬきづきんにあたまをかくし、冬なれば紙子に石ずりの八景のかたぬき、夏はふと布のかたびらにしやれかうべの

ちらしごもん、だんだらすぢの丸ぐけの帶、はつはざめの一尺八寸、あさぎたびにたんぜんせきだ、ぬき入手して色町に立入、色州をせびらかして、たま〳〵あふたるけいせいにも、ゆびきらせ其けいせいの名をかいなに入ぼくろにして、一度二度にかぎらず ちや屋をんな まちをんな、人の女房 下女こしもと、むすめ 比丘尼 そうかのたぐひ、衆道事にては若衆の名、野郎かげまの苗字まで入ぼくろにせしゆへ、兩かいなにかきあまり、せなか一ぱいにかきちらし、わきばらむねの間に書きみちしゆへ、過去帳男と名付、いれぼくろせし者共に、のこらずゆびをきらせ、一升に成ると其まゝ、京の島原 江戸のよし原へうりにくだすに、一合に付て金子七兩づゝに究て、ぜんせい太夫が二合三合、天神かこひが一合あるいはこなから、それよりはし女郎は、一本に付て一兩二歩づゝに相場を立て、中にもゆびなりのふつゝかなるは、直段おとして、北むき靑のれんなどから、かひはやらかしけるゆへ、ゆび代に大分の金銀をとりこむをおもしろがり、いくたりにもゆびきらせしが、女わかしゆをしませにして、何石何斗といふにおよびぬ、其ゆび代をとりこみても、自分がとくぶんにも付ず、たゞ四人の者ども寄合て、すつぽんの丸かぶり、狼のつゝ切、赤子のねりみそ、牛の尻のでんがく、やいとのふたのあへ物なんどゝいふいか物ぐひにしあげ、其おんづめには色里へ行て、さけうちのみてあそぶ、ある時本町のおしろい屋に、みごとなるむすめありと、きくよりかけ出してうちへ入て見れば、おりふし一家一もんよりあひて、さかもりせしところへふみこみ、むたいにをさへてゆびをきらす、こはらうぜきと立さはげばをのれらびくともうごいて見よと、わきざしひねくりまはしてねめつけかへれば、座中うろ〳〵としてゐる中に、七十餘の禪門平内がおさよりつけこみ、家主へつけとゞけして、それよりだん〳〵惡性ろけんし、ついに是も自滅してうせたりと、實とうそとをとりませてなが〳〵とかたれば、三人の者共よだれをながし、さりとはゝなし上手じやといふところに、ふねのうちなるばゞさま大ごゑあげて、何のいしゆがあつて、をれがむかふば二枚、口にてすいぬきし、かんにんせぬ、あひては此ふねの中にあり、船人衆舟のつかぬ内にぎんみして下され、せんさくせねばきか

ぬと、戀けのないばゝさまかさ高にわめかるゝ、のりあいの者共も、よもやあのばゝの口は、たれもすふまいが、くらかりで、むすめごとゝりまぎらかして、おばゝのはをすひぬいたものなるべし、此のり合ひの内にたれじや〳〵と、互に貌と〳〵を、ながめあふてもしれざりしに、ばゝさまのうはくちびるに、きつかりとあぶら墨の付きしは、扨はかのやつこがすふたにまぎれはないと思へど、のり合ひは見ぬ貌、せんどうはきかぬふりして、八けんやの明けぼの、とうふこう、たち魚こうのこゑせはしなく、舟より上りて、いづみのかたへ三人づれにて行し跡は、どうなりしもしらず、

第二 ないてきふしゃみ川のさりきた、明ぼの横雲のわかれに心中のわきざし、是が正銘、

三月三日は大汐とて、うら〳〵の海邊汐干る事、つねづねの汐時よりもおびたゞし、取わけ堺のうら、鹽の干る事凡そ海の上一里半許り、あはぢ島へも雪踏はいて行きぬべし、餘の海邊とちがひ其風景のおもしろさ、前にはすまあかし西のみや、うしろは住吉四柱の神社、きしの姫松もみどり立、京大坂より是を見物にゆく人、又浦の眺望より樂しみ多く、はまぐりあはびうつせ貝、うみ石めなれぬうき藻なんどを袖にして、汐のたゝゆるをかぎりにあそぶ、泉州かせぎといふ所の百姓惣太夫とて、其身は無筆にして、正直のかうべにしらがをいたゞく時分迄、子のなき事をなげきしに、思ひよらず女の子一人まうけ、名をはつと付て、あまつさへ生付きれいに目の中すゞしく、物いひはつきりとしてしかもにほひ有り、小歌一つうたへど、しぜんとひやうしをそなへし故、一在所のほめものにして、父母のてうあい大かたならず、ことし十一といふに、はやまへうしろにきをつけて、かみのゆひぶりにもしや〳〵くをいひて、母おやの手をきらひ、五六町わきざいしよのをばのかたへ、毎朝かよひてかみゆふてもらふ、をばのいゑの北どなりに、徳左衛門といふ百姓の子に、徳助と名を付し男の子、天然と戀に發明にして年は十五、兩親は五年以前にたうとい所へまいられし故、兄にかゝりて牛おひ草かりて世をわたりしが、此おはつと中よく子供どうしのたはぶれにも、たゞつゝいづゝのむかしがたり、たがひにかげを水くむ折から、ことばをかけて、けふは三月三日、堺の浦の汐干を見に行ますまいかといへば、お

はつうれしげに、こなたさへつれて行て下されふならまいりませふと、おなじ年頃の在所むすめ五六人に、徳介がともだち二三人、ついでにはまぐりひらふてもござんと、めかごさげて行ものあれば、さいふかたげて出るもありて、ざらくら打まじりてあゆむ、堺の海邊地の者はもちろん、京大坂津の國河内より、ぐんじゆしてあつまる見物の中に、大坂しゞみ川の天まや治左衛門、夫婦づれにて見物に來り、おはつがつれ立子供の中へ、跡に成先に成行しが、ちらとおはつを見て、扨々生れ付のきれいなるむすめの子、どこの在所のものじや、ほうこうでもするがてんなら、おれがかゝへてやらふぞ、今から五年のねんさへきたらば、銀五枚づゝおませふといへば、はつにつこりとわらふて、其銀五枚といふはなんぼ程の事でござんすとこふ、銀にして二百十五匁ぜにゝして十七八貫、ほうこうがのぞみなら、何時成共尋ておじや、をれは大坂しゞみ川天まやといふもの、しゞみ川中でたれしらぬ者もなし、ちがう事は是程もないと、扇子のさきを一分程出して見せられしに、おぼしめしの段をも、とゝさまかゝさまに談合いたして、おへんじ申あげませんと、一つ〳〵あいさつ、天滿屋の夫婦もこしをぬかして、海のはたまで同道して、さゝえの酒ふるまはるゝ折からも、徳助も一所に酒のみて、さらば〳〵かさねて御えんしだいと、妙國寺の入相と共に、ばらばらとわかれてをのが在所へかへりぬ、おはつも内へかへりて見れば、惣太夫が兄の宗雲とて、いづみ中にかくれなきしはい親仁ありしが、五年以前に惣太夫に銀二百匁かされしに、數年の困窮に、とかうの作まいなりがたき故、えかへさゞりしが、毎日宗雲より人はしをかけて、すり强盜のごとくいひ立て、此かねをせがむ故、惣太夫も血の淚をながしてわぶれどかんにんせず、折ふし節句の禮に在所を廻る次でに、惣太夫へ立寄、祝義の詞をもいはず、はやあたまから借銀のことをいひ出し、せひとも四五日中に返辨申べし、さなくば手形の通、其方が田地を急度取上、一粒も其方がまゝには作らせぬと、たゝみたゝきてわめく、おはつ見て是をむ樣、何事で其やうにとゝさまをしからんす、さだめていつもの銀の事でがなござんせふ、それは米のたんと出來た時まで、まつてやらんせといへば、宗雲眼に角を立て、くそばいためらうめ

が、をのれがなんのしりをらふさしかりちらし、今いふ通に四五日と思へど、とてもの待次手に、十日が内に借銀の皆済せずば、手形の通取あぐる、其時異義をいふまいぞ、後日のためにきつといひ置、扨是よりすぐに其時の請人有り、其方へも一往ことはりをいひをくと、思にきせたるいひぶん、にが〳〵敷ていたらく、惣太夫もしほ〳〵として涙をながし、御らんの通りの世なみ故、庄屋殿の未進さへ皆済もなりがたきゆへ、ぞんじながら延引に成り、めいわくの段生ても死でもとわぶれど、宗雲がてんせず、ありさまは大ちやくもの、其方がかつた時の心をすいりやうして見やれ、其時うれしくば早速かへす筈、とかくかやせといひ捨にして出て行、其跡にて惣太夫つく〴〵思ふやう、たとへばかやうにあせりたり共、十日が内に銀子二百匁調る事にあらず、銀子が出ねば田地を取上らるゝ、田地がなければ妻子をはごくむべき便なし、ながらへてうきめを見んより、此時が百年めと戸棚あけて、ぬり鮫の相口取出しずばとぬいて、とかく人にうらみはないと、すでにあやうき所を、おはつ親仁の手にすがり、是とゝさま、なせに其様に死たがらんす、死でしやくせんなしたる例もござんせぬ、其二百匁といふは、銀五枚より内でござりますかといへば、親がてんゆかねど、おふいかにも銀五枚より内じや、いやそんなら死にしやますに及びませぬ、わしが今日中にさいかくして進ぜませふ、かならずきづかいせずと、きつぱりと宗雲さまへかへして、らくに米作てまいりませといへば、親仁興をさまし、それは誠か其方が其なりにて、銀五枚のさいかくがてんがゆかず、若奉公に出たりとも、中々それ程の給銀を出す者は、よく〳〵の思ひ入がなくば出しはせまいが、それは實正かといへば、はて只今でもまいりまして、すぐにかねをとりてしんぜませふと、はやかい〴〵敷手をり島に、あかねの裏のあはせ、てつはうかのこの紫の帶して、いせみやげにもらふたる、もめん糸のあみにて二所帶、はゞびろなる手細工ざうりはいて出てゆく故、父母もうれしかなしく、ひとりやりてもすまぬ事と、北となりの傳がかゝをたのみて付てやりしに、其日の初夜じぶんに、傳がかゝが銀五枚とりてかへり、惣太夫にわたし、其身もしうぎに錢二百もらふてかへりました、是もおかげでかたじけない、よい子

を持てば親のゐまでがあがります、先めでたいと舌ばやにいひて、すぐに内へもかへらず、其上五年にも十年にものふだ事もない大酒に、ちどり足して在所中をありき、おはつは器量がよいゆへよい所へ奉公に出て、酒はたくさんにのみやりませふず、けふからざうすいはやりますまい、うらやましい事ではないか、わたしらも今十年わかふて、今のさいまぐりめとそふてゐずは、どうぞ談合のしやうも有ふと、人に物いはせず、我ひとりわちや〳〵わめいて宿へかへり様に、表の戸口のもみすり臼にけつまづいて、ころりとこけなりにすぐに高いびき、惣太夫は跡先かまはずうれしかりて、よの明るを待かね、まだ人貌の見えぬじぶんに、二百匁の銀子を持参して、宗雲にわたしさらりと皆濟しぬ、となり在所の徳介、おはつが事を聞て力をおとし、おれもはつがゐねば、在所にゐてもおもしろからずと、是も同じく大坂内本町平野屋喜兵衞といふ人のかたへ、きも入有るを悦び十年切て奉公し、徳兵衞と名をあらため、かみのあぶらを商ふて月日立にしたがひ、はつが事を思ひ出し、しやみ川に來りておはつにあふて、さつそく商ひ物の内、かうがい一本やりしより戀の中立となつて、互にあふをうれしく、少づゝのうりへぎして、まんまと此道の功者となり、つとめの外のしんじつの男の思ひして、こなたもそれもねんが明たら、めをとになりてとかたいやくそくに、牛王のからす色に出て、夫がかうじて年々に、徳兵衞がおやかたの手前、算用立がたきゆへ、おやかたがてんがゆかぬと思込て、當くれ迄のうりがけ有る物等の算用を急度立てよ、其上にて分別があると、いらひどくいひ付けられし故、とかくかけ落にしあんを落し付し所へ、おはつかたより金子七兩文箱に入て、そもじさまの御事、だんな様手まへぶしゆびのよし、いつぞや御同道の八さまの御しらせ、たんときのどくにぞんじ、少許りなれ共進じ〳〵、是でどうぞわびとして、やはりつとめてゐるやうにし、たんきな心を持たぬやうにと、せつない中から誠を書きくどく心入をかんじ、徳兵衞請人まじりに主人の前のわびとせしに、了簡のよい主人にて内證はすまして、當分こらしめの爲とて表向損金の高を、かり手形にして二貫三百匁、其内金子七兩の内上、此以後をたしなめと請人の加判取て、年季も重てゐたる

者、其上氣立もよい者なれば如在には思はずと、引口に殘銀はくれてもしまふ主人の思入なりしを、又もえぐゐに火の付やまず、はつが情の禮のため、しやみ川に來りて段々の一禮、しらづくになる心入、すとんとふみこむ戀の淵、二貫三百匁の上に、又七百匁の損金をかけし故、一度ならず二度ならずとおやかた彌々立腹し、とかく役にたゝずと見えたり、內々は殘銀はとらする覺悟に思ひしに、念もないこと、此上は一錢がかけなかもならず、殘銀はいふに及ばず、當分の引おひ、二口合指引〆二貫百九十六匁、急度なせといひ付られ、請人かたへ預られ、主人へわびてもどす手もきれ、銀を立べきせんさくもならねば、請人の迷惑より我身のあつさをしのぎかね、又かけ落とむねを定て、けふはうりがけの銀子のせんさくにまいりますと、請人のるすのまに內儀をたらして忍び出でいとまごひながらしやみ川へ來りしに、我身のぶしゆびをはぢらひて、人に見らるゝもうるさくて、あみ笠かたぶけ身をひそめ、あふぎかざしてくらがりに立より、天滿屋が門を二三度四五度はいくはいせしに、はつは其とも夢にもしらず、客を送りておもてへ出し時、せきばらひしてまねきよせ、此のあらましをかたり、とかくかけ落せねばならぬ境、なごりおしけれども、命さへあらば又あふこともと、淚はながみ手拭をしぼれば、はつははつとむねふさがり、こなたにわかれてかた時も、つとめを立る心でなし、五年のねんはとうすみけれど、あふをうれしくうか〳〵と、つとめをするもこなた故、其上わたしが心入聞て下さんせ、いつぞやこなたさまの、なんぎをすくひし七兩の金子は、この家の旦那殿の大事にかけておかしやんす、しんらん上人の御筆のおまむきさまをぬすみ出し、たばこやの甚八殿を賴み、つい當分の樣にいひ、七兩の質にをいてもらふて、すぐにこなさまのめいわくをすくひし、是もやがてむしぼしのじぶんに、どうでせんさくがなふてかなわぬこと、いとしい〳〵と思ふ心で、末のなんぎがめに見へぬ、それをふりすてこなさま斗り、かけ落せふとは聞えませぬ、ぜひ其思ひつめさんしたら、わしも一所にかけ落と、德兵衞がゑりに顏さしこみて、しく〳〵ないてかきくどけば、扨は七兩の金子は、しんらんのおまむきさまを質に入れし金子かや、さりとはぜひもなし、是といふも皆わ

が身の悪性からおこれば、誰をうらみん様もなく、死でもわすれぬそなたのしんてい、とかう中にことばなし、云譯にはたゞ自害して死んといへば、おはつ袖にすがり付、死ぬとおぼしきらんしたら、わしも一所に死にませふ、かはい男をころしてから、生きて何のゐられうぞ、こよいは爰にとまらんして、たがひにだんこうしめしあはせ、夜に入つてからふんべつと、かどぐちにては、とまり客のうちしゆなりといつはりて、ともしのかたをそむけ〳〵、やう〳〵にしのばせて、料理人がねだうぐ入れしはこはしごの下のはう、しこみ戸だなにいれをきて、こゝろならずも二かいへあがり、地のあそび人たびのきやく、それ〴〵にくむさけも、のどにつまるを見つけつゝ、是は太夫どうじや〳〵と、おもしろさうにいわれても、うかぬふりをばさとられじと、こうたうたへばこはいろの、びゞりがちなはゆふべつい、かぜひきましてといひまぎらし、やう〳〵しまふてそれ〴〵に、下女はあしたのこめかせば、はうばいの女らうは思ひ〳〵にかみすけど、わしはさかけでつぶりがいためば、きをしづめてからねませふと、しこみ戸だなにもたれかゝり、ひだりの手にてはつぶりをうち、右の手は戸だなへいれ徳兵衛が手をとりて、ゆびのさきにて手のうちに、かごへ出てからはなさふに、わしについて出さんせと、かいて見せつゝずつと出、はふ〳〵ににげ出て、あゆみ〳〵てまちあはせ、こゝろをのみ〳〵ゆく道もはや此の町の見をさめと、なみだながらに手に手をとり、かうりんじのまへにして、みぞいしにこしをかけ、むなさきをすさりおろし、あゝ此の上のうれしさと、おもはずしらずいふこゝろの、やはんの床にねもやらぬ、をとこまどよりかほ出して、錢六文はづましやるなら、此とこかさうと見とがめられ、そんなものではござんせぬと、ふるひ〳〵そこをもにげて、梅田づつみの東の方、わらをつみたるかげにて、いざこゝこそとうぢつくを、野いぬけうとくおそろしく、うかうかたどりそね崎の、もりのした闇くらきより、くらきみちにもはぐれまいと、なみだを中のめをと川、うかぬうき世をそしり合ひ、とあるところに座をしめて、ひらりとひらめくわきざしに、あれ〳〵月が出ましたは、たがひにかほを見てからと、山のはめあて西とくわんじ、ひとつはちすのいけのみづ、にごすこゝろ

のながれの女、そこをすくふて下さんせと、こゝろしづかにかきをきして、夫婦たがひにさしちがへ、うき世のひまをあけぼのゝ、かねのあはれをつげわたり、かたりつたへてとぶらへり、

第三　運にまかせて引帆八合の大廻し船、づにのつてくるはじめよしの不仕合男、

分別の分別過てよろしからぬ事あり、むかしより味噌のみそくさいと、醤油の醤油くさいとはわろしといへる、是を同じ格におぼしてゐても、間に合はぬと多し、たとへば傾城のけいせいくさきはいかゞとゝへば、それはかひての買てくさいからじやといへり、先けいせいは金銀出してかひよせて、人のなぶり物になると斗り覺てゐて、なぶりにかゝりてまゝならぬは、是はなぶり物にならぬ樣で、必竟はなぶり物になる所ありと高くゝりの勘介とて、もとは天滿橋五丁目に、ちよろい商してゐたりしが、米のかひ込中間へ入て、三年引つゞいてかふて見しに、大分の金をもふけぬ、是といへるもものと手ぶりにてかゝり、損すれば身上打やぶる位、とくすれば利をとりてすさるは、ちいさい手形一枚に、をやゆびと人さしゆびとにて、何萬貫目のうりかひは、鹽屋長次が手品ともいひつべし、それよりそろ〳〵物の買込におもしろき氣できて、こゝかしこにてかふて見るに、天運じゆんくわんせし時節にや生れ合せけん、する程なること思ふ圖にのりて大廻しの順風、江戸商してしわふきたなふする故、かたい金五千七百兩、內證ぐらへ入れをいて、一人のむすこ勘九郎にもいらわせざりし、ある時親仁勘九郎にいふ樣、其方もしる通り、上の町ののべ屋の八殿新宅もとめられし祝儀に、何ぞ錢やすで氣の付た先樣の重寶に成物を、才覺してやれといわれて、勘九郎も親にまさりし男、それこそ此方にぞんじよりこそござりますれとて、年々すゝはきにためてをきしあたごのお札を取あつめ、はりぬきの火打箱をこしらへて、新宅見まひにやられしに、親仁作意をかんじ、我子の手がらを所々にて物がたりして、ふいちやうせられしばへ、火打箱もらひしのべ屋の八來りて、此中の火打箱、あつぱれ御作意かな〳〵、とかふ言語にのべられねども、下女が此中も申事には、此火打箱には、いか程火を打込でも火がつかず、ほくちのかげんかと存じ、天滿の國重がほくち迄入て見ても、かい敷火のつかぬは、もとあたごのお札じやといい

ひましたと、一座大笑ひしてかへりしが、勘助勘九郎をよびよせ、其方今迄金銀の取さばくり自由にさせざりしは、もと心いきのしれぬ故なりしが、きのふの火打箱にて、此方身持を推量して見るに、一生持くづすべき心と見ず、けふより内外心まかせにせよと、三ヶ所のくらの有金五千七百十六兩三歩、銀六十貫目、錢一萬六千貫、其の外もつけい和尙のうきよ繪、きごうのちはぶみ、辨才天の前巾着、かれこれとりあつめて三ヶ所の内藏、米穀つみし外藏二ヶ所、皆拙者一生のまふけだめと、さつぱりと鎰まで渡して、其身は樂に法體して名を勘入と改めて、毎日のしごとには、天王寺へ日參より外はなく、其間〳〵には、勘九郎が商せし帳面の指引ぎんみせられし故、一錢二錢のこと迄めをくらますことならざりし、其ひがしごなりに、藤屋の七といふ男有しが、新町の傾城に、正月してやる約束せしに、金子二兩俄に不足せし故、勘九郎に無心いひて、正月十五日切にして、金一兩を一歩の利にして二兩かりて、ざつと首尾よふ正月をつとめてやりしに、其勘九郎となりの男とのとりやりの文を、あやまりてあげやの二かいにておとし、けいせいきよ風にひらはれしを、藤屋の七は夢にもしらざりしが、きよ風は其男の心ざしをかんじて、何心なふ勘九郎が所をとひて、元利そろへてきよ風が方より一禮かいて返辨せし故、其手形を勘九郎方より、藤屋の七が方へかへしけるに、此男思ひよらざれば一圓がてんせぬ故、きよ風が文を持してやり、か樣〳〵のこと故、手前のかし帳さらりとけし、手形も返濟申、此樣な慥なかし所あらば、此以後よるでもよなかでもいふてござれと、禮の二三十もいひてやりし故、扨は新町の上郎のかたより、かへしたる物なるべしと聞合て見れば、まがひなきに極りし故、勘九郎にあふてけいせいの心ざしの忝きことをはなし、拙者が借用の金子も、てきめがなしてくれたとかたれば、勘九郎我を折て、扨々けいせいといふ物は、とりづらのひつはりたる物かと思へば、金銀澤山に持てゐて物ごと自由にする、かくべつのしゝ合、心いきの面白い者じやと思ふ氣から、何とけいせい狂ひには、一年にいかほご入る物じやとたづねられしに、それは其方の器量次第にて、五貫目つかはふと五百目でしまはふと、金銀つかはづに、拙者が樣に、先のかたから入たての

行くけいせいかひも有るとじまんいふより、一つかふて見たい氣になり、ひそかに下人もつれず、只ひとり新町へ立こへ、とあるたばこやのみせにこしをかけて、何と御てい、此所で心ざしのよい傾城は有まいかといふ一ごんに、是かい敷のやぼと、たばこやがすいぬいて、先此新町と申は、町筋が六町、揚屋が卅五軒、太夫と名に高き君達が四十人、直段は六十三匁、其天神が百人、直段が三十匁、かこひが十七匁づゝ、其外のはし女郎は、お前の御たいはいではかゝられますまい、是から拙者めに御まかせ、諸事金銀すくなふて、御きりやうよしのゝ花山さまとて、ゐづゝやの名とりの君、一夜だいてねるが十七匁、くせつは此男めが請とりてさばき、此里の諸わけをもみ込むつかしいはり合ごと、又はむりいふ傾城をいけんし、貴公樣にひけを付ると此方の不調法と、よけいことだらけ、扨又節句正月といふこと有、正月の面白さ、庭錢に十二三貫文、祝儀に太夫へ一歩を二三十つぶ、其外やりてがぶろへ二角三角づゝやるが、遊里の作法でござりますといへば、勘九郎めいらぬ親付して、いかないかな左樣成ることにそゝり上らるゝ男でござらぬ、定りのあげ錢より外、一分もをもめやるといふこともない、ぜひ其正月を達てお頼なら、れゝもくれもござらぬ、さらりと此里へこぬぶんと、木ではなこくるあいさつ、そこもたばこやめがのみこふだ、萬格拙者があんないぶんと、先に立て行道すがら、勘九郎むなざん用して、月に一つづゝかふて、十七匁を合せて一年二百四匁、是程つぶしても身上のくぼむことにあらずと、跡先のとめはざめ、あらかたにくんでをく川口屋が二かいに、のぼりつめたる花山に入そめしより面白く、よるもひるもつゞけがひより、十七匁の君またふるふなりて、天神にたより、それより太夫に取付て、松屋の今川と云女郎になれし初めより、はや口説に取くみ、太こ末社をもぞくしこなしに、初床より終におびとかず、是を手に入れいでは面白からずと、發端の思ひ入とはぐわらりとちがふて、九度めにやうやくおびはといたれども、けふはわしがかゝさまの日じやといふより、首尾合くひちがふて、つとめする身の、親の精進日をかまふ物かと、一言二言いひつのりて、たがひにうしろむいて、しばらくゐし内に、友達の大臣まつしや共、勘九郎が床のぶしゆびをきい

て、取あつかはん心入にて、ほら〳〵せしねおきすがた、勘九郎も同じくおき出しが、殘りの大臣の面色を見て、今川さしたるくしをぬいて、勘九郎がびんのそらげをなで付、是はわしがそこなひました、是ほどわしにせいがうかくす男は、ほんにごうやらにくいやうな、けいせいの命とりめと、ひざがしらにてせなかをはさむしかけ、よいのぶしゆびもさらりとながす今川がはつめいに、勘九郎がはら立ちも、すこしはゆるふなりしにひかれて、一生あふまいとおもふ今川に今一度あふてと、またともだちをさそひて行きしに、れいにたがはずふり付られし無念さ、床のうちより出んとおもへど、外のなぐさみのじやまと、門のあくじぶんをまちかねおき出し、道すがら友達の大臣いふやう、其の方が床の內、又こよひもふられたそふな、其はすいに似合はぬしこなし、あの今川にふられて一分は立まい、重てあふて、せめてわる口成共いふて引ずば成まい、いかにとしても其まゝはをかれぬと不遠慮にいひしに、されば此里にてなとりのふりて、それをのぞんで、しつけて見よふ一はいの思ひ入にて取かゝりしと、赤面して上かはには云けるが、下心におもふ様、金銀づくにて首尾の成道具を、ちやうど十度ふられては、いかさま一分の立ぬ所、友達の思はくもきのどく也、とかく此人數にて又こよひ行て、黃金をまいてきやつにひけをとらせねば、生ても死でもと、其夜の手はづをしめし合、いつよりもはやく三枚がたにて飛せ、ていしゆ花車にもよい物とらせて、ねるさたはやめにしてのみあかす思ひ入なりしに、太このそゝりに打ぬかれて、あひもかはらぬふりに出合て勘九郎くわつとせきあげ、となりの床に物いふこゑも心にこたへ、かぶろがさゝやき、やりてがけら〳〵わらひも、我を笑ふやときもにひゞきしまま、所せんふられて一分すてんよりは、此をんなめをさしころしすてんと思ふ、酒にふとりし無分別より、なをのみしころ大酒に、なんなく今川をしゐつぶして、かねてこしらへをきしなみのひらの九寸五分、ほんごに包みしを懷中よりとり出し、心もとを一かたな、ゑいといふてさしころし、かへすかたなに、其身もともにじがいして、くるわの露ときえて行、あかつきのよこぐもと、おき出しともだちの大じん、勘九郎も一所にとよびにやりて一間を見れば、二人ともに

あけになりて死にたりし故、人々きもをつぶし、これごうじやとかたわきを見れば一通のかきを、とかく此今川めと、こよひでちやうど十三度、あはぬぶんもくるしからねど、かねにてらちのあくものに、きらはれてとわらはれんこと、おもへば〳〵くちをしく、そのうへおやのゆづりの金銀、此けいせいゆへにみなになりしが、あのしはいおやじのめをしのび、大ぶんの金銀を取出したる手だては、しんちうにて小ばんなりにこしらへ、目のうといおやじをとりゐに、五兩七兩のあきないの利じやと見せて、小ばんぐらへ入さまに、とりかへ〳〵して、わがかねを我てにすりかへしゆへ、くらのうちに有はみなしんちう小ばん、これがおやじへしれては、此今川ゆへにこれほどのかねつぶして、ふられたといはれふものか、とてもひとり〳〵にいひわけなりがたければ、しよせん此里へくる人ごとに、いひわけにかくはしはんべると、いしこそふにかきしをおもへば、けいせいのけいせいいくさいはよしと、あるすいの中されし、

第四　枕にのこる夢中の講前、あけて見て我を折るおふぎやの名代女、

衣食住の三つは、人間一生のかた付道具にして、それを求んと士農工商共に、こしひざをかゞめて、ついしやうけいはくをいひまはる、其中に色といへるは三つの外にして、是れ又樂しみのきつすい也、とりわけ難波の色里は、諸國に超過して夥多數事いふもおろかなり、表だちて美質を賣るはさら也、内證にてわけを立るくら物、いくらといふ數をしらず、是を思へば野も山も、色でかためし世界ぞかし、爰に難波にかくれなきいたちぼりに、あふぎや吉六とて、夫婦かけむかひに商賣に藥をうりて、木香白朮肉桂黄耆のかひ込みに、俄にあがりをうけて、わづか二三ヶ月の間に四千五百兩のまふけ、夢のやうなる金銀の入こみ、それより身上日々に富貴になり、する程成事倍々かへして利潤をうる故おもしろく成て、錢かねのたまる事は、ちりほこりのたまる樣に思ひなして、初めはけいせいのいくのにかゝりしが、いそせせりまだるく成、天神より太夫に飛び、新町の太夫かたひしにかひつくして、其内氣に入たる太夫を請出さんと、日頃したしき太こ、油屋の勘六、柊屋の權九郎、干瓜の萬次郎、坊主落の久傳、かれこれ高なしのわめき中間、後は遊びにことかいて、心中講といふ事をくはだて、

講中間に帳箱をこしらへて、諸國にて心中して死にたる噂を、はやく聞出すを手柄にして帳面にしるし、けふはしゃみ川の心中の物語、きのふは京の蓮臺野のくびくゝり心中と、毎日出合てこれざた、とりわけ近年此事さかんにはやる故、けふも新町よしのやにて、かほる、せ川、みうら、高橋、寄合ては是はなしの中に、せ川がしなしにくびだけ打こみて、太こ打よつて引ぬく談合、久傳は昔がむかしなればこそ、此談合の上座を仰付られ、五百十三兩二歩にて、內外の借金は勿論かひかゞり等迄、打こみにして身うけのよろこび、くるは中の大寄、四月にをどりを催し、時ならぬきりこあんどう、此ひかりに鼠尾草花も咲ぬべしと、あやし、太夫の一くみがやりをどり、天神組は梅の名よせ踊り、それ〴〵に伴を引く風俗、それより鹽町の下やしきに、年がましき男一人、奧まかなひのばゞ一人、こしもと下女、以上七人付きしたがひ毎日の樂しみ、驪山阿房宮もかくやと見えし、藥やが女房おちかことし廿一、かつかうむつちりとして水だくさんに生付け共、御めんてい十人なみより見にくき故にや、よめいりの晩、夫婦一つに枕をならべてより此かた、不通にそばへよらねば、生た特鼻褌の息をかゞず、なまじいよい味覺えてから、男吉六、けいせいぐるいときく度にむねをいため、ひとり枕をうらみ、犬のいもせに上氣して、いきがひもなき身をうらみ、錢かねにことかゝぬ身上なれども、たが爲に品つくるべしと、何事も此一色よりをしなぐる、されども女のきのごくさは、心に思へど身のまゝならぬをなげき、よるひるくい〳〵と思ふつかへ、臍の上にかたまりとなり、時々さしこみてとりつめるゆへ、手醫者宗伯脉をうかゞふて、氣欝の症なれども、人參地黃補藥よりは、少しにてもお氣ののびるが御養生と、吉六にもかくと申て、毎日高津、生玉、天王寺、堺の海邊をかごつらせても、同じ所は三度とは見るともうるさく、辨當の二度飯、麩のにしめ きすご かまぼこの類、性の平なる物を入て、少しにても腹中にあたらぬ樣にとおふくろのせわにて、生きながらの若後家、我ながら我身をあはれみ、名所を見るも遊興にして、道頓ぼりに行初て、山下櫻山の立役、棧敷へお見まひ申より、子供役者はいくはいして、盃の上にて付ざしの味うまさに、氣をうごかす狂言の上に、かんにんのならぬ物

語、我を忘れて歯ぎりし、是にこそ食餌もすゝみ、色あひも快きにいさみて、少しの内は苦しう有まいと、こしもと下女の口をかためて、疊屋町にて子供役者の寄合て、をどりの下げいこの所を見しより、又一きはおもしろく酒にふとる女心、人さへしらずば大事あるまいと、若衆方役かへ名權六といへるにひそかに文を遣て、さかよせのむほんをすゝめ、六度までま事のたはぶれよりなじみて、やはらかなる手にてつかへをさすらせ、ゐなはりにてたび／＼の療治に、氣色本ぶくするのみならず、本の男まだるく、毎日の出合に、子供かふ女房と、ばつとうき名も立もいとはぬ故、夫吉六是を聞てかんにんせぬ氣に成、打ころしてすてんとひしめくを、まつしや共いさめ申、おまへさまには、てりふりなしによいとあそばして、おいとしなげに奥さまも、木ではなし竹ではなし、そこらは大やうになさるゝこそ、御夫婦の御あいさつ見事なるべしと、達ておわび申せば、いか様いへば其道、しかし此まゝにても置がたし、女房めが子供かひに行く跡よりつけこんで、大勢の中にてはぢをかゝせ、せめて是をはらゐせと、はや疊屋町にをしかけしに、おちかはむらさきのくゝり頭巾に、あさぎちりめんのはをりきて、權六とふたりはらばひにねながら、あまたの役者に三味せん引せ、小歌うたはせて、せけんはゞからぬだいたん者、夫を見てもびつくりともせぬ故、はら立てつかみころさんとうでまくり、おちかせかぬ顔付して、かう成る上はいが樣のうきめを見てもこりぬ氣、死ぬるぶんは露いとはね共、子供ぐるひのおもしろいいきかたの極意、かたじけない事を人にしらして死にたいといへば、夫せゝわらひ、己れ身びいきのりやうけん、人もなげなるいひぶん、けいせいぐるひの妙味、中々げい子の樣なるものならず、雨の夜雪のあした、彼里にかよひし其時、けいせいの心づかひ、男をあはれむは親のごとく、むりをいひてもわらひになす、若衆狂のいやらしさ、先野州のわるい事を申さば、すいが男同士のつめひらき、いやなことのより合故、命かけて思ひたり／＼の文章も、金銀のかり手形と格式同じこと、みないつはりと思ふことといはねごしれたり、まだ此上もいやらしひこと共は、人をだましてよい物もらひ、自由に行ふりして、客のまんちやくを足に引かけ、物かげにてつまみぐひ、一つと

して、逢客を思はぬ故、心入の眞實露ほどもないといへば、おちかきしよくをかへ、それはしつかい野州の爲のわる口といふ物なり、此わる口は野傾の兩道にかぎらず、心入づくを申さば、野州ばつくんまされり、けいせいの水くさい事、ずいぶん人をたぶらかして、うはべは誠を見せて、素貌にらんじやのにほひなく、たびはかぬ足になんどゝ、すく上からはせひもなし、むかしより他所の色里はしらず、此所の新町の遊女に、身を打ちし男は數をしらず、さらば身を打しとて、それを笑止な貌もせぬは、ずいが人をなんとも思はぬからなり、まづわたしが聞及んで、新町にて心中して死に、或はゆくゑなうなりしものには、橋屋の介といへる男と、越後町のよしの屋の高はしと、非筒屋の傳左と、住吉やのおのへと、ふんどう屋の七九と、たん波屋のさはなみ、菊屋の四郎と、いづみ屋のうす雲、久米之進とはつ瀨、上寺町の源空とはつのと、皆身のまゝならぬをきのどくに思ひて、心中して死し、是共に人は心中のやうに思へど、さらに心中の死にあらず、是は身の置き所なく金銀に行つまり、あるひは主親の前ぶしゆびになり、一家一門へもらちのあかぬ者共のいたす心中なり、根本の心中、是はまだもと思はるゝは、俵町のとみ山屋の甚九郎と、丸屋九郎左衞門がかゝえの千種と、日頃ふかういひかはして、正眞の夫婦のごとく、かりにもきしやうをかふといはず、ゆびきることも初心のいたりと、平生の心入をみがいて、たがひにつやをのけてのつとめなりしを、甚九郎が親了徹聞付て、前代未聞の惡性者、此以後色里へかよふ事あるべからずと、かたのごとくのせつかんを、かまはずかよひしゆへ、了徹かんにんしかねて、一せきに一人の子をかんだうしてのけし故、千種にかくとかたり、とかく死に覺悟極しに、千種淚を流し、ふかういひかはせしはこんな時、こなたにわかれて片時も命があらふぞ、さりながら御親父了徹さまにも、親ひとり子ひとりのよし、にくふて御かんだうはなされぬ筈、さうしたしがくのこなたさま、死なしやんしてはわけがわるいといへば、甚九郎聞いて、それは日頃いひかはせしにはにやはぬ心底、たゞひとり有る子を、かんだうするむごい親なれば、そこを死んで、親にはなあかせねばならぬ所を、いじむじいふは、さてはわがみは死ぬる事はいやと見えたり、

くるしうござらぬ、いやならいやまでと、立出るを千種引とめ、さほどにおぼしめしますなら、成程御心にしたがふてどう成共いたしません、さりながら爰で死んでは人にも苦をかくるやうなもの、明日はあげ屋のすゝはらひ、とに此家のすゝはらひは、さだまりて跡は大酒、日頃出入の者共大勢のより合にていつも夜があけねば酒がとれませぬ、其夜のしゆびにしのんで、出るやうのあひづをとり、出合ふ所を極めてとやくそくし、其夜のどやくやまぎれに忍出、天満ばしとけいやくして行きしに、甚九郎先へ來りて待合せ、互に目とめを見合、相口ぬいてすでにあやうく見えしを、千種いふやう、先わたしからさきへ死なして下さんせ、さりながらさしころされては、こなたさまと一時にしなれず、どうぞとてもの事にだかれ合て死度し、今生から抱れて死んだら、先でもだかれ合てゐるでござらふと、じゆずをあらそふ涙の雨、橋の上よりみなぎる許り、甚九郎尤といひ、それはいよ〳〵心やすいせんさくと、ふたりながら帯といて、はだとはだとをいだき合、はしの上よりどつほんと落こむ折ふし、はしの下にかゝりし舟二そう有しが、水音のかさ高なるにけうさめ、とまよりあたまを出して見て、やれ人が身をなげたはと驚きさはいで、二そうの舟より くまで いかり ぼうちぎり木にて、なんのくもなう引あげしに、二人共に命にきづかひなかりし故、所をとへば、しか〴〵といふを悦び、それより人をはしらしかくといへば、了徹大きにけでんし、あとにもさきにもひとりの子、たうぶんこらしめのためにかんだうといひしに、死るほと思ひあふ中、それを請出さいではと、なんなく請出して甚九と夫婦になしぬ、其後ふたりのね物がたりにも、こんなよいことをすてゝ、ふか〳〵と死んだらよいものかと、ねる度ごとにはいひ出せしよし、是近年の心中といふもの也、人が聞てはひけうなりと笑ふべけれども、けいせいのはつめい故、命つゝがなうしてながくめをとなる事、是斗は尤らし、其外の心中は、皆せひなう死るに極れり、げい子の心底は、其やうにあさはかなる物にあらず、平生狂言に心をいれ、山下が實事、瀧岡が武士の忠義に片岡が惡をこらし、水木辰、よし澤あやめの女房は、女中の貞烈にまゝ母の不幸をなげく、孟母の三たび居をかへしごとく、平生手にかけ

て、非義非道をいましむるわざをなす故、是其身の掟となるにあらずやといへば、夫大きにはらを立ながら、平生をのれは無筆にして、しかももんまうなる女とおもひしに、すゝびたること、つねにだんな寺にておだんぎならではきかぬこと共、いよ〳〵おとこをあなづるしかけ、ことにけいせいより、野州の心がよいといふは、さりとははらすぢ千萬なり、其せうこには、野州の心中して死たる事今までつゐに聞かず、其うはきがちなる武道にほださるゝは、ちよろう見えるといへば、女房くつ〳〵とふき出し、野州の心中してしなぬは、心中して死ぬるよりは心中者也、ことにのぞみては命をすて、義によりては死をいとうも心中なる故、野州は心中の惣體をしれば、自由に心易は死ませぬよ、けいせいのゆびをきり、きしやうをかくは、けいせいの作法にあらず地女のする事なり、是程に思ひますと、地女のふかい思ひいれをうつして、けいせいのしよざいとし、人をつるてだてとする、はやりけいせい嘘をつき、客をのぼらしてはしんだいをたゝますが、根本のけいせいといふもの也、傾城にはこぶ心入を、つねの女にうつして見さしやれ、又けいせいよりはおもしろからふといへば、そばに有しあふぎをつとり、口りこうに何をぬかすと一つ二つ打ければ、久傳中へわつて入、お内儀さまの仰、理のあたる所至極せり、今旦那の打給ふ扇子はもと風を出し、扇子手そぼりは、人に對してもあいさつをなす物なるに、奥さまを打せ給へば、人を打道具共なれり、是を以て思へば、野州けいせいの道又同じ事なり、用ふれば命にかはる心も出來、用ひざれば見ぬ國の人も同前也、一つの鐵をかじやの細工にて、矢の根となし、甲につくるに同じといへば、吉六手を打て、さてさて發明なる一言にて、色道の悟を開きぬ、今鹽町にかこひし太夫故なれば、心中しても死んでのけんと、ひたすらに思ひつめしも、是大なる無分別、只今よりさんげして、さらりと座切にやめるしあんといへば、久傳聞て御尤千萬、今奥さまの仰なれば、諸方にて心中して死ぬるは、皆無分別の心中の死にして、更に誠の心中にあらず、かうした事をしらずして、うか〳〵心中講をむすびしくやしさ、猶も此上ながら諸國の心中連を、百萬遍にて御弔ひあれかしと申せば、此義尤しかるべしと、伽羅都が三昧せんに、六字の名號を

二あがりにひかせ、百遍より千遍、一萬遍までの盃をこしらへ、うかむ瀬もいそとあざむき、則久傳を盃もとゝし、干瓜の萬次郎をかんなべ役にし、けいせいには、きよの、極風、更科、左座に水木あやめ、千鶴まじりに三味線にのせての百萬遍、是圖のかはりたるせんさく、百遍と云には百遍盃いたし、かたひしにのみ、千遍の時は千遍盃にてのみしゆへ、なかばには連中まき舌の百萬遍に、次第にばちをともしどろに、かんなべもとも、たはいなううちたをれ、大いびきのこゑをそろへし中に、久傳ひとりねもやらず、まじ／＼して居たるともしのかげより、白しやうぞくに竹づえ、跡より同じ出立の女、我は三かつ、あの人は半七となのれば、そね崎、高津の森、千日寺にて名を揚げし、うはきもの丶たぐひ、ひよこ／＼とあらはれ出、百萬遍のくりきにより、にはかにごくらくにて、衆佛評議の上にて、下品下生の邊りはへたる水邊に新地を下され、つまはじきする內に造營ことをはり、無分別長屋と名付けて、是に寄合ふそのうれしさいくばくぞやと、拍子にかゝりてをどり舞ふ、久傳もそゝり立てられ、堪忍なりがたく、そばにありしえさしばゝきをこしにさし、うちまじりてをどる、よあけのかねのひびきに、一人へり二人へり、みなかふばこの中へかくれて、あとにのこるものは、ざうがんいりのかんなべ一つ、吉六夫婦たはいもなうねいりしが、いつも來るかみゆひ、おもてをたゝくにおどろき、おきあがりてけうをさまし、女ばうをゆりおこしてゆめをかたれば、女ばうもおなじゆめ物がたり、これは／＼と、かみゆひ三人大わらひして、よく／＼思へば、初夜じぶんより明け六つまでたゞ六時の間に、不相應の大がねを持し上に、あらぬくわつけいまでせし事、こちがやうなびんぼう人は、ゆめがなくばけいせいかふことは有るまいと、それに味しめて、よははやうねまへ入り、あさはをそうおくれど、今迄の樣によい夢も見ず、ねて斗りくらせば身上は、そろ／＼ほしへりがゆくをおもへば、是もゆめの無分別とぞ、

傾城風流杉盃大坂之卷終

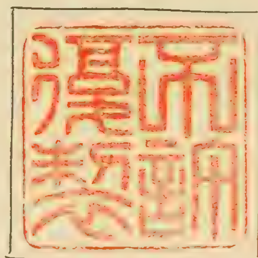
神戸龍治
文傳正興　校

近世文藝叢書第四畢

（近世文藝叢書第四奥附）

明治四十三年十一月五日印刷
明治四十三年十一月十日發行

非賣品



編輯兼發行者　東京市京橋區新榮町五丁目三番地
國書刊行會代表者　早川純三郎

印刷者　東京市神田區蠟燭町八番地
武木信賢

印刷所　東京市神田區三河町三丁目四番地
武木印刷所